

仙台市文化財調査報告書第474集

若林城跡

—第10次・12～15次発掘調査報告書—

2019年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第474集

若林城跡

—第10次・12～15次発掘調査報告書—

2019年3月

仙台市教育委員会

若林城跡調査区全景(第10・13・14次調査区を合成)





六郷堀跡南北方向 全景(北から) (第13次調査)



六郷堀跡東西方向 全景(西から) (第13次調査)



軒平瓦・軒丸瓦



陶 器(大堀相馬・小野相馬・肥前・京焼)

序 文

若林城は現在の仙台市発展の基礎を築いた仙台藩祖 伊達政宗が造営し、晩年の居所とした城です。「若林」の地名は政宗が命名したとされ、現在それは区名にもなっていることから、市民にとっては特別な遺跡と言えます。現在の城跡は矯正施設となっており、城内の様子を知る機会は限られています。若林城の内部は絵図にも描かれておらず、この城にどのような建物等があったかをうかがい知ることは出来ませんでした。

そのような中、全国的な矯正施設の老朽化により、平成16年に宮城刑務所の全体改築計画が持ち上がりました。これに伴い開始された第4次調査で若林城に関わる遺構が初めて発見されて以降、今年度の第15次調査までに多くの建物跡や池跡などが確認されています。伊達政宗が晩年を過ごした若林城の姿が発掘調査によって徐々に明らかになってきました。特に若林城の中心である御殿建物跡がまとまって発見されたことは全国的に見ても貴重な例です。仙台の近世史を知る上で重要な意味をもつ若林城跡の全容を明らかにするためにも、今後の調査成果に期待が寄せられています。

本市はこれまで法務省、文化庁、宮城県との間で若林城跡の遺構の保存について協議を重ね、その結果、城の遺構は将来にわたり保存されることとなりました。本市としましても若林城跡の国史跡指定を目指しており、今後も指定に向けて努めていく所存です。

近年の歴史ブームにより、伊達政宗への関心が高まる中、本市では調査の成果を遺跡見学会や様々なイベントの場で紹介することで、より市民の皆様に興味を持っていただけるよう活動していくかと考えております。本書が研究者のみならず幅広く活用されることで、文化財保護活動と郷土理解への一助となれば幸いです。

最後になりましたが、調査ならびに報告書の作成に際し、多大な御協力を頂きました宮城刑務所をはじめ、御指導いただいた多くの方々、また遺構の保存にあたり御尽力いただきました法務省、文化庁、宮城県教育委員会の諸機関に対し、深く感謝申し上げる次第です。

平成31年3月

仙台市教育委員会
教育長 佐々木 洋

例　　言

1. 本書は、宮城刑務所全体改築計画に伴い実施した若林城跡にかかる、平成21年度 第10次調査、平成23年度 第12次調査、平成25年度 第13次調査、平成27年度 第14次調査、平成30年度 第15次調査の発掘調査成果を記録した報告書である。調査対象は第10次・第13次・第14次及び第15次調査が宮城刑務所内での北取容棟建築に伴う調査であり、第12次調査が第二正門仮設フェンス設置に伴う調査である。
2. 第10次・第13次・第14次調査の成果は、既に各年度の報道発表や遺跡見学会、その後の各種刊行物などで公表されているが、本書の内容はこれらに優先するものである。また、第14次調査は平成18年度に実施された第7次調査の調査区を一部含んでおり、本書の内容は既に刊行されている「若林城跡第6次・第7次発掘調査報告書」の内容に優先するものである。
3. 第12次調査については、仙台市教育委員会が調査主体となり文化財課が実施したが、第10次調査、第13次調査、第14次調査、第15次調査については、仙台市教育委員会の監理のもと、発掘調査組織への委託業務として行った。調査を担当した発掘調査組織は以下のとおりである。
第10次調査：株式会社アーキジオ 第13次調査・第14次調査・第15次調査：株式会社イビソク
発掘調査終了後の出土遺物の整理作業や各種資料の作成、報告書作成刊行は、株式会社イビソクが行った。
4. 本書の作成作業は、仙台市教育局生涯学習部文化財課調査指導係 主事 高橋純平・専門員 主濱光朗の監理のもと、株式会社イビソク 青木誠・菅井一希・堤正樹が行った。
5. 原稿等の執筆は下記のとおり分担し、本書の編集は高橋純平・青木誠・菅井一希・堤正樹が行った。なお、第1・3章については文化財整備活用係 係長 佐藤淳と協議の上で執筆し、第2章は「仙台市文化財調査報告書第377集『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』第2章」で詳細に報告されているため、再掲載した。
高橋純平 第1章、第9章、第10章
青木 誠 第3章～第6章、第9章、第10章
菅井一希 第5章遺物、第9章第2節
堤 正樹 第7章、第9章第1節
6. 出土した陶磁器他についての鑑定は仙台市教育局生涯学習部文化財課 佐藤洋（平成29年度まで在籍）が行った。
7. 第9章若林城跡の地形と表層堆積物については、東北学院大学地域構想学科 松本秀明教授に執筆を依頼し玉稿を賜った。
8. 木製品・漆製品の保存処理については株式会社イビソクが実施した。
9. 発掘調査および報告書作成に際し、次の方々と機関から多大なご指導・ご協力頂いた。記して感謝の意を表す。
指導・助言
平川 新・藤澤 敦（東北大学） 松本秀明・七海雅人（東北学院大学） 岡田清一・吉井 宏（東北福祉大学）
入間田宣夫・北野博司（東北芸術工科大学） 西 和夫（神奈川大学・故人） 北垣聰一郎（金沢城調査研究所）
岡崎修子（柏木市民センター） 須田良平・天野順陽・高橋栄一（宮城県文化財保護課） 菅野正道（仙台市博物館）（敬称略、順不同、所属・名称は平成25年当時）
資料掲載許可など
宮城県図書館 法務省仙台矯正管区 宮城刑務所
10. 発掘調査や報告書作成時の図面・写真・出土遺物などの資料や諸記録は仙台市教育委員会が保管している。

凡例

- 第3図は国土地理院発行の5万分の1地形図「仙台」(平成14年)を、第4図は仙台市作成の都市計画基本図(平成10年)をそれぞれ修正して使用した。
- 遺構等の土層注記に記載した土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財團法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』(2006年版)に基づいた。
- 調査の際の平面座標基準は、世界測地系平面直角座標第X系に準拠し、標高値はT.P.(東京湾平均海面)を用いた。
- 本書に掲載した遺構図版縮尺は、遺構配置図および礎石建物跡などの全体図を1:100、1:200、個別遺構平面図・断面図を1:30、1:40、1:60、1:80、1:100、基本土層図を1:60として掲載した。また図版方位は遺構配置図および礎石建物跡などの全体図については、遺構配置を理解しやすくなるために若林城跡の軸方位であるN-11°-Eに合わせ、その他の個別遺構図版については座標北に合わせた。
- 本書に掲載した遺物図版縮尺は、原則として土器類・陶磁器類・石製品・木製品を1:3、瓦を1:5、金属製品・錢貨を1:2で掲載した。

6. 遺構

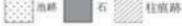
- 遺構については以下の遺構略号を使用し、後に続く番号はこれまでの調査で確認した遺構に続き付番し、遺構種別毎に連番とした。
 - SA: 埋跡 SB: 硕石建物跡・掘立柱建物跡 SD: 溝跡 SE: 井戸跡 SI: 壺穴住居跡
 - SK: 土坑 P: ピット SX: 性格不明遺構・池跡ほか 小溝群: 小溝状遺構群
- 土層名については基本層をローマ数字、遺構内堆積層をアラビア数字で表記し、細分層についてはその後にアルファベットの小文字を付し区別した。また未掘の礎石跡については、平面プランや擾乱等の断面観察により記録し、土層名を平面図中に記載した。
- 本書で遺構に関わりて表記する「1間」は、江戸時代初期に建築基準として使用されていたと考えられる六尺五寸(1.97m)を基準値としており、同時に柱間数を示す場合にも使用した。
- 遺構断面図中にある斜線の網掛け部分は、掘削していない地山や未掘部分である。

7. 遺物

- 遺物の登録は種別ごとに行い、土師器、須恵器、瓦類以外については1点ごとに登録した。また本書に掲載した遺物には以下の略号を使用した。
 - A: 純文土器 B: 弥生土器 C: 土師器(ロクロ不使用) D: 土師器(ロクロ使用)
 - E: 須恵器 F: 軒丸瓦・丸瓦 G: 軒平瓦・平瓦 H: その他の瓦 I: 陶器・土師質土器 J: 磁器
 - K: 石器・石製品 L: 木製品 N: 金属製品 P: 土製品 S: 墓輪 X: その他の遺物
- 遺物注記表内の法量で()で示した数値は推定復元値であり、(-)は計測不能を示した。

8. 遺構や遺物図版に使用した各種トーンは下記の内容を表現したものである。

凡例



目 次

卷頭写真図版	
序 文	
例 言	
凡 例	
目 次	
図版目次	
写真図版目次	
表 目 次	
第1章 はじめに	1
第1節 調査と遺構保存に至る経過	1
第2節 調査要項	2
(1) 調査要項	2
(2) 仙台城跡調査指導委員会による指導	5
第2章 若林城の概要	6
第1節 遺跡の地理的環境	6
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	7
第3節 若林城の概要	11
第3章 調査の概要	18
第1節 これまでの調査	18
第2節 調査の対象と方法	21
(1) 調査の対象	21
(2) 調査の方法	21
(3) 資料整理の方法	23
(4) 普及啓発活動	24
第4章 基本層序	25
第5章 第10・13・14次調査の経過	30
第1節 調査の経過	30
(1) 第10次調査	30
(2) 第13次調査	30
(3) 第14次調査	31
第2節 遺構の保存方法	31
第6章 第10・13・14次調査の検出遺構と出土遺物	32
第1節 III層の状況と上面検出の遺構	32
(1) 土坑（SK）	32
(2) 性格不明遺構（SX）	42
第2節 IV層上面検出の遺構	54
(1) 磚石建物跡（SB）	54
(2) 掘立柱建物跡（SB）	75
(3) 塀跡（SA）	78
(4) 溝跡（SD）	94
(5) 性格不明遺構（SX）	122
(6) 六郷堀跡	133
第3節 V層・VI層の状況と上面検出の遺構	149
(1) 河川跡	149
第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物	159
(1) その他の遺構からの出土遺物	159
(2) 基本層からの出土遺物	160
第7章 第12次調査の検出遺構と出土遺物	185
第1節 調査の方法と経過	185
第2節 検出遺構	186
第8章 第15次調査の検出遺構と出土遺物	189
第1節 調査の方法と経過	189
第2節 検出遺構と出土遺物	190
(1) Tr1	190
(2) Tr2	191
(3) Tr3	192
(4) Tr4	194
(5) Tr5・6	197
(6) Tr7	197
(7) Tr8	199
第9章 若林城跡の地形と表層堆積物	206
第10章 検出遺構と出土遺物のまとめ	212
第1節 検出遺構のまとめ	212
(1) 若林城跡の遺構について	212
(2) 六郷堀跡について	219
(3) 河川跡について	219
第2節 若林城跡の出土遺物について	236
(1) 瓦	236
(2) 陶磁器	242
第11章 総括	248
参考・引用文献	
写真図版	
報告書抄録	

図版目次

第1図 若林城跡の位置	6
第2図 遺跡周辺の地形分類図	7
第3図 周辺の遺跡	8
第4図 若林城跡周辺の遺跡	9
第5図 これまでの調査区位置	20
第6図 グリッド設定（全体）	22
第7図 グリッド設定（第10次・12～15次調査区）	22
第8図 基本層序（1）	27
第9図 基本層序（2）	28
第10図 基本層序模式図	29
第11図 若林城跡主要遺構配置図	33・34
第12図 III層全体図（1）	35・36
第13図 III層全体図（2）	37
第14図 III層全体図（3）	38
第15図 III層全体図（4）	39
第16図 III層全体図（5）	40
第17図 SK380	41
第18図 SK380 出土遺物	43
第19図 SX12（1）	45・46
第20図 SX12（2）	47・48
第21図 SX12 出土遺物（1）	49
第22図 SX12 出土遺物（2）	50
第23図 SX12 出土遺物（3）	51
第24図 SX12 出土遺物（4）	52
第25図 IV層全体図（1）	55・56
第26図 IV層全体図（2）	57
第27図 IV層全体図（3）	58
第28図 IV層全体図（4）	59
第29図 IV層全体図（5）	60
第30図 SB5（1）	61・62
第31図 SB5（2）	63
第32図 SB5（3）	64
第33図 SB14（1）	68
第34図 SB14（2）	69
第35図 SB14（3）	70
第36図 SB14（4）	71
第37図 SB16	72
第38図 磐石跡1～5	74
第39図 SB15（1）	76
第40図 SB15（2）	77
第41図 SA9・23・SD89	79・80
第42図 SA15	81
第43図 SA17・18・22	83・84
第44図 SA18	86
第45図 SA19・20・21	89・90
第46図 SA23・24・25	91・92
第47図 SA24・25 出土遺物	93
第48図 SD141（1）	95・96
第49図 SD141（2） SD141 出土遺物	97
第50図 SD88	99・100
第51図 SD88 出土遺物（1）	101
第52図 SD88 出土遺物（2）	102
第53図 SD88 出土遺物（3）	103
第54図 SD88 出土遺物（4）	104
第55図 SD89 出土遺物（1）	106
第56図 SD89 出土遺物（2）	107
第57図 SD100	109・110
第58図 SD114（1）	111・112
第59図 SD114（2）	113・114
第60図 SD114 出土遺物	115
第61図 SD117	116
第62図 SD117 出土遺物	116
第63図 SD119	117
第64図 SD120	119・120
第65図 SD120 出土遺物	121
第66図 SD123（1）	123・124
第67図 SD123（2）	125
第68図 SD123 出土遺物	125
第69図 SX19	126
第70図 SX20	128
第71図 SX21	129・130
第72図 SX23	131

第73図	SX23 出土遺物	132	第99図	Tr3	193
第74図	六郷堀跡南北方向 (1)	135・136	第100図	Tr4	195
第75図	六郷堀跡南北方向 (2)	137・138	第101図	SA7・26	196
第76図	六郷堀跡東西方向 (1)	139・140	第102図	Tr4 出土遺物	197
第77図	六郷堀跡東西方向 (2)	141・142	第103図	Tr5・6	197
第78図	六郷堀跡 出土遺物 (1)	145	第104図	Tr7	198
第79図	六郷堀跡 出土遺物 (2)	146	第105図	Tr8 (1)	200
第80図	六郷堀跡 出土遺物 (3)	147	第106図	Tr8 (2)	201
第81図	六郷堀跡 出土遺物 (4)	148	第107図	SK600 出土遺物	202
第82図	河川跡 (1)	151・152	第108図	SB15	203
第83図	河川跡 (2)	153・154	第109図	SA15	204
第84図	河川跡 (3)	155・156	第110図	若林城跡遺構配置図	212
第85図	河川跡 (4)	157・158	第111図	「御二之丸御指図」	213
第86図	その他の遺構 出土遺物 (1)	163	第112図	〔若林古御城〕「御修復帳」	214
第87図	その他の遺構 出土遺物 (2)	164	第113図	SB5と二の丸御指図の御着部屋	215
第88図	その他の遺構 (3)・I層 出土遺物	165	第114図	SB15と二の丸御指図の御厩	216
第89図	II層 出土遺物 (1)	166	第115図	若林城遺構模式図	217
第90図	II層 出土遺物 (2) III層 出土遺物 (1)	167	第116図	六郷堀跡南北方向西壁側石付番図 (1)	220
第91図	III層 出土遺物 (2)	168	第117図	六郷堀跡南北方向東壁側石付番図 (2)	221
第92図	III層 出土遺物 (3)	169	第118図	六郷堀跡東西方向側石・敷石付番図 (1)	222
第93図	IV・VI層 出土遺物	170	第119図	六郷堀跡東西方向側石・敷石付番図 (2)	223
第94図	第12次調査区位置図	185	第120図	六郷堀跡側石付番 (1)	224
第95図	第12次調査 1・2・5区	188	第121図	六郷堀跡側石付番 (2)	225
第96図	第15次調査区位置図	189	第122図	六郷堀跡側石・敷石付番 (3)	226
第97図	Tr1	190	第123図	刻印他分類模式	240
第98図	Tr2	192	第124図	刻印瓦	241

写真図版目次

写真図版 1	第10・13・14次調査 全景 第10次調査 全景 (1・2区)	257	写真図版10	SX12 (2)	266
写真図版 2	第13次調査 全景 (1・2区)	258	写真図版11	SX12 (3)	267
写真図版 3	第13・14次調査 全景	259	写真図版12	SX12 (4) SK380 (1)	268
写真図版 4	第13次調査 基本層序 (1)	260	写真図版13	SK380 (2)	269
写真図版 5	第13次基本層序(2)第14次基本層序(1)	261	写真図版14	SB5 (1)	270
写真図版 6	第14次調査 基本層序 (2)	262	写真図版15	SB5 (2)	271
写真図版 7	第14次調査 基本層序 (3)	263	写真図版16	SB5 (3)	272
写真図版 8	第14次調査 基本層序 (4)	264	写真図版17	SB14 (1)	273
写真図版 9	SX12 (1)	265	写真図版18	SB14 (2)	274

写真図版19	SB14 (3)	275	写真図版58	SX23 (2)	314
写真図版20	SB15 (1)	276	写真図版59	SX23 (3) SK437	315
写真図版21	SB15 (2)	277	写真図版60	SK438·441·443·446·595	316
写真図版22	SB15 (3) SB16	278	写真図版61	六郷驛跡南北方向 (1)	317
写真図版23	礎石跡	279	写真図版62	六郷驛跡南北方向 (2)	318
写真図版24	SA9	280	写真図版63	六郷驛跡南北方向 (3)	319
写真図版25	SA15·16·17	281	写真図版64	六郷驛跡南北方向 (4)	320
写真図版26	SA18 (1)	282	写真図版65	六郷驛跡南北方向 (5)	321
写真図版27	SA18 (2)	283	写真図版66	六郷驛跡南北方向 (6)	322
写真図版28	SA18 (3)	284	写真図版67	六郷驛跡南北方向 (7)	323
写真図版29	SA19 SA20 (1)	285	写真図版68	六郷驛跡南北方向 (8)	324
写真図版30	SA20 (2) SA21 (1)	286	写真図版69	六郷驛跡南北方向 (9)	325
写真図版31	SA20(3)SA21(2)SA22 SA23(1)	287	写真図版70	六郷驛跡南北方向 (10)	326
写真図版32	SA23 (2) SA24	288	写真図版71	六郷驛跡東西方向 (1)	327
写真図版33	SA25 (1)	289	写真図版72	六郷驛跡東西方向 (2)	328
写真図版34	SA25 (2)	290	写真図版73	六郷驛跡東西方向 (3)	329
写真図版35	SD141 (1)	291	写真図版74	六郷驛跡東西方向 (4)	330
写真図版36	SD141 (2)	292	写真図版75	六郷驛跡東西方向 (5)	331
写真図版37	SD141 (3)	293	写真図版76	六郷驛跡東西方向 (6)	332
写真図版38	SD88 (1)	294	写真図版77	六郷驛跡東西方向 (7)	333
写真図版39	SD88 (2)	295	写真図版78	六郷驛跡東西方向 (8)	334
写真図版40	SD88 (3)	296	写真図版79	六郷驛跡東西方向 (9)	335
写真図版41	SD89 (1)	297	写真図版80	六郷驛跡東西方向 (10)	336
写真図版42	SD89 (2)	298	写真図版81	六郷驛跡東西方向 (11)	337
写真図版43	SD100 (1)	299	写真図版82	六郷驛跡東西方向 (12)	338
写真図版44	SD100 (2)	300	写真図版83	六郷驛跡東西方向 (13)	339
写真図版45	SD100 (3)	301	写真図版84	六郷驛跡東西方向 (14)	340
写真図版46	SD114 (1)	302	写真図版85	河川跡 (1)	341
写真図版47	SD114 (2)	303	写真図版86	河川跡 (2)	342
写真図版48	SD114 (3)	304	写真図版87	河川跡 (3)	343
写真図版49	SD114 (4)	305	写真図版88	第12次調査 (1)	344
写真図版50	SD114 (5)	306	写真図版89	第12次調査 (2)	345
写真図版51	SD114 (6) SD117 SD119 (1)	307	写真図版90	第12次調査 (3)	346
写真図版52	SD119 (2) SD120 (1)	308	写真図版91	第12次調査 (4)	347
写真図版53	SD120 (2)	309	写真図版92	第12次調査 (5)	348
写真図版54	SD122·123·124·127·137	310	写真図版93	出土遺物 (1)	349
写真図版55	SX20 (1)	311	写真図版94	出土遺物 (2)	350
写真図版56	SX20 (2) SX21 (1)	312	写真図版95	出土遺物 (3)	351
写真図版57	SX21 (2) SX22 SX23 (1)	313	写真図版96	出土遺物 (4)	352

写真図版97	出土遺物 (5) ······	353
写真図版98	出土遺物 (6) ······	354
写真図版99	出土遺物 (7) ······	355
写真図版100	出土遺物 (8) ······	356
写真図版101	出土遺物 (9) ······	357
写真図版102	出土遺物 (10) ······	358
写真図版103	出土遺物 (11) ······	359
写真図版104	出土遺物 (12) ······	360
写真図版105	出土遺物 (13) ······	361
写真図版106	出土遺物 (14) ······	362
写真図版107	出土遺物 (15) ······	363
写真図版108	出土遺物 (16) ······	364
写真図版109	出土遺物 (17) ······	365
写真図版110	出土遺物 (18) ······	366
写真図版111	第15次調査 (1) ······	367
写真図版112	第15次調査 (2) ······	368
写真図版113	第15次調査 (3) ······	369
写真図版114	第15次調査 (4) ······	370
写真図版115	第15次調査 (5) ······	371
写真図版116	第15次調査 (6) ······	372
写真図版117	第15次調査 (7) ······	373
写真図版118	第15次調査 (8) ·出土遺物 ······	374

表 目 次

第1表	これまでの調査 ······	20
第2表	礎石建物跡一覧表 ······	171
第3表	掘立柱建物跡一覧表 ······	172
第4表	堀跡一覧表 ······	172
第5表	溝跡一覧表 ······	173
第6表	土坑一覧表 ······	175
第7表	性格不明遺構一覧表 ······	178
第8表	小溝状遺構群一覧表 ······	179
第9表	石敷遺構一覧表 ······	179
第10表	竪穴住居跡一覧表 ······	179
第11表	井戸一覧表 ······	179
第12表	ピット一覧表 ······	179
第13表	六郷廻跡 ······	184
第14表	河川跡 ······	184
第15表	第15次調査区一覧表 ······	189
第16表	第15次調査遺構一覧表 ······	205
第17表	六郷廻跡・礎石・敷石付番表 ······	227
第18表	瓦分類表 ······	237
第19表	遺物集計表 ······	244

第1章 はじめに

第1節 調査と遺構保存に至る経過

平成16年3月2日付で、宮城刑務所より同所の全体改築工事に伴う埋蔵文化財についての取扱いに関する協議書が提出された。当初の計画では新たに建設される建物の総面積は21,198m²と大規模なもので、城内の全建物を数期に分けて建て替えて行くというものであった。この計画に対し当教育委員会は平成16年3月10日付教生文第3-35号「埋蔵文化財の取扱いについて(回答)」において、確認調査を実施し、その後の対応について協議すると回答した。

確認調査は同年4月に城内16か所で実施した。その結果を受け、9月には第4次調査として最初の改築対象となる「処遇管理棟」と「炊場棟」の2棟を対象とした部分調査を実施したところ、若林城の遺構が初めて確認された。当教育委員会では遺構の残存状態が良好であり、広範囲に残存することが想定されることから、平成16年10月15日付教生文第288号「宮城刑務所全体改築工事に伴う若林城跡の遺構に関する取扱いについて」において、遺構の取扱いについての協議を宮城刑務所に申し入れた。その内容は処遇管理棟全体の調査の必要性に加え、遺構保護の必要が認められた場合の建物配置および基礎設計変更、さらに炊場棟についてもこれと同様の対応を求めるものであった。

この協議に基づき実施した平成17年度の処遇管理棟を対象とした第5次調査では、若林城の御殿建物群や石敷きなどの諸遺構の発見が相次ぎだ。この調査成果を受け、当教育委員会は平成17年10月25日付教生文第426号「宮城刑務所全体改築に伴う若林城跡第5次発掘調査の中間報告について」において、宮城刑務所に遺構の保存を求めた。その後、遺構保存に関する新たな協議が開始された。

第1回目の協議は平成17年11月2日に行われ、当教育委員会のほか、法務省仙台矯正管区と宮城刑務所、宮城県教育委員会により話し合われた。協議では遺構の保存を主張する仙台市と宮城県に対し、法務省側は計画通り、来年早々の工事開始を主張し、両者の合意には至らなかった。

同年11月22日に行われた第2回協議では、工事計画を見直し、建設場所の変更を求める仙台市と宮城県に対し、法務省側は建物を他所へ移す場合、今後の建物配置計画への影響が大きいことに加え、これに伴い再度行なわれる発掘調査は時間的にも難しいとの回答であった。その後、法務省側から建物基礎の荷重を建物全体に分散させる、いわゆる「ベタ基礎」へ変更する案が提示された。しかし宮城県は建物下となる遺構は全て事前調査の対象であり、この案では保存したとは言えないとの基本的方針から、この時点でも合意には至らなかった。

文化庁記念物課長や主任調査官が来訪した際には、発見した遺構群のみならず若林城跡における土塁や堀跡などの遺存状況は高く評価でき、国の史跡に相当するものあり、あくまでも遺構の保存を求めていくべきとの意見を受けた。この後、文化庁と法務省矯正局との間での協議がなされ、今後、若林城跡の史跡指定を図るため、長期的な展望のもと将来的には施設を他所に移転することを前提として、処遇管理棟については原位置において先に提示のあった盛土による保存措置をとることが確認された。この基本方針を受け、平成18年2月14日に行われた第3回協議では、今後の建設に伴う工程や建物下となる遺構の今後の活用など、具体的な協議が行われた。

そして平成18年3月31日付教生文第844号「若林城跡の取扱いについて」において、文化庁、法務省、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会の四者で合意の覚書が取り交わされた。その内容は先の基本方針に加え、今後の施設建設にあたっては建物面積全体を対象とした発掘調査により配置計画をその都度再検討することや、可能な限り早期に若林城跡の史跡指定に向けた取り組みを行うものとしている。

合意後に行われた8月18日の第4回協議では、炊場棟建設位置について話し合われ、第5次調査での遺構状況からその位置を東側に移すか否かが問題となつたが、今後2か年にわたる発掘調査の結果により判断することとなった。

炊場棟にかかる全調査終了後の平成21年7月14日には、炊場棟の建設位置と基礎構造についての協議が行われ

第1節 調査と遺構保存に至る経過

た。第8次と第9次調査では、第5次調査で確認した城の建物群の東側への広がりが確認され、加えて池跡や柵跡などによる園庭のはか、城内を区画する堀跡など重要遺構の発見が相次いだ。この結果、先の四者合意に従い、炊場棟の基礎構造は廻遊管理棟同様のコンクリート板によるベタ基礎とし、若林城の遺構はさらなる広がりが想定されることから、建物は当初計画の位置に建設することが適当であることが確認された。ただし建物内に設置予定のエレベーターピットについては、地下への埋設が不可避との事から、その位置を変更し、調査で確認した搅乱内に設置することで遺構を損なわないように変更された。この結果、炊場棟建物は、当初の計画位置から西側に約1.5m移動させ建築している。

次に対象となった北収容棟は廻遊管理棟や炊場棟よりも高層の建物であったため、従来の基礎工法では北収容棟建物下面にかかる荷重が大きくなり、建物の沈下により遺構面に影響を及ぼす可能性があることが宮城刑務所から示された。仙台市としてはそのような事態を回避するため、北収容棟の階数を減らす計画変更を求めたが、宮城刑務所の回答は予定している収容者数を大きく減らすことは極めて難しいというものであった。このため、建物基礎の底面積を建物本体より広く設定し、より広いベタ基礎面積で全体の荷重を受けるという案が提示された。この基礎構造には建物本体以上の工事面積と、それに伴い事前のより広い調査面積が求められることとなるが、第10次調査からは、この方法を前提とした調査区を設定し、併行して遺構確認面の地耐力の測定を、各調査の終了後に速やかに実施することで話がまとまった。これにより平成27年度の第14次調査終了段階では、建物の基礎は一部で建物本体より最大で3m程度外側に広げた設計により建設することで、当初の設計通りの建物建設が予定されている。平成28年度からは北収容棟外構部分の協議が行われた。北収容棟外構は当初の計画ではアスファルト舗装を伴うものであったため、全面の発掘調査が必要であった。その後、協議が重ねられ、宮城刑務所からインターロッキングブロックを使用する遺構に影響を与えない工法が示されたことで、全面の発掘調査ではなくトレンドを設定した部分的な発掘調査を第15次調査として行うこととなった。

また第12次調査は、他の調査同様に宮城刑務所の全体改築計画の一環で実施したものである。計画は平成23年4月27日に提示され、内容は、かつての若林城の大手櫓とされる現在の第二正門東側の城跡内の一部をフェンスで囲み、内側に仮設によるもう一つの門を設置するものであった。調査対象は5か所の門の基礎部分と、それらを繋ぐフェンス基礎であったが、フェンス基礎は狭く調査が困難と判断し、門基礎部分のみの5か所を調査することとなった。

第2節 調査要項

(1) 調査要項

遺 跡 名 若林城跡（C-511 宮城県遺跡登録番号01030）

所 在 地 宮城県仙台市若林区古城二丁目3-1（宮城刑務所地内）

調 査 名 平成21年度：若林城跡第10次発掘調査（北収容棟1年次）

（委託業務名）平成23年度：若林城跡第12次発掘調査（第二正門仮設フェンス設置）

平成25年度：若林城跡第13次発掘調査（北収容棟2年次）

平成27年度：若林城跡第14次発掘調査（北収容棟3年次）

平成29年度：若林城跡第10次・第12～14次発掘調査整理報告書作成

平成30年度：若林城跡第10次・第12～15次発掘調査整理報告書刊行

平成30年度：若林城跡第15次発掘調査（北収容棟外構）

調 査 主 体 仙台市教育委員会

調 査 担 当 仙台市教育局生涯学習部文化財課調査指導係

調査指導係　主　　査 佐藤淳（平成21・23・25・27年度）
 　　主　　事 高橋純平（平成27・29・30年度）
 　　専　門　員　主濱光朗（平成29・30年度）
 　　文化財教諭 佐藤洋平（平成25年度）

第12次調査 仙台市教育局生涯学習部文化財課仙台城史跡調査室
 平成23年度 主査 佐藤淳
 　　主査 佐藤洋

調査組織 平成21年度：第10次調査 株式会社アキジオ
 　　主任調査員 阿部将樹（平成21年6月15日から11月5日まで）
 　　調査員 中井英策 新宅輝久
 　　計測員 斎藤農（平成21年6月15日から11月5日まで）
 　　濱田晃
 　　計測補助員 田代久正

平成25年度：第13次調査 株式会社イビソク
 　　主任調査員 青木誠
 　　調査員 服部英世
 　　調査補助員 清水輔（平成25年5月21日から8月16日まで）
 　　計測員 加藤尚史
 　　計測補助員 青木翔吾
 　　本郷孝（平成25年5月21日から8月16日まで）
 　　清水輔（平成25年8月19日から12月11日まで）

平成27年度：第14次調査 株式会社イビソク
 　　主任調査員 青木誠
 　　調査員 澤田孝
 　　調査補助員 名久井伸哉（平成27年5月25日から12月11日まで）
 　　計測員 加藤尚史
 　　計測補助員 青木翔吾

平成29年度：第10次・12～14次報告書作成 株式会社イビソク
 　　主任調査員 青木誠
 　　調査員 菅井一希
 　　計測員 三浦康和
 　　計測補助員 太田雄也
 　　太田玄紀（平成29年11月6日から3月9日まで）

第2節 調査要項

平成30年度：第10次・12～15次報告書刊行 株式会社イビソク

主任調査員 青木誠

調査員 菅井一希

計測員 小林あきほ

平成30年度：第15次調査 株式会社イビソク

主任調査員 青木誠

調査補助員 堤正樹

計測員 小林あきほ

計測補助員 石田純子

調査期間	第 10 次 調査：野外調査	平成21年6月15日～平成21年10月30日
	整 理 作 業	平成21年11月2日～平成21年3月12日
	第 12 次 調査：野外調査	平成24年1月10日～平成24年1月12日
	第 13 次 調査：野外調査	平成25年5月21日～平成25年12月11日
	基礎 整理	平成25年12月12日～平成26年3月7日
	第 14 次 調査：野外調査	平成27年5月25日～平成28年1月13日
	基礎 整理	平成28年1月5日～平成28年3月11日
	第10・12～14次：報告書作成	平成29年5月26日～平成30年3月9日
	第10・12～15次：報告書刊行	平成30年6月12日～平成31年3月8日
	第 15 次 調査：野外調査	平成30年10月1日～平成30年11月30日
	整 理 作 業	平成30年12月3日～平成31年3月8日
調査面積	対象面積：北取容棟 5.501nf	
	第10次調査776nf	第13次調査2,062nf
	第14次調査2,327nf	第15次調査336nf
	第二正門仮設フェンス	第12次調査16nf
調査面積：北取容棟 5.309nf		
	第10次調査661nf	第13次調査2,060nf
	第14次調査2,250nf	第15次調査338nf
	第二正門仮設フェンス	第12次調査18nf

(2) 仙台城跡調査指導委員会による指導

今回の発掘調査を実施するにあたっては、発掘調査ならびに整理・報告書作成作業を適正に行なうため、下記の体制（所属・役職名は平成25年度）による「仙台城跡調査指導委員会」の現場視察や、委員会において助言・指導を受けた。

委 員 長　岡田　清一（東北福祉大学教授　中世史）

副委員長　平川　新（東北大学教授　近世史）

委 員　岡崎　修子（仙台ひと・まち交流財團 仙台市柏木市民センター館長 地域史）

北垣聰一郎（石川県金沢城調査研究所長 石垣・城郭）※平成22年3月まで

北野　博司（東北芸術工科大学准教授 考古学）※平成22年4月から

西　和夫（神奈川大学客員教授 建築史）※平成26年1月まで

藤澤　敦（東北大学特任准教授 考古学）

<委員会の開催日と報告内容>

第23回 平成21年10月20日 「若林城跡第10次調査中間報告」

第24回 平成22年3月12日 「若林城跡第10次調査最終報告」

第25回 平成22年9月28日 「若林城跡第11次調査の成果について」

第26回 平成24年2月14日 「若林城跡第11次調査成果の総括」

第29回 平成25年7月1日 「若林城跡第13次調査について」

第30回 平成25年10月22日 「若林城跡第13次調査について」

※第25回と第26回の委員会に報告した第11次調査は、作業倉庫棟建設に伴う調査

なお、第26回委員会においては、東日本大震災当日の平成23年3月11日に実施した、宮城県図書館所蔵の『御二之丸御指図』を実見した結果を、「若林城跡発掘調査にかかる『御二之丸御指図』実見の総括」として報告した。

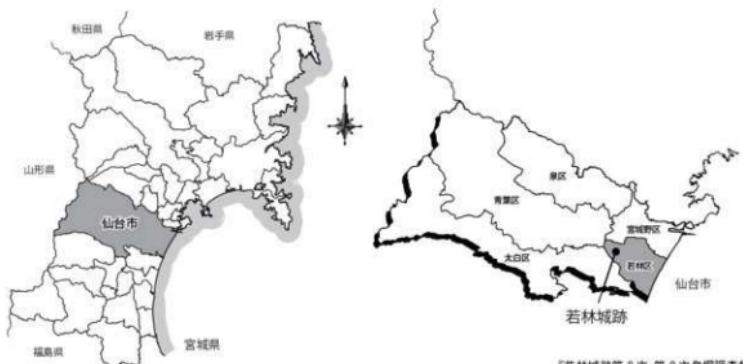
第2章 若林城の概要

第1節 遺跡の地理的環境

若林城跡は仙台城跡の南東約4.5km、JR仙台駅の南東約3km、若林区古城2丁目に所在する。若林城跡が立地する仙台平野は七北田川、名取川、阿武隈川などの河川作用で形成され、北端の多賀城市から南端の亘理郡山元町にいたる南北約50km、東西約10kmの広がりをもっている。城跡はこの仙台平野を東西に貫通する名取川の支流である広瀬川北岸の自然堤防上に築かれている。付近の標高は約12mである。

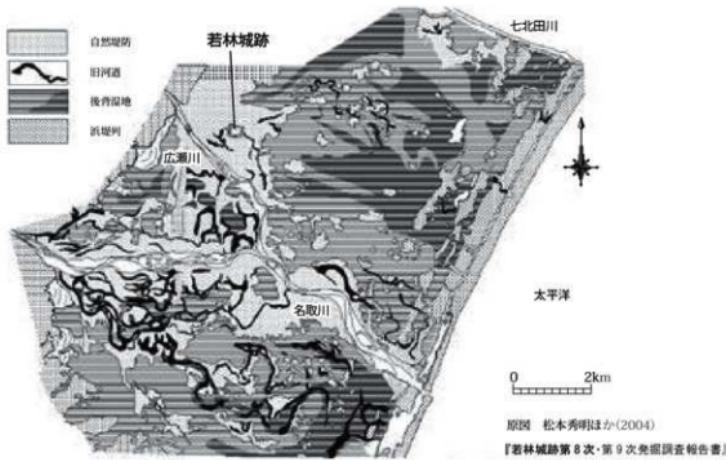
仙台市域とその周辺の地形は、西から東にかけて山地、丘陵地、台地、低地部分に大きく分けられる。河川の水源は仙台市の北西部にある船形連峰と、西部にある二日連峰であり、青葉区閑山より発した広瀬川は、茂庭・白沢丘陵、青葉山丘陵などの丘陵間を東流する。愛子付近や川崎町付近では、規模が大きい数段の河岸段丘が発達しており、ここから仙台市中心部にいたる広瀬川の両岸に形成された河岸段丘は、高位順に台原段丘、上町段丘、中町段丘、下町段丘に分けられ、仙台城跡やその城下はこの段丘上に築かれている。これら段丘を含む台地と低地の境界部には長町一利府線と呼ばれる構造線に沿う宮城野挽曲崖が存在する。若林城跡はこれにより台地と両された南東側低地部の南側に位置し、広瀬川により形成された未発達の河岸段丘に隣接した場所に立地している。

仙台平野には自然堤防、後背湿地、浜堤列、旧河道などによりわずかな起伏をもつ微地形が分布しており、自然堤防や浜堤列上には古墳時代から集落が形成されている。若林城跡周辺にも縄文時代から近世にかけての大規模な複合遺跡である南小泉遺跡が展開し、遠見塚古墳や陸奥国分寺跡など仙台市を代表する遺跡も數多く分布している。また若林城跡の周辺には幾つかの旧河道が確認されており、若林城跡の北側にはこのような河川跡を利用して掘削され、広瀬川より取水したと考えられる七郷堀や六郷堀が流れおり、城跡の東側で分流しながら東部の低地を潤している。若林城はその規模の大きさから、周辺の水はけの良好な自然堤防上ののみならず、このような地盤の軟弱な小規模な河川跡上にもまたがって造成されたものと考えられる。



第1図 若林城跡の位置

『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』
第1図より再掲載



第2図 遺跡周辺の地形分類図

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

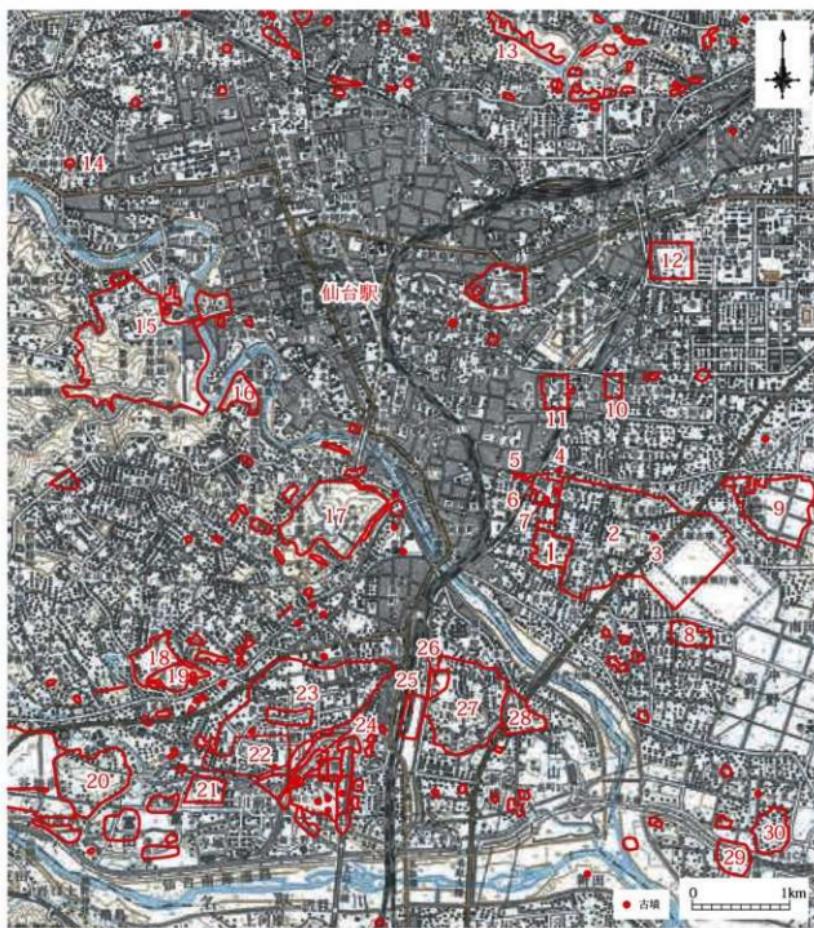
若林城跡の周辺には縄文時代から近世の遺跡が存在し、長期間に渡り人々の生活の場であったことがわかる。城跡内部でも古墳時代から近世にかけての遺構が確認され、縄文土器から近世の遺物が出土している。以下に若林城跡周辺の遺跡を時代別に記述する。

縄文時代 若林城跡では第5次・10次・13～15次調査で縄文土器が僅かに出土している。城跡の北東に隣接する南小泉遺跡は縄文時代から近世までの複合遺跡であり、この時代の遺構は確認されていないが、第19次調査で縄文時代晩期の遺物包含層が確認され、大洞A式の土器、剥片石器、疊石器などが出土していることから、周囲には集落が存在する可能性がある。広瀬川南側の郡山遺跡では第65次調査で後期や晩期の土坑を確認しており、後期の金剛寺式深鉢などが出土しているが堅穴住居等の遺構は確認されていない。

弥生時代 南小泉遺跡は東北でも代表的な弥生時代遺跡で、自然堤防上を中心形成された遺跡の範囲は120haと広範囲に渡っている。縄文時代同様に弥生時代の遺構はほとんど確認できず、第12次調査で溝跡などが確認されたのみである。一方、弥生土器は多く出土しており、時期は前期～後期と全般にみられ、壺・蓋・高坏・壺などの器種のほか、合口土器棺に転用されたとみられる大型の壺も出土している。その他には石庖丁、石斧、石鎚などの石器類も出土している。

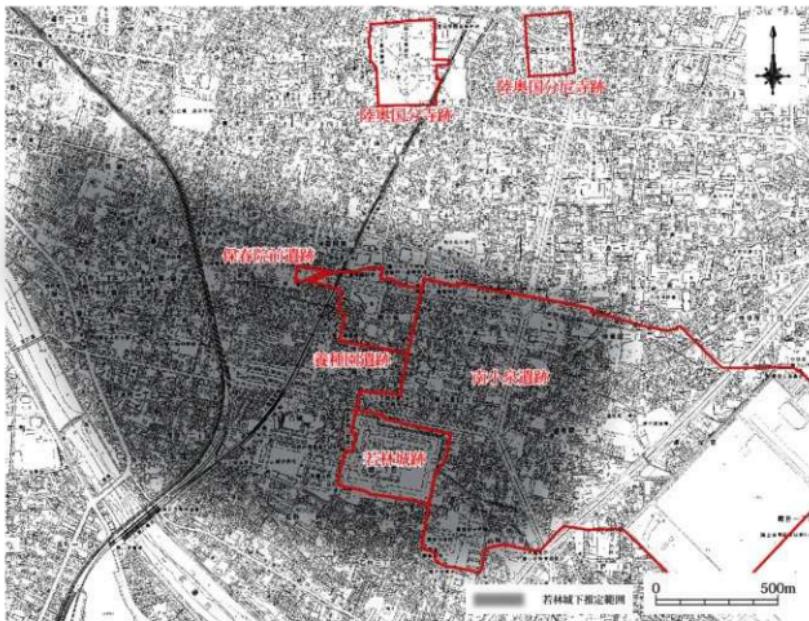
古墳時代 城跡の東側にある遠見塚古墳は古墳時代前期に築造された東北を代表する前方後円墳で、全長が110mあり、県内で2番目の規模である。戦後に後円部の一部が土取りのため削平されたが、残存した主体部の調査では管玉、ガラス玉、櫛などの副葬品が出土した。遠見塚古墳はこの地方の首長の墓とみられ、古墳時代に遺跡周辺は当地域の中心的な場所であったと考えられる。若林城跡内にも古墳が存在しており、第2次調査では古墳時代後期の円墳を1基確認している。周溝は直径22m程度の小型のものである。

出土遺物には円筒埴輪や土師器壺などがある。城跡の北側には猫塚古墳や法領塚古墳などの円墳が存在してお



No.	遺跡名	種別	年代	No.	遺跡名	種別	年代
1	若林城跡	円墳・集落跡・城跡	古墳・平安・中世・近世	16	新ヶ峯伊達塙所	居所	近世
2	南小京遺跡	集落跡・屋敷跡	縄文～近世	17	浅水崎跡	城跡	中世
3	遠見坂古墳	前方後円墳	古墳	18	芦ノ口遺跡	集落跡	縄文・古墳・平安
4	法蔵院古墳	円墳	古墳	19	神家遺跡	集落跡	縄文・平安
5	保春院前遺跡	集落跡	古代～近世	20	伊遺跡	集落跡	縄文・奈良・平安
6	普照院遺跡	集落跡・屋敷跡・包合地	縄文・古墳・平安～近世	21	葛沢魚跡	城跡	中世
7	鶴塚古墳	円墳	古墳	22	山口跡	集落跡・水田跡	縄文～中世
8	沖野城跡	城跡	中世	23	葛原遺跡	包合跡・水田跡	旧石器～近世
9	仙台東部墓里跡	塚古墳	奈良・平安	24	六郷山遺跡	集落跡	縄文～平安～近世
10	陸奥国分尼寺跡	寺伝跡	奈良・平安	25	長町駅東遺跡	集落跡	奈良～中世
11	陸奥国分寺跡	寺伝跡	奈良・平安	26	西野畠遺跡	包合跡・廣相墓	縄文～奈良
12	酒日城跡	城跡	中世	27	郡山遺跡	官衙跡・寺伝跡・包合地	縄文～奈良
13	与兵衛宿塗跡	塗跡	奈良・平安・近世	28	北口城跡	城跡跡・集落跡・水田跡	縄文～近世
14	大崎八幡神社	神社	近世	29	高田B遺跡	集落跡・建物跡・水田跡	縄文～古墳・平安～近世
15	仙台城跡	城跡	中世・近世	30	今泉跡	集落跡・城跡跡・包合地	縄文～近世

第3図 周辺の遺跡



第4図 若林城跡周辺の遺跡

り、法領塚古墳は横穴式石室を持つ終末期の円墳で、墳丘径は32m程度である。石室内部からは須恵器、土師器、直刀が出土している。

南小泉遺跡では中期から後期の竪穴住居跡などによる集落跡が各所で確認されており、土師器のほか石製模造品なども多く出土している。遺跡出土の土師器は東北地方南部における古墳時代中期の標識土器となっている。また城跡の北東側では古墳時代後期の竪穴住居跡が多数発見され、関東系の土師器环が出土しており、当地区は古墳時代を通じ集落が営まれたと共に、関東地方からの人の移動があったことがわかった。しかし古墳時代終末期には広瀬川の南側に多賀城以前の陸奥国府である郡山遺跡が造営されることで、当地域の中心は一時この地を離れることとなる。

奈良時代 城跡の北側に国分寺が造営されたことで、この地区にも再び集落が営まれるようになる。陸奥国分寺は天平13年（741）に全国に造営された国分寺の一つで、規模は東西242m、南北は不明であるが、周囲を築地塀と溝で囲まれている。発掘調査の結果、南大門跡、中門跡、金堂跡、講堂跡、僧房跡の他、鐘楼跡や経棲跡が確認されている。出土した瓦には重弁蓮華文軒丸瓦や偏行唐草文軒平瓦などがある。また国分寺の東には陸奥国分尼寺が造営されたが、現在伽藍配置や寺域は不明である。さらに東にある仙台東郊条里跡は近年まで低地部にかつての条里的区割が残り、1町を基準とする畦畔が見られたが、近年の圃場整備により失われた。

平安時代 奈良時代に続き、城跡周辺には集落が営まれる。本遺跡の第2次・6次調査でも平安時代の竪穴住居跡が確認されており、水はけの良好な自然堤防上を中心に集落が営まれたと考えられる。また隣接する南小泉遺跡でも

広範囲に竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが多数確認されており、この時代も当地域の中心的な場所であったと推定される。

鎌倉～室町時代 南小泉遺跡では第16次調査で土塁を伴う14世紀中期～15世紀前期の城館跡や、13～14世紀前半の屋敷跡が確認されている。また第17次調査では12世紀後半～13世紀初頭の屋敷跡と、この屋敷跡を埋めて造った区画溝を持つ13～16世紀の屋敷跡が確認されている。出土遺物には土師質土器皿、古瀬戸碗、常滑窯、在地の窯、青磁碗、白磁碗、畿内の瓦器などがあり、一般集落の在り方とは異なった状況がみられる。このことは中世を通して力を持ち小領主となった武士がこの地域に居所を構えることで、長く栄えた地域であったことを物語っている。

戦国時代 若林城跡の北側にある養種園遺跡において大溝で区画された大型の掘立柱建物跡が確認されており、内部は小溝でさらに区画され、小型の掘立柱建物跡も確認されている。大溝の外側には焼跡などがあり、周辺からは輪の羽口、鉄鋤、粒状津などが出土したこと、ここで鍛冶が行われていたことが判明した。出土遺物には中国産青花碗・皿、中国産天目茶碗、瓦質茶釜や擂鉢、瀬戸・美濃皿などがあり、調理具や食膳具が大半を占めている。このような状況から、養種園遺跡周辺には当時、この地域を支配していた国分氏に関わる町場が形成されていたと推定されている。

広瀬川の南側にある北目城跡は、国分氏に代わりこの地を支配した伊達政宗が上杉氏攻めの拠点とした平城である。鉤形に屈曲する堀跡は幅10～14m、深さ3mもあり、堀底には障子と呼ばれる障壁を配置した実戦的な城であったことがわかる。北目城は同時に仙台城築城までの間、政宗の仙台地方支配のための拠点となつており、中世以来この地は国分氏から伊達氏へ支配が移行する過程で、様々な屋敷や城館をはじめ、それらに伴い形成された町屋が営まれた賑わいのある場所だったことがわかる。

江戸時代 仙台城は慶長5年（1600）から伊達政宗によって築城が開始され、二の丸は寛永15年（1638）に2代藩主の伊達忠宗によって造営された。この間の寛永4年（1627）に若林城の造営が開始され、翌年完成したが、政宗の死去に伴い、寛永16年（1639）に廢城となり、城内の建物等の多くは二の丸へ移築されたとされる。城跡は延宝8年（1680）までには藩営の薬草園が設置されたとみられるが、廢城後間もなく無く設置された可能性もある。以後明治にいたるまで薬草園として使用されたと考えられている。その他にも慶長12年（1607）に政宗により陸奥国分寺の地に薬師堂が造営されている。

養種園遺跡では若林城下における建物跡を確認したほか、その後、忠宗により造営されたとされる御仮屋のものとみられる造構を発見している。またその後の元禄5年（1692）には同じ場所に伊達家の別荘である小泉屋敷が造営されており、調査では屋敷の周囲を区画する幅20m以上の堀跡や、内側に建物跡や池跡など庭園が確認されている。出土遺物には瀬戸・美濃皿、唐津碗、大堀相馬碗などの陶磁器が多数あり、当時の生活をうかがうことができる。また南小泉遺跡の複数地点においても屋敷の一部とみられる区画溝のほか、掘立柱建物跡、土壙、用水堀などが確認されており、陶磁器以外には金箔押巴文軒丸瓦が出土している。

若林城の廢城に伴い、若林城下町の西側は隣接する仙台城下に組み入れられた。城周辺の町屋や家臣屋敷もまた廃され、寛永16年（1639）に城跡は小泉村分となるが、後の仙台城下の拡大に伴い、寛保2年（1742）にこの地は新たに仙台城下に組み込まれた。

明治時代以降 明治12年（1879）、若林城の跡地には西南戦争国事犯の収容などを目的として宮城集治監が設置され、中心には通称「六角塔」と呼ばれた木造の放射状倉庫が建設された。明治36年（1903）に宮城集治監は宮城監獄と改称され、さらに大正11年（1922）には宮城刑務所となり現在にいたっている。内部の施設は幾度か改修されたが、中心施設である六角塔は昭和40年代まで存続した後解体された。また養種園遺跡の名にある「養種園」は伊達家当主であった伊達邦宗が東北地方の農業振興などを目的として明治33年（1900）にこの地に開設した農園で、昭和に入り仙台市営の施設となつたが、平成元年（1989）に閉園した。

第3節 若林城の概要

〔若林城造営以前〕

若林城が所在した宮城郡小泉村には、若林城が造営される以前に二つの平城が存在しており、双方とも南北朝時代以降にこの地域で勢力を拡大した国分氏に関わる城とされている（注1）。室町時代から戦国時代にかけて、山形県南部や福島県北部を本領としていた伊達氏の勢力が県内の名取郡や宮城郡地域に及ぶようになると、国分氏は伊達氏の麾下に組み込まれる。この後、天正年間に起こった跡目争いによる内紛で国分氏は滅亡し、現在の仙台市域を中心とした国分領は伊達氏の直接的支配を受けることとなる。その際、伊達政宗は「国分」とした地に使者を派遣していることから、この地には国分氏の拠点的な城が存在したと考えられている。しかし「仙台古城書上」にみえる二つの城がこれらに該当するかは定かでなく、若林城がかつての国分氏の城跡に築かれたとする記録もあるが、確証を得ない（注2）。

若林城跡に隣接し、市内でも有数の規模を誇る南小泉遺跡の発掘調査では、周囲に堀を巡らした城館や館跡が複数発見されている。しかしこれらもまた確認した堀跡や建物跡、陶磁器などの出土遺物に対し推定される存続年代や規模等の点において国分氏の城に比定するのは難しい現状にある。

平成3年に調査が開始された養種園遺跡では、若林区文化センター建設予定地と都市計画街路「南小泉茂庭線」建設予定地において、15世紀末から17世紀初めにかけての複数の掘立柱建物跡や、それらを区画する溝跡が確認された。これらは若林城造営以前の遺構であるにもかかわらず、城および城下の軸線方向とほぼ一致する方向性を持つとされる。のことから現在まで残るとされる若林城の町割りは、戦国期にこの地にあった国分氏の居城や城下の地割を踏襲しているとの考えもある（注3）。出土遺物には陶磁器のほか、金を溶解した坩埚などもあり、かつての国分城下には金加工に携わった工人もいたことが考えられている。平成10年から調査された養種園遺跡の街路西部の調査では、室町時代後半とみられる3棟の掘立柱建物跡や防御的な堀跡に加え、鍛冶炉跡や墓跡などが確認された。またその西側の保春院前遺跡からは鉄鍋の鋳型とみられるものも出土しており、当時の生産活動の一端を窺うことができると共に、国分氏にかかわる城下の存在があらためて想定されることとなった。

慶長7年（1602）に仙台城はおおよそその完成をみた（注4）。政宗は仙台城近くの「花壇屋敷」（注5）や「下屋敷」（注6）に度々出かけている。政宗はこれらの施設において日常生活以外にも、家臣や幕府要人への饗宴を行い、ここで政務を執るなど、両施設は政宗の私的な場であると共に、仙台城本丸がもつ機能を補完した施設と考えられている。それを裏付けるように、若林城が政宗の新たな居所となると、これらの屋敷は記録にみえなくなることから、両屋敷の機能は若林城に移ったものと考えられている。

寛永3年（1626）、政宗は外様大名としては最高位の権中納言に昇進すると同時に、二代忠宗も右近衛権少将となり、幕藩体制における一大名の地位を得る。政宗が生前に忠宗に藩主の座を譲り、隠居の形をとることは無かったが、徳川家康にみるような大御所的立場となり、依然として藩の政務を執ったことが知られている。両者は参勤により交代で江戸に詰めることとなるが、在国中、政宗は仙台城を忠宗に譲り、新たな居所を求めることがとなった。寛永2年（1625）に政宗が若林の地を視察したことは、この新たな屋敷造営の下見ともみられている。この地は古くは北に国分寺や国分尼寺が建立され、中世には幹線道路である奥大道が南北に横断し、その周囲には城館や町場が形成されるなど、かねてより当地域の文化・交通の要衝であり、このことが新たな城と城下を造る上で下地となつたとみられる。

〔若林城の造営と城内外の様子〕

寛永4年（1627）2月、幕府より政宗に宛て、新たな屋敷の造営を許可する老中奉書が出された（注7）。これが「若林城」の普請許可で、城の名の初見でもある。元和の一国一城令のもと、幕府に対し政宗は表向きは若林城を「屋

敷」としたが、政宗自身は当初からこれを「城」と称していたものとみられ（注8）、当時、領国に城にも匹敵する新たな「屋敷」を築くことに対し、幕府は「心之儘可有普請」としており、その寛大な内容に当時の政宗の特別な立場を窺うことができる。

城の普請中、大雨で城北側の土居が破損した際には葺の敷き方や調達方法、人足の集め方など、政宗は詳細な指示を自ら重臣に出している（注9）。そして普請開始から一年半後の寛永5年（1628）11月に、政宗は完成した若林城に入り、移築の儀を催している（注10）。

若林城に関する当時の城内の様子を表した絵図の類は一切残っておらず、城内の様子は幾つかの文書により僅かに知るのみである。政宗が城普請にあたっての指示内容を記した『若林普請覚』の中で、若林城に関する内容とみられるものには、「御山里石かき仕候事」、「南西どて仕候事」、「御地形并御庭たいらめ申事」、「南之丸へ御入水とり申事」、「御城御門前あく水おとし樋仕候事」、「御山里御まとばつき可申事」などがある。このことから城内には「山里」や「南之丸」と称される区画が存在していたことがわかる（注11）。また一方では、城下とその周辺での架橋や、水運関係施設の整備など、仙台城下と一緒にした交通や流通網、さらに水路等の整備に重点を置いていることが見て取れる。『貞山公治家記録』に、政宗が幾度も能を催し、幕府役人を要応したとされ、度々記録にみられる「西曲輪」は、これまで仙台城の施設と考えられてきたが、現在この曲輪は若林城の一角にあったと考えられている（注12）。

後世に書かれた『東奥老士夜話』には、城の東南角には「矢倉」があり、北に庭園に伴う「築山」があったとしているが、現況では確認できない（注13）。また廃城後に四代藩主 伊達綱村により城の北方約500mのところに造られた「国分小泉屋敷」は、若林城の「出曲輪」に造られたとの記録もある（注14）。

現在、城内の東側には、政宗が文禄の役（1593）で渡海した際に持ち帰ったとされる「朝鮮ウメ」（=臥竜梅 国指定天然記念物）が毎年花を咲かせている。梅は廃城後の絵図にもはは現在の位置に描かれており、この樹木が植えられた場所は、城内でも特別な区画であったと推定される。

在国中の政宗はこの若林城を日常の居所とし、仙台城には正月などの公的行事の際に赴くのみであった。また領内各所への巡察の他、鹿鳴・川原の際も若林城から出かけており、これは忠宗が江戸参勤で仙台を留守にする際も変わらず、政宗の江戸参勤もまた、毎回若林城から出立しているほどである（注15）。

城の造営と同時に、周辺には新たに侍屋敷や町屋敷が割出され、多くの家臣や商人が居を構えたとされる（注16）。城下の範囲としては、西は仙台城下を境とし、東は遠見塚古墳付近までの東西に長い範囲と考えられる（注17）。現在の若林城跡周辺の町並みは、城跡の軸線方向と一致していることからも、新たな城下はあくまでも城の造営に合わせて計画的に造られたものと考えられる。城下には文書から確認できる「米町」や「紺布町」以外にも多くの町が存在していたと考えられる。また若林城下には仙台城下とは別に「若林町奉行」も置かれていたことがわかっている（注18）。

政宗の死去後の寛永13年（1636）12月に、藩政の基本となる領内検地帳を収めた「若林御帳藏」が火災にあい、慶長の検地帳が焼失している（注19）。御帳藏が城の何処にあったかは不明であるが、このような重要施設の存在はこの城や城下が単に隠居屋敷と呼ばれる私的なものではなく、藩主の居城であると共に仙台藩の行政庁として、仙台城の機能の一部を担っていたことを裏付けるものといえる。

【若林城の廃城と仙台城二の丸への移築】

寛永13年4月、政宗は江戸参勤のために若林城を出立した際、城の南西に杉を植え、堀一重を残し城は廃するよう命じ、同年5月に江戸でこの世を去った（注20）。若林城内の建物については、政宗の死後暫くは残されたが、『義山公治家記録』によると、建物の一部は寛永15年（1638）に造営が開始された仙台城二の丸の殿舎として順次移築されている。寛永15年12月には、焼火間、虎間、納戸、茶道部屋、鋪間、上台所、風呂屋、大台所、小姓間、御用間、

看部屋、鷹部屋、算用屋と、数多くの建物が上棟されている。以上の建物は二の丸での呼称だが、これらはみな若林城の建物であったとしている（注21）。これ以後も二の丸では主要な建物の上棟が続いている（注22）。完成後あまり時を経ない時期の二の丸殿舎の姿を描いたとされる「御二之丸御指図」には、治家記録で若林城から移築したとされる建物と同名のものが數棟描かれており（注23）、第5次・8次・9次調査では焼火間、上台所、大台所と考えられる礎石建物跡が確認されている。また若林城の建物は仙台城下の寺院や家臣屋敷などにも移築とされ、片平丁にあった重臣の茂庭家の屋敷門は若林城の門であり、幕府役人や他藩の大名などの宿泊にあてた大町外人屋の御用を務めた泉屋庄右衛門の屋敷は黒書院を拝領したものとの記録がある（注24）。また若林区新寺の松音寺山門や政宗の靈廟瑞鳳殿の脇にある御供所もまた城の門や書院を移築したものとされているが、記録では確認できない。移築に際しては「若林御家搬方」や「古材木受取渡方」という役職の者が関わっており、大掛かりな作業であったことが窺える。

政宗の遺命通り、廃城と共に若林城下も解体されていく。城下西側の町人町や足軽町については仙台城下に組み入れられることで、その南東範囲が拡大することとなったが、城周辺の家臣屋敷や町人町は廃され、田畠となつたとみられる。このため城跡を含む周辺一帯は在郷部として小泉村に組込まれ、仙台城下からも切り離された場所となっていく。

若林城の廃城はこの城が藩主の居所であっても、あくまでも仙台城の機能を補完するもので、かつ政宗が晩年を過ごした私的な性格を併せ持った城郭であったゆえとの見方もできる。それは政宗亡き後、藩主となった忠宗が手狭になった仙台城本丸に代わる新たな藩庁として、二の丸造営に着手したことにも現れているといえる。

【若林城のその後】

延宝8年（1680）に四代藩主 紗村が「若林薬園」に出かけたとの記録がある（注25）。薬園は藩の管理下にあつた施設の図面をまとめた『御修復帳』に城全体が描かれており、廃城から約40年後にはこの地が藩宮の薬草園となつていたことが窺える。これとは別に貞享4年（1687）には「若林」の焰硝蔵が爆発し、多くの鉄砲薬が消失すると共に、人足8人が死亡した記録がある（注26）。

若林城を描いた絵図の類は幾つか残されている。しかしそれらは全て廃城後の姿を描いたものであり（注27）、かつての城内の建物や、城下の状況を示すものは全く存在しない。城下絵図において最も古いとされる『奥州仙台城絵図』（正保絵図）以来、その描かれる範囲が若林城跡まで及ぶことは無かったが、寛保2年（1742）に「古城」が小泉村分から仙台城下に組み込まれてからは、その姿が描かれる。そのような中でも最も古いとされる『仙台城下絵図』宝曆7年から明和3年（1757～1766）には城跡は「古御城」と記され、城下絵図のため詳細を記録したものではないが、外郭の形状は現在とはほぼ同じである。城内には広瀬川から導水した六郷堀が分岐されて流し入れられ、東口より再び城外に出ている。天明6年から寛政元年（1786～1789）の城下絵図では南西隅部張出しの形状に違いが認められるが、これは以前の絵図を書きした際の誤りとみられ、改修によるものでは無いと考えられる。

城下絵図以外にも城跡自体を描いた絵図が複数存在している。「御修復帳」所収の「若林御薬園」や「若林古御城」は、堀や土塁などが規格化された描き方で、同様に南西隅部の形状が現況と異なっているが、現在は埋められた外郭の堀や水路と失われた土塁の配置がわかる貴重な資料である（注28）。城内をみると、北西側には東西棟の建物が1棟あるほか、城内に引き込まれた六郷堀の一部や通路がみられる（注29）。また土塁頂部には堀を巡らせていたことがわかる。さらに南側中央には雲形の不整形プランが描かれ、これに通路が取り付いている。このプランはその形状や位置からみて大規模な「池」だった可能性があり、若林城造営時に造られた苑池の可能性が高い。池の西側には中島とみられるものや、東端には東門に向かい排水路らしきものも描かれている。池は絵図を見る限り、東西が100m程度と推定されるその規模の大きさから、廃城の際にも埋められることなく、薬園内での貯水施設等として近世を通じ機能しながらその形状を留めていた可能性がある（注30）。

『古御城絵図』（製作年代不明）もまた薬園の様子を描いた絵図である。外郭の基本形や構造は先と同様であるが、3か所にある内枡形土塁の形状や規模に違いがみられる。しかしこれもまた改修等に起因するものではないとみられる反面、建物の規模や部屋の配置が多少異なるのは改修の結果とみられる。加えて西口や建物周辺には堀や井戸、杉や竹による生垣が配置され、中央部には杉や檜を植えていたことがわかる（注31）。また城の西口部分には「大手前」の記載があり、施設の正面は西側のまま変化が無かったとみられる。

その他の文献には、堀に流れる水を農業用水に用いるために堀を改修したことや（注32）、藩主や役人が薬園を視察したことなどがみられる（注33）。他、城内への立ち入りを禁止する立札が立てられる（注34）など、そこにつけての城の姿はみられない。

明治12年（1879）、城跡に西南戦争国事犯の収容を目的として宮城集治監が設置される。ほぼこの時期に撮影された写真（注35）には、現在より高かったとみられる土塁上に木柵が設置され、大手口脇の堀がまだ埋められていない状況や、六郷堀から分岐した水を流すために枡形土塁の下に埋設した管を見ることができる。しかし若林城はこれ以降、現在に至るまで外界と隔離された空間となる。

【現在の若林城】

現在ある若林城は東西に長い長方形を基本に、四方に張出しを持った典型的な近世平城である（注36）。城の南北軸線は東に約11°傾いており、現在の周辺の道路や町並もまた同様の方向をみせている。堀跡を含む城の規模は東西420m、南北350m、城内での土塁法尻での規模は東西250m、南北200mと、単一の中心郭としては広大な面積を有し、これは仙台城本丸や若林城廃絶後に造営される二の丸の規模に匹敵している（注37）。

外郭線は全て土塁で構築され、全体に土塁法面は外側に比べ内側がやや急な傾斜となっている。現況で石垣は全く確認できないものの、かつては門周辺などの一部に築かれていたことも十分考えられる。現存する土塁の高さは5m程度で、基底幅は約25mある（注38）。またかつての城門にあたる現在の三つの門周辺は大きく改変されているが、それ以外の部分はほぼ往時の姿を留めているものとみられる。

周囲の堀は戦後の刑務所庁舎や住宅建設等に伴い、北及び西側が完全に埋め立てられたが（注39）、南側や東側部分は25m程度の幅が約1mの窪みとして残っており、遺存状態は良好といえる（注40）。『伊達秘鑑』には堀に水を湛えたとあるほか、寛保元年（1741）の『獅山公家記録』には水不足の際は南側と北側の堀の水を用水とするとあり、城を巡る堀跡は造営当初から水堀で、廃城後、堀は貯水施設となりながらもその状態を止めていたものと考えられる。

張出しは堀線の西辺北端部と南端部、東辺北端部、南辺中央部の4か所に配置され、他所と同様の幅をもった土塁の屈曲のみで構成されており、ここに櫓台などを思わせる平場等の表面遺構は確認できない。しかし張出しの存在はこの城が単なる屋敷とは異なり、戦の際の防御機能を備えていたことを推察させるものである。張出しの規模は西辺南端部がやや小さい他は長辺側の内法尻幅が90mの規模がある。

城の門はかつて南辺を除く三方の各中央に設置されていた。現在は土塁が幅十数m程度途切れている以外、かつての門を思わせるような遺構は見当たらない。西側から城内に入ると正面には鉤型に折れる内枡形土塁が配置され、城の北側に誘導される。枡形土塁は高さ2mと低く、入口ゆえに後世に形状が改変されている可能性が高い。かつては北側や東側にも同様の土塁があったことが廃城後に描かれた幾つかの絵図により確認できるが、これらは集治監設置の際に撤去されたと考えられる。さらに絵図では西側の枡形土塁がひときわ大きく描かれているものがある。『木村宇右衛門覚書』には、大手は西であったとしており、この事から若林城の大手口は仙台城や奥州街道と相対する西側にあり、この枡形土塁や西面する二つの張出しが、防御上、城の正面を意識した配置と推察される。

城内への入城路は現在東側が土橋状の通路となっているが、これが本来の構造かは不明である。しかし近年、大手側の外で実施した試掘調査では堀の痕跡は確認できず、三方の入口には絵図から窺えるように土橋が取り付いて

いたものと考えられる（注41）。

現在、城西側の広瀬川上流側から取水した水を東の平野部へ流す六郷堀が城北側の土塁裾に沿って東流している。六郷堀はその開削時期が不明であり、寛文9年（1669）の城下絵図が初見であるがさらに遡る可能性がある用水堀である。絵図が描かれた当時、六郷堀の水は城の堀に入れられると共にその一部は城内にも水路で引かれており、六郷堀と若林城の位置関係や大規模な堀への導水を考えた場合、六郷堀の開削は若林城とその城下の造営と大きく関わっていることも十分予想される（注42）。

注

- 注1 17世紀後半に仙台領内の古城を記録した『仙台古城書上』には、一方は規模が東西40間、南北38間で、城主は国分能登守であり、もう一方は東西58間、南北38間で、堀江伊勢や国分氏最後の当主である国分盛重が居住したとされる。
- 注2 元禄・享保年間（1688～1736）に書かれたとされる『東奥老士夜話』には「若林御城国分殿古館」とある。
- 注3 「養種園遺跡」（1997）佐藤洋氏による。
- 注4 後に仙台城の中核となる二の丸は、政宗の死去後の寛永15（1638）年に二代藩主忠宗により造営されたもので、政宗の時代はあくまでも本丸が中心であった。
- 注5 『正保絵図』などには「仮屋」と記され、享保年間の『仙台御城覚書』には、「花壇仮屋、東西五十間、南北四十八間」とある。また『御修復帳』にみえる建物は、周囲を垣が廻り、複数の番所を配置し、「広間」とある前面の建物の奥に、床間を備えた部屋をもつ「寝所」や「大所」等の建物がみられる。その規模や各部屋の配置は簡潔ながらも藩主の御殿とも成りえる建物群といえる。
- 注6 仙台市博物館建設に伴う三の丸跡の調査において、16世紀初め頃の庭園や茶室等の遺構が確認されており、ここが政宗による山上の本丸に対する「下屋敷」と推定されている。
- 注7 正式には「土井利勝外三名連署奉書」で、新造する屋敷は「仙台屋敷構」とされている。
- 注8 『若林普請覚』には「御城御門」とあり、以後の藩内の文書や絵図においても「若林城」や「御城」・「古城」などと記されている。
- 注9 『政宗君記録引証記』による。城の堀は主にかつての河川跡などの軟弱な場所に配置されたとみられ、普請は難航したことがわかる。
- 注10 『貞山公治家記録』による。
- 注11 「山里」は城内の奥側にある庭園を伴った私的な空間とみられ、「石垣」が築かれていたことや、「的場」があったことが窺える。山里南西側の「どて」とは現在ある土塁を指すのかは不明である。さらに「南之丸」に水を引き入れたとの記述は、曲輪などの広い空間にあった庭園の存在も推定される。「御城御門前あく水おとし櫓」は、城門前の排水施設に関してのこととみられ、城の立地や堀との関係から考えると、普請にあたっては水の引き方や処理が大きな問題であったと考えられる。
- 注12 伊達成実による『政宗記』には、政宗が「若林の西櫛輪」で能を催したとあり、また政宗の小姓による『木村宇右衛門覚書』には、政宗が若林城の「にしくるわ」という出丸（=曲輪）に屋敷を構えたとある。この曲輪が城のどこにあったかは不明であるが、他に城の中心らしき郭の記載が全くみられないことから、城内でも重要な場所であったことがうかがえる。
- 注13 現在残る城跡は、その形状や配置から一回りの土塁と堀に囲まれた単一の郭との認識が強いが、『若林普請覚』の記載も含め、記録にある名称をもった城の施設が全て現在の城跡内の様子であったかは不明である。
- 注14 この屋敷は二代藩主 忠宗が別荘（仮屋）として造ったものが始まりで（『封内風土記』）、ここに火薬を置い

たとある。18世紀中頃の『節翁古談』には、「只今之小泉屋敷ハ昔古御城之曲輪有之」、「御城之出曲輪御再興と相見得」とある。養種園遺跡の発掘調査では文政9年（1826）年に描かれた『国分小泉御屋敷御絵図』にみえる屋敷を囲む堀や大規模な池などを確認している。

注15 『貞山公治家記録』等による。

注16 『伊達秘鑑』は家臣の中には若林と仙台の両方に屋敷を構える者や、父子で分かれて居住する者もあったとし、その間の通りは通行が絶えなかつたとしている。『木村宇右衛門覚書』には伊達成実の「若はやしの屋敷」が新築され、そこには書院、舞台、数寄屋などもあったことがわかるが、『治家記録』にはこの屋敷が寛永11年の出火で全焼し、同時に看守も頼焼したとある。

注17 『仙台鹿の子』には若林城下の範囲を、「東南は野を限り、西は土橋東脇毘沙門堂通町切、北は三百人町切なり」とあり、仙台城下と接する西および北側については、範囲が決められていたことがわかる。

注18 『石母田家文書』による。

注19 『義山公治家記録』には「若林御櫻藏」とあるが、城内での発掘調査においては、確認した建物跡が火災にあつた痕跡は確認できず、蔵は現在の城の外側に配置された曲輪か城下に置かれた可能性が高い。

注20 『貞山公治家記録』にある、「回リノ堀一重ハ残置キ、外ハ皆故ノ田畠トスヘキ由仰付ラル。」の文言は、若林城が現在の範囲に止まらず、城城のさらなる広がりを憶測させるものとなっている。

注21 『義山公治家記録』にはこれらの建物に対し、「右御作事、若林屋形ヲ解体シ用イラル」とある。

注22 同記録の寛永十六年三月二十八日条には、「仙台二ノ丸御座間・御寝所・奥方御寝所上棟。」とあり、また同年六月二十五日の二ノ丸への御移徙を経た十二月二十日条には、「去ル五月二十六日ヨリ今日マテ、御蔵・大手御門・大書院・大広間・舞台・御歩行間、上棟アリ。」とある。しかしこれら二度の記事にみえる建物については若林城のものとは記されていない。

注23 指図は1間を一目盛とした方眼上に、二の丸殿舎の建物を個別に貼り付けたもので、各建物には部屋名や柱位置のほか、建具等の記載もある。佐藤巧氏は指図にある建物は天和から元禄期以降に行なわれた二の丸大改造後の建物に比べ単純な構成をみせ、初期二の丸御殿の特徴を示すとしている。また指図には、焼火間、虎間、上台所、大台所など、寛永15年の『義山公治家記録』にあり若林城から移したとされる主要な建物も描かれている。

注24 『茂庭家記録』・『仙府明石屋資料』による。

注25 『肯山公治家記録』にみえ、「薬園」の初見であるが、その設置時期は不明である。また『木村宇右衛門覚書』には、かつて政宗が「若林の城ハ忠宗公の居所になる所にてなし、家とも取ほこし後ハやくゑんなとしたるよし」と話したとあるが、これに従えば、政宗の死後間もなく薬園となったことも推測される。

注26 『肯山公治家記録』には、「若林傭硝藏」とあり、後世に若林城が「古城」や「古御城」、さらに「下屋敷」と呼ばれたことを考慮すると、蔵は当時、「若林」とよばれた小泉村の旧若林城下にあったものと考えられる。またこれまでの発掘調査では、この爆発に伴うとみられる痕跡等は全く確認できない。

注27 各絵図の年代を考えると、そのほとんどは城跡の外郭と共に内部に設置された御薬園の施設を描いたものである。

注28 『御修復帳』所収の「若林御薬園」は宝曆から安永頃、「若林古御城」は文化文政頃のものとされている。

注29 建物は柱配置からみて東西9間、南北2間半程度とみられるもので、内部は幾つかの部屋に仕切られ、縁が付属している。建物の性格としては薬園の管理及び作業施設と考えられる。また堀の幅や深さは明らかでないが、これらの絵図には描かれない水路跡が第5次調査と第6次調査で確認されており、絵図にある堀はこれらに比べ大規模で、石組により護岸されたものと考えられる。

- 注30 平成16年度の試掘調査では、このプランの内部とみられる地区で植物遺体を含む厚く堆積した水性堆積土壤を確認している。また第6次調査では、プラン東端とみられる法面を広範囲に確認しており、その内部には廃城後に営まれた近世の畑の耕作土が流入している。
- 注31 『御修復帳』図に描かれた池らしきものは描かれないと、これは単に省略されたものと推察される。
- 注32 『獅山公治家記録』等には、堀に水門を設置し、田の水不足の際に用水として用いたことが見える。
- 注33 『忠山公治家記録』等には、元文～寛延年間に松田平蔵という役人が菜園守として菜園に詰めており、人参が主要な栽培作物であったことがわかる。
- 注34 『仙台名所聞書』による。
- 注35 宮城集治監設置後間もない撮影とみられ、城跡を撮影した最も古い写真である。
- 注36 城の現況と廃城後の絵図に描かれた姿はほとんど変化が無く、後世に大きく改変された痕跡は無い。
- 注37 この規模は同じ平城の中でも藩政時代、大名の居城であった山形城や米沢城の本丸規模を上回るものである。
- 注38 現在の土壘頂部は昭和53年の宮城県沖地震で倒壊した煉瓦塀に代わり設置されたコンクリート塀を設置する際に大きく削られ、上端幅が広くなっているとみられる。
- 注39 施設の建設に伴い、城内への導水は廃止され、水路は全て埋められたとみられる。堀もまた官舎建設等により埋められるのに伴い、現在のような水路として整備されたとみられるが、詳しい時期は不明である。
- 注40 伊達成実による『政宗記』には、土壘の高さが二丈（約6m）余り、堀幅が30間（約60m）とあるが、現在確認できる城周囲の堀幅とは相違しており、記録がこの場所を指すものか不明である。
- 注41 御菜園の絵図等にあるように、土橋部分では細い水路で両側の堀を繋ぎ、短い橋が架けられていたとみられる。
- 注42 『伊達便覧志』には政宗が若林城を造営する際、「廣瀬の川流をせき入れて、城溝にそそぎ其要害を固くせり。」としている。

第3章 調査の概要

第1節 これまでの調査

若林城跡の発掘調査はこれまで第1次調査から第15次調査が実施されており、このうち平成16年度の第4次調査以降の調査は、宮城刑務所全体改築にかかる処遇管理棟、仮設職業訓練棟、炊場棟、作業倉庫棟、そして今回報告する北収容棟の各施設建設等に伴う一連の調査である。

平成16年度、事前に実施した城内16か所での試掘調査の結果をもとに、処遇管理棟と炊場棟建設予定地内に設定した2か所の調査区と3か所の試掘区において、多数の円礫を充填した建物の礎石跡や石組溝跡、石敷造構などを広範囲に確認した。これら的一部の礎石跡については、明治11年（1878）に建設された房舎（六角塔）の基礎に壊されていることから、この礎石跡は近世の遺構と断定された。さらに礎石跡の柱間が、江戸時代初期の基準である1間が6尺5寸と判断されたことから、これら礎石跡により構成される何らかの建物跡は、寛永年間に造営された若林城に関係するものと判断するにいたった。

第1次調査（昭和59年11月16日～11月17日 43m²）

宮城県教育委員会と合同で実施した第1次調査地は城内の南東部に位置し、調査面積が狭いながらも中世から近世とみられる掘立柱建物跡1棟のはか、柱穴の可能性のあるビット群を確認し、一部の遺構については若林城に関わる遺構群の可能性が指摘された。

第2次調査（昭和60年7月2日～8月7日 1,423m²）

第1次調査区の北側に位置し、調査面積が1,423m²と広範囲にわたる調査を実施した。5世紀後半から6世紀初め頃の円墳1基、平安時代の竪穴住居跡4軒のはか堅穴造構や土坑などを確認した。また近世の遺構としては近世瓦がまとまって出土した土坑があり、この遺構が唯一若林城に関係するものと推定された。しかし第1次、第2次調査区のある城跡南東地区においては、造営に伴う整地層や廃城後の畠耕作土層などは確認できず、城の遺構は明治以来、城内の度重なる改変により既に失われていることが示唆され、その認識は以後20年近くも続くこととなった。

第3次調査（平成11年8月23日～10月26日 370m²）

城北側の都市計画道路拡幅工事に伴う城外での調査を実施した。調査地は若林城北西部にある土壘と堀跡の「張出し」北側に位置し、調査では城北辺の堀跡北岸を確認したほか、東側では堀線に沿い南側に折れる堀跡の屈曲部を確認した。この調査では堀幅が明らかとなると共に、堀の形状が若林城廃城後に描かれた幾つかの絵図とはほぼ一致することが判明した。しかし調査区の制約から、堀の深さや断面形状などは不明で、遺物も上層部から出土した近現代のものがほとんどであった。

第4次調査（平成16年9月6日～11月5日 380m²）

宮城刑務所全体改築計画に伴う最初の調査である。この調査では調査前に行った試掘調査の結果をもとに調査区を設定し、多数の円礫を充填した建物の礎石跡や石敷造構などを広範囲に確認した。これら的一部の礎石跡については明治11年（1878）に宮城集治監設置に伴い建設された房舎（六角塔）の基礎に壊されていることから、この建物跡が若林城に伴うものと判断するにいたった。

第5次調査（平成17年5月23日～平成18年1月31日 1,990m²）

処遇管理棟の調査である。調査では大規模に土盛りされた整地土上から、多数の礎石跡により構成された大小4棟の建物跡のはか、これら建物群の西側正面や周囲に広範囲に敷設された石敷造構や、各建物の外縁に巡らした雨落ち溝跡などを多数確認した。建物跡は全体規模や柱配置からみた構造に加え、周辺施設の配置状況などから、城の中心とも言うべき表御殿の建物群と推定されるに至り、この発見により、明治以降、刑務所内での度重なる改変

により失われたとみられてきた若林城の遺構が、良好かつ広範囲に残存していることが初めて明らかとなった。さらに1号建物跡と3号建物跡については、形状や規模、柱配置などの構造が、近世初期の仙台城二の丸を描いた「御二之丸御指図」にみられる「大台所」と「焼火之間」と酷似することから、文献に記述される通り、廃城後にこれらの建物が二の丸へ移築されたと推定されるにいたった。またこれらの建物遺構を含む多くの若林城の遺構を壊す形で、廃城後に城内で営まれた「御菴園」に伴うとみられる烟の痕跡をほぼ全城で確認した。

第6次調査（平成18年3月13日～4月2日 450m²）

仮設職業訓練棟の調査である。調査対象地は第2次調査区の南側に位置し、平安時代を中心とした竪穴住居跡や近世の烟跡を確認したが、明瞭な若林城の遺構は確認できなかった。しかしながら西側に広がる人工的に掘られたとみられる落ち込みについては、後世の御菴園を描いた絵図の観察から、若林城内に存在した大規模な池跡の可能性が高い。さらに東西方向の大規模な石組み水路跡は、第5次調査で確認した水路跡同様に、この池に接続する排水施設とみられ、これらのことから、かつての城内の南側全体には池を作った大規模な庭園が存在した可能性が指摘された。

第7次調査（平成18年3月13日～4月2日 175m²）

第5次調査区の北東部に近接した場所の確認調査である。調査では礎石建物跡1棟や、その南側に展開する石組溝跡のほか、周間に石列を配し石敷が附属した小規模な池跡を確認した。池跡は建物に囲まれた中庭的空间に造られた施設と推定され、これらのことから、かつての城内が建物のみならず、様々な施設や空間により構成されていることが明らかとなった。なお第7次調査区の北側は今回の調査対象である第14次調査区と接しており、この調査で確認した建物跡の続きを確認している。

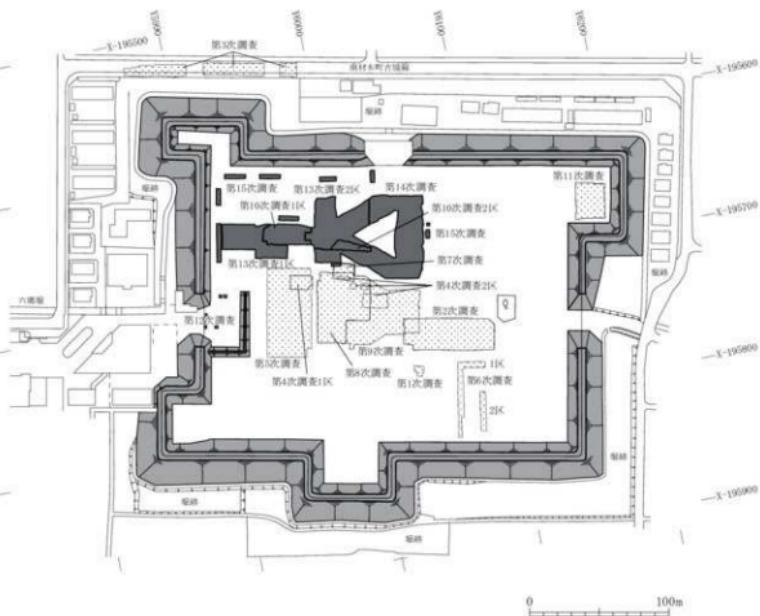
第8次調査（平成19年5月14日～12月21日 1,600m²）

第9次調査（平成20年5月23日～12月15日 1,534m²）

炊場棟の調査である。第8次調査では第5次調査で確認した台所建物と推定される1号建物跡や、内部の部屋配置から表御殿の中でも最も格式の高い建物と推定される2号建物跡の東側部分を確認し、これらの建物の規模が確定した。第9次調査ではこれまでの調査では最大規模となる9号建物跡や、土間を伴った特殊な構造をもつ6号建物跡や7号建物跡を確認した。これらの調査により、城の中心部分には表御殿となる大型の礎石建物が整然と建ち並んでいたことが判明した。各建物周囲には水路を兼ねた雨落ち溝が巡らされ、建物間には形状や構造が異なる特徴的な池が複数配置されていたことを確認した。さらに六郷堀から分岐した水路から導水された水を注ぐため、地下に埋設された樋跡を確認した。表御殿の北東側は大規模な堀跡で区画され、表御殿以外の建物の存在が推定された。

第11次調査（平成22年6月11日～9月17日 594m²）

作業倉庫棟の調査である。調査の結果、張り出しの入り口部分を仕切るために堀跡や城内に出た日常のゴミを捨てた大型の廃棄土坑を確認した。土坑は土取り穴を兼ねており、土を採取した後、生活用品である陶磁器や鉄製品の他、城内での儀式などに使用したとみられるかわらけ、さらに焼塩壺などが廃棄されたと考えられる。中でも器形や文様が極めて特徴的な弥七田窯の織部皿は、全国でもこれまで3例しか確認されていない貴重なものである。



第5図 これまでの調査区位置

第1表 これまでの調査

調査次数	調査理由	調査面積	調査期間	所収報告書
第1次	宮城刑務所講堂建設	43m ²	昭和59年11月16日～11月17日	仙台市文化財調査報告書第83集
第2次	宮城刑務所職業訓練棟建設	1,423m ²	昭和60年 7月 2日～ 8月 7日	仙台市文化財調査報告書第90集
第3次	都市計画道路「南木本町-古城線」建設	370m ²	平成11年 8月23日～10月26日	仙台市文化財調査報告書第256集
第4次	全体改築(処遇管理棟・炊事棟建設)	380m ²	平成16年 9月 6日～11月 5日	仙台市文化財調査報告書第292集
第5次	全体改築(処遇管理棟建設)	1,990m ²	平成17年 5月23日～平成18年 1月31日	仙台市文化財調査報告書第323集
第6次	全体改築(仮設職業訓練棟建設)	450m ²	平成18年 3月13日～ 4月 2日	仙台市文化財調査報告書第306集
第7次	遺構確認(国庫補助)	175m ²	平成18年 6月 1日～ 7月 7日	
第8次	全体改築(炊事棟建設1年次)	1,600m ²	平成19年 5月14日～12月21日	仙台市文化財調査報告書第377集
第9次	全体改築(炊事棟建設2年次)	1,534m ²	平成20年 6月 2日～12月15日	仙台市文化財調査報告書第383集
第11次	全体改築(作業製品倉庫棟建設)	594m ²	平成22年 6月11日～ 9月17日	仙台市文化財調査報告書第383集

※第4次調査以降、平成16年度から開始した宮城刑務所全体改築にかかる調査

第2節 調査の対象と方法

(1) 調査の対象

第10次・第12～15次調査は宮城刑務所の全体改築に伴う発掘調査である。若林城跡における発掘調査は過去に10回実施されており、そのうち全体改築に伴う調査は7回実施している。今回対象とした場所は第10次・第13～15次が北収容棟及び外構建設予定地、第12次調査が第二正門改築地点の柱部分である。調査予定地周辺には既設の刑務所施設が残っており、その解体・撤去の進行状況に合わせて調査を実施した。また、建物基礎などにより調査できない地点もあつたが、予定建物内部の空間地についても調査を行った。第10次・第12次～15次を合計した調査面積は5,327m²である。

(2) 調査の方法

重機掘削作業はバックホーで表土層（Ⅰ層）と近代以降の整地層（Ⅱ層）の除去を行い、近現代の擾乱と判断した部分についても可能な限りバックホーで掘削した。また宮城集治監の六角塔基礎についても作業の効率性と安全性を考慮しバックホーで除去した。バックホーによる掘削後、人力により小規模擾乱の掘削と壁面整形、Ⅱ層残存土の除去を行い、同時に近世耕作土（Ⅲ層）での遺構検出を行った。Ⅲ層上面では石敷・土坑などの確認と掘込み、記録を行った後、Ⅲ層の掘削と並行して遺物の取り上げを行った。掘削・記録作業が終了した部分については、若林城期の整地層（Ⅳ層）まで掘り下げて遺構検出を行った。Ⅳ層上面では近世の小溝状遺構群や溝跡、土坑等の若林城廃城後の遺構と共に、若林城に関わる遺構を多数検出した。小溝状遺構群については、Ⅳ層上面での検出ではあるがⅢ層に属する遺構であることから、先行して調査を進めた。また、若林城期遺構との重複関係がある若林城以後の遺構と判断した溝跡や土坑についても先行して調査を行った。これらの遺構の調査終了後、若林城期遺構の確認作業を行い、作業終了時点でラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を実施した。その後、若林城期遺構の一部について掘込みを実施したが、確認した遺構については保存措置が前提であることから、遺構掘削は後の再調査も視野に入れ、一部にとどめた。遺構の掘込みにあたっては、構造確認のために一部掘り方の断ち割りを行った。また、六脚堀跡をはじめ、多くの遺構については擾乱断面を利用した記録をとるよう極力努めた。さらにⅥ層が露出した地区で確認した下層遺構についても遺構確認にとどめた。

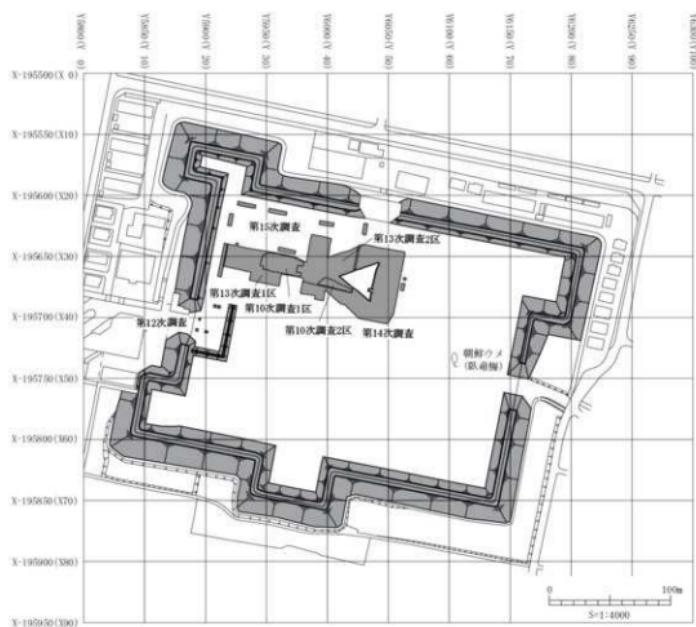
調査終了に際しては、礎石跡や溝跡を構成する裸部分や壁面を保護・保存する目的で、不織布により遺構面を被覆した後、径約5mmの砂鉄により調査区を埋め戻した。さらに建物建設が開始されるまでの間の砂鉄飛散防止や調査区壁面の保護のため、壁面をシートで覆い、土嚢袋で補強した。

遺構の測量は世界測地系平面直角座標第X系に基づき、トータルステーションを用いたデジタル地形測量システムによりデータを取得し、測量計算CADシステム及びCADソフトを用いて図化編集作業を行った。重機掘削終了後には第5次調査の際に設定した世界測地系平面直角座標第X系に基づいた5m間隔のグリッドを表す基準杭を打設し、遺物取り上げの基準とした。ただし平成23年3月11日に発生した東日本大震災により、これら座標値と水準値に変動・誤差が生じたため、第12次～第14次の平面・水準の基準点については、地震前の数値を国土地理院が発表した三角点及び水準点改訂成果の補正パラメータ（平成23年10月31日発表）を使用して数値変換しており、隣接するこれまでの調査で確認した遺構位置等との整合性を計っている。

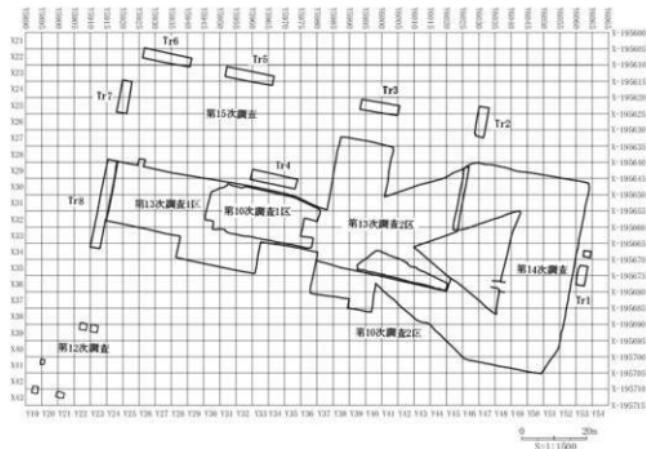
グリッドは東西方向をY軸、南北方向をX軸とし、Y軸は西から東にY1、Y2と、X軸は北から南にX1、X2と付番し、グリッド名称はグリッド北西側の交点名をY1X1のように表記した。

出土した遺物は基本層や擾乱出土のもの、さらに溝跡など広範囲にわたる遺構は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺構内出土遺物は層位ごとに取り上げた。また陶磁器や金属製品などの瓦以外の小数遺物については出土位置を座標により記録した。

第2節 調査の対象と方法



第6図 グリッド設定(全体)



第7図 グリッド設定(第10次・12~15次調査区)

(3) 資料整理の方法

1 出土遺物の整理作業

調査で出土した遺物は繩文土器、土師器、須恵器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、土製品、埴輪、金属製品、石製品など多岐にわたり、基礎整理作業終了時点での数量は第10次・第12次・第13次・第14次・第15次調査を合わせて遺物収納用コンテナで153箱となった。遺物は全て遺物カード台帳およびコンテナ台帳を作成し管理している。

第10次・第13次・第14次調査の資料整理は、各調査時に野外作業と並行して遺物洗浄を行い、野外調査終了後、遺物注記、一部の接合までの基礎整理作業を行った。平成29年度の報告書作成作業では第10次・第13次・第14次調査の残り分の接合、復元、分類・計量を行い、さらに実測・トレースなどを行った。平成30年度も引き続き報告書作成作業として第10次・第13次・第14次調査の報告書用図版の作成、遺物写真撮影と写真図版作成など、報告書作成の最終段階までの各種作業を行った。また平成30年10月に実施した第15次野外調査出土遺物については、野外調査終了後に基礎整理及び報告書作成までの各種作業を行った。

遺物洗浄は陶磁器や瓦など硬質のものは豚毛ブラシを用い、土師器など軟質のものは狸毛ブラシを用いることにより破損や耗耗のないよう注意し行った。洗浄後は十分に自然乾燥させたのち、遺物番号および種別ごとにチャック付きポリエチレン袋に収納し、コンテナ箱に遺構別に収納した。金属製品は錆取り処理を行ったのち、除湿剤（シリカゲル）を入れたポリ袋またはアクリル製ケースに収納した。

注記は遺物の色調に合わせて白色または黒色のポスターカラーを用い、調査次数、遺物番号、遺構名またはグリッド名、細部名、出土層位名を記入して、ニスでコーティング処理を行った。但し概ね3cm以下の小破片遺物については、調査次数、遺物番号のみの注記にとどめ、陶磁器への注記は破断面に行った。また原則として1cm以下の瓦の極小破片、釘などの金属製品、木片、炭化物への注記は行わなかった。

接合は種別ごとに遺構、グリッド、層位間について段階的に行なった。接合には原則としてセルロース系接着剤（セメダインC）を用い、素地が軟質で強化の必要な遺物については接合面にバインダー溶液を塗布して硬化させたのち接着した。復元・補強には復元用素材（エレホン）と骨材としてポリエチレン製樹脂（ブライトン）を用いた。

遺物の分類は種別ごとの分類後に細分類を行い、各遺構、グリッド、層位ごとに数量と重量を計測し集計した。瓦の分類については若林城跡第5次調査及び仙台城本丸跡第1次調査での分類基準を参考にして項目を設けた。

登録は瓦については残存率と分類ごとの出土量を考慮し、報告書への掲載が想定されるものを優先して登録した。須恵器、土師器、土師質土器、石製品については形態と残存率に応じて選別し登録を行った。繩文土器、陶器、磁器、土製品、埴輪、金属製品、石製品については出土点数が瓦に比較して少ないため全て登録した。登録番号は種類ごとに遺物略号を付し、第10次・第12次・第13次・第14次・第15次調査を通して付番した。

登録遺物の中から選別したものの実測図を作成した。実測は原則として手測りで行ったが、陶磁器の文様はデジタルカメラで撮影し、トレース段階で合成国化を行った。遺物トレースはベクタードローイングソフトを用いたデジタルトレースを行い、報告書用の図版はベクターデータ化した上で既刊の報告書に準じた縮尺でレイアウトし作成した。

遺物の写真撮影は35mm一眼レフカメラ、一眼レフデジタルカメラを使用し、人工光源を使用して垂直方向または俯瞰にて撮影を行った。特に瓦の撮影にあたっては成形や調整技法が観察できるように光源調整し撮影した。35mmカメラでの撮影にはモノクロフィルムを使用し、デジタルカメラでの撮影データは1,200万画素以上で撮影したものRAW形式とJPEG形式で保存し使用した。

2 遺構図の編集作業

遺構図は発掘調査後の基礎整理で作成した図面データを基にし、報告書図版に必要となる図面の校正・編集を行った。図面編集は測量計算CADシステム及びCADソフトを使用し、最終的なデータの納品を踏まえ、汎用CADデータ形式であるDXF形式で保存した。個別遺構図、遺物出土状況図等については各層位や遺構種別ごとにデータを細分化し管理できるようにした。また礫を含んだ礎石跡や溝跡等についてはデジタルカメラにより写真測量を行なった後、画像計測システムソフトにより写真補正およびオルソ画像処理を行い、他の遺構図データ同様にCADソフトを用いた図化編集や合成作業を行った。遺構図版は上記のデータをベクタードローイングソフトデータ形式であるAI形式に変換し、縮尺変更、線号付与、テキスト類の入力を行なった上で報告書図版データを作成した。

3 報告書原稿の執筆・編集作業

報告書はワープロソフトや表計算ソフトなどを使用し原稿、表などの作成を行なった。作成した図表はベクターデータ化して図版として編集した。編集は編集ソフトを用いて行った。

(4) 普及啓発活動

仙台市教育委員会では、平成16年度から開始した宮城刑務所全体改築に伴う若林城跡の発掘調査に関連して、一般市民を対象とした様々な普及啓発活動を行なっている。平成21年度から30年度に行なった主な活動は以下のとおりである。

【報道発表会・遺跡見学会】

報道機関を対象とした発表会は平成21年度の第10次調査、平成25年度の第13次調査、平成27年度の第14次調査の野外調査期間中に開催し、多数の報道機関からの取材があった。また報道発表会に引き続き、一般市民を対象とした遺跡見学会や資料展示会を開催した。これらは宮城刑務所主催で毎年開催される、「みちのく・みやぎ矯正展」におけるイベントとして開催され、施設の性格から見学時間や見学者数の制約があったにもかかわらず、多数の参加があった。各見学会の参加者数は、平成21年度が1,217人、平成25年度が670人、平成27年度が419人で、市民の若林城跡への関心の高さがうかがわれた。

【発表会・展示会】

当課事業としては、毎年開催される文化財展「文化財この一年」において、写真パネルや出土遺物の展示を行なった。その他としては、宮城県教育委員会主催の「宮城の発掘調査パネル展」への出展、宮城県考古学会主催の「宮城県遺跡調査成果発表会」での報告、「若林区民ふるさとまつり」での写真パネルや出土遺物の展示などがある。また平成22年度には「北日本近世城郭検討会」において発表を行なった。

【講 座】

若林城跡に関係する市民向けの講座は、各団体からの依頼に応じ仙台市が行なう「市政出前講座」や、市内各市民センター、各種団体による地域講座のほか、地底の森ミュージアム、ガイドボランティア会などの依頼によるものなどがあり、それぞれに調査担当者を講師として派遣した。

【刊行物】

宮城刑務所全体改築に伴う若林城跡のこれまでの発掘調査成果をまとめた発掘調査報告書は、平成20年3月に『若林城跡第5次発掘調査報告書』、平成19年3月に『若林城跡第6次・第7次発掘調査報告書』、平成22年10月に炊場棟建設にかかる『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』、平成23年3月に作業倉庫建設にかかる『若林城跡第11次発掘調査報告書』を刊行した。その他には当課の事業報告書である『文化財年報』、文化財広報誌の『文化財せんだい』等において、若林城跡関係の調査成果や関連情報を掲載した。

第4章 基本層序

第10・12～15次調査で確認した基本層はⅠ～Ⅳ層に大別した。基本層各層については、第5・7・8・9次調査に準じた分層を行った。また、御殿建物範囲から離れた地点については、これまで確認したⅣ層と異なる様相を示しており、細分層を以前の調査と合致させることができなかったことから今回の調査では地点ごとに新たに細分・付番している。

Ⅳ層については、建物範囲の整地という目的とは異なる堆積状況を示す地点も見られることから、若林城期～御薬園期の整地土、若林城期の整地土、若林城期の整地土の中でも表御殿周辺でみられるものの3層に細分している。

Ⅰ層 現代の表土層である。本調査区には調査直前まで刑務所関連の施設・建物があり、建物の基礎や解体後の埋め戻し土もこの層に含んでいる。調査区周辺の現地形は南側の第8・9次に隣接した地点の標高がやや高い傾向が窺える。

Ⅱ層 近・現代の整地層で、層中には刑務所関係の施設で使用した瓦やレンガ等が多量に含まれている。堆積土はⅠ層と比べ全体的にしまっており、調査区の広範囲に分布している。混入する暗褐色シルトブロック・黄褐色シルトブロックはⅣ層に比べて径の小さなものとなっている。色調や含有物から細分可能だが、時期差などを示すものではないため分層は行っていない。また第14次調査の六角塔基礎部分では、塔建設に伴って下部に厚く盛った整地の痕跡を確認できた。この整地層下部は六角塔建設に伴う繋りの強い整地土で、これに対し上半部は六角塔解体や昭和40年代以降の刑務所改変に伴う新たな整地土と考えられる。

Ⅲ層 若林城廃城後の近世の御薬園に伴う畑耕作土である。均質な灰黄褐色シルトブロックであり、堆積土中からは若林城に伴う瓦をはじめ、近世の陶磁器等が出土している。Ⅲ層の堆積範囲は近現代の削平などにより調査区全域で均一には確認できていない。また、耕作に伴う掘り返しなどのため搅拌がなされたこと、若林城廃城後に御薬園へ改変されたと考えられることからⅣ層との境界は著しく乱れている。層厚は最も厚い地点でも約0.35m程度である。各調査のⅣ層上面で確認している小溝状遺構群はⅢ層の下部に位置しているが、掘り方については、Ⅲ層上面では確認できない。耕作に際しては、小溝状に畝などを連続して掘った後に全体に浅く耕したとみられ、Ⅲ層は外部からの客土ではなく、直下層であるⅣ層を連続して搅拌することで形成された均質な層と考えられる。

Ⅳ層 若林城造営に伴う整地層である。基本的に黄褐色シルトブロックと褐色シルトブロックの混合土からなる。後世の耕作等で本来のⅣ層上面は削平されており、若林城期の地表面は残存していない。Ⅳ層はは調査区全域で広範囲に確認されたが、第13次調査2区北東部や六角塔基礎周辺では擾乱が著しく僅かに残存するのみである。第10・12～15次調査の調査年次が異なる地点において、黄褐色シルトブロックと褐色シルトブロックの混入度合等に違いがみられたため、Ⅳa～Ⅳcの3層に細分した。各細分層は整地土の形成の特徴を見せており、地区により大きな差異がみられる。

Ⅳa層は若林城期～御薬園期の整地土で、堆積土中には多量の瓦片・礫が含まれる。確認できた範囲は少なく、第13次調査1区北東部と第15次調査Tr4東部で確認されている。第13次調査1区北東部上面にはSB14が構築されている。

Ⅳb層は若林城期における城内全体に敷き均された整地土である。第10・12～15次調査の全域で確認できたが、特に第14次調査区東部で顕著にみられた。この地点でⅣb層が残るのは、V層が厚く堆積していることから若林城造

營以前に窪地が広がっていたことや溝などの水利施設として利用されたためと考えられる。また、第15次調査Tr4の一部では、IVa・IVb層の間層とみられる砂層を確認している。整地の時期差を示す可能性があるが、確認できた範囲が狭小であるため細分は行っていない。

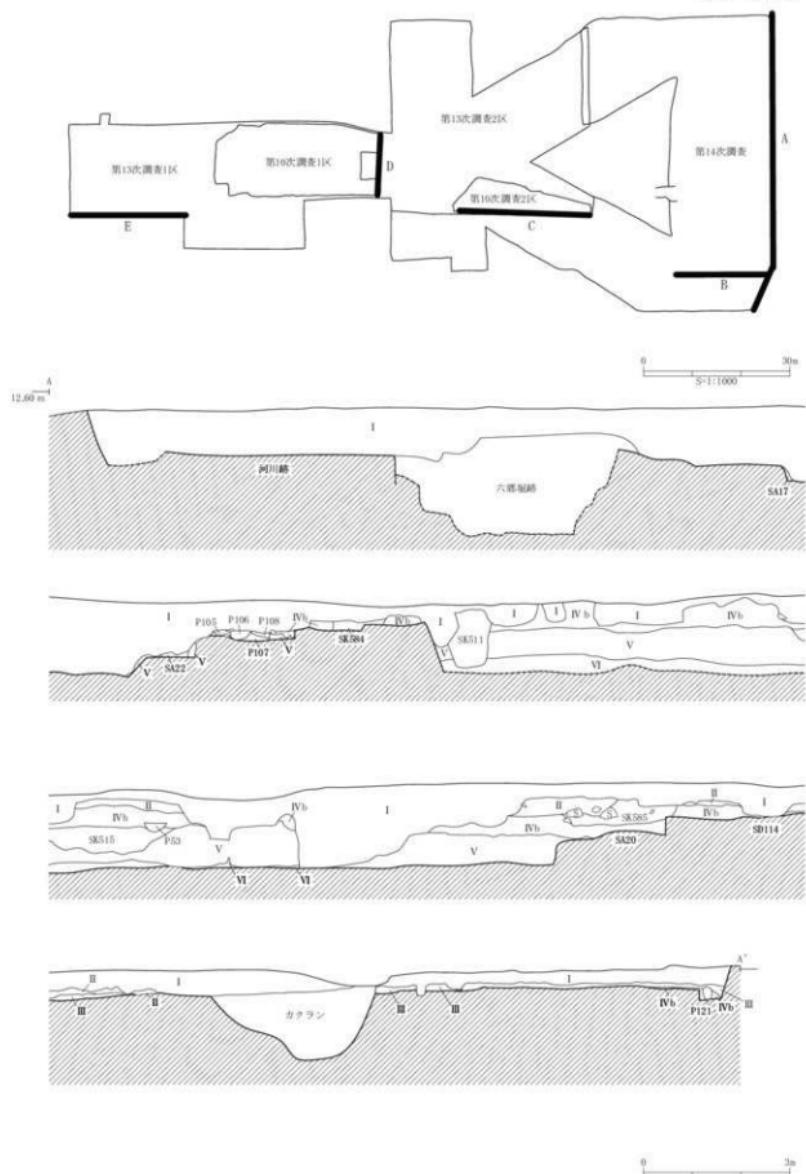
IVc層は城内の建物範囲やその他施設に伴う版築状の整地土である。今回の調査ではIVb層との時期差はみられなかった。主に第5・7～9次調査の御殿建物範囲で確認されており、第10・12～15次調査では、第14次調査と第7次調査の重複するSB5周辺と、第15次調査Tr8で確認できたのみである。

V層 第5次調査や第11次調査で僅かに確認された若林城造営以前に存在した表土層である。第13次調査I区西側と第14次調査区南東側でも確認されている。第14次調査区南東側のV層はそれ以前の調査区よりも厚く堆積しており、窪地に堆積したものと考えられる。IV層とVI層の状況から、V層は若林城造営時に削平され、同時に削平されたVI層の上部と共にIV層整地土として再び敷き均されたと考えられる。

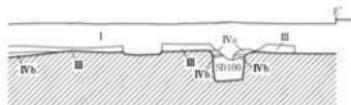
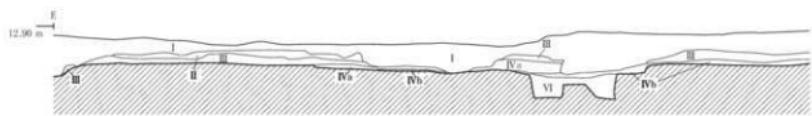
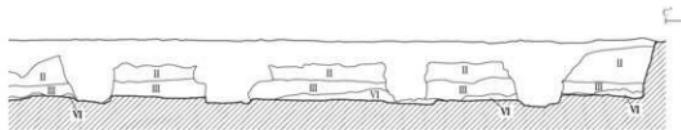
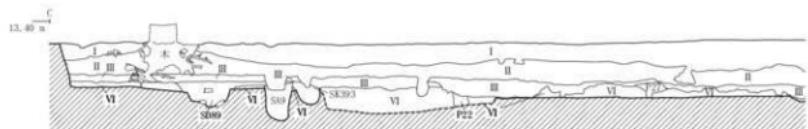
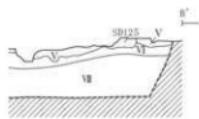
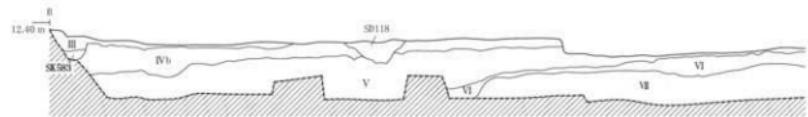
VI層 黄褐色シルトの自然堆積層であり、遺物は含まない。また、下層のVII層とは異なり円螺を殆ど含まない。VI層で検出した遺構は、削平によりIV層が失われた部分のみである。残存状況は極めて悪いが、若林城造営以前の溝跡、豎穴住居跡、土坑等を多數確認している。

第9章第2図のa～n層はVI層を細分したものであり詳細は第9章に記載する。

VII層 径10cm程度の円螺と砂礫を多量に含む自然堆積層である。掘り込みの深い遺構の底面や第14次調査区の擾乱底面、第15次Tr2底面で確認している。VII層の標高値は一定しないが本来は調査区全体に広がるとみられ、第14次調査区南側から北側に向かって傾斜するものと考えられる。第10・13～15次調査で確認した、河川跡に由来する堆積層とみられる。



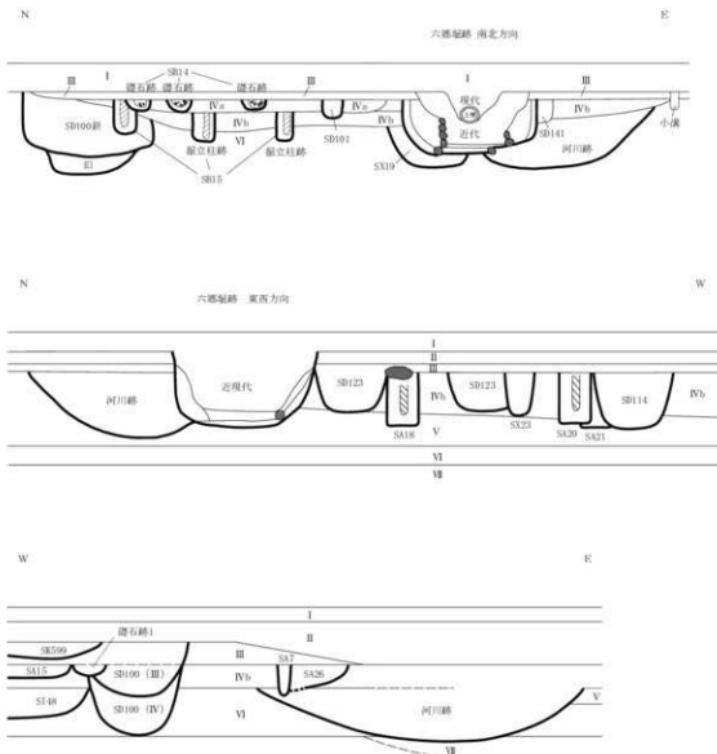
第8図 基本層序(1)



0 5m

第9図 基本層序(2)

層位	土色	土性	特徴	備考
I	10YR4/2 灰黃褐色	砂質シルト	径5cm以下の明黄色シルトブロック、径5cm以下の円錐含む	現代の表土
II	10YR5/2 灰黃褐色	シルト	径5cm以下の明黄色シルトブロック多量含む	古代の整地土
III	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック径10cm以上の円錐含む	側面削除耕作土
IVa	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の明黄色シルトブロック・褐灰色シルトブロック含む 径5cm以上の円錐少量含む	森林地域の表土
IVb	10YR4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	径10cm以下の明黄色シルトブロック・褐色シルトブロック、細穴含む	森林地整地土
IVc	10YR5/4 にぶい黄褐色	シルト	径1cm以下の褐色シルトブロック・褐色色シルトブロック少量含む	森林地整地土
V	10YR5/1 褐色	シルト	径2cm以下の褐色シルトブロック含む	表土
VI	10YR6/4 にぶい黄褐色	シルト	径10cm以下の褐灰色シルトブロック無量含む	堆山
VII	10YR6/4 にぶい黄褐色	砂質シルト		堆山



第10図 基本層序模式図

第5章 第10・13・14次調査の経過

第1節 調査の経過

(1) 第10次調査

調査区の設定を平成21年6月15日に行い、1区と2区の2つの調査区を設定した。

重機掘削を2区から開始し、7月14日に終了した。

2区では刑務所施設の六角塔の基礎、1区では戦後の刑務所施設に伴う2m四方の基礎を複数確認した。2m四方の基礎はⅢ層上面から2m程の深さまで入っていた。また1区の北西部にはコンクリート製の浄化槽が残り、Ⅲ・Ⅳ層は建物基礎や浄化槽によって削平され一部でしか確認できなかった。さらに排水溝、旧配管も數多く残されていた。

表土掘削終了後、調査区内に5mグリッドを設定し、遺物取り上げの基準とした。

6月23日からは人力による搅乱掘削と壁面清掃、Ⅲ層（近世耕作層）上面での遺構検出を行い、この面で検出された遺構の調査と記録を順次行った。その後、Ⅳ層上面の遺構検出を行った。Ⅳ層が明確に残る範囲は、1区北側や2区東側などのわずかな部分のみであった。

10月6日にはラジコンヘリコプターによる全景写真撮影を行った。その後、遺構の掘り込みを行ったが、遺構保存の必要性から若林城期やそれ以前の遺構掘削は最小限にとどめ、多くの遺構については平面プランに加え、搅乱断面を利用しての堆積土状況の確認にとどめた。

10月22日からは碎砂による埋め戻し作業を開始した。主要な遺構や縁を使用したものに関しては不織布で覆い、細部の保護を行った後に碎砂で埋め戻している。埋め戻し完了後には壁面保護と砂の飛散防止のため、全体をブルーシートで保護し、土糞により固定した。碎砂の厚さは、遺構保護の観点から0.15mを基準としたが、調査区内で高低差の著しい地点や大型の搅乱などは自然沈下を考慮し、0.15mよりも厚く敷き均した地点もある。

11月2日に埋め戻し作業を終了した後、発掘器材や場内プレハブ等の撤収を行い、11月5日に野外作業を全て終了した。

一般市民を対象とした普及啓発活動としては、10月15日に報道機関への発表を実施した。また、遺構の公開は出来なかつたが、埋め戻し終了後の11月1日には宮城刑務所矯正展の場において写真パネルや今回の出土遺物、若林城の模型展示等による資料展示会を行った。

(2) 第13次調査

調査区の設定を平成25年5月21日に行い、当初1区～3区の3つの調査区を設定した。

重機掘削を5月27日に3区から開始し、8月21日に終了した。その後、3区は1区と連続して調査を進めることとなり、1区・3区を合わせて1区と呼称することとなった。1区と2区では刑務所施設の六角塔の基礎と戦後の刑務所施設に伴う2m四方の基礎を確認した。2m四方の基礎はⅢ層上面から2m程の深さまで入っていた。特に2区は搅乱が複雑に絡み、Ⅲ・Ⅳ層を確認できた地点はごくわずかである。

5月31日から重機と併行して人力による搅乱掘削・壁面整形を開始した。その後Ⅲ層上面の遺構検出を行い、検出された遺構の調査と記録を順次行った。Ⅲ層上面終了後、Ⅳ層上面の遺構検出を行った。

9月25日と10月30日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影を行った。調査区が2つに分かれているため、1区と2区の2回に分けて実施した。なお、六郷堀跡などの大型遺構の全景撮影には、ローリングタワーと脚立を併用して行った。その後、遺構の掘り込みを行ったが、第10次調査と同様に遺構の掘り込みは最小限にとどめた。

11月11日からは碎砂による埋め戻し作業を1区から開始した。埋め戻しの方法や碎砂の厚さについても第10次調査と同じ方法で行い、遺構の保護に努めた。

12月11日に全ての調査区の保護作業・埋め戻しを終了した後、発掘器材や場内プレハブ等の撤収を行い、野外作業を全て終了した。

一般市民を対象とした普及啓発活動としては、10月25日に報道機関への発表会を行った。当日は、雨天により刑務所側から現場での説明の許可が下りなかつたため、刑務所内の会議室で、写真パネルと遺物を用いての説明のみを行つた。また11月2日には、「ふるさと・みやぎ刑務所矯正展」に合わせて、現場の遺構と今回の出土遺物の公開、写真パネルの展示などの遺跡見学会を行つた。当日は刑務所側の見学スケジュールに合わせ、1回10分の見学につき平均45人の見学者を対象にした解説を15回行い、来場者数は約670人であった。

(3) 第14次調査

調査区の設定を平成27年5月25日に行った。

重機掘削を6月1日から開始し、7月16日に終了した。調査区内では刑務所施設の六角塔の基礎と戦後の刑務所施設に伴う大型の建物基礎を確認した。調査区東部では搅乱によって削平され遺構の確認できない範囲もあった。

6月5日から重機と併行して人力による搅乱掘削・壁面整形を開始した。その後Ⅲ層上面の遺構検出を行い、検出された遺構の調査と記録を順次行った。Ⅲ層上面終了後、調査区が広範囲であったため、遺構の掘り込みや記録作業を併行して行った。遺構の掘り込みはこれまでの調査と同様に最小限にとどめた。

11月12日にラジコンヘリコプターによる全景写真撮影を行つた。なお六郷堀跡などの大型遺構の全景については、後日ドローンを使用しての撮影を行つた。

12月9日からは遺構調査と併行して埋め戻し作業を開始した。埋め戻しの方法や砂砾の厚さについてもこれまでの調査と同じ方法で行い、遺構の保護に努めた。

1月13日に全ての調査区の保護作業・埋め戻しを終了した後、発掘器材や場内プレハブ等の撤収を行い、野外作業を全て終了した。

一般市民を対象とした普及啓発活動としては、10月23日に報道機関への発表会を実施し、当日は、遺構説明の他にも写真パネルと遺物を展示した。また11月1日には、「ふるさと・みやぎ刑務所矯正展」に合わせて、遺構説明と出土遺物や写真パネル展示などによる遺跡見学会を行つた。当日は1回約30分程度の見学会を計2回行い、合計の来場者数は約419人であった。

第2節 遺構の保存方法

平成18年3月の四者協議による合意に基づき、処遇管理棟や炊事棟に続き、今後宮城刑務所場内で建設する建物下にある遺構は遺構確認調査の後に保存されることとなつた。今回の調査対象となった北収容棟についても、建物基礎はいわゆるベタ基礎で施工される予定で、調査終了時点での遺構の埋め戻し作業を行なつてゐる。

遺構の埋め戻し作業は、まず調査終了後の遺構面を養生するため、六郷堀跡をはじめ、石敷遺構、礎石跡、石組講跡など、礎を多用して構築された遺構を中心に、厚さ1.6mmの不織布を上面の敷設のみならず、側面全体にも貼つた。これは将来、建物下を再調査した場合を考慮し、埋め戻した砂が隙間へ入り込むことで、遺構を害することを防ぐための処置である。第5次調査では厚さ3mmの不織布も併用したが、遺構内縫の凹凸に不織布が密着しにくいため、第8次・第9次調査に引き続き、今回も薄手の不織布のみ使用した。この後、養生した遺構上には砕石を砂状にしたもの約15cmの厚さで敷き均し、織りを良くすると共に、建物の不等沈下防止のため、深さや大きさを問わず、全ての搅乱部分にもこれを充填した。発掘調査終了時における埋め戻し作業はこれをもって終了とし、建築工事着工までの間は自然沈下した部分に砂を補充したりするなど、遺構ならびに調査区の保持に努めている。

第6章 第10・13・14次調査の検出遺構と出土遺物

第10次・第13次・第14次調査では一つの建物を複数年次に分けて調査を実施している。そのため、連続する第10次・第13次・第14次調査検出遺構は調査次数による分別した記述は行わずに報告する。第12次・第15次調査については第6・第7章で報告する。

検出した遺構に関しては、検出層位によりIII層、IV層、VI層の順に遺構種別ごとに掲載し、また出土した遺物に関しては、出土数の大半を占める瓦をはじめ、多くの遺物が若林城と廃城後の御薬園に由来するものと判断される。図表等については遺構毎・層位とし、その中でそれぞれ遺物種別にまとめて掲載した。なお、III層遺構の詳細な掲載はSK380とSX12のみで、その他については遺構配置図・遺構一覧表にとどめ一部は写真を掲載している。

第1節 III層の状況と上面検出の遺構（第12～16図）

III層は若林城廃城後に形成された近世の畑耕作土である。今回の調査で確認した遺構は、溝跡や水路（SD）4条、土坑（SK）15基、性格不明遺構1基（SX12）、井戸跡（SE）1基、ピット22基、小溝状遺構群4群を確認した。III層面は後世の擾乱が著しく、一部では層自体が削平されていた部分もあり、遺構の残存状況は悪いとみられる。また、廃城後は御薬園として使用されていたことから建物等は少なかったと考えられる。

（1）土坑（SK）

380号土坑（SK380）（第12-17-18図）

位置 Y33-X32～33グリッドで検出した。

規模 径約4.05×3.15m、深さ約1.05mであり、平面形は不整形を呈するが、土坑の上面および大部分は擾乱で削平されている。断面形は半円形に近い形であるが、底面付近には緩やかな傾斜しテラス状になる部分もある。

重複関係 西側に位置するSX12と接するが、直接は重複しない。

堆積土 15層を確認した。1層・2層はIII層に類似する灰黄褐色砂質シルトで、耕作土の流れ込みまたは灌漑を敷き均した際の埋め土と考えられる。

3層中からは多量の瓦片・土師質土器及び径3~10cmの礫が混入しており、瓦は密に分布しているものの、配置などの規則性はみられなかった。3層は灰白色シルトブロックを含む人為的堆積土であり、SK380開口時に瓦などと人為的に埋められたと考えられる。4層から13層にかけては灰褐色シルトブロックを含む人為的堆積土である。土坑の底面から壁面にかけては粘性の強い14層・15層が堆積している。14層は褐灰色粘土で、層厚は0.06m程、15層は浅黄橙色粘土であり、層厚が0.01m~0.02m、ともに自然堆積土と考えられる。

1層は灰黄褐色シルトで、黄橙色シルトブロック少量と径1cm以下の瓦、小礫を含む。

2層は灰黄褐色シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。

3層は暗褐色砂質シルトで、灰白色シルトブロックと瓦を多量、径1cm以下の小礫を少量含む。

4層はにぶい黄橙色粘性シルトで、灰黄褐色シルトブロックを多量含む。

5層は灰白色シルトで、灰白色シルトブロックと径1cm以下の鉄分を含む。

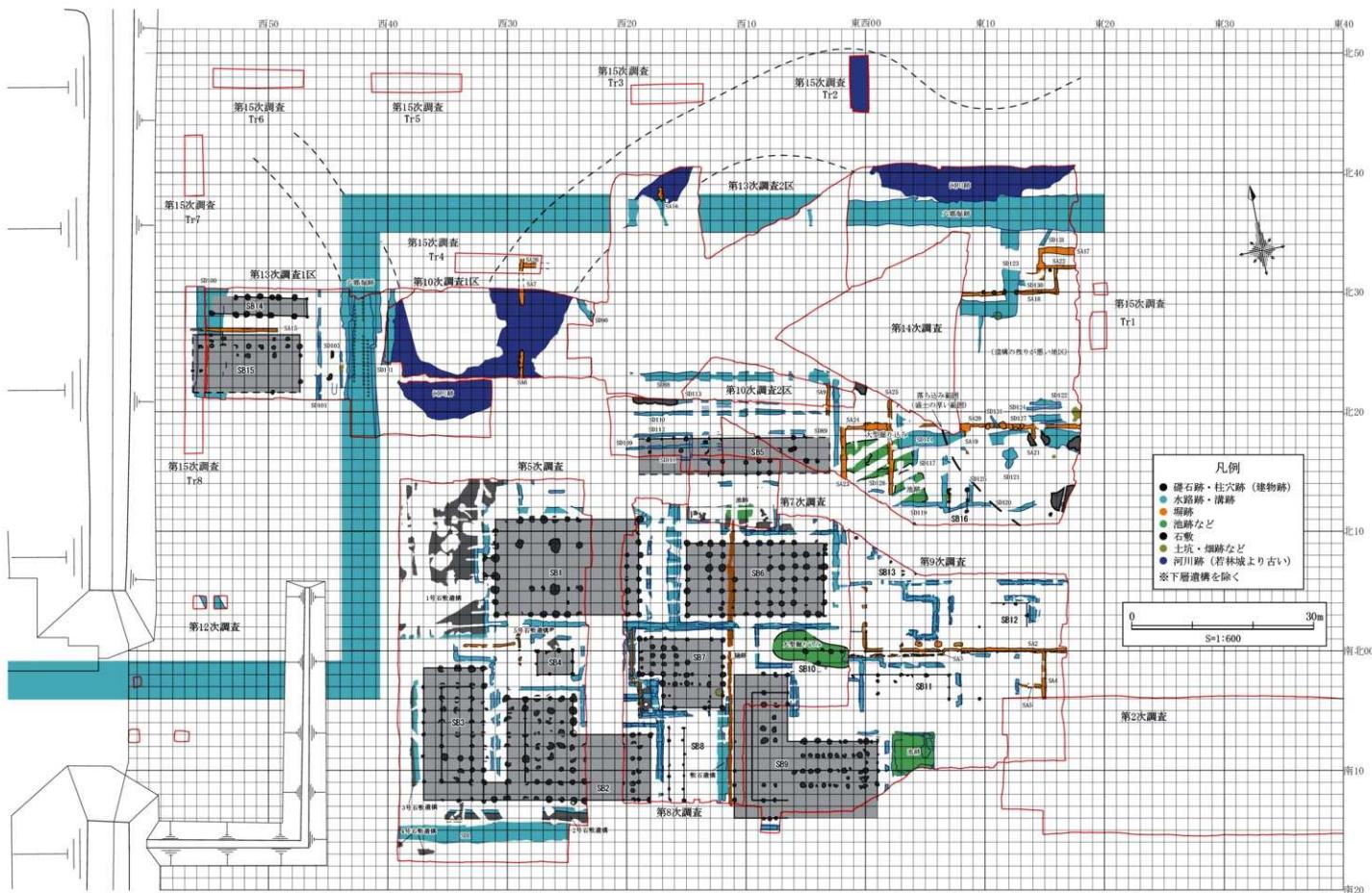
6層はオリーブ黒色シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。

7層は暗灰黄色粘性シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。

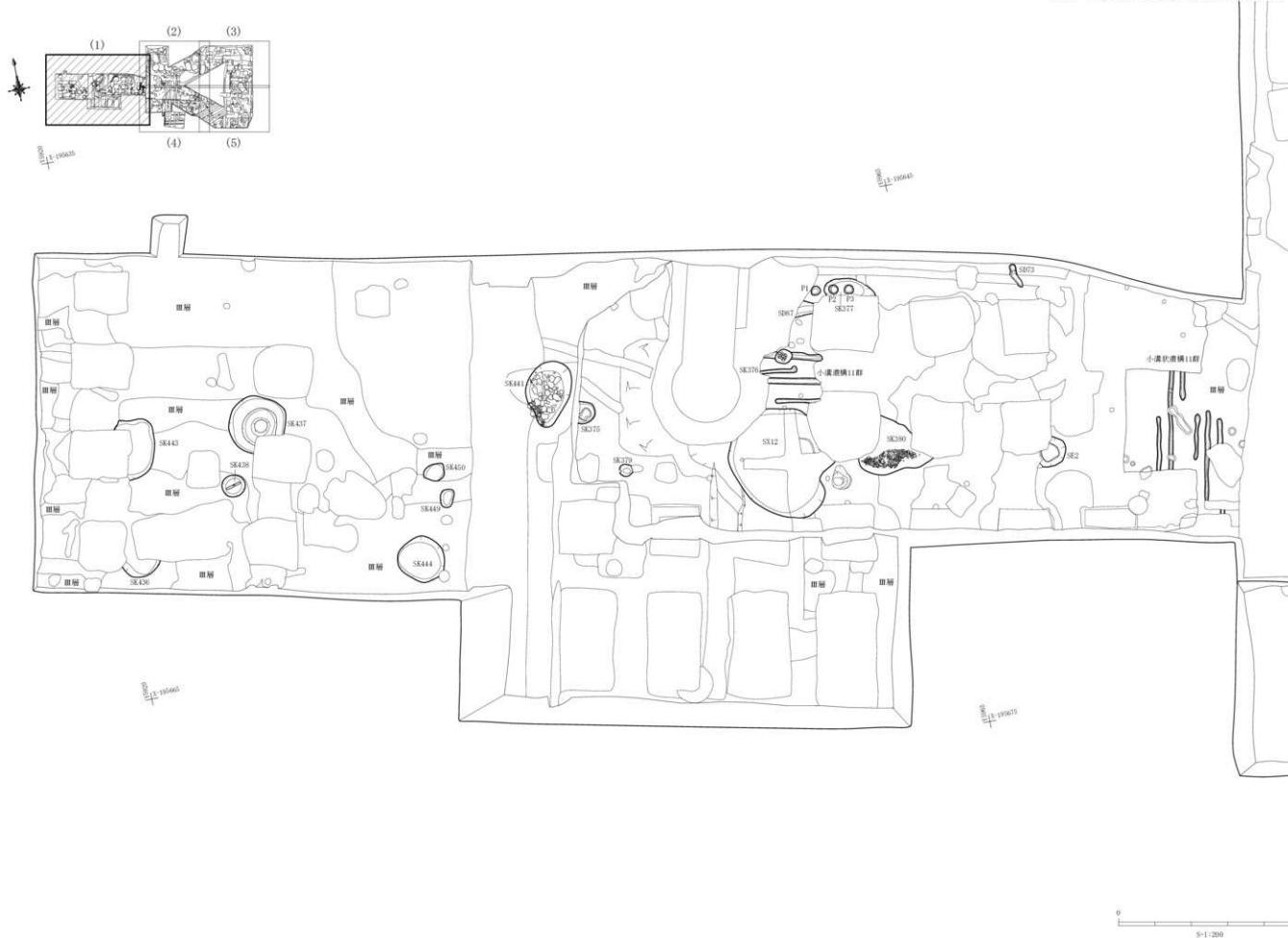
8層は灰色シルトで、径20cm以下の礫を少量、径2cm以下の炭化物を微量含む。

9層は灰白色砂質シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。

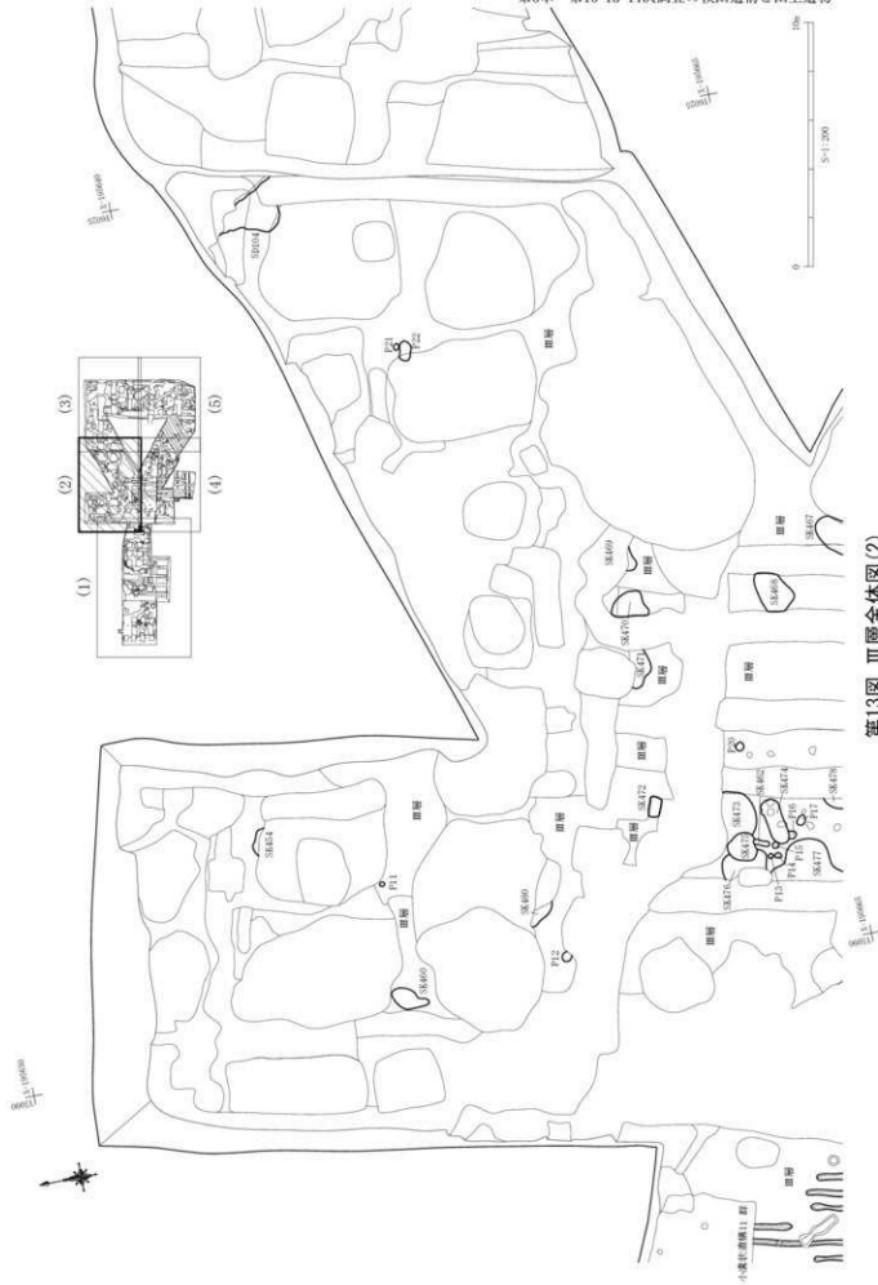
10層はオリーブ黒色シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。



第11図 若林城跡主要遺構配置図

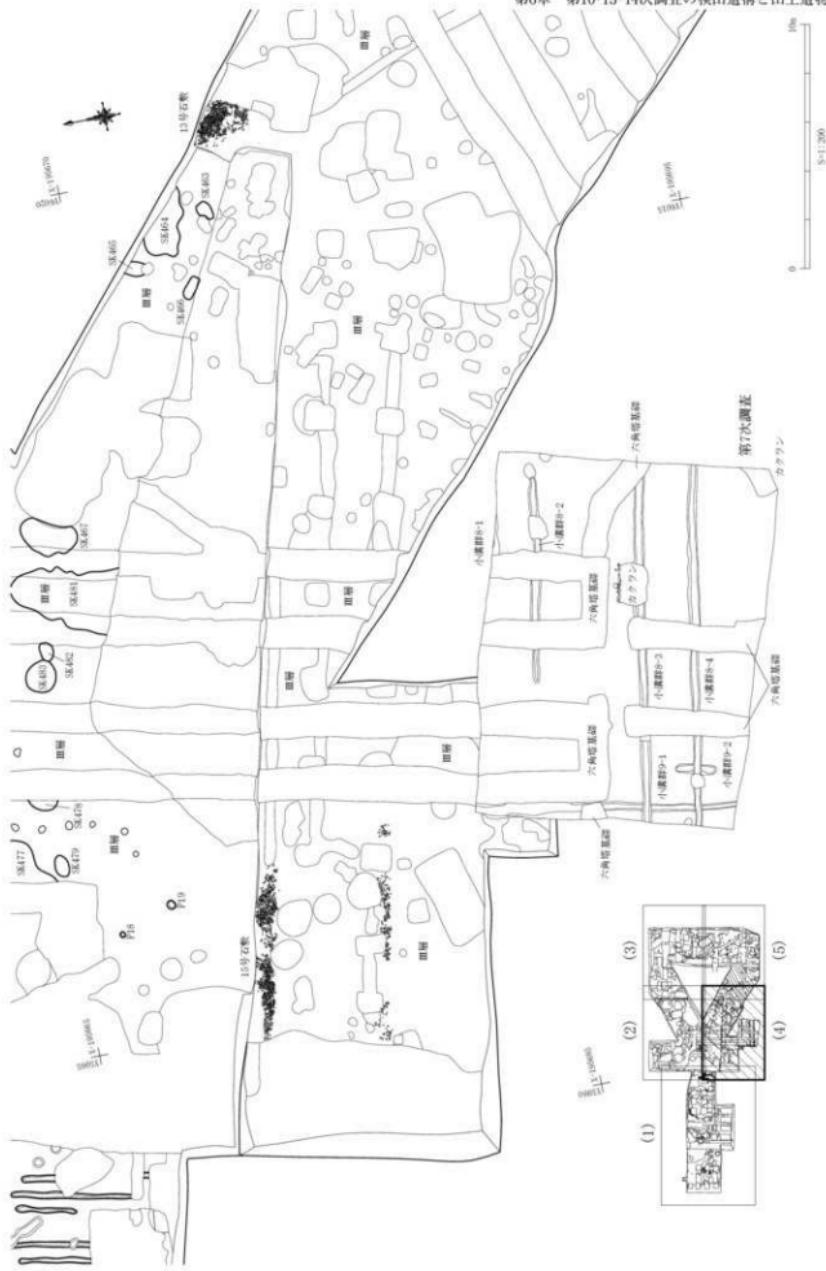


第12図 III層全体図(1)





第14図 Ⅲ層全体図(3)

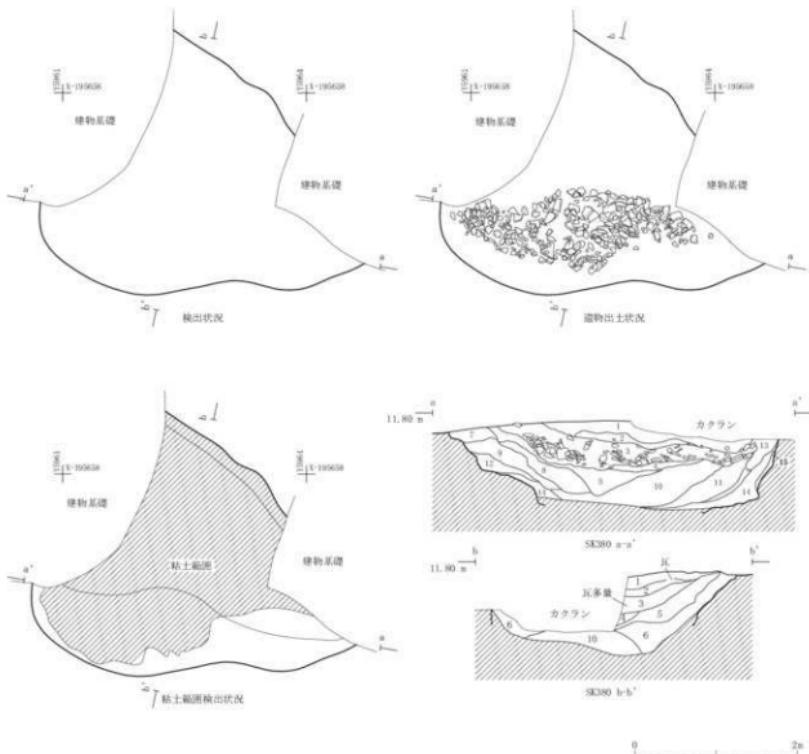


第15図 III層全体図(4)



第16図 Ⅲ層全体図(5)

- 11層は灰白色シルトで、黄灰色シルトブロックを多量含む。
- 12層は褐灰色シルトで、浅黄橙色シルトブロックと径1cm以下の炭化物を多量含む。
- 13層はオリーブ褐色シルトで、灰黄褐色シルトブロックと明黄褐色知るとブロックを多量含む。
- 14層は褐灰色粘性シルトで、灰白色シルトブロックと径1cm以下の炭化物を多量含む粘土層である。
- 15層は浅黄橙色粘性シルトで、褐灰色シルトブロックと浅黄橙色粘性シルト含む粘土層である。



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SK380	1	10YR4/2 灰黃褐色	シルト	径1cm以下の黄褐色シルトブロック多量含む	
	2	10YR5/2 灰黃褐色	シルト	径1cm以下の黄褐色シルトブロック多量含む	
	3	10YR5/3 姪褐色	シルト	径1cm以下の灰白色シルトブロック、径1cm以下的小繊維少、瓦を多量含む	
	4	10YR4/4 に近い黄褐色	シルト	径1cm以下の灰白色シルトブロック多量含む	
	5	5YR2/2 灰白色	シルト	径10cm以下の灰白色シルトブロック含み、既分が発達する	
	6	5YR1/1 オリーブ黒色	シルト	径10cm以下の黄褐色シルトブロック多量含む	
	7	2.5YR5/2 姪灰褐色	シルト	径1cm以下の黄褐色シルトブロック多量含む	
	8	5YR1/1 灰色	シルト	径1cm以下の灰白色シルトブロック多量含む	
	9	5YR2/2 灰白色	シルト	径1cm以下の灰白色シルトブロック多量含む	
	10	5YR3/1 オリーブ褐色	シルト	径10cm以下の黄褐色シルトブロック多量含む	
	11	5YR2/2 灰白色	シルト	径1cm以下の灰白色シルトブロック多量含む	
	12	10YR5/1 褐灰色	シルト	径1cm以下の浅黄褐色シルトブロック・炭化物多量含む	
	13	2.5YR4/3 オリーブ褐色	シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック・灰褐色シルトブロック多量含む	
	14	7.5YR4/1 褐灰色	粘土	径1cm以下の灰白色シルトブロック・既分物多量含む	瓦含む粘土層
	15	10YR5/4 淡黄褐色	粘土	径1cm以下の褐灰色シルトブロック・淡黄褐色シルトブロック多量含む	

第17図 SK380

第1節 Ⅲ層の状況と上面検出の遺構

構造 SK380は、大部分を搅乱により失っており、残存状況は悪い。底面や壁面には粘性の強い粘土（14層・15層）が均一に堆積した状況がみられたことから、当初は池などの貯水を目的とした遺構であった可能性がある。SK380を廃絶後に埋戻し、さらに覆みを廃棄土坑などに転用したと考えられる。

出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、不明瓦といった瓦片が1,168点、陶器4点、磁器1点、土師質土器246点、縄文土器1点、土師器2点、鉄製品5点、金屬製品19点があり、このうち軒丸瓦1点、平瓦1点、熨斗瓦1点、輪違い2点、面戸瓦1点、土師質土器1点、鉄製品1点を図示した。H007-008（第18図-5・6）は輪違いである。H007-008ともに凹面にコピキ痕・ナデ調整・布目痕・布目絞り痕、凸面にナデ調整がみられる。3層から出土している。

F012（第18図-2）は軒丸瓦の瓦当部片で、瓦当文様は珠文三巴文である。珠径は1.5cmで、珠文数は17個と考えられる。3層から出土している。

G017（第18図-3）は平瓦で、凹面にコピキ痕・ナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。3層から出土している。

H003（第18図-4）は熨斗瓦の破片である。凹面にナデ調整・ヘラ状工具による線刻、凸面にナデ調整・雑砂がみられ、分割面の特徴から焼成後に分割したものと考えられる。3層から出土している。

H030（第18図-7）は面戸瓦で、凹面にコピキ痕・布目痕・吊り紐圧痕・端部4辺にケズリ調整、凸面にナデ調整がみられる。3層から出土している。

I109（第18図-1）は土師質土器の焼塙壺で、体部下端に横位のケズリ調整がみられる。3層から出土している。

N001（第18図-8）は鉄釘で、3層から出土している。

（2）性格不明遺構（SX）

12号性格不明遺構（SX12）（第12・19～24図）

位置 Y31・X32～33グリッドで検出した。

規模 東西約6.00m、南北約5.96m、深さ1.50mであり、平面形は不整円形を呈するが、西側は搅乱で削平されている。

断面形は半円形に近い形であるが、底面付近には緩やかに傾斜し、テラス状になる地点もある。

重複関係 河川跡より新しい。

堆積土 33層確認した。時期ごとの面としては上層（1～7層）・中層（8～16層）・下層（17～33層）の3時期に大別できる。

1層は灰色シルトで、径1cm以下の暗灰色シルトブロックを多量含み、径50cm以下の礫多量含む。

2層は灰黄褐色シルトで、径1cm以下の礫を多量、炭化物を少量含む。

3層は褐灰色粘質シルトで、径1cm以下の焼土・炭化物を多量含む。

4層は浅黄色砂質シルトで、径5cm以下の黒褐色シルトブロック少量と礫を多量に含む。

5層は褐灰色シルトで、径2cm以下の淡黄色シルトブロックを多量含む。

6層は灰黄褐色シルトで、径1cm以下の浅黄色シルトブロックを多量、径1cm以下の炭化物を少量、瓦を含む。

7層は褐灰色シルトで、径1cm以下の灰白色シルトブロックを多量含む。

8層は灰黄褐色シルトで、径1cm以下の浅黄色シルトブロック、径10cm以下の礫・炭化物を多量含む。

9層は灰黄褐色粘質シルトで、径1cm以下の浅黄橙色シルトブロック、炭化物を多量含む。

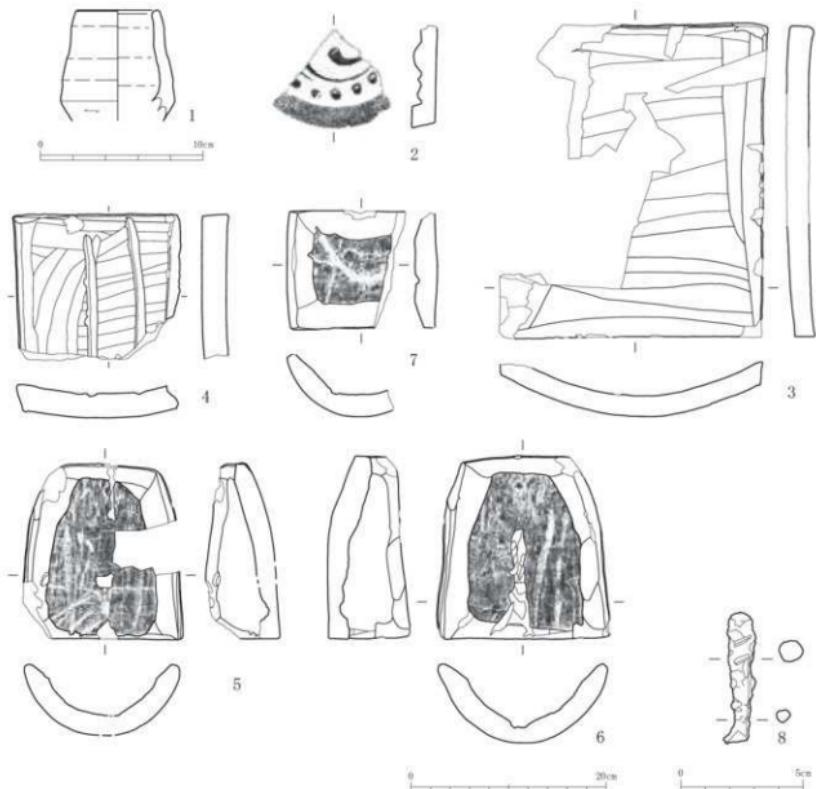
10層は灰黄褐色シルトで、径2cm以下の浅黄橙色シルトブロックを多量含む。

11層はにぶい黄橙色シルトで、径1cm以下の黄色シルトブロックを多量、焼土・炭化物少量含む。

12層は黒褐色シルトで、径1cm以下の黄灰色シルトブロック・黄色シルトブロックを含み、炭化物を少量含む。

13層は黄灰色粘質シルトで、径1cm以下の黄灰色シルトブロックを少量、焼土・炭化物を多量含む。

14層は暗灰黄色シルトで、径1cm以下の暗灰黄色シルトブロック・黄灰シルトブロックを多量含む。



団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
1	1109	土器	土器	土器	-	SK380-38	(4, 3)	-	-	不明	外周下端に横穴のケズリ	96-18			
2	F012	軽瓦	陶二段瓦	An	SK380-38	-	-	(19.9)	(14.2)	2.4	229	-	-	内径1.5cm	96-19
団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
3	GO17	平瓦	平瓦	1	SK380-38	31.9	(28.0)	2.0	2.3	2362	ナゲ	ナゲ、ヨビキ板	96-1		
団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
4	H003	輕瓦	陶二段瓦	1	SK380-38	-	(6.1)	-	2.3	766	ナゲ、難透	ナゲ、ハリによる封緘 施成後分割	96-2		
団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
5	H007	軽瓦	陶二段瓦	2	SK380-38	17.9	-	(11.5)	(6.2)	2.3	986	ナゲ	ナゲ、凸透、凸面斜面削り落とし	96-3	
6	H008	軽瓦	陶二段瓦	2	SK380-38	18.7	17.3	(11.7)	8.5	2.3	1282	ナゲ	ナゲ、凸透、凸面斜面削り落とし	96-4	
団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
7	HO03	軽瓦	陶二段瓦	2	SK380-38	12.1	(15.2)	6.3	2.3	441	ナゲ	(196, 610, 441)断面	96-5		
団版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅(cm)	法 厚さ(cm)	重さ(g)	凸面 調整法	備考	写真図版			
8	N001	鉄製品	釘	-	SK380-38	3.4	1.6	0.5	6.3	-	-	-	96-6		

第18図 SK380 出土遺物

- 15層は黒褐色粘質シルトで、径1cm以下の灰黄褐色シルトブロックを少量、炭化物・瓦を多量含む。
- 16層は淡黄色シルトで、径2cm以下の黒褐色シルトブロックを少量含む。
- 17層は暗灰色シルトで、径2cm以下の浅黄色シルトブロックを多量含む。
- 18層は淡黄色シルトで、径2cm以下の黒褐色シルトブロックを少量含む。
- 19層は灰黄褐色シルトで、径1cm以下の灰白色シルトブロックを多量、礫を含む。
- 20層は灰白色シルトで、径1cm以下の灰白色シルトブロックを少量含む。
- 21層は灰色シルトで、径1cm以下の淡黄色シルトブロック、焼土・炭化物を少量含む。
- 22層は褐灰色シルトで、径1cm以下のオリーブ黒色シルトブロックを含み、炭化物を多量含む。
- 23層は褐灰色シルトで、径1cm以下の浅黄色シルトブロックを多量含む。
- 24層は褐灰色シルトで径1cm以下の褐灰色シルトブロック、礫を多量含む。
- 25層は黒褐色シルトで、径2cm以下の灰白色シルトブロックを多量含む。
- 26層は灰黄褐色粘質シルトで、径1cm以下の淡黄色シルトブロックを多量、黄橙色シルトブロック含み、炭化物微量含む。
- 27層は灰白色シルトで、径1cm以下の灰色シルトブロック、鉄分を含む。
- 28層は淡黄灰色シルトで、径2cm以下の灰白色シルトブロックを含む。
- 29層は灰黄褐色シルトで、径2cm以下の灰白色シルトブロック、炭化物微量、鉄分を含む。
- 30層は褐灰色シルトで、径1cm以下の明黄褐色シルトブロックを多量含む。
- 31層は褐灰色シルトで、径1cm以下の淡黄色シルトブロックを多量含む。
- 32層は褐灰色シルトで、径2cm以下の淡黄色シルトブロックを多量含む。
- 33層は黄灰色粘質シルトで、径1cm以下の黄色シルトブロック、鉄分を含む。

構造 堆積土の観察の結果から、上層・中層・下層は埋め戻しの際の時期差と考えることができる。

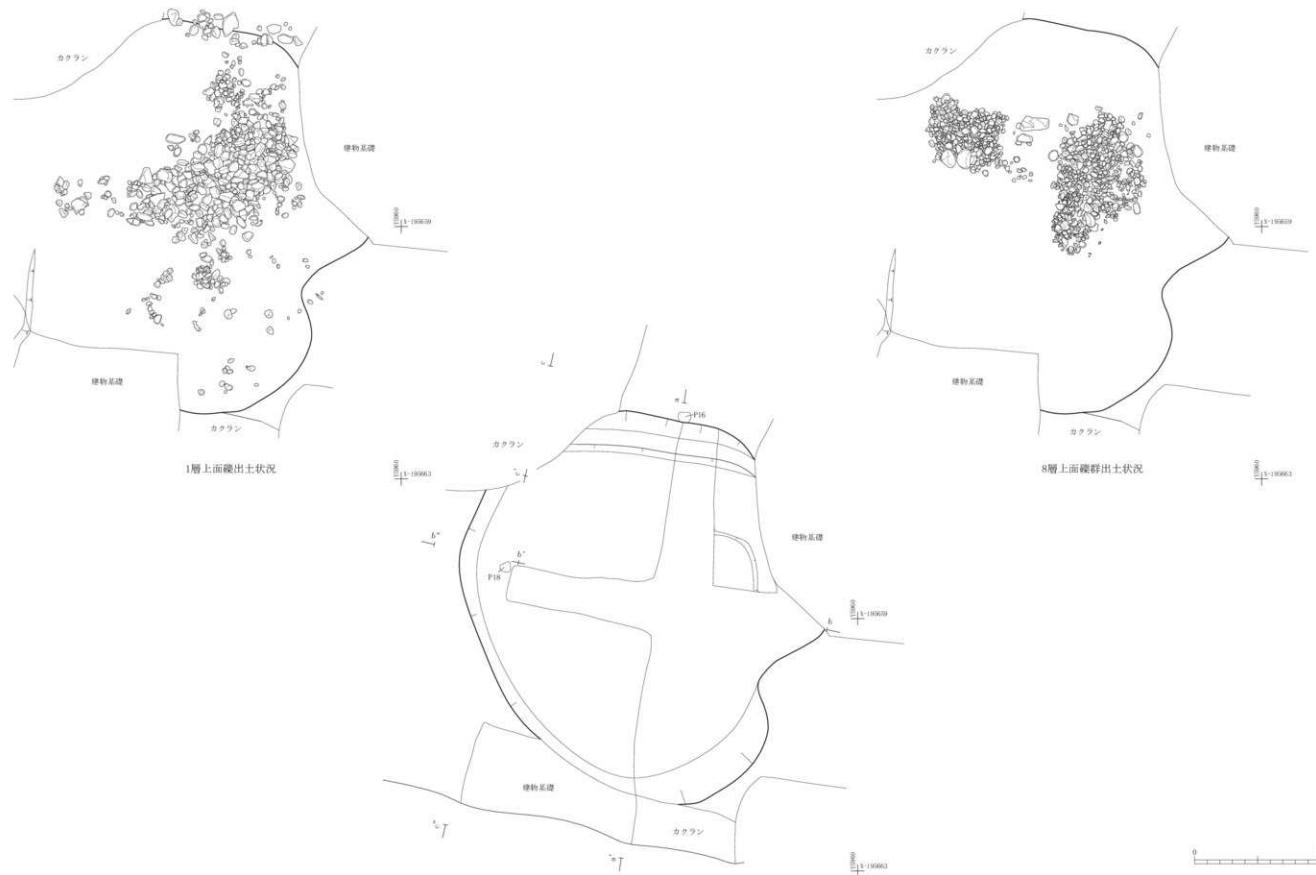
上層は1~7層が該当し、1層上面に礫を多量に含む堆積層であり、瓦や炭化物の混入もみられる。礫は径約10~50cmの円礫が主体で、わずかに角礫が含まれている。礫の分布範囲は南北約6.0m、東西約4.0mであり、遺構中央からやや北東に取まるが、配置等の規則性はみられない。1~7層はⅡ層に類似していることから、宮城集治監建設に伴い遺構上部の窪みに周辺の礫などを廃棄した結果により形成された層と考えられる。

中層は8~16層が該当し、8層上面で礫が多量に混入している堆積層である。礫は径約10~50cmの円礫が主体である。礫の分布範囲は東西約3.5m、南北1.5mの範囲であり、中央からやや北西~北東に取まるが、上層と同じく配置等に規則性はみられない。礫は密に分布しているものの焼土・炭化物も混入しており、15層には多量の瓦の混入もみられた。中層に含まれる遺物の年代は17c後半~19c前半であることから、御薬園期に廃棄されたと考えられる。

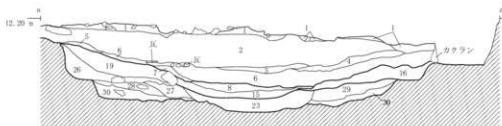
下層は17~33層が該当し、褐灰色シルトブロックを基調として底面にはグラウイ化の状況を確認している。下層から出土した遺物は17c~18cであり御薬園期に取まることから、下層は中層と同じく御薬園期に埋められたと考えられる。なお、下層出土の陶器はSK380やSK383・SK389出土遺物と接合している事から、これらの遺構と同時期と考えられる。

SX12の底面は概ね平坦であるが、北側と南側には規格性のない土坑状の窪みがあり土取りによる掘り方の可能性がある。第11次調査のSX14と同じく、土取りした後に廃棄土坑として再利用したと考えられる。

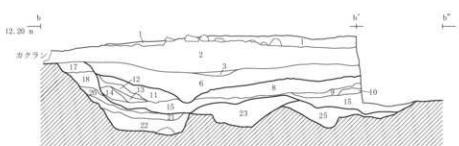
出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、變斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、鬼瓦、不明瓦といった瓦片が598点、陶器130点、磁器59点、瓦質土器2点、土師質土器122点、焼塙壺1点、土師器22点、須恵器3点、瓦器1点、土製品7点、鉄製品2点、銅製品3点、銅錢7点、金属製品110点、木製品24点、レンガ片2点があり、このうち、菊丸瓦1点、陶器29点、磁器6点、瓦質土器3点、土師質土器7点、銅錢2点、金属製品2点、木製品3点、土製品3点を図示した。鉄製



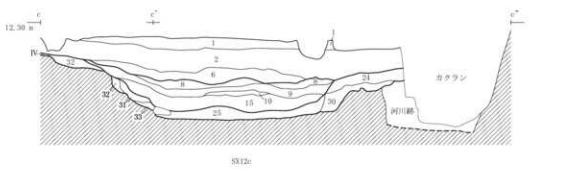
第19図 SX12(1)



SX12a



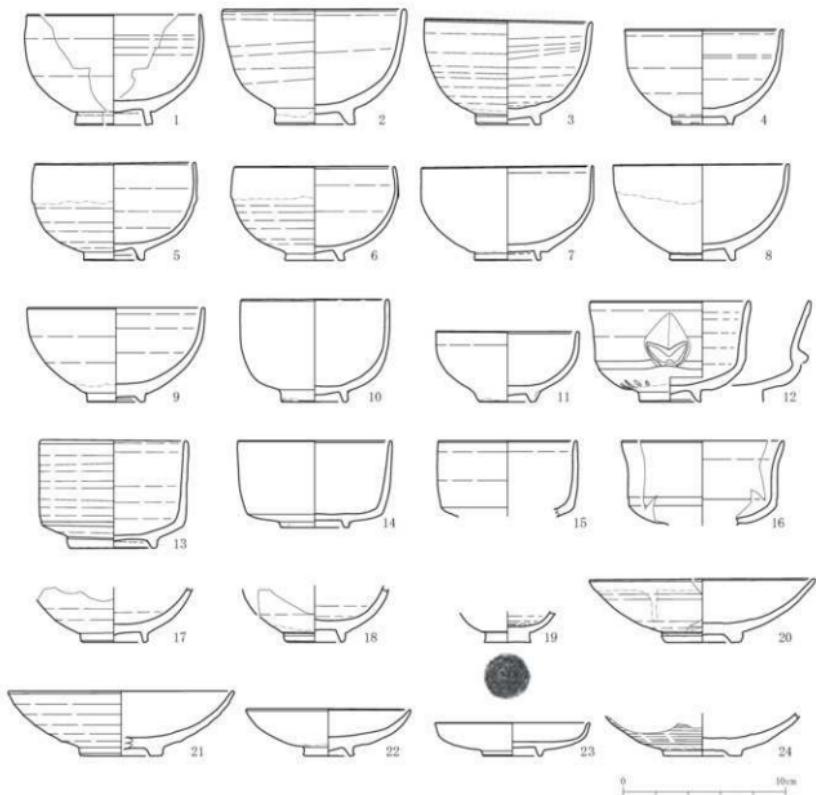
SX12b



SX12c

遺構	層位	土 色	土 色	特 樹	備 考
1	10YR5/5	褐色	シルト	標1cm以下の黄色シルトブロック多量、既往洗い下の泥多量含む	
2	10YR5/5	灰黃褐色	シルト	標1cm以下の泥多量含む	
3	10YR4/5	褐色	粘質シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量、既往洗い下	
4	2,57/4	褐色	粘質シルト	標5cm以下の黒褐色シルトブロック少量、泥多量含む	
5	10YR4/1	褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
6	10YR5/5	灰黃褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量、既往洗い下	
7	10YR5/5	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量、既往洗い下	
8	10YR5/5	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往洗い下の褐色多量含む	
9	10YR6/5	灰黃褐色	粘質シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往洗い下の褐色多量含む	
10	10YR5/5	灰黃褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
11	10YR6/1	灰(黄)褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量、植生・堆積物少量含む	
12	2,07/2	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往シルトブロック含む、既往化物多量含む	
13	2,07/2	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往シルトブロック含む、既往化物多量含む	
14	2,07/2	灰褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック、既往シルトブロック多量含む	
15	10YR5/1	褐色	粘質シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量、既往化物少量含む	
16	2,07/0	灰褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
17	2,07/0	褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
18	2,07/0	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量、既往化物多量含む	
19	10YR4/1	灰褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量、既往化物多量含む	
20	30Y/2	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量含む	
21	30Y/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往洗い下少量含む	
22	10YR6/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック含む、既往化物多量含む	
23	10YR6/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック少量含む	
24	10YR4/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往化物少量含む	
25	2,57/2	褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
26	10YR4/1	灰褐色	粘質シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量、既往化物シルトブロック含む、既往化物多量含む	
27	30Y/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往化物少量含む	
28	2,07/0	褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック、既往化物多量、既往化物少量含む	
29	10YR5/5	灰褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往化物多量含む	
30	10YR5/5	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
31	10YR4/1	褐色	シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
32	10YR4/1	褐色	シルト	標2cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
33	2,57/0	褐色	粘質シルト	標1cm以下の褐色シルトブロック、既往化物少量含む	

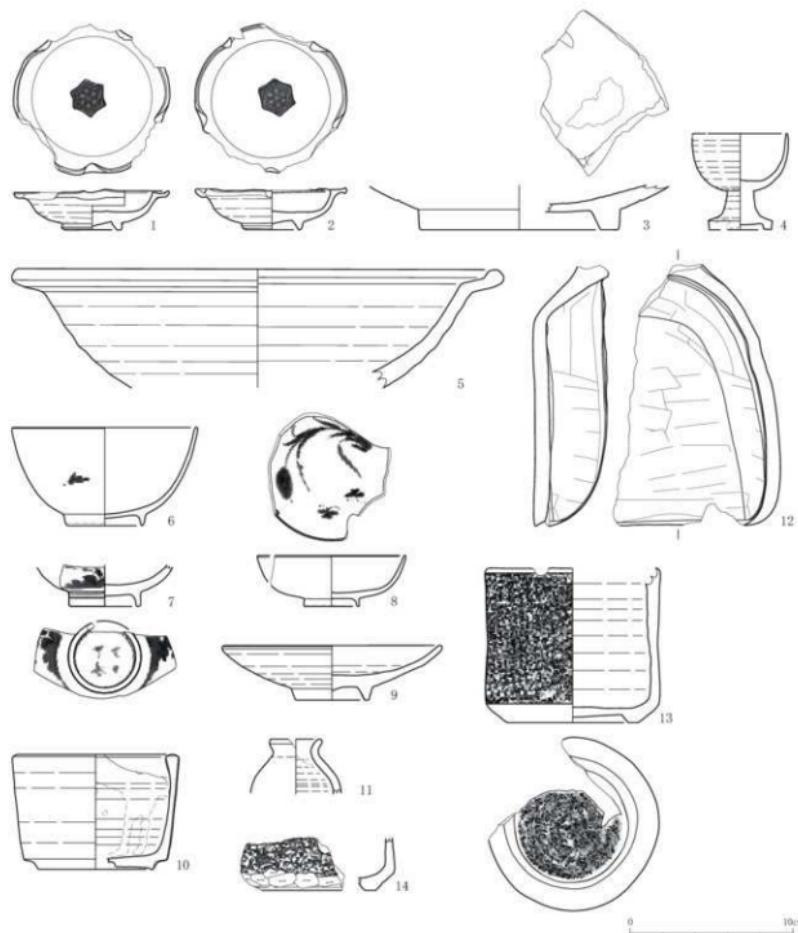
第20図 SX12(2)



図版番号	登錄番号	種類	器種	遺構・層位	法 長(cm)	底 径	底深 さ	器高 さ	産 地	時 期	備 考	写真図版
1	1015	陶器	碗	網	3312-008	10.6	4.7	6.8	大船形馬	18C代	高台内に網附	93-9
2	1020	陶器	碗	網	3312-008	11.4	4.8	7.1	小野形馬	18C代	淡青色釉 網附波	93-5
3	1027	陶器	碗	網	3312-1008	(10.4)	3.6	6.5	大船形馬	17C後半	灰釉	93-3
4	1013	陶器	碗	網	3312-008	(9.8)	3.7	5.8	大船形馬	18C代	内面～体部上半に灰釉 上半に斜軸の剥げ分け	93-6
5	1016	陶器	碗	網	3312-008	9.9	5.7	6.0	大船形馬	18C代	内面～体部上半に灰釉 上半に斜軸の剥げ分け	93-4
6	1022	陶器	碗	網	3312-008	(9.8)	3.6	5.8	大船形馬	18C代	内面～体部上半に灰釉 上半に斜軸の剥げ分け	93-8
7	1031	陶器	碗	網	3312-008	10.5	4.0	5.8	大船形馬	18C代	灰釉 蔵元による青みが見える	93-1
8	1033	陶器	碗	網	3312-1508	10.6	4.1	5.9	大船形馬	18C代～19C	灰釉 網附波	93-2
9	1032	陶器	碗	網	3312-008	10.9	3.5	5.5	小野形馬	18C代	淡青色釉	93-11
10	1036	陶器	碗	網	3312-008	9.1	4.0	6.3	大船形馬	18C代	灰釉	93-10
11	1029	陶器	碗	網	3312-008	8.7	3.4	4.1	大船形馬	18C代	灰釉 小型品 小ぶりが増える18C代の可能性あり	93-12
12	1030	陶器	碗	網	3312-1008	(9.7)	3.7	6.2	小野形馬	18C代	淡青色釉 網折れ型 身面に剥げ分け 体部下半に横縞入る	93-7
13	1024	陶器	碗	網	3312-1508	8.9	5.2	6.6	直立丸?	江戸時代後半	色絵 文字文(漢詩か?)と草文 色下に白化粧土を巻る	93-13
14	1023	陶器	筒形瓶	網	3312-1108	(9.4)	4.2	5.3	大船形馬	18C代	灰釉	93-14
15	1018	陶器	碗	網	3312-008	(8.5)	-	-	大船形馬	18C代	灰釉 網折れ	93-15
16	1019	陶器	碗	網	3312-008	9.9	4.4	5.15	小野形馬	18C代	淡青色釉 網折れ型 体部下平に横縞入る	93-16
17	1012	陶器	碗	網	3312-008	-	3.9	3.4	大船形馬	18C代	灰釉	93-17
18	1008	陶器	碗	網	3312-1508	-	3.21	-	大船形馬	18C代	灰釉 丸綻	93-18
19	1026	陶器	碗	網	3312-1508	-	2.8	1.9	直立丸?	18C前半	灰釉 小型品 部分差切り瓶あり	93-21
20	1035	陶器	瓶	網	3312-1508	13.8	4.7	3.9	把頭	17C後半	青緑釉 瓶の目袖剥ぎ	93-24
21	1017	陶器	瓶	網	3312-008	13.7	5.0	4.0	把頭	17C後半	青緑釉 瓶の目袖剥ぎ	93-23
22	1026	陶器	小瓶	網	3312-1508	10.1	3.2	2.0	把頭	17C代	黄石釉	94-3
23	1011	陶器	瓶	網	3312-008	(9.5)	3.6	2.1	大船形馬	18C前半	青緑釉	94-2
24	1034	陶器	瓶	網	3312-2608	(10.4)	3.6	6.6-10.5	把頭	17C後半	青緑釉 瓶の目袖剥ぎ	93-22

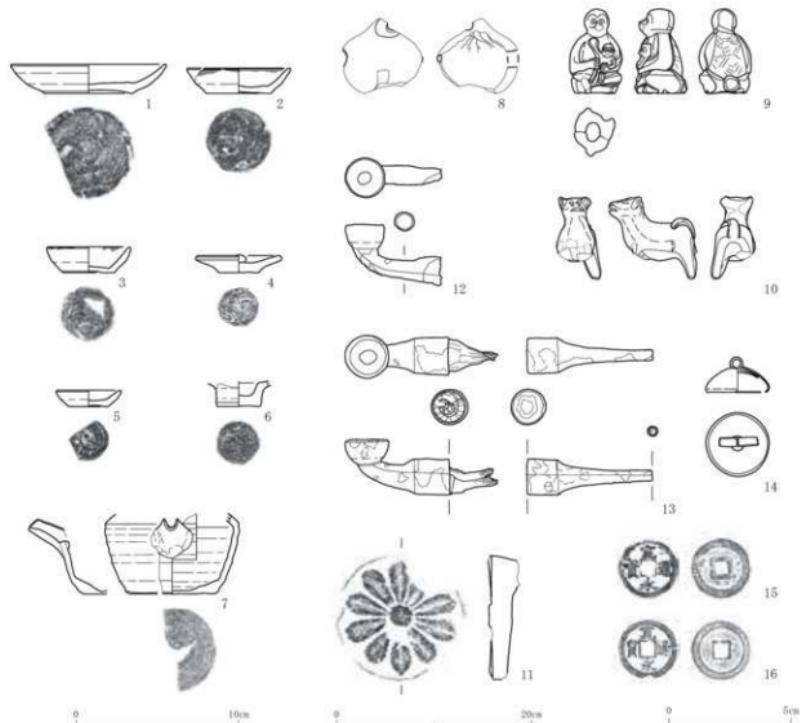
第21図 SX12 出土遺物(1)

第1節 Ⅲ層の状況と上面検出の遺構



団査番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法 善(cm)			産 地	時 期	備 考	写真図版
					直径	通路	器底				
1	1014	陶器	輪花皿	S02 6周	9.6	3.2	2.5	大堀和馬	18C後半	灰釉、見込みに型押しの文様	93-19
2	1010	陶器	輪花皿	S012 6周	9.1	3.6	2.4	大堀和馬	18C後半	灰釉、見込みに型押しの文様	93-20
3	1025	陶器	鉢	S012 15周	-	12.0	2.75	津津	17C前半	刷毛目文、鉄袖施し、砂目の目跡あり	93-1
4	1009	陶器	山形器	S012 6周	2.9	3.8	5.9	大堀和馬	18C後半	灰釉	93-4
5	1021	陶器	大鉢	S012 6周	(29.6)	-	-	肥前	12C後半	-	93-5
6	J007	磁器	碗	S012 6周	(11.2)	(4.6)	6.0	肥前	18C代	-	93-6
7	J009	磁器	碗	S012 15周	-	4.2	-	肥前	18C代	染付、くらわんか手、高台内に大明年製の窓あり	93-8
8	J004	磁器	皿	S012 6周	(9.0)	3.4	3.2	肥前	1484年(弘治)	染付、小物の皿、内面、模様+繪付文?、高台が崩くらむ、細身	93-9
9	J008	磁器	皿	S012 6周	13.2	4.5	3.4	肥前	1484年(弘治)	染付、見込みに目跡あり、窓付に絵付文?	93-11
10	J006	磁器	香炉	S012 6周	(9.31)	(7.0)	7.5	波佐見	江戸時代	波佐見、鶴の目高台	93-7
11	J005	磁器	瓶	S012 6周	32.0	-	-	青磁	明治	青磁、頭部に櫻落文あり	93-10
12	1091	瓦質土器	十樂	S012 6周	(16.0)	(10.3)	4.6	不明	不明	内面へテラリ工具によるナデ?	93-12
13	1091	瓦質土器	火入れ?	S012 6周	(16.1)	8.0	9.5	在地か	不明	底部、手切り技法残?	93-13
14	1090	瓦質土器	火入れ?	S012 6周	-	(8.6)	-	不明	不明	工長瓶、基筒底タイプ	93-14

第22図 SX12 出土遺物(2)



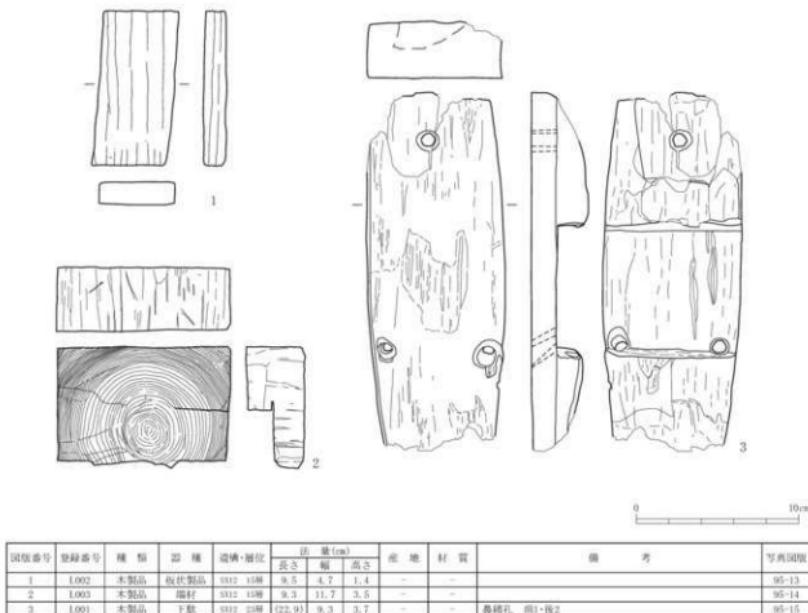
図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・層位	法 番(cm)			記述 赤土 赤褐色	備 考	写真図版
					長さ	幅	高さ			
1	1102	土師器上部	瓶	4	33.0	6.0	(9.5) (5.4)	1.8	al.	94-15
2	1100	土師質下部	瓶	5	33.0	6.0	(6.2) 4.0	1.6	赤?	以縁部に保村村
3	1103	土師器上部	瓶	5	33.0	6.0	5.1	3.3	1.6	不明
4	1116	土師器上部	壺	-	33.0	6.0	5.3	2.4	1.1	ツマミ置配り付?
5	1101	土師器七寸	瓶	5	33.0	6.0	(4.0) (2.4)	1.0	al.?	94-18
6	1117	土師器七寸	不明	-	33.0	6.0	-	2.7	1.6	箱庭用具か?
7	1115	土師質下部	水差	-	33.0	6.0	-	(5.2)	-	不明

図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・層位	法 番(cm)			備 考	写真図版
					長さ	幅	高さ		
8	P001	土器底	土器	33.0	6.0	-	-	-	94-22
9	P002	土器底	土器	33.0	6.0	3.2	3.2	5.2	堆積(底) 型合付世品
10	P003	土器底	土器	33.0	15.0	(5.3)	(2.7)	(5.0)	(火)

図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・層位	法 番(cm)			備 考	写真図版			
					長さ	直径	底面幅					
11	H021	菊文瓦	A	33.0	9.0	-	(12.7)	-	0.4	405	-	花弁数10

図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 番(cm)			重 量(g)	備 考	写真図版
					長さ	幅	厚さ			
12	N007	小口の鉢形土器	縦管	33.0	8.0	3.9	0.7	0.1	6.1	火壇形:1.5cm 縦管の端部が潰れています
13	N008	小口の鉢形土器	縦管	33.0	15.0	4.0	1.1	0.1	18.7	火壇形:1.8cm 縦管長:4.3cm 縦管径:1.5cm 炉口径:1.5cm 炉口径:1.9cm
14	N010	陶製品	不明	33.0	8.0	2.6	-	0.1	6.0	炉口:1.4cm 縦管長:5.1cm 細い金具か?
15	N014	陶製品	鉢	33.0	8.0	2.4	-	0.1	4.0	「竈水通販」
16	N015	陶製品	鉢	33.0	15.0	2.5	-	0.1	2.7	「竈水通販」

第23図 SX12 出土遺物(3)



第24図 SX12 出土遺物(4)

品のN003～006、N011・012は写真のみ掲載する。

H021（第23図-11）は菊丸瓦の瓦当部で、花弁数は10弁である。9層から出土している。

I017-021・026・034・035（第21図-20～22・24、第22図-5）は肥前陶器である。I017-026・034・035は皿で、I017-034・035は青緑釉、見込みに蛇の目釉剥ぎがみられる。I017-035は1層、I026は15層、I034は26層から出土している。時期はI017-034・035が17世紀後半、I026が17世紀代である。I021は大鉢で、9層から出土している。時期は17世紀代と考えられる。

I025（第22図-3）は唐津産陶器の鉢で、見込みに刷毛目文と砂目の目跡がみられる。15層から出土しており、時期は17世紀前半である。

I008-016・018-022・023-027-029-031-033-036（第21図-1・3～8-10-11-14-15-17-18-23、第22図-1・2・4）は大堀相馬産の陶器である。I008-012-013-015-016-018-022-027-029-031-033-036は碗で、I015は高台内に釉掛けがみられる。I008-036は1層、I012-013-022-031は6層、I015-016-029は8層、I018は9層、I027-I033は15層から出土している。時期はI027が17世紀後半、I033が18世紀前葉～中葉、I008-012-013-015-016-018-022-029-031-036が18世紀代である。I023は筒型碗で、11層から出土している。時期は19世紀代である。I011は皿で、6層から出土している。時期は19世紀前半である。I010-014は輪花皿で、見込みに型押しによる文様がみられる。I010-014は6層から出土しており、時期は全て18世紀後半である。I009は仏壇器で、6層から出土している。時期は18世紀後半である。

I019-020-030-032（第21図-2・9-12-16）は小野相馬産陶器の碗で、I030の外面には貼り付けがみられる。

I019・020・032は9層、I030は10層から出土しており、時期は全て18世紀代である。

J028（第21図-19）は堤産陶器の碗で、底部に回転糸切り痕がみられる。15層から出土しており、時期は19世紀前半である。

J024（第21図-13）は京都系と考えられる陶器の碗で、外面に草文と文字文がみられる。15層から出土しており、時期は江戸時代後期である。

J004・007～009（第22図-6～9）は肥前磁器である。J007・009は碗である。J009は「くらわんか手」の染付で、高台内に「大明年製」の銘がみられる。J009は1層、J007は8層から出土しており、時期は全て18世紀代である。J004・008は染付皿である。J008は見込みに目跡、疊付に砂の付着がみられる。J004は6層、J008は9層から出土している。時期はJ008が17世紀中葉で、J004は18世紀前半と考えられる。

J005・006（第22図-10・11）は波佐見産青磁である。J005は瓶類で、頸部に環珞文がみられる。6層から出土しており、時期は18世紀代と考えられる。J006は香炉で、8層から出土している。時期は江戸時代である。

I089～091（第22図-12～14）は瓦質土器である。I089は十能で、2層から出土している。I090・091は火入れと考えられる。I090・091は全て6層から出土している。

I100～103・115～117（第23図-1～7）は土師質土器である。I100～103は皿で、I100～102の底部には回転糸切りがみられる。I100・101は6層、I102・103は8層から出土している。I115は水差で、体部に墨書がみられる。6層から出土している。I116は蓋である。ツマミ部は貼り付けで、底部には回転糸切りがみられる。8層から出土している。I117は箱庭道具と考えられ、底部には回転糸切りがみられる。9層から出土している。

N003～006は鉄釘で、N003・N004は6層、N005は8層、N006は9層から出土している。N007・008（第23図-12・13）は煙管で、N007は8層、N015は15層から出土している。N010～012（第23図-14）は銅製品で、N010は飾り金具の一部と考えられる。N011・012の器種は不明である。N010・011は6層、N012は9層から出土している。N014・015（第23図-15・16）は古銭の「寛永通寶」である。N014は8層、N015は15層から出土している。

P001～003（第23図-8～10）は土製品である。P001は土鉢で、6層から出土している。P002は猿型土人形で、8層から出土している。P003は大型土人形で、15層から出土している。

L001～003（第24図-1～3）は木製品である。L001は下駄で、鼻緒孔は前側に1カ所、後側に2か所みられる。23層から出土している。L002・L003は建築部材の一部と考えられる。L002・003とともに15層から出土している。

第2節 IV層上面検出の遺構（第25～29図）

IV層は若林城造営時の整地土であり、搅乱で削平されている地点はあるものの調査区のはば全域で確認されている。IV層上面はIII層に伴う耕作により抑制されたことで、かなりの厚さが作土化したものとみられる。残存するIV層上面の標高は約12.00mである。IV層はベースとなる土壤や混入物によりIVa～IVc層に細分できる。

IV層での確認遺構は若林城域に伴うものに限らず、廃城後に造られたものも多数ある。このことから各遺構の時期判別においては、これまでの調査で確認した若林城期遺構との関連性を考慮した上、配置状況、他遺構との重複関係や方向、若林城の柱間寸法基準（1間を六尺五寸とする）のほか、構造や堆積土状況、出土遺物等により判断した。

若林城関連の遺構は、礎石建物跡（SB）3棟（SB5、14、16）、掘立柱建物跡1棟（SB15）、その他礎石跡5箇所のほか、建物周辺に配置された雨落ち溝跡や水路（SD）35条、城内を区画する堀跡（SA）17条、性格不明遺構5基（池跡2、溜め井戸1、不明1）、土坑（SK）148基、ピット（P）165基、石敷遺構5箇所、六郷堀跡1条である。

これまでの調査範囲では、礎石建物とこれらを区画する溝跡・堀跡を中心とした御殿建物を形成する遺構が多数確認されている。第10次・13次～15次調査では、六郷堀跡をはじめとする城内を区画する溝跡・堀跡を多く確認しており、これらが複雑に重複することを確認した。このことは過去の調査で報告されたように、若林城が短い存続期間中に改修されていたことを再確認させるものである。また遺構の中には廃城後の改修により使用され続けたものも多くみられた。

しかしその他IV層上面で確認した廃城後の近世遺構には、広範囲に確認された多数の土坑等がみられるが、これらの殆どは細耕作に関連するものと考えられる。本来、III層上面で確認すべきものも含まれている可能性がある。

（1）礎石建物跡（SB）

5号礎石建物跡（SB5）（第28・30～32図）

位置 Y37～43・X36～38グリッドで礎石跡21基を検出した。位置関係から第14次調査区の南側に接する第7次調査で確認したSB5と同一のものと考えられる。

方向 N-80°-Wで六尺五寸の方眼に一致する。

規模 東西14間（27.50m）以上、南北3間（5.90m）とみられる東西方向に長い建物跡である。建物跡の西側は搅乱で削平されている。

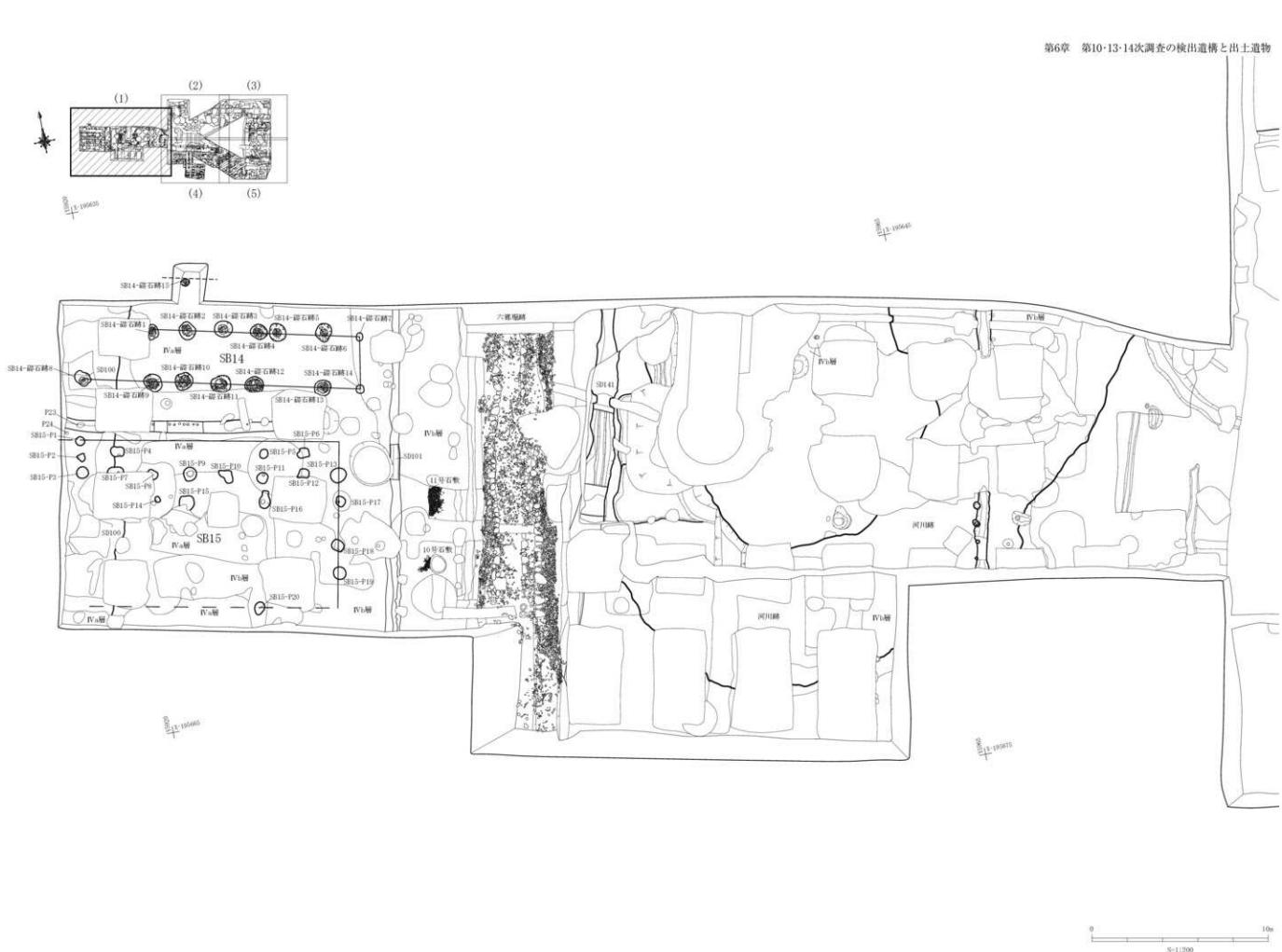
個々の礎石跡の掘り方規模は、大きなもので0.60～0.90mの円形を基本とするが、梢円形・不定形を呈するものもみられる。掘り方の深度は断面観察のできた礎石跡5で0.25m、礎石跡7で0.10mである。

礎石跡の間隔・柱間の距離は、これまでの調査で確認した建物の柱間基準である六尺五寸の方眼に一致する。

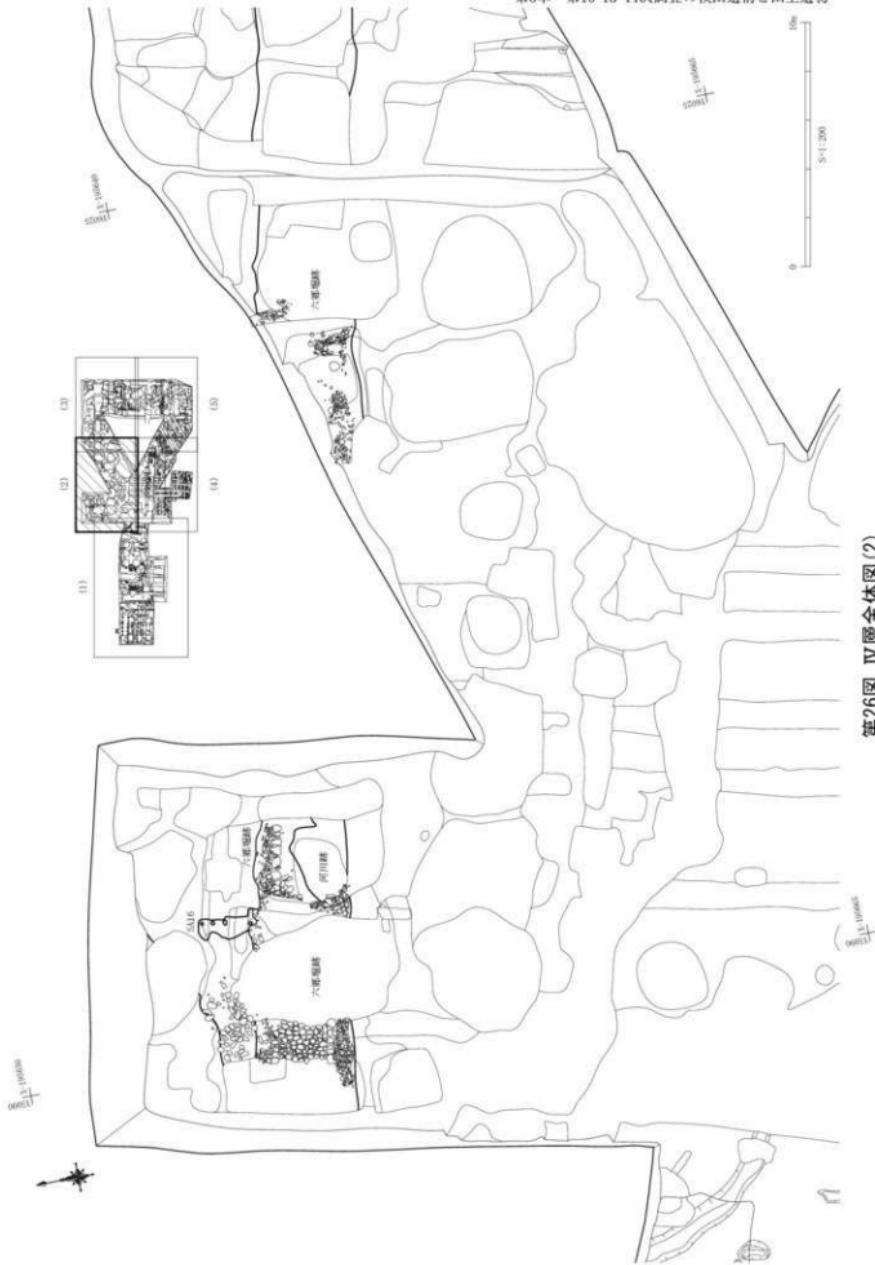
重複関係 SD109より古い。SD111・112・116と重複しているが、直接的な新旧関係は不明である。

礎石跡 純石跡は21基を確認したが、残存状況は極めて悪く、上部の大部分が御薬園期や宮城集治監の整地時に削平・破壊されている。礎石は全て抜き取られており、根固め石・掘り方のみの確認である。根固め石の個々の石の径は小さく、量も少ない。掘り方埋土もこれまでの調査で確認された礎石跡のような叩きしめた状態はみられない。個々の礎石跡のうち、礎石跡2・4・5・7・10・11・12・14～21には掘り方・根固め石が残るが、礎石跡1・3・6・8・9・13は掘り方痕跡のみの確認である。また礎石跡15・16・19・20では中央に礎の残存が希薄な範囲を確認している。これは礎石の抜き取り穴と考えられる。

根固め石の残存状況は、礎石跡15・16・18・19・20では礎が密に充填されていたが、他の礎石跡は掘り方埋め土に礎が散在している状況である。確認できた礎の大きさは5～50cmである。根固め石が見られない礎石跡1・3・6・8・9・13では、底面近くまで削平されているため礎は認められないが、砂礎の混入を観察することができた。

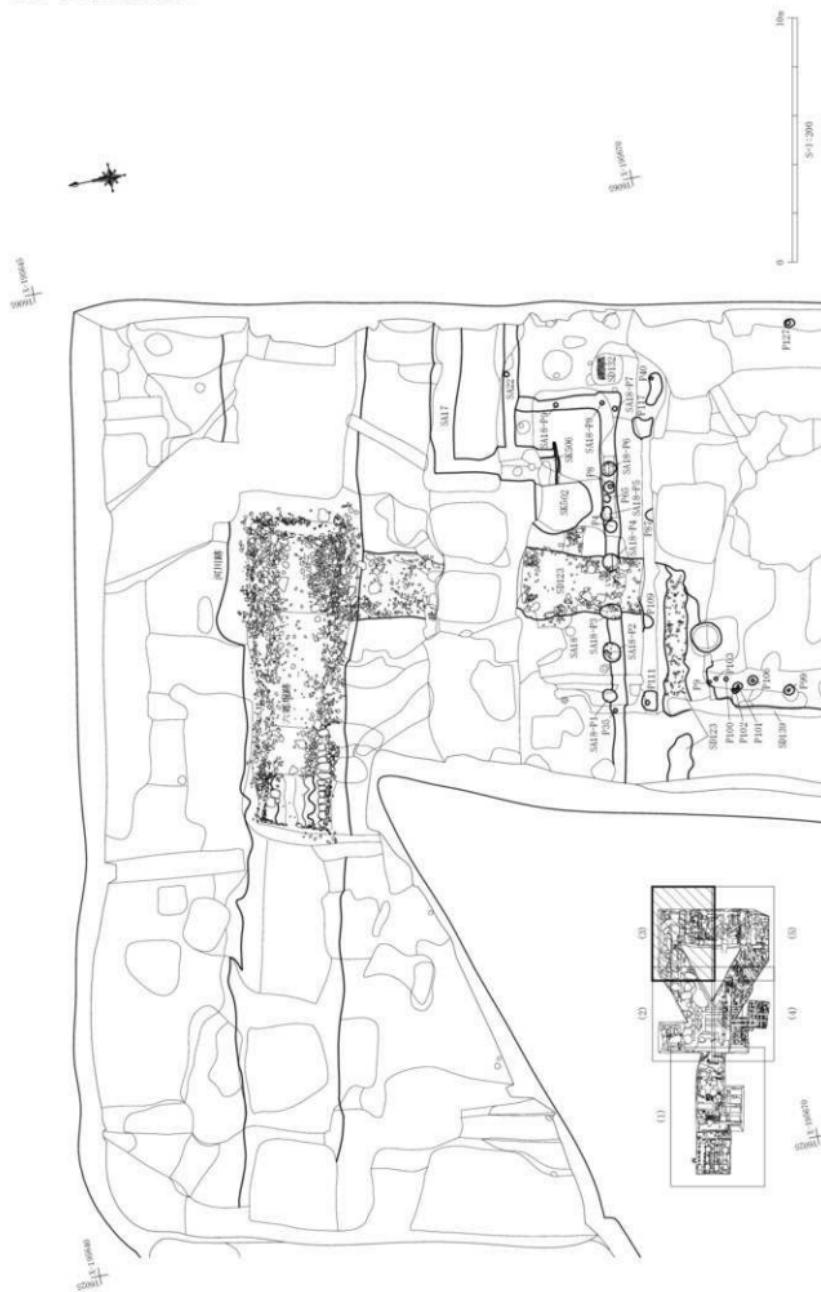


第25図 IV層全体図(1)

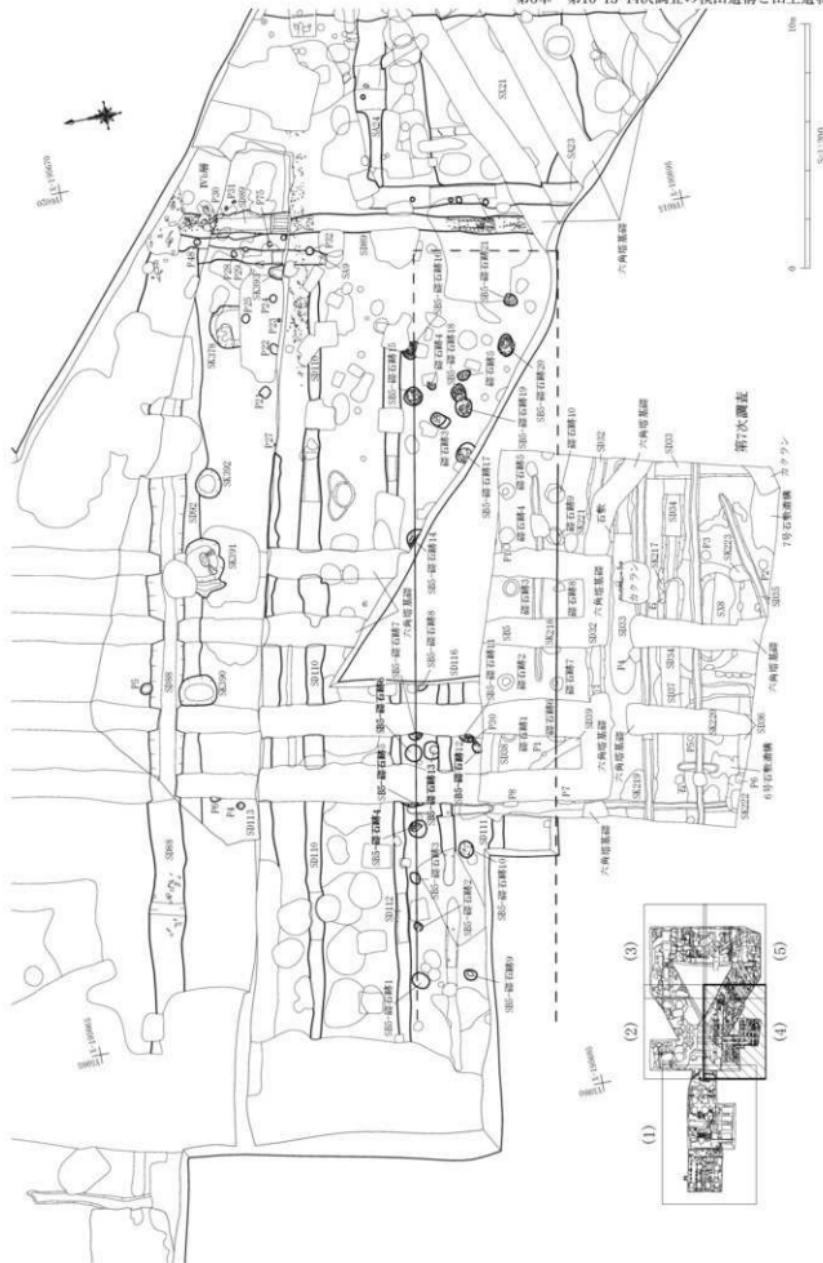


第26図 IV層全体図(2)

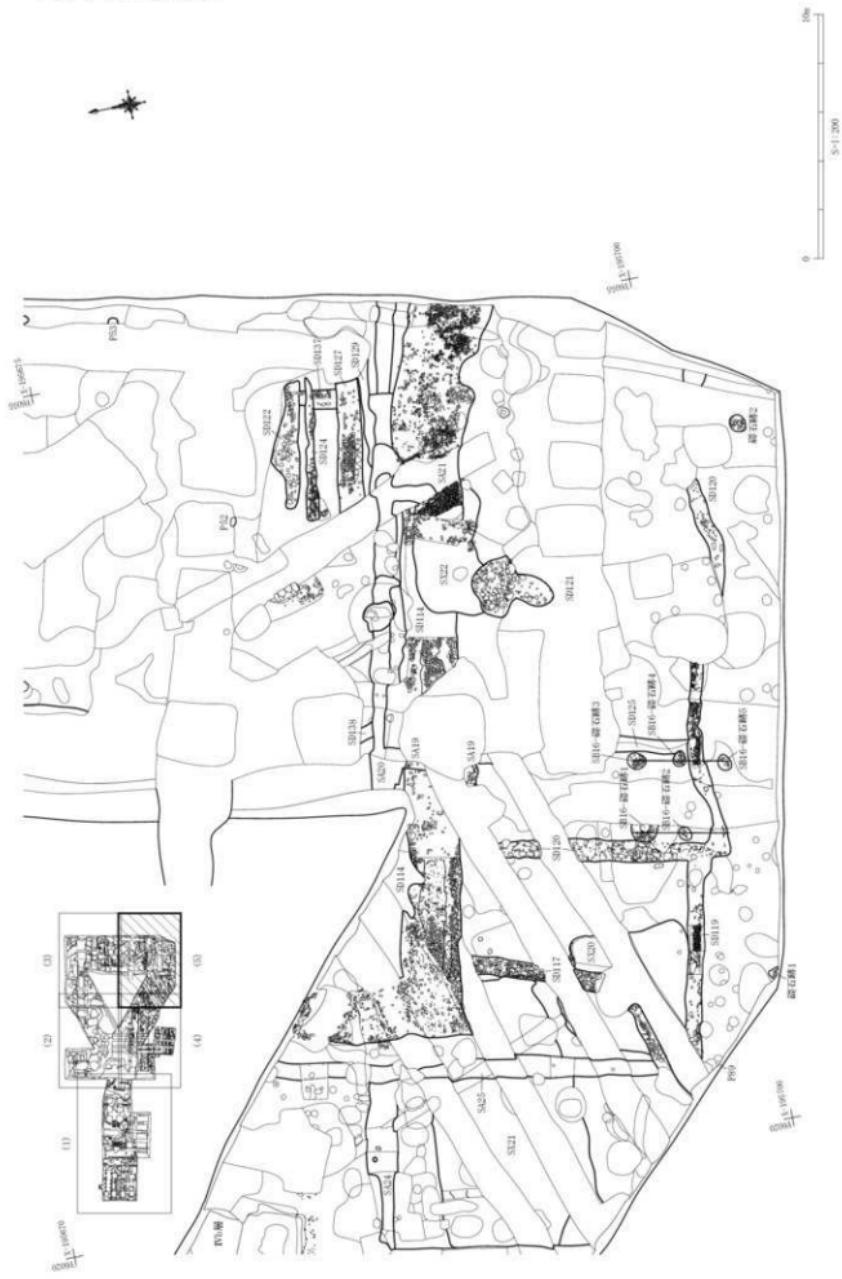
第2節 IV層上面検出の遺構



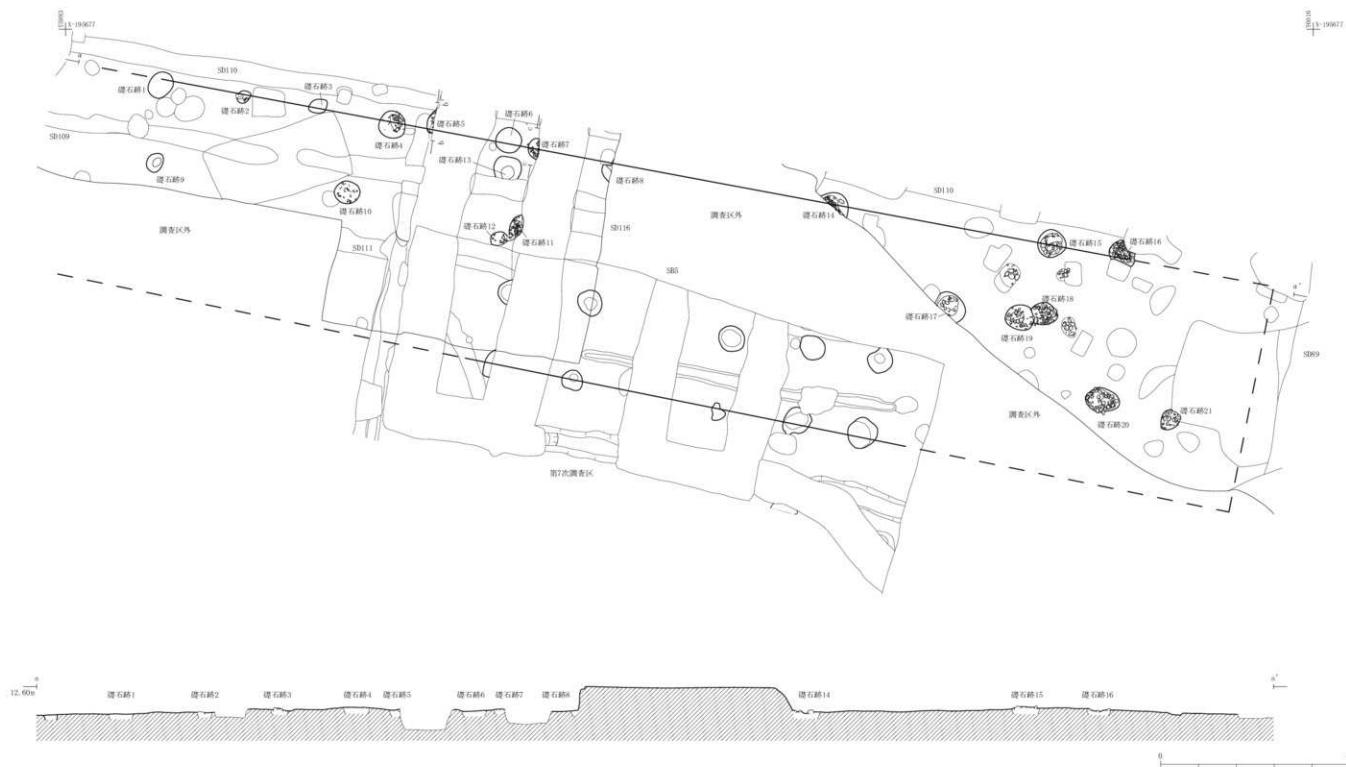
第27図 IV層全体図(3)



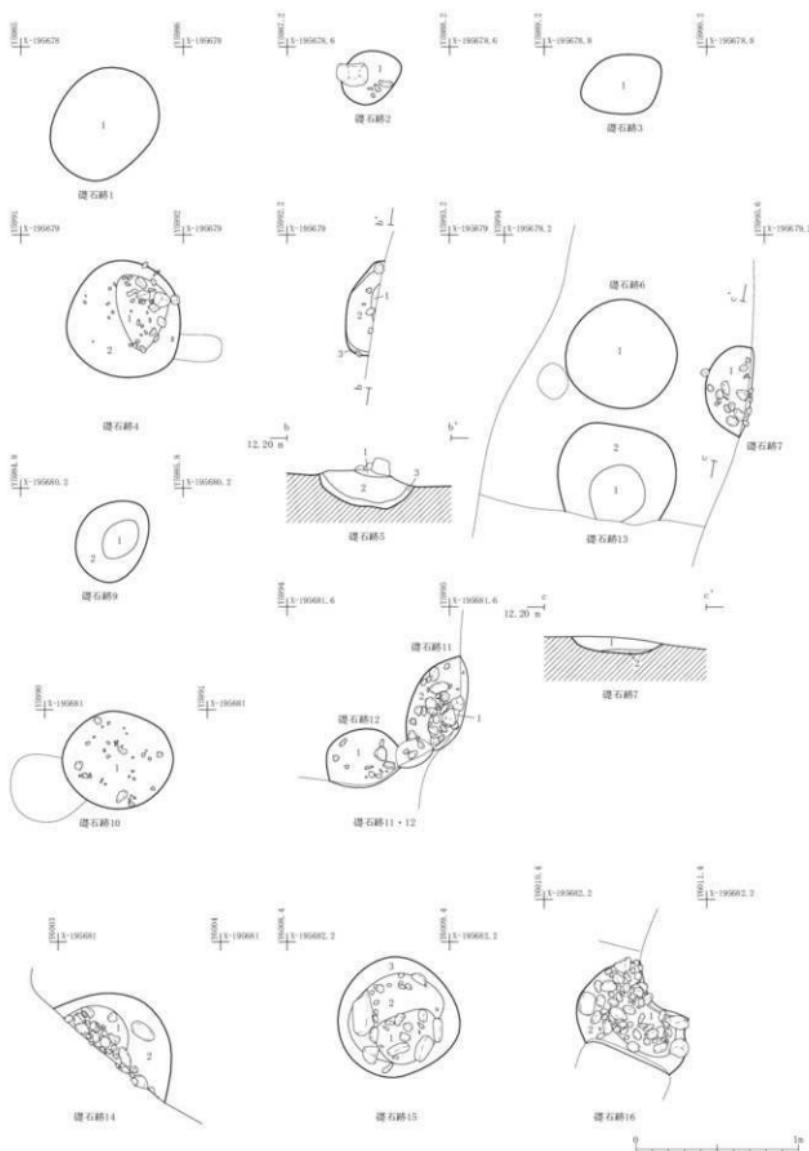
第2節 IV層上面検出の遺構



第29図 IV層全体図(5)

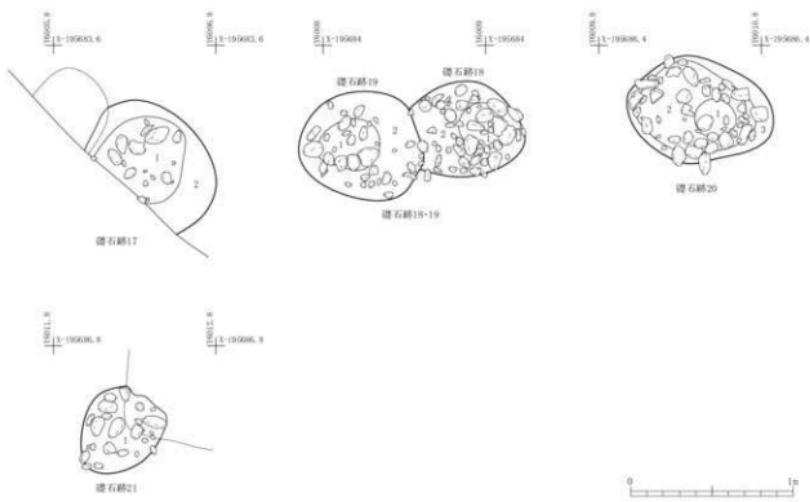


第30図 SB5 (1)



第31図 SB5 (2)

第2節 IV層上面検出の遺構



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
礫石跡1	1	10YR4/4 棕色	砂質シルト	径5cm以下の円錐少量含む	掘り方理工士
礫石跡2	1	10YR4/6 棕色	砂質シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック、径20cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡3	1	10YR5/1 暗灰色	シルト	径5cm以下円錐、部分含む	掘り方理工士
礫石跡4	1	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下円錐、部分含む	掘り方理工士
	2	10YR6/1 棕色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック、径1cm以下部分含む	掘り方理工士
礫石跡5	1	10YR4/2 暗黄色	シルト	径5cm以下円錐含む	抜き取り机
	2	10YR6/5 黄褐色	シルト	径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
	3	10YR4/6 棕色	砂質シルト	径5cm以下、の灰黒色シルトブロック少量含む	掘り方理工士
礫石跡6	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の黄褐色シルトブロック、径20cm以下円錐、瓦含む	掘り方理工士
	2	10YR6/2 暗褐色	砂質シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック、径20cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡7	1	10YR6/2 暗褐色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック、灰化物微量含む	掘り方理工士
礫石跡8	1	10YR5/6 明黄色	シルト	径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
	2	10YR4/1 棕色	シルト	径5cm以下、の黒褐色シルトブロック、径30cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡9	1	10YR5/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック含む	掘り方理工士
	2	10YR5/4 暗褐色	シルト	径5cm以下、の黒褐色シルトブロック、径10cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡10	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック、灰化物微量含む	掘り方理工士
礫石跡11	1	10YR4/1 棕色	シルト	径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
	2	10YR4/6 棕色	砂質シルト	径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡12	1	10YR7/4 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下、の黒褐色シルトブロック少量含む、径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
	2	10YR4/6 棕色	砂質シルト	径5cm以下円錐含む	掘り方理工士
礫石跡13	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の鉛分含む	掘り方理工士
	2	10YR6/6 黄褐色	シルト	径5cm以下、の鉛分含む	掘り方理工士
礫石跡14	1	10YR5/3 暗褐色	シルト	径5cm以下、の暗灰色、黒褐色シルトブロック、径10cm以下円錐含む	掘り方理工士
	2	10YR6/4 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下、の黒褐色、暗灰色シルトブロック、円錐を少量含む	掘り方理工士
礫石跡15	1	10YR5/1 暗褐色	シルト	径5cm以下、の円錐少量含む	抜き取り机
	2	10YR5/5 暗褐色	シルト	径5cm以下、の円錐少量含む	掘り方理工士
	3	10YR4/6 棕色	シルト	径5cm以下、の黒褐色シルトブロック、径1cm以下部分含む	掘り方理工士
礫石跡16	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の円錐を多量含む	抜き取り机
	2	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下、の暗褐色シルトブロック、径20cm以下円錐を多量含む	掘り方理工士
礫石跡17	1	10YR5/6 明黄色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック、径15cm以下円錐含む	掘り方理工士
	2	10YR7/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロックを含む	掘り方理工士
礫石跡18	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の円錐含む	抜き取り机
	2	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック、円錐を多量含む	掘り方理工士
礫石跡19	1	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック、円錐を含む	掘り方理工士
	2	10YR5/4 暗褐色	シルト	径5cm以下、の褐色、黃褐色シルトブロック、円錐を含む	掘り方理工士
	3	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の黒褐色シルト、円錐含む	掘り方理工士
礫石跡20	1	10YR5/3 暗褐色	シルト	径5cm以下、の褐色、黃褐色シルトブロック、円錐を含む	掘り方理工士
	2	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下、の褐色、黃褐色シルトブロック、円錐を含む	掘り方理工士
	3	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下、の褐色シルトブロック、円錐含む	掘り方理工士
礫石跡21	1	10YR5/3 暗褐色	シルト	径5cm以下、の黒褐色、褐色シルト、円錐含む	掘り方理工士

第32図 SB5(3)

こここの礎石跡は概ね1間（1.97m）の間隔で配置されているが、礎石跡6・7・11～13・18・19は半間の間隔である。このことから半間の柱間が存在した可能性がある。また、各礎石跡の根固めや掘り方の構造はこれまで確認した御殿建物の礎石跡よりも簡易である。各礎石跡の規模・形状は以下の通りである。

礎石跡1は径0.74×0.59mの楕円形で、掘り方のみ確認した。現状でSB5の西端、北西隅に位置している。

礎石跡2は径0.39×0.32mの楕円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。

礎石跡3は径0.53×0.36mの楕円形で、掘り方のみ確認した。

礎石跡4は径0.80mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。礫が部分的に集中している範囲がある。

礎石跡5は東側を搅乱で削平されており、全体の1/3程の検出である。径0.97×0.16mの楕円形で、礫が全体に散在している。堆積土は搅乱壁面により3層を確認した。1層が抜き取り痕、2層が根固め、3層が掘り方と考えられる。

礎石跡6は径0.69mの円形で、掘り方のみ確認した。礎石跡7・13と近接して位置している。

礎石跡7は東側が搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径0.55×0.24mの楕円形で、礫が全体に散在している。堆積土は搅乱壁面により2層を確認したが、残存状況が極めて悪く、抜き取り痕、根固め、掘り方の区別は不明である。礎石跡6・13と近接して位置している。

礎石跡8は東側が調査区外に延び、北側は搅乱で削平されているため全体の1/4程の検出である。径0.45mの円形で、掘り方のみ確認した。

礎石跡9は径0.53×0.41mの楕円形で掘り方のみ確認した。現状でSB5の西端に位置している。

礎石跡10は径0.68mの円形で掘り方埋め土に礫が散在している。

礎石跡11は東側を搅乱で削平されており、全体の1/3程の検出である。径0.65mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。

礎石跡12は南側を搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径0.48mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。礎石跡11・12は近接して位置している。

礎石跡13は南側の一部を搅乱で削平されており、全体の4/5程の検出である。径0.76mの円形で、掘り方のみ確認した。礎石跡6・7と近接して位置している。

礎石跡14は南西側が調査区外に延び、全体の1/2程の検出である。径0.71mの円形とみられ、掘り方埋め土に礫が散在している。

礎石跡15は径0.75mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。中央やや南の礫が希薄な範囲は抜き取り痕と考えられる。

礎石跡16は北側と南側が搅乱で削平されており、全体の3/5程の検出である。径0.76mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在しており、中央の礫が希薄な範囲は抜き取り痕と考えられる。

礎石跡17は南西側の1/3が調査区外に延び、全体の2/3程の検出である。径0.89mの円形で、掘り方埋め土には礫が散在している。

礎石跡18は径0.75mの円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。中央の礫が希薄な範囲は、抜き取り痕と考えられる。礎石跡19と重複しており、礎石跡19より新しい。

礎石跡19は径0.83×62mのやや楕円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。西側にやや礫の希薄な範囲がみられる。礎石跡18より古い。

礎石跡20は径0.98×0.80mの楕円形で、掘り方埋め土に礫が散在している。中央の礫が希薄な範囲は、抜き取り痕と考えられる。

礎石跡21は北東側の一部を搅乱に削平されており、径0.75×0.31mの楕円形で、掘り方埋め土には礫が散在している。現状でSB5の東端、南東隅に位置している。

第2節 IV層上面検出の遺構

構造 SB5は東西14間（27.50m）以上、南北3間（5.90m）の東西に長い礎石建物跡である。南の御殿建物群から約10m北に位置しており、建物北側は搅乱により若林城期の遺構は残っていない。方向は六尺五寸の方眼に概ね一致するが、方眼線上ではない。各礎石跡も簡易的な構造である。「御二之丸御指図」ではSB5のような細長い構造の建物は御番部屋などに見ることができる。

出土遺物 遺物は出土していない。

14号礎石建物跡（SB14）（第25・33～36図）

位置 Y24～27・X28～30グリッドで礎石跡15基を検出した。

方向 N-78°-Wである。

規模 東西51尺8寸（15.7m）以上、南北9尺9寸（3.0m）以上の東西に長い建物跡である。搅乱で削平されている。

各礎石跡の間隔は、東西方向の礎石跡8-礎石跡14列では概ね1間（1.97m）の間隔で配置されているが、礎石跡4・5は半間の間隔で配置されている。また礎石跡2の北側には、礎石跡15を確認したことから、同一の建物基礎と考えた場合、南北約6m（2間）規模になる可能性がある。東側の礎石跡7と礎石跡14は、Ⅲ層耕作土により上半部が失われ、掘り方のみ確認した。

個々の礎石跡の掘り方規模は、径約0.70～1.09mの概ね不整円形である。断面を確認できた礎石跡1-11・12で深さは約0.16～0.22mで、断面形態はいずれも弧状である。

重複関係 SD100より新しい。

礎石跡 純石跡は15基確認したが、礎石は全て抜き取られており、根固め石・掘り方のみの確認である。礎石跡1～6・9～13には根固め石が密に分布しており、径約5cm～15cmの円碟を使用している。根固めには碟が中央に集中しわずかに窪む礎石跡1・3・4・5・6・9・10・13と、碟の残りが希薄な範囲にⅢ層に類似した土が流入した礎石跡2・11・12があり、いずれも礎石の抜き取り痕と考えられる。これらの掘り方埋め土は概ね縞状を呈しており、人為的に突き固めながら埋めている。なお、根固め石の間と掘り方理土ともに瓦片の混入が見られた。礎石跡8・15は碟が散在しているが、削平が著しく根固め・掘り方の区別は不明である。各礎石跡については以下の通りである。

礎石跡1は西側が搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径0.88mの円形で、深さ0.22mである。堆積土は搅乱壁面により2層を確認した。1層には碟が集中していることから根固め、2層が掘り方と考えられる。根固めは径10cm以下の円碟である。根固め中央の僅かに円碟が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土は、僅かに縞状を呈している。

礎石跡2は径0.97mの円形で、根固めに碟が集中し、掘り方に碟が散在する。根固め中央の碟が希薄な範囲は抜き取り痕と考えられる。内部にはⅢ層に類似した土が混入する。掘り方埋土は僅かに縞状を呈している。

礎石跡3は径1.02mの円形で、根固めに碟が集中し、掘り方に碟が散在する。掘り方埋土は僅かに縞状を呈している。

礎石跡4は径0.90mの円形で、根固めに碟が集中し、掘り方に碟が散在する。根固め中央の僅かに円碟が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土は、僅かに縞状を呈している。礎石跡5に隣接する。

礎石跡5は径0.98mの円形で、根固めに碟が集中し、掘り方に碟が散在する。根固め中央の僅かに円碟が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土は、僅かに縞状を呈している。礎石跡4に隣接する。

礎石跡6は径0.99×0.85mの梢円形で、根固めに碟が集中し、掘り方に碟が散在する。根固め中央の僅かに円碟が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土は、縞状を呈している。

礎石跡7は径0.48×0.35mの梢円形で、掘り方のみ確認した。掘り方埋土は、縞状を呈している。

礎石跡8は径0.88mの円形で、根固め・掘り方に碟が散在する。掘り方埋土はやや縞状を呈している。

礎石跡9は南西隅が搅乱に削平されており、全体の9/10程の検出である。径1.09mの円形で、根固めに礫が集中し、掘り方に礫が散在する。根固め中央の僅かに円礫が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土はやや縞状を呈している。

礎石跡10は径1.01mの円形で、根固めに礫が集中し、掘り方に礫が散在する。根固め中央の僅かに円礫が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土はやや縞状を呈している。

礎石跡11は南側の一部が搅乱に削平されており、全体の9/10程の検出である。径1.13mの円形で、深さ0.16mである。堆積土は搅乱壁面により2層を確認した。1層は礫が希薄な範囲であり抜き取り痕と考えられる。2層が掘り方と考えられる。掘り方埋土は縞状を呈している。

礎石跡12は南側の一部が搅乱に削平されており、全体の9/10程の検出である。径1.04mの円形で、深さ0.19mである。堆積土は搅乱壁面により2層を確認した。1層は礫が希薄な範囲であり抜き取り痕と考えられる。2層が掘り方と考えられる。掘り方埋土は縞状を呈している。

礎石跡13は南西隅の一部が搅乱に削平されており、全体の9/10程の検出である。径0.89mの円形で、根固めに礫が集中し、掘り方に礫が散在する。根固め中央の僅かに円礫が落ち込む範囲は抜き取り痕と考えられる。掘り方埋土は僅かに縞状を呈している。

礎石跡14は径0.47mの円形で、掘り方のみ確認した。掘り方埋土は、縞状を呈している。

礎石跡15は径0.24mの円形で、根固めに礫が集中する。残存状況が悪く、根固め・掘り方の区別は不明である。

構造 SB14は東西方向に長い礎石建物跡である。西の大手門から北に約60mに位置しており、南側にはSA15とSB15が位置している。方向は若林城の六尺五寸の方眼からやや外れる。礎石跡の構築された面は瓦を含むIVa層であることから、御菴園期の建物の可能性がある。

出土遺物 磂石跡の掘り方や構築されたIVa層に瓦片が出土しているが、取り上げは行っていない。

16号礎石建物跡（SB16）（第29-37図）

位置 Y47~48・X40~41グリッドで、礎石跡5基を検出した。

方向 N-10°-Eで、六尺五寸の方眼と一致する。

規模 西側列の礎石跡1・2が1間（1.97m）、東側列の礎石跡3・5が2間（3.94m）である。

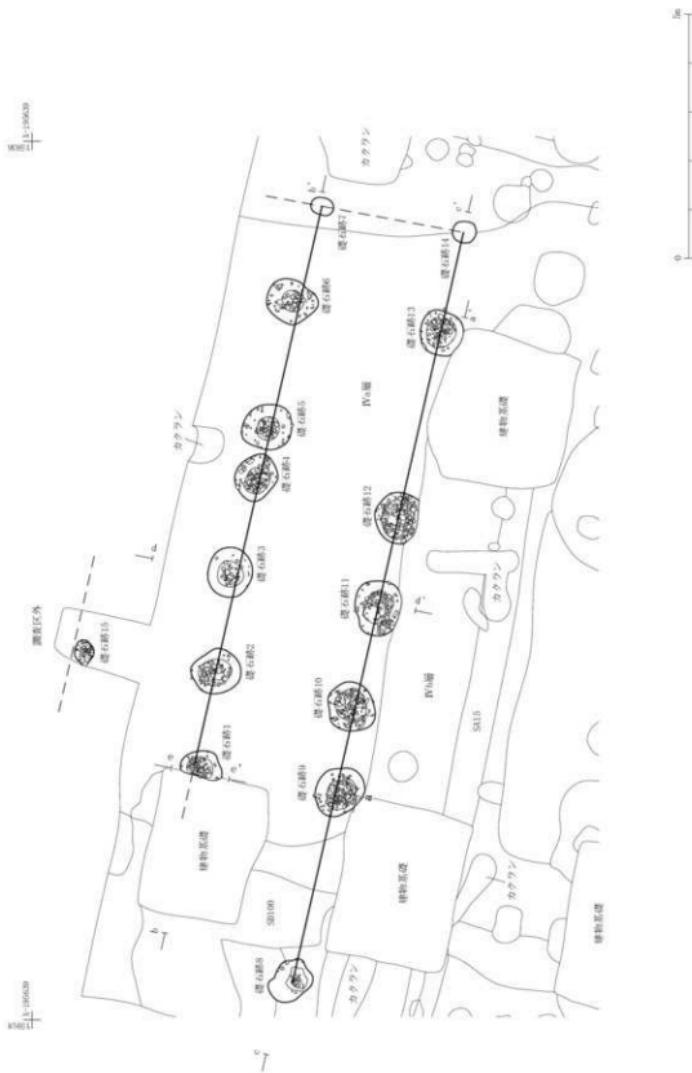
北側は搅乱で削平され、南側は調査区外に延びる。南側には第9次調査区が位置するが、SB16に該当する礎石跡は確認されていない。また、SB16の東西にも礎石跡の広がりを確認できなかったため、建物跡全体の規模は不明である。また、SD120・125との重複は僅かであることから、溝跡を意識して配置された南北に長い建物となる可能性がある。

重複関係 SD120・125、SK520より新しい。

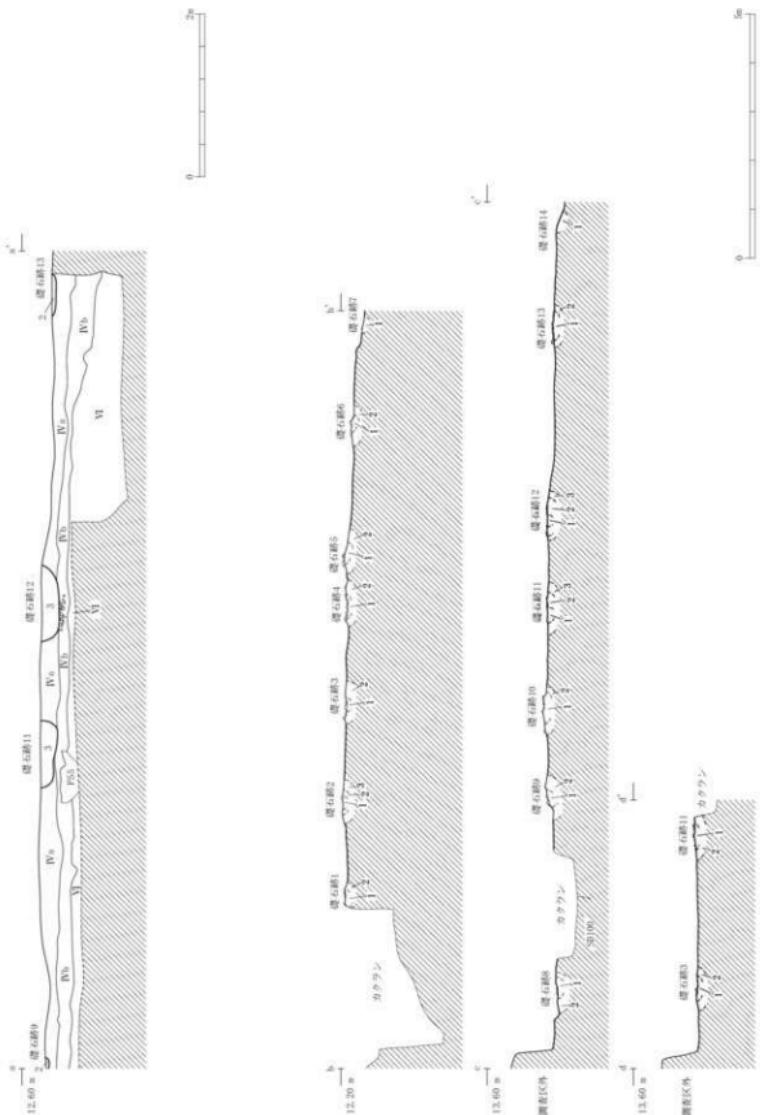
礎石跡 磠石跡は5基確認したが、大部分が搅乱に削平されており残存状況は極めて悪い。礎石は全て抜き取られており、根固め石・掘り方のみの確認である。

根固め石の個々の石の径は小さく、量も少ない。掘り方埋土もこれまでの調査で確認している礎石跡とは異なり、均質に叩きしめた状態がみられない。個々の礎石跡のうち、礎石跡1・4には掘り方・根固め石が残るが、礎石跡2・3・5は掘り方痕跡のみの確認である。また礎石跡1では礫の残りが希薄な範囲を確認している。これは礎石の抜き取り痕と考えられる。根固め石の残存状況は、礎石跡1・3・4では礫が密に充填されていたが、礎石跡2・5は掘り方埋土に礫が散在している。確認できた礫の大きさは3~20cmである。

列ごとの各礎石の柱間はいずれも1間（1.97m）の間隔で配置されているが、東西礎石列の間隔は2.98mで配置されている。これはおよそ1間半の柱間であり、SB16には半間の柱間が存在した可能性がある。各礎石跡についても

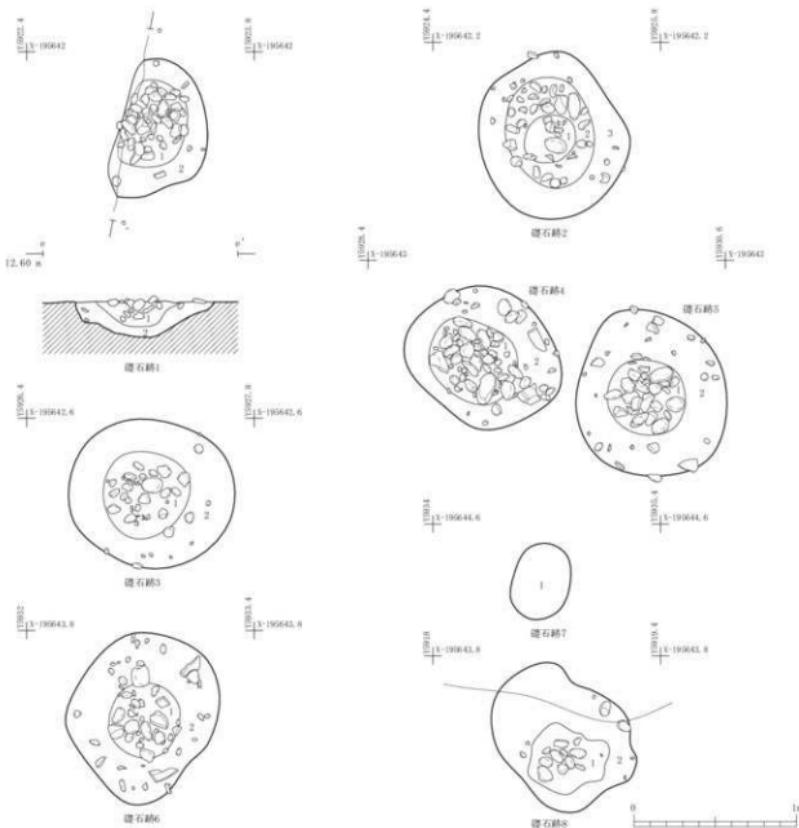


第33図 SB14(1)



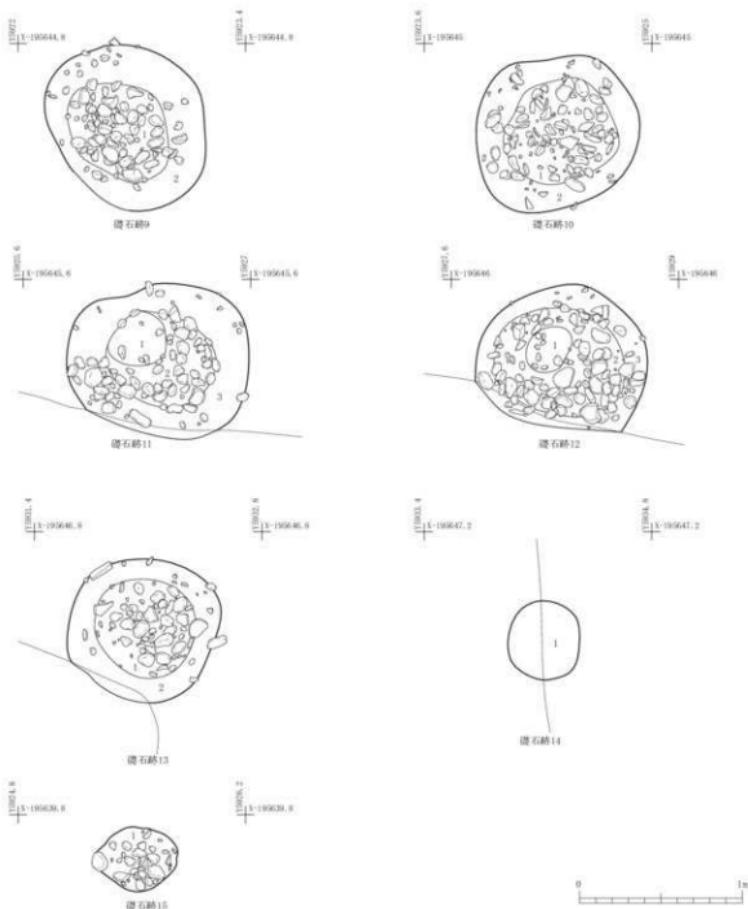
第34図 SB14 (2)

第2節 IV層上面検出の遺構



遺構	部位	土色	土性	特徴	備考
遺石跡1	1	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1m以下の灰黃褐色シルトブロック無量と10cm以下の円錐多量含む	掘削面
	2	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径1cm以下の(2)黄色地砂質シルトブロック含む 径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘り方理土
遺石跡2	1	10YR5/1 に古い黄褐色	砂質シルト	径10cm以下の円錐少含む	掘取盤
	2	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の化粧物無量と10cm以下の円錐多量含む	掘削面
	3	10YR5/2 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック多量含む	掘り方理土
遺石跡3	1	10YR5/4 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック無量含む	掘削面
	2	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径1cm以下の(2)黄色地砂質シルトブロック含む 径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘り方理土
遺石跡4	1	10YR5/4 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の(2)黄色地砂質シルトブロック含む	掘削面
	2	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘り方理土
遺石跡5	1	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック多量含む	掘削面
	2	10YR5/1 棕灰色	シルト	径2cm以下の相次ぎシルトブロック無量と10cm以下の明黄褐色シルトブロック含む	掘り方理土
遺石跡6	1	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径1cm以下の(2)黄色地砂質シルトブロック含む 径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘削面
	2	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径10cm以下の(2)黄色地砂質シルトブロック含む 径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘り方理土
遺石跡7	1	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック含む 径10cm以下の円錐無量と10cm以下の化粧物少量含む	掘削面
遺石跡8	1	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック多量含む	掘削面
	2	10YR5/3 に古い黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルトブロック多量含む	掘り方理土

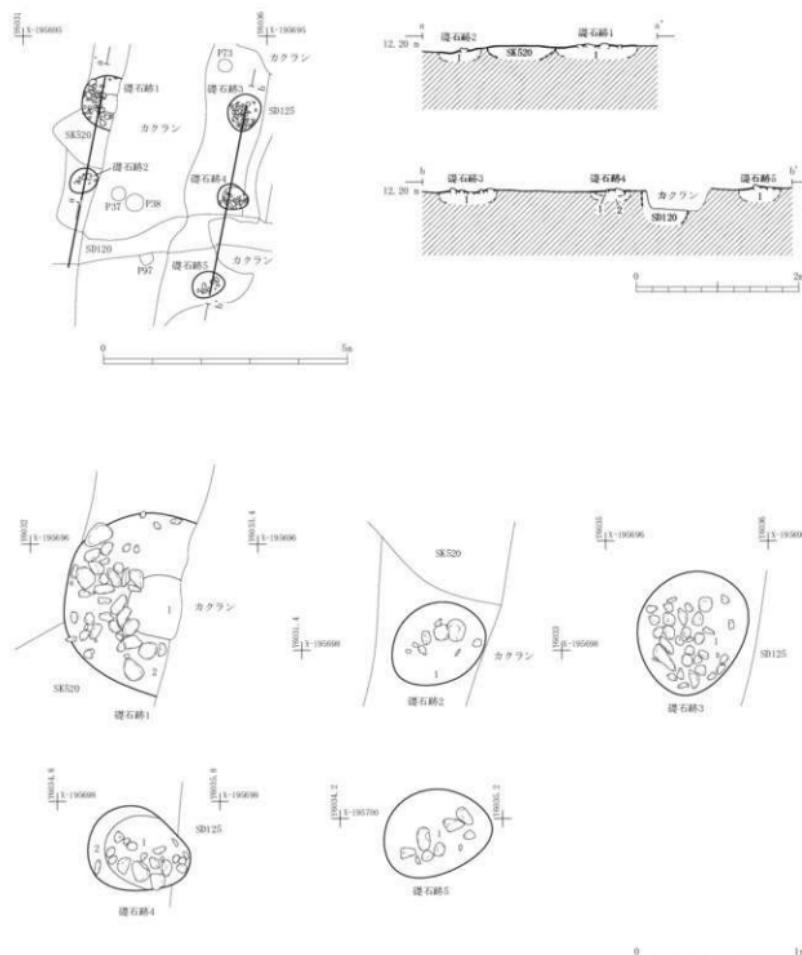
第35図 SB14(3)



遺構	層位	土 色	土 性	特 徴	鑑 考
墓石跡9	1	10YR5/3 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の炭化物無量と径10cm以下の円錐多量含む	掘り方理土
	2	10YR4/3 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック多量含む	掘り方理土
墓石跡10	1	10YR5/4 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック無量含む	掘り方理土
	2	10YR5/2 灰黄褐色	砂質シルト	径1cm以下のに占比 黄褐色砂質シルト・ブロック含む 径10cm以下の円錐無量と径1cm以下の炭化物少量含む	掘り方理土
墓石跡11	1	10YR4/3 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック含む	抜取板
	2	10YR5/3 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の炭化物無量と径10cm以下の円錐多量含む	掘り方理土
	3	10YR4/1 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック多量含む	掘り方理土
墓石跡12	1	10YR4/2 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック含む	抜取板
	2	10YR5/4 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック無量含む	掘り方理土
	3	10YR4/2 灰黃褐色	砂質シルト	径1cm以下の明黄褐色シルト・ブロック含む 径10cm以下の円錐無量と径1cm以下の炭化物少量含む	掘り方理土
墓石跡13	1	10YR5/3 に占比 黄褐色	砂質シルト	径1cm以下の炭化物無量と径10cm以下の円錐多量含む	掘り方理土
墓石跡14	1	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径5cm以下の円錐無量含む	掘り方理土
墓石跡15	1	10YR5/2 灰黃褐色	砂質シルト	径10cm以下の円錐多量と径1cm以下の炭化物微量含む	掘り方理土

第36図 SB14(4)

第2節 IV層上面検出の遺構



第37図 SB16

遺構	施位	土色	土性	特徴	備考
遺石跡1	1	10YR4/3 にぶい黄褐色	シルト	径20cm以下の中緑色シルトブロック、径10cm以下の円錐含む	掘り方埋め
遺石跡2	1	10YR4/4 棕褐色	砂質シルト	径10cm以下の中緑色含む	掘り方埋土
遺石跡3	1	10YR3/4 塔褐色	シルト	径20cm以下の中緑色シルトブロック、径10cm以下の円錐含む	掘り方埋め
遺石跡4	1	10YR5/6 茶褐色	シルト	径20cm以下の中緑色シルトブロック、径10cm以下の円錐含む	掘り方埋め
遺石跡4	2	10YR5/3 にぶい黄褐色	シルト	径20cm以下の中緑色シルトブロック含む 径10cm以下の円錐含む	掘り方埋土
遺石跡5	1	10YR3/3 塔褐色	シルト	径15cm以下の中緑色シルトブロック、径10cm以下の中緑色含む	掘り方埋土

以下の通りである。

礎石跡1は東側が搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径1.06mの円形で、深さ0.20mである。堆積土は搅乱壁面により1層を確認した。1層には礎が散在しているが、根固め・掘り方の区別は不明である。中央の礎が希薄な範囲は抜き取り痕と考えられる。

礎石跡2は径0.58×0.49mの楕円形で、掘り方埋め土に礎が散在している。

礎石跡3は径0.87×0.65mの楕円形で、掘り方埋め土に礎が散在している。

礎石跡4は径0.64×0.52mの楕円形で、根固めに礎が散在している。残存状況は悪く根固め・掘り方の区別は明確ではないが、礎の外側に広がる黒褐色シルトブロックが混入するにぶい黄褐色シルトが掘り方埋土と考えられる。

礎石跡5は径0.67×0.52mの楕円形で、掘り方埋め土に礎が散在している。

構造 SB16は南北方向に長い礎石建物跡である。直線距離で大手門から北東に約140.00m、御殿建物から北東に約30m離れた地点に位置している。方向は六尺五寸の方眼に一致する。

出土遺物 遺物は出土していない。

礎石跡（第29・38図）

建物配置が認められない単独での礎石跡は5基検出している。各礎石跡の残存状況は悪く、礎石本体は抜き取られており、根固め・掘り方も明確ではない。

礎石跡3・4・5は、各礎石跡の間隔が1.5m（5尺）、根固め石が径20cm以下の大型のものを使用し、礎石の抜き取り痕も不明瞭である。位置や構造から同一建物の可能性も考えられたが、これまでの若林城跡の礎石跡と構造・柱間が異なることから、今回は建物跡とは認定せずに単独の礎石跡として報告している。各礎石跡については以下の通りである。

礎石跡1

Y46・X41グリッドで検出した。規模は径0.52×0.35mで、残存する形状は不整形であるが本来は楕円形と考えられる。上面の大部分は搅乱により削平されており、全体の1/2程の検出である。南側は調査区外に延びる。径10cm以下の円礎が混入しているが、中央の礎が希薄な範囲は抜き取り痕の可能性がある。残存状況は悪く、根固め・掘り方の区別は明確ではない。

南側の調査区外延長、六尺五寸の方眼上には第9次調査のSB13礎石跡4が位置している。SB13礎石跡4は、径10～15cmの根固め石が少量配置され、掘り方形状は不明と報告されている。構造・規模が類似していることから同一建物跡の可能性がある。

礎石跡2

Y50・X41グリッドで検出した。規模は径0.71×0.45mのやや楕円形である。根固めのみの検出で、径10cm以下の円礎がややまとめて混入している。中央やや南に礎の希薄な範囲があるが、抜き取り痕かは不明である。根固め・掘り方の区別は明確ではない。

礎石跡3

Y42・X37グリッドで検出した。規模は径0.62×0.54mのやや楕円形である。根固めのみの検出で、径20cm以下の円礎がまとめて混入している。礎石が配置されるべき中央にやや大きめの根固め石を配置しているが、根固め・掘り方の区別は明確ではない。

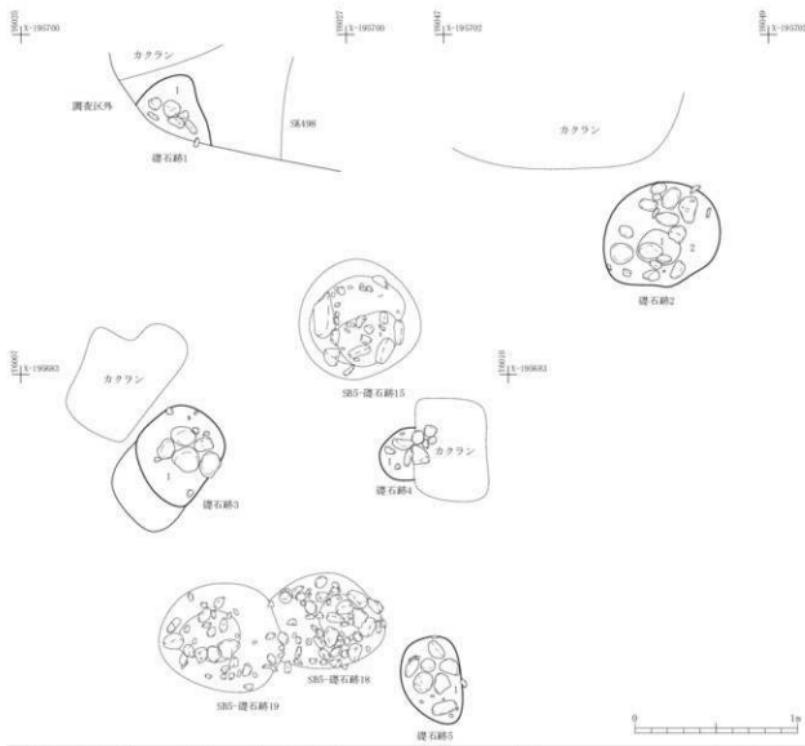
礎石跡4

Y42・X37グリッドで検出した。規模は径 0.30×0.20 mで、本来は梢円形と考えられる。

構造 大部分は搅乱に削平されており、根固めのみの検出である。根固めは径10cm以下の円礫が混入している。残存状況は悪く根固め・掘り方の区別は明確ではない。

礎石跡5

Y42・X37～38グリッドで検出した。規模は径 0.56×0.38 mで、やや梢円形を呈する。上面の大部分を搅乱に削平されており、根固めのみの検出である。根固めは径15cm以下の円礫が混入している。残存状況は悪く根固め・掘り方の区別は明確ではない。



第38図 稳石跡1～5

遺構	地 位	土 色	土 性	特 徴	備 考
礎石跡1	1	10YE3/4 墓褐色	シルト	径10cm以下の褐灰色シルトブロック、径15cm以下の円礫を含む	根固め
礎石跡1	1	10YE4/4 土褐色	砂質シルト	径10cm以下の褐灰色シルトブロック、径20cm以下の円礫を含む	根固め
礎石跡2	2	10YE3/4 墓褐色	シルト	径10cm以下の褐灰色シルトブロック、径15cm以下の円礫を含む	根固め
礎石跡3	1	10YE3/4 墓褐色	シルト	径10cm以下の褐褐色シルトブロック、径20cm以下の円礫を含む	根固め
礎石跡4	1	10YE3/4 墓褐色	シルト	径10cm以下の褐灰色シルトブロック、径15cm以下の円礫を含む	根固め
礎石跡5	1	10YE3/3 墓褐色	シルト	径15cm以下の褐褐色シルトブロック、径15cm以下の円礫を含む	根固め

(2) 掘立柱建物跡 (SB)

15号掘立柱建物跡 (SB15) (第25・39・40図)

位置 Y24~27・X30~32グリッドでP1~20を検出した。

方向 N-80°・Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 東西の長さは、P3-13列で14.50m以上あり、西端は調査区外へ延びる。柱間は平均約2.00mである。南北の長さはP1-20で約9.3m以上あり、南端は搅乱で削平されている。柱間はP13-19列で平均1.37mである。

重複関係 SK437-443より古く、SD100より新しい。

柱穴 20基確認した。いずれも検出のみに留めており、断面観察ができた柱穴は搅乱で一部削平されたP7・8-12にみである。柱穴の間隔は半間や二間を使用する地点もあり、東西と南北の軸が直線で通らない柱間も存在する。各柱穴については以下の通りである。

P1は径0.53mの円形である。

P2は径0.41×0.35mの不整円形である。

P3は径0.77mの円形である。

P4は径0.52mの楕円形である。柱痕跡があり、径0.10mである。

P5は径0.66mの円形である。

P6は径0.67mの不整円形である。

P7は南側を搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径0.90×0.30m、深さ0.90mの楕円形と考えられる。

柱痕跡があり、径0.08mである。堆積土は4層確認しており、1~3層が掘り方埋め土、4層が柱痕跡である。

P8は南西側を搅乱で削平されており、全体の3/4程の検出である。径0.63m、深さ0.64mの円形と考えられる。堆積土は2層確認しており、掘り方埋め土である。

P9は径0.80mの円形である。柱痕跡があり、径0.35mである。

P10は径0.98×0.58mの不整楕円形である。

P11は径0.63mの円形である。柱痕跡があり、径0.15mである。

P12は南側を搅乱で削平されており、全体の1/2程の検出である。径0.57×0.40m、深さ0.64mの楕円形と考えられる。堆積土は1層確認しており、掘り方埋め土である。

P13は径0.91mの円形である。

P14は径0.35mの円形である。

P15は径0.85×0.78mの不整円形である。

P16は径1.01×0.58mの不正楕円形である。柱痕跡があり、径0.24mである。

P17は径0.62×0.53mの不整円形である。柱痕跡があり、径0.14mである。

P18は径0.71×0.60mの楕円形である。

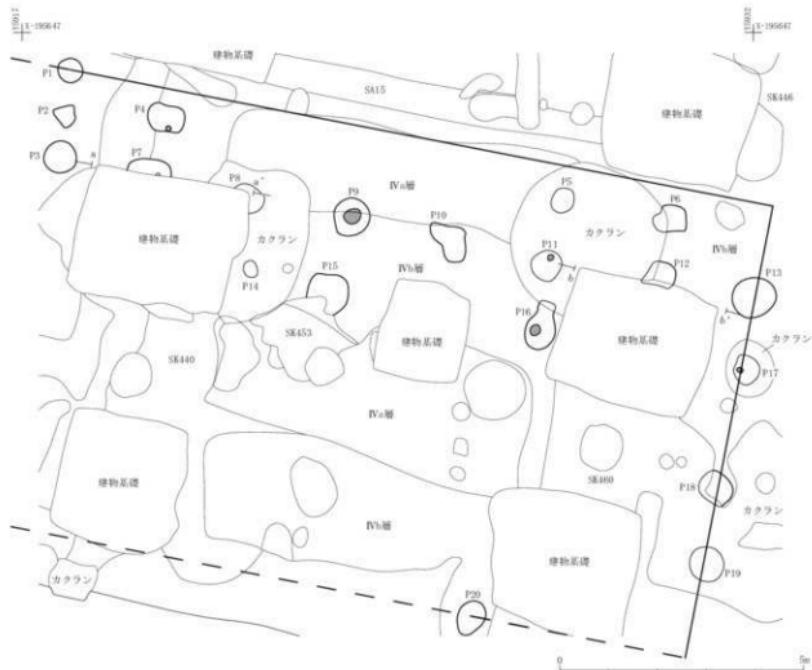
P19は径0.73mの円形である。

P20は径0.73×0.56mの楕円形である。

構造 SB15は東西方向の掘立柱建物跡である。大手門から北に約40mに位置しており、2m北側にはSA15が位置している。方向は若林城の六尺五寸に一致する。掘立柱という構造から、御殿建物とは異なる性格の建物であると考えられ、大手門の近くに位置することから、厩などの建物の可能性がある。

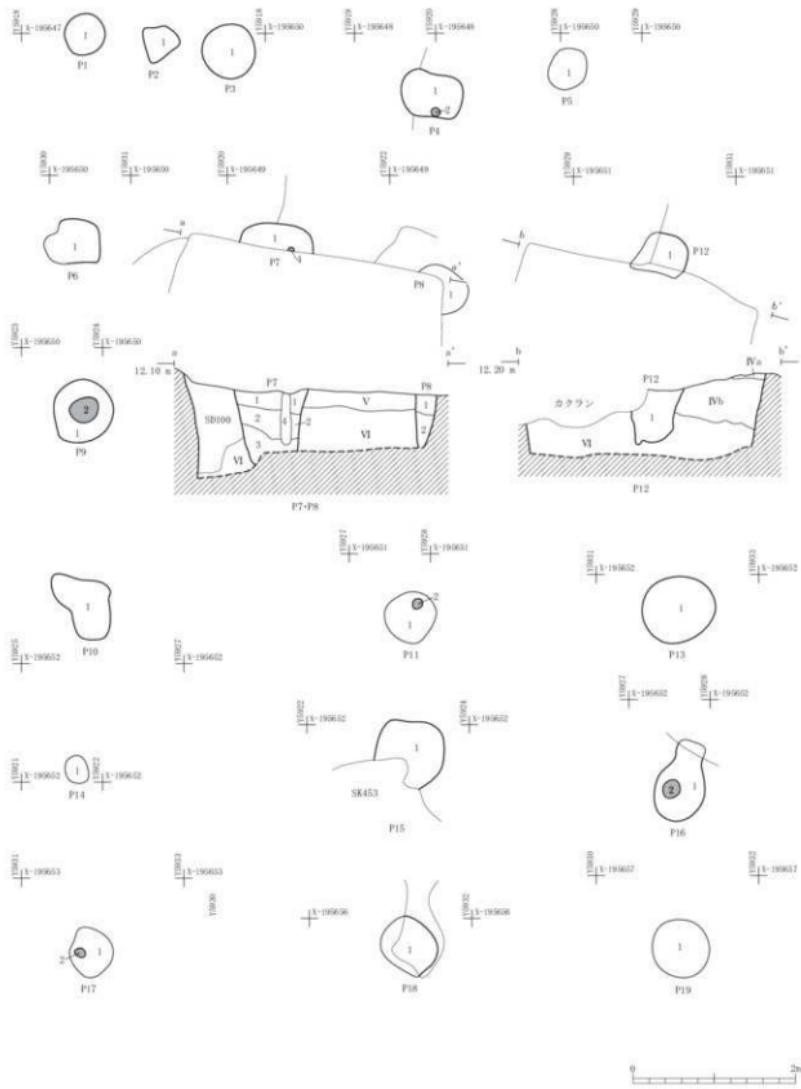
出土遺物 遺物は出土していない。

第2節 IV層上面検出の遺構



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
P1	1	7.5YR4/4 棕色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック少量含む	
P2	1	7.5YR4/4 棕色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色・褐色シルトブロック少量含む	
P3	1	7.5YR4/4 棕色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色・褐色シルトブロック少量含む	
	1	10YR4/4 棕色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック無量含む	
P4	2	10YR5/4 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック少量、径10cm以下の褐色シルトブロック多量含む	柱痕跡
P5	1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色・褐褐色シルトブロック含む	
P6	1	10YR4/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックと径10cm以上の暗褐色シルトブロック少量含む	
	1	10YR4/3 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック多量、径2cm以上(?)の褐色少量含む	
	2	10YR6/3 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック多量含む	
P7	3	10YR6/3 に近い黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック少量と径2cm以下の明黄色シルトブロック無量含む	
	4	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径2cm以下(?)の褐色少量含む	柱痕跡
P8	1	10YR4/6 黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロックと径5cm以下の円錐少量含む	
	2	10YR6/3 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック含む	
P9	1	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック多量含む	柱痕跡
	2	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック無量含む	
P10	1	10YR4/4 に近い黄褐色	シルト	径10cm以下の褐色シルトブロック多量と径5cm以下の暗褐色シルトブロック含む 灰岩少量含む	
P11	1	10YR4/6 棕色	シルト	径5cm以下の褐色・暗褐色シルトブロック多量含む	
	2	10YR4/4 暗褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック少量含む	柱痕跡
P12	1	10YR4/6 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック含む	
P13	1	10YR5/2 暗褐色	シルト	径5cm以下の褐色・暗褐色シルトブロック含む、径3cm以下の円錐少量含む	
P14	1	10YR4/6 棕色	シルト	径5cm以下の円錐少量含む	
P15	3	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック多量と径2cm以下の暗褐色シルトブロック含む	
P16	1	10YR5/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック多量含む	
	2	10YR5/2 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック少量含む	柱痕跡
P17	1	10YR4/4 に近い黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色・暗褐色シルトブロック多量含む	
	2	10YR5/4 暗褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック無量含む	柱痕跡
P18	1	10YR4/6 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック含む	
P19	1	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック含む	
P20	1	10YR4/4 棕色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックと径5cm以下の暗褐色シルトブロック少量含む	

第39図 SB15(1)



第40図 SB15(2)

(3) 堀跡 (SA)

壁が垂直に立ち上がる掘り方で人為堆積土が確認できるもの、掘り方内に柱痕跡を確認したものを堀跡とし、17条確認した。これらの堀跡については、周辺に配置される建物跡や溝跡との関係から全て若林城期の施設とみられ、堀跡の掘り方・柱痕跡の重複や構造の違いは造り替えによるものと考えられる。

9号堀跡 (SA9) (第28・41図)

位置 Y44・X36グリッドで、南北方向の堀跡を検出した。

方向 N-15°-Eであり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ5.0m、幅0.6m、深さ0.5mであり、断面形は底面が平坦で壁は垂直に立ち上がる。北端がSD88と重複するため詳細な長さは不明である。

南側に位置する第9次調査区ではこの堀跡の延長が確認できないことから、SK552の地点で収束すると考えられる。

重複関係 SK552より古い。北側のSD88とは重複関係が不明であることから新旧関係は不明である。東側のSD89とは近接し平行して配置されていることから同時期と考えられる。

堆積土 2層を確認した。1層・2層とも人為的堆積土である。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで、径1cm以下の褐色シルトブロックを含む。

2層は褐色シルトで、径1cm以下の褐色シルトブロックを含む。

構造 布掘り基礎の堀跡で、柱痕跡を2基検出した。各柱穴については以下の通りである。

P1は径0.30mの円形である。

P2は径0.20mの円形である。東壁に位置している。

P1は堀の内側、P2は東壁に位置している。これらの直線距離は0.5mであり、およそ二尺である。2基のみでは明らかではないが、第8次・9次調査で報告されたような掘り方に取まる堀の構造で、中央のP1が堀柱で、壁際に位置するP2が控柱の可能性がある。また、南端のSK552はその位置からSA9に伴う抜き取り痕等の可能性がある。

出土遺物 遺物は出土していない。

15号堀跡 (SA15) (第25・42図)

位置 Y25～26・X30グリッドで東西方向の堀跡を検出した。

方向 N-15°-Wであり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ11.80m、幅0.60m、深さ0.66mで、断面形はU字形を呈する。大部分は擾乱により削平されている。東端は擾乱に削平され、西端は調査区外に延びる為、詳細な規模等は不明である。

重複関係 SD100より新しい。南側のSBI5とは近接し平行して配置されていることから、同時期と考えられる。

堆積土 5層を確認した。1～4層は人為的堆積土で、5層は柱痕跡である。各堆積土については以下の通りである。

1層はにぶい黄褐色シルトで、径1cm以下のにぶい黄褐色シルトブロックと径3cm以下の礫を少量含む。

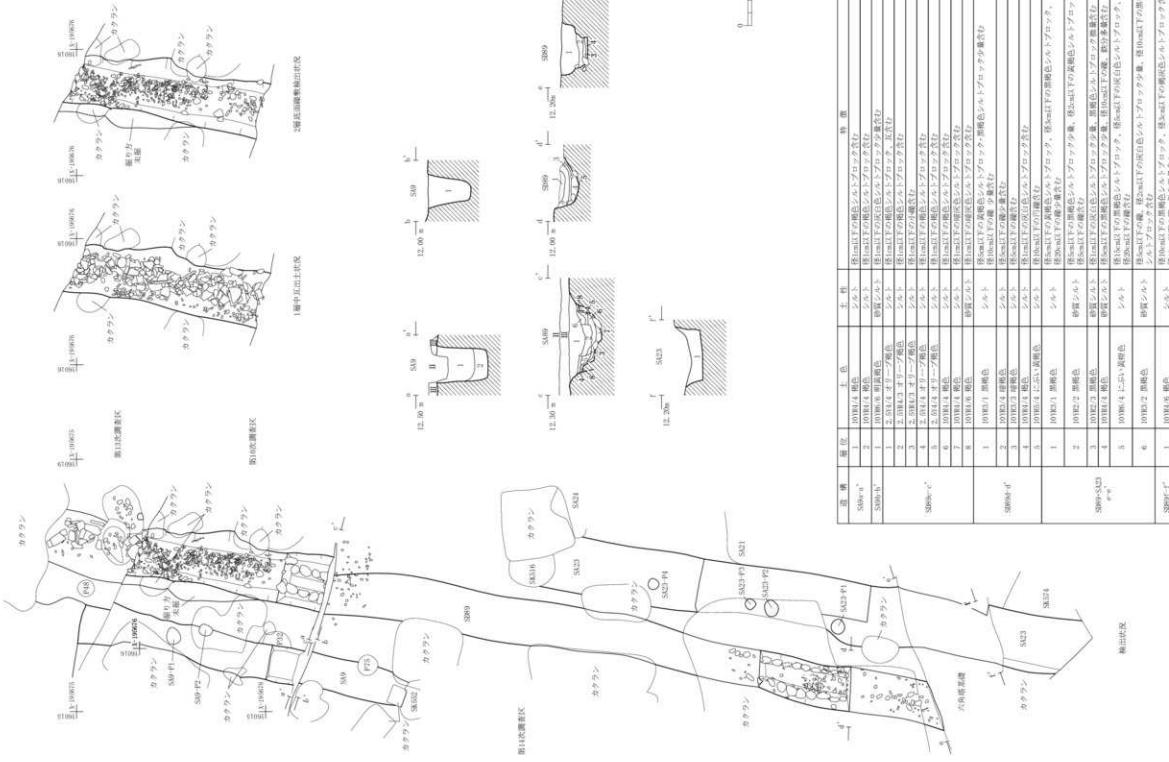
2層は灰黄褐色シルトで、径3cm以下の褐色シルトブロック微量と径3cm以下の円礫を少量含む。

3層は暗褐色シルトで、径1cm以下の褐色シルトブロックと径3cm以下の円礫を微量含む。

4層は黒褐色砂質シルトである。径1cm以下の褐色シルトブロック微量含む。

5層は黒褐色シルトで、径1cm以下の褐色シルトブロック微量含む。

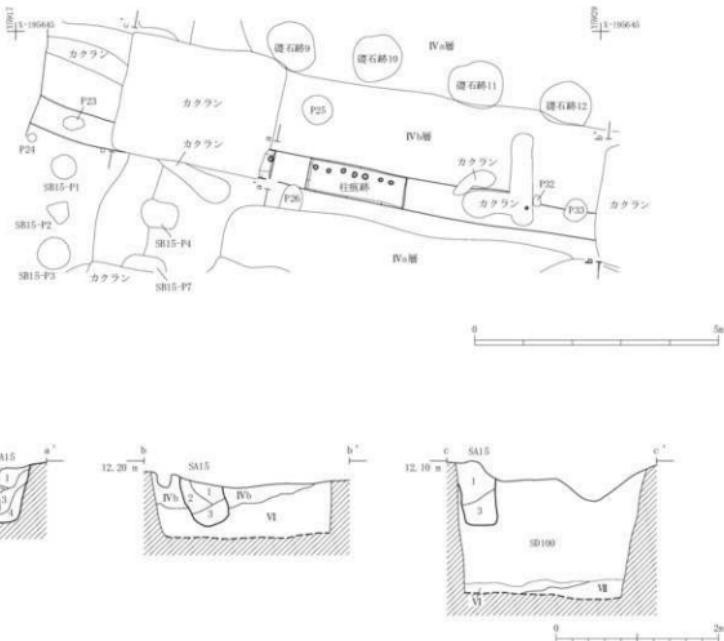
構造 布掘り基礎の堀跡である。掘り方の北壁寄りに9箇所の柱痕跡を確認している。これらの規模は直径約10cmの円形である。各柱穴の直線距離は約20～30cmである。これまでの調査で確認された堀跡に比べて、幅が狭く柱



第41図 SA9・23・SD89

穴も小さい小規模な構造である。SB15を区画するための簡易的な塙跡であったと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。



遺構	部位	土色	土性	特徴	備考
SA15	1	10YR4/3 に赤い黄褐色	シルト	径1cm以下の1/455 黄褐色シルトブロック、径3cm以下の小細少量含む	
	2	10YR4/2 淡黄褐色	シルト	径3cm以下の褐色シルトブロックを微量、径3cm以上の川縫少量含む	
	3	10YR4/3 増褐色	シルト	径1cm以下の褐色シルトブロック、径3cm以上の川縫少量含む	
	4	10YR2/3 黒褐色	砂質シルト	径1cm以下の褐色シルトブロック含む	
	5	10YR2/2 黑褐色	シルト	径1cm以下の褐色シルトブロック微量含む	柱状路

第42図 SA15

18号 sondage (SA18) (第27・43・65図)

位置 Y49~52・X33~34グリッドで、東西方向に配置された柱穴6箇所と東西方向から東端で北に屈曲する sondage を検出した。

方向 南北方向が-10°・E、東西方向がN-80°・Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 東西方向の長さ15.98m、幅0.42~0.78m、南北方向の長さ4.16m、幅0.42~0.53m、深さは0.89mである。断面形はU字状を呈している。全体的に搅乱で削平されている。西側は調査区外に延びる。

重複関係 北側のSA22とは接続し、同時期と考えられる。また、SA18柱穴列は、SD123裏込めと接続し、同時期の可能性がある。

堆積土 2層を確認した。1層・2層ともIV層に類似する人為堆積土であることから、SA18は若林城造成時に造られたと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

P1はにぶい黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロックと径5cm以下の礫を少量含む。

P2は褐灰色シルトで、黄褐色シルトブロックと径5cm以下の礫を微量と径2cm以下の炭化物を含む。

構造 SA18は、柱穴列と布掘り基礎の2つの構造がある。柱穴列は、底面に円礫を伴う構造で、確認できた柱穴6箇所のうちP4・6で円礫を確認した。明らかな根固め石はなく、掘り方に直接円礫を配置していると考えられる。布掘り基礎より新しい。各柱穴については以下の通りである。

P1は東側を搅乱で削平されており、全体の3/4程の検出である。径0.61mの円形である。

P2は径0.80mの円形で、深さ0.40m、断面形はU字形である。堆積土は3層確認しており、径10cm以下の礫が全体に散在している。底面に径0.20mの板状礫を確認しているが、他の円礫と形態・規模が異なる。1~3層はいずれも掘り方埋め土と考えられるが、1・2層は抜き取り痕堆積土の可能性もある。

P3は東側をII層で削平されており、全体の3/4程の検出である。径0.98×0.68mの楕円形と考えられる。径30cm以下の礫が全体に散在している。

P4は径0.73mの円形で、深さ0.18m、断面形は半円形である。堆積土は2層確認しており、底面から径0.47mの円礫を確認している。1層は抜き取り痕堆積土、2層が掘り方埋め土と考えられる。SD123と重複している。

P5は東側を搅乱で削平されており、全体の3/4程の検出である。径0.62×0.42mの楕円形で、深さ0.31m、断面形は半円形である。堆積土は1層確認しており、掘り方埋め土と考えられる。

P6は径0.63mの円形で、深さ0.17m、断面形は半円形である。堆積土は2層確認しており、底面から径0.42mの円礫を確認している。1層は抜き取り痕堆積土、2層が掘り方埋め土と考えられる。

P7~P9はP1~6と規模・構造が異なるため、布掘り基礎に伴う柱痕跡と考えられる。これらは大部分を搅乱で削平されているため、布掘り基礎の底面近くで確認した。各柱穴については以下の通りである。

P7は径0.20mの円形である。

P8は径0.15mの円形である。

P9は径0.18mの円形である。

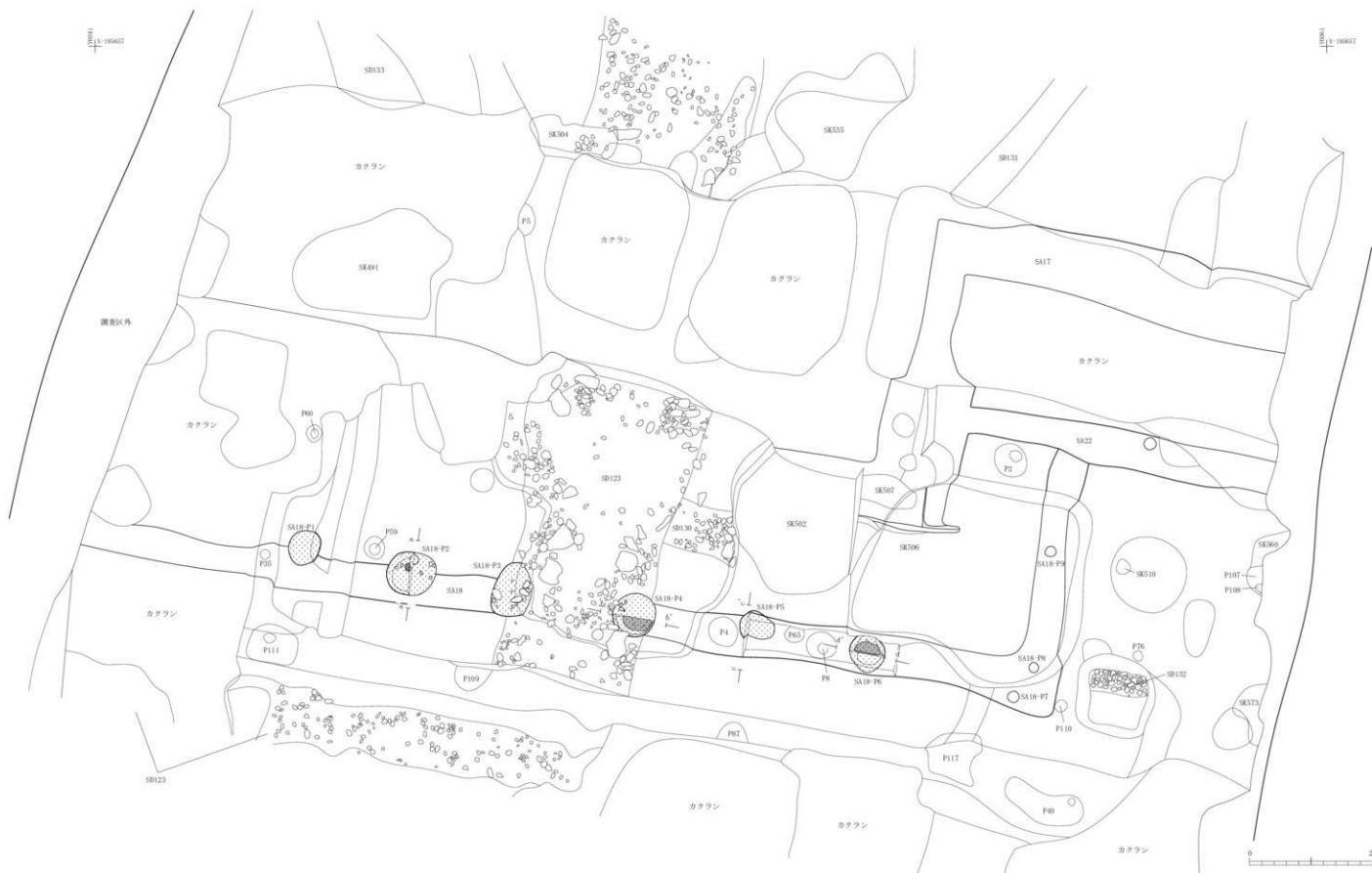
SA18柱穴列が布掘り基礎より新しいことやSD123との接続部分でみられることから、SA18はSD123との接続部分のみ改修したと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

19号 sondage (SA19) (第29・45図)

位置 Y48・X38~39グリッドで、南北方向の sondage を検出した。

方向 N-10°・Eで、六尺五寸の方眼に一致する。



第43図 SA17-18-22

規模 長さ4.23m、幅0.31～0.41m、深さ0.30～0.92m、断面形はU字形である。大部分が搅乱で削平されている。

重複関係 SD114より古い。北端がSA20に接続する。

堆積土 1層を確認した。人為堆積土である。詳細は以下の通りである。

1層は黒褐色シルトに褐灰色シルトブロックと径10cm以下の砾、瓦片を含む。

構造 大部分が搅乱で削平されているが、布掘り基礎の堀跡である。

出土遺物 遺物は出土していない。

20号堀跡（SA20）（第29・45図）

位置 Y48～52・X38～39グリッドで、東西方向の堀跡を検出した。

方向 N-78°-Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ19.88m、幅0.50～1.26m、深さ0.31～0.47m、断面形はU字形である。東端・西端は調査区外に延びるため詳細な規模は不明である。

重複関係 西端にSA19、中央東側にSA21が接続し、これらの堀跡と同時期のものと考えられる。

堆積土 6層を確認した。1・2層は抜き取り後に埋められた人為堆積土である。3層は柱痕跡と考えられる。柱痕跡の残存規模は、径0.25m、長さ0.30mである。4～6層は掘り方土埋め土である。瓦片の混入が見られないことから、SA20は若林城造営時のものと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで、黄褐色シルトブロックと黒褐色シルトブロックを含み、径20cm以下の砾と瓦を含む。

2層はにぶい黄褐色シルトで、径20cm以下の砾と瓦を含む。

3層はにぶい黄褐色シルトで、褐灰色シルトブロックを少量と径5cm以下の砾含む。

4層は褐灰色シルトで、黄褐色シルトブロックを含む。

5層は褐灰色シルトで、褐色シルトブロック・黄褐色シルトブロックを含む。

6層は褐灰色シルトで、明黄褐色シルトブロックを含み、黒褐色シルトブロックを少量含む。

構造 布掘り基礎の堀跡である。抜き取り痕を2箇所確認した。2箇所の間隔は5.5mである。

出土遺物 遺物は出土していない。

21号堀跡（SA21）（第29・45図）

位置 Y50・X38～39グリッドで、南北方向の堀跡を検出した。

方向 N-10°-Eで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ1.12m、幅0.56～0.63m、深さ0.27mで、断面形はU字形である。

重複関係 SD114より古い。北側のSA20と接続し、同時期と考えられる。

堆積土 1層を確認した。SA20の6層と類似している。詳細は以下の通りである。

1層は明黄褐色シルトブロック・黒褐色シルトブロックを含む。

構造 布掘り基礎の堀跡だが、柱痕跡は確認できなかった。

出土遺物 遺物は出土していない。

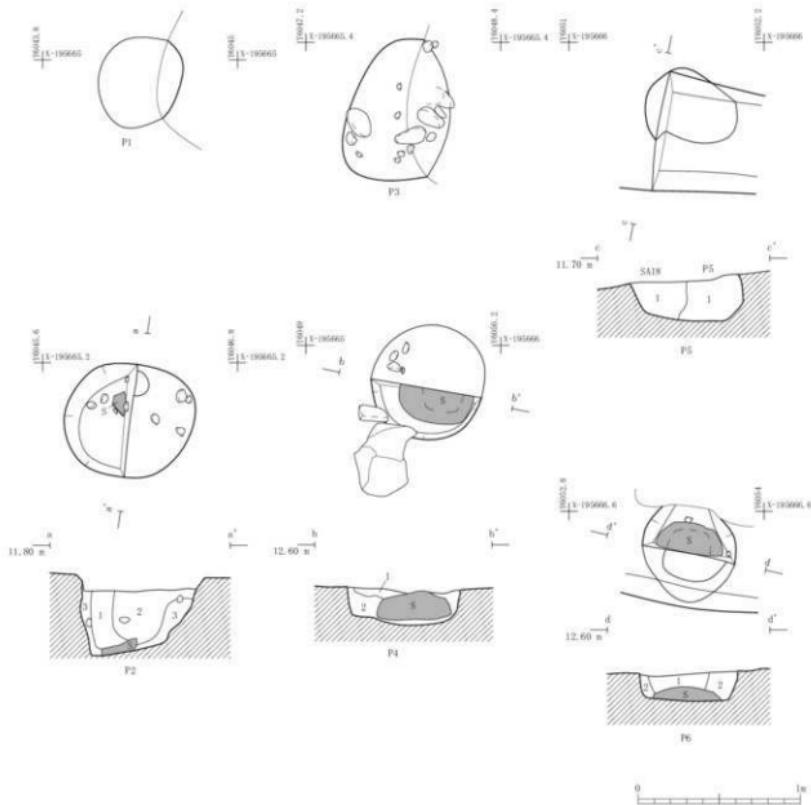
23号堀跡（SA23）（第29・41・46図）

位置 Y44・X37～39グリッドで南北方向の堀跡を検出した。

方向 N-10°-Eで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ8.35m、幅0.77～0.99m、深さ0.28～0.49mである。

第2節 IV層上面検出の遺構



遺構	部位	土色	土性	特徴	備考
SA18-P1	1	10YR3/1 黒褐色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック、小縫少量含む	柱穴
	2	10YR6/1 暗灰色	シルト	径10cm以下の黒褐色砂質シルトブロック含む 径5cm以下の縫少量含む	掘り方
SA18-P2	1	10YR4/1 暗灰色	シルト	径5cm以下の黒褐色砂質シルトブロックを含む 径5cm以下の小縫少量含む	柱穴
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック含む 径10cm以下の縫含む	
SA18-P3	1	10YR5/2 灰褐色	シルト	径3cm以下の黒褐色シルトブロック含む 径5cm以下の縫少量含む	
	2	10YR5/1 黑褐色	シルト	径10cm以下の黒褐色シルトブロック含む 径5cm以下の縫少量含む	
SA18-P4	1	10YR4/1 暗灰色	シルト	径2cm以下の黒褐色シルトブロックを含む 径5cm以下の縫少量含む	
	2	10YR4/1 暗灰色	シルト	径2cm以下の黒褐色シルトブロックを含む 径5cm以下の縫少量含む	
SA18-P5	1	10YR4/1 暗灰色	砂質シルト	径2cm以下の黒褐色シルトブロックを含む 径10cm以下の縫含む	
	2	10YR4/2 黒褐色	シルト	径2cm以下の黒褐色シルトブロック含む 径5cm以下の縫少量含む	
SA18-P6	1	10YR3/3 墓褐色	砂質シルト	径3cm以下の墓褐色シルトブロック推量含む 径5cm以下の縫少量含む	
	2	10YR3/2 黒褐色	シルト	径3cm以下の黒褐色シルトブロック 含む	
SA18-P7	1	10YR3/2 黑褐色	シルト	径3cm以下の黒褐色シルトブロック 含む	
	2	10YR4/1 暗灰色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック含む	
SA18-P8	1	10YR4/3 にぼい黄褐色	シルト	径1cm以下の柱穴推量含む	柱頭跡
	2	10YR4/1 暗灰色	シルト	径1cm以下の柱穴推量含む	
SA18-P9	1	10YR4/3 にぼい黄褐色	シルト	径1cm以下の柱穴推量含む	
	2	10YR4/1 暗灰色	シルト	径1cm以下の柱穴推量含む	

第44図 SA18

重複関係 SX21とSK574より新しく、SK516より古い。北端はSA24と接続し、同時期と考えられる。

堆積土 3層を確認した。東に位置するSX21を壊しているため、1~3層とも池跡の壁土とみられる粘性の高いシリトブロックを多量に混入する人為堆積土である。また、VI層とVII層を掘り込んでいるため、不揃いな礫と砂粒も混入している。各堆積土については以下の通りである。

1層は黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロックと径10cm以下の礫を含む。

2層は暗褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロック・黄褐色シルトブロック・褐灰色シルトブロックと径10cm以下の礫を含む。

3層は暗褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックと径5cm以下の礫を含む。

構造 上部を搅乱で削平されている布掘り基礎の堀跡である。西側壁面に沿って柱痕跡を4基確認している。柱痕跡の間隔はP1-2で約150m、P2-3で約0.30m、P3-4で約1.00mであり、柱痕跡の間隔は平均約0.7mである。各柱穴については以下の通りである。

P1は径0.22mの円形で径5cm以下の礫を含む。

P2は径0.27mの円形で径5cm以下の礫を含む。

P3は径0.17mの円形である。

P4は径0.17mの円形である。

出土遺物 遺物は出土していない。

24号堀跡（SA24）（第29・46・47図）

位置 Y44~45・X37グリッドで東西方向の堀跡を検出した。

方向 N-75°-Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ6.81m、幅0.52~1.30m、深さ0.54mである。

重複関係 SK562より古い。西端はSA23、東端はSA25と接続し、同時期と考えられる。

堆積土 5層を確認した。1・2層は柱痕跡、3~5層が掘り方埋め土である。いずれもVI層・VII層を掘り込んでいるため、不揃いな礫と砂粒が混入している。各堆積土については以下の通りである。

1層は暗褐色シルトで、褐灰色シルトブロックと径7cm以下の礫を少量含む。

2層は暗褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径5cm以下の礫を少量、瓦を含む。

3層は褐色シルトで、黒褐色シルトブロックと径10cm以下の礫を含む。

4層は暗褐色砂質シルトで、褐色シルトブロックと径3cm以下の礫を含む。

5層は褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径10cm以下の礫を含む。

構造 大部分を搅乱により削平されている布掘り基礎の堀跡である。柱痕跡を2基確認している。柱痕跡の間隔は約0.50mである。各柱穴については以下の通りである。

P1は径0.18mの円形である。

P2は径0.18mの円形で、深さ0.55mの断面形はU字形である。堆積土は2層確認しており、1・2層とも柱痕跡と考えられる。

出土遺物 丸瓦、平瓦、輪違いといった瓦片14点があり、このうち輪違い1点を図示した。

H004（第47図-1）は輪違いである。狹端部側が直線的な形状で、凹面にコピキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。2層から出土している。

25号 sondage (SA25) (第29・46・47図)

位置 Y45~46・X36~39グリッドで南北方向の sondage を検出した。

方向 N-10°-E であり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ15.78m、幅0.57~0.90m、深さ0.90mである。

重複関係 SK492・548・559・561~563・572・578・579・593より古く、SX20・21より新しい。西端はSA24と接続し、同時期と考えられる。

堆積土 4層を確認した。1~4層は掘り方埋め土である。VI層・VII層を掘り込んでいるため、不揃いな礫と砂粒が混入している。各堆積土については以下の通りである。

1層はにぶい黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロックを微量と径5cm以下の礫を含む。

2層は暗褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロック・黄褐色シルトブロックと径10cm以下の礫を含む。

3層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径10cm以下の礫を含む。

4層は黒褐色シルトで、明黄褐色シルトブロックを少量と径3cm以下の礫を含む。

構造 布掘り基礎の sondage で柱痕跡を3基確認している。柱痕跡の間隔はP2-3が2.5mである。各柱穴については以下の通りである。

P1は径0.23mの円形である。

P2は径0.12mの円形で、深さ0.55mの断面形はU字形である。堆積土は2層確認しており、1・2層とも掘り方埋め土である。

P3は径0.13mの円形である。

出土遺物 丸瓦、軒平瓦、平瓦、翼斗瓦、面戸瓦（隅切瓦）、不明瓦といった瓦片65点、土師器12点、須恵器1点があり、このうち丸瓦1点、軒平瓦1点、面戸瓦（隅切瓦）1点を図示した。

F014（第47図-2）は丸瓦である。凹面にコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面にナデがみられる。1層から出土している。

G001（第47図-3）は軒平瓦である。瓦当文様は三葉文と唐草文で、凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

H024（第47図-4）は面戸瓦（隅切瓦）である。凹面にコビキ痕・布目痕・端部3辺にケズリ調整、凸面にナデ調整で、凹面に棒状工具による刺突痕がみられる。1層から出土している。

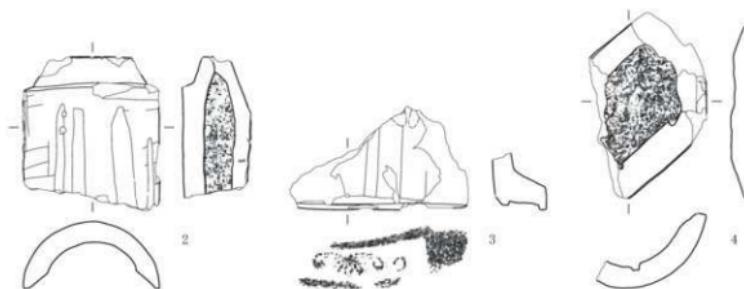


第45図 SA19・20・21



第46図 SA23-24.25

遺構	層位	土色	上.相	特.備
S2054	3	IIW1 増毛色	シルト	IIW1+IIW2の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	3	IIW1 増毛色	砂シルト	IIW1+IIW2の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	3	IIW1 増毛色	砂シルト	IIW1+IIW2の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
S2055	1	IIW1+2.3 黑褐色	シルト	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	2	IIW1+2.3 黑褐色	砂シルト	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	3	IIW1+2.3 黑褐色	砂層	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
S2056	1	IIW1+2.3 黑褐色	砂層	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	2	IIW1+2.3 黑褐色	シルト	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石
	3	IIW1+2.3 黑褐色	シルト	IIW1+2.3の黒褐色シルトロード、鏡・火打石



団版番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法量(cm)					重量(g)	凸面調整地	凹面調整地	備考	写真図版
					長さ	幅	内区幅	高さ	厚さ					
2	F014	丸瓦	1	SA25-1層	-	-	3.0	14.0	7.0	2.3	777	ナデ	凸・凹面、内区幅	97-6
3	6001	軒平瓦	2層目・内区幅	1A	SA25-1層	-	(5.分)	(3.3.4)	3.0	521	ナデ	ナデ、ヘナデ	97-7	
団版番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法量(cm)	内区幅	高さ	厚さ	備考	写真図版				
4	8024	山口瓦	3	SA25-1層	-	-	7.6	2.2	560	ナデ	コビナ板、舟形板、端部ナデ等	97-8		

第47図 SA24-25 出土遺物

(4) 溝跡 (SD)

建物周辺に配置された雨落ち溝跡や水路35条を確認した。これら35条の溝跡については、周辺に配置される建物跡や堀跡との関係から全て若林城期の施設とみられる。溝跡の重複や構造の違いは造り替えや使用目的の違いによると考えられる。

141号溝跡 (SD141-IHSA8-) (第25・48・49図)

第10次調査では、掘り方の形状やシルトブロックが堆積する状況から堀跡の基礎部分と考えていた。整理時に第10次調査・第13次調査の掘り方形態・堆積土などを再検討した結果、柱痕跡や抜取り痕跡、杭跡など堀跡としての要素を確認できること、底面に細砂や石組みなどの水の流れに関連する状況を再確認したことから、SA8は溝跡として取り扱うこととした。そのため、全体図では溝跡として捉えて図示している。

位置 Y29~30・X30~34グリッドで南北方向の溝跡を検出した。

方向 N-20°-Eであり、六尺五寸の方眼に一致しない。

規模 長さ27.60m、幅0.75~1.85m、深さ0.39mであり、断面形は半円形を呈する。北端は調査区外へ延び、南端は搅乱で削平されている。

重複関係 六郷堀跡とSK441より古い。

堆積土 5層を確認した。1~3層は人為的堆積土で、4・5層は底面に堆積したVI層に近い砂質シルトである。各堆積土については以下の通りである。

1層はにぶい黄橙色シルトで、径1cm以下の灰色シルトブロックと径5cm以下の円礫を少量含む。

2層は褐灰色粘土質シルトで、径3cm以下の灰白色粘土質シルトブロックを多量含む。

3層は褐灰色粘土質シルトで、径10cm以下の暗褐色粘土質シルトブロックを多量含む。

4層は褐灰色砂質シルトで、径1cm以下の鉄分を含む。

5層はにぶい黄褐色砂質シルトである。径1cm以下の鉄分を含む。

構造 立ち上がりは緩やかで、底面には4・5層の細砂が堆積する。深掘りした地点では底面に径20cm以下の円礫が散かれていた。

方向が若林城期の六尺五寸の方眼線上からからやや外れていることや、六郷堀跡よりも古いくことから、若林城以前または若林城造営時に構築された可能性がある。

出土遺物 平瓦の瓦片1点、陶器4点、磁器4点、土師質土器6点、土師器4点、鉄製品3点、銅錢1点、金属製品1点があり、このうち陶器1点を図示した。

I001(第49図-1)は產地不明陶器の擂鉢で、1層から出土している。時期は不明である。

88号溝跡 (SD88) (第28・50~54図)

位置 Y37~40・43~44・X34・35グリッドで東西方向に延びる溝跡を検出した。

方向 N-75°-Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

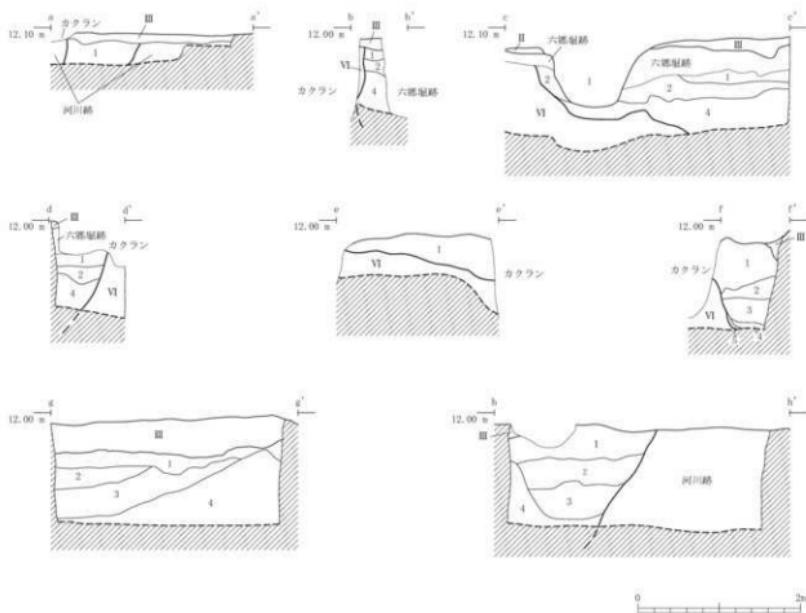
規模 長さ32.80m、幅1.20~2.00m、深さ0.42~0.97mである。断面形状はU字形や半円形であるが、部分的にテラス状になる地点も見られた。東端は調査区外に延び、西端は搅乱で削平されており詳細な規模は不明である。

重複関係 SK464・465・466より古く、SD92より新しい。SA9とは重複関係が不明瞭であるため新旧関係は不明である。

堆積土 3層を確認した。堆積土はいずれも砂質の強いシルトでVI層に類似している。1~3層とも人為堆積土であり、溝底面に水の流れの痕跡はみられない。各堆積土については以下の通りである。



第48図 SD141 (1)



遺構	部位	土色	土性	特徴	備考
SD141	1	10VBG 4. に近い黄褐色	シルト	様1cm以下の細灰色シルトブロック含む。様5cm以下の円錐少量含む。	
	2	10VBG 1. 桃紅色	粘質シルト	様3cm以下の白灰色粘質シルトブロック多量含む。	
	3	10VBG 1. 桃紅色	粘質シルト	様10cm以下が黄褐色粘質シルトブロック多量含む。	
	4	10VBG 1. 桃紅色	砂質シルト	様1cm以下の鉄分含む。	
	5	10VHS 4. に近い黄褐色	砂質シルト		



団体番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法(横)(cm)	口径(径)	底径(径)	高さ(径)	備考	写真版
1	1001	陶器	器体	SD141 1号	~	~	3.4	6.0	不明	写真版

第49図 SD141(2)・SD141 出土遺物

第2節 IV層上面検出の遺構

1層はにぶい黄褐色砂質シルトブロック～褐灰色シルトブロックで、径1cm以下の褐灰色シルトブロック・灰白色シルトブロック含む。若林城期の瓦を多量含む。

2層は灰黄褐色砂質シルトで、径1cm以下の褐灰色シルトブロック・灰白色シルトブロック少量含み、径1cm以下の瓦・鉄分含む。VI層に類似する均質な砂質土である。

3層は灰黄褐色砂質シルトで、径3cm以下の灰白色シルトブロック・にぶい黄橙色シルトブロック含む。

構造 壁面や底面に石組みや敷石が確認できなかったことから、素掘りの溝であったと考えられる。また、1・2層に散在する瓦も規則的な配置がみられないことから、SD88を埋める際に廃棄されたと考えられる。

出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、鬼瓦、不明瓦、棟瓦といった瓦片が382点、土師質土器31点、縄文土器3点、土師器4点、瓦器1点、金属製品32点があり、このうち軒丸瓦9点、丸瓦1点、軒平瓦7点、面戸瓦1点、鬼瓦1点を図示した。縄文土器のA001は写真のみ掲載する。

F001～F009（第51図-1～4、第52図-1～4、第53図-1）は軒丸瓦で、瓦当文様は全て珠文の無い三巴文である。F001・004・008は、凹面にコビキ痕・布目痕・ナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。F002は、凹面にコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面に横方向のち緩方向のナデ調整がみられる。F003・005・006・007は、凹面にコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面にナデ調整がみられる。F002・005・006～008は中央部に釘穴、F007は凹面に棒状工具による刺突痕がみられる。F001～009は、全て1層から出土している。

F015（第53図-2）は丸瓦である。凹面にコビキ痕・布目痕・指頭圧痕・棒状工具による刺突痕、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

G002～006・008（第53図-3～5、第54図-1～3）は軒平瓦である。瓦当文様は全て桔梗文と唐草文で、凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。G002～006・008は、全て1層から出土している。

H025（第54図-4）は面戸瓦である。凹面にコビキ痕・端部4辺にケズリ調整、凸面にナデ調整で、凹面にはヘラキズがみられる。1層から出土している。

H032（第54図-5）は鬼瓦の一部と考えられる瓦片である。凹面にナデ調整、凸面にナデ調整・ケズリ調整で、側面部には釘穴がみられる。1層から出土している。

A001（写真図版97-10）は縄文土器の破片である。外面に疑似羽状文と考えられる縄文がみられる。2層から出土している。

89号溝跡（SD89）（第28・41・55・56図）

位置 Y43～44・X35～38グリッドで南北方向の溝跡を検出した。

方向 N-10°-Eで、六尺五寸の方眼に一致する。

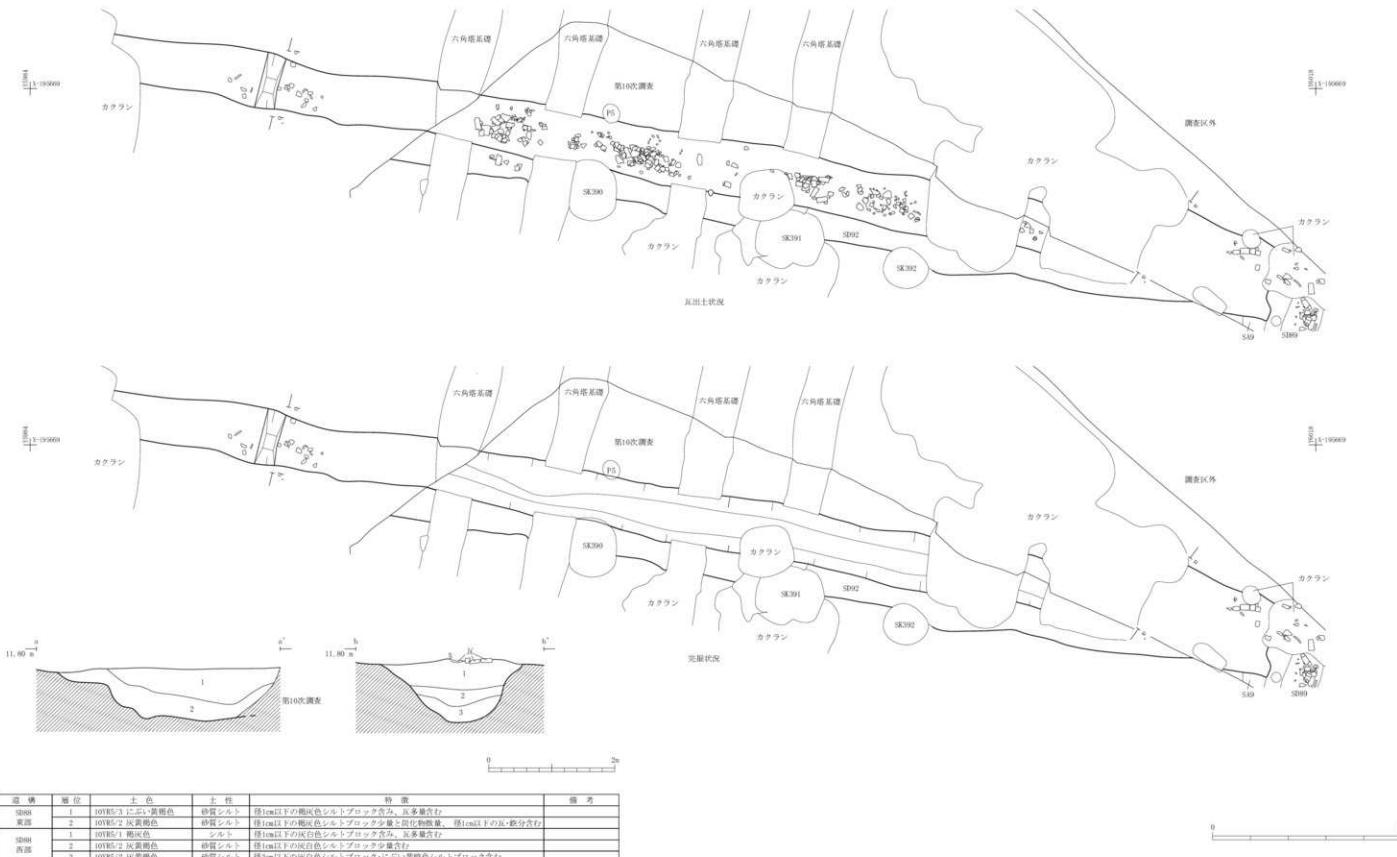
規模 長さ14.30m、幅0.42～1.00m、深さ0.30～0.39mで、断面形は半円形を呈する。北端・南端のいずれも調査区外に延びるため詳細な規模は不明である。

重複関係 SK463・464より古い。西側のSA9、東側のSA23、北側のSD88とは隣接するが重複関係は不明瞭である。また、第8次調査で確認したSD43は位置関係から延長と考えられる。

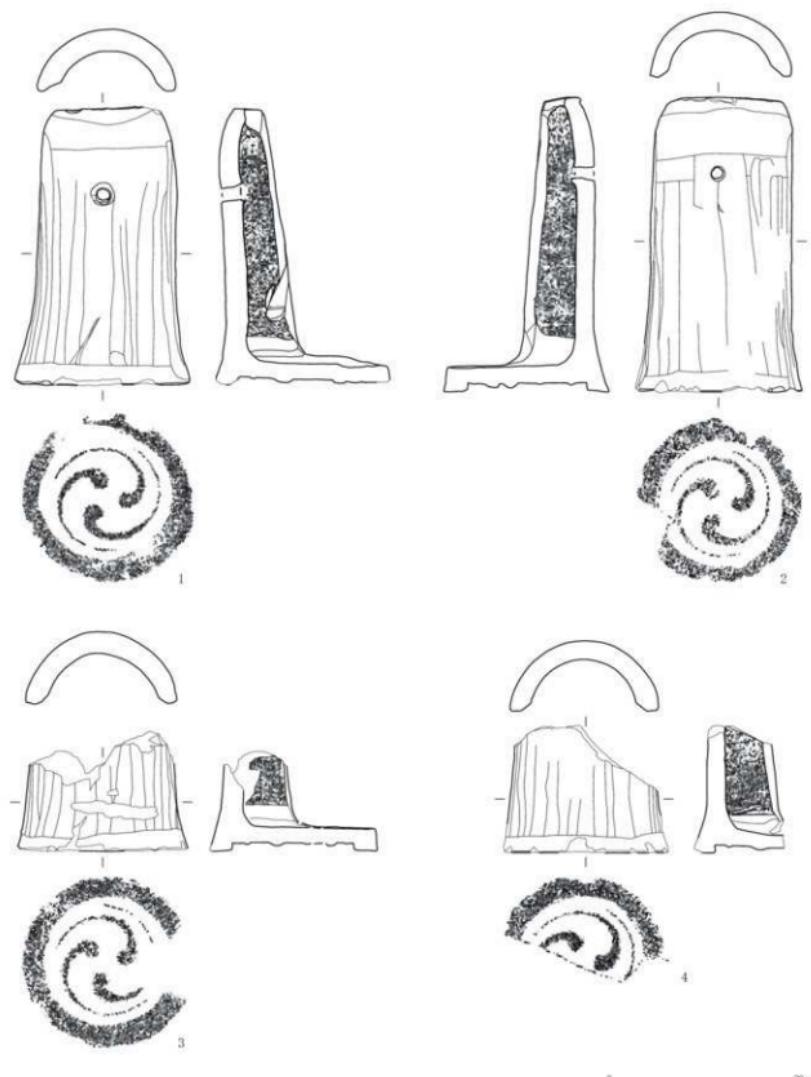
堆積土 5層を確認した。断面観察の結果3時期に大別でき、1層は3期の堆積土である。1層で出土した礫と瓦片は配置された状況ではないため、廃棄されたものと考えられる。2期の堆積土は2層である。1期の堆積土は3～5層である。3・4層は自然堆積土と考えられ、5層は1期構築時の掘り方埋め土と考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は黒褐色シルトに黄褐色・黒褐色シルトブロック、径10cm以下の礫と瓦片を多量に含む。

2層は暗褐色シルトに径5cm以下の礫を少量含むが、瓦片は混入しない。2期の堆積土である。

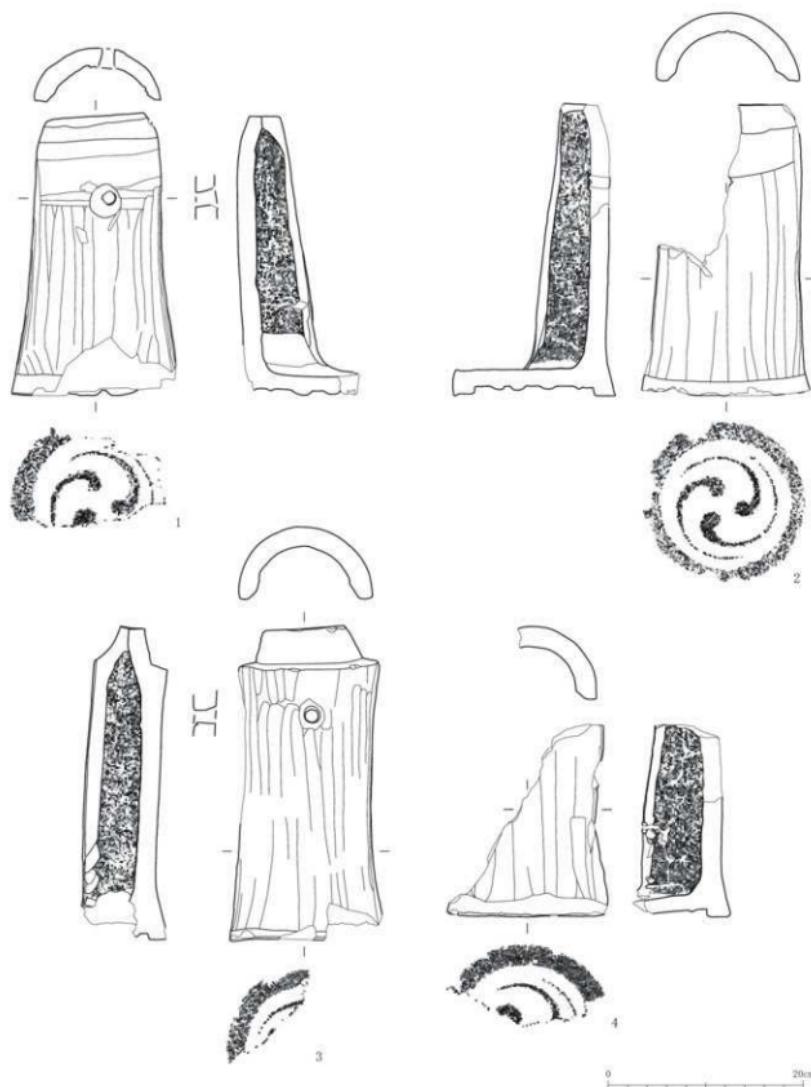


第50図 SD88



第51図 SD88 出土遺物(1)

図版番号	登録番号	種類	文様	分類	遺構・層位	法 面(㎝)	法 横(㎝)	直 角(㎝)	内 径(㎝)	周 縁幅(㎝)	重 量(g)	ハ シ ス ケ ル メ ト ル	回 山 圓 盤 形 物	備 考	写 真 版
1	F007	軒丸瓦	二巴文	2B	1000 1層	28.1	-	17.7	12.9	2.3	1989	ナダ	ヨビモド、青井地、東側午後	SD88-1層、F007-1	98-1
2	F008	軒丸瓦	二巴文	2B	1000 1層	39.2	-	16.9	12.4	2.3	2401	ナダ	ヨビモド、青井地、ナダ	98-2	
3	F003	軒丸瓦	三巴文	B	1000 1層	-	-	17.2	12.6	2.3	1185	ナダ	ヨビモド、青井地、東側午後	99-1	
4	F004	軒丸瓦	三巴文	B	1000 1層	-	-	16.9	6.2	2.3	933	ナダ	ヨビモド、青井地、ナダ	99-3	



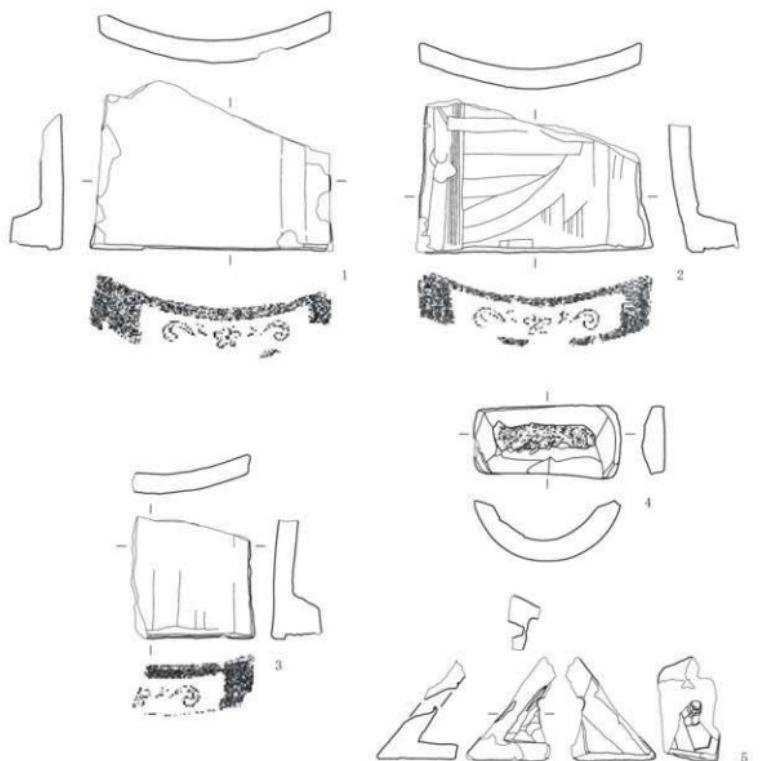
第52図 SD88 出土遺物(2)

図版番号	登録番号	種類	文様	分類	遺構・部位	法 庫(cm)	瓦当法 庫(cm)	重 量(g)	八山渦雲形	田山渦雲形	備 考	写真図版		
1	F005	軒丸瓦	二巴文	2B	SD88-1#	29.1	(17.6) (12.6)	2.5	1753	ナゲ	コヒ槌、表面凹、裏面凸	釘穴あり	99-4	
2	F006	軒丸瓦	二巴文	2B	SD88-1#	30.0	-	16.8	12.5	2.3	2111	ナゲ	コヒ槌、表面凹、裏面凸	99-3
3	F002	軒丸瓦	二巴文	1B	SD88-1#	32.0	4.2	(16.8) (12.8)	2.1	2017	ナゲ(壊一輪)	コヒ槌、表面凹、裏面凸	釘穴あり	99-2
4	F001	軒丸瓦	二巴文	B	SD88-1#	-	-	17.4	12.4	2.4	1061	ナゲ	コヒ槌、表面凹、ナゲ	99-5

Figure 53-3 consists of five groups of archaeological artifacts, labeled 1 through 5. Each group contains three items: a top view or side view outline, a detailed cross-section or fragment, and a decorative band or cord.

図版番号	登錄番号	種類	文様	分類	道清・層位	法 長さ(cm)	法 高さ(cm)	法 幅(cm)	内区段	内区段	重量(g)	八面調整板	四面調整板	備考	写真図版	
1	F009	軒丸瓦	二巴文	II	1900-1層	-	-	-	17.3	12.6	2.4	779	-	-	99-4	
2	F015	丸瓦		I	1900-1層	-	-	-	3.4	13.9	6.9	1112	ナデ	ナデ	ナデ, 青井塗, 銀葉文	99-6
3	G002	軒平瓦	切妻文切妻文	II	1900-1層	27.4	23.7	(4.8)	24.9	(3.3)	2.10	ナデ	ナデ, ハナナデ		100-1	
4	G006	軒平瓦	切妻文切妻文	II	1900-1層	-	-	-	22.0	7.8	16.6	3.1	1371	ナデ	ナデ, ハナナデ	100-1
5	G005	軒平瓦	切妻文切妻文	II	1900-1層	-	-	-	22.4	5.9	16.6	3.1	1553	ナデ	ナデ, ハナナデ	100-4

第53図 SD88 出土遺物(3)



0 20cm

団査番号	登録番号	種類	文様	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅 高さ(cm)	法 内区幅 内区高	重量(g)	凸面調査	凹面調査	備考	写真図版
1	6003	軒平瓦	羽根文・波葉文	1B	SD88 1層	—	24.7 5.1 17.2	2.9	1645	ナダ	ヘラナダ	109-2	
2	6004	軒平瓦	羽根文・波葉文	1B	SD88 1層	—	24.2 4.9 17.6	3.3 (3.3)	1338	ナダ	ヘラナダ	109-3	
3	6006	軒平瓦	羽根文・波葉文	1B	SD88 1層	—	(23.2) (5.2) (15.0)	(3.2) (3.2) (3.2)	690	ナダ	ヘラナダ	内面に鋸刃のナダあり	109-5
団査番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅 高さ(cm)	法 厚さ(cm)	重量(g)	凸面調査	凹面調査	備考	写真図版	
4	8025	雨戸瓦	二字	SD88 1層	7.5 15.1 6.7 2.1	—	—	390	ナダ	コギ痕、端縁ケズリ	凹面にヘラキズあり	101-2	
団査番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法 長さ(cm)	法 幅 高さ(cm)	法 厚さ(cm)	重量(g)	凸面調査	凹面調査	備考	写真図版	
5	8032	不明瓦	—	SD88 1層	—	—	—	240	ケメリ、ナダ	ナダ	腹瓦の一部、裏瓦の下部、軒穴あり	101-3	

第54図 SD88 出土遺物(4)

3層は暗褐色シルトに径5cm以下の礫を含む。1期の堆積土である。

4層は褐色シルトに灰白色シルトブロックを含む。1期の堆積土である。

5層はにぶい黄褐色シルトに径10cm以下の円礫を含む。1期の堆積土である。

構造 断面観察の結果、3時期が確認でき、各時期で構造に違いがみられる。

1期は壁面に円礫を配置するのみの溝で断面形は逆台形を呈する。

2期は壁面に円礫を配置し、底面にも円礫を敷いた溝で断面形は逆台形を呈する。

3期は素掘りの溝で、断面形は半円形を呈する。堆積土である1層が礫や瓦片を含むことから、若林城廢城後も機能していた可能性がある。

SD89は第8次調査で確認されたSD43の延長に位置していることから、SD89とSD43は同一の溝跡と考えられる。

出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、不明瓦といった瓦片255点、陶器1点、磁器1点、土師質土器15点、土師器1点、金属製品12点があり、このうち軒丸瓦2点、丸瓦2点、軒平瓦1点、熨斗瓦2点、面戸瓦3点を図示した。

F010-011（第55図-1・2）は軒丸瓦で、瓦当文様はともに珠文の無い三巴文である。ともに凹面にコビキ痕・布目痕・ナデ調整、凸面にナデ調整がみられ、全て1層から出土している。

F016-017（第55図-3・4）は丸瓦である。F016は凹面にコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面にナデ調整で、F017は凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。全て1層から出土している。

G007（第56図-1）は軒平瓦で、瓦当文様は桔梗文と唐草文である。凹面にヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

H001-002（第55図-5、第56図-2）は熨斗瓦である。H001は凹面にナデ調整・ヘラナデ調整・ヘラによる線刻、凸面にナデ調整で、凹面には工具痕がみられる。H002は凹面・凸面ともにナデ調整がみられる。H001-002ともに分割面の特徴から焼成後に分割したものと考えられる。全て1層から出土している。

H026-028（第56図-3～5）は面戸瓦である。H026は凹面にコビキ痕・布目痕・端部4辺にケズリ調整、凸面にナデ調整で、凹面には工具痕がみられる。H027-028は凹面にコビキ痕・端部4辺にケズリ調整、凸面にナデ調整がみられる。H026～028は全て1層から出土している。

100号溝跡（SD100）（第25・57図）

位置 Y24～25・X29～32グリッドで南北方向の溝跡を検出した。

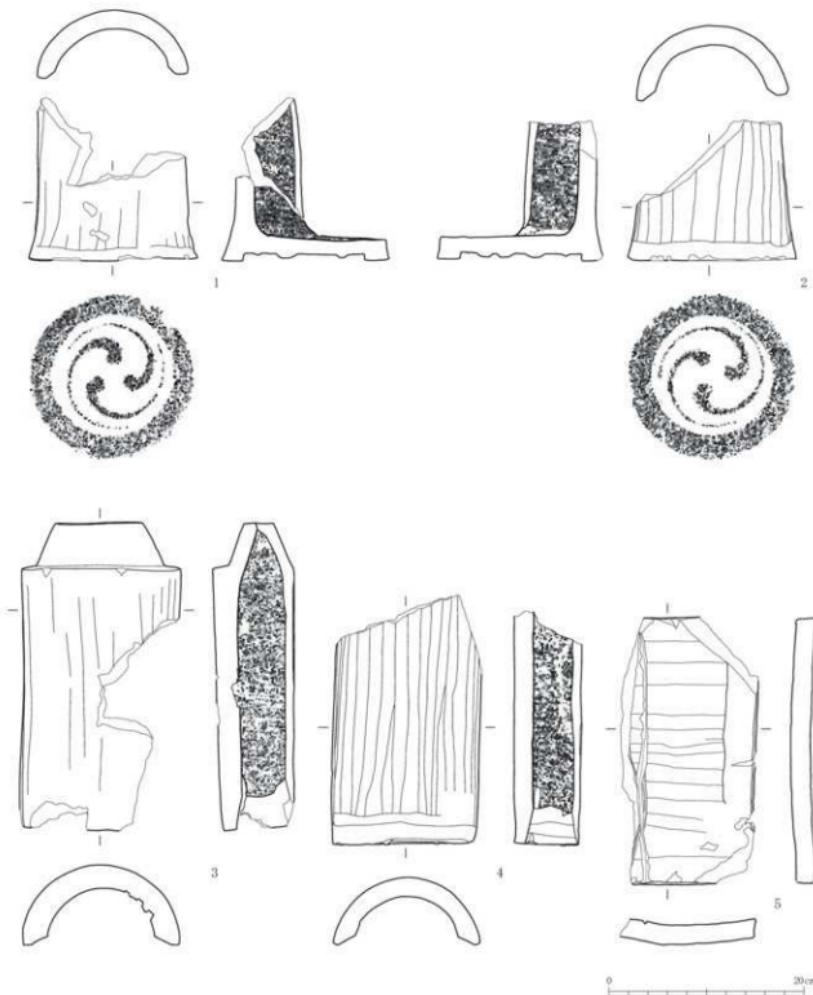
方向 N-15°-Eであり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ18.00m以上、幅3.86m以上、深さ1.73mで、西側と南北端は調査区外に延びる。部分的に搅乱で削平されている。

重複関係 SB14、SA15、SB15より古い。

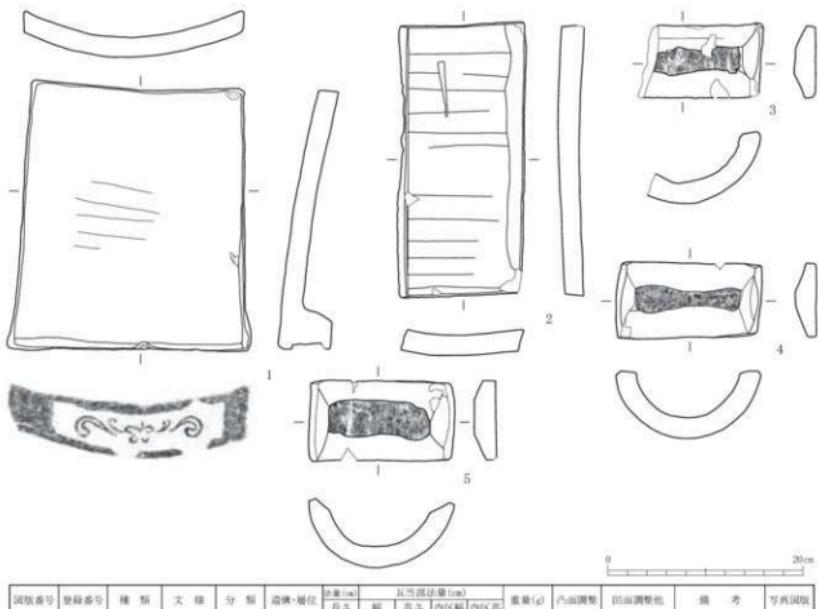
堆積土 建物基礎搅乱を利用した断面観察の結果、4層を確認した。2時期に大別でき、2期の堆積土は1・2層である。1層は人為堆積土である。上面の一部に薄いIVb層が堆積し、層中には瓦が全く含まれないことが、1層は若林城造営時の整地で埋められた可能性がある。2層は円礫の平坦面を上にする一定方向での堆積状況を確認していることから、水流により運ばれて堆積したものであると考えられる（注1）。最下部では鉄分の堆積もみられた。1期の堆積土は3・4層である。3層は人為堆積土である。最下部では水の流れの痕跡と鉄分の堆積が認められる。2層と同様に水の流れがあったと考えられる（注1）。4層は深掘りを行った地点でのみ確認された。SD100がVI層を掘りこんで構築されていることから、1期構築当初の底面水止めや掘り方などの可能性がある。各堆積土については以下の通りである。

第2節 IV層上面検出の遺構



回収番号	登録番号	種類	文様	分類	遺構・層位	法 長さ(cm)	凸面法 長さ(cm)	重量(g)	凸面調整地	凸面調整地	備考	写真図版		
1	F011	軒丸瓦	三巴文	B	3000 1層	-	17.1	12.5	2.5	1360	ナゲ	ツビ半面、軒丸瓦、ナゲ	101-5	
2	F010	軒丸瓦	三巴文	B	3000 1層	-	16.7	12.4	2.3	1405	ナゲ	ツビ半面、軒丸瓦、ナゲ	101-4	
3	F016	丸瓦	-	3000 1層	31.3	26.8	4.5	16.4	8.2	2.5	1665	ナゲ	ツビ半面、丸瓦、有目地瓦、瓦頭上瓦頭切込丸瓦	101-6
4	F017	丸瓦	-	3000 1層	-	-	-	15.1	6.9	1.9	1450	ナゲ	ツビ半面、丸瓦	101-7
回収番号	登録番号	種類	分類	遺構・層位	法 長さ(cm)	凸面法 長さ(cm)	重量(g)	凸面調整地	凸面調整地	備考	写真図版			
5	H001	軒丸瓦	-	3000 1層	27.3	-	-	2.0	999	ナゲ	ナゲ、ヘタナゲ、ヘタによる縫隙	地成後分析	102-3	

第55図 SD89 出土遺物(1)



団体番号	登録番号	種類	文様	分類	造営・層位	法長(cm)	法幅(cm)	法高さ(cm)	内(区)高さ(cm)	重量(g)	凸面調整地	凹面調整地	備考	写真図版
1	6007	軒平瓦	日輪文御紋文	1B	SD89-1B	26.8	24.6	5.3	17.1	3.0	2750	ナダ	ハラナダ	102-1
2	6002	軒小瓦	1	SD89-1B	29.3	12.9	12.3	2.1	1259	ナダ	ナダ		施成後分離	102-2
団体番号	登録番号	種類	分類	造営・層位	法長(cm)	法幅(cm)	法高さ(cm)	内(区)高さ(cm)	重量(g)	凸面調整地	凹面調整地	備考	写真図版	
3	6026	山戸瓦	1	SD89-1B	7.4	(16.5)	7.3	2.2	274	ナダ	コビキ板、板羽根、端部ケイリ	凹面に工具痕		101-8
4	6027	山戸瓦	1	SD89-1B	7.6	14.9	6.9	2.1	419	ナダ	コビキ板、端部ケイリ			101-9
5	6028	山戸瓦	1	SD89-1B	8.4	14.4	7.1	2.1	425	ナダ	コビキ板、端部ケイリ	凹面、凹面に指面正板		101-10

第56図 SD89 出土遺物(2)

1層にはぶい灰黄褐色シルトブロックと褐灰色シルトブロックを多量に含み、径10cm以下の円礫が少量含む。

2層は灰黄褐色砂質シルトで、径10cm以下の円礫と砂粒を多量に含む。

3層は灰黄褐色シルトで、にぶい黄橙色シルトブロックを多量に含み、径5cm以下の円礫を少量含む。

4層はにぶい黄褐色砂質シルトで、灰黄褐色シルトブロックと明黄褐色シルトブロックと径5cm以下の円礫を含む。

構造 2層と3層の最下部で水流による堆積を確認したことから、SD100は2時期に大別できると考えられる。1期は開削時に水を流し、廃絶時に3層で埋められる時期である。2期は3層で埋められた後に水を流し、廃絶時に1層で埋められる時期である。

遺物 遺物は出土していない。

注

注1 現地で東北学院大学の松本先生にご教示頂いた。

114号溝跡（SD114）（第29・58・59図）

位置 Y46～52・X37～39グリッドで東から西へ延び、西端で北に鉤型に屈曲する溝跡を検出した。

方向 東西方向N-80°・W、南北方向N-10°・Eである。東西方向・南北方向とも方向は六尺五寸の方眼に一致する。

規模 東西方向の長さが29.95m、南北方向の長さが6.13m、裏込めを含む掘り方幅2.30m、底面までの深さ0.27～0.48m、掘り方深さ0.70～0.90mである。検出した南北と東西の総延長は36.08mである。東端と北端は調査区外へ延びる。

重複関係 SA19・20・21より新しい。

堆積土 5層を確認した。1～3層はⅢ層に類似しており、2・3層には径10～20cmの礫を多量に含む。この礫は裏込めが崩れたもの、または4層の底面敷石が巻き上げられて入り込んだものと考えられる。4層は底面敷石の下でのみ確認できることから、底面の掘り方埋め土と考えられる。5層は壁面裏込めの残存部と考えられる。なお、4・5層が確認できた地点はごく一部である。Ⅲ層に類似した土が堆積していることから、若林城廃城後の早い時期に石が外されて埋められたと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで径5cm以下の褐灰色シルトブロックを少量と径20cm以下の礫を含む瓦を含む。

2層は褐灰色砂質シルトで、径10cm以下の黒褐色シルトブロックと径20cm以下の礫を含む。

3層は褐灰色シルトで、径5cm以下の黒褐色シルトブロックを少量と径10cm以下の礫を含む。

4層は褐灰色シルトで、径5cm以下の黒褐色シルトブロックと礫を含む。

5層はにぶい黄褐色シルトで、径20cm以下の褐灰色シルトブロックと礫を含む。

構造 個石は残存していないが、裏込め石と考えられる円礫や側石の抜き取り痕跡を確認したことから大型の礫を側石として使用していたと考えられる。また、底面の一部では径約10cm以下の円礫が敷き詰められた状況を確認できた。以上のことから、SD114は壁面の石組みとして大型の礫が使用され、底面に円礫が敷き詰められた構造と考えられる。

今回の調査においてSD114は北に位置する六郷堀跡と接続していないことが確認されたことから、調査区外で東に屈曲し、SD123に接続する可能性がある。また、南側のSD117・SD120は六角塔の基礎などで削平されているが、接続するものと考えられる。

敷石 一部で底面の敷石の残存を確認した。敷石は底面全体に径約5～20cmの円礫が敷き詰められたものである。敷石はやや平らな面を上にしているが、加工したものではなく自然の礫を使用している。

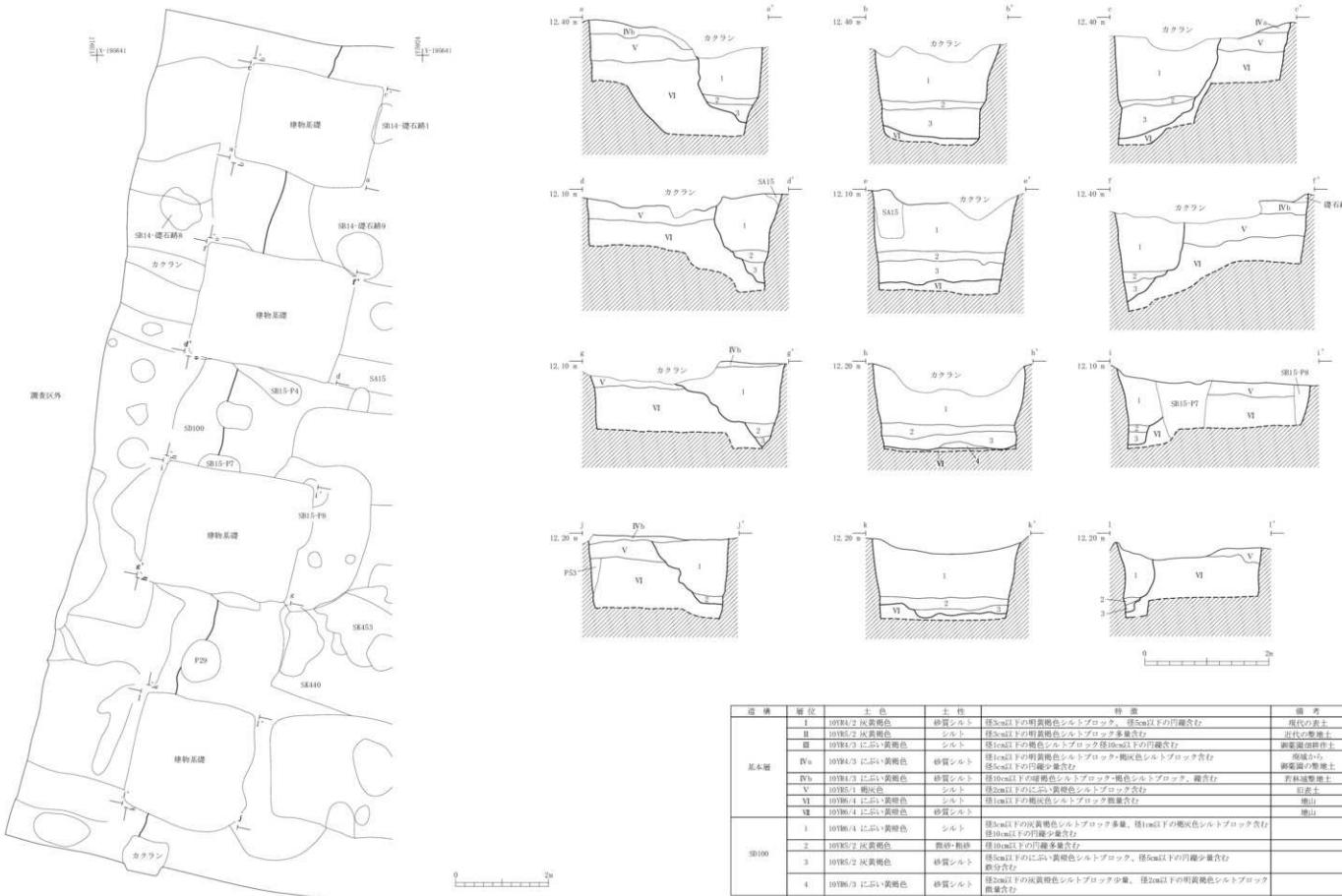
裏込め 裏込めは片側幅約0.15～0.20mである。径約5～20cmの円礫を充填しており、円礫の間にはやや粘性のある黄褐色シルトがみられる。2層・3層の状況から、裏込めのほとんどは側石の抜取り時に崩落したと考えられる。

出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、不明瓦、棟瓦といった瓦片183点、陶器4点、土師器24点、鉄製品4点、木製品1点があり、このうち輪違い1点、陶器1点、土師器2点を図示した。

H005（第60図-4）は輪違いである。狭端部側が丸くすぼまる形状で、四面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整、凸面の狭端部側のみケズリ調整のちナデ調整がみられる。1層から出土している。

I002（第60図-1）は唐津産陶器の向付で、内面に鉄絵がみられる。1層から出土しており、時期は16世紀末～17世紀初頭である。

C001・C002（第60図-2・3）は土師器で、C001は底部に木葉痕がみられる。C002は外面にヨコナデ調整がみられ、底部はロクロ成形による回転糸切りと考えられる。全て1層から出土している。



第57図 SD100



第58図 SD114(1)



第59図 SD114 (2)



第60図 SD114 出土遺物

117号溝跡（SD117）（第29-61・62図）

位置 Y45~46・X38~40グリッドで、北東方向から南端で南西方向に屈曲する溝跡を検出した。

規模 北東方向の長さ4.98m、幅0.75~0.80m、南西方向の長さ2.53m、幅0.18~0.39m、総延長は7.51mである。深さ0.17~0.41m、断面形状は半円形を呈する。中央の屈曲部と北端、東西方向部分南半部は搅乱で削平されている。

方向 北東方向はN-15°-E、南西方向はN-73°-Eであり六尺五寸の方眼に一致しない。

若林城の方眼を斜めに横断しており、これまで類似の方向を持つ溝跡は確認されていない。

重複関係 SX20-21、SA25より新しく、SK572より古い。六角塔基礎により寸断されているが、北側のSD114、南西側のSD119と接続する可能性がある。

堆積土 3層を確認した。1・2層は径10~15cm以下の礫や瓦が多量に混入している。配置された様子がみられないことから、廃棄されたものと考えられる。3層は径2cm以下の礫を含む底面堆積土である。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色砂質シルトで、径10cm以下の円礫と瓦を含む。

2層は暗褐色砂質シルトで、径15cm以下の円礫・削石、瓦を含む。

3層は褐灰色シルトで、径2cm以下の礫を微量含む。

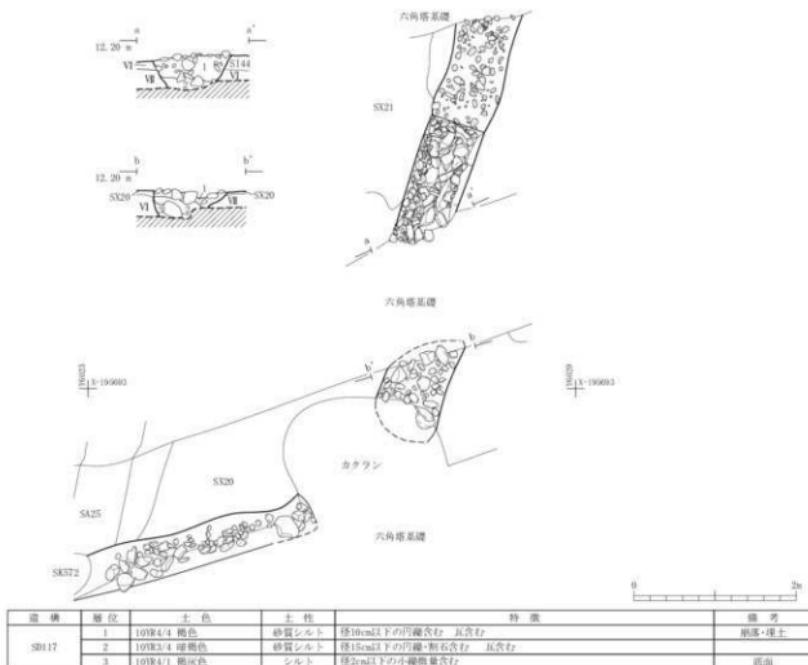
構造 北東から南西へ屈曲する溝跡で、これまでの調査で類似した方向の溝跡は確認されていない。溝跡内部には底面まで礫や瓦が多量に混入しており、溝跡の廃絶・解体後に廃棄されたと考えられる。SX20-21、SA25より新しいことからSA25の区画とSX20-21の配置が変更になったのちにSD117が造られたと考えられ、この造り替えは若林城期の短い期間に収まる。

出土遺物 丸瓦、軒平瓦、平瓦、雙斗瓦、面戸瓦、不明瓦といった瓦片195点、土師質土器1点、土師器1点があり、このうち軒平瓦1点、土師質土器1点を示した。

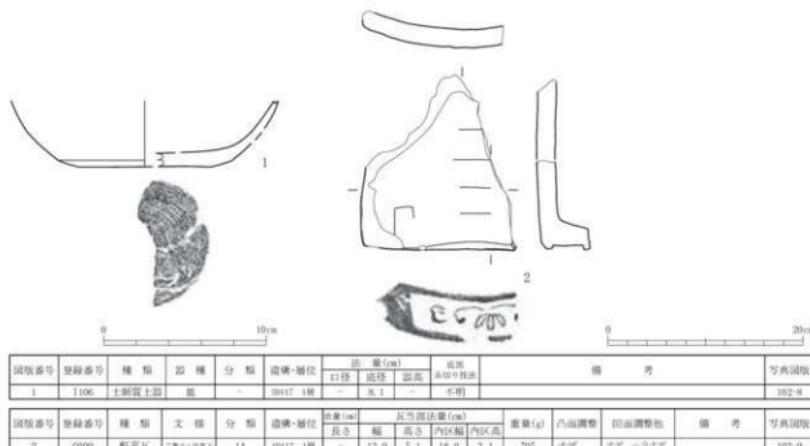
G009（第62図-2）は軒平瓦で、瓦当文様は三葉文と唐草文である。凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

I106（第62図-1）は土師質土器の皿である。底部には回転糸切りがみられるが、回転方向は不明である。1層から出土している。

第2節 IV層上面検出の遺構



第61図 SD117



第62図 SD117 出土遺物

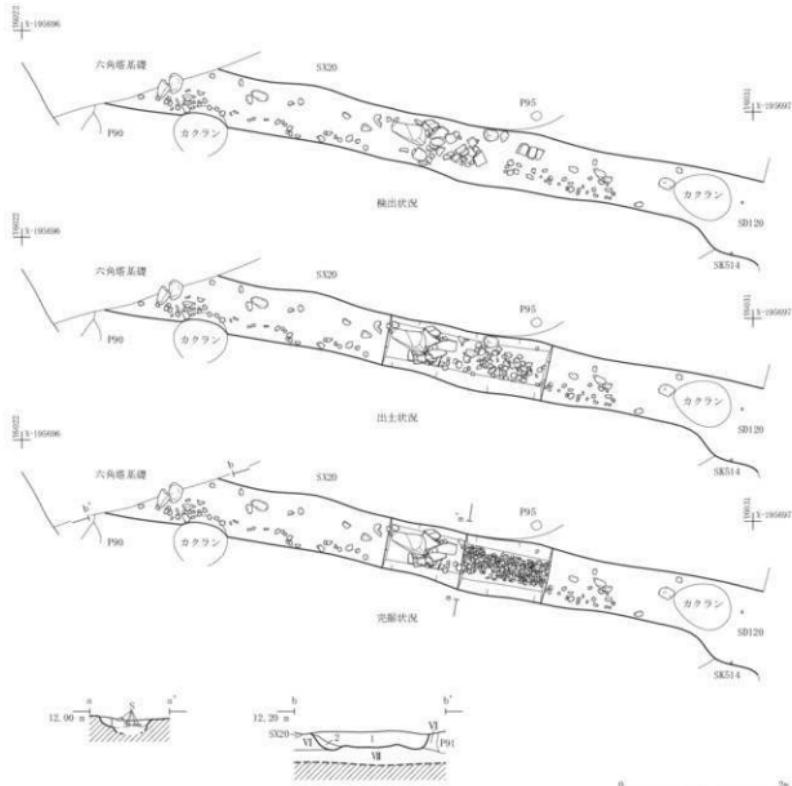
119号溝跡 (SD119) (第29-63図)

位置 Y45~47・X40グリッドで、東西方向の溝跡を検出した。

方向 N75°Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ7.47m、幅0.55~0.99m、深さ0.25m、断面形は半円形である。西端は調査区外に延び、東側はSD120に接続する。

重複関係 SX20とは重複関係が不明瞭なため新旧関係は不明である。SD120と接続していることから同時期と考えられる。



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
SD119	1	10YR 4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の黒褐色シルトブロック少含む 径20cm以下の礫含む 灰色	底面
	2	10YR 4/4 棕色	シルト	径2cm以下の灰化物微量含む	

第63図 SD119

第2節 IV層上面検出の遺構

堆積土 2層を確認している。1層中には径20cm以下の礫と瓦が混入し、底面には径約5cm以下の円礫が敷き詰められている。底面には水流による堆積土はない。2層は中央の搅乱断面でのみ確認し、壁面から底面の落ち際に堆積している。側石の抜き取り痕の可能性がある。1・2層とも人為堆積土である。堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径20cm以下の礫、瓦を含む。

2層は褐色シルトで、径2cm以下の炭化物を微量含む。

構造 底面に円礫が敷き詰められた状況を確認することができた。側石は抜き取られた可能性がある。底面に水流による堆積土が見られず深さも0.25mと浅いこと、六尺五寸の軸方向と一致していることから建物周りの雨落ち溝であった可能性がある。また、東に位置するSD120とは底面の構造が類似していることから、同一の溝跡の可能性がある。

出土遺物 遺物は出土していない。

120号溝跡（SD120）（第29・64・65図）

位置 Y47~51・X39~41グリッドで、東西方向で蛇行しながら西端で北に屈曲する溝跡を検出した。

方向 東西方向N-78°・W、南北方向N-10°・Eである。南北部分は六尺五寸の方眼に一致する。東西部分は蛇行するため不明瞭であるが、概ね一致する。

規模 東西方向の長さ19.72m以上、南北方向の長さ9.34m、深さ0.10~0.22mで断面形は半円形を呈する。大部分が擾乱で削平されている。

重複関係 SK520より古い。SD114・119・125、SB16とは重複関係が不明瞭なため、新旧関係は不明である。

堆積土 4層を確認した。1~3層は人為堆積土で、3層は南北方向部分でのみ確認しており、径10cm以下の礫を少量含む。これらの礫は配置された様子がみられないことから、廃絶時に側石や裏込めが廃棄されたと考えられる。4層は上面に円礫が敷き詰められていることから、掘り方埋め土と考えられる。水流れの痕跡は認められない。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで、径10cm以下の礫と瓦を含む。

2層は灰黄褐色シルトで、径10cm以下の礫を少量含む。

3層は暗褐色シルトで、径10cm以下の礫と角礫を少量含む。

4層は暗褐色シルトで、径10cm以下の円礫を多量含む。

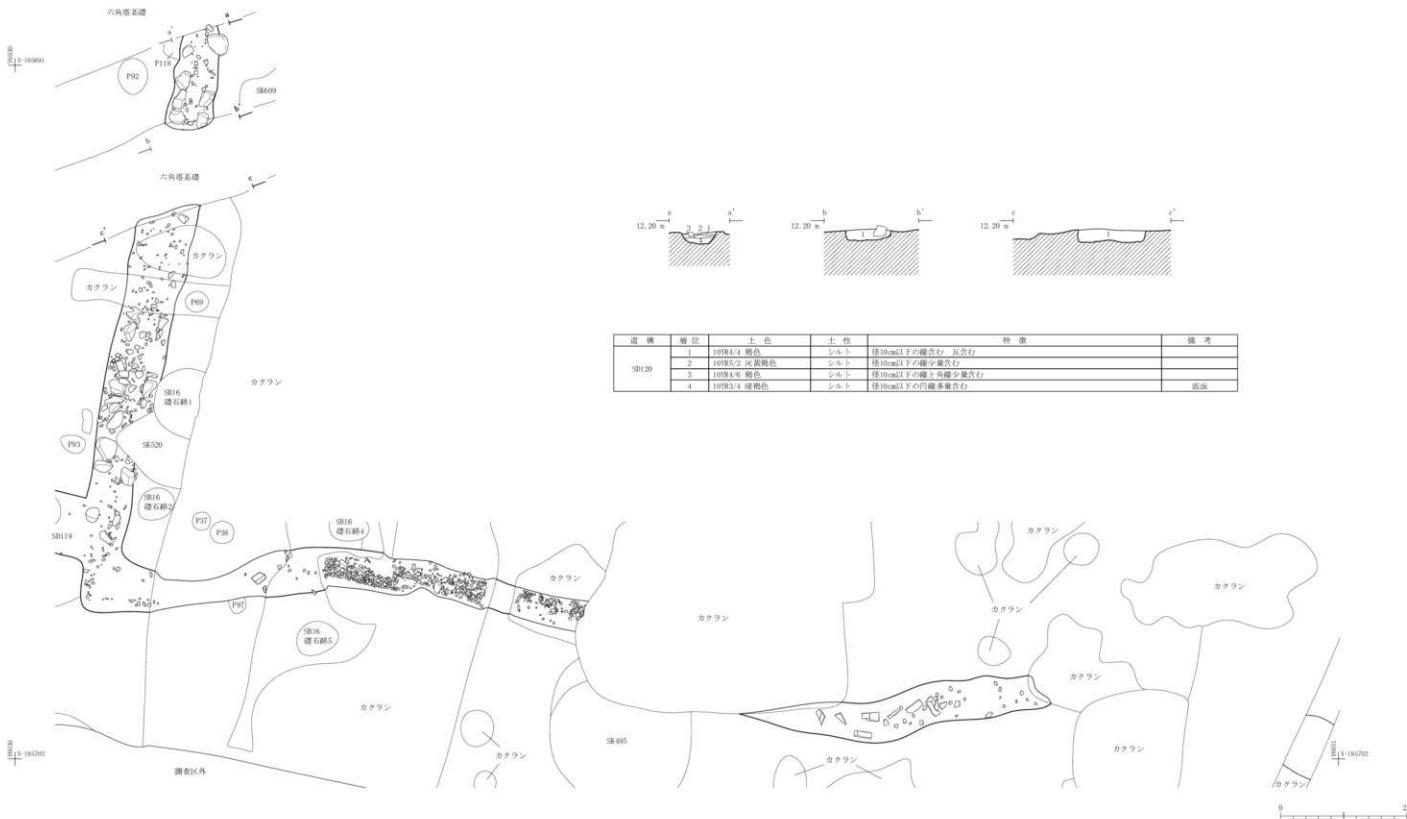
構造 東西方向部分の底面は、礫が敷き詰められた状況を確認しているが側石や抜き取り痕はみられなかった。南北方向では側石と裏込めの痕跡を確認しているが、底面の状況は不明である。

西側に位置するSD119底面にも円礫が敷き詰められていることから、本来は同一遺構の可能性がある。北側に位置するSD114とは搅乱により明確な接続は認められない。隣接する溝跡との配置から、御殿建物から引き込まれた水流が、SD120の南北方向部分を介してSD114に注ぎ込むものと考えられる。

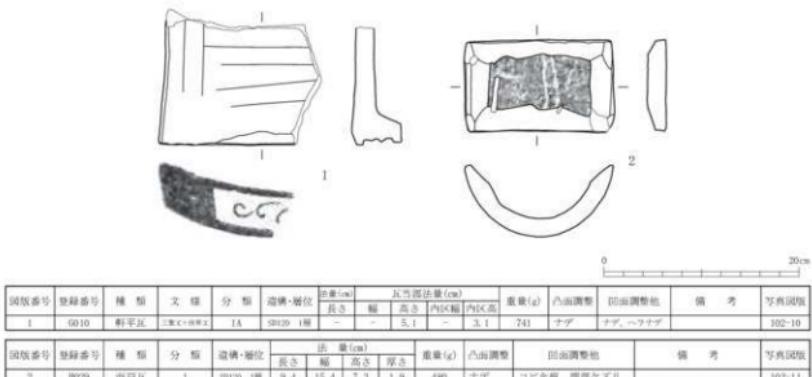
出土遺物 丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、不明瓦、棟瓦といった瓦片72点、土師器1点があり、このうち軒平瓦1点、面戸瓦1点を図示した。

G010（第65図-1）は軒平瓦で、瓦当文様は三葉文と唐草文である。凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

H029（第65図-2）は面戸瓦である。凹面にコビキ痕・端部4辺にケズリ調整、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。



第64図 SD120



第65図 SD120 出土遺物

123号溝跡 (SD123) (第27-66~68図)

位置 Y49~51-X32~34グリッドで、六郷堀跡南壁に接続する南北方向と、南端で西へ屈曲する東西方向の溝跡を検出した。

方向 南北方向がN-10°-E、東西方向がN-80°-Wで六尺五寸の方眼に一致する。

規模 南北14.18m、東西9.52m、深さ0.28~0.65m、総延長は約36.08mである。底面幅は約0.80m、掘り方幅は約2.00mである。西端は調査区外に延びる。大部分は擾乱に削平されたため詳細な規模は不明である。西側の第13次調査2区ではこの溝跡の延長と考えられる遺構が確認されていないため、南へ屈曲してSD114と接続する可能性がある。重複関係 SD130、SK504・512-596、SX23より古い。また、SA18の布堀り基礎より新しく、SA18柱穴列とは同時期の可能性がある。六郷堀跡とは南壁面で接続していることから同時期と考えられる。

堆積土 9層を確認した。1~4層は砂質シルトで礫や褐色~黒褐色シルトブロックが混入しており、人為堆積土と考えられる。7~8層では側石と裏込め、底面の敷石の残存を確認した。7層は裏込め範囲の外側に伸びる堆積であることから、裏込めが抜き取られた掘り方の痕跡と考えられる。底面の敷石上には砂粒を含む8層が堆積するが、水流による堆積は顯著ではない。9層は東西方向と南北方向の接続部でのみ確認した。掘り方底面の9層は、溝底面の底上げや高さ調整を目的として敷設されていたと考えられる。人為堆積土で、各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックと径20cm以下の礫を含む。

2層は灰黃褐色シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径20cm以下の礫を含む。

3層は黃褐色砂質シルトで、黒色シルトブロックを少量と径20cm以下の礫を含む。

4層は褐灰色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径10cm以下の礫を含む。

5層は灰白色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックを少量と径5cm以下の礫を含む。

6層は褐灰色砂質シルトで、径5cm以下の礫を少量含む。

7層は青灰色砂質シルトで、径5cm以下の礫を少量含む。

8層は褐灰色砂質シルトで、径20cm以下の礫を少量と径2cm以下の炭化物を微量含む。

9層は青灰色砂質シルトで、褐灰色・黄褐色シルトブロックを含む径5cm以下の礫を少量含む。

構造 SD123は残存状況が極めて悪く、南北方向は側石と裏込め、底面の円礫がわずかに残るのみである。東西方向では底面の円礫と掘り方の痕跡がわずかに確認されたのみである。東西方向の掘り方底面にはブロック土が敷設されることが確認されたことから、底面の底上げや高さ調整がされていたことが考えられる。

SD123の北側は、六郷堀跡の南壁面に接続している。接続部は、壁面や裏込めが崩落しているために不明瞭だが、六郷堀跡南壁裏込めの上位にSD123の側石を確認することができる。SD123底面の標高は約11.0m、六郷堀跡底面の標高は約10.4mと高低差は約0.6mである。SD123底面が六郷堀跡より高い位置に造られていることから、SD123を流れた水は六郷堀跡に流れ込むと考えられる。

側石 側石は南北方向で部分的な残存を確認しているが、ほとんど残っていない。残存する側石の大きさは径30cm～50cmで、角礫・割り石を使用している。水路の使用面に面が描っていないことから、壊された際などに動いているものと考えられる。

裏込め 裏込めは南北方向のごく一部にのみ確認している。片側の裏込め幅約0.50m、掘り方幅は約0.20mで、裏込めには径約5～20cmの円礫、やや粘性のある土壤が混入する。2層・3層に含まれる円礫・角礫は、分布が希薄で散在することから、ほとんどの裏込めは崩落したと考えられる。

敷石 底面の一部には敷石が認められた。敷石に該当する礫の大きさは径5～15cmで、径10cmの礫が主体を占める。礫側石同様に面や配置が不規則であることから、動いているものと考えられる。

出土遺物 丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、不明瓦といった瓦片61点、土師質土器1点、土師器1点があり、このうち輪違い1点、土師質土器1点を図示した。

H006（第68図-2）は輪違いである。狭端部側が直線的な形状で、凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。1層から出土している。

I096（第68図-1）は土師質土器の皿で、体部にロクロナデ・ナデ調整がみられる。底部は回転糸切りのちナデ調整が施されたと考えられる。1層から出土している。

（5）性格不明遺構（SX）

19号性格不明遺構（SX19）（第25・69図）

位置 Y30～Y33・X33～X34グリッド、六郷堀跡深掘り時に断面でのみ検出した。

規模 東西幅4.29m以上、深さ1.56mである。東西幅は東側のみ六郷堀跡底面で確認したが、西側については大部分が調査区下層に位置するため不明である。また、六郷堀跡底面のやや北側中央でもシルトブロックと自然堆積層の境目が確認でき、SX19の立ち上がりと考えられるが、断片的であり規模は不明である。

重複関係 六郷堀跡より古い。

堆積土 10層を確認した。1～5層までは色調の明瞭なシルトブロックが堆積している。3層は色調は同じだが、砂質による縮まりと粘性の違いで細分している。6～10層はグライ化のためか色調が暗くなっている。10層には水流の痕跡と考えられる鉄分も沈着している。各堆積土については以下の通りである。

1層はにぶい黄褐色砂質シルトで、暗褐色シルトブロックを少量と径1cm以下の鉄分を含む。

2層はにぶい黄褐色砂質シルトで、暗褐色シルトブロックを含む。

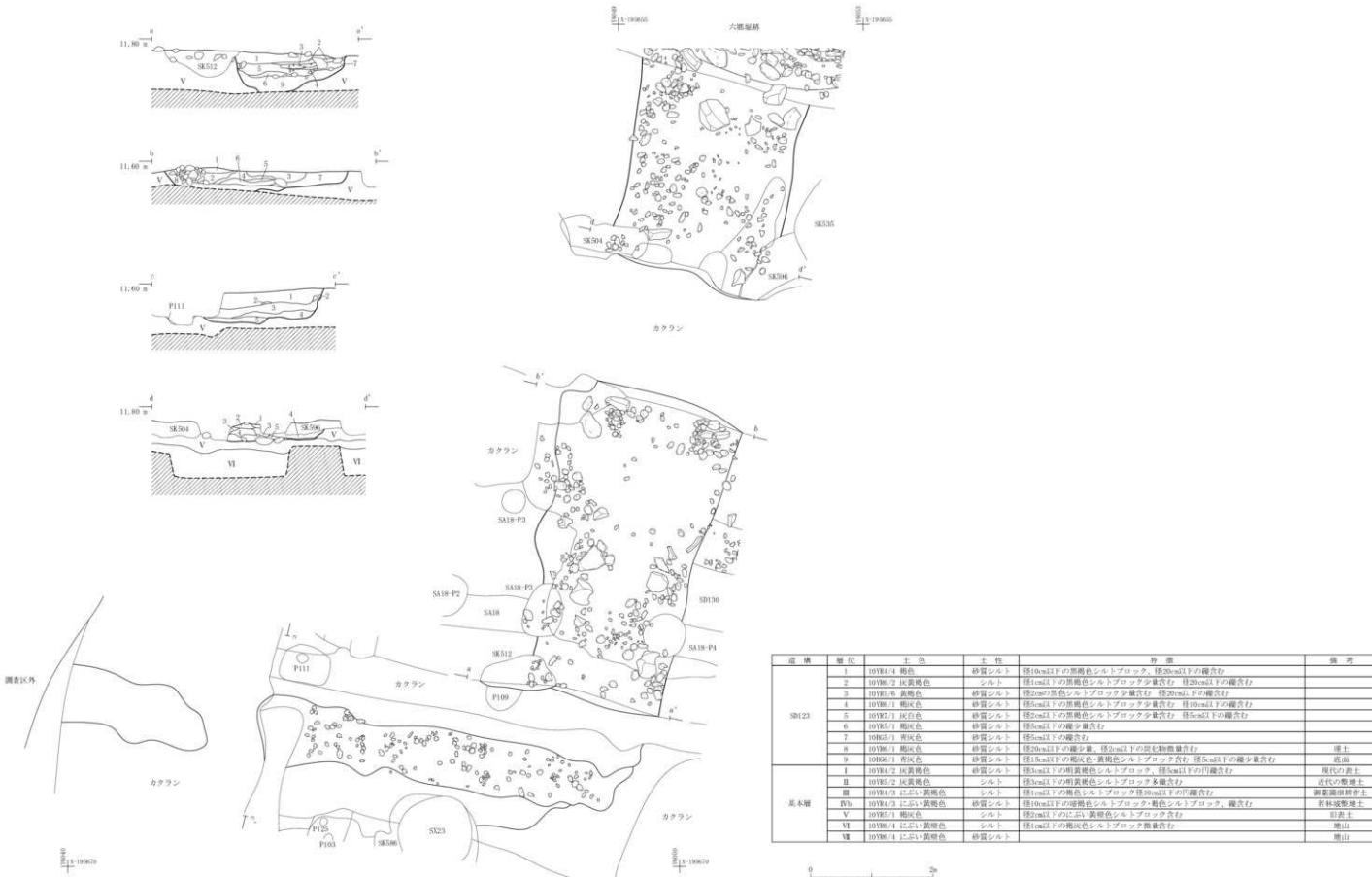
3a層は褐色砂質シルトで、暗褐色シルトブロックを微量含む。

3b層はにぶい黄褐色シルトで、暗褐色シルトブロックと鉄分を含む。

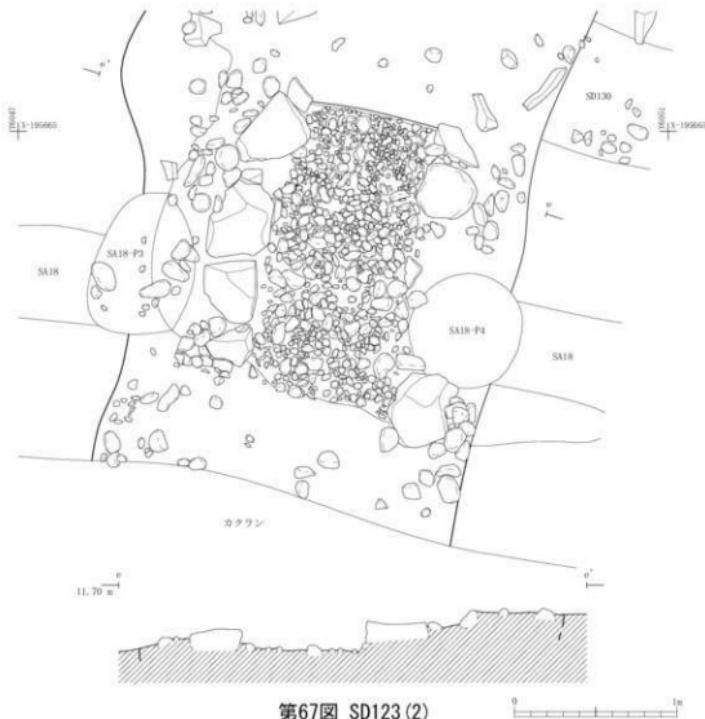
4層はにぶい黄褐色シルトで、暗褐色シルトブロックを少量と径1cm以下の鉄分を含む。

5層は灰黄褐色シルトで、暗褐色シルトブロックを少量含む。

6層は灰色シルトで、暗褐色シルトブロックを含む。



第66図 SD123(1)



第67図 SD123 (2)



第68図 SD123 出土遺物

第2節 IV層上面検出の遺構

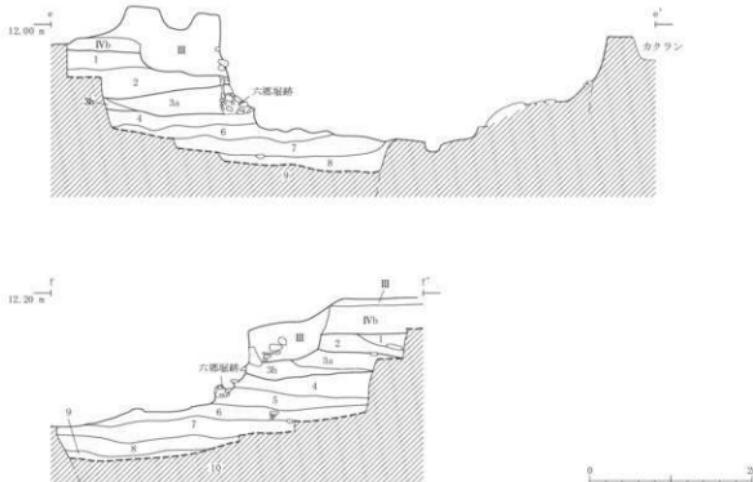
7層は灰色砂質シルトで、暗褐色シルトブロックを多量含む。

8層は灰色砂質シルトで、暗褐色シルトブロックを含む。

9層は灰色砂質シルトで、径5cm以下の暗褐色シルトブロック微量含む。

10層は灰黄褐色砂質シルトで、径3cm以下の鉄分を多量含む。

出土遺物 出土していない。



遺構	層位	土 性	土 性	特 裕	備 考
SX19	1	10YE5-4 にぶら 黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック少量と鉄分含む	
	2	10YE6-4 にぶら 黄褐色	砂質シルト	径10cm以下の暗褐色シルトブロック含む	
	3a	7, 8YE6-6 棕色	砂質シルト	径2cm以下の暗褐色シルトブロック微量含む	
	3b	10YE5-3 にぶら 黄褐色	シルト	径3cm以下の暗褐色シルトブロックと鉄分含む	
	4	10YE5-3 にぶら 黄褐色	シルト	径3cm以下の暗褐色シルトブロック少量と鉄分含む	
	5	10YE5-2 灰黄褐色	シルト	径3cm以下の暗褐色シルトブロック少量含む	
	6	10YE4-1 灰色	シルト	径10cm以下の暗褐色シルトブロック含む	
	7	10YE4-1 灰色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック多量含む	
	8	10YE4-1 灰色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック含む	
	9	10YE4-1 灰色	砂質シルト	径5cm以下の暗褐色シルトブロック微量含む	
	10	10YE4-2 灰黄褐色	砂質シルト	径3cm以下の鉄分多量含む	

第69図 SX19

20号性格不明遺構（池跡）（SX20）（第29・70図）

位置 Y45~46・X39~40グリッドで検出した。

規模 南北の長さ約53.1m、東西の長さ約5.19m、深さ0.12~0.26mである。平面形は隅丸方形を呈しており、断面形は皿形である。北東壁面に0.15×0.15m程の管状の突出部を持つ。北側と中央は六角塔基礎に大きく削平されている。

重複関係 SK547・523より新しく、SD117とP95・P96より古い。SD119とは重複関係が不明瞭であるため、新旧関係は不明である。

堆積土 3層を確認した。1層はSX20全面で確認した人為堆積土である。粘性が強く、水分も多量に含んでいる。2層は北東壁面から管状に突出した地点にのみで確認した。細長い堆積状況に砂質分も含まれることから、水流によって堆積したと考えられる。3層はSX20掘り方上面や壁面に点在しているが、大部分は1層により削平されている。土質は粘性が強く水分を含む。確認状況からSX20底面に敷かれた貼土の可能性がある。層厚は現状で10cm前後あり、本来は全面に貼られていたものと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色灰色シルトで、径10cm以下の礫を少量含む。

2層は褐色砂質シルトで、径2cm以下の小礫を含む。

3層は褐色灰色シルトで、径2cm以下の炭化物を微量含む。

構造 隅丸方形の大型プランで、底面と壁面に3層が貼られ、北東壁面に接続する突出部を持つ遺構である。突出部は本体北壁より外側に張り出す構造であり、水口に相当すると考えられる。底面の粘土と水口の存在から、SX20は池跡と考えられる。また、3層は現状の層厚が極端に薄く、かつ掘り方に点在する状況がみられることから、池跡の後に底面全体が削り取られてから埋められたと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

21号性格不明遺構（池跡）（SX21）（第29・71図）

位置 Y44~46・X38~39で検出した。

規模 東西の長さ12.11m、南北の長さ6.25m、深さ0.14~0.29m、平面形は不整形で断面形は皿形を呈する。内部は六角塔基礎により大きく削平されている。

重複関係 SA23-25、SD117、SK501・539・540・546・548・559・562・578・579・601・607より古い。

堆積土 4層を確認した。1層~3層は人為堆積土で、色調により分層しているが、埋められた時期は同時と考えられる。4層は掘り方上面及び壁面の一部にのみ残存する粘性の高い褐色シルトであり、土質はSX20の3層に類似している。搅乱による削平が著しく、残存状況は悪い。SX20と同様に本来は底面・壁面の全面に貼られていたものが廃絶後に削り取られたと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は褐色シルトで、黄褐色シルトブロックと褐色シルトブロック・黒褐色シルトブロック、径3cm以下の礫を少量含む。

2層は暗褐色砂質シルトで、黒褐色砂質シルトブロックと径5cm以下の円礫を微量含む。

3層は褐色灰色シルトで、黒褐色シルトブロックを微量と径5cm以下の礫を少量含む。

4層は褐色灰色シルトで、黒褐色シルトブロックと径3cm以下の礫を微量含む。

構造 不整形の大型プランで底面と壁面に4層が貼られている遺構である。SX20と類似した構造を持つことから池跡と考えられる。また、4層の堆積状況もSX20の3層と類似していることから、SX20と同様の方法で埋められたと考えられる。

出土遺物 遺物は出土していない。

23号性格不明遺構（桶埋設遺構）（SX23）（第27・72・73図）

位置 Y50・X34~35グリッドで検出した。

規模 径約1.32m、深さ約1.01mである。平面形は円形、断面形は円筒形を呈している。

重複関係 SD123より新しい。南側のSK605は、重複するが堆積土の違いは小さいことからSX23の掘り方と考えられる。

堆積土。4層を確認した。1・2層は円礫・角礫が多量に混入しており、SD123の裏込めを壊して人為的に廃棄したと考えられる。なお、1層は混入する礫の大きさと堆積土の色調の違いにより1a・1bと細分した。3層はSD123の円礫と丸瓦・輪違いが多量に混入しているほか、17世紀初頭とみられる岸壁の擂鉢が出土している(I037)。4層は褐灰色砂質シルトで径3cm以内の小円礫が約10cmの厚さで堆積しており、その直下の底面には径15~20cmの円礫が散き詰められてこれら礫の隙間には、砂質シルトが入り込んで堆積している。各堆積土については以下の通りである。

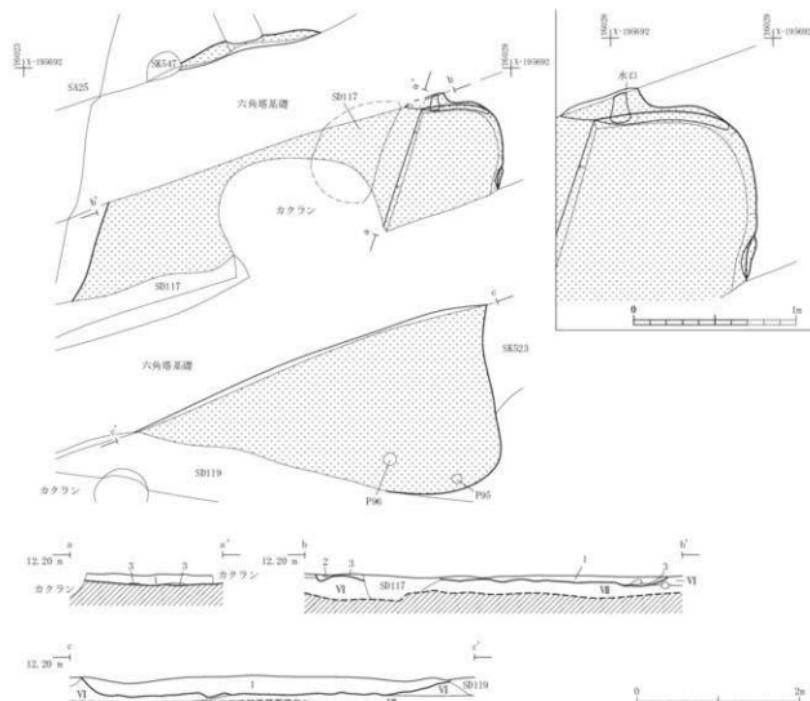
1a層は黒褐色砂質シルトで、黒褐色シルトブロックと径30cm以下の礫、鉄分を含む。

1b層は灰黄褐色シルトで、黒褐色砂質シルトブロックと径10cm以下の礫を含む。

2層は灰黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロック少量と瓦・陶器を微量含む。

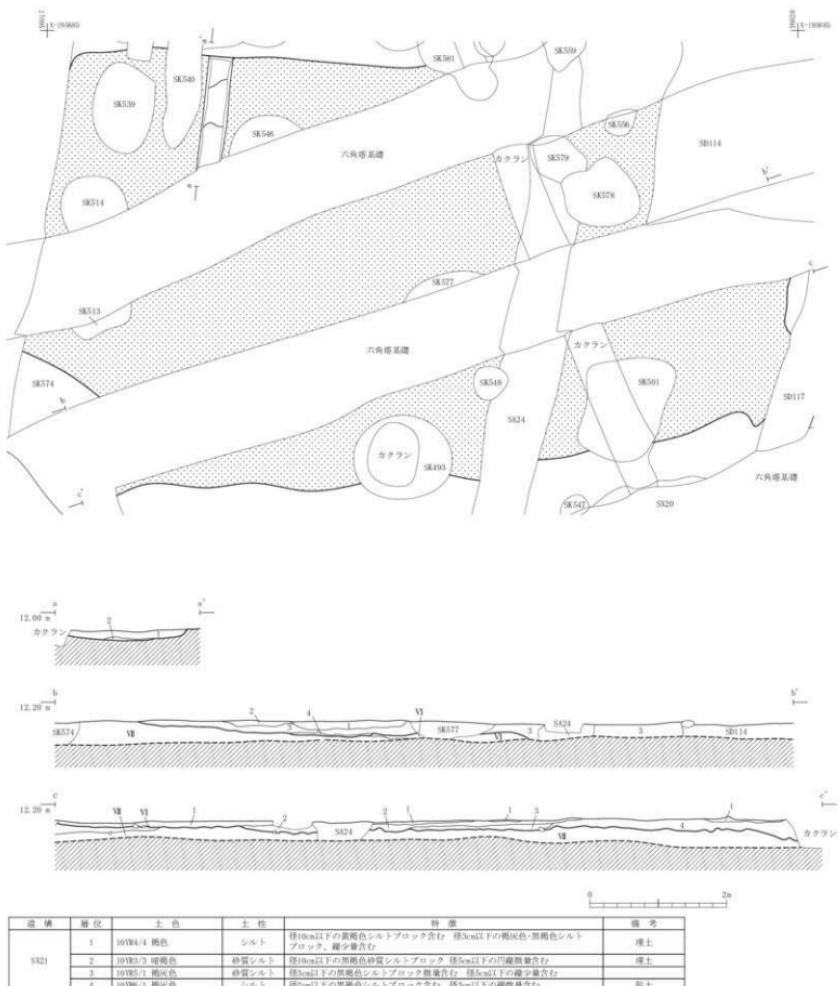
3層は褐灰色シルトで、径5cm以下の円礫と瓦を含む。

4層は褐灰色砂質シルトで、内部には径3cm以下の小礫を多量と底面には径15~20cm以下の円礫を多量含む。



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
3320	1	10YR4/1 褐灰色	シルト	径10cm以下の礫少量含む	埋土
	2	10YR4/4 褐色	砂質シルト	径2cm以下の小礫含む	水口
	3	10YR6/1 褐灰色	シルト	径2cm以下の炭化物微量含む	粘土

第70図 SX20



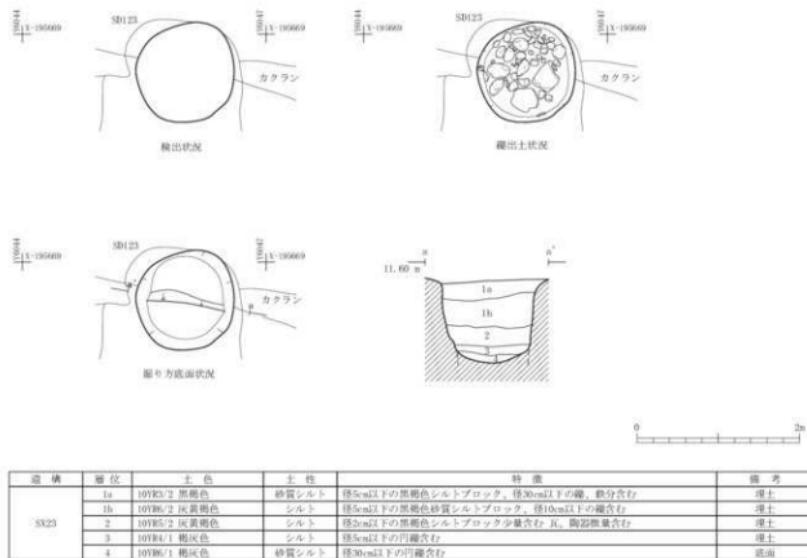
第71図 SX21

構造 繩が多量に混入している円形のプランを確認したことから、SX23はSD123の掘り方と裏込めを壊して構築したと考えられる。SX23壁面には、水平に廻る黒色の帯状痕跡が観察できた。断面の堆積土中には認められず、壁面のみに見られることから桶の外側にまわる「タガ」が壁面に圧着した痕跡と考えられる。この「タガ」の痕跡から、SX23内部には桶が埋設されていたと考えられる。また、4層中には径3cm以下の小円繩が充填され、底面には径15~20cm以下の繩が敷き詰められている。充填する繩の大きさを上から下で変える構造は、浄水や沈殿などの目的が考えられることからSX23は通常の井戸とは異なり外部から入れた水を桶に貯水する溜井戸のような施設であったと考えられる。

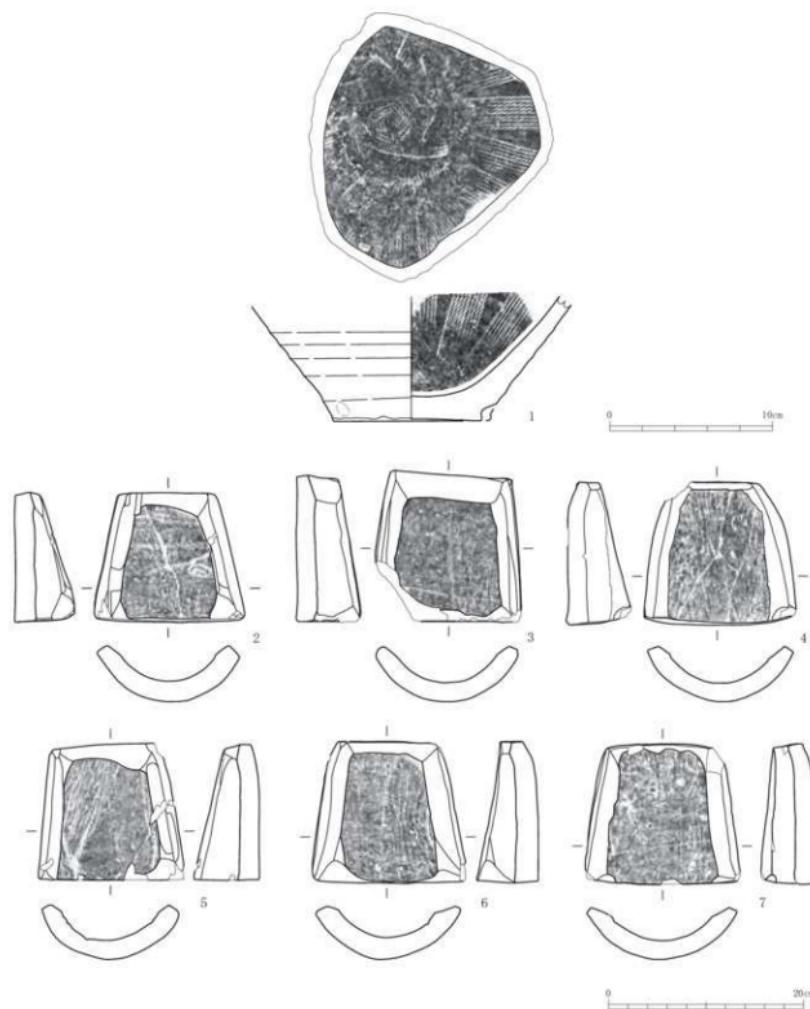
出土遺物 丸瓦、平瓦、突斗瓦、輪違い、不明瓦といった瓦片が36点、陶器1点、鉄製品2点があり、このうち、輪違い6点、陶器1点を図示した。

H009~014（第73図-2~7）は輪違いである。H009~014は、狭端部側が直線的な形状、H010~013は、狭端部側が丸くすぼまる形状である。H009は、凹面にコビキ痕・布目痕・ナデ調整、凸面にナデ調整・縫位のナデ調整がみられる。H010~012~014は、凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。H010の凹面には棒状工具による刺突痕か布目の絞り痕がみられる。H011は、凹面にコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面にナデ調整がみられる。H009~014は、全て2層から出土している。

I037（第73図-1）は岸窯産陶器の擂鉢である。擂目の単位は9本一単位である。2層から出土しており、時期は17世紀代である。



第72図 SX23



図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法 長(cm)	法 幅(cm)	重 量(g)	凸面調整板	備 考	写真図版
1	1037	陶器	埴輪	SX23 2號	-	9.6 (7.1)	7	170代 植付9本, 2.0mm板		103-3

図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・部位	法 長(cm)	法 幅(cm)	重 量(g)	凸面調整板	備 考	写真図版
2	10009	輪溝1	1	SX23 2號	13.3	15.4	598	ナデ	コビ少板、布目板、ナデ	103-4
3	10014	輪溝1	1	SX23 2號	15.5	-	675	ナデ	コビ少板、布目板	103-9
4	10010	輪溝1	2	SX23 2號	14.7	15.5 (8.7)	623	ナデ	コビ少板、布目板	103-10(10009の別物)
5	10011	輪溝1	2	SX23 2號	14.0 (15.0)	11.7 (6.7)	644	ナデ	コビ少板、布目板、布目板ナラ	103-6
6	10012	輪溝1	2	SX23 2號	14.5 (16.0)	11.4 (6.3)	729	ナデ	コビ少板、布目板	103-7
7	10013	輪溝1	2	SX23 2號	14.4 (16.0)	11.2 (6.3)	619	ナデ	コビ少板、布目板	103-8

第73図 SX23 出土遺物

(6) 六郷堀跡（第25～27・74～81図）

概要 六郷堀は、広瀬川から取水し、愛宕堰から宮城刑務所の土堀の外側を通り上飯田・日辺地区まで流れる堀である。現在の六郷堀は宮城刑務所の土堀の外側を通っているが、近世の頃は「若林古御城」「御修復帳」（第112図）などに見られるように、若林城跡の西門から城内に入り東門から出でていたと考えられている。

検出状況 Y28～Y29・X30～X34グリッドで南北方向、Y38～Y40・X28～X29グリッドとY43～Y53・X29～X32グリッドで東西方向の六郷堀跡を検出した。南北方向と東西方向では側石や裏込め石、敷石の残存状況が異なるが、いずれの地点でもほとんどの側石は取り外され、底面近くまで近代以降のレンガやスレートで埋められており、残存状況は悪い。

以下に六郷堀跡について報告するが、検出範囲が広範であることから南北方向と東西方向に分けて記述する。ただし、出土遺物についてはまとめて記述する。

南北方向

方向 N-10°-Eであり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ23.00m、水路本体の幅が約1.50～2.00m、裏込め・掘り方を含む幅が約4.00～5.00m、Ⅲ層上面から底面までの深さは約1.70mである。東壁では約0.40mと約1.00mの2種類の規模の裏込め・掘り方の幅を確認している。南北端は調査区外へ延びる。

重複関係 : SK441より古く、SA8・SX19より新しい。

堆積土 8層を確認した。1～3層は近現代の埋め土である。2層中に陶製の土管が埋設されていたこと、3層が六郷堀跡の底面を削り込み、レンガが配置されていたことから宮城集治監建設時、六郷堀跡に排水施設を設けたものと考えられる。4層は裏込めの崩落である。径10cm前後の円礫が多量に含まれることから、側石を抜き取った後に裏込め石が崩落したものと考えられる。5層は堀跡底面に堆積している水の流れによる自然堆積土である。層厚約10cmのシルトと砂の互層である。西壁では最下段の側石際まで堆積している状況が確認できたことから、六郷堀跡が埋まる直前の最終的な堆積状況を示すと考えられる。6層は底面堆積層であるが、敷石が敷設されており、底面の掘り方埋め土と考えられる。7・8層はいずれも径約10cmの円礫を含むが、7層には砾の隙間に粘質土が充填され、瓦が混入している。8層は7層よりも円礫の密度が高い。7層に瓦が混入していることや層序の上下関係から7層が新しい時期の裏込め、8層が古い時期の裏込めと考えられる。各堆積土については以下の通りである。

1層は黒褐色砂質シルトで、径30cm以下の砾・スレート片・レンガを含む。

2層は暗青灰色シルトで、径10cm以下の褐灰色シルトブロック、径10cm以下の砾を少量含む。

3層は褐灰色シルトで、径5cm以下の褐灰色・灰白色シルトブロックを多量と鉄分を含む。

4層は暗褐色シルトで、径10cm以下の砾を含む。

5層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径40cm以下の砾、径10cm以下の砾を多量と鉄分を含む。

6層は褐灰色砂質シルトで、径2cm以下の褐灰色シルトブロックと径20cm以下の砾を含む。

7層は灰黃褐色シルトで、径10cm以下の砾を含む。

8層は褐灰色シルトで、径3cm以下の黒褐色シルトブロックを含み、径10cm以下の砾を少量含む。

側石 1区の西壁には、側石が4～6段残っており、川原石と割石を使用している。側石が堀の内側に膨らむ部分がある。膨らんだ側石の下には、底面の堆積土が延びていることから側石が堀の内側にズレたものと考えられる。

西壁の側石2段～4段は、割石を使用したもので小口をゲンノウではつたものや、ノミを入れて平らな粗面としたものが見られ、縦目地が直線になるよう積まれている部分があるなど、年代的に新しい要素が見られる。下段に並ぶ側石は方形に面を整えたものであり、上段とは異なる状況がみられる。

東壁の側石は、大部分が搅乱で削平されているが、内側、外側の2列の側石の列を確認している。外側の石列は、

中央から南にかけて円礫を使用した一段のみ残っており、削平され一部の石材が失われている。内側の石列は、削平され中央付近が失われているが、南側と北側の一部では、割石を主体とした直線状の配置を確認した。また、石の抜取痕が2箇所残っている。

以上のことから、西壁上段の側石には、積み方や整形・加工に新しい年代の要素が見られ、下段の側石とは異なる状況から、積み直されていると考えられる。また東壁では、内側の石列が六郷堀跡を流れた堆積土により埋没していることや、外側の石列に造り替えていると考えられることから、六郷堀跡の時期が2時期あると考えられる。裏込め　すべての側石背面で裏込めを確認することができた。

裏込めには2時期あり、新しい裏込めは、東壁の外側の石列に伴うものと、西壁のはほぼ全体の側石に伴うものである。新しい裏込めには栗石と瓦片が混入し、粘性の低いシルトと砂が含まれている。

古い裏込めは、東壁では新しい裏込めの下部で確認した。東壁の内側の石列に伴うもので、新しい裏込めは幅が約1.0mなのに対し、古い裏込めは幅が約0.4mと狭い。西壁では、側石と同じく、古い裏込めの上に新しい裏込めを造っている可能性がある。下部の裏込めには、瓦片は含まれず、粘性の高いシルトに栗石が密に充填されている。

北壁では、幅約0.7mの裏込めを確認したが、瓦片が含まれることから新しい裏込めと考えられる。古い裏込めについては確認できなかったことから、新しい裏込めに塗されていると考えられる。

底面　底面には、シルトと砂が堆積しており、南西側底面下には、堀が開削される以前に埋められたSX19を確認したが、六郷堀跡に伴う敷石、杭、基礎などの下部構造は確認されなかった。

東西方向

方向　N=80°-Wであり、六尺五寸の方眼に一致する。

規模　長さ約77.00m、残存する側石から推定した水路本体の幅が約1.80m、掘り方幅約5.90m、堀底面までの深さは約2.00m以上である。東西端は調査区外へ延びるが、東端は南北方向部分と接続する。

重複関係　SD104より古く、SA16・河川跡より新しい。SD123と重複しているが、2つの遺構は高低差があるものの接続した一連のものであり、同時期と考えられる。

堆積土　大部分が近現代の建物搅乱や付随する施設により搅乱・削平されており、確認面及び底面直上までストレート・搅乱土で埋められていた。搅乱・削平をまぬがれた堀内部は、Ⅱ層に類似した土により埋められていた。側石と裏込め石の一部を確認したが、ほとんどの側石は抜き取りされている。底面近くまで近代以降のレンガやストレートで埋められており、一部は底面まで削平され、残存状況は極めて悪い。各堆積土については南北方向と同じである。

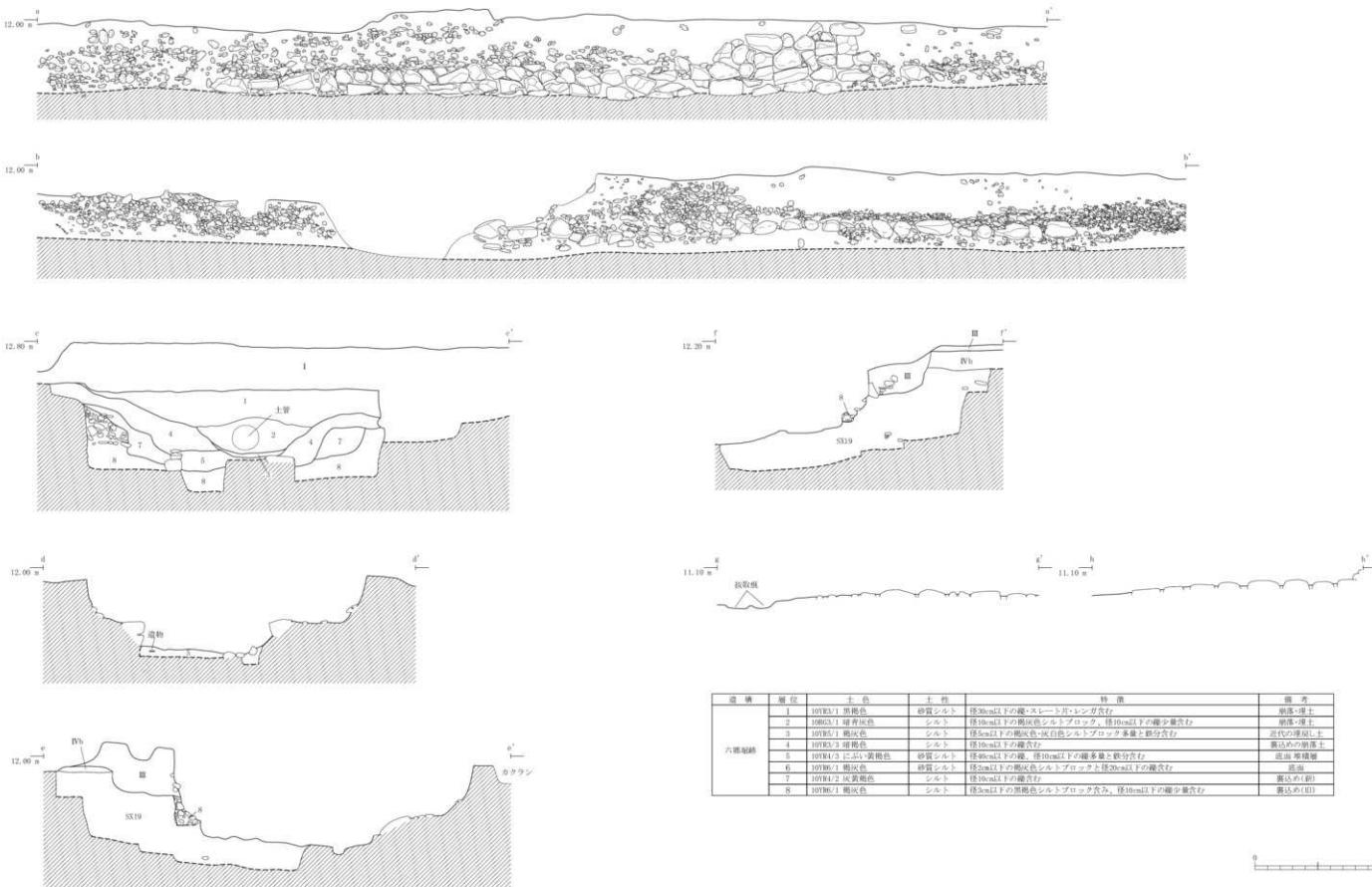
側石　搅乱による削平が著しく、一部で側石が残る以外、構造を把握できる石組はほとんど残存していない。第13次調査2区東側では断面に側石を4箇所、西側では底面に側石を1段確認できたのみであり、造り替えの痕跡などは確認できない。

第14次調査区では円礫の側石を1段と抜き取り痕を確認している。側石には明確な造り変えなどの痕跡は認められないが、南北方向で見られたように側石の一段下に6層や掘り方の存在を確認していることから、造り変えの痕跡と考えられる。中央壁面はSD123と接続する箇所でもあり、壁面上層には123号溝跡の側石の残存も見られた。また、抜き取り痕には人為的な細かいブロック土が混入する状況がみられ、後世の搅乱が堀の底面まで及んでいることを確認した。

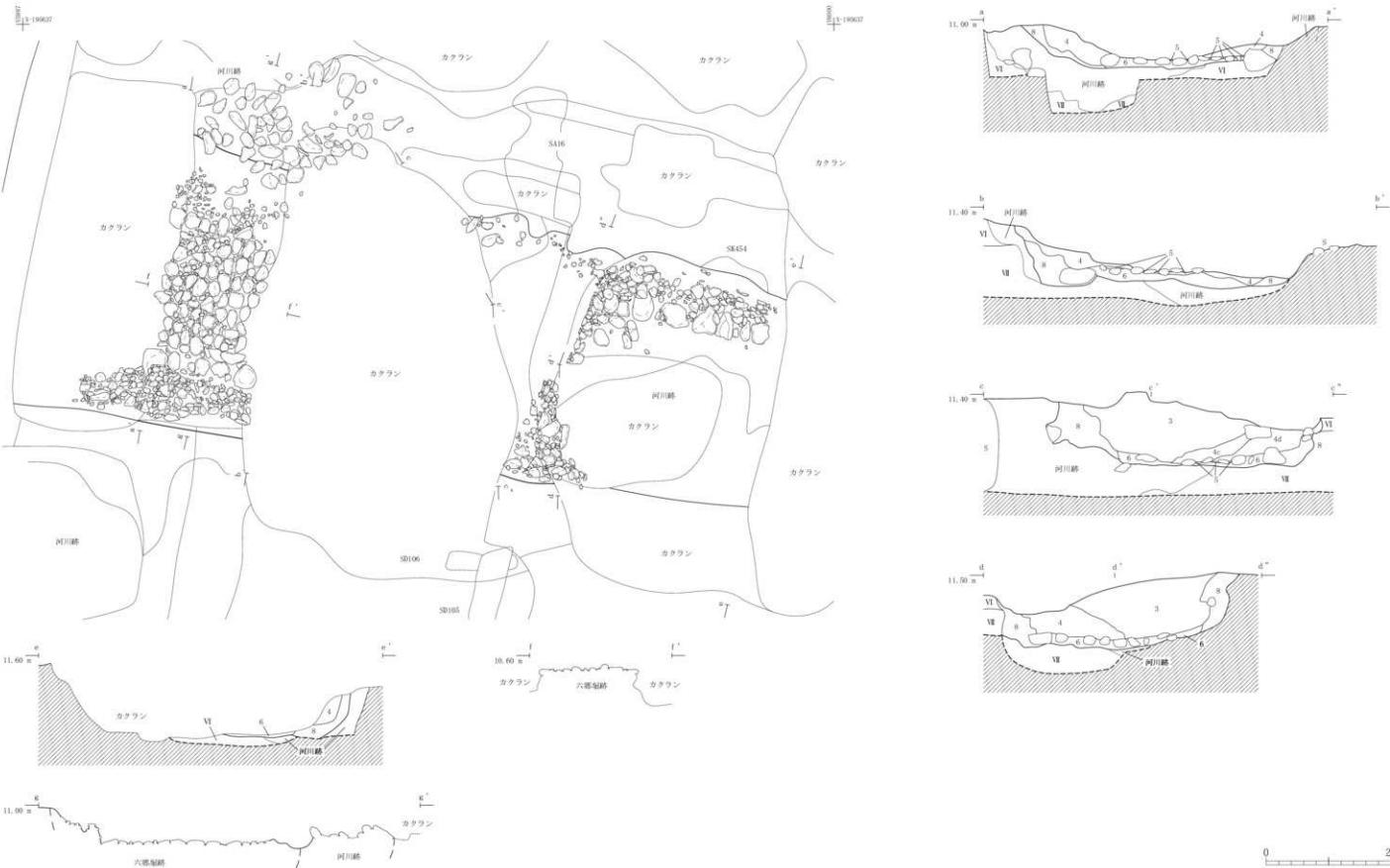
裏込め　第13次調査2区では底面上に大部分が崩落しているが、南側と北側の一部で古い時期の裏込めを検出した。南側の裏込めは幅約0.6m、高さ約0.6mが残存しており、直径5~15cmの円礫が側石の裏側に密に充填されていた。北側では、裏込めの幅約0.6~0.8m、高さ約0.7mが残存しており、直径5~25cmの円礫が側石の裏側に充填されていた。円礫の密度は低く、シルトが多く混じっており、南側に比べて残存状況は悪い。南北の裏込めとも、掘り方



第74図 六郷塚跡南北方向(1)



第75図 六櫛廻跡南北方向(2)



第76図 六郷堀跡東西方向(1)



第77図 六郷堀跡東西方向(2)

の底面から側石までは厚さ約10cmのシルト層であり、円礫はほとんど混じっていない。

第14次調査区の裏込めは、大部分が搅乱で失われているため断面のみの確認であり、円礫も崩落により動いている。断面で確認できた幅は、約1.1m、高さは約1.2mで、上部0.7~0.8mは円礫、下部0.4~0.5mは埋土である。円礫は直径5~15cmのものが南壁面に一部残存していた。

底面 第13次調査2区では大部分が搅乱で削平されているが、西側底面の一部では敷石が残存している。敷石はやや扁平な円礫で、大きさは約0.1m~0.3mである。加工などの痕跡はなく、自然の円礫がそのまま使用されていた。一部の残存のため明瞭ではないが、堀に対して横方向の目地が認められ、目地には小礫を充填している。1列には8~9個の円礫を配置しており、堀底面に対しては扁平な面を上にすることによって平坦面を造り出している状況が認められた。第14次調査区も大部分が搅乱で削平され、東側で7層の堆積、中央や西側で崩落した裏込めを確認したのみである。

出土遺物 軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、雙斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、不明瓦、軒棟瓦、棟瓦といった瓦片が944点、陶器318点、磁器246点、瓦質土器3点、土師質土器2点、繩文土器8点、土師器56点、須恵器2点、瓦器1点、不明土器11点、土製品1点、鉄製品21点、銅錢3点、金屬製品4点、石製品6点、木製品14点、ガラス製品74点があり、このうち、軒平瓦2点、輪違い1点、古代の平瓦1点、陶器30点、磁器17点、瓦質土器2点、土師器1点、土製品1点、木製品1点を図示した。

G013-014（第81図-3・4）は軒平瓦の瓦当部片で、瓦当文様はG013が三葉文と唐草文、G014が桔梗文と唐草文である。G014の凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。G014は1層、G013は3層から出土している。

H015（第81図-5）は輪違いで、狹端部側が丸くすぼまる形状である。1層から出土している。

H033（第81図-6）は古代の平瓦で、凸面に繩目タキ、凹面にコピキ痕・布目痕がみられる。1層から出土している。

I045・049（第78図-1・8）は肥前陶器である。I049は碗の口縁部で、外面に鉄絵山水文がみられる。5層から出土しており、時期は17世紀後半である。I045は縁袖の皿で、見込みに蛇の目釉剥ぎがみられる。1層から出土しており、時期は17世紀後半である。

I041（第78図-7）は唐津産陶器の碗で、見込みに目跡がみられる。2層から出土しており、時期は16世紀末~17世紀初頭である。

I050・054・066（第78図-6、第79図-9・11）は瀬戸美濃産陶器で、I052（第79図-10）は瀬戸美濃産と考えられる陶器である。I050は碗の底部で、5層から出土している。時期は18世紀代と考えられる。I052は蓋で、5層から出土している。時期は18世紀代と考えられる。I066は香炉か土瓶の口縁部と考えられる。1層から出土しており、時期は17世紀後半と考えられる。I054は器種不明の底部で、5層から出土している。時期は18世紀以降である。

I065（第78図-2）は美濃産陶器碗の口縁部である。1層から出土しており、時期は17世紀中葉~後半である。

I064（第78図-3）は織部の碗で、銅線袖がみられる。1層から出土している。時期は17世紀初頭である。

I038・039・042・043・047・051・057・059・062・063・068（第78図-4・5・9・12・14・15、第79図-2・3・5~7）は大堀相馬産陶器である。I051は碗で、5層から出土している。時期は18世紀代である。I042・062は皿で、I062は見込みに型押しの草花文がみられる。I062は1層、I042は2層から出土している。時期はI062が18世紀後半、I042が18世紀代である。I043・059は鉢である。I043は2層、I059は5層から出土しており、時期は全て18世紀代である。I038・057は小壺である。I038は1層、I057は5層から出土しており、時期はI038が18世紀後半以降で、I057が19世紀前葉と考えられる。I039・063は土瓶である。全て1層から出土しており、時期はI063が19世紀前半、I039が19世紀代である。I047は蓋で、3層から出土している。時期は不明である。I068は碗と考えられる。1層から出土しており、時期は18世紀代である。

I053・056・067（第78図-10・11・13）は小野相馬産陶器である。I053・056は皿で、全て見込みに蛇の目釉剥ぎがみられる。I053は5a層、I056は5b層から出土しており、時期は全て18世紀代である。I067は鉢もしくは小皿で、1層か

ら出土している。時期は18世紀代である。

I069（第79図-1）は丹波産陶器の平鉢で、1層から出土している。時期は17世紀初頭である。

I044・046（第78図-17・18）は在地窯産の陶器で、I040・060・061（第78図-16・19、第79図-8）は在地窯産と考えられる陶器である。I044・046・060・061は擂鉢である。擂目の単位は、I046が9本一単位、I060が11本一単位、I061が10本一単位である。I044は2層、I046は3層、I060・061は5層から出土しており、時期は全て18世紀以降である。I040は植木鉢で、3層から出土している。時期は19世紀である。

I058（第79図-4）は產地不明陶器の徳利で、5層から出土している。時期は19世紀後半である。

I092・093（第79図-19・20）は瓦質土器である。I093は火鉢と考えられ、体部下端にはケズリ調整、底部にはヘラケズリ調整がみられる。1層から出土している。I092は器種不明で、1層から出土している。

J011・013・017～019・021～023・025・026（第79図-12・18、第80図-1・4～8・10・11）は肥前磁器である。J011・017・021は碗である。J011は端反碗で、口縁部に口銷、外面に源氏香文がみられる。J017は染付碗で見込みに「■化■製」の銘がみられる。J021は見込みに花文がみられる。J011は1層、J017は3層、J021は5層から出土している。時期はJ021が18世紀後半以降、J017が18世紀代、J011が19世紀前半である。J013・019・023・026は皿である。J013・019・023・026は染付の輪花皿で、J013・026は口縁部に口銷、見込みに家屋山水文、蛇の目四高台がみられる。J023は花唐草文がみられる。J019は見込みに松竹梅、疊付に砂の付着がみられる。J023は1層、J013・026は2層、J019は3層から出土している。時期はJ023が17世紀後半、J019が17世紀後半～末、J013・026が18世紀後半～19世紀前半である。J022は染付の小皿で、見込みに唐草と花唐草、高台内に「嘉」の銘がみられる。1層から出土しており、時期は17世紀末～18世紀初頭である。J025は染付の角小皿で、見込みに型押しの花文がみられる。1層から出土しており、時期は19世紀前半である。J018は染付の鉢で、内面に格子文がみられる。3層から出土しており、時期は17世紀後半と考えられる。

J012・014・016（第79図-13～15）は瀬戸美濃産磁器の染付端反碗である。J020（第79図-17）は瀬戸美濃産か地方窯と考えられる染付碗である。J012は口縁部に口銷、外面に源氏香文と草花文、J014・016は外面に靈芝文、蛇の目四高台がみられる。J012は1層、J014・016は3層、J020は5層から出土している。時期はJ012が19世紀前葉、J016が19世紀中葉以降、J014・J020が19世紀後半である。

J010・024（第79図-16、第80図-2）は波佐見産磁器の碗である。J010は染付のくらわんか手で、外面に葉文がみられる。J024は染付で、高台内に「大■成■」の銘がみられる。円盤状に二次加工されたと考えられる。全て1層から出土しており、時期はともに18世紀代である。

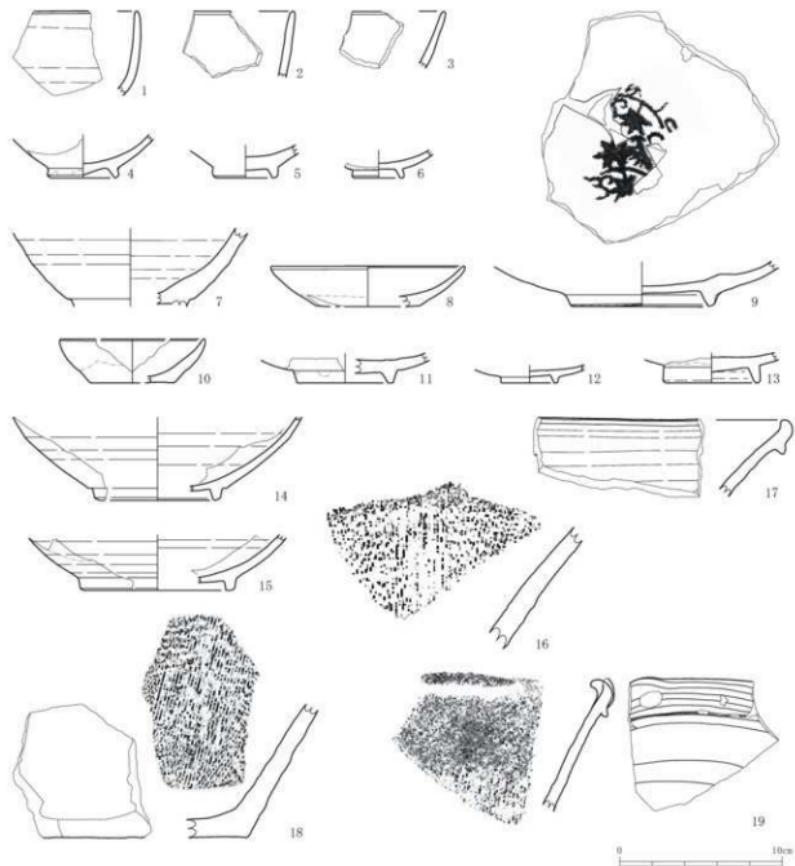
J015（第80図-3）は地方窯産磁器の染付碗で、外面に草文がみられる。3層から出土しており、時期は19世紀後半以降である。

J037（第80図-9）は產地不明磁器の輪花皿で、口縁部に口銷、見込みに靈芝文がみられる。1層から出土しており、時期は18世紀後半以降である。

C003（第81図-1）は土師器で、器種は不明である。2層から出土している。

P004（第81図-2）は埴堀である。1層から出土している。

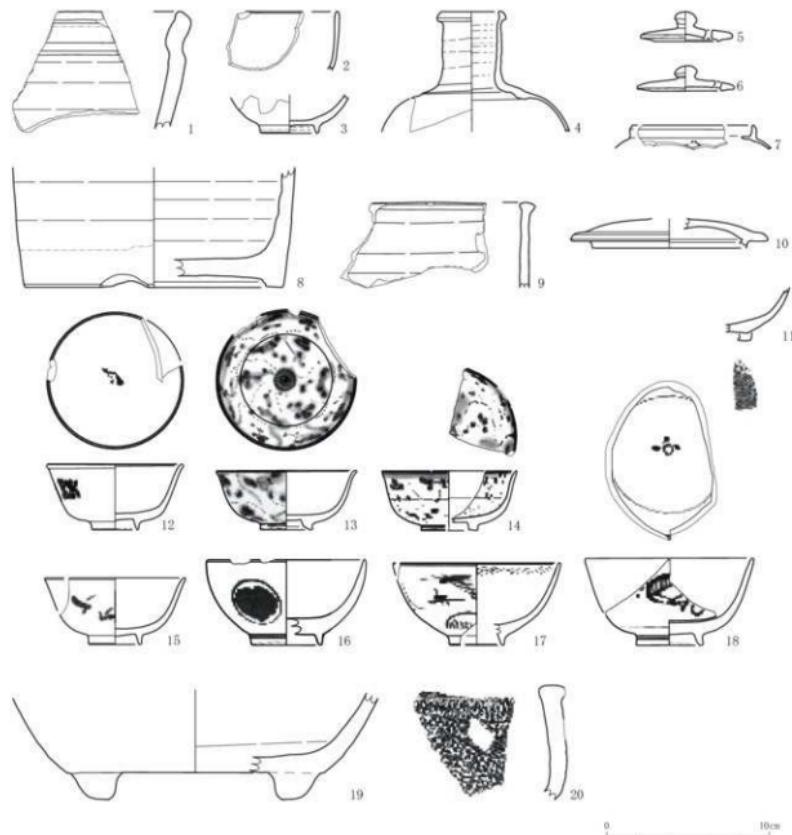
L004（第81図-7）は木製品の制作過程、または建築の際に排出されたと考えられる端材である。1層から出土している。



団査番号	登錄番号	種類	断面	造形・層位	法 庫(cm)	地	時 期	備 考	写真図版	
1	1049	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	灰褐色	17C後半 外曲・鉛鉢、山水文・蕉葉風陶器	104-12	
2	1065	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	素面	17C後半(?) 灰褐色	104-13	
3	1064	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	素面	17C後半 圓錐形	104-14	
4	1051	陶器	縦	八角錐形(直)	4.0	-	大腹地窓	18C後 灰褐色	104-15	
5	1068	陶器	縦?	八角錐形(直)	3.4	-	大腹地窓	18C後 内・灰褐色	104-17	
6	1050	陶器	縦	八角錐形(直)	-	3.0	1.7	瓶口直通 灰褐色	104-16	
7	1041	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	素面	17C後半 灰褐色	104-18	
8	1045	陶器	縦	八角錐形(直) (11.8)	(4.6)	2.5	肥厚	17C後半 縦錐形	104-27	
9	1062	陶器	縦	八角錐形(直) (17.6)	8.8	2.8	大腹地窓	18C後半 灰褐色	104-22	
10	1067	陶器	縦	八角錐形(直) 跡立小口	9.4	-	小腹地窓	18C後 灰褐色	104-21	
11	1053	陶器	縦	八角錐形(直)	-	(1.8)	小腹地窓	18C後 柄の目錬剥がし	104-26	
12	1042	陶器	縦	八角錐形(直)	-	3.4	-	大腹地窓	18C後 灰褐色	104-19
13	1056	陶器	縦	八角錐形(直)	-	5.6	-	小腹地窓	18C後 丹青色錐	104-20
14	1059	陶器	縦	八角錐形(直)	-	7.0	-	大腹地窓	18C後 灰褐色	104-24
15	1043	陶器	縦	八角錐形(直)	-	(9.0)	(3.4)	大腹地窓	18C後 灰褐色	104-23
16	1060	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	-	灰褐色?	18C後半 灰褐色	105-3
17	1044	陶器	縦	八角錐形(直) (29.8)	-	(5.45)	-	灰褐色	18C後半 灰褐色	105-2
18	1046	陶器	縦	八角錐形(直)	-	(10.2)	8.2	灰褐色	18C後半 灰褐色	105-4
19	1061	陶器	縦	八角錐形(直)	-	-	-	在地か?	18C後半 灰褐色	105-1

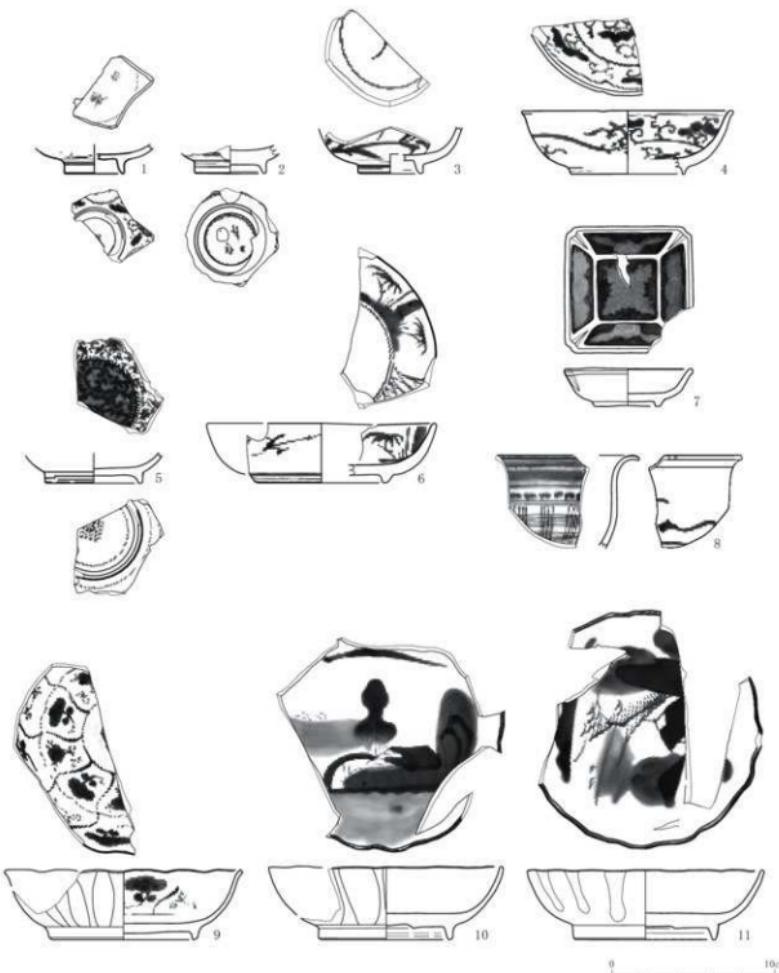
第78図 六郷堀跡 出土遺物(1)

第2節 IV層上面検出の遺構



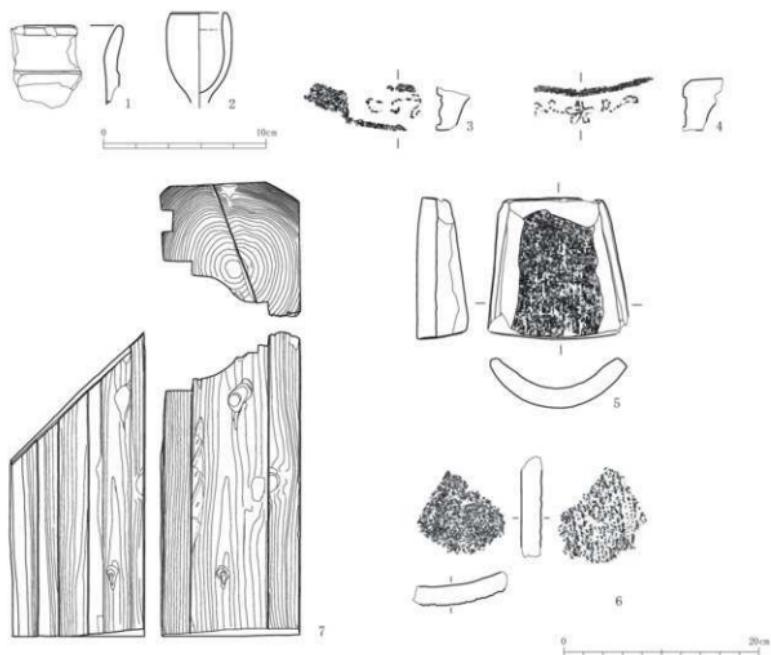
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法長(cm)	口径	底径	高さ	产地	時期	備考	写真原版
1	1069	陶器	平鉢	八幡山Ⅳ層	-	-	-	3.4	丹波	EBC中期	104-25	
2	1057	陶器	小鉢	八幡山Ⅳ層	-	-	-	-	大和	100cm±5	小坪(くい)飲み 白面鉢	105-8
3	1038	陶器	小鉢	八幡山Ⅳ層	(3.3)	-	-	-	大和	100cm±5	白面鉢	105-9
4	1056	陶器	圓鉢	八幡山Ⅳ層	4.2	-	-	-	不明	100cm±5	鉢底、外縁(白)化粧土の施錆(イーチェ半曲)。鉢上が白くない	105-6
5	1039	陶器	土瓶	八幡山Ⅳ層	5.2	-	1.8	-	大和	EBC時代	105-11	
6	1047	陶器	急須	八幡山Ⅳ層	(6.0)	-	1.6	-	大和	不明	105-10	
7	1063	陶器	土瓶	八幡山Ⅳ層	7.5	-	(1.5)	-	大和	EBC後葉	色絵。山水文	105-12
8	1040	陶器	植木鉢	八幡山Ⅳ層	-	15.8	7.35	-	在地か?	江戸時代	105-5	
9	1066	陶器	香炉	八幡山Ⅳ層	25.8	-	5.2	-	鶴岡	170cm±5	鉢袖	105-7
10	1052	陶器	盞	八幡山Ⅳ層	12.1	-	(1.8)	-	在地か?	100cm±5	灰釉	105-13
11	1054	陶器	不明	八幡山Ⅳ層	-	-	-	-	鶴岡	100cm±5	香炉? 土瓶?	105-14
12	1011	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	8.4	2.9	4.1	-	肥前	100cm±5	削出し、口縁、足込み式土締(引締)。肥前青文	105-24
13	1014	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	8.6	3.1	3.6	-	鶴岡	100cm±5	染付、肥前、青文文、洋食盤。蛇ノ目切目台	105-22
14	1016	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	8.3	3.4	3.7	-	鶴岡	100cm±5	染付、肥前。青文文。蛇ノ目切目台	105-23
15	1012	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	(8.6)	3.1	4.1	-	鶴岡	100cm±5	染付、肥前。口縁、足込み式土締(引締)。青文文	105-20
16	1010	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	(9.6)	4.2	5.3	-	肥前	100cm±5	くらわん手形、染付、ゴンチャック押付。青文文。丸に青文	105-16
17	1020	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	(12.0)	5.2	5.1	-	肥前	100cm±5	染付、青文-明白	105-15
18	1021	磁器	碗	八幡山Ⅳ層	(10.2)	4.1	5.3	-	肥前	100cm±5	青文文の可動性。青文文様(引締)。足込、青文文	105-21
19	1092	瓦質土器	大鉢	八幡山Ⅳ層	-	(16.0)	-	-	-	-	底面 - ハラケズ(通葉型?) 体底部端にケズリ	106-19
20	1092	瓦質土器	小鉢	八幡山Ⅳ層	-	-	-	-	-	-	底長脚(白線より下部あり)	106-9

第79図 六郷堀跡 出土遺物(2)



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法 番 (cm)			産地	時 期	備 考	写真図版
					口径	底径	高さ				
1	J017	磁器	碗	六角形縁	-	(3.5)	-	肥前	18C代	毫村 显込山に「■■■製」(焼化粧製)小高台内面「施羅」か?	105-18
2	J024	磁器	碗	六角形縁	-	4.2	-	肥前	18C代	毫村 高台内面「■■■或■」内側状に二次加工。	105-17
3	J015	磁器	碗	六角形縁	-	4.0	2.9	肥前	18C代	毫村 毫村	105-19
4	J023	磁器	皿	六角形縁 (13.0)	(7.0)	3.9	-	肥前	18C後半	毫村 梅唐草・唐草、高台内面「轟」の縁あり	106-5
5	J022	磁器	小皿	六角形縁 (13)	-	(5.9)	-	肥前	18C後半	毫村 和歌鶴・毫村に砂付茶	106-6
6	J019	磁器	皿	六角形縁 (14.0)	(3.2)	3.7	-	肥前	18C後半	毫村 和歌鶴・毫村に砂付茶	106-4
7	J025	磁器	角小皿	六角形縁 (13)	7.8	4.0	2.3	肥前	18C後半	毫村 显込山・ボタン紋様のグラデ花	106-7
8	J018	磁器	鉢	六角形縁 (17.0)	-	(5.7)	-	肥前	18C後半	毫村 植文	106-8
9	J037	磁器	皿	六角形縁 (7.8)	(4.8)	4.3	-	肥前	18C後半	毫村 及江寺・墨花文・口縁・梅花紋	106-3
10	J026	磁器	皿	六角形縁 (14.5)	7.9	4.5	-	肥前	18C後半	毫村 梅唐草・以絆・鶴の羽根高台 梅園山水文	106-2
11	J013	磁器	皿	六角形縁 (14.6)	8.6	4.3	-	肥前	18C後半	毫村 梅花文・口縁・鶴の羽根高台 梅園山水文	106-1

第80図 六郷堀跡 出土遺物(3)



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 長(cm)	幅 径(cm)	高さ 厚さ(cm)	產地	時 期	外凸調整	内面調整	備考	写真図版
1	CD03	土師器	不明	二重輪・縁	-	-	-	-	不明	ヨコナギ	ヨコナギ		106-11
2	P904	土製品	培塿	二重輪・縁	(3.5)	(3.5)	(5.4)	鉢底工作成らかれた?					106-12
3	GD13	軒平瓦	三葉式・側面文	IA	二重輪・縁	-	-	C3.23	165	-	-		写真図版 106-13
4	GD14	軒平瓦	側面文・側面文	IB	二重輪・縁	-	(5.4)	(3.2)	2.9	300	ナゲ	ナゲ、ヘナガ	写真図版 106-14
5	HD15	輪舟瓦	二	二重輪・縁	14.5	(14.3)	10.3	5.2	2.0	569	ナゲ	ヘナガ、ナゲ、ヘナガ	写真図版 107-1
6	HD33	平瓦	-	二重輪・縁	-	-	-	2.1	219	調目タタキ	ヨコナギ、有田瓦	古代の瓦	写真図版 107-2
7	1004	土製品	端材	二重輪・縁	13.8	14.2	30.1	-	-				写真図版 107-3

第81図 六郷堀跡 出土遺物(4)

第3節 V層・VI層の状況と上面検出の遺構

V層は若林城造営以前の旧表土と考えられるが、今回の調査ではV層に伴う遺構は確認していない。

VI層は自然堆積層であり、調査区全面で確認している。VI層上面では溝5条、竪穴住居跡6軒、土坑41基、ピット53基、性格不明遺構1基、河川跡1基を確認した。今回の調査で確認した遺構はIV層が残存しない部分を中心に、大規模な搅乱断面などでの確認が殆どであることから、遺構の検出状況には偏りがある。また、このような場所で確認した土坑やピットは、本来IV層面より掘り込まれた可能性もある。なお、VI層検出の遺構については、河川跡のみ記述し、他の遺構は全体図と遺構一覧表のみ掲載する。

(1) 河川跡（第25～27・82～85図）

概要 若林城造営以前の河川跡である。規模が大きすぎたため、第10次の調査時点は近世以前の溝跡としての可能性も考えられることから当初はSD93の遺構名を付している。第13次・14次調査において、人為的に埋められた河川跡であることを確認したため、第13次調査以後は河川跡としている。

位置 Y30～36 Y38～41 Y46～53 X28～X34グリッドで湾曲する河川の痕跡を検出した。

規模 Y30～36 Y38～41 X28～X34グリッドで、北西方向からU字状に80°屈曲し、北東方向へ流れる状況を確認した。長さは約90m、屈曲部で約7.00m、最大幅約14.00mである。深さは約1.4mである。搅乱や若林城期の遺構で削平され、部分的に検出しているため、詳細な規模は不明である。

重複関係 SA8、SX12、六郷堀跡より古い。

堆積土 8層を確認している。地点ごとの堆積土は均一ではない。各共通で確認できた堆積土のほとんどは人為堆積土であり、黒褐色土や黄褐色の大小のブロックが混在する。西側では拳大の礫が他の埋め戻し部分に比べ多く含まれている。河川跡を埋める際は西側が北西側から南東へ、東側が南東から北東側へと土を入れていると考えられる。

堆積土を大別すると、上層（1～4層）の人为堆積土と中層（5層）の流水による堆積土、下層（6～8層）の自然堆積土の3層に分けることが出来る。

上層は径10cm以下の円礫を含み、暗褐色シルトブロックと黄褐色シルトブロックの混入が著しく、人为的に埋められたと考えられる。河川跡の最深部に近い深度までの層厚は約1.0mである。観察地点によっては、円礫が多量に含まれているのを確認した。

中層は人为的に埋められる以前の開口時に堆積したもので、若林城造営直前にあたる。

下層の砂層は、層厚約0.3～0.5mでグライ化しており、シルト、酸化鉄、砂礫などの水流による堆積が含まれている状況を確認した。砂層内に含まれる礫の平らな面が一定方向に向いていることをについて、これは自然の流れであることと水の流れが比較的速かったことを示している。また、砂層内に含まれるシルトの堆積は濁んだ水の流れを想定でき、下層の壁の立ち上がりが緩やかな状況にあることから、古くからこの地に存在していた河川と考えられる（注1）。各堆積土は以下の通りである。

1層はオリーブ褐色砂質シルトで、径1cm以下の黒褐色シルトブロック、礫・砂を含む。

2層は暗オリーブ褐色シルトで、径1cm以下の黒褐色シルトブロックと礫・炭化物を少量含む。

3層はにぶい黄褐色シルトで、径15cm以下の褐灰色シルトブロックと礫、径1cm以下の鉄分含む。

4層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径5cm以下のにぶい黄褐色シルトブロックと礫、径15cm以下の円礫含む。

5層は灰黄色砂質シルトで、径5cm以下の褐灰色シルトブロック含む、鉄分含む。

6層は灰白色シルトで、径3cm以下の褐灰色シルトブロック、鉄分含む

7層は灰黄色砂質シルトで、径5cm以下の褐灰色シルトブロック含む、径3cm以下の鉄分含む。

第3節 V層・VI層の状況と上面検出の遺構

8層は褐灰色シルトで、径10cm以下の灰白色シルトブロック含む、径3cm以下の鉄分含む。

構造 河川跡は若林城内の広範囲で確認している。

第13次調査1区から北門までは大きく湾曲するが、北門に近い地点では、六郷堀跡と重複して東西方向に緩やかな流れとなる。想定される流路は、西から城内に入り、南北方向に蛇行した後、北門付近で東西方向に向けて蛇行する。

河川跡の構造は、Y30～36・X28～X34グリッドの南北方向屈曲部外側では上部の立ち上がりがやや直立気味ではあるものの、中層から底面に行くに従って緩やかで不明瞭な立ち上がりになる。屈曲部内側では、上部はかなり緩やかであるものの、中層から底面にかけて直立気味に立ち上がる。底面は一部の掘りこみ箇所や断面からみて、ほぼ全体を通し平坦である。このことから屈曲部は、幅に対して蛇行した水の流れの勢いが強く、壁面を崩しながら流れたために自然崩落が生じ、不規則な立ち上がりになったと考えられる。

Y38～41 Y46～53・X28～X31グリッドの東西方向では、壁面・立ち上がりとともに緩やかな状況と北側に向かって落ち込みが深くなる。南北方向と異なり、立ち上がりが緩やかで壁面の崩落が見られないことから水の流れも緩やかであったことを示している。また、河川跡の堆積土中には瓦の混入がみられないこと、南北方向・東西方向のいずれも六郷堀跡に切られ人為的に埋められていることから、若林城造営時の整地の一環として埋められたと考えられる。

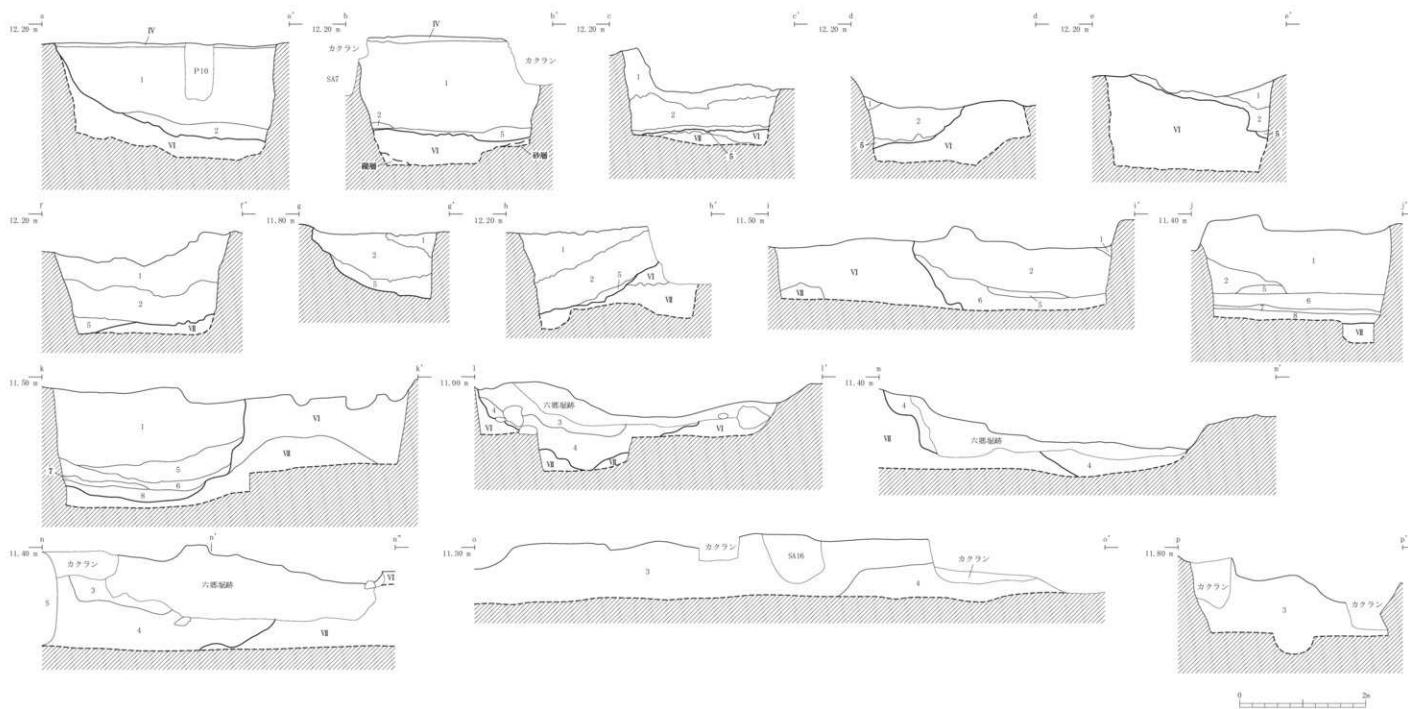
出土遺物 遺物は出土していない。

注

注1 砂層が人為的なものか自然のものかを検討するため東北学院大学の松本先生に現地を見て頂き、最終的に当該遺構が人為的なものではなく古くから存在した河川跡と考えられるとの見解を頂いた



第82図 河川跡(1)



遺構	層位	土色	土性	特徴	備考
河川跡	1	1.0m/3 オリーブ褐色	砂質シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、砂・粘土交り	人為的堆積土
	2	2.5m/4 増オーブ褐色	シルト	1cm以下の黒褐色シルトブロックと砂・粘土交り少部分交り	人為的堆積土
	3	1.0m/4 にぶい黄褐色	シルト	1cm以下の湖底色シルトブロックと織、1cm以下の砂分交り	人為的堆積土
	4	1.0m/3.5 ないし黄褐色	砂質シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、砂・粘土交り	人為的堆積土
	5	1.0m/3.5 黄褐色	シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、砂・粘土交り	人為的堆積土
	6	1.0m/7.1 灰色	シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、砂分交り	自然堆積土
	7	1.0m/2 灰色	砂質シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、砂・粘土交り	自然堆積土
	8	1.0m/4.1 暗灰色	シルト	1cm以下の中褐色シルトブロック、1cm以下砂分交り	自然堆積土

第83図 河川跡(2)



第84図 河川跡(3)



第85図 河川跡(4)

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物

(1) その他の遺構からの出土遺物

今回掲載していない遺構から出土した遺物も図化しているため、以下にまとめる。

SA6 出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、面戸瓦、不明瓦といった瓦片145点、土師質土器35点、土師器1点、金属性製品8点があり、このうち土師質土器1点を図示した。

I095（第86図-3）は土師質土器の皿で、底部には回転糸切りがみられる。1層から出土している。

SK375 出土遺物は、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、棟瓦といった瓦片が91点、陶器5点、磁器6点、瓦質土器2点、土師質土器1点、瓦器1点があり、このうち磁器1点、瓦質土器1点を図示した。

I088（第86図-2）は瓦質土器の植木鉢底部である。底部径の中心にあたる箇所に穿孔がみられる。1層から出土している。

J001（第86図-1）は肥前磁器の染付長皿である。1層から出土しており、時期は18世紀後半と考えられる。

SK381 出土遺物は、平瓦、不明瓦、棟瓦といった瓦片14点、陶器2点、磁器1点、土師質土器2点、銅製品1点、金属製品4点があり、このうち銅製品1点を図示した。

N009（第86図-4）は器種不明の銅製品である。径1.3mmで、取っ手の金具部分と考えられる。1層から出土している。

SK383 出土遺物は、平瓦の瓦片5点、陶器1点、瓦質土器1点、鉄製品1点、金属製品1点があり、このうち鉄製品1点を図示した。

N002（第86図-5）は鉄釘である。2層から出土している。

SK384 出土遺物は、平瓦の瓦片1点、金属製品2点がある。このうち金属製品のN013を写真のみ掲載する。

N013は鉄砲玉である。1層から出土している。

SK441 出土遺物は、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、面戸瓦、不明瓦、棟瓦といった瓦片が93点、陶器18点、磁器13点、瓦質土器1点、土師器1点、金属製品2点、自然遺物1点、木製品3点があり、このうち陶器3点、磁器1点を図示した。

I003（第86図-7）は小野相馬産陶器の灰釉碗である。1層から出土しており、時期は18世紀代である。

I055（第86図-6）は堤産陶器の擂鉢、I048（第87図-1）は堤産と考えられる擂鉢である。擂目の単位は、I048が13本一単位、I055が8本一単位である。I048・055とともに1層から出土している。時期はI048が19世紀前半、I055が江戸時代である。

J002（第86図-8）は、肥前磁器の染付碗である。2層から出土しており、時期は19世紀前半～中葉である。

SK444 出土遺物は、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、不明瓦、棟瓦といった瓦片が80点、陶器6点、磁器1点、不明土器1点、自然遺物1点があり、このうち磁器1点を図示した。

J003（第87図-2）は、肥前磁器の染付端反碗である。1層から出土しており、時期は19世紀前半である。

SK464 出土遺物は、丸瓦、軒平瓦、平瓦、棟瓦といった瓦片15点があり、このうち軒平瓦2点を図化した。

G011・012（第87図-3・4）は軒平瓦である。瓦当文様は、G011・012とともに桔梗文と唐草文で、四面にナデ調整へラナデ調整、凸面にナデ調整が認められる。全て1層から出土している。

SK491 出土遺物は、陶器2点、土師器3点があり、このうち陶器1点、土師質土器2点を図化した。

I004（第87図-5）は瀬戸美濃産陶器の皿である。1層から出土しており、時期は17世紀初頭～前半である。

I097・098（第87図-6・7）は土師質土器の皿である。I097・098とともに底部には回転糸切りが認められ、1層から出土している。

SK502 出土遺物は、土師質土器1点がある。

I099（第87図-8）は土師質土器の皿で、底部には回転糸切りが認められる。1層から出土している。

SK516 出土遺物は、陶器3点がある。

I005（第88図-1）は肥前陶器の香炉である。1層から出土しており、時期は17世紀代と考えられる。

I006・007（第88図-2・3）は大堀相馬産陶器で、I006は土瓶、I007は土瓶の蓋である。I006には山水文が認められる。ともに1層から出土しており、時期はI006が19世紀中葉、I007が19世紀前半である。

P6 出土遺物は、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違いといった瓦片9点、土師質土器1点があり、このうち土師質土器1点を図示した。

I110（第88図-4）は土師質土器の焼塙壺である。体部下端に横位のケズリ調整、底部にナデ調整がみられる。

P7 出土遺物は、平瓦、不明瓦といった瓦片7点、陶器2点、土師質土器5点、瓦質製品1点、土製品1点があり、このうち瓦質製品1点を図示した。

I119（第88図-5）は人形と考えられる瓦質製品である。

（2）基本層からの出土遺物

表土掘削や梳乱掘削時、基本層Ⅲ層掘削時などにおいて、遺構に帰属しない遺物が多く出土している。概ね若林城期の遺物が主体を占めるが、縄文時代から近代にかけての多様な遺物が出土している。ただし基本層からの出土遺物については、全て本来の位置を保っているものではないと考えられる。

I 層 出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、不明瓦、軒棟瓦、棟瓦、古代の瓦といった瓦片214点、陶器38点、磁器59点、土師質土器4点、縄文土器4点、土師器55点、須恵器2点、瓦器3点、不明土器1点、鉄製品4点、銅鏡2点、金属製品1点、石製品2点、レンガ2点があり、このうち陶器1点、磁器2点、土師質土器2点、銅鏡2点、レンガ1点を図示した。縄文土器のA005は写真のみ掲載する。

I087（第88図-6）は丹波産陶器の擂鉢である。擂目の単位は7本一單位で、時期は17世紀初頭～前半である。

J039・040（第88図-7・8）は肥前磁器である。J040は皿で、口縁部に口銷、見込みに羊齒文と梅花文がみられる。時期は19世紀後半以降である。J039は染付の紅猪口で、時期は18世紀後半～19世紀初頭である。

I113・114（第88図-9・10）は土師質土器の焼塙壺である。I113・114ともに体部下端に横位のケズリ調整、底部に回転糸切りがみられる。

A005は縄文土器の口縁部片である。磨滅により施文方向は不明瞭だが、LR縄文が施されていると考えられる。

N022・023（第88図-11・12）は銅製品の古錢である。N022は「咸平元寶」で、2枚が密着している。N023は「元豐通寶」である。

X001（第88図-13）はレンガ片である。「SS」や「SHINAGAWA」の刻印がみられる。

II 層 出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、不明瓦、軒棟瓦、棟瓦といった瓦片2,184点、陶器243点、磁器378点、瓦質土器12点、土師質土器55点、縄文土器9点、土師器104点、須恵器12点、不明土器13点、土製品5点、鉄製品37点、銅製品1点、銅鏡1点、金属製品47点、石製品12点、木製品2点、ガラス製品8点、自然遺物1点、レンガ3点があり、このうち軒平瓦1点、輪違い1点、菊丸瓦1点、陶器7点、磁器6点、土師質土器2点、縄文土器1点、石製品1点を図示した。縄文土器のA002-007は写真のみ掲載する。

G016（第90図-1）は軒平瓦（滴水瓦）で、瓦当文様は菊花文である。瓦当部の中心飾りを挟む周縁下部には、双葉文を表した突起が組まれている。凹面・凸面とともにナデ調整がみられる。

H020（第90図-2）は輪違いである。狹端部側が直線的な形状で、凹面にコピキ痕・布目痕・布目の絞り痕、凸面にナデ調整がみられる。

H023（第90図-3）は菊丸瓦の瓦当部で、花弁数は10弁である。

I081・084（第89図-1・3）は肥前陶器の碗である。I081は外面にハケ目文がみられる。I084は灰釉のごき手である。

時期は、I084が17世紀後半で、I081は不明である。

I080（第89図-7）は備前産陶器と考えられる油瓶壺である。時期は不明である。

I082・085・086（第89図-2・4・5）は大堀相馬産陶器で、I086は灰釉碗、I082は小碗か小杯、I085は仏飯器である。

I085は灰釉で、底部に回転糸切りがみられる。時期は、I082が18世紀後半、I086が18世紀代で、I085は18世紀代と考えられる。

I083（第89図-6）は堤産陶器の鉄釉土鍋である。時期は19世紀代である。

J027・028（第89図-8・9）は瀬戸美濃産磁器の碗である。J027は外面に銅版転写による、牡丹唐草・獅子・蓮弁文がみられる。J028は白磁で、高台内に「監」の銘がみられる。時期は全て19～20世紀代である。

J034～036（第89図-10～12）は肥前磁器である。J036は染付の小碗である。時期は18世紀後半である。J034は染付皿で、蛇の目凹形高台である。体部に焼錆ぎ痕がみられ、高台内に二重枠の銘と「五十」もしくは「廿十」の朱書きがみられる。時期は18世紀後葉～末である。J035は紅皿で、型押し成形品である。時期は18世紀代である。

J038（第89図-13）は產地不明の磁器の碗である。高台内に「監」の銘がみられる。時期は19～20世紀代である。

I107・108（第89図-14・15）は土師質土器の皿である。I107は体部に指圧痕、底部に煤・油の付着、回転糸切りがみられる。外面がほぼ黒色で、二次的な被熱と考えられる。I107・108の底部には回転糸切りがみられる。

A002・007は縄文土器の破片である。磨滅により施文方向は不明瞭である。A006（第89図-16）は縄文土器の壺か深鉢の破片である。外面に疑似羽状縄文がみられ、時期は縄文中期と考えられる。

Kd001（第90図-4）は石製品の砥石である。端部片側のみの残存で、欠損面を除く全面に擦痕・溝状のキズ・敲打痕がみられる。本来は長方体を基調とする砥石と推定されるが、使用時の強い摩耗により中央部がくびれている。

Ⅲ層 出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、不明瓦、軒棟瓦、棟瓦といった瓦片4,376点、陶器133点、磁器83点、瓦質土器2点、土師質土器235点、縄文土器13点、土師器488点、須恵器16点、瓦器2点、不明土器24点、土製品4点、鐵製品26点、銅錢8点、金属製品105点、石製品2点自然遺物2点があり、このうち軒丸瓦1点、丸瓦1点、軒平瓦1点、輪違い3点、菊丸瓦1点、面戸瓦（隅切瓦）1点、陶器9点、磁器5点、瓦質土器1点、土師質土器4点、土師器3点、銅錢5点を図示した。縄文土器のA003は写真のみ掲載する。

F013（第91図-14）は軒丸瓦の瓦当部片で、瓦当文様は珠文三巴文である。珠径は0.9～1.0cmで、珠文数は21個と考えられる。

F018（第91図-15）は丸瓦で、凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。

G015（第92図-1）は軒平瓦で、瓦当文様は三葉文と唐草文である。凹面にナデ調整・ヘラナデ調整、凸面にナデ調整がみられる。

H016～018（第92図-2～4）は輪違いである。H016・017は、狭端部側が直線的な形状、H018は狭端部側が丸くすぼまる形状である。H016～018は、凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。H016の凹面には吊り粗筋、H017・018の凹面には布目絞り痕がみられる。

H022（第92図-5）は菊丸瓦の瓦当部片である。瓦当文様は菊花文で、花弁数は10弁と考えられる。

H031（第92図-6）は面戸瓦（隅切瓦）である。凹面にコビキ痕・端部2辺にケズリ調整、凸面にナデ調整がみられる。

I071（第90図-11）は瀬戸美濃産陶器の大鉢で、緑釉流しがみられる。時期は17世紀中葉である。

I073（第90図-10）は丹波産陶器の擂鉢である。擂目の単位は7本一単位で、時期は17世紀前半である。

I074～076（第90図-5・6・8）は大堀相馬産陶器である。I074・076は皿で、I074は見込みに型押し文・同心円文、I076は見込みに白濁釉と鉄絵、目跡が2か所みられる。時期は、I074が18世紀後半、I076が19世紀前半である。I075は白濁釉の小杯である。時期は18世紀後半である。

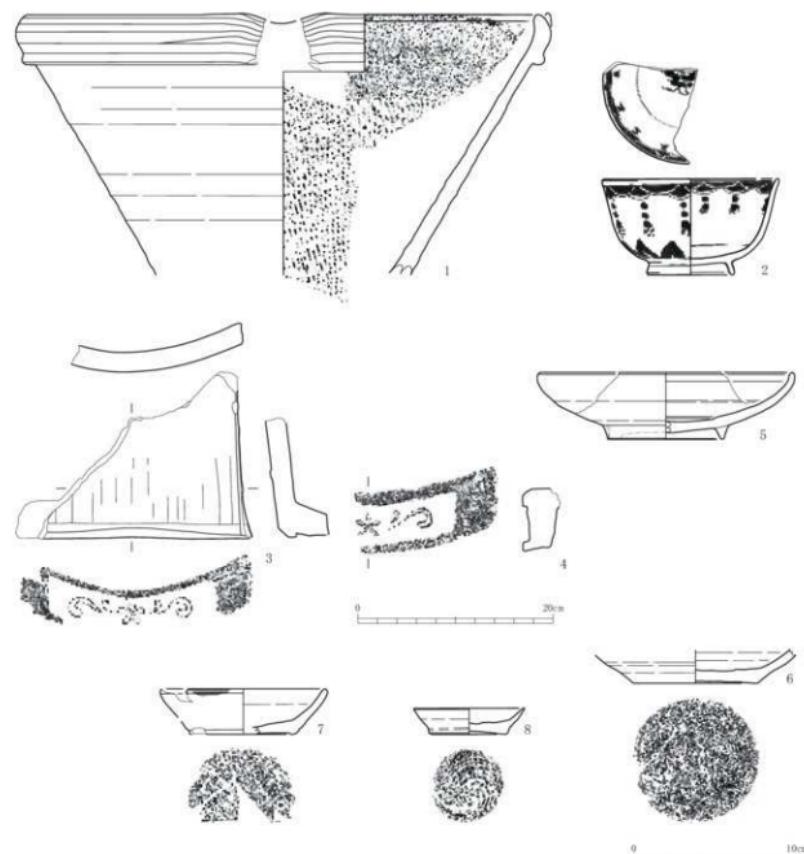
I077（第90図-13）は小野相馬産陶器の豆甕である。時期は19世紀前半である。

- I070（第90図-7）は志野産陶器の皿か鉢である。時期は16世紀末～17世紀初頭である。
- I072（第90図-12）は岸窯産陶器の鉄軸香炉である。時期は17世紀代である。
- I078（第90図-9）は白石産と考えられる陶器の無釉鉢である。時期は13世紀後半～14世紀前半である。
- J030（第91図-4）は瀬戸美濃産磁器の染付蓋である。蓋付き碗の蓋と考えられ、時期は17世紀前半以降である。
- J031～033（第91図-2・3・5）は肥前磁器である。J032は染付碗で、時期は17世紀～18世紀代である。J031は初期伊万里の皿で、草花文がみられる。時期は17世紀中葉である。J033は染付の小壺で、時期は18世紀代と考えられる。
- J029（第91図-1）は中国産磁器の青花折縁碗である。内面に草花文がみられる。時期は16世紀末～17世紀初頭である。
- I094（第91図-6）は瓦質土器の破片で、器種は不明である。外面に刻印がみられる。
- II04・105・111・118（第91図-7～10）は土師質土器である。II04・105は皿で、II04の口縁部に煤の付着がみられる。II04・105ともに底部に回転糸切りがみられるが、不明瞭である。II11は焼塩壺の蓋で、外面にナデ調整、内面に指ナデがみられる。II18は火鉢と考えられる口縁部片である。
- A003は繩文土器の口縁部片である。口縁部には刻みによる突起があり、内面・外面ともにミガキ調整がみられる。
- C004～006（第91図-11～13）は土師器の破片である。C004は外面にヘラケズリ調整、内面にナデ調整がみられる。C005は底部片で、外面にヘラケズリ調整、内面にヨコナデ調整がみられる。底部はケズリ調整と考えられる。C006は口縁部片で、外面から口縁部内面にかけて剥離している。内面にヨコナデ調整・指頭圧痕がみられる。
- N016～N020（第92図-7～11）は銅製品の古銭である。N016は「寛永通寶」のビタ銭と考えられる。N017は「永樂通寶」で、2枚が密着した状態で出土した。N018は「熙寧元寶」である。N019・020は「寛永通寶」で、N019の背面には「文」の文字がみられる。
- IV層 出土遺物は、軒丸瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、不明瓦、棟瓦といった瓦片147点、陶器4点、瓦質土器3点、土師質土器6点、繩文土器1点、土師器88点、鉄製品6点、銅銭2点、金属製品13点、石製品1点、自然遺物1点があり、このうち輪違い1点、陶器1点、銅銭1点を図化した。
- H019（第93図-3）は輪違いである。狭端部側が丸くすぼまる形状で、凹面にコビキ痕・布目痕、凸面にナデ調整がみられる。
- I079（第93図-1）は在地産と考えられる陶器の擂鉢である。擂目の単位は7～8本一単位で、時期は不明である。
- N021（第93図-4）は銅製品の古銭の「永樂通寶」である。6枚が密着した状態で出土した。
- M層 出土遺物は、土師質土器1点である。
- II12（第93図-2）は土師質土器の焼塩壺である。体部下端に横位のケズリ調整、底部に回転糸切りがみられる。



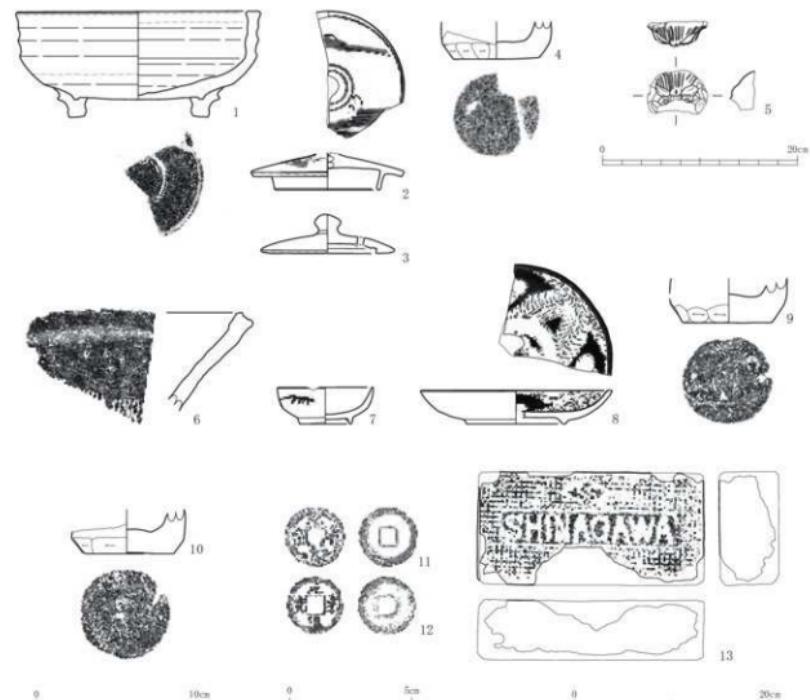
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法量(cm)			地	時期	備考	写真図版
					口径	底径	器高				
1	J001	磁器	長瓶	90275-1箱	-	-	3.5	肥前	BCM平?	染付	95-16
2	1088	瓦質土器	植木鉢	90475-1箱	-	(19.8)	-	-	-	-	95-17
<hr/>											
図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法量(cm)	地	時期	備考	写真図版	
3	1095	土質質土器	瓶	-	SME-1箱	8.4	-	-	ml	-	95-4
<hr/>											
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法量(cm)	地	時期	備考	写真図版		
4	N009	陶製品	不明	90381-1箱	8.1	-	0.1	26.7	径1.3cm 取っ手?	-	104-1
<hr/>											
図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法量(cm)	地	時期	備考	写真図版	
5	N002	陶製品	釣	-	90363-2箱	5.6	1.4	0.1	7.9	-	104-2
<hr/>											
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法量(cm)	地	時期	備考	写真図版		
6	1055	陶器	植木鉢	90411-1箱	(28.1)	12.0	15.0	壙	口?	-	95-7
7	1093	陶器	瓶	90411-1箱	(8.3)	4.4	(2.35)	小野田窯	18世紀	灰釉 淡青色	95-8
8	J002	磁器	瓶	90411-2箱	10.6	4.2	5.7	肥前	BCM平?~?	染付	95-2

第86図 その他の遺構 出土遺物(1)



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 径(cm)	底 径(cm)	高 さ(cm)	地 質	時 期	備 考	写真図版
1	1048	陶器	埴輪	9A41 1層 (31.5)	-	-	-	塊状?	1983年 鉄柵	埴輪13本、2.0m幅	97-1
2	3003	磁器	碗	9A41 1層 10.7	5.2	3.9	肥厚	1983年 柴火場	端反	97-3	
3	6011	軽平瓦	瓦被文織立	1B 5M61 1層	-	23.9	8.0	17.0	3.0	1111 ナデ、ヘラナデ	施泥の跡跡?あり 104-4
4	6012	軽平瓦	瓦被文織立	1B 5M61 1層	(26.2)	6.4	(17.6)	6.4	546	ナデ、ヘラナデ	104-5
5	1094	陶器	黑	9A41 1層 15.5	7.2	4.1	糊付	1983年 灰石堆	長石輪	107-4	
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 径(cm)	底 径(cm)	高 さ(cm)	地 質	時 期	備 考	写真図版
6	1096	土師質土器	瓶	-	58.00	1.80	7.7	-	-	-	107-6
7	1097	土師質土器	瓶	4	58.00	1.80	10.1	6.5	2.8	内L 口縁部に焼付着	107-5
8	1099	土師質土器	瓶	5	58.00	1.80	(6.8)	4.6	1.6	ナリ	104-6

第87図 その他の遺構 出土遺物(2)



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 量(cm)	産地	時期	備考	写真図版
					口径 底径 高さ				
1	1005	陶器	香炉	905H 1層	15.0 8.0 6.4	肥前	13C代か?	灰釉	104-9
2	1006	陶器	土瓶	905H 1層	(9.4) —	—	18C中葉	山水文	104-7
3	1007	陶器	土瓶の蓋	905H 1層	8.2 —	— 2.4	大宝元年	灰釉	104-8
4	1110	土師質土器	焼瓶壺	—	16 1層	— 5.3	—	不明 外側:下端に横位のケズリ 底面:ナゲ	104-10
5	1119	瓦質製品	—	PT 1層	— —	— —	— 47	瓦質の人形?	104-11
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 量(cm)	産地	時期	備考	写真図版
					口径 底径 高さ				
6	1087	陶器	桶鉢	1層	— — 6.0	丹波	13C末-14C初	桶目? 本か? 不明 1.5mm幅	107-7
7	J0319	磁器	紅白口	1層	5.9 3.2 2.3	肥前	14C後-15C	枕付	107-9
8	J040	磁器	瓶	1層	(11.5) (6.1) 2.1	肥前	13C後-14C	口縁 幸文文 梅花文	107-8
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 量(cm)	産地	時期	備考	写真図版
					口径 底径 高さ				
9	1113	土師質土器	焼瓶壺	—	1層 — 12.4	—	—	外側:下端に横位のケズリ	107-10
10	1114	土師質土器	焼瓶壺	—	1層 — 5.4	—	—	外側:下端に横位のケズリ	107-11
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 量(cm)	産地	時期	備考	写真図版
					口径 底径 高さ				
11	3022	陶質品	瓶	1層	径2.5 — 0.1	—	0.1	「成平元寶」 2枚巻	107-13
12	3023	陶質品	瓶	1層	径2.4 — 0.1	—	0.6	「成平通寶」	107-14
図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法 量(cm)	産地	時期	備考	写真図版
					口径 底径 高さ				
13	3001	碗瓦	—	1層	15.4 22.9 6.0	—	—	—	107-15

第88図 その他の遺構(3) · I層 出土遺物



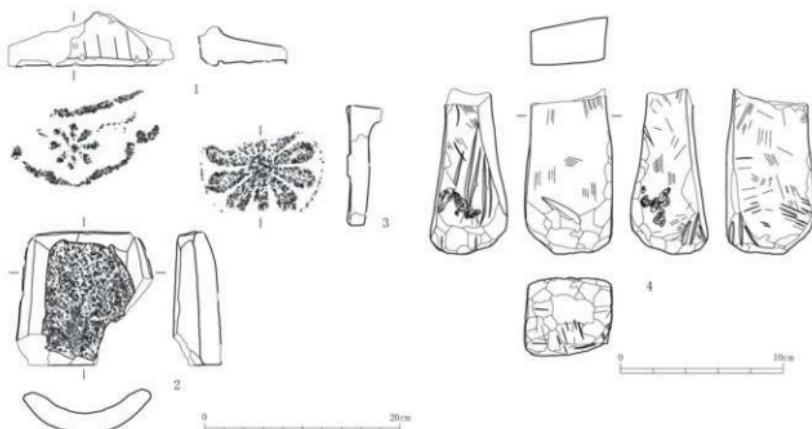
0 10cm

国版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法長(cm)	产地	時期	備考	写真図版
1	1081	陶器	碗	II層	12.1 4.2 6.4	肥前	不明	ハケ目文	107-16
2	1086	陶器	碗	II層	(9.8) 3.8 4.9	大隅國馬	10代	灰釉	107-17
3	1084	陶器	碗	II層	- 5.4 -	肥前	17世紀	灰釉輪二き手	107-18
4	1082	陶器	小杯(小碗)	II層	5.8 3.9 2.6	大隅國馬	18世紀		107-19
5	1085	陶器	乙瓶	II層	- 4.9 -	大隅國馬	18世紀?	灰釉、底部:回転非規則	107-21
6	1083	陶器	小瓶	II層	(17.1) - -	肥前	19代?	灰釉	107-22
7	1080	陶器	刷瓶	II層	3.4 - -	肥前?	不明		107-19
8	3027	研磨	碗	II層	(4.2) 3.9 4.3	廻戸美濃	18C~19C	波打、網状模写 高行文様 牡丹唐草 豊子 連作文	108-4
9	3028	研磨	碗	II層	- 4.0 -	廻戸美濃	18C~19C	白地、高台内に「鶴」の模か?	108-2
10	3036	研磨	小碗	II層	- 3.2 -	肥前	18世紀	安村 小型の碗	108-5
11	3035	研磨	碗	II層	(5.2) (2.4) 2.0	肥前	18C代	紅地、外面:空揮し成型	108-6
12	3034	研磨	碗	II層	(14.6) (8.4) 4.4	肥前	18世紀~末	美濃の山田作風 美濃の山田作風 美濃の山田作風「五叶」+「梅」+「梅竹」	108-3
13	3038	研磨	碗	II層	5.4 - -	小明	18C~19C	監督食器 高台内に「藍」	108-1

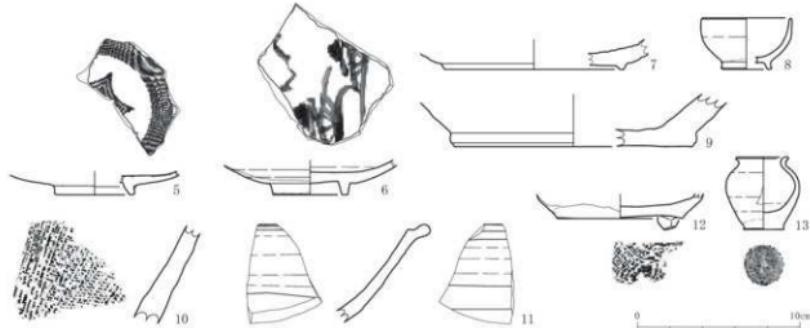
国版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・層位	法長(cm)	产地	備考	写真図版
14	1108	土師質土器	瓶	-	II層	6.3 - -	小明	見込みに付刊者	108-7
15	1107	土師質土器	瓶	2	II層	14.4 7.6 3.3	小明	体形:面直瓶、底削:縦、出付内:外面直(底削:「二重」)内面:底削:斜	108-8

国版番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法長(cm)	产地	時期	外面調整	内面調整	備考	写真図版
16	4006	調文土器	盛少(深鉢)	灰灰(中鉢)	- - -	-	-	見込み付刊者	疑似羽状調文?	不明	108-11

第89図 II層 出土遺物(1)



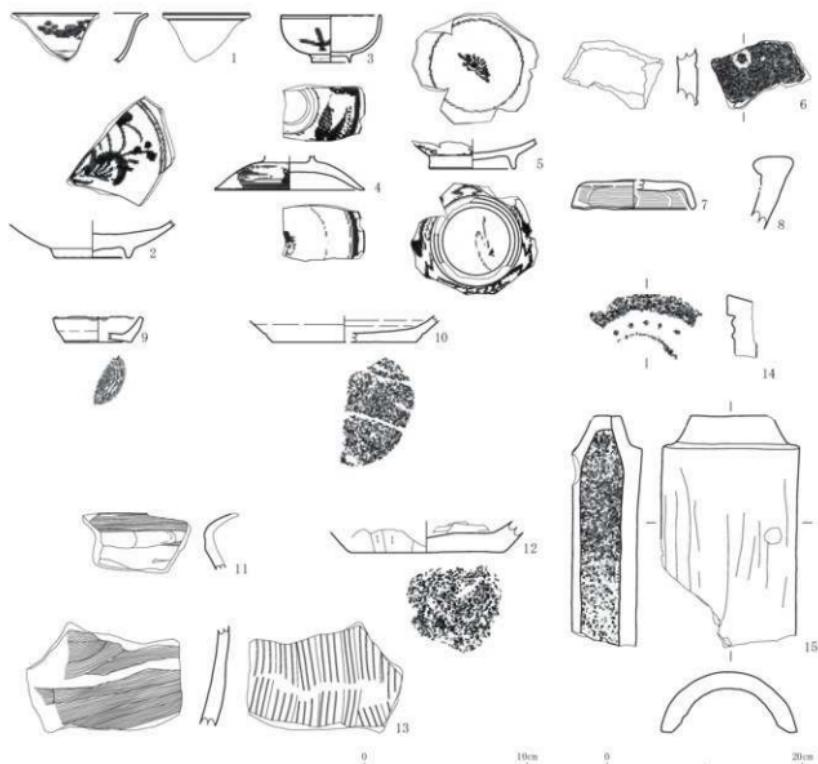
団査番号	登録番号	種類	文様	分類	遺構・層位	法量(cm)	片当量法量(cm)	重量(g)	凸面調整地	凹面調整地	備考	写真図版	
1	6016	陶瓦	菊花文	2	日暦	-	-	(8.9)	-	423	ナデ	ナデ	108-12
2	1020	輪窓	1	II層	13.7	-	11.3	4.2	2.1	480	ナデ	ヨコ板、和田板、各面削平	108-13
3	1023	菊丸瓦	A	II層	-	12.3	-	0.4	276	-	-	花弁数10	108-14
4	Ed001	瓦形品	瓦右	II層	10.2	5.4	4.8	-	-	-	-	-	108-15



団査番号	登録番号	種類	器種	遺構・層位	法量(cm)	底径	高さ	産地	時期	備考	写真図版
5	1074	陶器	瓶	III層	-	4.7	-	大塚柄馬	108後半	灰陶 内面型押し文 同心円文	108-16
6	1076	陶器	瓶	III層	-	4.65	2.1	大塚柄馬	108前半	白陶物に鉄鉢 目録225所	108-17
7	1070	陶器	罈小鉢	III層	-	11.0	-	吉野	108-18	108-18	108-18
8	1075	陶器	小鉢	III層	5.42	3.1	3.15	大塚柄馬	108後半	白陶物	108-21
9	1078	陶器	鉢	III層	-	(16.5)	3.2	白石?	108-19	無輪 中世	108-19
10	1073	陶器	桶	III層	-	-	-	丹波	108後半	様目7本 1.5mm幅	108-2
11	1071	陶器	人鉢	III層	-	-	-	漸戸美濃	108中世	縁輪流し	108-1
12	1072	陶器	香炉	III層	-	(7.6)	(2.2)	岸	108代	鉄輪	108-20
13	1077	陶器	豆甕	III層	(3.13)	2.5	4.4	小野田馬	108前半	-	108-22

第90図 II層 出土遺物(2)・III層 出土遺物(1)

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物



図版番号	登録番号	種類	器種	遺構・部位	法 量(cm)	產地	時 期	備 考	写真図版
				口径 底径 高さ					
1	J929	磁器	碗	壁面	-	(3.0)	中国	折線彫 青花 菊花文	109-3
2	J031	磁器	碗	壁面	-	(4.4)	-	肥前 (今庄裏) 政宗直後 利切伊万里 菊花文	109-5
3	J033	磁器	小片	壁面	(6.2)	(2.4)	2.9	肥前 (今代) 柴村	109-4
4	J030	磁器	衣	壁面	9.0	-	2.2	瀬戸山窯 (今代) 柴村 織引き繩の衣	109-6
5	J022	磁器	碗	壁面	-	5.2	-	肥前 (今代) 柴村 衣付 織引き繩の衣	109-7
6	J094	瓦質土器	不明	皿面	-	-	-	刻印	109-8

0 10cm

図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 量(cm)	備 考	写真図版	
					口径 底径 高さ				
8	T118	土師質土器	火鉢?	-	壁面	-	-	木明	109-10
7	T111	土師質土器	燒造物	-	壁面	(7.6)	(6.2)	表面:ナデ 内面:指ナデ	109-12
9	T104	土師質土器	瓶	5	壁面	(5.3)	(4.0)	(1.5) 木明 ハラダ	109-9
10	T105	土師質土器	瓶	-	壁面	(6.8)	-	外表面が不明瞭	109-11

0 20cm

図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 量(cm)	産地	時 期	外山調整	内山調整	備 考	写真図版
					口径 底径 高さ							
11	C006	土器	小形	皿盤	-	-	-	木明	-	ヨコナデ、脚根江南	外山へ(高さ)11.3cm	109-13
12	C005	土器	不明	皿盤	-	-	-	木明	ハラカズリ	ヨコナデ	底部にケズリか?	109-15
13	C004	土器	不明	皿盤	-	-	-	木明	ハラカズリ	ナデ	-	109-14

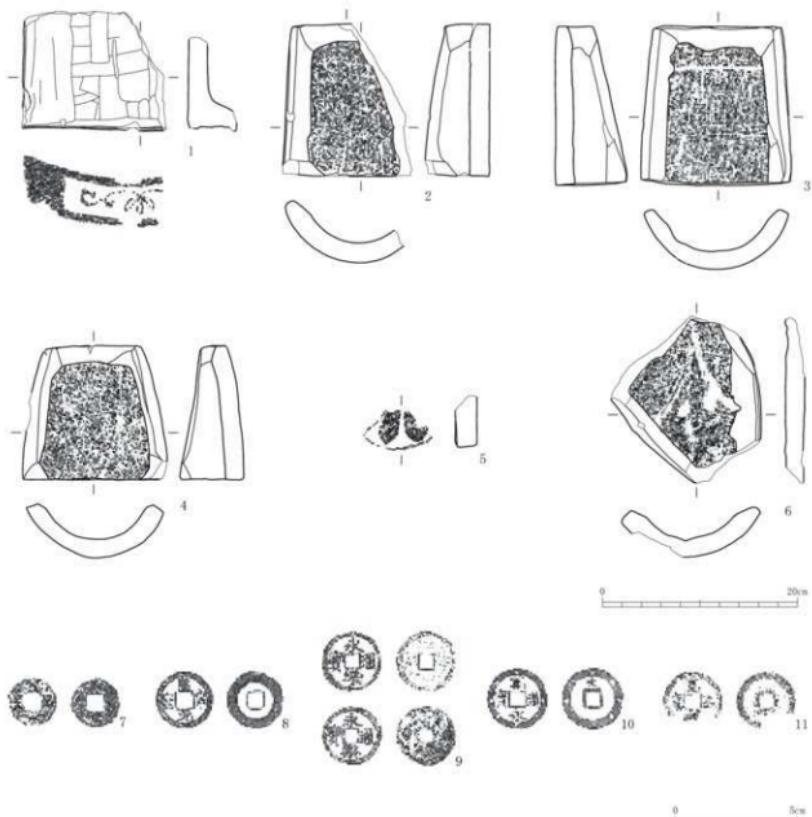
0 10cm

図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 量(cm)	当面法(cm)	直面法(cm)	直面(g)	凸面調査	凹面調査	備 考	写真図版
					長さ	幅(深さ)	直径	内径(深)	周縁				
14	P013	軽丸瓦	陶文(文) 砂7	皿盤	-	-	(17.6)	(12.6)	2.1	208	-	-	109-17

0 20cm

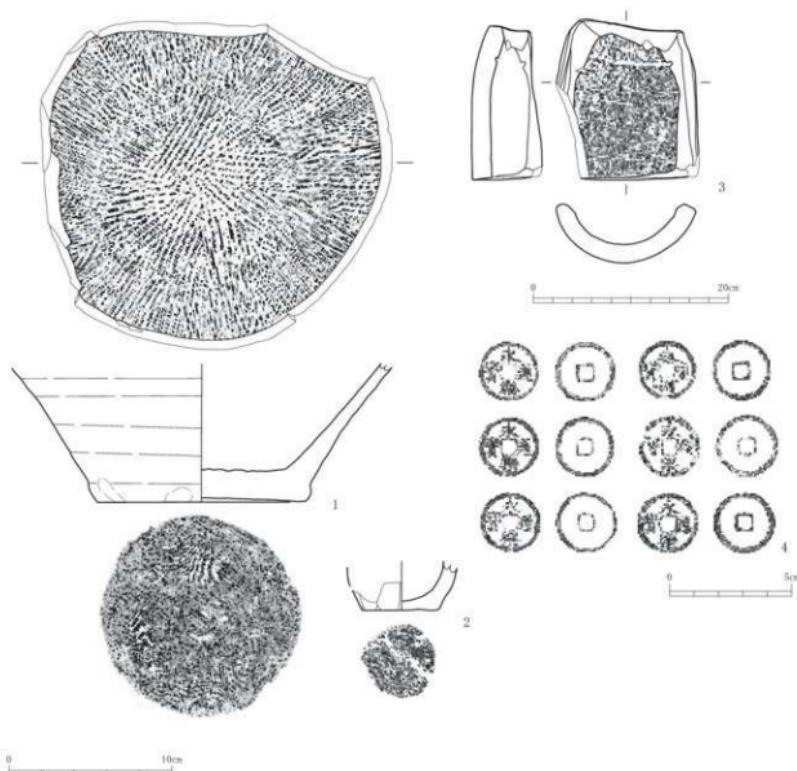
図版番号	登録番号	種類	器種	分類	遺構・部位	法 量(cm)	重量(g)	凸面調査	凹面調査	備 考	写真図版		
					長さ	幅	高さ	厚さ	周縁				
15	P018	瓦	上	皿盤	-	3.4	14.0	7.0	2.0	1014	ナデ	ノーマル、本瓦	109-18

第91図 III層 出土遺物(2)



団体番号	登録番号	種類	文様	分類	造形・層位	法量(cm)	凸当面法量(cm)	重量(g)	凸面調査	凹面調査	備考	写真図版
1	0015	軽平瓦	二重文・波形文	IA	直壁	—	(24.0) 5.2 (0.5) H	671	ナデ	ナデ、ハラナデ	0015-1-1000100010	109-19
2	0016	輪滑V	—	1	直壁	(15.6) —	6.2 2.0	570	ナデ、波形Vナデ	ナデV、直壁V、直壁波		109-20
3	0017	輪滑V	—	1	直壁	16.3 15.4 13.1	6.1 1.9	791	ナデ、波形Vナデ	ナデV、直壁V、直壁波		109-21
4	0018	輪滑V	—	2	直壁	13.7 (15.2) 13.5	6.5 1.9	565	ナデ	ナデV、直壁V、直壁波		110-1
5	0022	菊丸瓦	—	3	直壁	—	(5.8) 0.3	25	—	—		110-3
6	0031	油戸瓦	—	3	直壁	—	5.7 2.0	534	ナデ	コビキ筋、端部ケズリ	網切	110-2
7	0016	輪滑品	鉢	II	直壁	径2.0	— 0.1 1.7	—	東水通販、ビタク?			写真図版
8	0018	輪滑品	鉢	II	直壁	径2.4	— 0.1 2.8	—	輪滑元販?			110-5
9	0017	輪滑品	鉢	II	直壁	径2.5	— 0.1 3.1	—	「水通販」、2枚貯金者			110-7
10	0019	輪滑品	鉢	II	直壁	径2.5	— 0.1 3.5	—	「東水通販」(鉢)、背に「文」			110-8
11	0020	輪滑品	鉢	II	直壁	径2.5	— 0.1 2.8	—	東水通販、(鉢)			110-6

第92図 III層 出土遺物(3)



図版番号	登録番号	種類	分類	遺構・層位	法量(cm)		底面 形状 凹凸 厚さ	時期	備考	写真図版
					口径	底径				
1	1079	陶器	器体	IV-V層	-	12.8	-	在地か?	不明	様目7~8本、1.5mm幅 119-9
2	1112	土師質土器	器体	-	VI層	4.7	-	ad.?	外縁に横位のケズリ、底部に2回?	119-13
3	8019	輪滑い	2	IV層	16.5	11.5	7.2	2.0	762 ナデ	コビキ板、有目板 119-10
4	8021	陶製品	鉢	IV-V層	11.5×5	11.5×5	26.1	-	「木葉追賣」6枚花貫 119-11	

第93図 IV・VI層 出土遺物

第2表 磁石建物跡一覧表

磁石建物跡 (SB5)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
磁石跡1	N	Y38 X36	0.74	0.59	0.14	半円形	楕円形	-	
磁石跡2	N	Y38 X36	0.29	0.32	-	-	楕円形	-	
磁石跡3	N	Y38 X36	0.53	0.36	-	-	楕円形	-	
磁石跡4	N	Y39 X36	0.80	0.67	-	-	円形	P67<礎4	
磁石跡5	N	Y39 X36	0.97	0.16	0.15~0.22	半円形	楕円形	-	
磁石跡6	N	Y39~40 X36~37	0.69	0.67	-	-	円形	-	
磁石跡7	N	Y40 X36~37	0.55	0.24	0.09	半円形	楕円形	-	
磁石跡8	N	Y40 X37	0.45	0.25	0.07	半円形	円形	-	
磁石跡9	N	Y38 X37	0.53	0.41	-	-	楕円形	-	
磁石跡10	N	Y39 X37	0.68	0.60	0.09	半円形	円形	P46<礎11	
磁石跡11	N	Y39~40 X37	0.65	0.22	-	-	円形	礎11<P30	
磁石跡12	N	Y39 X37	0.48	0.36	-	-	円形	礎12<P30	
磁石跡13	N	Y39~40 X37	0.76	0.69	-	-	円形	-	
磁石跡14	N	Y41 X37	0.71	0.39	-	-	円形	-	
磁石跡15	N	Y42 X37	0.75	0.73	-	-	円形	-	
磁石跡16	N	Y43 X37	0.76	0.33	-	半円形	円形	-	
磁石跡17	N	Y42 X37	0.89	0.56	-	-	円形	-	
磁石跡18	N	Y42 X37	0.75	0.70	-	-	円形	P18<P19	
磁石跡19	N	Y42 X37	0.83	0.62	-	-	楕円形	-	
磁石跡20	N	Y42~43 X38	0.98	0.80	-	-	楕円形	-	
磁石跡21	N	Y43 X38	0.75	0.31	-	半円形	楕円形	-	

磁石建物跡 (SB14)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
磁石跡1	N	Y25 X29	0.88	0.51	0.22	円形	楕形	-	楕円めに丸
磁石跡2	N	Y25~26 X29	0.97	0.87	-	円形	-	-	-
磁石跡3	N	Y26 X29	1.02	0.90	-	円形	-	-	-
磁石跡4	N	Y26 X29	0.90	0.80	-	円形	-	-	楕り方に丸
磁石跡5	N	Y26~27 X29	0.98	0.93	-	円形	-	-	楕円め・楕り方に丸
磁石跡6	N	Y27 X29	0.99	0.85	-	円形	-	-	楕円め・楕り方に丸
磁石跡7	N	Y27 X29~30	0.48	0.35	-	楕円形	-	P53<礎11	-
磁石跡8	N	Y24 X29	0.88	0.70	-	不整円形	-	-	-
磁石跡9	N	Y25 X29~30	1.09	0.90	0.16	円形	楕形	-	楕り方に丸
磁石跡10	N	Y25 X30	1.01	0.91	-	円形	-	-	楕円めに丸
磁石跡11	N	Y26 X30	1.13	0.91	0.16	円形	楕形	-	楕円めに丸
磁石跡12	N	Y26 X30	1.04	0.84	0.19	円形	楕形	-	楕り方に丸
磁石跡13	N	Y27 X30	0.89	0.80	0.17	円形	楕形	-	楕円め・楕り方に丸
磁石跡14	N	Y27 X30	0.47	0.44	-	円形	-	-	楕り方に丸
磁石跡15	N	Y26 X28~29	0.24	0.21	-	円形	-	-	楕円めに土師器

磁石建物跡 (SB16)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
磁石跡1	N	Y47 X40	1.09	0.72	0.20	円形	-	SD120<礎1	
磁石跡2	N	Y47 X40	0.60	0.49	-	円形	-	SD120<礎2	
磁石跡3	N	Y48 X40	0.87	0.65	-	円形	-	SD125<礎3	
磁石跡4	N	Y48 X40	0.64	0.52	-	円形	半円形	SD125<礎4	
磁石跡5	N	Y47~48 X40~41	0.67	0.52	-	円形	-	-	-

礎石跡

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
礎石跡1	N	Y46 X41	0.52	0.35	-	円形	-	-	
礎石跡2	N	Y50 X41	0.71	0.45	-	円形	-	-	
礎石跡3	N	Y42 X37	0.60	0.56	-	円形	-	-	
礎石跡4	N	Y42 X37	0.30	0.20	-	円形	-	-	
礎石跡5	N	Y42 X37-38	0.49	0.36	-	円形	-	-	

第3表 挖立柱建物跡一覧表

掘立柱建物跡 (SB15ピット)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SB15 P1	N	Y24 X30	0.51	0.50	-	円形	-	SD100-P1	-
SB15 P2	N	Y24 X30	0.41	0.35	-	倒丸方形	-	SD100-P2	-
SB15 P3	N	Y24-25 X30	0.77	0.52	-	円形	-	SD100-P3	-
SB15 P4	N	Y26 X31	0.52	0.45	-	椭円形	-	P4<SK437	柱痕跡0.12×0.11
SB15 P5	N	Y26-27 X31	0.66	0.54	-	円形	-	-	-
SB15 P6	N	Y24 X30	0.67	0.66	-	不整椎円形	-	-	-
SB15 P7	N	Y24-25 X30	0.90	0.30	0.90	椭円形	U字形	SD100-C	柱痕跡0.08×0.07×0.04
SB15 P8	N	Y25 X31	0.63	0.19	0.64	円形	U字形	-	-
SB15 P9	N	Y25 X31	0.80	0.74	-	円形	-	-	柱痕跡0.35×0.33
SB15 P10	N	Y26 X31	0.98	0.58	-	不整椎円形	-	-	-
SB15 P11	N	Y26 X31	0.63	0.60	-	円形	-	P11<SK437	柱痕跡0.27×0.10
SB15 P12	N	Y27 X31	0.57	0.40	0.64	円形	U字形	-	-
SB15 P13	N	Y27 X31	0.91	0.80	-	円形	-	-	-
SB15 P14	N	Y25 X31	0.35	0.28	-	円形	-	-	-
SB15 P15	N	Y25 X31	0.85	0.78	-	円形	-	P15<SK433	-
SB15 P16	N	Y26 X31	1.0	0.58	-	不整形	-	-	柱痕跡0.24×0.21
SB15 P17	N	Y27 X31	0.62	0.53	-	円形	-	-	柱痕跡0.14×0.11
SB15 P18	N	Y27 X32	0.71	0.60	-	円形	-	-	-
SB15 P19	N	Y27 X32	0.73	0.71	-	円形	-	-	-
SB15 P20	N	Y26 X32	0.73	0.56	-	椭円形	-	-	-

第4表 埼跡一覧表

埼跡 (SA6~9・15~25)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SA6	N	Y33 X32-33	4.64	0.80	0.38	北東西南	U字形	-	
SA7	N	Y34 X30-31	36.50	0.85	0.87	南北	四柱形	-	
SA8	N	Y29-30 X30-34	36.90	1.50-1.85	0.39-0.85	北東西南	U字形	河川跡<SA8<六櫻原跡	
SA9	N	Y43-44 X36-35-37	4.82	0.38-0.60	0.67-0.76	北東西南	U字形	P32<SA9<SD88- SK502-555- P75	
SA15	N	Y25-26 X30	11.80	0.60	0.66	東西	U字形	SD100<SA15-P23-26-32-33	柱痕跡9箇所
SA16	N	Y49 X28	2.10	1.00	0.58	南北	U字形	河川跡<SA16<六櫻原跡	柱痕跡4箇所
SA17	N	Y51-52 X32-33	東西15.88 南北4.31	0.81-1.17 0.50-1.29	0.19	東西南北	U字形	SA17<SK506-507	
SA18	N	Y49-52 X32-34	東西15.98 南北4.16	0.42-0.78 0.42-0.53	0.89	東西南北	U字形	SA18<柱1-2-3-4-5-6-SD123	布張り基礎の古段階
SA18 柱穴	N	Y49-52 X32-34	東西15.91 南北4.18	0.40-0.85 0.43-0.61	-	東西南北	U字形	SA18<柱1-2-3-4-5-6-SD123	上面に柱穴跡5箇所を有する柱立柱建物跡の新段階
SA19	N	Y48-52 X38-39	4.23	0.31-0.41	0.30-0.92	南北	U字形	SA16<SA19-SD114	
SA20	N	Y48-52 X38-39	19.88	0.50-1.26	0.31-0.47	東西	U字形	SA20<抜き取り穴1-2	

堀跡 (SA6~9・15~25)

SA21	N	Y50 X38-39	L12	0.56~0.63	0.27	南北	U字形	SA21<SD114	
SA22	N	Y51-52 X33	49B	0.43~0.62	0.13	東西	U字形	SA17-18<SA22	
SA23	N	Y44 X37-39	825	0.77~0.99	0.26~0.49	南北	U字形	SK374~SK379-SX21<SA23	SD51から変更
SA24	N	Y44-45 X37	681	0.52~1.30	0.54	東西	U字形	—	SD115-116から変更
SA25	N	Y45-46 X36~39	1578	0.57~0.90	0.16~0.77	南北	U字形	SA25<SK492-578-579-572-548	SD126から変更

堀跡 (SAピット・抜取穴)

遺構名	部位	グリッド	長径 (m)	幅狭 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SA6 P1	N	Y33 X32-33	0.42	0.36	0.26	円形	円筒形	—	
SA6 P2	N	Y33 X33	0.44	0.30	0.60	楕円形	円筒形	—	
SA6 P3	N	Y33 X33	0.20	0.20	—	円形	—	—	
SA6 P4	N	Y33 X33	0.14	0.12	—	円形	—	—	
SA9 P1	N	Y44 X36	0.30	—	—	円形	—	—	柱直跡
SA9 P2	N	Y44 X36	0.20	—	—	円形	—	—	柱直跡
SA17 P1	N	Y51 X33	0.38	0.32	—	円形	—	—	柱直跡
SA17 P2	N	Y51 X33	0.28	0.25	—	円形	—	—	柱直跡
SA18P1	N	Y49-50 X33-34	0.61	0.50	—	円形	—	SA18<P1	柱直跡
SA18P2	N	Y50 X34	0.80	0.71	0.40	円形	円筒形	SA18<P2	柱直跡
SA18P3	N	Y50 X34	0.98	0.68	—	円形	—	SA18<P3	柱直跡
SA18P4	N	Y50-51 X34	0.73	0.71	0.18	円形	半円形	SA18<P4	円礎のある柱直跡
SA18P5	N	Y51 X34	0.62	0.42	0.31	不整形	—	SA18<P5	柱直跡
SA18P6	N	Y51 X34	0.63	0.61	0.17	円形	半円形	SA18<P6	円礎のある柱直跡
SA18 P7	N	Y32 X34	0.20	0.20	—	円形	—	—	柱直跡
SA18 P8	N	Y32 X34	0.15	0.15	—	円形	—	—	柱直跡
SA18 P9	N	Y32 X34	0.18	0.18	—	円形	—	—	柱直跡
SA23 P1	N	Y44 X38	0.22	0.20	—	円形	—	—	柱直跡
SA23 P2	N	Y44 X38	0.27	0.21	—	円形	—	—	柱直跡
SA23 P3	N	Y44 X38	0.17	0.15	—	円形	—	—	柱直跡
SA23 P4	N	Y40 X37	0.17	0.16	—	円形	—	—	柱直跡
SA24 P1	N	Y44 X36	0.18	0.15	—	円形	—	—	柱直跡
SA25 P1	N	Y46 X37	0.23	0.18	—	円形	—	—	柱直跡
SA25 P2	N	Y45 X39	0.12	0.10	—	円形	—	—	柱直跡
SA25 P3	N	Y45 X39	0.13	0.12	—	円形	—	—	柱直跡
SA20 抜取穴1	N	Y49 X38	1.44	1.14	0.12	—	—	SA20<抜取穴1	
SA20 抜取穴2	N	Y50-51 X38	2.01	1.04	0.70	不整形	半円形	SD129-SA20<抜取穴2	

第5表 溝跡一覧表

溝跡 (SD)

遺構名	部位	グリッド	長径 (m)	幅狭 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SD73	II	Y34 X30-31	1.37	0.38	0.65	南北-南北	円柱形	—	
SD87	II	Y32 X30-31	0.98	0.90	0.27	西-東	楕形	—	
SD88	N	Y37~40-43-44 X34-35	32.80	1.20~2.00	0.42~2.97	北西-南東	半円形	SA9~SD92-P5<SD88< SK390-391-392-464-465-466	
SD89	N	Y43-44 X35-38	14.30	0.42~1.00	0.30~0.29	北東-東西	半円形	SD89~SK463-464	
SD90	N	Y36-37 X31-32	7.00	0.68	0.17~0.28	北西-南東	U字形	河川跡<SD90<SK381	

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物

溝跡 (SD)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SD91	IV	Y30 X30-31	0.42	0.60	0.40	南北-東西	逆台形	-	
SD92	IV	Y39-43 X30-31	22.00	0.60	0.40	南北-東西	組形	SD92<SD86-SK300-391-392	
SD99		-	-	-	-	-	-	-	確認面(2SX16と17の堆積土)
SD100	VI	Y24-25 X29-32	18.00	3.33-3.86	1.73	南北	U字形	SD100<SA15c P1-2-3-4-7-23-24-29-櫻K-SB15	
SD101	IV	Y27-28 X29-33	18.10	0.40-0.80	0.27	南北	U字形	SD101<SK439-442-P8-9-10	
SD102	IV	Y28 X32-33	1.70	0.72	-	南北	組形	SD102<SK444	
SD103	III	Y28 X32	6.01	0.19-0.48	0.05	南北	組形	SD103<SK449-450	
SD104	III	Y45 X29-30	2.83	1.73	1.12	南北?	不整U字形	六郷堀跡-河川壁<SD104	
SD105	VI	Y39 X30	1.34	0.48	-	南北	不整U字形	SD106<SD105	
SD106	VI	Y39 X30	1.13	0.27	-	東西	-	SD106<SD105	
SD107	VI	Y36 X32-33	5.69	0.31-0.44	0.03	南北	U字形	SD107<小溝11群	
SD108	VI	Y36 X33	4.48	0.44-0.59	0.04	南北	U字形	SD108<小溝11群	
SD109	IV	Y37-40 X36-37	15.85	0.29-0.68	0.10-0.23	東西	半円形	SI42-SB5-P13-SD116<SD109<SK505	
SD110	IV	Y37-43 X35-36	30.85	0.37-1.24	0.05-0.34	東西	半円形	SD110-P24<P29<P84	
SD111	IV	Y39 X37	1.10	0.10-0.72	0.05	東西	組形	-	
SD112	IV	Y37-43 X36-37	28.31	0.05-0.72	0.06-0.13	東西	組形	-	
SD113	IV	Y37-42 X35-36	31.35	0.30-0.80	0.08-0.26	東西	組形	SD113<SK555	
SD114	IV	Y46-52 X37-39	22.1-234	0.27-0.48	南北 東西	逆台形	SA19-20-21<SX22-14号右敷き		
SD115	VI	Y39 X37	-	0.34	0.17	東西	半円形	SD115<SK485-小溝9	
SD116	IV	Y40 X37	0.88	0.58	-	東西	組形	SD116<SD109	
SD117	IV	Y45-46 X38-40	0.75-0.80	0.17-0.41	南北 東西	半円形	SX20-SI44<SD117		
SD118	IV	Y50 X40	1.23	0.40-0.56	0.25	南北	半円形	-	
SD119	IV	Y45-47 X40	7.47	0.55-0.99	0.11-0.20	東西	半円形	SX20<SD119-SD120	
SD120	IV	Y47-51 X39-41	南北2.94 東西19.72	0.68-1.26 0.29-0.90	0.10-0.22	南北 東西	半円形	SX20<SD119-SD120	
SD121	IV	Y49 X39	3.62	2.58	-	南北-北東	U字形	-	
SD122	IV	Y50-51 X37-38	5.16	0.36-1.19	-	東西	組形	-	
SD123	IV	Y49-51 X33-34	南北14.18 東西9.52	1.83-2.96 2.08-2.69	0.28-0.65	南北 東西	逆台形	SA18合<SD123-SA18新	
SD124	IV	Y50-51 X38	5.80	0.24-0.58	-	東西	組形	SK526-SD137<SD124	
SD125	IV	Y48 X40	2.79	0.51-0.67	0.20	南北	不明	SD125<櫻3-4	
SD126	IV	Y49-50 X36-37	4.90	0.90-0.10	-	南北-北西	-	SD116<P49	
SD127	IV	Y50-51 X38	5.68	0.95-1.12	0.15	東西	半円形	SD127<SD127	
SD128	IV	Y44-45 X39	2.57	0.29-0.45	0.23-0.28	東西	組形	SD128<SK494	
SD129	IV	Y50-51 X38	4.08	0.28-0.48	-	東西	組形	SD129<抜き取り穴2	
SD130	IV	Y51 X33-34	0.93	0.72-0.75	-	東西	-	SD130<SD123-SK502	

土坑 (SK)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SD131	N	Y51-52 X32	3.81	0.48~0.60	0.10~0.13	南北~東北	楕円形	—	
SD132	N	Y32 X34	0.90	0.19~0.29	—	東西	—	—	
SD133	V1	Y49-50 X31-32	3.91	0.65~1.12	—	南東~北西	半円形	—	
SD134	III	Y49 X38	0.89	0.59	0.16	南東~北西	楕円形	SD20<SD134	
SD135	V1	Y46 X29-30	2.28	1.11~1.14	—	南東~北西	半円形	—	
SD136	V1	Y47 X30	2.72	0.75~1.39	—	南東~北西	半円形	SD136<六郷跡跡	
SD137	N	Y31 X38	1.00	0.71	—	南北	—	SD137<SD127-124	
SD138	V1	Y48 X38	0.52	0.31	—	南東~北西	半円形	SD138<SA20	
SD139	N	Y49 X34-35	7.60	0.23~0.73	—	南北	—	SD139<SD123	

第6表 土坑一覧表

土坑 (SK)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SK375	II	Y29 X31	1.22	0.87	0.34	楕円形	円筒形	—	
SK376	II	Y32 X31	0.95	0.79	0.15	楕円形	楕円形	—	
SK377	II	Y32-33 X30	2.87	0.92	0.70	楕円形	楕円形	SK377<P2-P3	
SK378	N	Y42-43 X35-36	1.63	1.24	0.52	楕円形	楕円形	—	
SK379	II	Y29-30 X32	0.74	0.67	0.28	円形	楕円形	—	
SK380	N	Y32-33 X32	2.30	2.92	1.80	楕円形	逆台形	SD999<SK380	
SK381	N	Y36 X31	1.51	0.71	0.21	楕円形	逆台形	SD992<SK381	
SK382	N	Y32 X30-31	1.37	0.83	0.45	—	楕円形	—	
SK383	N	Y32-33 X31	1.32	1.11	0.30	楕円形	楕円形	小溝1~2<SK383	
SK384	N	Y32 X32	1.29	1.25	0.27	楕円形	楕円形	—	
SK385	N	Y34 X33	1.10	0.72	0.58	楕円形	円筒形	SD993<SK385	
SK386	N	Y34 X31-32	0.67	0.36	0.40	楕丸長方形	逆台形	—	
SK387	N	Y34 X33	0.60	0.54	—	円形	—	—	
SK388	N	Y32 X32-33	0.60	0.34	—	—	—	SK388<SX12-SD93	
SK389	V1	Y35-36 X32	1.90	1.84	0.52	楕円形	U字形	—	
SK390	N	Y40 X35	1.55	1.21	0.15	円形	楕円形	SD988<SK390	
SK391	N	Y40-41 X35	1.82	1.53	0.15	円形	楕円形	SD992<SK391	
SK392	N	Y41 X35	1.20	1.07	0.15	円形	楕円形	SD992<SK392	
SK393	N	Y43 X36	0.56	0.51	0.45	楕円形	半円形	—	
SK406	II	Y25 X32	2.15	1.05	0.40	円形	楕円形	P53<SK406	
SK437	II	Y26 X31	3.15	2.05	0.54	円形	楕状凸壺	SB15P5-6-11-12-16<SK437	
SK438	II	Y26 X31	1.20	1.15	0.98	円形	U字形	SK438<P3	中央に柱痕跡底面に木材痕
SK439	N	Y29 X31	1.18	1.18	—	円形	—	SD101<SK439	
SK440	N	Y25 X31	1.43	0.82	—	不整形	—	SK440<SK443	堆積上中に菊丸瓦
SK441	II	Y29 X32	3.61	2.45	0.60	楕円形	U字形	六郷跡、解跡・河川跡<SK441	
SK442	N	Y27 X31	2.74	2.39	0.40	円形	楕円形	SD101<SK442	
SK443	II	Y25 X31	3.30	2.15	0.39	楕円形	楕円形	SB15P8-P14 SK440-453 P27-28<SK443	
SK444	II	Y28 X33	2.50	2.35	0.40	円形	楕円形	SD102<SK444	
SK445	N	Y27 X31	1.11	1.01	—	円形	—	—	
SK446	N	Y27 X31	1.41	0.85	0.83	円形	U字形	—	
SK447	N	Y28 X31	0.80	0.65	—	楕円形	—	—	
SK448	N	Y28 X32	1.09	0.97	0.09	円形	楕円形	10号右数<SK448	
SK449	II	Y28 X32	1.13	0.75	0.26	不整形円形	円筒形	SD103<SK449	
SK450	II	Y28 X32	1.09	1.08	0.16	不整形円形	楕円形	SD103 11号右数<SK450	

土坑 (SK)

SK451	VI	Y42 X30-3I	0.95	0.75	-	不整端円形	-	SX18<SK451	
SK452	IV	Y28 X30	1.31	1.07	-	円形	-	SK455<SK452	
SK453	IV	Y25 X31	1.64	1.60	-	不整形	-	P2-15<SK453<SK443-2I	
SK454	III	Y40 X29	1.12	0.11	-	不整端円形	-	六鷺蟹<SK454	
SK455	IV	Y28 X30	1.64	1.57	-	円形	-	SK455<SK452	
SK456	IV	Y28 X31	0.71	0.38	-	楕円形	-	-	
SK457	IV	Y28 X29-30	1.30	1.66	-	長楕円形	-	SK458<SK457<P34	
SK458	IV	Y28 X30	1.39	0.68	-	楕円形	-	SK458<SK457	
SK459	IV	Y27 X30	0.76	0.76	-	円形	-	-	
SK460	III	Y39 X30	1.07	0.86	-	不整端円形	-	-	
SK461	IV	Y25 X32	1.22	0.88	-	楕円形	-	-	
SK462	III	Y39 X33	0.67	0.19	-	楕円形	-	SK475<SK484	
SK463	IV	Y44 X36	0.78	0.56	-	楕円形	-	SD89<SK463	
SK464	IV	Y44 X35	2.62	1.36	-	不整端円形	-	SD88-89<SK464	
SK465	IV	Y44 X35	0.90	0.59	-	楕円形	-	-	
SK466	IV	Y44 X35	0.97	0.42	-	楕円形	-	SD88<SK466	
SK467	VI	Y42 X34	2.37	1.07	-	楕円形	-	-	
SK468	VI	Y41-42 X33	1.92	1.16	-	楕円形	-	-	
SK469	VI	Y42 X32	0.61	0.25	-	楕円形?	-	-	
SK470	VI	Y41-42 X32	1.31	1.28	-	不整形	-	-	
SK471	VI	Y41 X32	1.26	0.88	-	楕円形?	-	-	
SK472	VI	Y40 X32	0.83	0.83	-	方形	-	-	
SK473	VI	Y40 X33	1.77	1.49	-	楕円形?	-	SK473<SK475	
SK474	VI	Y39-40 X33	1.92	0.68	-	長楕円形	-	P62-65<SK474	
SK475	VI	Y39 X33	1.19	1.19	-	不整形	-	SK473-476-484<SK475	
SK476	VI	Y39 X32-33	1.79	-	-	楕円形?	-	SK476<SK475-477	
SK477	VI	Y39 X33	3.39	1.75	-	不整形	-	SK475<SK477	
SK478	VI	Y40 X33	1.29	0.54	-	円形	-	-	
SK479	VI	Y39 X33-34	0.85	0.59	-	楕円形	-	-	
SK480	VI	Y39 X31	1.33	0.57	-	-	-	-	
SK481	VI	Y41 X34	4.20	1.93	-	長楕円形	-	-	
SK482	VI	Y41 X34	0.81	0.54	-	楕円形	-	SK483<SK482	
SK483	IV	Y41 X34	1.33	1.21	-	円形	-	SK483<SK482	
SK484	VI	Y32-33 X34-35	3.94	0.89	-	-	-	SK484<P49-50-51	
SK485	IV	Y39 X37	1.04	0.58	0.09	楕円形	半円形	小溝2-1<SK485	
SK486	VI	Y41-42 X36	1.82	1.04	0.13	不整形	楕形	-	
SK487	VI	Y42 X36-37	1.26	0.55	-	楕円形	-	-	
SK488	VI	Y41 X36	1.16	0.69	0.20-0.23	楕円形	半円形	-	
SK489	VI	Y41 X36	0.65	0.45	0.33	楕円形	円筒形	SK489<P1-SK490	
SK490	VI	Y41 X36	0.84	0.51	0.33	楕円形	円筒形	P1<SK490	
SK491	VI	Y49-50 X32-33	2.68	1.53	-	不整端円形	-	-	
SK492	VI	Y45-46 X37	1.11	1.01	-	楕円形	-	SA25<SK492	
SK493	IV	Y45 X39	1.42	1.25	-	円形	-	SX21<SK493	
SK494	IV	Y44-45 X39	1.44	1.40	-	円形	-	SD128-SK571-SK575-SK85<SK494	
SK495	IV	Y48-49 X41	2.23	1.55	-	円形	-	-	
SK496	IV	Y49-50 X41	1.60	1.54	-	不整円形	-	-	
SK497	IV	Y49-50 X37-38	2.48	0.73-0.95	-	長楕円	半円形	SK497<SK536	

土坑 (SK)

SK498	VI	Y46 X40~41	1.45	0.89	—	楕円形	—	—	—
SK499	VI	Y46 X40~41	0.60	0.53	—	円形	—	—	—
SK500	VI	Y46 X40~41	0.55	0.37	—	楕円形	—	—	—
SK501	IV	Y45~46 X38~39	1.26	1.42	—	楕丸方形	—	SN21<SK501	
SK502	IV	Y51 X33~34	2.58	2.12	0.64	不規則形	半円形	SK506~SK507~SA17~SD130~SK502	
SK503	IV	Y44 X36	2.69	2.61	—	方形	—	—	
SK504	IV	Y50 X32	2.48	0.51	0.33	不整形	半円形	SD121<SK504	
SK505	VI	Y37~38 X36	0.65	0.53	—	円形	—	SD109 SA42<SK505	
SK506	IV	Y51 X33	1.04	0.22	0.12	方形	—	SK506~SK507~SK507	
SK507	IV	Y51 X33	0.91	0.50	0.08	楕円形	—	SK306~SK507<SK502	
SK508	VI	Y38 X36	0.50	0.50	—	円形	—	SK509~SK508~P33	
SK509	VI	Y38 X36	0.49	0.34	—	円形	—	SK509~SK508~P33	
SK510	IV	Y52 X33~34	1.25	1.21	—	円形	—	—	柱直路のビット1基(径0.23m)
SK511	IV	Y52 X34	—	0.74	1.18	—	円筒形	—	
SK512	IV	Y50 X34	0.98	0.42	0.44	円形	半円形	SD121<SK512	
SK513	IV	Y44 X38	0.98	0.29	0.14	不整形	楕形	SN21<SK513	
SK514	IV	Y44 X38	0.99	0.70	0.28	円形	半円形	SK313<SK514	
SK515	IV	Y49 X36	2.31	0.75	0.22	6-重圓形	半円形	SK345<SD110	
SK516	VI	Y44 X37	0.75	0.43	0.30	円形	半圓形	SA23<SK516	SA23北端抜取穴か
SK521	VI	Y42 X37	0.76	0.54	—	円形	—	—	下層道構
SK522	IV	Y50 X38	0.90	0.64	—	不整形	—	SA20<SK522<SK529	
SK523	VI	Y46 X39~40	1.62	1.01	0.13	不整形	—	SK521<SK20	下層道構
SK524	IV	Y50 X37	0.91	0.31~0.38	—	楕丸方形	—	—	
SK525	IV	Y49 X36	0.53	0.28	—	不整形	—	—	
SK526	IV	Y50 X38	0.92	0.44	—	不整形	—	SK536<SD124	
SK527	IV	Y51 X39	0.56	0.18	—	—	—	—	
SK528	VI	Y47~48 X31~32	1.98	0.78	—	楕円形	—	—	
SK529	IV	Y50 X38	0.48	0.34	—	楕円形	—	P25~SA20~SK522<SK529	
SK530	VI	Y37~38 X35~36	2.15	1.19	—	円形	—	SK530~P34	
SK531	VI	Y38 X35~36	2.05	1.60	—	円形	—	—	
SK532	VI	Y38~39 X36	2.18	1.82	—	円形	—	SK532~SD110	
SK533	VI	Y39 X36	1.19	0.71	—	不整形	円形	—	
SK534	VI	Y39 X36	2.41	1.02	0.22	不整形	楕形	—	
SK535	IV	Y51 X32	2.35	1.18	—	不整形	—	—	
SK536	IV	Y49~50 X37	1.25	0.37	—	方形	逆台形	SK405<SK536	縄が4つ並ぶ近代か
SK537	IV	Y49~50 X38	0.79	0.55	—	楕円形	—	SA20<SK537	柱直路(径0.2~0.17m)
SK538	VI	Y41 X36	0.60	0.48	—	円形	半円形	—	
SK539	IV	Y44 X38	1.33	0.95	—	楕円形	—	SN21<SK539	
SK540	IV	Y44 X37~38	1.95	0.51	—	長楕円形	—	SK541~SK540~SX21	
SK541	VI	Y44~45 X37~38	1.41	0.75	—	楕円形	—	SK542~544<SK541~SK540	
SK542	VI	Y44~45 X37~38	1.49	0.73	—	楕円形	—	SK543~SK542~SK541	
SK543	VI	Y45 X37	0.99	0.60	—	楕円形	—	SK558~SK543<SK542	
SK544	VI	Y44 X37~38	1.00	0.98	—	楕丸方形?	半円形	SK544~SK541	
SK545	VI	Y44 X37	0.72	0.19	—	—	—	SK545~SK542	
SK546	IV	Y44~45 X38	1.14	0.50	0.16	—	半円形	SN21<SK546	
SK547	VI	Y45 X39	0.45	0.29	0.06	円形	半円形	SX20~SA25<SK547	
SK548	IV	Y45 X38~39	0.53	0.41	—	円形	—	SA25<SK548	SA25抜取穴か

土坑 (SK)

SK549	N	Y50 X39	0.50	0.47	-	円形	-	-	
SK550	N	Y50 X39	0.61	0.50	-	楕丸形	-	SK551<SK550	
SK551	N	Y50 X39	0.76	0.65	-	楕丸形	-	SK513<SK551<SK550	
SK552	Vl	Y43-44 X37	0.87	0.55	-	楕円形	-	SA9<SK552	SA9の抜取穴か
SK553	N	Y49 X38	0.90	0.64	-	楕円形	-	SA20<SK553<P6-11	SA20の抜取穴か
SK554	Vl	Y43 X37	0.62	0.60	-	円形	半円形	-	
SK555	Vl	Y43-44 X36	0.64	0.55	-	不整形	楕形	SA9<SK555	
SK562	N	Y46 X37	-	-	0.26	-	-	SK561<SD114-194	
SK562	N	Y45 X37-38	1.24	0.95	0.28	楕円形	半円形	SK581<SK562<SK559	抜取穴か
SK563	Vl	Y46 X36	0.70	0.29	-	-	半円形	SK563<SA25	
SK564	Vl	Y46 X37	1.15	0.70	0.34	楕円形	-	SD114<SK564<SK565	
SK565	Vl	Y46 X37	1.42	0.85	0.27	円形	半円形	SK565	
SK566	N	Y51 X40	0.68	0.13	-	楕円形	-	SK566<SK567	
SK567	N	Y51 X39	1.93	1.42	0.14	不整形	-	SK566- SK567<SK569	
SK568	Vl	Y47 X38-39	3.47	0.80	0.10	不整形	楕形	SK568<SD114- P85	下層遺構か
SK569	N	Y51 X39	1.28	1.14	-	不整形円形	-	SK567<SK569	
SK570	N	Y51-52 X38	2.58	1.48	0.53	不整形	-	-	
SK571	Vl	Y44 X39	0.87	0.51	0.10	円形	-	SK615<SK371<SD128- SK494	
SK572	Vl	Y45 X39-40	2.02	0.85	0.20	不整形	半円形	SA25-SD117<SK572	抜取穴か
SK573	N	Y52 X34	0.71	0.68	-	不整形円形	-	-	
SK574	Vl	Y44 X38-39	1.23	0.80	0.33	-	-	SX21<SK574<SA23	
SK575	Vl	Y45 X39	1.53	0.54	0.24	楕円形	-	SK575<SK494- SD128	
SK576	Vl	Y45 X39	0.57	0.19	0.10	円形	半円形	-	
SK577	N	Y45 X38	0.60	-	0.27	-	楕形	SA21<SK595	
SK578	N	Y45-46 X38	1.20	1.00	-	円形	-	SK579<SK578- SA25	SA25の抜取穴か
SK579	N	Y45 X38	0.91	0.66	0.12	楕円形	-	SA25<SK579<SK578	SA25の抜取穴か
SK580	Vl	Y48 X39	2.33	0.65	0.17	不整形	-	-	
SK581	N	Y45 X37-38	1.59	0.89	-	不整形円形	-	SK598- K562- SX21<SK581	
SK582	N	Y50 X39	0.45	0.40	-	円形	-	SK533<SK582	
SK583	N	Y50 X39	0.99	0.97	0.21	円形	-	SK533<SK583	
SK584	Vl	Y46 X32-33	3.28	2.32	-	不整形円形	-	SK584<P38- 58	
SK585	N	Y44 X39	0.94	0.29	-	不整形	-	SK585<SK494- SK571	
SK586	H	Y49-50 X34-35	1.87	1.55	-	不整形	-	SK566<SD123- SX23	
SK587	N	Y45-46 X38	1.50	-	0.26	-	楕形	SK588<SK587<SD114- SK556	
SK588	N	Y45-46 X38	1.26	-	0.35	-	楕形	SA25<SK588<SK579- 587	
SK589	N	Y43 X38	0.60	-	0.13	-	楕形	-	六角主の北壁
SK590	Vl	Y46-47 X37	0.68	-	0.21	-	逆台形	SK590<SK564	
SK591	N	Y44-45 X39	0.94	-	0.18	-	楕形	-	SIの可能性あり
SK592	N	Y40 X36	1.10	0.60	0.14	-	楕形	SK590<SD110	
SK593	N	Y46 X37	0.60	0.45	0.31-0.40	円形	楕形	SK590- SK559- 561	
SK594	Vl	Y32 X36	2.36	-	0.38	-	楕形	-	下層遺構

第7表 性格不明遺構一覧表

性格不明遺構 (SX)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	幅広 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SX16	-	-	-	-	-	-	-		確認済(SX16&SD9堆積土)
SX17	-	-	-	-	-	-	-		SX17は不明
SX18	Vl	Y41-42 X30-31	3.99	1.56	-	-	-	SX18<SK451	
SX19	N	Y28-29 X30-31	-	4.29	1.56	-	-	SX19<六郎塚	

性格不明遺構 (SX)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SX20	N	Y45-46 X39-40	5.31	5.19	0.12~0.26	南北方向	不明	SK523<SK20<SD117-119	
SX21	N	Y44-46 X38-39	12.11	6.25	0.14~0.29	不整形	不明	SK22<SA25-25 SD117 SK501-530-540-546-548-559-562-578-579-601-607	
SX22	N	Y49-50 X38-39	5.08	2.57~2.71	~	不整形	~	SD114<SD121<SK22	
SX23	N	Y50 X34-35	1.32	1.22	1.01	円形	円筒形	SD123 (II) <SX23<SD123 (I)	

第8表 小溝状遺構群一覧表

小溝状遺構群

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
小溝9-1	N'	Y39 X36-37	3.53	0.32~0.49	0.13	南北	矩形	小溝9<SK485	7次調査の北側続
小溝10-1	III	Y31-32 X31	3.26	0.38	0.05	東西	矩形	小溝 (10) -1<P8	小溝10-1-1
小溝10-1	III	Y31-32 X32	2.98	0.32	0.04	東西	矩形	小溝 (10) -2<SK383	小溝10-1-2
小溝10-2	III	Y33 X31	2.06	0.20	0.04	東西	矩形		小溝10-2-1
小溝10-2	III	Y31-32 X32	2.51	0.19	0.04	東西	矩形		小溝10-2-2
小溝11-1	III	Y36 X32	2.96	0.13~0.24	0.05	南北	矩形	-	
小溝11-2	III	Y36 X32-33	5.41	0.18~0.22	0.06	南北	矩形	-	
小溝11-3	III	Y36 X32	1.56	0.23~0.30	0.05	南北	矩形	-	
小溝11-4	III	Y36 X33	2.51	0.15~0.30	0.06	南北	矩形	-	
小溝11-5	III	Y36-27 X33-34	4.91	0.17~0.28	0.06	南北	矩形	-	
小溝11-6	III	Y37 X33	1.36	0.25~0.27	0.10	南北	矩形	-	
小溝12	N	Y40 X35-36	4.87	0.17~0.30	0.02~0.12	東西	矩形	-	1条のみ

第9表 石敷遺構一覧表

石敷遺構

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
石敷10	N	Y28 X32	1.03	0.40	0.03	不整形	-	10号石敷<SK448	
石敷11	N	Y28 X31-32	1.71	0.91	0.03	不整形	-	11号石敷<SK454	
石敷12	III	Y30-31 X40-41	4.34	2.94	-	不整形	-	-	調査区南東部
石敷13	N	Y45 X36	2.08	1.02~1.92	-	不整形	-	-	10次・13次との境
石敷14	III	Y51 X39	8.65	3.30	-	不整形	-	14号石敷<SD114	SD114上面
石敷15	III	Y37~39 X35	6.66	0.78~1.02	-	不整形	-	-	SD112上面
石敷16-1	III	Y37~38 X36	1.80	0.75	-	不整形	-	-	南西側の集石
石敷16-2	III	Y38~39 X36	3.89	0.40	-	不整形	-	-	
石敷16-3	III	Y39 X36	0.73	0.59	-	不整形	-	-	

第10表 壁穴住居跡一覧表

壁穴住居跡 (SI)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SI42	V	Y37 X36-37	2.33	1.71	-	不整形	-	SI42<SD109<SK505	
SI43	V	Y46~47 X39-40	2.42	1.17	-	不整形	-	SI43<SD120	カマド構築材1箇所
SI44	V	Y46~47 X38-39	2.04	1.26	0.28	不整形	-	SI45<SD117	カマド構築材2箇所
SI45	V	Y46~47 X40	1.60	0.78	-	不整形	-	SI45<SD120	
SI46	V	Y47~48 X38-39	3.32	0.50	-	不整形	-	SI46<SD120	
SI47	V	Y43 X36-37	1.50	1.25	-	不整形	-	-	

第11表 井戸一覧表

井戸 (SE)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SE2	III	Y34 X32-33	1.65	0.94	0.10	不整形	-	-	

第12表 ピット一覧表

第10次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	III	Y32 X30	0.55	0.49	0.16	円形	矩形	-	
P2	N	Y32 X30	0.54	0.49	0.18	円形	矩形	-	

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物

第10次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P3	N	Y32 X30	0.63	0.51	0.19	円形	逆台形	-	
P4	N	Y39 X35	0.33	0.31	0.26	楕丸方形	V字形	-	
P5	N'	Y40 X34	0.54	0.46	0.13	円形	楕形	-	
P6	N	Y39 X35	0.45	0.21	0.29	楕丸方形	V字形	-	
P7	N	Y35 X32	0.31	0.25	0.21	円形	-	-	
P8	N	Y32 X31	0.73	0.63	0.18	円形	楕型	-	
P9	N'	Y32 X30	0.36	0.24	0.09	円形	U字形	-	
P10	N	Y33 X31	0.47	0.21	0.90	円形	円柱状	-	
P11	N	Y34 X30	0.21	0.16	-	円形	-	SA20<P11	
P12	VI	Y34 X31	0.21	0.20	-	円形	-	-	
P13	VI	Y34 X30	0.19	0.09	0.32	楕円形	円柱状	-	
P14	VI	Y32 X32	0.30	0.22	-	楕円形	-	-	
P15	VI	Y31 X31	0.21	0.18	-	円形	-	-	
P16	VI	Y31 X31	0.22	0.18	-	円形	-	P16<SX42	
P17	VI	Y31-32 X31	0.29	0.24	-	円形	-	-	
P18	VI	Y31 X32	0.20	0.18	-	不定形	-	SX12<P18	
P19	VI	Y33 X31	0.20	0.07	0.11	円形	V字形	-	
P20	VI	Y32 X31	1.39	0.86	0.58	円形	円柱状	P20<SA382	
P21	VI	Y42 X36	0.50	0.44	-	楕丸方形	-	-	
P22	VI	Y42 X36	0.34	0.29	0.31	円形	円柱状	-	
P23	VI	Y42 X36	0.13	0.13	-	円形	-	-	
P24	VI	Y43 X36	0.34	0.29	-	円形	-	-	
P25	N	Y43 X36	0.38	0.33	-	円形	-	-	
P26	N	Y43 X36	0.25	0.23	-	円形	-	-	
P27	VI	Y41 X36	0.11	0.06	0.25	円形	円柱状	-	
P28	VI	Y43 X36	0.28	0.24	-	楕円形	-	SA9<P28	
P29	VI	Y43 X36	0.23	0.19	-	円形	-	SA9<P29	
P30	N	Y43 X36	0.15	0.12	-	楕円形	-	-	
P31	VI	Y43-44 X36	0.18	0.10	-	楕円形	-	-	
P32	VI	Y43 X36	0.47	0.23	-	楕円形	-	P32<SA9	

第13次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	N	Y25 X31	1.50	0.80	-	円形	-	SK453<P1	
P2	N'	Y25 X30	0.48	0.48	-	不明	-	SK453<P2	
P3	N	Y26 X31	0.37	0.37	-	円形	-	SK438<P3	
P4	N'	Y26 X32	0.34	0.29	-	楕丸方形	-	-	
P5	N'	Y26 X32	0.33	0.26	-	円形	-	-	
P6	N	Y27 X31	0.64	0.49	-	楕円形	-	-	
P7	N'	Y27 X31	0.51	0.37	-	楕円形	U字形	-	
P8	N'	Y28 X30	0.31	0.19	-	円形	U字形	P30<P8	
P9	N'	Y27 X32	0.55	0.51	-	円形	-	SD101<P9	
P10	N'	Y27 X32	0.69	0.52	-	円形	-	SD101<P10	
P11	III	Y40 X30	0.20	0.19	-	円形	-	-	
P12	III	Y39 X31	0.37	0.36	-	円形	-	-	
P13	III	Y39 X33	0.20	0.19	-	円形	-	-	
P14	III	Y39 X33	0.26	0.22	-	円形	-	-	

第13次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P15	III	Y39 X33	0.26	0.26	—	円形	—	—	
P16	III	Y39 X33	0.29	0.32	—	円形	—	P16<SK474	
P17	III	Y39-40 X33	0.44	0.31	—	円形	—	—	
P18	III	Y39 X34	0.23	0.21	—	円形	—	—	
P19	III	Y38 X34	0.36	0.33	—	円形	—	—	
P20	III	Y40 X33	0.35	0.32	—	円形	—	—	
P21	III	Y44 X31	0.28	0.29	—	円形	—	—	
P22	III	Y44 X31	0.53	0.45	—	楕円形	—	—	
P23	IV	Y24 X30	0.44	0.28	—	楕円形	—	SD100<P23	
P24	IV	Y24 X30	0.19	0.17	—	楕円形	—	SD100<P24	
P25	IV	Y25 X30	0.63	0.60	—	円形	—	—	
P26	IV	Y25 X30	0.41	0.39	—	楕円形	—	SA15<P26	
P27	IV	Y25 X31	0.22	0.19	—	円形	—	P27<SK443	
P28	IV	Y25 X31	0.28	0.24	—	円形	—	P28<SK443	
P29	VII	Y24 X31	0.96	0.81	—	円形	—	SD100<P29	
P30	VII	Y25 X32	0.51	0.60	—	楕円形	—	—	
P31	VII	Y25 X32	0.42	0.32	—	楕円形	—	—	
P32	VII	Y26 X30	0.22	0.16	—	円形	—	SA15<P32	
P33	VII	Y26 X30	0.48	0.43	—	円形	—	SA15<P33	
P34	VII	Y28 X29	0.32	0.27	—	円形	—	SK458<P34	
P35	VII	Y28 X29	0.48	0.36	—	円形	—	—	
P36	VII	Y28 X30	0.29	0.18	—	円形	—	—	
P37	VII	Y28 X30	0.45	0.44	—	円形	—	—	
P38	VII	Y28 X30	0.33	0.27	—	円形	—	P39<P38	
P39	VII	Y28 X30	0.31	0.17	—	円形	—	P39<P6-38	
P40	VII	Y27 X31	0.35	0.29	—	楕円形	—	—	
P41	VII	Y26 X32	0.91	0.87	—	円形	—	—	
P42	VII	Y27 X32	0.31	0.28	—	円形	—	—	
P43	VII	Y27 X32	0.21	0.21	—	円形	—	—	
P44	VII	Y27 X32	0.41	0.40	—	円形	—	—	
P45	VII	Y27 X32	0.57	0.51	—	円形	—	—	
P46	VII	Y28 X32	0.45	0.40	—	円形	—	—	
P47	VII	Y40 X30	0.44	0.33	—	円形	—	—	
P48	VII	Y44 X36	0.26	0.26	—	円形	—	SA49<P48	
P49	VII	Y32 X35	0.32	0.30	—	円形	—	P50<P49	
P50	VII	Y32 X35	0.34	0.31	—	円形	—	P50<P49	
P51	VII	Y32 X34	0.47	0.34	—	楕円形	—	—	
P52	IV	Y25 X31	0.63	0.12	0.47	不明	U字形	—	
P53	V	Y24 X32	0.93	—	0.83	不明	U字形	P53<SK436	
P54	VII	Y26 X31	L32	—	0.37	不明	U字形	—	
P55	IV	Y26 X30	0.64	—	0.22	不明	楕形	P55<SB14櫛11	

第14次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	IV	Y41 X36	0.61	0.18	0.23	円形	円筒	SK489-490<P1	
P2	IV	Y52 X33	0.58	0.52	—	円形	—	—	
P3	IV	Y48 X38	0.31	0.28	—	楕円形	—	櫛右3<P3	

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物

第14次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P4	N	Y51 X34	0.52	0.43	—	円形	—	SA18<P4	
P5	N'	Y50 X32-33	0.53	0.27	—	半円形	—	—	
P6	N'	Y49 X38	0.16	0.14	—	円形	—	SA20<P6	
P7	N'	Y49 X38	0.18	0.16	—	円形	—	SA20<P7	
P8	N	Y51 X34	0.50	0.46	—	円形	—	SA18<P8	
P9	N	Y49 X34	0.14	0.12	—	円形	—	—	
P10	N'	Y49 X38	0.17	0.14	—	円形	—	—	
P11	N'	Y49 X38	0.18	0.08	—	円形	—	SA20<P11	
P12	V1	Y47 X41	0.19	0.18	—	円形	—	—	
P13	V1	Y47 X41	0.13	0.10	—	円形	—	—	
P14	V1	Y47 X40	0.26	0.23	—	円形	—	—	
P15	V1	Y46 X40	0.25	0.22	—	円形	—	P16<P15	
P16	V1	Y46 X40	0.29	0.11	—	円形	—	P16<P15	
P17	V1	Y46 X40	0.21	0.20	—	円形	—	—	
P18	V1	Y46 X40	0.29	0.11	—	半円形	—	P18<複瓦	
P19	V1	Y46 X40	0.23	0.19	—	円形	—	—	
P20	V1	Y46 X40	0.34	0.30	—	円形	—	P20<複瓦	
P21	V1	Y45 X40	0.44	0.40	—	円形	—	P22<P21	
P22	V1	Y45 X40	0.32	0.22	—	円形	—	P22<P21	
P23	V1	Y47 X40	0.28	0.26	—	円形	—	—	
P24	V1	Y42 X36	0.48	0.11	—	不明	—	P24<SD110-P29	
P25	N'	Y50 X38	0.30	0.12	—	不明	—	SA20<P25<SK329	
P26	N'	Y49 X38	0.15	0.14	—	円形	—	—	
P27	V1	Y37 X37	0.43	0.25	—	円形	—	—	
P28	V1	Y37 X36	0.40	0.35	—	円形	—	—	
P29	V1	Y42 X36	0.62	0.29	—	円形	—	SD110-P24<P29-P84	
P30	N'	Y39 X37	0.16	0.12	—	不明	半円形	SB5-P12<P30-SB5-P11	
P31	V1	Y46 X32	0.29	0.23	—	橢円形	—	SK584<P31	
P32	V1	Y38 X36	0.25	0.21	—	円形	—	—	
P33	N'	Y38 X36	0.44	0.39	—	円形	—	SK308-509-P33	
P34	V1	Y38 X36	0.26	0.27	—	円形	—	P34<SK530	
P35	N'	Y49 X34	0.16	0.16	—	円形	—	SA18<P35	
P36	V1	Y46 X40	0.17	0.08	—	円形	—	P36<SK514	
P37	V1	Y47 X40	0.30	0.28	—	円形	—	—	
P38	V1	Y47 X40	0.26	0.35	—	円形	—	—	
P39	N'	Y47 X39	0.38	0.20	—	不明	—	SD120<P39	
P40	N'	Y52 X36	0.48	0.33	—	円形	—	—	
P41	N'	Y45 X37	0.20	0.18	—	円形	—	—	
P42	N'	Y45 X37	0.29	0.29	—	円形	—	—	
P43	N'	Y45 X36	0.24	0.19	—	円形	—	—	
P44	N'	Y45 X37	0.17	0.15	—	円形	—	P44<P45	
P45	N'	Y45 X37	0.10	0.09	—	円形	—	P44<P45	
P46	N'	Y38-39X37	0.46	0.40	—	円形	—	P46<SB5-P10	
P47	V1	Y42 X37	0.28	0.25	—	円形	—	—	
P48	N'	Y39 X36-37	0.21	0.19	—	円形	—	P48<SB5-P6	
P49	V1	Y50 X37	0.62	0.29	—	円形	—	SD126<P49	

第14次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P50	VI	Y50 X37	0.30	0.21	—	円形	—	—	
P51	VI	Y49 X37	0.23	0.21	—	円形	—	—	
P52	IV	Y50 X37	0.39	0.24	—	円形?	円筒	—	
P53	IV	Y32 X36	0.40	0.22	0.18	円形	半円	—	
P54	IV	Y50 X38	0.08	0.08	—	円形	—	—	
P55	VI	Y48 X32	0.21	21.00	—	円形	—	—	
P56	VI	Y47 X32	0.18	0.13	—	円形	—	—	
P57	VI	Y47 X32	0.27	0.25	—	円形	—	—	
P58	VI	Y46 X32	0.33	0.18	—	円形	—	SK584<P58	
P59	IV	Y50 X33-34	0.38	0.33	—	円形	—	—	
P60	IV	Y49 X33	0.29	0.26	—	円形	—	—	
P61	IV	Y39 X36	0.41	0.31	—	方形?	—	SD112<P61	
P62	VI	Y39 X37	0.34	0.29	—	椭円形	—	—	
P63	IV	Y44 X37	0.16	0.15	—	円形	—	—	
P64	IV	Y44 X37	0.20	0.18	—	円形	—	SA24	
P65	IV	Y31 X34	0.32	0.24	—	円形	—	SA18<P65	
P66	VI	Y41 X36	0.23	0.17	—	円形	—	—	
P67	IV	Y39 X36	0.27	0.17	—	椭円形	—	SE5-P4-P67<小溝9-1	
P68	VI	Y43 X37	0.30	0.26	—	円形	—	—	
P69	IV	Y47 X39	0.36	0.21	—	円形	—	—	
P70	VI	Y42 X37	0.22	0.18	—	円形	—	—	
P71	VI	Y43 X37	0.15	0.13	—	円形	—	—	
P72	IV	Y49 X38	0.18	0.16	—	円形	—	—	
P73	IV	Y47-48 X40	0.28	0.26	—	円形	—	—	
P74	VI	Y43 X37	0.18	0.14	—	円形	—	—	
P75	IV	Y44 X36	0.32	0.30	—	円形	—	SA9<P75	
P76	IV	Y32 X34	0.14	0.14	—	円形	—	—	
P77	IV	Y45 X37	0.26	0.21	—	円形	—	P77<P78	
P78	IV	Y45 X37	0.45	0.24	—	椭円形	—	P77-P78-SA24	
P79	IV	Y45 X37	0.12	0.11	—	円形	—	P80<P79	
P80	IV	Y45 X37	0.53	0.31	—	右円形	—	SK519<P80>P79	
P81	IV	Y45 X37	0.30	0.28	—	円形	—	—	
P82	IV	Y45 X37	0.23	0.19	—	円形	楕形	—	
P83	IV	Y46 X36	0.25	0.24	—	円形	—	—	
P84	VI	Y42 X36	0.47	0.39	—	不整椭円形	—	SD110<P84	
P85	IV	Y47 X38-39	0.46	0.10	0.23	半円形	—	SK568<P85	
P86	IV	Y47 X38	0.53	0.45	—	円形	—	—	
P87	IV	Y51 X34	0.50	0.24	—	円形	半円	—	
P88	VI	Y45 X40	0.32	0.30	—	椭円形	—	P89<P88>90	
P89	VI	Y45 X40	0.25	0.13	—	椭円形	—	P88<P89	
P90	VI	Y45 X40	0.42	0.21	—	円形	—	P90<P88-P90-P91	
P91	VI	Y45 X40	0.58	0.25	—	方形	半円	P90<91	
P92	IV	Y47 X39	0.59	0.46	—	円形	—	—	
P93	IV	Y31 X39	0.37	0.14	—	椭円形	半円	—	
P94	IV	Y46 X37	0.14	0.12	—	椭円形	—	—	

第4節 その他の遺構・基本層からの出土遺物

第14次調査ピット (P)

遺構名	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P95	N	Y46 X40	0.13	0.10	—	円形	—	SX20<P95	
P96	N	Y46 X40	0.16	0.15	—	円形	—	SX20<P96	
P97	V1	Y47 X40	0.29	0.24	—	円形	—	SD120<P97	
P98	V1	Y46 X40	0.22	0.15	—	楕円形	—	P98<SD45	
P99	N	Y49 X35	0.41	0.39	—	円形	—	—	
P100	N	Y49 X34~35	0.16	0.16	—	円形	—	—	
P101	N	Y49 X34	0.16	0.08	—	円形	—	P101<P102	
P102	N	Y49 X34	0.14	0.05	—	円形	—	P101<P102	
P103	N	Y49 X34	0.13	0.13	—	円形	—	—	
P104	N	Y51 X38	0.24	0.18	—	円形	—	—	
P105	V1	Y50 X41	0.20	0.12	—	円形	—	—	
P106	N	Y49 X35	0.14	0.13	—	円形	—	—	
P107	N	Y52~53 X34	0.39	0.28	0.12	楕円形	—	SK560<P107<P108	
P108	N	Y52 X34	0.12	0.12	0.09	半円	—	P107<P108	
P109	N	Y50 X34	0.51	0.32	—	円形	—	—	
P110	N	Y52 X34	0.21	0.21	—	円形	—	—	
P111	N	Y49 X34	0.86	0.68	—	円形	—	—	
P112	N	Y45 X37	0.10	0.10	—	円形	—	—	
P113	N	Y45 X37	0.33	0.20	—	楕円形	—	P114<P113	
P114	N	Y45 X37	0.59	0.21	—	長楕円形	—	P114<P113	
P115	N	Y51 X39	0.40	0.38	—	円形	—	—	
P116	N	Y44 X37~38	0.56	0.50	—	円形	—	SK542<P116	
P117	N	Y51~52 X34	1.48	1.46	—	不規則	—	—	

第13表 六郷堀跡

六郷堀跡

遺構名	層位	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	方向	断面形	重複関係	備考
六郷堀跡	N	南北方向 Y36~Y49 +X28~X29 +Y43~Y53 +X29~X32	23.00	断面1.50~2.00 表込め・掘り方約4.00~5.00	1.70	南北	逆台形	河川跡<六郷堀跡	部分的に礫石・整石が残存。 南北から東西に流れる。 新旧2時間がみられる。
		東西方向 Y26~Y29 +X30~X34	77.00	断面約1.80 掘り方幅約5.90	2.00	東西			

第14表 河川跡

河川跡

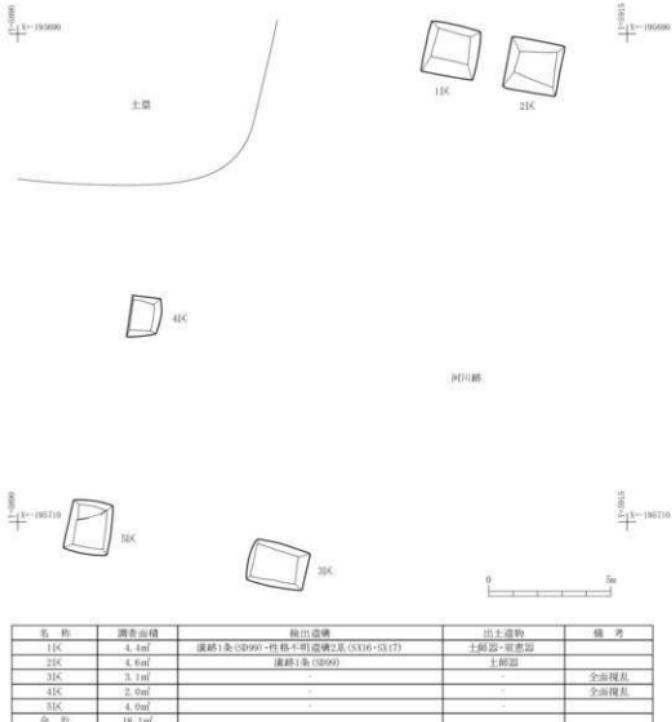
遺構名	層位	グリッド	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	方向	断面形	重複関係	備考
河川跡	V1	Y30~36 Y38~41 Y46~53 +X28~X34	90.00	7.00~14.00	1.40	—	—	河川跡<六郷堀跡	域内を大きく航行しながら流れれる。

第7章 第12次調査の検出遺構と出土遺物

第1節 調査の方法と経過

第12次調査は刑務所第二正門東側、仮設の門基礎部分5か所を対象とした調査である。

調査位置の設定を平成24年1月10日に行い、1区～5区の5つの調査区を設定した。その後1区から敷設していたブロックやアスファルトの除去を行い、引き続き重機によりI層を掘削した。盛土下においてⅢ層やⅣ層、さらに若林城造営以前の遺構プランを確認した地区においては、確認時点で写真や一部図面で記録し、その後、重機や手掘りにより整地土や遺構堆積土の掘削を進めた。確認した遺構にはこれまでの調査で確認している遺構に続き、種類ごとに遺構番号を付した。整地土や遺構を完掘した後、1月12日に各調査区の位置計測、全体写真的撮影、遺構平面図や層の断面図作成と土層記録等を行った。1月12日に全ての調査を終了し、調査区の復旧、機材の撤収を行った。



第94図 第12次調査区位置図

第2節 検出遺構

各調査区ごとに記述する。なお、基本層については本書第4章と同様である。

1区 Y22・X38～X39グリッドに設定した（第94・95図）。

1層下の全面に人為堆積土を確認した。断面観察の結果、堆積土は重複する3つの遺構に伴うものであることを確認した。遺物は、1区のSD99もしくはSX17の堆積土中より土師器1点と須恵器2点が出土した。

99号溝跡（SD99）（第95図）

位置 東壁で検出した。

方向 N-22°-Wである。

重複 SX16より古く、SX17より新しい。

堆積土 1層を確認した。径が3cm以下の褐色シルトブロック・明褐色シルトブロック・暗褐色シルトブロックにより人為的に埋め戻されており、下半部ほどブロック径が大きい。

構造 壁面観察では北壁はやや緩やかな立ち上がりなのにに対し、南壁は下半部が急で、上半部は西側に平坦気味となる。底面は東に僅かに傾斜している。北壁と南壁の立ち上がり状況が異なるが、北壁は本来急な壁面であったものが崩れたと考えられる。また2区では同じ溝跡の東壁面を確認している。

SD99はSD100の延長に位置するため同一の遺構の可能性がある。

16号性格不明遺構（SX16）（第95図）

位置 西壁と南壁で検出した。

方向 SD99とはほぼ同様の方向と考えられる。

重複 SD99-SX17より新しい。

堆積土 2層を確認した。

1層は人為堆積土で、上半部に黄褐色シルトブロック、下半部に暗褐色シルトブロックを多量含む。

2層は底面近くの厚さが5～10cmのグライ化した層で、暗褐色シルトブロックを含む。

構造 1層下で確認した人為堆積土はこの遺構の上部とみられる。壁面は下半部が急なのにに対し上半部は緩やかで、底面はほぼ平坦、深さは約70cmである。

SX16とSD99の堆積土は、類似するがプランの確認状況から同一の遺構ではない。SD99が完全に埋め戻された後にSX16が新たに掘られ、これもまた埋め戻されたと考えられる。

17号性格不明遺構（SX17）（第95図）

位置 1区全面で検出した。

重複 SD99-SX16より古い。

堆積土 1層を確認した。1層はにぶい黄褐色シルトブロックと暗褐色シルトブロックによる人為的堆積土で、層厚は75cm以上あったと考えられるが、上部をSD99やSX16により削平されている。層底面は北西側がやや高く、南東側に低くなっているがほぼ平坦面で、起伏はほとんど無い。

構造 壁面等の立ち上がりが全く確認できなかったことから、規模・方向は不明である。

堆積土は分層されず、一時期に埋められた状況から、整地土とは違い何らかの掘り込まれた遺構と考えられる。

2区 Y22～23・X38～39グリッドに設定した（第94・95図）。

I層下の南西側全体に人為堆積土、北東側にVI層を確認し、北東隅部は搅乱で削平されている。1区のSD99との位置関係から、人為堆積土の入るプランはSD99の東側壁面部分と考えられる。これにより両区で確認したSD99の幅は3m程度である。以下に確認した遺構の概要を述べていく。

99号溝跡（SD99）（第94・95図）

位置 東壁で検出した。

方向 N-22°-Wである。

堆積土 3層を確認した。

1層は褐色シルトブロックと暗褐色シルトブロックで、1区の1層に対応するとみられる。

2層は褐色シルトブロックと暗褐色シルトブロックで、ブロック径がやや大きめである。

3層は溝底面の一部にみられる厚さ4cm程度の薄い層で、グライ化しシルトブロックを含まないことから自然堆積層の可能性もある。

構造 南壁でみる溝跡の壁面は45°程度の立ち上がりであるが、北側ではやや急となり、一部オーバーハングしている。これは1区のSD99と同様に当初は急な壁面が後に崩れたと考えられる。底面までの深さは最も深い部分で1.2mあり、底面はほぼ水平で平坦であるが、東壁際の一部が抉れている。

南端部で東へ僅かに屈曲するような様子をみせるが、判然としない。遺物は2区のSD99堆積土中より土師器1点が出土した。

3区 Y20～21・X43グリッドに設定した（第94図）。

西半部全体が搅乱で削平されており、東半部でVI層を確認した。VI層上面で遺構は確認できず、断面観察でもその上部に整地土等は確認できなかった。

4区 Y19～20・X41グリッドに設定した（第94図）。

I層地表面にはガス管や排水管等が多数配置され、西半部は搅乱で削平されていた。南東部の狭い範囲で地山VI層を確認した。VI層上面で遺構は確認できず、断面観察でも整地土等は確認できなかった。

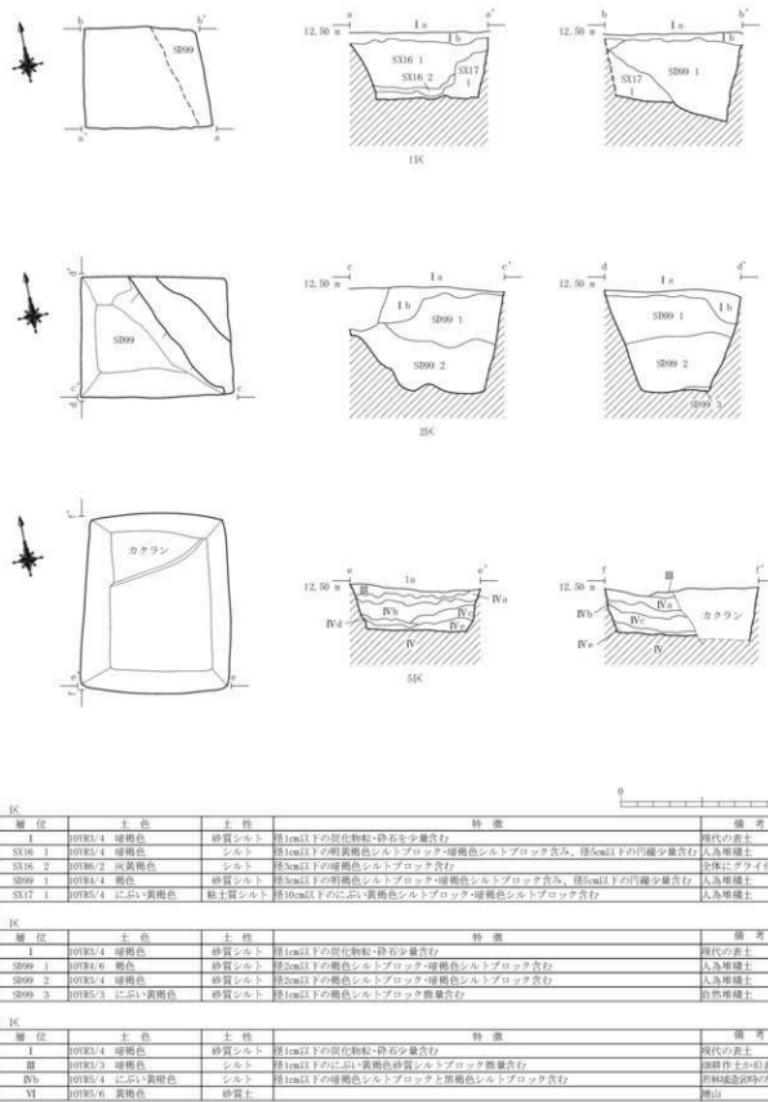
5区 Y19・X42～43グリッドに設定した（第94図）。

I層下にIII層を確認した。北側は搅乱で削平されている。III層下で人為堆積土を確認した。人為堆積土下でVI層を確認したが、遺構は確認できなかった。

断面観察の結果、5区の人為堆積土は1・2区で確認したSD99やSX16・17にみられたような人為堆積土とは異なり、土を幾度かにわたりほぼ水平に積んだものであることを確認した。この堆積状況はこれまでの城内の調査で確認されている整地上IV層と類似していることからIV層と判断した。

5区における整地土の厚さは50～55cmあり、これまで確認した御殿を構成する大型建物下に敷かれた整地土の厚さと比較して厚いものである。これについては近世耕作による整地土上面の搅拌が浅かったなどの理由も考えられるが、この地区的整地はより深くVI層を削り込み、再び敷き均すことで厚い掘り込み地業を行っている可能性がある。

第2節 検出造構



第95図 第12次調査 1・2・5区

第8章 第15次調査の検出遺構と出土遺物

第1節 調査の方法と経過

第15次調査は北収容棟外構を対象とした調査である。調査位置の設定を平成30年10月4日に行いTr1～9の9つの調査区を設定した。

重機掘削は10月12日に1区より開始し、11月7日に終了した。掘削に際しては可能な限り搅乱を除去した。

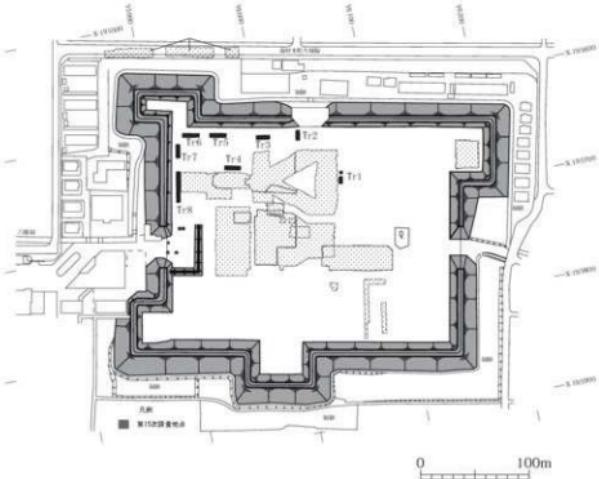
Tr1は既存建物や既設管の影響により、北をTr1-1、南をTr1-2として分割して調査を行った。Tr9については、既設管が複数設され、また上空に架線が存在したため、仙台市教育委員会と宮城刑務所の協議の結果、南半分の調査を行わず、Tr9とTr8を接続し、合わせてTr8として調査を進めることとした。

10月12日から重機掘削と併行して人力による搅乱掘削・壁面整形を開始した。その後Ⅲ層・Ⅳ層の確認と遺構検出を行った。記録作業については、遺構検出作業と併行して順次行った。

10月23日からは、遺構調査と併行して調査を終了したトレーンチの埋め戻し作業を開始した。埋め戻しの方法や砕砂の厚さについてもこれまでの調

査と同じ方法で行い、遺構の保護に努めた。ただし、Tr3の搅乱部分とTr5・6についてはⅢ層・Ⅳ層面及び遺構が確認できなかったため、掘削面の目印として薄く砕砂を敷き均し、その上から掘削土で現地表面と同じ高さまで埋め戻した。Tr1-8については、砕砂で保護した上に現地表面と同じ高さまで掘削土で埋戻した。

11月30日までに全ての調査区の埋め戻し・保護作業を終了した後、発掘器材や場内・場外プレハブ等の撤収を行い、野外作業を全て終了した。



第96図 第15次調査区位置図

第15表 第15次調査区一覧表

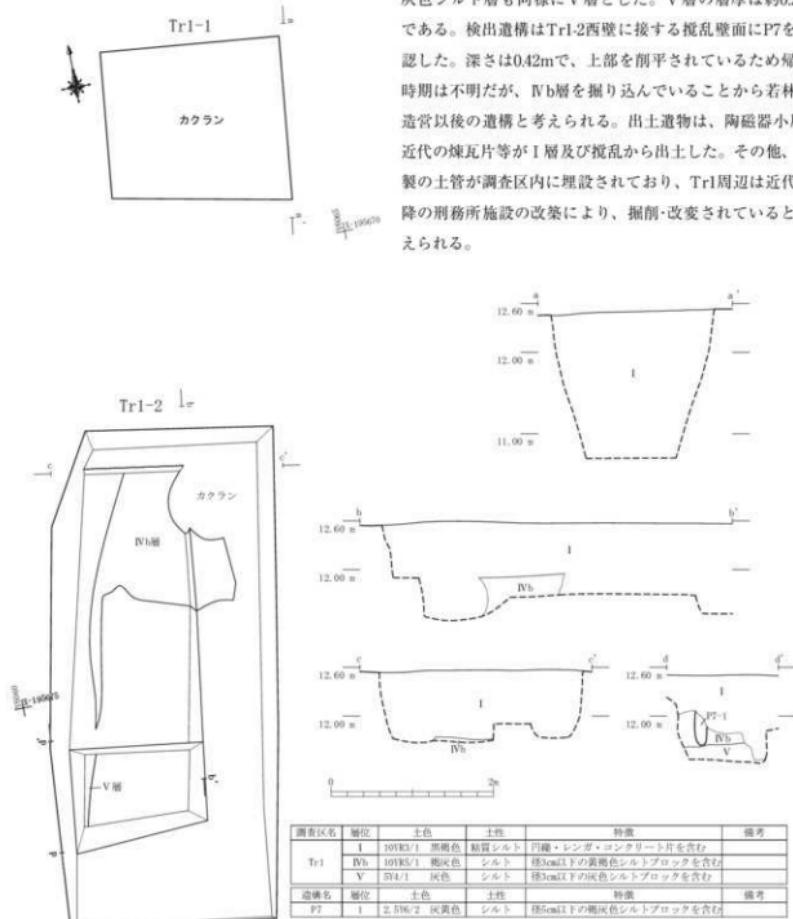
名称	調査面積	調査期間	検出遺構・その他	出土遺物	備考
Tr1	20.6 m ²	10月12日～10月15日	ピット1基	—	—
Tr2	27.9 m ²	10月15日～10月18日	河川跡	—	—
Tr3	37.1 m ²	10月16日～10月22日	ピット1基	—	—
Tr4	44.2 m ²	10月19日～11月19日	廻縁2条(SAT-SA20・ピック6基・河川跡)	調文土器・土師器・土焼質土器・瓦・陶磁器	全面発見
Tr5	45.6 m ²	10月22日～10月25日	—	—	全面発見
Tr6	44.5 m ²	10月30日～11月14日	—	—	全面発見
Tr7	30.3 m ²	10月30日～11月8日	廻穴住居跡(古墳時代～古代)2基(SA48・49)・七柱(古墳時代～古代)5基(SA54～58)・ピット7基	調文土器・土師器・土焼質土器	全面発見
Tr8	87.8 m ²	10月26日～11月15日	廻縁2条(SA15)・廻立柱建物跡2基(AB13)・廻縁2条(SD100・SD140)・捷石跡1基・ピット13基	瓦・丸瓦・平瓦・剪力瓦・輪造瓦	全面発見
合計	336 m ²				

第2節 検出遺構と出土遺物

(1) Tr1 (第97図)

Y53・X34～36グリッドに設定した。第14次調査東端部に近接し、北側をTr1-1、南側をTr1-2と呼称した。既設管等の近現代の搅乱により大部分を削平されていたが、Tr1-2ではH=11.6m付近で残存するIV層、南側搅乱下にV層を確認した。IV層の層厚は約0.3mを測る。黄褐色ブロックが多量に混在する褐色シルトであり、IVb層に相当する。V層は本道跡においても検出される範囲が限定的であるが、近接する第14次調査区東側で部分的に確認されて

おり、土質・色調等の観察からTr1-2の搅乱下に確認された灰色シルト層も同様にV層とした。V層の層厚は約0.2mである。検出遺構はTr1-2西壁に接する搅乱壁面にP7を確認した。深さは0.42mで、上部を削平されているため帰属時期は不明だが、IVb層を掘り込んでいることから若林城造営以後の遺構と考えられる。出土遺物は、陶器小片、近代の煉瓦片等がI層及び搅乱から出土した。その他、陶製の土管が調査区内に埋設されており、Tr1周辺は近代以降の刑務所施設の改築により、掘削・改変されていると考えられる。



第97図 Tr1

(2) Tr2 (第98図)

Y46~47・X25~27グリッドに設定した。第14次調査北端部に近接する。調査区全体で第10・13・14次調査で検出した河川跡を確認した。

河川跡（第98図）

位置 Y46~47・X25~X27グリッドで検出、第10・13・14次調査で確認された河川跡と同一の遺構と考えられる。

方向 調査区全体で河川跡を検出したため、方向は不明である。

規模 深さはⅡ層下から約1.90mを測る。調査区南北端部に明確な立ち上がりは確認されなかったため14次を含む河川両岸の幅は不明であるが、調査区底面でVI・VII層を確認したため、河床部付近を掘削したと考えられる。第13次調査2区では北東方向へ及び、第14次調査区北東部では弧状の南岸部分を確認していることから、本調査区を含む河川跡の推定流路は広範囲に蛇行し、軸を変えながら北側土堤付近まで広がっていたと考えられる。

重複関係 上層からの掘り込みは確認されなかった。

堆積土 黄褐色シルトブロックや褐灰色シルトブロック、黒褐色シルトブロックの混入度合い・土質等から20層に分層した。シルトブロックを多量に含むことからこれらの層は人為的堆積土と考えられ、当河川跡は若林城造営時に埋められたと考えられる。各堆積土については以下のとおりである。

1層は褐灰色シルトで、黄褐色・褐灰色シルトブロックを多量に含む。

2層は褐灰色シルトで、黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む。1層に類似するが、ブロックの径がやや小さい。

3層はにぶい黄褐色粘質シルトで、褐灰色シルトブロックと径5cm以下の細かな円礫を含む。

4層は灰黄褐色シルトで、褐灰色シルトブロックを多量に含む。

5層は灰黄褐色シルトで、褐灰色シルトブロックを多量に含む。4層と比較してやや暗い色調を呈する。

6層は褐色シルトで、褐灰色シルトブロックを少量含む。

7層は灰黄褐色砂質シルトで、細かな褐灰色シルトブロックを少量含む。

8層は黄褐色シルトで、褐色・褐灰色シルトブロックを多量に含む。

9層は褐灰色シルトで、黒褐色シルトブロックを多量に含む。

10層は褐灰色粘質シルトで、細かな黒褐色・灰褐色シルトブロックを多量に含む。

11層はにぶい黄褐色シルトで、黒褐色・褐灰色シルトブロックを多量に含む。

12層は灰黄褐色シルトで、黒褐色・褐灰色シルトブロックを含む。

13層は褐灰色粘質シルトで、褐灰色シルトブロックを中量、褐灰色砂質シルトブロックを少量含む。

14層は黄褐色粘質シルトで、褐灰色シルトブロックを少量含む。

15層は灰白色シルトで、褐灰色シルトブロックを多量に含む。

16層は黄褐色粘質シルトで、褐灰色・灰白色シルトブロックを多量に含む。

17層はにぶい黄橙色シルトで、褐灰色シルトブロックを多量に含む。

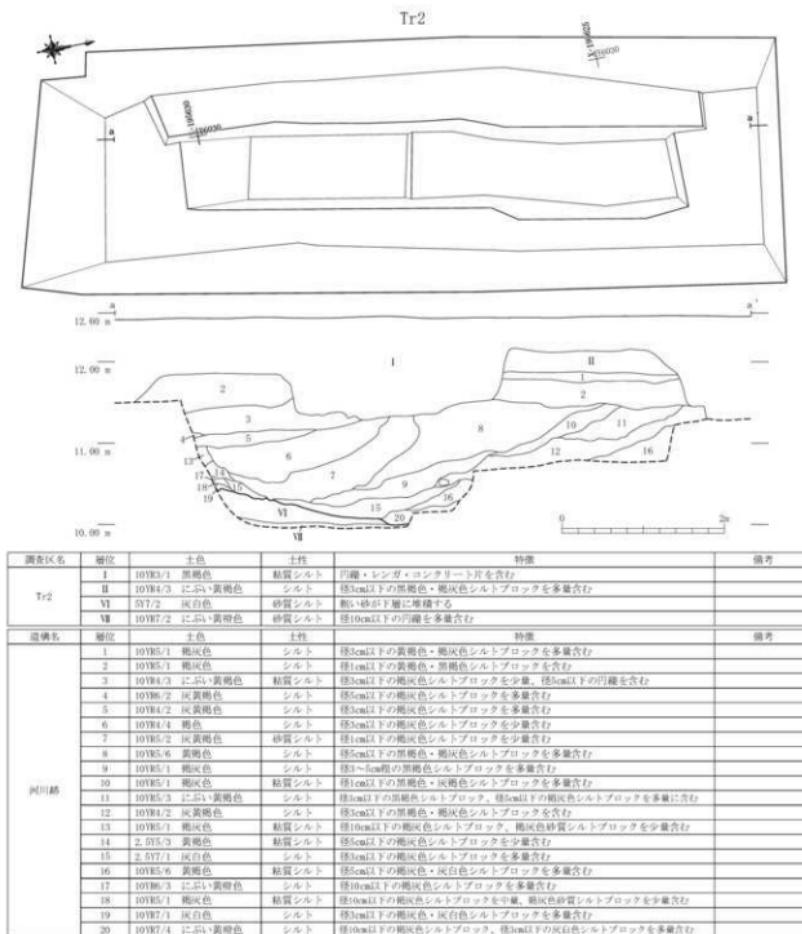
18層は褐灰色粘質シルトで、褐灰色シルトブロックを中量、褐灰色砂質シルトブロックを少量含む。

19層は灰白色シルトで、褐灰色・灰白色シルトブロックを多量に含む。

20層はにぶい黄橙色シルトで、褐灰色・灰白色シルトブロックを多量に含む。

構造 内部はシルトブロックを多量に含む人為的堆積土によりVI層直上まで埋められていた。4層以下の埋め土は斜面堆積土に傾斜する様相がみられ、中でも6~16層については北から南に傾斜することから、北側から土が投げ込まれたと考えられる。上層に堆積する1~3層については、前述の4層以下と比較してしまが強く、平面的に堆積していることから、河川埋没後の整地のために敷き均された層の可能性も考えられるが、本遺跡の整地土を示すIV層とは、混在するブロックや鉄分の沈着等で土質に差異が認められるため、河川埋め立て時の堆積層と考えられる。

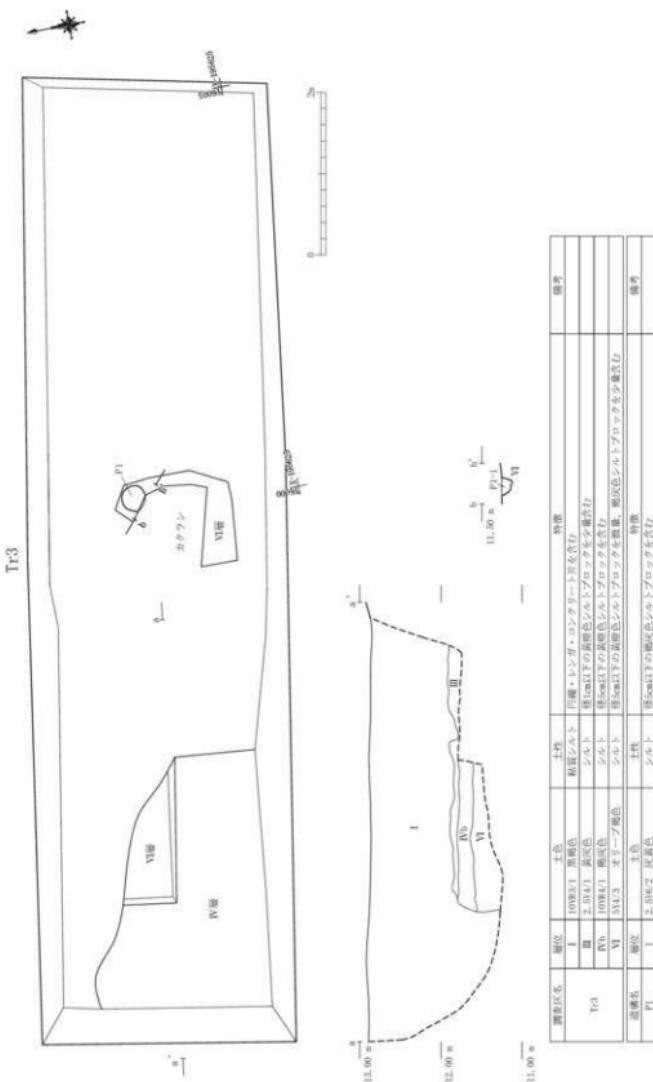
出土遺物 出土していない。



第98図 Tr2

(3) Tr3 (第99図)

Y39~42・X25~26グリッドに設定した。Tr2より約25m西側で、第13次調査2区北端部に近接する。調査区東側～中央は搅乱に削平されていたが、調査区西側でⅢ層、Ⅳ層を確認した。層厚はⅢ層で約0.1m、Ⅳ層で約0.2mである。各層上面から遺構は検出されなかった。また、調査区中央の搅乱下でVI層を確認し、PIを検出した。規模は径0.30mの円形で南端部は搅乱により削平されている。断面形は皿状を呈する。堆積土は褐灰色シルトブロックを含む灰黄色シルトで、遺物は瓦片が出土した。遺構外の遺物は搅乱より陶磁器小片・瓦片が出土した。



第99図 Tr3

(4) Tr4 (第100~102図)

Y32~35・X29~30グリッドに設定した。第10次調査の北側に近接する。調査区西側は搅乱により削平されていて、調査区中央~東側ではⅢ層とⅣ層を確認した。Ⅲ層とⅣ層の残存状況は他の調査区と比較して良好であった。Ⅲ層上面で遺構は確認されなかったが、Ⅳ層上面で堀跡2条 (SA7・26)、ピット5基 (P2~6) を検出した。また、北壁に並行して設定したサブトレーンチ下部で河川堆積層とみられるシルト層を確認し、第10次調査1区で検出した河川跡の延長を確認した。東壁面では、若林城築城時の整地土であるⅣb層の上面に、間層(1層)を挟んで瓦片を少量含むⅣa層を確認した。遺物はⅠ~Ⅲ層中から土師器、土師質土器、陶磁器、瓦等の小片と、焼壙壺底部が出土している。このうちⅢ層出土の焼壙壺1点を図示した。1は焼壙壺の底部である。底部は回転糸切によって切り離されているが、全体が磨滅しているため糸切痕は判然としない。体部下端はケズリ調整が施され、外面は直線的に立ち上がる。底部は厚く、内面は平坦である。

7号堀跡 (SA7) (第100~101図)

位置 Y34~35・X30グリッドで南北方向の堀跡を検出した。第10次調査1区で確認されたSA7の延長と考えられる。

方向 N-15°-Eで六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ2.10m、幅0.65m、深さは0.93mであり、北側は調査区外に延びる。第10次調査で確認したものと含めた長さは7.80mである。断面形は壁面がほぼ垂直に立ち上がるが、1層の上部から緩やかに立ち上がる。底面は平坦である。

重複関係 SA26より新しい。

堆積土 3層を確認した。1~3層はシルトブロックを含む人の堆積土である。1・2層はⅣ層に類似するが比較して混入するブロックの径が小さい。3層は河川跡の砂質シルト層を掘り込むことから、混入するブロックがやや砂質になる。各堆積土については以下のとおりである。

1層は黒褐色粘質シルトで、黄橙色・黒褐色シルトブロックを含む。

2層は黒色粘質シルトで、黄橙色シルトブロックを多量に含む。

3層は暗灰黄色シルトで、黄橙色シルトブロックを含む。2層に類似するが、砂質を帯び、ブロック径がやや大きい。

構造 平面上には掘り方内部の柱痕や側柱の存在は確認されなかったが、上部の壁が緩やかに立ち上がることから、柱が抜き取られた可能性がある。

出土遺物 遺物は2層から土師質の土器片が出土した。

26号堀跡 (SA26) (第100~101図)

位置 Y35・X30グリッドで東西方向の堀跡を検出した。

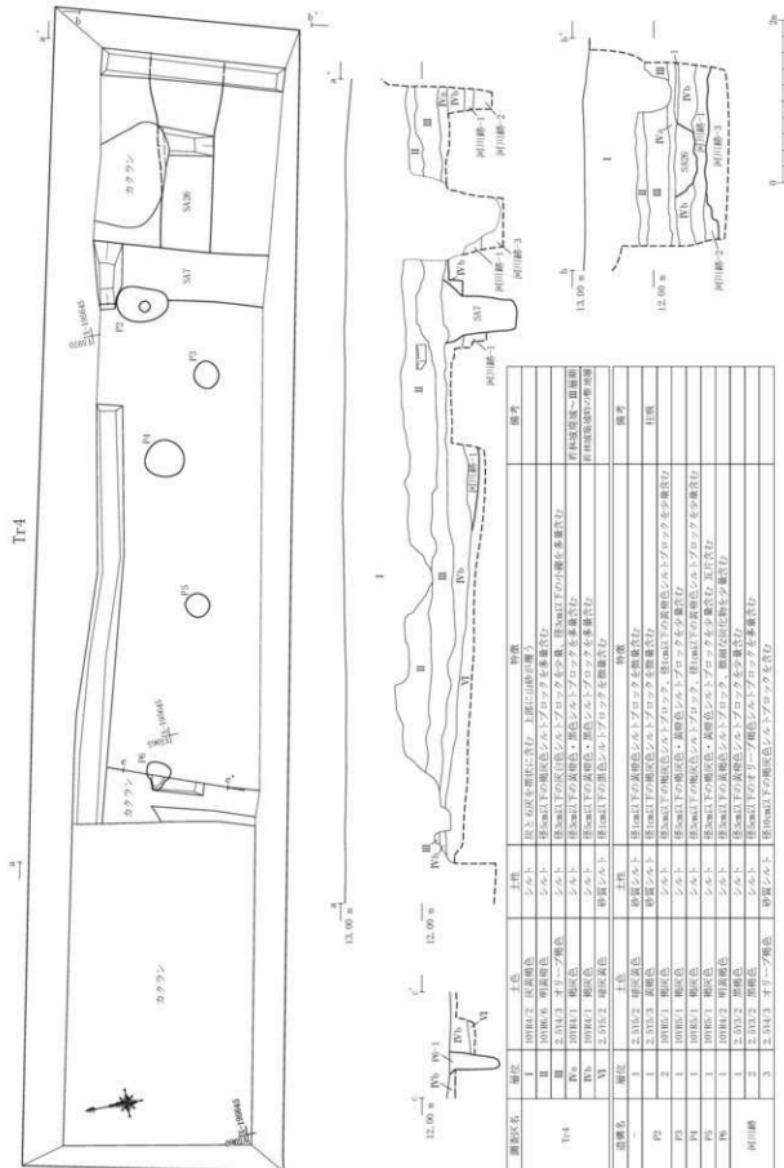
方向 N-75°-Wで六尺五寸の方眼に一致し、SA7に直交する。

規模 7号堀跡との接続部からの規模は、長さ2.30m、幅0.70~0.90m、深さは中央部で0.76m、東壁で0.28mであり、東側が高くなっている。断面形はU字形を呈する。

重複関係 西側でSA7に接続する。

堆積土 5層を確認した。1~3層は砂質シルト・シルトで、1層は調査区東壁でⅣa・Ⅳb層の間に堆積していた間層(東壁1層)に類似する。4・5層は、黄褐色・黒褐色シルトブロックを含む粘土層であり、Ⅳb層に類似しているが、比較して4層はシルトブロックの径がやや小さく、混入量が多量で集中していること、中央のサブトレーンチ部で5層が旧河川跡を直線的に掘り込む様相を確認したことから、Ⅳb層とは異なる層として本遺構の堆積土とした。各堆積土については以下のとおりである。

1層は暗灰黄色シルトで、黄橙色・褐色シルトブロックを少量含む。



第100図 Tr4

2層はにぶい黄色砂質シルトで、褐色シルトブロックを少量含む。

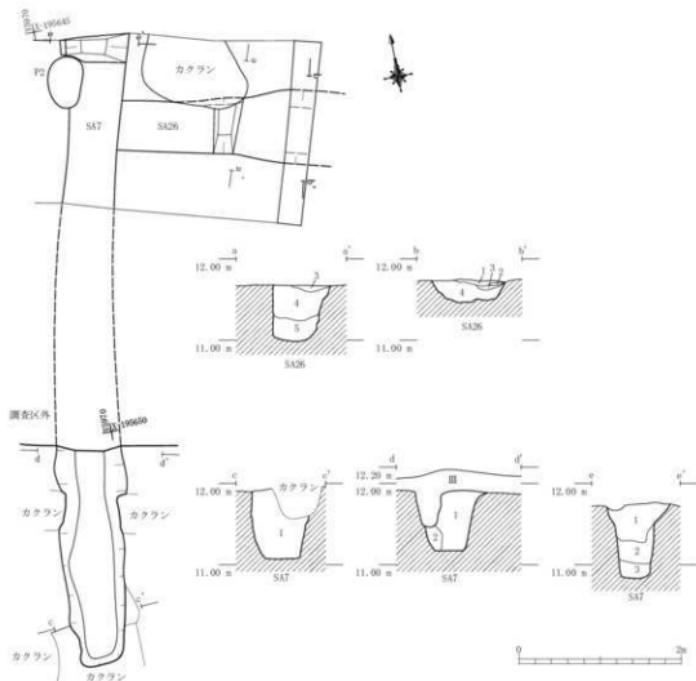
3層は暗灰色シルトで、褐色シルトブロックを少量含む。

4層は黄灰色粘質シルトで、黄橙色シルトブロックを多量、褐色シルトブロックを少量含む。

5層は黒褐色粘質シルトで、黄橙色・褐色ブロックを少量含む。

構造 西側でSA7に接続すると考えられ、直交するSA7と同様に、六尺五寸の方眼に一致する。中央部は深く、東壁では高くなっていることから、東壁の延長部で塀が途切れる可能性がある。また、1~3層付近の標高では、跡跡のプランに沿って直線的に疊が点在しており、IVb層からIVa層の堆積期間の中で、浅いくぼみが開口していたと考えられる。

出土遺物 出土していない。



遺構名	層位	土色	土性	特徴	備考
SA7	1 10YR2/1 黒褐色	粘質シルト	径3cm以下の黄褐色シルトブロックを多量、径1cm以下の黒褐色シルトブロックを含む		
	2 10YR2/1 黒色	粘質シルト	径3cm以下の黄褐色シルトブロックを含む		
	3 2. IVa/2 墓灰黄色	シルト	径3cm以下の黄褐色シルトブロックを含む 3箇に點在するが、ブロック径がやや大きい		
SA26	1 2. IVa/2 墓灰黄色	シルト	径1cm以下の黄褐色、褐色シルトブロックを少量含む		
	2 2. IVb/3 にぶい黄色	粘質シルト	径1cm以下の褐色シルトブロックを少量含む		
	3 2. IVb/2 墓灰色	シルト	径1cm以下の褐色シルトブロックを少量含む		
	4 2. IV/1 黄褐色	粘質シルト	径3cm以下の黄褐色シルトブロックを多量、径1cm以下の褐色シルトブロックを少量含む		
	5 10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	径3cm以下の黄褐色、褐色シルトブロックを少量含む		

第101図 SA7・26

(5) 河川跡（第100図）

位置 Y34・X29～30グリッドで検出した。第10次調査1区で検出された河川跡の延長と考えられる。

規模 調査区北壁で確認した西端部から、調査区東壁までは幅5.60m、深さはIVb層下から0.50mである。

重複関係 SA7・26より古い。

堆積土 3層を確認した。各堆積土については以下のとおりである。

1層は黒褐色シルトで、黄橙色シルトブロックを少量含む。混入するブロックが少なく均質な土層である。

2層は黒褐色シルトで、オリーブ褐色ブロックを多量に含む。調査区北東部でのみ確認された。

3層はオリーブ褐色砂質シルトで、褐灰色シルトブロックを含む。

出土遺物 出土していない。

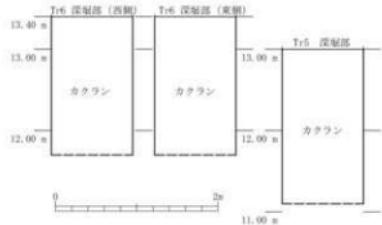


図版番号	登錄番号	種類	部種	分類	遺構・層位	法(量)(m)			写真図版
						口径	延長	深さ	
1	II-20	土師質土器	陶器	-	Ⅲ	-	4.9	-	不明 外縁：下端に横穴のケズリ

第102図 Tr4 出土遺物

(5) Tr5・6 (第103図)

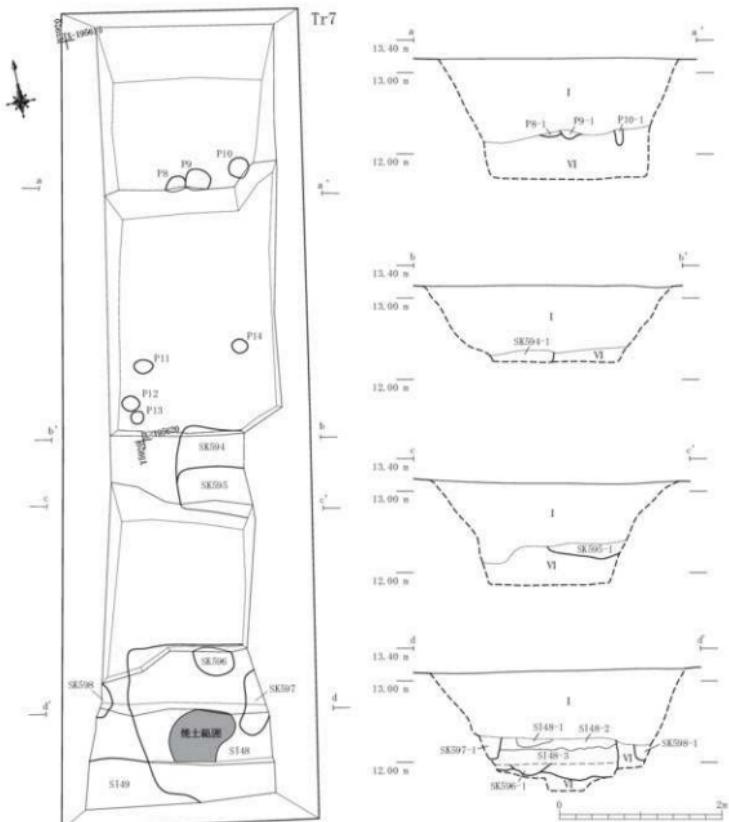
Tr5をY31～34・X23～24グリッド、Tr6をY25～29・X21～23グリッドに設定した。各調査区は北側土壌に平行する。第15次調査区においては、Tr6が最も北西に位置する。解体された近現代の建物跡により、調査区全体にコンクリート・レンガ等の搅乱が堆積しており、表土から2m程の深さまで掘削を行ったが、遺構面及び遺構の残存は確認できなかった。遺物は搅乱中から近代以降の煉瓦片が多量に出土したが、図示していない。



第103図 Tr5・6

(6) Tr7 (第104図)

Y24～25・X23～25グリッドに設定した。第13次調査1区より北西に位置する。周辺調査区との位置関係は、Tr6西端とTr8の間に位置する。近現代の建物基礎を含む搅乱がVI層まで及んでおり、III・IV層の残存は確認できなかった。搅乱により検出面の高さはまばらであるが、残存するVI層上面から竪穴住居跡2軒(SI48・49)、土坑5基(SK594～598)、ピット7基(P8～14)を検出した。検出した遺構の帰属時期は古墳時代から古代の遺構と推定される。若林城期の調査面に伴わないことから、本報告書では調査区全体図と断面記録のみで詳細な報告は行わず、各遺構の規模は第14表に記載した。また、第10次調査1区で検出された蛇行する河川跡の推定流路が付近に存在すると考えられているが、本調査区ではその痕跡を確認できなかった。遺物はSI48から縄文土器片2点と、遺構検出面から土師器の小片が出土しているが、いずれも小片であり、また磨滅が著しく器形の復元が困難であったため、図示していない。



調査区名	層位	土色	土性	特徴	備考
Tr7	I	10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	径5cm程の円錐・レンガ・コンクリートブロックを含む	
	VI	2.5Y5/2 墓灰黄色	砂質シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
遺構名	層位	土色	土性	特徴	備考
P6	1	10YR3/2 硫褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック含む	
P9	1	10YR3/3 硫褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
P10	1	10YR2/2 黒褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック含む	
P11	1	10YR2/3 黒褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを中心、炭化物を微量含む	
P12	1	10YR4/3 に亘り 黄褐色	シルト	径5cm以下に亘り黄褐色シルトブロックを含む	
P13	1	10YR4/2 に亘り 黄褐色	シルト	径5cm以下に亘り黄褐色シルトブロックを含む	
SK594	1	10YR4/2 に亘り 黄褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを含む	
SK595	1	10YR4/4 に亘り 黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
SK596	1	10YR5/1 黒褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを含む	
SK597	1	7. 10YR5/1 硫褐色	シルト	径10cm以下に亘り黄褐色シルトブロックを含む	
SK598	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを含む	
	2	7. 10YR4/2 灰褐色	シルト	炭化物と埋土を含む	
SI48	2	10YR4/1 墓灰褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
	3	10YR5/2 灰黄褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを含む	
SI49	1	10YR4/2 灰黄褐色	シルト	径5cm以下のに亘り黄褐色シルトブロックを含む	

第104図 Tr7

(7) Tr8 (第105~109図)

Y23~23・X28~34グリッドに設定した。第13次調査I区の西端に隣接する。搅乱により削平され、遺構の残存状況は悪いが、部分的に残るⅢ・Ⅳ層及びⅥ層で遺構を確認した。Ⅲ層検出の遺構は土坑2基（SK599・600）、溝跡1条（SD100）を確認した。SD100は13次調査I区で確認したものの延長と考えられる。またこの調査区で確認したⅢ層は礫を多量に含んでいる。Ⅳ層では掘立柱建物跡1軒（SB15）、塀跡1条（SA15）、礎石跡1基、ピット8基を確認した。SB15は第13次調査I区で確認したものの延長と考えられる。この調査区では版築状の整地層Ⅳc層を確認した。Ⅳc層は御殿建物周辺でみられる整地層であることから、若林城造営時の整地の中でも特殊なものと考えられる。Ⅵ層では溝跡1条（SD140）を確認した。遺物はSK600から瓦片、遺構外から陶磁器の小片が出土している。

I Ⅲ層検出遺構

SK599 (第105・106図)

位置 Y24・X29グリッドで検出した。

規模 東西1.61m、南北0.70mであるが、東西端部は調査区外に延び、南北端部は搅乱に削平されるため、詳細な規模は不明である。深さは0.35mで、断面形はテラス状に段を有する。

重複関係 SD100よりも新しい。

堆積土 2層を確認した。各堆積土については以下のとおりである。

1層はにぶい黄褐色の砂質シルトで、径10cm程の礫を多量、瓦片を少量含む。

2層は褐色シルトで、径5cm程の礫を多量、瓦片を少量含む。

構造 堆積土が礫を多量に含み、また少量だが瓦片を含むことから、廃棄土坑と考えられる。

出土遺物 1・2層から瓦片が出土した。

SK600 (第105~107図)

位置 Y23~24・X30グリッドで検出した。

規模 東西2.77m、南北1.12mであり、SK599と同様に東西端部は調査区外に延び、南北端部は搅乱に削平されるため、詳細な規模は不明である。深さは0.21mで、断面形は底面が平坦な皿形と推定される。

重複関係 SD100よりも新しい。

堆積土 1層を確認した。1層はにぶい黄褐色砂質シルトで、径15cm程の礫と瓦片を多量に含む。

構造 瓦片や礫が多量に含まれていることから、廃棄土坑と考えられる。

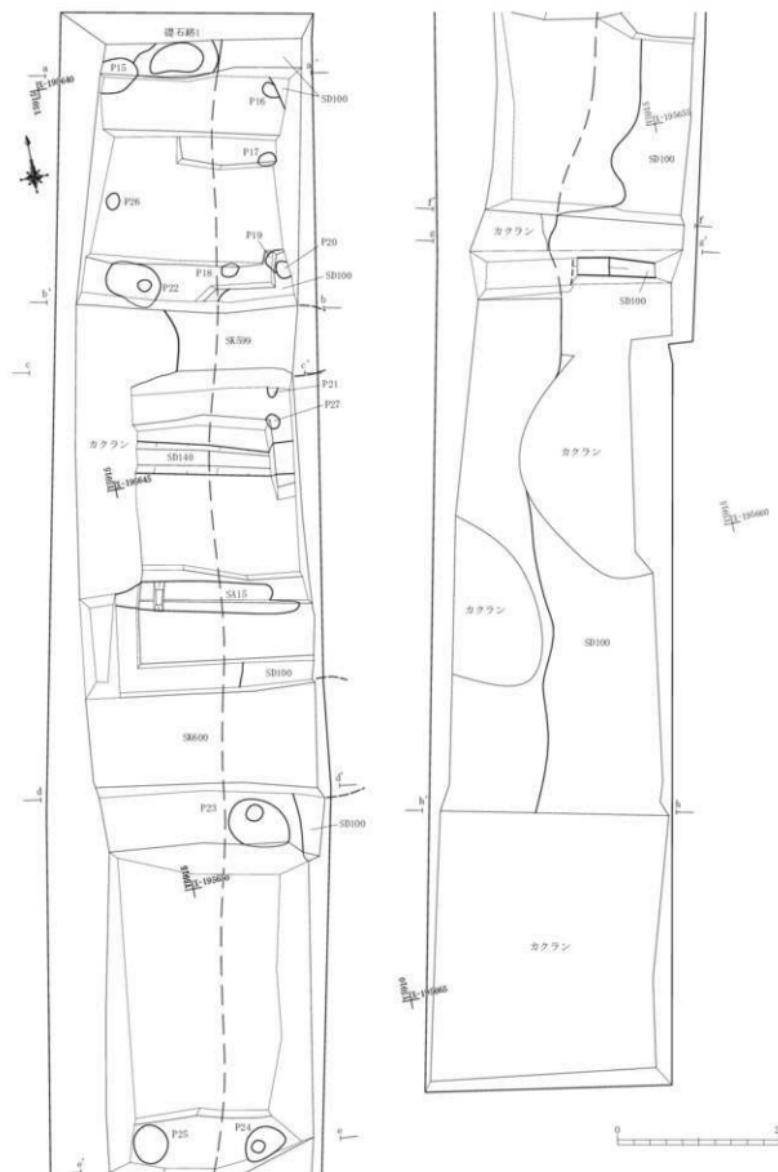
出土遺物 瓦片が182点出土した。このうち軒丸瓦1点と輪違い1点を図示し、刻印瓦2点を写真掲載とした。1は軒丸瓦である。瓦当文様は珠文の無い三巴文である。凹面にコビキ痕・布目痕がみられ、凸面はナデ調整が施される。2は輪違いである。狹端部側は直線的である。凹面はコビキ痕・布目痕・布目絞り痕、凸面はナデ調整が施される。G42とG43は刻印のある平瓦である。刻印の分類は、同報告書の第9章第2節の第123図を用いた。G42はA1、G43はA3類に属する。A3類の刻印は第10・12~14次調査では確認されていない。

SD100 (第105・106図)

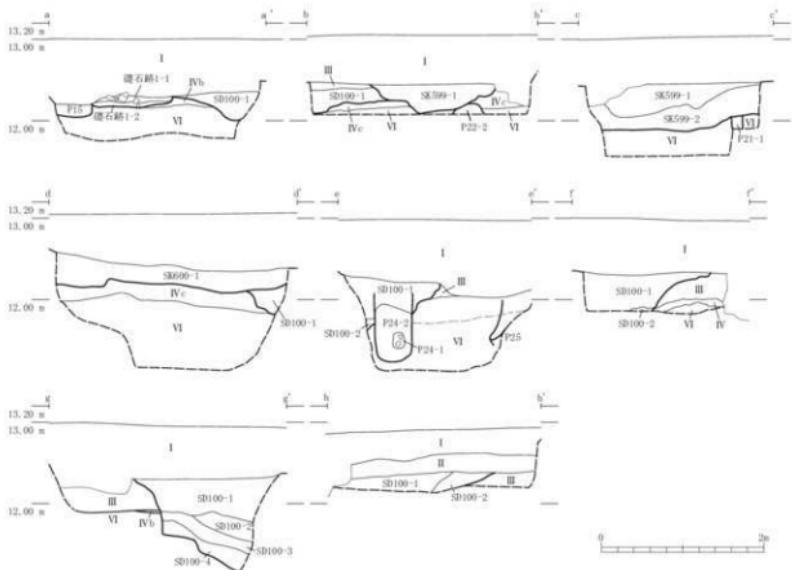
位置 Y23~24・X28~33グリッドで検出した。第13次調査I区で確認されたSD100の延長と考えられる。

方向 N-13°-Eで六尺五寸の方眼に一致する。

規模 第13次調査と同様に搅乱によって分断されており、調査区北端から南端までの長さは23.65m、幅は調査区東壁から0.87~1.59mである。SK599・SK600及びⅢ層によって上部が削平されており、最も高い検出高は北側でH=12.40、最深部では南側でH=11.16mである。



第105図 Tr 8 (1)



調査区名	層位	土色	土性	特徴	備考
Tr8	I	10YR3/1 黒褐色	粘質シルト	径5cm程の円錐・レンガ・コンクリートブロックを含む	
	II	10YR4/4 棕色	シルト	黄褐色粘質シルトブロックを含む	
	III	10YR4/2 棕灰色	シルト	径10cm程の円錐、瓦片を含む	織が多層に現れる
	IVb	10YR4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の浅い黄褐色シルトブロック・灰白色シルトブロックを含む	
	IVc	10YR6/2 棕黃褐色	シルト	丁度に5cm以上の黒褐色・黒褐色シルトブロックを含む 上部に黒褐色・褐灰色シルトを五層に堆積する	
	VII	2. 10YR5/2 砂質褐色	砂質シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
	VI	2. 10YR5/2 砂質褐色	砂質シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
遺構名	層位	土色	土性	特徴	備考
壁面I	1	10YR4/2. 深褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む、径20cm以下との織を多量含む	
	2	10YR4/3 にぶい・黄褐色	シルト	径2cm以下の褐色シルトブロックを含む	相因み跡
P15	1	10YR4/2 黑褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
P16	1	10YR4/3 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
P17	1	10YR4/2 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
P18	1	10YR4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを少量含む	
P19	1	10YR5/2 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
P20	1	10YR4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の黄褐色シルトブロックを多量含む	
P21	1	10YR5/2 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを含む	
	1	10YR5/2 砂質褐色	シルト	径10cm以下の織を含む	
P22	2	10YR5/6 黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを多量含む	
	3	10YR4/2 黑褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック、径5cm以下の織を少量含む	
P23	1	10YR5/3 砂質褐色	シルト	径5cm以下の織を含む	
	2	10YR4/3 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック、径5cm以下の織を含む	
P24	1	10YR3/2 黑褐色	シルト	径10cm以下の織を含む	
	2	10YR5/4 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の黄色褐色シルトブロックを多量、瓦片を少量含む	
P25	1	10YR5/4 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の黄色褐色シルトブロックを多量含む	
P26	1	10YR4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の黄色褐色シルトブロックを微量含む	
P27	1	10YR4/1 棕灰色	シルト	径5cm以下の黄色褐色シルトブロックを少量含む	
SK599	1	10YR5/2 にぶい・黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の織を多量、瓦片を少量含む	
SD6000	1	10YR5/2 にぶい・黄褐色	砂質シルト	径5cm以下の織を多量、瓦片を多量含む	
SD100 (III)	1	10YR4/2. 棕黃褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを多量、瓦片を微量含む	
	2	10YR5/2 黑褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを多量含む	
SD100 (IV)	2	10YR4/3 にぶい・黄褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを多量含む	
	3	10YR5/2 砂質褐色	砂質シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック、径5cm以下の織を微量含む	
SD140	1	10YR3/1 黑褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック、径5cm以下の織を微量含む	

第106図 Tr8 (2)

重複関係 1期はSA15、SB14・15より古く、2期はSK599・600より古い。

堆積土 4層を確認した。1~3層は、色調・シルトブロックの混入度合いが類似する層である。

1層は暗褐色~灰黄褐色シルトで、褐色ブロックを多量、瓦片を微量に含む。

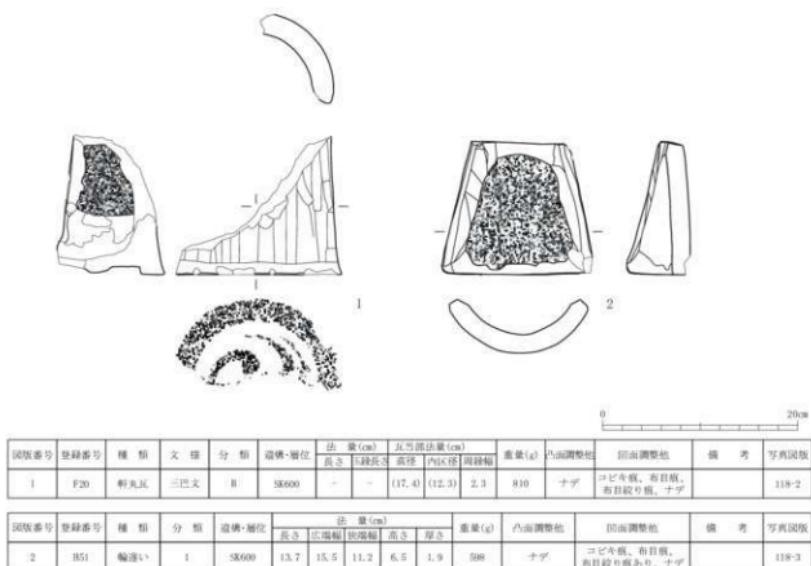
2層は黒褐色シルトで、褐色ブロックを多量含む。1層と比較してブロック径が大きい。

3層はにぶい黄褐色シルトで、黒褐色シルトブロックを多量に含む。第5章第2節SD100の1層に対応する。

4層は暗褐色砂質シルトで、褐色ブロックと径10cm以下の礫を含む。第5章第2節SD100の2層に対応する。

構造 SD100は断面観察から2時期に大別できる。1期の堆積土は3~4層である。標高や堆積土の状況から第13次調査1区で確認したものの2期に対応すると考えられる。この時期は若林城造営前に機能していたと考えられる。2期の堆積土は1・2層である。Ⅲ層を掘り込むことから御薬園期に機能していたと考えられる。

出土遺物 1層から瓦片が出土したが、小片のため図示はしていない。



第107図 SK600 出土遺物

2 IV層検出遺構

15号掘立柱建物跡 (SB15) (第105・106・108図)

位置 Y23~24・X30~31グリッドでP23~25を検出した。第13次調査で確認されたSB15の延長と考えられる。

方向 N-80°Wで、六尺五寸の方眼に一致する。

規模 東西の長さはP24・25間で約1.30m、南北の長さはP23・24間で約4.1mである。P23・24間は搅乱によってIV層面が失われており、柱穴が1基存在したと考えられる。2m北側にSA15の延長が確認されたため、建物跡の北端は13次調査と同様で、本調査で検出したP25を西端とした。第13次調査を合わせた全体規模は、東西17.73m、南北9.18m

である。柱間は東西8間半、南北5間で、柱間の平均は東西2.08m、南北1.83mである。

重複関係 SB100より新しい。

柱穴 確認した柱穴は、これまでの調査と同様にいずれも検出に留めているが、P24・P25については搅乱により失われている部分で断面観察を行った。各柱穴については以下のとおりである。

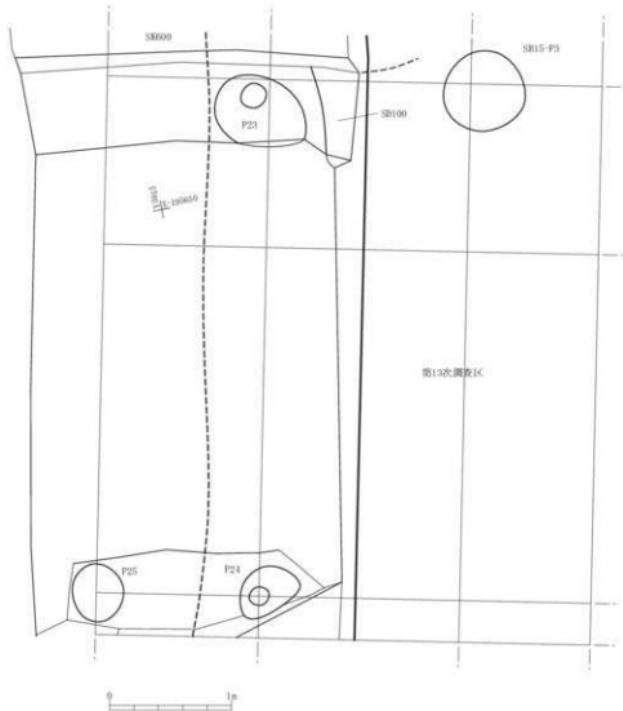
P23は径 0.78×0.57 mの楕円形で、柱痕は径0.20mの円形である。

P24は径 0.50×0.36 mの楕円形で、深さは0.70m、柱痕の径は0.15mである。

P25は径0.47の円形で、上部を削平されており、検出高からの深さは0.32mである。

構造 第13次調査1区で確認した他の柱穴と同様に、P23-24は柱痕が残る。掘立柱という構造から、厩などの格の低い建物と考えられる。

出土遺物 出土していない。



第108図 SB15

礎石跡1（第105・106図）

Y24・X28～29グリッドで検出した。長さ1.01m、幅0.41mの梢円形で、断面形は皿形と考えられる。北端部は調査区外に延び、南端部は擾乱に削平されている。重複関係はP15、SD100よりも古い。堆積土は2層を確認した。1層は灰黄褐色シルトで、褐色シルトブロックを含む。径20cm程の縄が集中するため、根固め部と考えられる。2層にはぶい黄褐色シルトで褐色シルトブロックを含む。遺物は出土していない。

15号 sondage (SA15) (第105・106・109図)

位置 Y23～24・X30グリッドで東西方向の sondage を検出した。第13次調査1区で確認されたSA15の延長と考えられる。

方向 N-13°-Wで六尺五寸の方眼に一致する。

規模 長さ2.33m、幅0.41m、深さは0.31mであり、西側は調査区外に延びる。断面形はU字形を呈する。Ⅲ層に削平されている。

重複関係 SD100より古い。

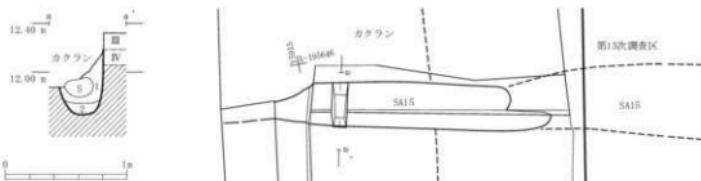
堆積土 2層を確認した。各堆積土については以下のとおりである。

1層は黒褐色シルトで、褐色シルトブロックと径5～30cm程の大小の縄を含む。

2層は黒褐色砂質シルトで、褐色シルトブロックを少量含む。

構造 第13次調査区から続く東西方向の軸線上に沿って検索された。東側で掘り方が一部浅くなる。13次調査では、軸方向に沿う柱痕が掘り方北側に寄って列状に確認されたが、本調査区では北側が擾乱により失われており、同様の柱の痕跡は確認できなかった。

出土遺物 出土していない。



遺構名	層位	土色	土性	特徴	参考
SA15	1	109W3/2 黒褐色	シルト	径5cm以下の褐色シルトブロック、径5～30cm以下の縄を含む	
	2	109W2/3 黒褐色	砂質シルト	径5cm以下の褐色シルトブロックを少量含む	

第109図 SA15

第16表 第15次調査遺構一覧表

掘立柱建物跡 (SB15)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P23	Tr8	Ⅳ	Y28 X30	0.78	0.57	—	楕円形	—	—	
P24	Tr8	Ⅴ	Y28 X31	0.50	0.36	0.70	楕円形	U字形	SD100+P24	
P25	Tr8	Ⅴ	Y28 X31	0.47	0.42	0.32	円形	U字形	—	

礎石跡

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
礎石跡 1	Tr8	Ⅴb	Y28 X28~29	1.01	0.41	—	楕円形	無形	礎石跡 1 <SD100 (Ⅲ)	

塙跡 (SA)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SA7	Tr4	Ⅴb	Y34~35 X30	2.10	0.65	0.93	南北	壁面直立	SA26<SA7	
SA15	Tr8	Ⅴ	Y23~24 X30	2.33	0.41	0.31	東西	U字形	—	
SA26	Tr4	Ⅴb	Y35 X30	2.07	0.90	0.28~0.76	東西	U字形	SA26<SA7	

溝跡 (SD)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SD100	Tr8	Ⅲ	Y23~24 X29~33	23.65	0.87~1.59	1.14	南北	V字形	SD100 (N) <礎石跡 1 < SD100 (Ⅲ) < SK59~600	
SD100	Tr8	Ⅳ	Y23~24 X29~33	23.65	0.87~1.59	1.14	南北	V字形	SD100 (R) < P24~23 < 矩石跡 1 < SD100 (Ⅲ)	
SD140	Tr8	Ⅵ	Y24 X29~30	1.93	0.41	0.12	東西	U字形	—	

土坑 (SK)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SK594	Tr7	Ⅶ	Y25 X24~25	0.82	0.53	0.14	椭丸形	無形	SK594~SK595	
SK595	Tr7	Ⅶ	Y25 X25	0.88	0.56	0.22	椭丸形	無形	SK594~SK595	
SK596	Tr7	Ⅶ	Y25 X25	47.00	0.34	—	円形	—	S148<SK596	
SK597	Tr7	Ⅶ	Y25 X25	0.77	0.33	—	不定形	—	S148<SK597	
SK598	Tr7	Ⅶ	Y25 X25	0.40	0.14	—	不定形	—	—	
SK599	Tr8	Ⅲ	Y24 X29	1.61	0.70	0.35	不定形	二段落ち	P21~22<SD100 (Ⅲ) < SK599	
SK600	Tr8	Ⅲ	Y23~24 X30	2.77	1.12	0.20	不定形	無形	SD100 (Ⅲ) SK600	

堅穴住居跡 (SI)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
SI48	Tr7	Ⅶ	Y23~24 X25	2.02	1.61	0.50	椭丸形	方形	SI49~SI48~SK596~597	
SI49	Tr7	Ⅶ	Y24 X25	1.20	1.32	—	不定形	—	SI49~SI48	

ピット (P)

遺構名	調査区	層位	グリッド	長径 (m)	短径 (m)	深さ (m)	平面形	断面形	重複関係	備考
P1	Tr3	Ⅷ	Y41 X25	0.31	0.27	—	円形	—	—	
P2	Tr4	Ⅸ	Y25 X30	0.63	0.42	—	楕円形	—	SA7<P2	
P3	Tr4	Ⅸ	Y34 X30	0.34	0.31	—	円形	—	—	
P4	Tr4	Ⅸ	Y34 X30	0.49	0.46	—	円形	—	—	
P5	Tr4	Ⅸ	Y34 X30	0.30	0.29	—	円形	—	—	
P6	Tr4	Ⅸ	Y34 X29	0.30	0.29	—	円形	—	—	
P7	Tr1	Ⅸ	Y33 X36	—	—	0.42	円形	U字形	—	
P8	Tr7	Ⅷ	Y25 X24	0.26	0.17	0.06	円形	無形	P8<P9	
P9	Tr7	Ⅷ	Y25 X24	0.32	0.26	0.10	円形	無形	P8<P9	
P10	Tr7	Ⅷ	Y25 X24	0.25	0.25	0.20	円形	U字形	—	
P11	Tr7	Ⅷ	Y25 X24	0.24	0.17	—	円形	—	—	
P12	Tr7	Ⅷ	Y24~25 X24	0.22	0.18	—	円形	—	—	
P13	Tr7	Ⅷ	Y24~25 X24	0.16	0.16	—	円形	—	—	
P14	Tr7	Ⅷ	Y25 X24	0.20	0.17	—	円形	—	—	
P15	Tr8	Ⅸ	Y24 X28~29	0.66	0.43	—	楕円形	—	P15<礎石跡1	
P16	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.20	0.16	—	円形	—	P16<SD100 (Ⅲ)	
P17	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.23	0.15	—	円形	—	—	
P18	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.20	0.18	—	円形	—	—	
P19	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.26	0.17	—	円形	—	P19~P20	
P20	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.22	0.16	—	円形	—	P19~P20	
P21	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.12	0.11	0.15	円形	U字形	P21<SK599	
P22	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.67	0.47	—	楕円形	—	—	
P23	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.21	0.16	—	円形	—	—	
P24	Tr8	Ⅸ	Y24 X29	0.18	0.15	—	円形	—	—	

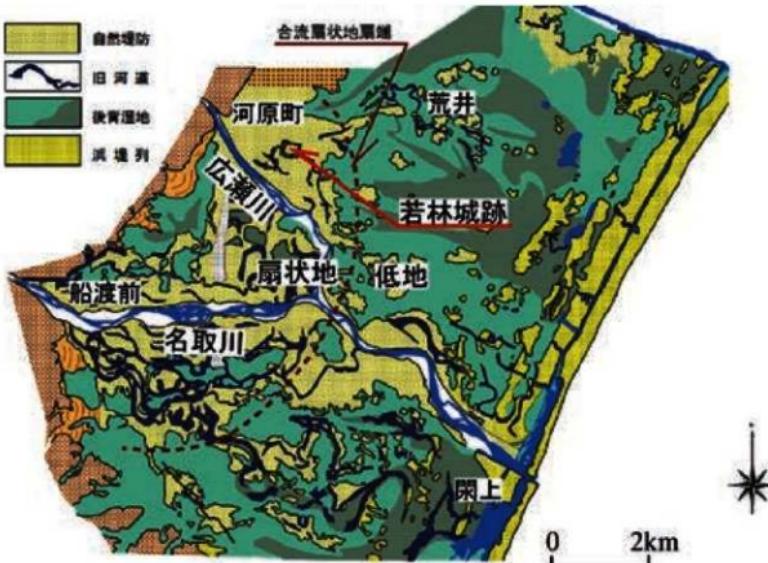
第9章 若林城跡の地形と表層堆積物

松本 秀明（東北学院大学地域構想学科）

1.はじめに

若林城跡は仙台市を流れる広瀬川左岸に位置する。広瀬川は若林城跡の南南西0.8km地点を南東方向に流下し、太白区郡山にて名取川と合流する。合流後は名取川として5.6km流下したのち閉上にて太平洋に注ぐ。

広瀬川および名取川は、それぞれの太白区河原町付近、船渡前付近において臨海沖積平野としての仙台平野に流入し、それぞれ流入地点を扇頂とする扇形の「扇状地」を形成している。両扇状地はJR長町駅西方で会合し「合流扇状地」の形態をとる。扇頂から扇端部までの距離は4~5kmである（第1図）。広瀬川扇状地の扇頂の地盤高は河原町付近で海拔16mであり、若林城跡は扇頂から東に1.5kmの地点にある。扇頂を基準にすると、若林城跡の地盤高はそれより3~4m低い。その間の地表勾配は25/1000である。一方、若林城跡から東方25kmには扇端部があり、その間の地表勾配は25/1000である。広瀬川扇状地全体としての標高差は約11m、円弧の半径は約4kmである。



第9章第1図 仙台平野と若林城跡

2.本調査の目的

河川は一般に、山地・丘陵地・台地などから平野に流れ出る谷口部で河床勾配が急になり流速も低下する。流速の低下は上流側から運搬してきた土砂の河床への堆積を招き、河床高度は上昇する。とくに洪水時においては、流速の低下が上流側から押し出してくる流れによって水位の上昇を招き、時として河道外に土砂を堆積させる。やがて河床高度が周囲と同レベルとなり、河道が維持できず、より低い場所に河川が遷移する。このように、洪水による河床や河道周辺への土砂の堆積と河道変遷が数千年間継続して繰り返されると、扇頂を頂点とした扇形の堆積地形が形成される。それが扇状

地である。広瀬川および名取川沿いに発達する扇状地も過去数千年間に繰り返された洪水とそれに伴う河道変遷により、広範囲に散布された洪水堆積物で構成される。

扇状地を構成する堆積物は、河床や洪水の流芯部に堆積した粗粒な砂礫層と、溢流した洪水流に含まれ、流下した砂～泥質の堆積物とに分けられる。若林城跡において自然堆積層として存在する褐色の厚い細粒砂からシルトで構成された自然堆積層は後者に相当する。本調査は若林城跡に見られる洪水堆積物の土層を観察するとともに、それを構成する堆積物の粒度の特徴をレーザー回折式粒度分析装置により、具体的かつ詳細に求めたものである。

3. 調査対象地における土層断面

土層の断面観察および粒度分析を実施するための試料採取を行った地点は北緯38度14分14秒、東経140度54分09秒の地点である。第2図は地表から約1.5m掘削した深掘り調査断面の一部である。全体にシルト・粘土を多分に含んだ細粒～微粒砂層からなり、一部に直径2～5cmの礫を含んだ砂礫層や粗粒～中粒砂層が挟在している。これらの砂礫層や砂層の多くはレンズ状に堆積しており、面的かつ広域的な連続性は認められない。下位から各堆積層の特徴を下に記載する。

【a層】掘削底面付近に見られる粘土層である。有機物の含有は殆ど見られない。

【b層】明褐色の粘土～シルト層であり、僅かに微粒砂分を含む。

【c層】粗粒～細粒砂からなる砂層（淘汰不良）である。同層は水平方向への連続性は認められるものの、部分的にシルトや粘土に漸移するなど、砂層としては断片的な分布をなす。

【d層】シルト分を多分に含む微粒砂層である。層内に水平な粘土を主体とする暗色帶が認められる。

【e層】シルト混り中粒砂であるが、写真の右側部分に見られる細粒砂層に連続する。

【f層】微粒砂混りシルト層であり、1～2cm厚の水平な縞目が認められる。

【g層】微粒砂混り粘土層であり、層厚は2～4cmである。

【h層】シルト分を多分に含む微粒砂層である。

【i層】微粒砂を僅かに含む粘土層である。

【j層】明るい褐色を呈するシルトを主体とした堆積層である。

【k層】直径2～5cmの亜円～円礫を含む堆積層である。調査区内の他の深掘り断面にも認められ、キー層として有効である。

【l層】シルト分を多分に含む細粒～微粒砂層であり、層理は殆ど認められない。層厚は30～40cm。

【m層】シルト分を多分に含む中粒～細粒砂層であり、木の根と思われる円形の暗色斑点が観察される。

【n層】シルト分を多分に含む細粒砂層であり、暗灰色を呈する。

4. 堆積物の粒度分析

分析対象とする堆積物のほとんどが細粒砂以下の細粒物質から構成されているため、本調査では $2000\text{ }\mu\text{m} \sim 1.38\text{ }\mu\text{m}$ の粒度分析が可能なレーザー回折式粒度分析装置を用いて分析を行った。本装置は薄く平行に設置されたガラス板の間を、蒸留水とともに試料を通して通過させ、同時にそれと直行する方向からレーザー光をあて、その裏側にできる試料粒子の影の大きさから個々の粒子の面積を計測したのち、それを体積に変換することにより各粒度階の体積比率（%）を求めるものである。通常の砂質試料の分析に使われる篩法とは異なり、各粒度階の含有率は重量%ではなく体積%で示される。

分析の結果はヒストグラムで表示し、Friedman（1961、1967）が示した積率法により平均粒径、淘汰度を算出した（第3図）。分析は粗粒砂からシルト、さらには粘土の一部にまでにおよぶ広範囲の粒度階が設定されているこ

とから、平均粒径、淘汰度の値は篩法のそれと単純に比較することはできない。しかし、篩法より微細な粒子までの粒度組成を明らかにすることが可能である。なお、篩法の細粒側の分析限界は4φである。

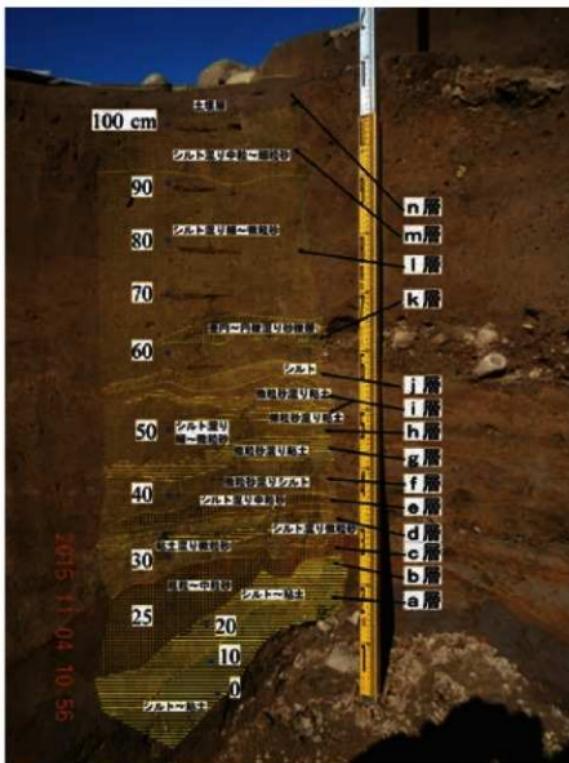
5. 堆積物の粒度分析結果

堆積物の粒度分析結果を第3図に示した。下位から分析結果を記述する。堆積物のφスケールや粒径、粒子の名称については第1表を参照のこと。

【若林城0cm】4φよりも細粒（グラフでは数値が大きい方）なシルト分（4~8φ）および粘土分（8φ<）がほとんどである。有機物を含んでいないことから洪水が終息した後に広がっていた静水中での堆積物と考えられる。

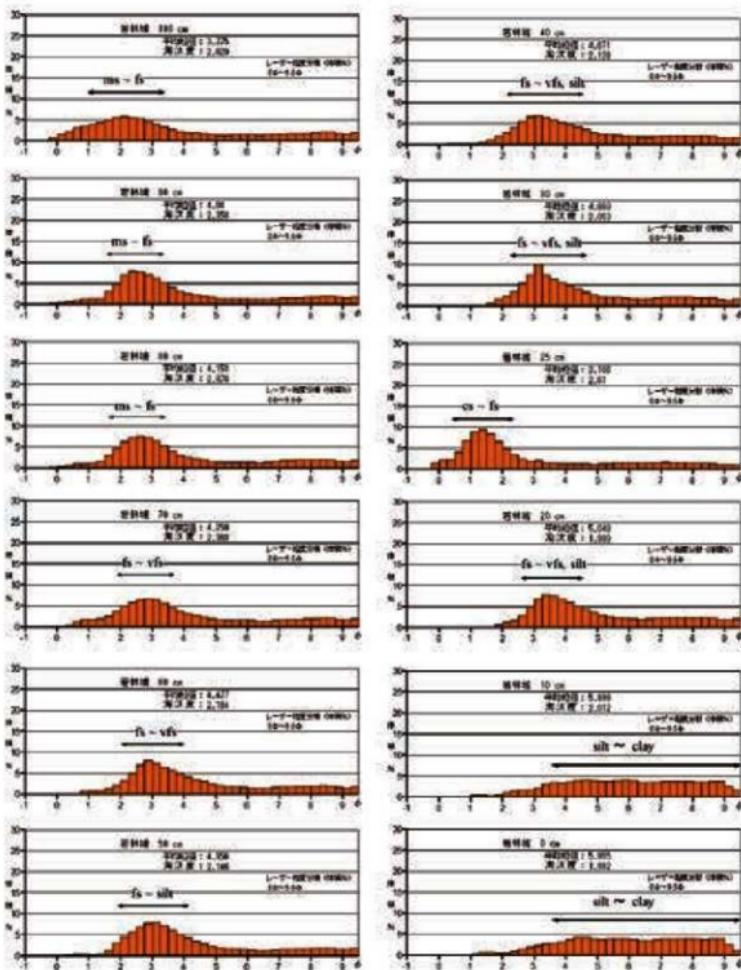
【若林城10cm】上と同様で、シルト・粘土の堆積がほとんどである。有機物を含んでいないことから洪水後の静水中での堆積物と考えられる。

【若林城20cm】細粒砂、微粒砂分を混入していることから、静水中での堆積ではなく、僅かに流速のある環境下での堆積物と考えられる。



第9章第2図 若林城跡 自然堆積層土層断面

北緯35° 14' 14"、東経140° 54' 09"
（＊は堆積物採取位置。数値は調査断面の裏面からの高さ）



第9章第3図 若林城跡の表層堆積物の粒度組成

〔若林城25cm〕粗粒砂、中粒砂、そして細粒砂を多分に含むことから、一定の流水中での堆積物である。

〔若林城30cm〕細粒砂、微粒砂、そしてシルトを含む堆積物であり、静水中での堆積ではなく、流速のある環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城40cm〕細粒砂、微粒砂、そしてシルトを含む堆積物であり、静水中での堆積ではなく、流速のある環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城50cm〕細粒砂、微粒砂、そしてシルトを含む堆積物であり、静水中での堆積ではなく、流速のある環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城60cm〕細粒砂、微粒砂、そしてシルトを含む堆積物であり、静水中での堆積ではなく、流速のある環境下での堆積物と考えられる。しかし、当該堆積物を水平方向に追跡してゆくと、直径2~5cmの亜円~円錐層に連続していることに留意する必要がある。

〔若林城70cm〕細粒砂、微粒砂を主とする堆積物であり、洪水流の流芯に近いなど、強い流水環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城80cm〕細粒砂、微粒砂を主とする堆積物であり、流速のある環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城90cm〕細粒砂、微粒砂を主とする堆積物であり、流水環境下での堆積物と考えられる。

〔若林城100cm〕中粒砂、細粒砂を主体とする堆積物であり、流水環境下での堆積物と考えられる。

6.まとめ

断面最下位の〔若林城0、10cm〕の堆積物は静水環境下での堆積物、〔若林城20cm〕はやや流速のある環境下で

φスケール	mmスケール	名 称		
-8	256	巨礫	boulder	
-4	16	大礫	cobble	礫 gravel
-2	4	中礫	pebble	
-1	2	小礫	granule	
0	1	極粗粒砂	very coarse sand	
1	0.5	粗粒砂	coarse sand	砂 sand
2	0.25	中粒砂	medium sand	
3	0.125	細粒砂	fine sand	
4	0.0625	微粒砂	very fine sand	
		シルト	silt	
8	0.0039			
9.5	0.00138	粘 土	clay	

井口正男(1975)を一部改変

第9章第1表 φスケール、mmスケールと粒子の名称

の堆積物と判断される。その上位の〔若林城25cm〕については、比較的強い流水のある環境下の堆積物と判断される。また、その上位の〔若林城30.40.50cm〕については、上位ほど粒子が大きくなる傾向は認められるものの、流速としては速度の小さな環境下での堆積物と考えられる。また〔若林城60cm〕については、水平方向に追跡すると、直径2~5cmの亜円から円礫層へ連続することから、流速の大きな水流の通過前後の堆積物と考えられる。その上位の〔若林城70.80.90cm〕については、僅かではあるが堆積物に含まれる砂粒の粒径が次第に大きくなる傾向が認められる。〔若林城100cm〕は、堆積物をもたらした水流の存在も想定できるが、堆積物が土壤化している点、樹木の根の跡などが認められる点で、堆積後に洪水以外の擾乱も受けている可能性がある。

本調査では洪水よりもたらされた堆積物のうち、河床あるいは洪水の流芯から地形的に離れた位置に堆積した細粒堆積物を中心に分析を行った。ここで扱った堆積物は沖積低地においてはいわゆる自然堤防を構成する堆積物と同等の堆積環境を想定することができる。多賀城市山王地区、仙台市荒井地区、岩沼市中条地区などに発達する自然堤防地形において著者らが調査を行ってきた堆積物と粒度組成やその累重関係が良く似ている。その様な観点において、扇状地を構成する細粒堆積物は自然堤防地形を形成する地形環境とはほぼ同様のものであると推測される。具体的な堆積の過程については今後の課題である。

文献

- Friedman, G.M. (1961) : Distribution between dune, beach and river sands from their textural characteristics. *Journal of Sedimentary Petrology*, 31, 514-529
- Friedman, G.M. (1967) : Dynamic process and statistical parameters compared from size frequency distribution of beach and river sands. *Journal of Sedimentary Petrology*, 37, 327-354
- 井口正男 (1975) : 「漂砂と流砂の水理学」、古今書院、290頁

第10章 検出遺構と出土遺物のまとめ

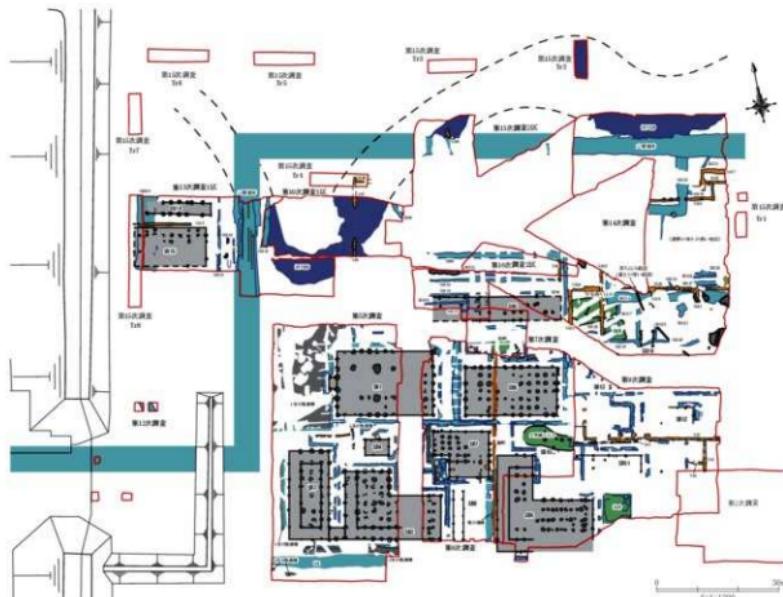
第1節 検出遺構のまとめ

(1) 若林城跡の遺構について

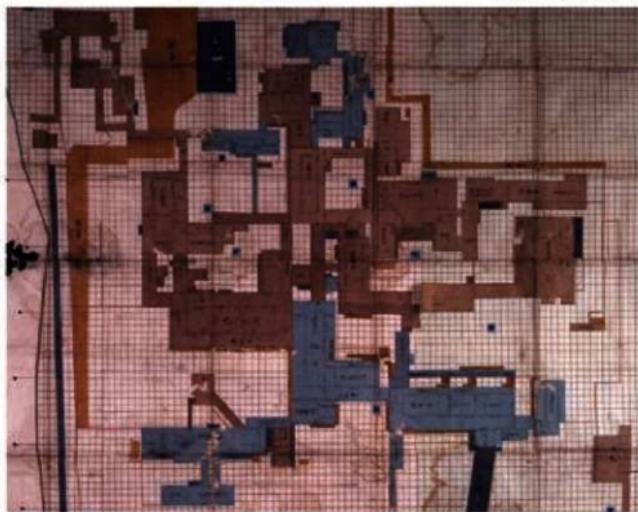
第10・12~15次調査は若林城の中央からやや北西側に位置し、城の3ヶ所ある出入り口のうち大手口とされる西門から樹形土塁を経て北門までの地点にある。確認された若林城期の主な遺構は、礎石建物跡・掘立柱建物跡・溝跡・堀跡・六郷堀跡である（第110図）。礎石建物跡は第9次調査までに確認された御殿建物と異なり奥向きの実務に伴う建物と考えられる。堀跡は東側にまとまって造られており、溝跡と共に複雑に区画された空間を形成している。六郷堀跡は大手口から北門まで確認された大型の水路である。西門から城内を通り東門へ抜ける配置であることから、若林城の水利の根幹を担うと考えられる。

若林城期の遺構の東西軸はN79°-W、南北軸はN11°-Eで、ほとんどの遺構はこの方向に沿って造られている。これまでの調査同様六尺五寸（約1.97m）の方眼を設定すると、多くの遺構はこの方眼上に位置するか近接する。しかし、SB5-14-15の礎石跡・掘立柱はわずかながらこの方眼から外れており、これまでの御殿建物のような正確な配置とは異なる。

ここでは、周囲の溝跡を含む礎石建物跡・掘立柱建物跡・溝跡・堀跡・性格不明遺構・六郷堀跡の順に検討した後に、改めて若林城期の遺構と施設の配置と性格について若干の検討を行う。



第110図 若林城跡遺構配置図



『御二之丸御指図』宮城県図書館蔵



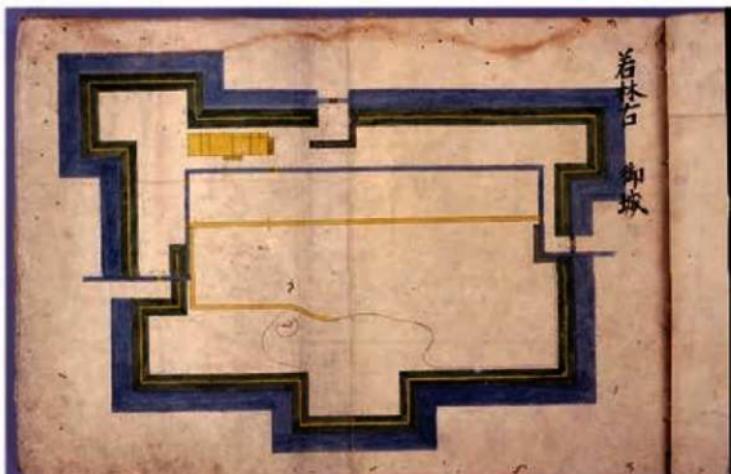
『御二之丸御指図』

近世館住宅 (1976年) を修正転載

『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』

第302図より再掲載

第111図 『御二之丸御指図』



第112図「若林古御城」『御修復帳』(文化文政)宮城県図書館蔵

若林城の建物は仙台城二の丸に解体後移築したとされる。今回の調査でも、確認した礎石建物跡・掘立柱建物跡のうち平面形状や規模が推定できるSB5・14・15と、仙台城二の丸の建物を描いた絵図の中で最も造営当初の姿に近いとされる『御二之丸御指図』との比較を行った。第111図『御二之丸御指図』は仙台城二の丸の建物配置等を示す絵図である。製作年代は不明であるが、延宝年間以降に制作されたとされる『背山公造制城郭木写之略図』や記録、建物配置などから、二の丸初期の建物配置とされるものである。『御二之丸御指図』は1間の方眼に部屋名称、柱配置や建具等が記入された建物の絵を貼付けた計画図の可能性もあり、建物規模、配置等様々なことが見て取れる。

1 硙石建物跡について

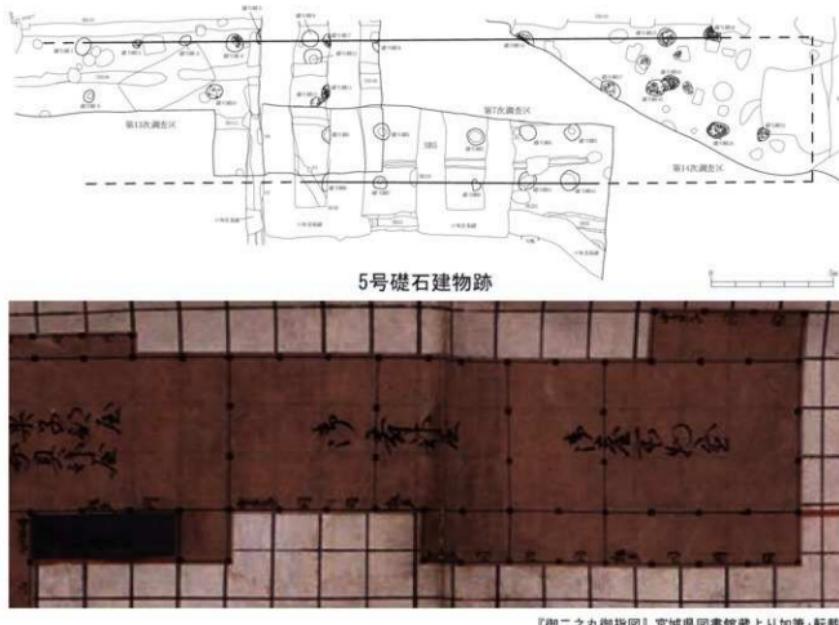
第10・12~15次調査で確認した礎石建物跡はSB5、SB14、SB16の3棟である。

これら建物の配置は城内において離れた配置を取り、関連性は認められない。

SB5は第7次調査区から連続して伸びる礎石建物跡である。規模は東西90尺7寸（27.50m）以上、南北19尺5寸（5.90m）の東西方向に長い建物跡である。個々の礎石跡の掘り方は大きなもので0.60~0.90mの規模で、円形や梢円形・不定形を呈するものがみられる。東側はSD89の手前までさらに1間分伸びるとみられるが、西側の延長は擾乱により不明である。南側は第7次調査のSD32の手前までとみられ、北側はSD112の手前までとみられる。

礎石跡の構造としては、他の御殿建物より掘り方・根固めがやや簡略化された造りであるものの、柱間は表御殿の主要建物と同じ六尺五寸の方眼に一致する。方眼とは整合しない数基の基礎らしきものも存在するが、これらが別の建物か造り替えによるものかは不明である。礎石間の柱間は、東西列ではほぼ1間である。南北列では1間または2間間隔の柱間となっている。

『義山公家記録』には、寛永15年（1638）若林城から仙台城二の丸の焼火間、虎間、納戸、茶道部屋、鋪間、上台所、風呂屋、大台所、小姓間、御用間、肴部屋、鷹部屋、算用屋を移築したとの記録がある。



第113図 SB5と二の丸御指図の御着部屋

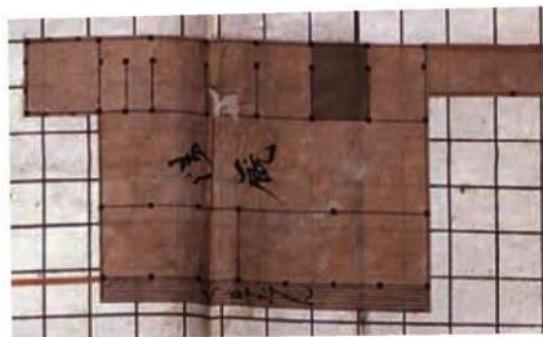
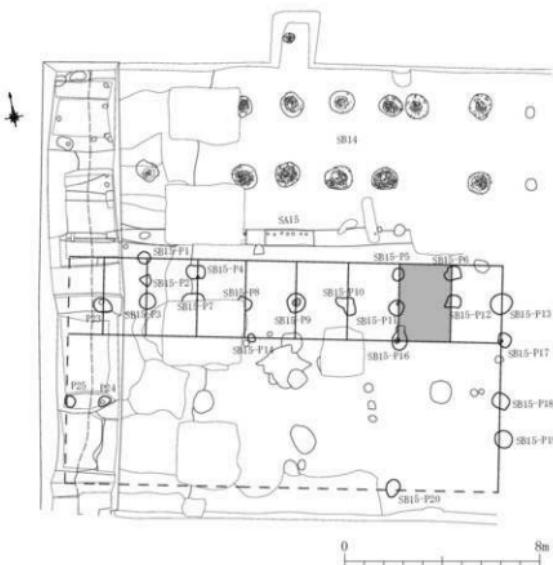
「御二之丸御指図」(第111図)の中でSB5のような東西14間以上、南北3間の規模を持つ建物としては、「御着部屋」がある(第113図)。「御着部屋」は18間×3間の規模で描かれている細長い建物である。SB5と「御着部屋」を比較すると、建物の形状が類似しており、「御二之丸御指図」には「御着部屋」以外にこのような細長い建物はみられない。以上のことから、SB5は仙台城二の丸に移築された「御着部屋」の可能性が考えられる。

SB14はこれまで確認してきた若林城期の六尺五寸の方眼より南に傾いており、礎石跡個々の位置も方眼上にはのっていない。若林城造営時の計画的な配置とはやや方向の異なる配置である。各礎石跡の柱間が、南北九尺七寸、東西は六尺五寸である。

SB14の方向が六尺五寸の方眼とは整合しないことやIVa層で構築されたことから、SB14は時代の異なる御薬園期の建物の可能性がある。

2 掘立柱建物跡について

SB15は大手口の北に位置する検出規模が東西8間半(17.7m)、南北5間(9.2m)の掘立柱建物である。これまで確認された若林城の建物は全て礎石建物であり、掘立柱の建物は今回確認したSB15のみである。SB15を構成する柱穴は、検出状況が明瞭ではないが、P2~6、P13~23、P14~17を通る東西3列の平行な柱穴列と周間に配置された柱穴である。検出した建物の範囲は西端がP25、東端がP13~19列、北端がP1、南端がP20である。西端と南端についてはさらに延びる可能性がある。



『御二之丸御指図』宮城県図書館蔵より加筆・転載

第 114 図 SB15 と二の丸御指図の御廄

SB15は東西3列の柱穴列がほぼ等間隔で並ぶことから、SBI5の北側に長方形の区画が複数存在した可能性があり、1区画の規模は柱穴を5基まとめて検出したP5・6・11・12・16を結ぶ区画で東西223m、南北3.0mとなる。

SB15の構造や位置関係が類似した建物としては「御二之丸御指図」に描かれた「御厩」がある。「御厩」も城の大手門付近に位置している。建物の片側に複数の区画を持ち、1区画の規模は間口約2.30m、奥行き約2.95mである。SB15と「御厩」は構造や位置関係に類似点がみられることから、SB15は既に類似した機能を持った建物の可能性がある。

3 塀跡について

今回の調査では、塀跡を17条確認している。特に調査区東側は第9次調査区の東側と同様に城内の他の空間と比べて密集している状況が見られる。ほとんどはこれまでの調査と同じ布堀り基礎であるが、一部の掘り込みのために塀柱と控柱の痕跡は明瞭ではない。御殿建物から離れた地点ではSA18のように構造が異なるものがある。また、SA6・7・9・16・19・21のように南北に短い塀跡もみられる。

調査区東側と第9次調査区東側の塀跡の配置により、御殿建物の北東に塀跡と溝跡が複雑に配置された広範囲なa、bの区画を確認した。



第115図 若林城遺構模式図

aは北辺にSA20とSA24、西辺にSA23、南辺に第9次調査で確認したSA2が配置された区画である。この区画の北側にはSD114やSX20・21がある。SD114はSA20に接続するSA21より新しく、SX21はSA23・25、SD114より古い。これらのことから、この区画はSX20・21といった池状遺構、池状遺構の廃絶後にSA23等の塀、最後にSD114やそれに接続する溝の順に作られ、改修が行われる度に区画の性格が大きく変わった可能性が考えられる。

bは北辺にSA18、南辺にSA20が配置された区画である。SA18は布掘り基礎の塀跡であるが、SD123との重複部分では柱穴列に改修されている。のことからSA18は布掘り基礎の塀であったがSD123が作られることで接続部分のみ柱穴列に改修された可能性がある。またこの区画はSD123が作られることで区画の性格が大きく変わった可能性が考えられる。

4 溝跡について

今回の調査では、溝跡35条を確認している。の中には、SD89やSD100のように明らかに時期差がある溝跡、SD114やSD123のように塀跡と重複する溝跡を確認している。

SD89は3時期を確認している。1期は若林城期の雨落ち溝で、壁面には10cm大の円礫が1段残存している。本来は2段ないしは3段程度あったと思われるが、後の改修で除去されている可能性がある。2期は1期の壁石1段を残して掘り直し、底面に径約5cm以内の円礫を密に敷き詰めている。3期は六尺五寸の方眼より約7°西偏しており、壁石や石敷きを伴わない素掘りの溝である。3期の堆積土中には円礫や、若林城の瓦が多量に混入している。瓦片が混入し、方向も六尺五寸の方眼に一致しないことから、御薬園期のもの可能性がある。

なお、SD89南側延長上にSD43が確認されている。下部に円礫を並べた壁の構造と上部を後に広げて再利用した点が類似しており。同一遺構と考えられる。

SD100は第13次調査1区で東側と第15次調査Tr8で西側を確認している。第13次調査では上面がIV層に覆われていることから若林城造営時に伴う溝跡と考えていたが、第15次調査においてIII層を掘り込む時期を確認した。

両年次で2時期の存在が確認されたことから、堆積状況や標高等を比較検討した。その結果第13次調査の2期と第15次調査の1期が同一の時期であることを確認した。のことからSD100は最下層の1期（第13次調査1期）、IV層に覆われる2期（第13次調査2期・第15次調査1期）、III層を掘り込む3期（第15次調査2期）に区分されることが明らかとなった。いずれの時期も素掘りの構造とみられ、側石・裏込めなどの構造材は出土していない。時期差が明確に存在することから改修されて若林城造営時と御薬園期に使用されていた可能性がある。底面の高低差からは、水は南から北へ流れていると推測される。

SD114は幅約2.30mと大型で東西方向から北側に屈曲して調査区外に延びる溝跡である。全体に幅のある掘り方内に円礫による裏込め石を入れ、割石による壁を構築している。底面には円礫を敷き詰めている。さらに北側に位置する同規模のSD123と接続する可能性がある。SD114には南側から幾つかの雨落ち溝らしき石組み溝跡SD117・119・120が接続することから排水のための溝跡と考えられる。

SD123は第14次調査区の北に位置し、鉤型に屈曲する幅約2.30mの大型の溝跡である。SD114とは一体の溝跡であった可能性がある。北側は六郷堀跡に接続し、その高低差により六郷堀跡への排水を担っていたとみられる。

これらの溝跡は御殿建物範囲から六郷堀跡への水利を担っていた水路跡と考えられる。また、SD114はSA2より新しいことから若林城が存続していた短い期間の中で改修を行っていたと考えられる。

(2) 六郷堀跡について

今回の調査で確認した六郷堀跡は絵図にみられる数少ない遺構である。

六郷堀跡の構造は、壁面に側石と裏込め、底面に敷石を設置した石組みの水路である。堀の幅が約1.50~2.00m、裏込め・掘り方を含む幅が約4.00~5.00mである。

六郷堀跡がその機能を停止し、最終的に埋められた時期は不明だが、堆積土に煉瓦やスレートなどが混入していることや一部に土管が埋設されていたことから宮城集治監の設置と共に完全に埋められたわけではなく、堀を利用して排水管などの施設が設置されたと考えられる。後にそれらが撤去される際には堀跡内が再び掘削されると共に、平地化されるにあたり、再び廃材などが廃棄されたと考えられる。

調査の結果、埋土の堆積状況と近代以降の煉瓦や土管の混入状況から、南北方向では近代の早い段階に埋められたのに対し、東西方向では近代以降まで開口していた可能性がある。これは、写真に見える六角塔が六郷堀跡付近にまで伸びていることからも観察される。南北方向では底面に煉瓦の配置も見られたことから、集治監建設の早い段階で埋め立て・暗渠化がなされた可能性がある。

六郷堀跡には少なくとも2時期の存在が確認されている。

1期目は、方形に加工された側石が使われ、側石の整形・加工は2期より丁寧である。2期よりも堀の幅は狭い。裏込めには瓦片が含まれないことから若林城期に構築された六郷堀と考えられる。

2期目は、側石の目地が縦に通る積み方といった近代に近い技法が使われ、円礫が含まれている1期よりも堀の幅を広げている。側石の整形・加工は粗雑である。また裏込めには瓦片が混入していることから御薬園期以降のものとの可能性がある。

これら時期差のある石材については、現地で付番・観察を行い記録した（第116・117、120~122図、表18）。

底面の状況は東西方向で敷石が残存する部分を確認できたものの、大部分が攪乱により失われ、時期差がわかる地点は南壁にごくわずかにみられるのみであった。敷石は円礫を密に敷き詰めた構造であり、これについても現地で付番・観察を行い記録した（第118~119、122図、表18）。

六郷堀跡の本来の構造は不明な点が多いが、残存する側石と敷石の状況から、裏込めによる基礎と側石で壁面を形成し、底面は敷石で水の流れが安定するような構造と考えられる。

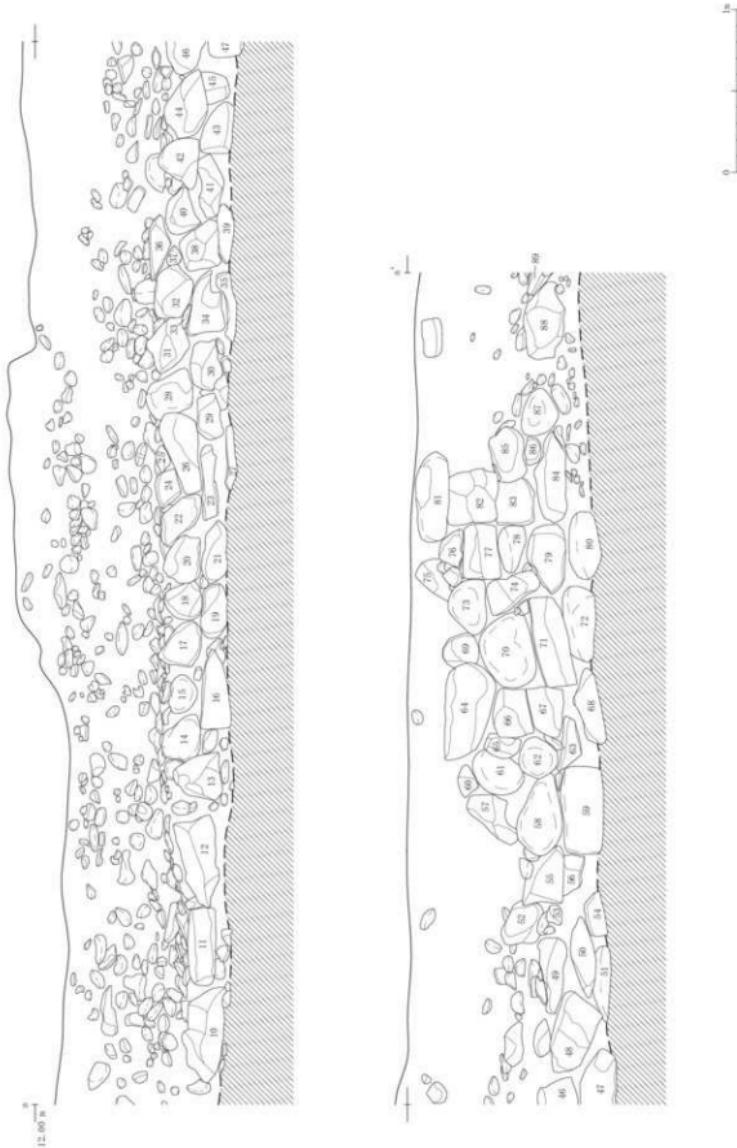
六郷堀により城外西側から導水した水は六郷堀から分かれて表御殿の南側へ回り込み、その水は大池に引かれると共に、一部は城内の上水として利用されたと考えられている。調査で確認した北側を巡る六郷堀の性格としては、城内の溝跡からの排水路として機能していたと考えられる。

六郷堀は若林城が描かれた絵図、『若林御薬園』「御修復帳」（宝暦～安永）にはその存在をみることができる。当初の六郷堀は、若林城期の遺構同様に、構築時の掘り方理土中に近世の遺物を全く含まない状況から、城の造営と共に構築されたと考えられる。

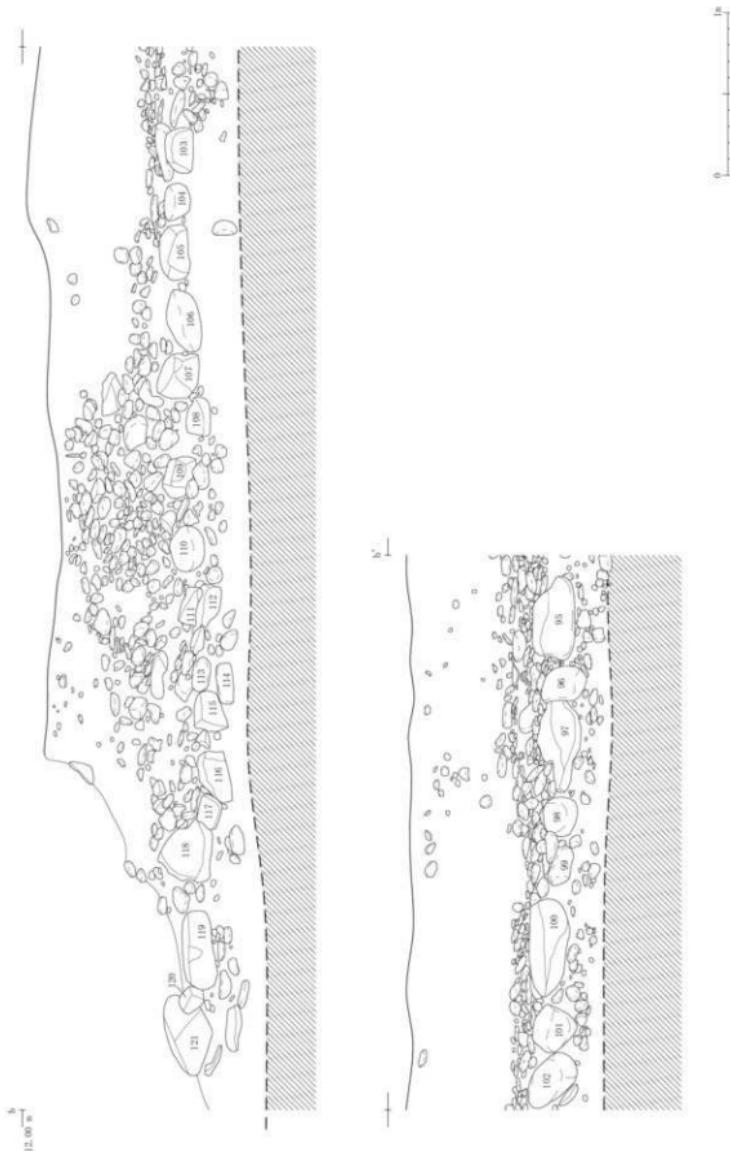
(3) 河川跡について

若林城造営以前の河川跡である。検出幅は約14.0m以上だが、第10次調査1区と第13次調査1区の屈曲部では幅7.0mに狭まることと直立する立ち上がりを確認した。第14次調査区では南岸が六郷堀跡と重複し、北岸と底面は調査区外に延びる。第15次調査Tr2においても北岸を確認できなかったことからこの河川跡は場外まで広がる可能性がある。

河川跡の堆積土がシルトブロックを多量に含む人為的な理土であることや六郷堀跡との位置関係から、この河川跡は若林城造営時の整地の際に埋められたと考えられる。



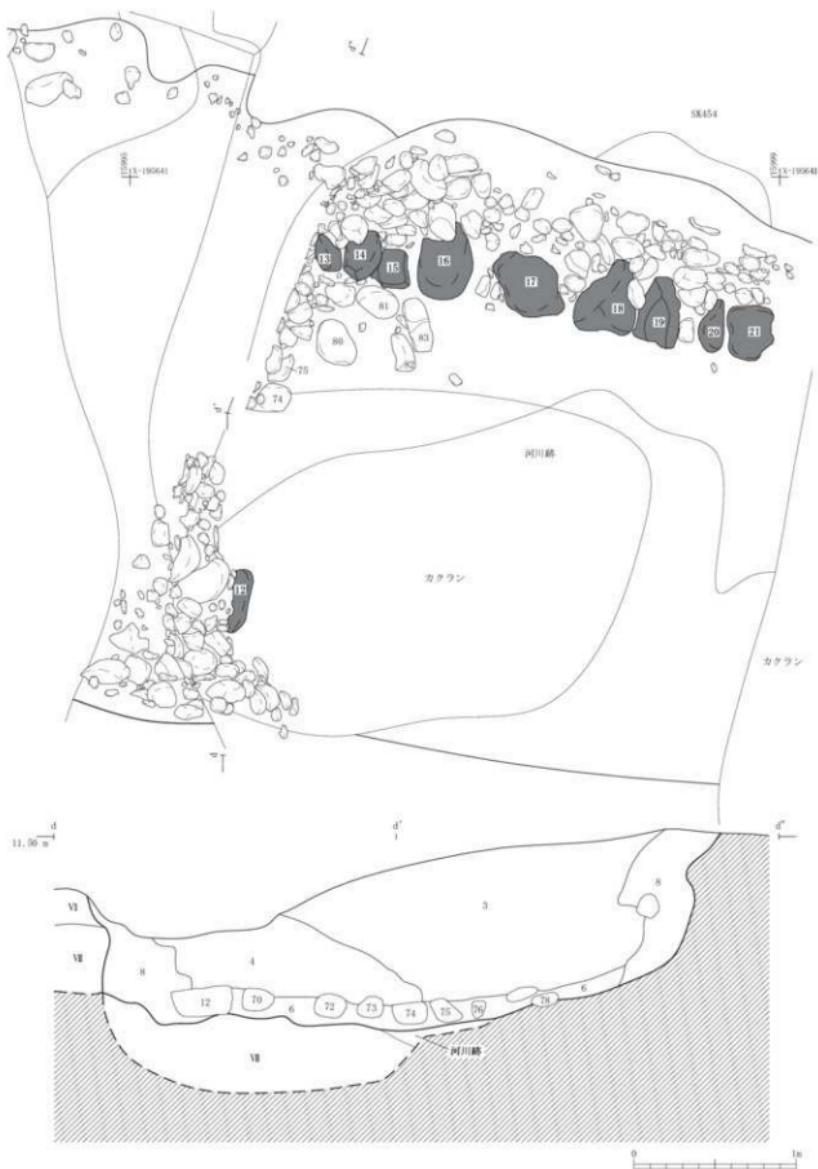
第116図 六郷堀跡南北方向西壁側石付番図(1)



第117図 六郷堀跡南北方向東壁側石付番図(2)



第118図 六郷堀跡東西方向側石・敷石付番図(1)



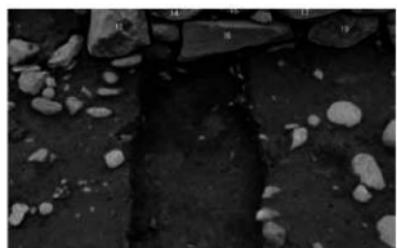
第119図 六郷堀跡東西方向側石・敷石付番図(2)



六郷堀跡西壁側石1~9



六郷堀跡西壁側石10~19



六郷堀跡西壁側石13~19



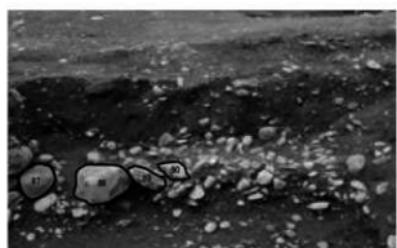
六郷堀跡西壁側石20~45



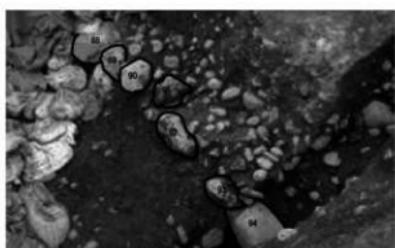
六郷堀跡西壁側石44~68



六郷堀跡西壁側石57~87



六郷堀跡西壁側石87~90

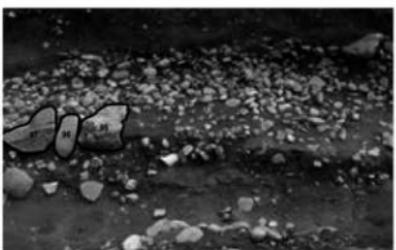


六郷堀跡西壁側石88~94

第120図 六郷堀跡側石付番(1)



六郷堀跡東壁側石90~94



六郷堀跡東壁側石95~96



六郷堀跡東壁側石95~127



六郷堀跡東壁側石103~136



六郷堀跡東壁側石107~140



六郷堀跡東壁側石129~133



六郷堀跡東壁側石113~143

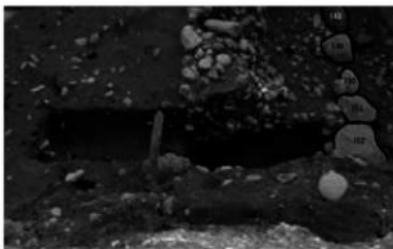


六郷堀跡東壁側石144~151

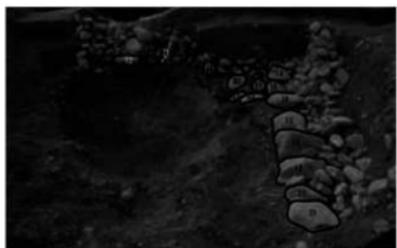
第121図 六郷堀跡側石付番(2)



六郷堀跡側石148～152



六郷堀跡側石148～152



六郷堀跡側石12～21・敷石70～83



六郷堀跡側石1・敷石64～69



六郷堀跡側石1～10・敷石1～63

第122図 六郷堀跡側石・敷石付番(3)

第17表 六郷堀跡側石・敷石付番表

六郷堀跡側石・敷石付番表（南北方向）

番号	調査区	位置	石材	大きさ		矢穴	加工痕	埋設位置	特徴	
				小口幅	小口縦					
1	1区	西壁	割り石	0.34	—	0.20			整形成はないが、表面は滑らかな自然面。	
2	1区	西壁	川岸石	0.23	—	0.18			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
3	1区	西壁	川岸石	0.29	—	0.25			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
4	1区	西壁	川岸石	0.26	—	0.14			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
5	1区	西壁	川岸石	0.29	—	0.17			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
6	1区	西壁	川岸石	0.36	—	0.23			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
7	1区	西壁	割り石	0.38	—	0.23	ノミ痕		挖え上面のみ整成で、ノミにより平らに整成。	
8	1区	西壁	川岸石	0.27	—	0.23			整形成はなく、表面は滑らかな自然面。	
9	1区	西壁	割り石	0.26	—	0.21	ノミ痕		小口と挖えをノミで整成。ほぼ埋まっている。	
10	1区	西壁	割り石	0.53	0.14	0.37	ノミ痕 ゲンノウ痕		小口はノミによる整成で、挖え上面はゲンノウではつり。軸内部にやや粗く。	
11	1区	西壁	割り石	0.48	0.16	0.35	ノミ痕	正立	小口と挖え上面・背面をノミによる丁寧な整成。	
12	1区	西壁	割り石	0.53	0.16	0.30	ノミ痕 ゲンノウ痕		小口と挖え上面・背面をゲンノウではつり。裏込めが崩れた上に乗っている。崩落のため斜立。	
13	1区	西壁	割り石	0.29	0.15	0.23		ゲンノウ痕	小口と挖え上面・下面・背面をノミによる整成。挖え背面はゲンノウではつり。裏込めが崩れた上に乗っている。崩落のため斜立。	
14	1区	西壁	割り石	0.29	0.26	0.34	ノミ痕 ゲンノウ痕	正立	小口をノミで整成し、挖え上面をゲンノウではつり。	
15	1区	西壁	割り石	0.21	0.11	0.28		ゲンノウ痕	小口と挖え上面をゲンノウではつり。	
16	1区	西壁	割り石	0.48	0.18	—	ノミ痕	正立	小口をノミにより丁寧に整成する。最も下段のため挖えは見えにくいが、角張った整成と思われる。	
17	1区	西壁	割り石	0.25	0.16	0.25	ノミ痕 ゲンノウ痕	正立	小口をノミで整成し、挖え上面・背面をゲンノウではつり。	
18	1区	西壁	割り石	0.22	0.21	0.31	ノミ痕 ゲンノウ痕	正立	小口をゲンノウではつり。挖え背面は自然面のまま。	
19	1区	西壁	割り石	0.29	0.16	—		ゲンノウ痕	正立	小口をゲンノウではつり。最も下段のため挖えは見えない。
20	1区	西壁	割り石	0.30	0.19	0.28		ゲンノウ痕	正立	小口と挖え上面をゲンノウではつり。
21	1区	西壁	割り石	0.20	0.13	—		ゲンノウ痕	正立	小口をゲンノウではつり。最も下段のため挖えは見えない。
22	1区	西壁	割り石	0.17	0.27	0.26	ノミ痕	正立	挖え上面をノミで整成。小口と挖え上面は自然面と思われる。	
23	1区	西壁	割り石	0.45	0.10	—		ゲンノウ痕	正立	小口をゲンノウではつり。ほぼ最も下段のため挖えは見えない。
24	1区	西壁	割り石	0.18	0.13	0.26		ゲンノウ痕	正立	小口と挖え上面をゲンノウではつり。
25	1区	西壁	川岸石	0.14	0.03	0.19			整形成のない円錐形。開詰め石か。	
26	1区	西壁	割り石	0.50	0.23	0.25		ゲンノウ痕	正立	小口をゲンノウではつり。挖え上面に整形成はなく、他の面は他石のため見えない。
27	1区	西壁	割り石	0.32	—	—	ノミ痕 ゲンノウ痕	正立	小口と挖え上面をゲンノウではつり。最も下段のため挖えは見えない。	
28	1区	西壁	割り石	0.23	0.30	0.34			正立 小口から挖えの北面縁辺部にかけてをゲンノウではつり。小口と挖え上面は自然面。	

第1節 検出構造のまとめ

番号	調査区	位置	石材	大きさ		穴		加工痕		既位置	特徴
				小口横	小口縦	控え	縫	横	ノミ痕		
29	1区	西壁	割り石	0.25	0.15	~				ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。ほぼ最下段のため控えは見えない。
30	1区	西壁	割り石	0.30	0.19	~	0.07	0.07	ノミ痕	正立 小口をノミで整形、小口のはば中央上面に穴が開所する。他の面は施石のため見えない。	
31	1区	西壁	割り石	0.23	0.22	0.30				ゲンノウ痕	正立 控え北面をゲンノウではつり。控え上面に整形はなく、他の面は施石のため見えない。
32	1区	西壁	割り石	0.32	0.22	0.33				ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。控え上面に整形はなく、他の面は施石のため見えない。
33	1区	西壁	川原石	0.15	0.03	0.08					整形のない凹面。間詰め石か。
34	1区	西壁	割り石	0.38	0.22	~			ノミ痕	正立 小口をノミで整形。施石のため控えは見えないが、角があるので、整形していると思われる。	
35	1区	西壁	割り石	0.38	~	~				ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。最下段のため控えは見えない。
36	1区	西壁	割り石	0.40	0.12	0.42			ノミ痕	正立 小口をノミで整形するが、控え上面に整形はない。小口の形は底面を上にした逆三角形である。	
37	1区	西壁	川原石	0.12	0.08	~					整形のない凹面。間詰め石か。
38	1区	西壁	割り石	0.25	0.28	~				ゲンノウ痕	正立 小口から控えの側面縁部をゲンノウではつり。他の面は施石のため見えない。
39	1区	西壁	割り石	0.33	0.08	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウではつり。最下段のため控えは見えない。
40	1区	西壁	割り石	0.24	0.13	0.18	0.03	0.06		ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。控え上面中央に穴が開所する。
41	1区	西壁	割り石	0.42	0.15	~				ゲンノウ痕	控えをゲンノウではつっているが、動いているためか、控えの軸が不揃いである。
42	1区	西壁	割り石	0.29	0.27	0.25				ゲンノウ痕	正立 小口の北縁辺部と南縁辺部をゲンノウではつり。控え上面に整形はない。
43	1区	西壁	割り石	0.39	0.17	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口はノミで整形し、控えをゲンノウではつりだが、崩落のためか小口とする面は角を向いている。
44	1区	西壁	割り石	0.33	0.21	0.25				ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。控えは崩落などで見えない。
45	1区	西壁	割り石	0.18	0.11	~				ゲンノウ痕	正立 小口をゲンノウではつり。ほぼ最下段のため控えは見えない。
46	1区	西壁	割り石	0.32	0.21	0.12			ノミ痕		小口と小口から控えの縁部をノミで整形。控え上面に整形はなく、他の面は施石で見えない。
47	1区	西壁	割り石	0.42	0.21	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウではつり。ほぼ最下段のため控えは見えない。
48	1区	西壁	割り石	0.51	0.23	0.07			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口はゲンノウではつり。小口から控えの縁部はノミで整形。
49	1区	西壁	割り石	0.46	0.16	0.11					小口に整形は見られない。上面が削れているが、加工によるかは不明。
50	1区	西壁	割り石	0.43	0.14	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口はノミによる整形だが、控え表面の一部にゲンノウのハツリが見られる。
51	1区	西壁	割り石	0.50	0.10	~			ノミ痕		見える小口の一部はノミによる整形だが、最下段のため控えは見えない。
52	1区	西壁	割り石	0.31	0.22	0.41				ゲンノウ痕	不明 小口と控え北面・表面をゲンノウではつり。配置がおかしいため、動いた可能性が高い。
53	1区	西壁	割り石	0.09	0.11	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウで粗くはつり。間詰め石か。
54	1区	西壁	割り石	0.30	0.12	~			ノミ痕		見える小口の一部はノミによる整形だが、最下段のため他は見えない。
55	1区	西壁	割り石	0.42	0.21	0.15			ノミ痕		小口と控え上面をノミによる整形。小口底面は平らだが、上面は難観があり、崩落を防いでいるかは不明。
56	1区	西壁	割り石	0.35	0.13	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口にノミによる整形が見られるが、小口から控え北面にかけてゲンノウのハツリあり。
57	1区	西壁	割り石	0.38	0.18	0.33				ゲンノウ痕	配置がおかしいため、小口・控えの面が不明だが、全体に粗くゲンノウで整形。

番号	調査区	位置	石材	大きさ		穴		加工痕		原位置	特徴
				小口横	小口縦	控え	縫	横	ノミ痕		
38	I区	西壁	割り石	0.46	0.29	0.15					整形はなく、小口表面は滑らかな自然面だが、控え上面と底面に粗筋があり、原位置を保っているかは不明。
39	I区	西壁	川原石	0.54	0.22	~					正立、整形はなく、小口表面は滑らかな自然面。他の面は他石により見えない。
40	I区	西壁	割り石	0.18	0.11	0.38				ゲンノウ痕	配置がおかしいため、小口・控えの面が不明だが、全体に粗くゲンノウで整形。
61	I区	西壁	川原石	0.33	0.24	0.41					整形はなく、小口表面は滑らかな自然面。他の面は他石により見えない。
62	I区	西壁	川原石	0.22	0.23	~					整形はなく、小口表面は滑らかな自然面。他の面は他石により見えない。
63	I区	西壁	割り石	0.33	0.10	~			ノミ痕		小口をノミで整形するが、他の面は他石により見えない。小口の形は底面を上とした逆三角形である。
64	I区	西壁	割り石	0.61	0.29	0.46				ゲンノウ痕	小口に控え上面・前面をゲンノウで粗くはつり。最上段に位置する。
65	I区	西壁	割り石	0.13	0.20	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウで粗くはつり。開拓の石か、小型で軸が傾いているため、開拓の可能性がある。
66	I区	西壁	割り石	0.30	0.23	~				ゲンノウ痕	正立、小口をゲンノウで粗くはつり。他の面は他石により見えない。
67	I区	西壁	割り石	0.32	0.20	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口はノミによる整形だが、小口から控え下面にゲンノウのはつり。他の面は他石により見えない。
68	I区	西壁	割り石	0.43	0.14	~					小口はやや滑らかだが、底下段ではとんど埋まっているため整形は不明。小口の形は三角形である。
69	I区	西壁	割り石	0.19	0.22	0.35				ゲンノウ痕	小口をゲンノウではつり。控え上面整形はない。小型だが最上段に位置する。
70	I区	西壁	割り石	0.43	0.22	~					正立、整形はなく、小口表面は滑らかな自然面。他の面は他石により見えない。
71	I区	西壁	割り石	0.55	0.20	~			ノミ痕		正立、小口をノミによる粗い整形。他の面は他石により見えない。
72	I区	西壁	割り石	0.45	0.16	~					正立、見える小口は滑らかな自然面だが、最下段のため他の面は見えない。
73	I区	西壁	割り石	0.33	0.26	0.39					小口と控え上面は滑らかな自然面。他の面は他石により見えない。
74	I区	西壁	割り石	0.20	0.33	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウで粗くはつり。軸が傾いているため、原位置を保っているかは不明。
75	I区	西壁	割り石	0.28	0.18	0.37			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口をノミで整形し、小口から控え北面の縁辺部をゲンノウではつり。
76	I区	西壁	割り石	0.22	0.15	0.24			ノミ痕	ゲンノウ痕	小口はノミによる整形とゲンノウのハツリ。上面は自然面と思われる。
77	I区	西壁	割り石	0.34	0.21	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口はゲンノウではつり。部分的にノミによる整形。他の面は他石により見えない。
78	I区	西壁	割り石	0.28	0.17	~					正立、整形はなく、小口は自然面と思われるが、縫内部に対して小口は平らではない。
79	I区	西壁	割り石	0.37	0.27	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口をノミで整形し、小口から控え上面の縁辺部をゲンノウではつり。他の面は他石により見えない。
80	I区	西壁	割り石	0.40	0.12	~					正立、整形がないが、小口は粗い自然面。最下段のため他の面は見えない。
81	I区	西壁	割り石	0.35	0.20	0.37				ゲンノウ痕	正立、小口の北側上面の一部をゲンノウではつり。控え上面・北面・南面に整形はない。最上段に不安定位置しているため、動いた可能性がある。
82	I区	西壁	割り石	0.31	0.30	~				ゲンノウ痕	正立、小口と控え北面をゲンノウではつり。他の面は他石により見えない。
83	I区	西壁	割り石	0.28	0.23	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口はノミによる整形。小口から控え北面・南面・下面の縁辺部にゲンノウのはつり。上面は他石により見えない。
84	I区	西壁	割り石	0.56	0.19	~			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口はノミによる整形。控え前面はゲンノウによるはつり。ほぼ最下段のため他の面は見えない。
85	I区	西壁	割り石	0.34	0.21	0.35				ゲンノウ痕	正立、小口をゲンノウで粗くはつり。控え上面・北面は自然面で、他の面は他石により見えない。小型であるため、開拓の可能性がある。
86	I区	西壁	割り石	0.17	0.10	~				ゲンノウ痕	小口をゲンノウで粗くはつり。他の面は他石により見えない。小型であるため、開拓の可能性がある。

第1節 検出構造のまとめ

番号	調査区	位置	石材	大きさ		穴		加工痕		原位置	特徴	
				小口横	小口縦	撓え	縫	横	ノミ痕			
87	1区	西壁	田原石	0.29	0.21	0.30					整形はなく、小口表面、撓え上面・前面は滑らかな自然面。他の面は崩行により見えない。	
88	1区	西壁	割り石	0.48	0.22	0.41					整形はないが、撓え前面・南面・上面は粗い自然面。最下段のため下面は見えない。	
89	1区	西壁	割り石	0.36	0.11	0.23				ゲンノウ痕	小口をゲンノウで粗くはつり。軸が傾いているため、原位置を保っているかは不明。	
90	1区	西壁	割り石	0.37	0.13	0.37				ゲンノウ痕	小口と撓え上面をゲンノウで粗くはつり。軸が傾いているため、原位置を保っているかは不明。	
91	1区	西壁	割り石	0.31	0.28	0.15				ゲンノウ痕	小口と撓え上面をゲンノウで粗くはつり。軸が傾いているため、原位置を保っているかは不明。崩落上で動いた可能性が高い。	
92	1区	西壁	割り石	0.53	0.26	0.12					最下段で土がかぶっているため整形は不明。	
93	1区	西壁	割り石	0.29	0.19	0.15			ノミ痕		正立、最下段で土がかぶっているため整形は不明。崩落上で動いた可能性が高い。	
94	1区	西壁	田原石	0.51	0.33	0.34					正立、小口と撓え上面が見えるが、整形はなく表面は滑らかな自然面。最下段に位置する。	
95	1区	東壁上	割り石	0.50	0.20	0.59				ゲンノウ痕	正立、全体に粗い自然面が残るが、小口から撓え前面の縁部にゲンノウで粗いはつり。	
96	1区	東壁上	田原石	0.20	0.12	0.33					細き、整形はなく、表面は滑らかな自然面。	
97	1区	東壁上	割り石	0.56	0.23	0.48				ゲンノウ痕	細き、小口は粗くゲンノウではつり。動いたような配置のため、撓えの整形は不明。	
98	1区	東壁上	田原石	0.22	0.07	0.37					細き、整形はなく、表面は滑らかな自然面。	
99	1区	東壁上	田原石	0.19	0.06	0.15					整形はなく、表面はやや粗い自然面。	
100	1区	東壁上	割り石	0.59	0.15	0.28					正立、整形はなく、表面はやや粗い自然面。	
101	1区	東壁上	田原石	0.22	0.16	0.33					細き、整形はなく、表面は滑らかな自然面。	
102	1区	東壁上	割り石	0.19	0.09	0.10					細き、整形はなく、表面はやや粗い自然面。	
103	1区	東壁上	田原石	0.23	0.13	0.41			ノミ痕		正立、小口にかすかにノミ痕か。撓えは滑らかな自然面。	
104	1区	東壁上	田原石	0.19	0.09	0.42					細き、整形はなく、表面は滑らかな自然面。	
105	1区	東壁上	割り石	0.33	0.13	0.47			ノミ痕	ゲンノウ痕	正立、小口と撓え上面はノミによる整形だが、小口前面・南面縁部にゲンノウのはつり。	
106	1区	東壁上	田原石	0.28	0.10	0.40				ノミ痕		正立、小口にかすかにノミ痕。撓え上面・前面は滑らかな自然面。
107	1区	東壁上	割り石	0.19	0.13	0.32			ノミ痕	ゲンノウ痕		小口はノミによる整形だが、撓え上面・前面はゲンノウのはつり。小口前面が三角形であることから、動いて原位置を保っていないものと思われる。
108	1区	東壁上	割り石	0.16	0.04	0.16			ノミ痕		正立、	小口と撓え上面・前面・表面はノミによる整形。薄い石材であることから開詰めの可能性もある。
109	1区	東壁上	割り石	0.26	0.12	0.20			ノミ痕	ゲンノウ痕		撓え上面はノミによる整形、小口と撓え前面・南面にゲンノウのはつり。軸に傾きがある。理論上に位置していることから、動いて原位置を保っていないものと思われる。
110	1区	東壁上	田原石	0.16	0.05	0.34					細き、	整形はなく、表面は滑らかな自然面。
111	1区	東壁上	割り石	0.23	0.09	0.12				ゲンノウ痕		小口と撓え上面・北面・表面をゲンノウではつりだが、崩落により原位置を保っていない。
112	1区	東壁上	割り石	0.23	0.10	0.14				ゲンノウ痕	細き、	小口と撓え上面をゲンノウではつり。
113	1区	東壁上	田原石	0.21	0.10	0.09						整形はなく、表面は滑らかな自然面。開詰めが崩行か。
114	1区	東壁上	割り石	0.14	0.05	0.23			ノミ痕	ゲンノウ痕		全体にノミによる整形だが、撓えにゲンノウのはつり。崩落により、原位置を保っていないため、本来の小口・撓え面かは不明。
115	1区	東壁上	田原石	0.18	0.11	0.14				ゲンノウ痕		崩落して傾いているため、本来の小口にあたる部分は上に向いているがゲンノウによるはつり、撓えにあたる部分が自然面と思われる。

番号	調査区	位置	石材	大きさ		穴穴		加工痕	原位置	特徴
				小口側	小口縁	控え	縫			
116	I区	東壁上	割り石	0.33	0.12	0.22		ノミ痕		小口と控え上面にあたる部分をノミにより整形だが、崩落により原位置を保っていない。
117	I区	東壁上	割り石	0.18	0.12	0.05		ゲンノウ痕		小口にあたる部分をゲンノウではつりだが、崩落により原位置を保っていない。
118	I区	東壁上	割り石	0.33	0.16	0.28		ノミ痕	ゲンノウ痕	控え上面と北面・南面にあたる部分にはノミによる整形が見られ、小口にあたる部分はゲンノウのはつりが見られるが、崩落により縫内部に傾いていたため、本来の小口・控え上面が不明。
119	I区	東壁上	割り石	0.48	0.16	0.26	0.06	0.06	ノミ痕	小口・控え上面・北面・南面にノミによる丁寧な整形が見らる。小口中央上面に矢先が1箇所残る。
120	I区	東壁上	割り石	0.13	0.08	0.10		ノミ痕		小口と控え上面にあたる部分をノミにより整形だが、崩落により原位置を保っていないため、本来の小口・控え上面が不明。
121	I区	東壁上	割り石	0.26	0.20	0.34		ノミ痕		小口・控え上面にあたる部分をノミによる整形だが、崩落により原位置を保っていないため、本来の小口・控え上面が不明。
122	I区	東壁下	割り石	0.09	-	0.27		ノミ痕		控え上面はノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
123	I区	東壁下	割り石	0.20	-	0.19		ノミ痕	ゲンノウ痕	小口はゲンノウによるはつりだが、控え上面はノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
124	I区	東壁下	割り石	0.09	-	0.22				整形はないが、表面は穢い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
125	I区	東壁下	割り石	0.18	-	0.20		ゲンノウ痕		控え上面はゲンノウによるはつりだが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
126	I区	東壁下	割り石	0.55	-	0.30		ゲンノウ痕	正立	控え上面はゲンノウによるはつりだが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
127	I区	東壁下	割り石	0.41	-	0.43		ゲンノウ痕	正立	控え上面はゲンノウによるはつりだが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
128	I区	東壁下	割り石	0.46	-	0.37		ノミ痕		控え上面はノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
129	I区	東壁下	割り石	0.34	-	0.21		ノミ痕		控え上面はノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
130	I区	東壁下	割り石	0.14	-	0.16		ノミ痕	ゲンノウ痕	控え上面と小口にノミによる整形、小口から控え北面縁辺部にゲンノウのはつりがある。埋まっているため、他の面の整形は不明。
131	I区	東壁下	割り石	0.07	0.15	0.15				整形はないが、表面は穢い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
132	I区	東壁下	割り石	0.09	-	0.19		ノミ痕		控え上面と小口にノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
133	I区	東壁下	割り石	0.21	-	0.13				整形はないが、表面は穢い自然面。崩落による軋石か。
134	I区	東壁下	割り石	0.10	0.12	0.11		ノミ痕		控え上面と小口にあたる部分をノミによる整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。埋まっていたため、本来の小口・控え上面が不明。
135	I区	東壁下	田原石	0.11	-	0.15		ゲンノウ痕		整形はないが、表面は穢い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
136	I区	東壁下	割り石	0.28	-	0.27		ゲンノウ痕		控え上面と小口にあたる部分をゲンノウによるはつりだが、崩落により、本来の小口・控え上面が不明。
137	I区	東壁下	割り石	0.17	-	0.25				整形はないが、表面は穢い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
138	I区	東壁下	割り石	0.18	-	0.19				整形はないが、表面は穢い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
139	I区	東壁下	田原石	0.15	-	0.22				整形はなく、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
140	I区	東壁下	割り石	0.12	-	0.20		ノミ痕		控え上面をノミによる整形だが、用まっているため、他の面の整形は不明。
141	I区	東壁下	割り石	0.22	-	0.20		ノミ痕		控え上面はノミによる穢い整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
142	I区	東壁下	田原石	0.18	-	0.22		ノミ痕		控え上面はノミによる穢い整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
143	I区	東壁下	田原石	0.17	-	0.29				整形はなく、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
144	I区	東壁下	田原石	0.43	-	0.24			正立	整形はなく、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。

第1節 検出造構のまとめ

番号	調査区	位置	石材	大きさ		穴		加工痕		観察位置	特徴
				小口横	小口縦	挖え	縫	横	ノミ痕		
145	1区	東壁下	割り石	0.37	—	0.19				ゲンノウ痕	挖え上面はゲンノウによるはつりだが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
146	1区	東壁下	割り石	0.45	—	0.14				正立	整形はないが、表面は粗い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
147	1区	東壁下	田原石	0.37	—	0.29				正立	整形はないが、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
148	1区	東壁下	割り石	0.51	—	0.23				正立	整形はないが、表面は粗い自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
149	1区	東壁下	田原石	0.41	—	0.35				正立	整形はないが、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
150	1区	東壁下	割り石	0.32	—	0.18				正立	整形はないが、表面は滑らかな自然面。埋まっているため、他の面の整形は不明。
151	1区	東壁下	割り石	0.33	—	0.32				ゲンノウ痕	挖え上面と小口はゲンノウによるはつりだが、埋まっているため、他の面の整形は不明。
152	1区	東壁下	割り石	0.55	—	0.24			ノミ痕	正立	挖え上面はノミによる粗い整形だが、埋まっているため、他の面の整形は不明。

六郷堀跡開石・敷石付番表（東西方向）

番号	調査区	位置		石材	大きさ			観測		
					小口横	小口縦	挖え	縫	横	ノミ痕
1	2区	西部	西ペルト	北面	田原石	0.32	—	0.16		
2	2区	西部	西ペルト	北面	田原石	0.14	—	0.30		
3	2区	西部	西ペルト	北面	田原石	0.18	—	0.21		
4	2区	西部	西ペルト	北面	田原石	0.21	—	0.25		
5	2区	西部	西ペルト	北面	田原石	0.21	0.14	0.30		
6	2区	西部	西ペルト	南面	田原石	0.20	0.21	0.38		
7	2区	西部	西ペルト	南面	田原石	0.24	—	0.25		
8	2区	西部	西ペルト	南面	田原石	0.24	—	0.28		
9	2区	西部	西ペルト	南面	田原石	0.17	—	0.31		
10	2区	西部	西ペルト	南面	田原石	0.35	0.27	0.49		
11	2区	西部	中央	西面	田原石	—	0.28	0.36		
12	2区	西部	中央	東面	田原石	0.12	—	0.39		
13	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.11	—	0.21		
14	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.12	—	0.26	軸内側の端部を欠損。はつりか？	
15	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.16	—	0.21	全体的にノミ痕か？	
16	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.29	—	0.47		
17	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.24	—	0.50		
18	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.35	—	0.41		
19	2区	西部	東ペルト	北面	田原石	0.26	—	0.40		

番号	調査区	位置		石材	大きさ			特徴
					小口横	小口縦	芯丸	
20	2区	西部	西ベルト	北側	川原石	0.15	—	0.32
21	2区	西部	西ベルト	北側	川原石	0.20	—	0.33
1	2区	西部	西ベルト		川原石	0.29	0.16	—
2	2区	西部	西ベルト		川原石	0.25	0.14	—
3	2区	西部	西ベルト		川原石	0.26	0.20	—
4	2区	西部	西ベルト		川原石	0.22	0.10	—
5	2区	西部	西ベルト		川原石	0.15	0.13	—
6	2区	西部	西ベルト		川原石	0.21	0.11	0.06
7	2区	西部	西ベルト		川原石	0.23	0.15	0.06
8	2区	西部	西ベルト		川原石	0.29	0.18	— はつりかは不明だが、北側が欠ける。
9	2区	西部	西ベルト		川原石	0.27	0.19	—
10	2区	西部	西ベルト		川原石	0.26	0.15	—
11	2区	西部	西ベルト		川原石	0.18	0.15	—
12	2区	西部	西ベルト		川原石	0.22	0.14	—
13	2区	西部	西ベルト		川原石	0.16	0.12	—
14	2区	西部	西ベルト		川原石	0.25	0.21	0.11
15	2区	西部	西ベルト		川原石	0.26	0.17	0.08
16	2区	西部	西ベルト		川原石	0.15	0.13	—
17	2区	西部	西ベルト		川原石	0.20	0.16	0.12
18	2区	西部	西ベルト		川原石	0.23	0.18	—
19	2区	西部	西ベルト		川原石	0.24	0.16	— はつりかは不明だが、北側が欠ける。
20	2区	西部	西ベルト		川原石	0.29	0.19	—
21	2区	西部	西ベルト		川原石	0.23	0.17	—
22	2区	西部	西ベルト		川原石	0.22	0.21	— はつりかは不明だが、北側が欠ける。
23	2区	西部	西ベルト		川原石	0.24	0.23	0.06
24	2区	西部	西ベルト		川原石	0.23	0.18	0.06
25	2区	西部	西ベルト		川原石	0.25	0.23	—
26	2区	西部	西ベルト		川原石	0.24	0.17	—
27	2区	西部	西ベルト		川原石	0.25	0.18	—

第1節 検出構造のまとめ

番号	調査区	位置		石材	大きさ			特徴
					小口横	小口縦	芯え	
28	2区	西部	西ベルト	川原石	0.29	0.21	—	
29	2区	西部	西ベルト	川原石	0.26	0.16	—	
30	2区	西部	西ベルト	川原石	0.17	0.16	—	
31	2区	西部	西ベルト	川原石	0.24	0.15	0.12	
32	2区	西部	西ベルト	川原石	0.25	0.16	0.12	
33	2区	西部	西ベルト	川原石	0.29	0.16	—	
34	2区	西部	西ベルト	川原石	0.22	0.18	—	
35	2区	西部	西ベルト	川原石	0.27	0.20	—	
36	2区	西部	西ベルト	川原石	0.18	0.11	—	
37	2区	西部	西ベルト	川原石	0.17	0.14	—	
38	2区	西部	西ベルト	川原石	0.20	0.11	—	
39	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.15	0.12	
40	2区	西部	西ベルト	川原石	0.22	0.12	0.01	
41	2区	西部	西ベルト	川原石	0.27	0.16	—	
42	2区	西部	西ベルト	川原石	0.20	0.11	—	
43	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.20	—	
44	2区	西部	西ベルト	川原石	0.20	0.16	—	
45	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.13	—	はつりかは不明だが、西側が欠ける。
46	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.22	0.07	
47	2区	西部	西ベルト	川原石	0.29	0.15	0.07	
48	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.13	—	
49	2区	西部	西ベルト	川原石	0.17	0.16	—	
50	2区	西部	西ベルト	川原石	0.15	0.11	—	
51	2区	西部	西ベルト	川原石	0.18	0.11	—	
52	2区	西部	西ベルト	川原石	0.13	0.10	—	
53	2区	西部	西ベルト	川原石	0.19	0.18	—	
54	2区	西部	西ベルト	川原石	0.23	0.15	0.07	
55	2区	西部	西ベルト	川原石	0.29	0.18	0.04	
56	2区	西部	西ベルト	川原石	0.31	0.17	—	

番号	調査区	位置		石材	大きさ			特徴
					小口横	小口縦	芯え	
57	2区	西部	西ベルト	川原石	0.19	0.06	—	
58	2区	西部	西ベルト	川原石	0.31	0.21	—	
59	2区	西部	西ベルト	川原石	0.24	0.15	—	
60	2区	西部	西ベルト	川原石	0.25	0.18	—	
61	2区	西部	西ベルト	川原石	0.17	0.13	0.08	
62	2区	西部	西ベルト	川原石	0.16	0.12	—	
63	2区	西部	西ベルト	川原石	0.17	0.07	0.06	
64	2区	西部	中央	西面	川原石	—	0.30	0.13
65	2区	西部	中央	西面	川原石	—	0.33	0.10
66	2区	西部	中央	西面	川原石	—	0.22	0.12
67	2区	西部	中央	西面	川原石	—	0.19	0.10
68	2区	西部	中央	西面	川原石	—	0.19	0.06
69	2区	西部	中央	西面	川原石	0.10	0.25	0.07 はつりか不明だが、上部が欠ける
70	2区	西部	中央	東面	川原石	—	0.15	0.02
71	2区	西部	中央	東面	川原石	—	0.09	0.07
72	2区	西部	中央	東面	川原石	—	0.14	0.09
73	2区	西部	中央	東面	川原石	—	0.14	0.12
74	2区	西部	東ベルト	川原石	—	0.19	0.18	
75	2区	西部	東ベルト	川原石	—	0.21	0.06	
76	2区	西部	東ベルト	川原石	—	0.12	0.11	
77	2区	西部	東ベルト	川原石	—	0.15	0.11	
78	2区	西部	東ベルト	川原石	—	0.14	0.09	
79	2区	西部	東ベルト	川原石	0.19	0.14	—	
80	2区	西部	東ベルト	川原石	0.31	0.22	—	
81	2区	西部	東ベルト	川原石	0.26	0.16	—	
82	2区	西部	東ベルト	川原石	0.23	0.12	—	
83	2区	西部	東ベルト	川原石	0.33	0.14	—	

第2節 若林城跡の出土遺物について

出土遺物には、繩文土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、陶器、磁器、瓦、土製品、金屬製品、石製品、木製品などがある。出土遺物全ての分類・集計を行った上で、若林城期の遺物を中心に陶器、土師質土器、中世以前の土器、土製品、瓦、金屬製品、石製品、木製品の種別ごとに観察した。瓦は形状や製作上の特徴、出土傾向について考察した。陶磁器は産地や器種ごとの数量的な時期変遷、出土傾向について考察した。

(1) 瓦

瓦の出土総点数は12,210点で、遺物全体の72.6%を占めている。瓦は特徴から若林城期のものと、それ以外の時期のものに明確に分類できる。若林城期の瓦は本瓦葺きのもので、種類は軒丸瓦・丸瓦の丸瓦系、軒平瓦・平瓦の平瓦系、熨斗瓦・輪違い瓦・菊丸瓦・面戸瓦の棟瓦類、鬼瓦の飾瓦類がある。点数は平瓦が最も多く、次いで丸瓦、熨斗瓦となっており、瓦葺きの構成そのままの様相である。近現代の棟瓦葺きのものも見られ、種類は棟瓦1,031点、軒瓦90点が出土している。また、古代～中世の瓦が1点出土している。これまでの調査で確認している瓦類の器種構成に大きな違いはない。

[分類]

瓦の分類については、若林城跡第8次・第9次調査での分類方法を基本としているが、新たな遺物の発見に伴い刻印瓦A9類、B5類の追加を行なった。なお、瓦の小破片の分類は困難なものが多いため、個々の器種固有の特徴を有するものについては、その特徴に従い分類を行なった。不明瞭なものについては、製作にあたり素材となった器種（軒丸瓦であれば丸瓦、熨斗瓦であれば平瓦）に含めたものもある。なお、法量が判別できる丸瓦や平瓦が少ないため、今回は瓦の法量を基にした分類を行なっていない。

丸瓦系 軒先を飾る軒丸瓦と丸瓦がある。

軒丸瓦 形状から1類：玉縁有り、2類：玉縁無しに分類される。さらに瓦当文様からAa類：珠文三巴文（左巻き+珠文数17）、Ab類：珠文三巴文（左巻き+珠文数21）、B類：三巴文（左巻き）に分類される。釘穴を有するものがある。瓦当部の剥離した痕跡がみられるものについてもここに分類した。

丸 瓦 形状から1類：玉縁有り、2類：玉縁無し、3類：隅切に分類される。凸面に縱位のナデ調整、凹面にコビキ痕、布目痕、吊り糸痕、棒状工具による刺突痕などがみられる。釘穴を有するものがある。

平瓦系 軒先を飾る軒平瓦と屋根の大部分を占める平瓦がある。

軒平瓦 瓦当形状から1類：軒平瓦、2類：滴水瓦に分類される。1類は瓦当文様からA類：三葉文、B類：桔梗文、C類：菊花文に分類される。2類は瓦当文様からA類：花菱文+子葉+唐草文、B類：劍花菱文+双葉文、C類：菊花文+双葉文に分類される。瓦当部の剥離した痕跡がみられるものについてもここに分類した。

平 瓦 形状から1類：平瓦、2類：水返しのあるもの、3類：隅切に分類される。凹面は横位のナデ調整後、端部のナデ調整、凸面は縱位のナデ調整が施され、一部に難砂がみられる。

棟瓦系 大棟や降棟に葺く伏間瓦、棟部に込める輪違いや菊丸瓦、棟と屋根との隙間に詰める面戸瓦がある。

伏間瓦 形状から1類：角棟伏間瓦、2類：棟止瓦、3類：垂れ付に分類される。棟止瓦の瓦当文様にはA類：菊花文がある。

熨斗瓦 平瓦を縱半分に分割した形状で1類：熨斗瓦に分類される。さらに製作上の痕跡から①類：焼成後分割、②類：焼成前分割に分類される。①類は側面に割口と分割線が残存し、②類は分割面に簡易なケズリ調整を施している。また、凹面に別の分割線が残存するもの、滑り止めのためのヘラ状工具による刻線が数条みられるもの、削面が被熱しているものがある。

- 輪違い** 丸瓦を横に分割した形状で、狭端部と広端部があり、狭端部側の形状から1類：直線型、2類：丸型、3類：丸瓦からの転用に分類される。凸面は横位のナデ調整、凹面はコビキ痕、布目痕、吊り紐圧痕がみられる。
- 菊丸瓦** 周縁を持たない菊花文の瓦当部や瓦当部の剥離した痕跡がみられる差込み部で、A類：菊花文のみに分類される。差込み部は短く幅狭で、先端が細くすぼまる形状である。差込み部の凸面はナデ調整、凹面はコビキ痕とナデ調整がみられ、布目痕はみられない。
- 面戸瓦** 主に丸瓦を横に分割した形状で、凹面の四辺にケギリ調整による面取りが施されている。凸面の端部形状から1類：直線型、2類：丸型、長軸方向に斜めに平行切断した形状の3類：隅切、4類：引掛け付に分類される。1類と2類は両端部が弧状に面取りされるものが多い。

第18表 瓦分類表

種類	形状	瓦当文様	製作工程	寸法規格
丸瓦	軒丸瓦	1類 玉縁有り	Aa類 球文三巴文(左巻き) 球文款17	二寸物
			Ab類 球文三巴文(左巻き) 球文款21	一寸物
		8類 三巴文(左巻き)		
	2類 玉縁無し	Aa類 球文三巴文(左巻き) 球文款17		
		Ab類 球文三巴文(左巻き) 球文款21		
		8類 三巴文(左巻き)		
	丸瓦	1類 玉縁有り		二寸物
		2類 玉縁無し		一寸物
		3類 隅切		九寸尺
平瓦	軒平瓦	1類 軒平瓦	A類 二葉文+唐草文(隠帶狀) B類 枝梗文+唐草文(隠帶狀) C類 菊花文+唐草文(隠帶狀)	一寸物 九寸尺
		2類 溝水瓦	A類 花卷文+子葉+唐草文(隠帶狀) B類 前花卷文+双葉文(隠帶狀) C類 菊花文+双葉文(隠帶狀)	
	平瓦	1類 平瓦	A類 全体長27~35cm	一寸物
		2類 水泡し付	B類 全体長40cm以上	
		3類 隅切		九寸尺
棟瓦	伏闇瓦	1類 伏闇伏闇瓦		
		2類 棟止瓦	A類 菊花文	
		3類 重れ付		
	契斗瓦	1類 契斗瓦		1類 構成後分割 2類 構成前分割
		1類 直縁型		一寸物 九寸物
		2類 丸型		
	輪違い	3類 丸瓦転用		
			A類 菊花文	
面戸瓦	面戸瓦	1類 直縁型		
		2類 丸型		
		3類 隅切		
		4類 引掛け付		
	鬼瓦	鬼瓦		
	その他	不明瓦		
	古代の瓦	平瓦		
近現代の瓦	軒棟瓦	1類 軒棟瓦	A類 球文三巴文+江戸式唐草 B類 無文(右持)	
		2類 括頭	A類 球文三巴文+江戸式唐草	
		3類 引掛け付		
	棟瓦	2類 引掛け無し		

『若林城跡第9次・第9次発掘調査報告書』
第22表を加筆・修正

飾瓦系 棟先などを飾る瓦で、棟の末端に取り付ける鬼瓦がある。

鬼瓦 形状や特徴から鬼瓦の特徴を持つもの。

その他 上記の分類に該当しない瓦。

不明瓦 少破片や磨滅のため、種類や形状の判別がつかないものを不明瓦とした。

古代の瓦 若林城期以前の瓦で、平瓦がある。

平瓦 凹面に布目、凸面に繩目タタキがみられる瓦。

近現代の瓦 本瓦とは異なり、丸瓦と平瓦が一体化した瓦である棟瓦や軒先を飾る軒棟瓦がある。

【特徴】

軒丸瓦 117点出土しており、そのほとんどが瓦当部の破片のため、瓦当部径などが判明するものは少ないが、瓦当文様が判別できるものは比較的多い。文様が分類可能な13点のうち、A類の珠文三巴文は破片が2点で、Aa類とAb類が1点ずつである。F012は珠文数17個のAa類と考えられる。珠径は1.5cm、瓦当部径は推定19.0cmである。F013は珠文数21個のAb類と考えられる。珠径は0.9~1.0cm、瓦当部径は推定17.6cmである。2点とも第8次・第9次調査出土のA類の特徴と類似しており、瓦当部径が小型で珠文数が多いものは、珠径も小型である。B類の三巴文は11点あり、瓦当部径はほとんどが17cm前後である。A・B類共通の特徴としては、巴の頭部がやや平坦で、尾は半円を描くように長く伸びる。A類のみの特徴として、珠文は巴の尾と同程度の高さまで盛り上がり、珠文が配置されるために三巴文がB類より一回り小さい。

丸瓦部の長さと形状が判明するものはF002・F005~008の5点である。F002のみ玉縁が付き、F005~008は玉縁が付かず丸瓦部分の尻部が丸く窄まる形状である。

丸瓦 出土した2,292点のうち1類が5点で、残りは少破片である。出土した丸瓦は全て玉縁が付く1類で、尻部が丸く窄まる2類や隅切の3類は出土していない。全体形状が判明するものはF016の1点のみで、玉縁込みの胴の長さは1尺(30cm)程度である。

軒平瓦 97点出土しており、瓦当文様が判別できるものは16点ある。ほとんどが1類の軒平瓦で、F016のみ2類の滴水瓦である。1類の瓦当文様は、A類やB類のみである。唐草文は中心飾りによって端部の巻く方向に違いがあり、A類では中心側が下向きで、外側が上向き、B類では中心側が上向きで、外側が下向きである。また唐草文には、輪郭を隆線で表現するものと全体が隆帯状に盛り上がるものがあり、A類の唐草は隆帯状、B類の唐草は隆線状の縁で表現される。F016の滴水瓦は、8弁の菊花文が中心飾りで左右対称の唐草文が配されており、周縁帯の下部に双葉文を表した文様が組まれている。この文様の組み合わせは、若林城跡第11次調査で軒平瓦2C類として分類された滴水瓦と同じ特徴をもつものである。

平瓦 5,493点出土しており、瓦の出土点数の約45%を占める。これは本瓦葺での点数の多さに加え、一部に判別が難しい熨斗瓦が含まれていることによると考えられる。破片が多く、法量が判別できるものはG017のみである。平瓦の小口には竹管、棒状工具、文字を彫った印判による刻印がみられるものがある。

熨斗瓦 704点出土しており、①類で図化したものが3点で、残りはほぼ少破片である。②類のものは焼成前に分割するため分割面が被熱していると考えられるが、今回被熱が確認できたものには、若林城跡8・9次調査でみられた割口を簡易なケズリ調整で平坦面としたものは無い。なお熨斗瓦の特徴である分割線や滑り止めの溝が認められない破片については、平瓦に分類している可能性がある。

輪違い 152点出土しており、1類7点、2類10点を図化した。残りはほぼ少破片である。法量をみると、長さは13.3~16.5cmのものがほとんどであるが、H007・H008のように18cm前後の大型のものもある。また厚さは2.0cm前後のものが多いが、1.7cmほどの薄手なH004、2.3cmほどの厚手なH008もみられる。広端幅は14.4~17.3cmで、狭端幅は8.7~13.1cmであり、平面形が台形状のものが多いが、広端幅と狭端幅の差がほぼ無いH017やH018のようなものもみ

られる。これらの特徴は、狭端部の形状に関わらずみられ、使用された建物の種類や規模に合わせて製作された結果と考えられる。また、厚みが1.5cm程度になるまで布目か縄目の痕が深く食い込んだH008のようなものや凹面に縄目のあるH007のようなものもみられ、これらは丸瓦転用とされる3類の可能性もある。

菊丸瓦 7点出土しているが、瓦当部と差込み部の破片のみで完形のものは無い。瓦当文様が判別できるH021～023の花弁数は全て10弁である。

面戸瓦 94点出土しており、1類4点、2類2点、3類2点を図化した。残りはほぼ破片である。法量をみると、長さは7.4～9.4cmの間であるが、12.1cmの大型のもの（H030）もある。厚さはほぼ2.0cm以上のもので、1.9cmのものが（H029）1点のみある。

その他の瓦 その他の瓦として、鬼瓦と古代の平瓦が出土しているが、破片のため法量は不明である。近現代の軒桟瓦や棟瓦も出土しているが、今回は図化していない。

【出土傾向】

瓦を出土遺構ごとに集計し、出土傾向をたどった。基本層や搅乱、表土を除き、瓦の総出土数が最も多いのはSK380で1,168点出土している。次いで六郷堀跡が944点、SX12が598点で、100点を超える遺構はSD88、SD89、SD114、SD117と溝からの出土が多く、またSA6から145点出土している。遺構の種類別でみると、最も多いのは土坑からで1,592点出土しており、溝からは1,298点である。出土数の多い遺構について、瓦の種類別に比率をみると、SK380、SD114は丸瓦の比率が平瓦よりわずかに多く、六郷堀跡、SX12、SD88、SD117の平瓦は丸瓦の約2倍出土している。SD89、SD117は平瓦が丸瓦の約5倍出土しており、平瓦の比率も遺構内から出土した瓦の約50～60%を占めている。ただし、これらの瓦の大部分は破片であり、完形のものは少ないとから若林城の改修や廢城時に破損したものを見棄したと考えられる。

【刻印瓦】

50点出土しており、このうち平瓦28点、丸瓦1点、熨斗瓦1点、棟瓦14点、軒桟瓦1点の刻印を写真で掲載した。刻印の形態は若林城跡第5次調査と第8・9次調査で分類を行なっており、これに新たな種類の追加を行なった。なお、刻印がみられる瓦は少破片が多いため、平瓦としたものに熨斗瓦が含まれている可能性がある。

刻印の分類は円形の竹管等をそのまま、あるいは刻み等の加工をした工具で刺突したものをA類、先端を成形した棒状の工具で刺突したものをB類、文字を彫った印判を押したものをC類、ヘラ状か串状の工具などで刺突したものをD類、線刻をF類とし、さらに個々の形状や数、文字の違いで細分した。第10・12～14次調査ではA3・A5・A7・E1類は出土していない。

A類は平瓦、熨斗瓦、棟瓦の小口にみられる。A1類は14点あり、形状は円形で、径が6mm～10mmと幅があるが径6mmの小さめのものが多い。A2類は3点あり、径12～13mmの円が重なっている。G041は片方の円が欠けているが径9mmの円と考えられる。A4類は2点あり、管を4等分する刻みを入れたもので、径は11mm程度である。A6類は4点あり、半円形で幅は7.5～9mmである。G050は両端部が尖った、三日月形に近い。A8類は1点あり、径3mmの円が11mmの間隔で2つ並んでいる。H050は径3.5mmの円が7mmの間隔で3つ並んでおり、新たにA9類とした。G019・039は欠けにより判別が難しいためA類とした。

B類は平瓦、棟瓦の小口にみられる。B1類は2点あり、長方形を対角線で割ったような形状の三角形の刺突で、長さは8mmである。G041は長さ5mmの三角形が円状に、花弁のように並んだ刻印である。円の径は径11mmであり、先端を加工した棒状工具による刺突と考えられる。新たにB5類とした。G020・H039は長方形状の刺突と考えられるが、不明瞭のためB類とした。H040は二等辺三角形状の凹部の中に、長方形状の凸部が残るものである。ヘラ状工具の刺突の可能性もあるが、判別が難しいためB類とした。

C類は丸瓦の凸面、軒桟瓦、棟瓦の小口にみられる。C1類は1点あり、陰刻による幅7mmの方形の枠内に「上」

を篆書で表しているものである。その他C類としたものは軒桟瓦と棟瓦であり、陰刻による方形の枠内に楷書で文字を刻印しているものである。H034は「六」、H041は「九」、H043は「十六」、H044は「四宮」、H046は「ト」である。H042は欠損しているが「九」と考えられる。H048は方形枠の一部が残存しているが、文字は不明である。H045・047は方形枠が無く、文字のみが刻印されており、H045は「四宮」、H047は「サイ」である。H045の例は仙台城二の丸北方武家屋敷地区第11地点からも出土しており、関連がうかがえる。

F類は平瓦、棟瓦の小口にみられる。F1類は1点あり、3~4本による線刻がみられるが意味は不明である。

H049は「ム」と考えられる文字が刻印されており、H047と同じ印判による可能性も考えられる。G029は楷書の文字が刻印されていると考えられるが、判別できない。

これまでの調査で出土した種類に加えて新たに2種の刻印が確認できたが、それぞれ1点のみの出土である。また出土した瓦の全体量における刻印瓦の割合はごくわずかである。

種類	分類	刻印形状	種類	分類	刻印形状	種類	分類	刻印形状
刻印	A1		刻印	A8		压痕	C1	
	A2			A9			D1	
	A3			B1			D2	
	A4			B2			D3	
	A5			B3			E1	
	A6			B4			F1	
	A7			B5			F2	

第123図 刻印他分類模式

『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』
第316図を加筆・修正



図版番号	登録番号	種類	分類	造形・部位	印文位置	備考	図版番号	登録番号	種類	分類	造形・部位	印文位置	備考	
1	6825	平瓦	A1	粗面	小口	径10mm	22	6919	平瓦	A	粗面	小口	長さ9mm	
2	6833	平瓦	A1	SK380 3層	小口	径10mm	23	6928	平瓦	A	SK312 1.5層	小口	長さ9mm	
3	6837	平瓦	A1	SK312 19層	小口	径10mm	24	6936	平瓦	B1	SK380 3層	小口	長さ8mm	
4	6839	平瓦	A1	P2 1層	小口	径8mm	25	6938	残瓦	R2	六瓣輪郭(印)	小口	長さ8mm(印2つ)	
5	6940	平瓦	A1	P2 1層	小口	径8mm	26	6941	平瓦	B5	粗面	小口	径11mm(印はき3mm)の割合4つ	
6	6938	平瓦	A1	SK380 3層	小口	径8mm	27	6929	平瓦	B	粗面	小口	長方形の刻印、幅40mm	
7	6822	平瓦	A1	P5 1層	小口	径5mm	28	6940	残瓦	B	粗面	小口	幅1mm、奥行き約1cmで正面が丸み	
8	6822	平瓦	A1	六瓣輪郭(印)	小口	径6mm	29	F919	瓦JL	C1	粗面	凸面	上:(裏面)、3mmの印判	
9	6835	残瓦	A1	六瓣輪郭(印)	小口	径6mm	30	6934	軒瓦JL	C	粗面	小口	(凸面)、3.5mmの印判	
10	6836	残瓦	A1	六瓣輪郭(印)	小口	径6mm	31	6941	残瓦	C	粗面	小口	(凸面)、3.5mmの印判	
11	6824	平瓦	A1	六瓣輪郭(印)	小口	径6mm	32	6942	残瓦	C	粗面	小口	(凸面)、3.5mmの印判か?	
12	6807	残瓦	A2	複数	小口	径12mm(印2つ)	33	6943	残瓦	C	粗面	小口	(凸面)、複数、10mmの印判	
13	6826	平瓦	A2	粗面	小口	径13mm(印2つ)	34	6944	残瓦	C	粗面	小口	(凸面)、複数、15~17mmの印判	
14	6821	残瓦	A2	複数	小口	径20mm(印2つ)	35	6946	残瓦	C	粗面	小口	(凸面)、複数か?	
15	6831	平瓦	A4	複数	小口	径11mm	36	6948	残瓦	C	粗面	小口		
16	6805	平瓦	A6	SK380 3層	小口	長さ7.5mm、半円状	37	6945	残瓦	C2.5F	粗面	小口	「西宮」の印判か? 挿無し。	
17	6827	平瓦	A6	SK312 3層	小口	長さ8mm、平行状	38	6947	残瓦	C2.5F	粗面	小口	「西」の印判。	
18	6832	平瓦	A6	SK380 3層	小口	長さ9mm	39	6930	平瓦	F1	複面	小口	複面、長さ10mm	
19	6834	平瓦	A6	SK380 3層	小口	長さ8.5mm、二日月状	40	6949	残瓦	F	粗面	小口	「ム」か?	
20	6821	平瓦	A8	粗面	小口	径3mm(印2つ)	41	6929	平瓦	F	粗面	小口		
21	6859	残瓦JL	A9	SK380 3層	小口	径3.5mm(印2つ)								

第124図 刻印瓦

(2) 陶磁器

瓦と共に近世の陶磁器類も出土している。遺物の所属時期については、若林城で使用されていたと考えられる時期として16世紀末～17世紀前葉、廃城後の近世前期として17世紀中葉～後葉、近世後期として18世紀～19世紀中葉、近現代として19世紀後葉以降の4つに大別した。判別が可能なもので破片を含めた点数は陶器が882点、磁器が775点である。時期別では、18世紀～19世紀中葉のものが陶器・磁器とともに最も多く、次いで19世紀後葉以降のものが多い。逆に16世紀末～17世紀前葉や17世紀中葉～後葉のものは、陶器で約10%、磁器は約6%と少ない。この理由としては、若林城の存続期間が10年余りと考えられていることに加え、廃城時に建築部材と同様、陶磁器も含めた生活雑器のほとんどが仙台城二の丸など城外へ持ち出されたことに起因すると考えられる。その他に、遺構の掘り込みを最小限にとどめていることにもよると考えられる。

以下では、陶器と磁器について、産地や器種の変遷と出土傾向について検討する。ただし、第15次調査の陶磁器は、Ⅱ層・搅乱出土かつ全て小片であり、産地同定が不可能なため含んでいない。

[産地と器種]

瀬戸美濃 陶器と磁器が出土しており、陶器は58点、磁器は172点である。器種構成は、陶器が碗・皿・鉢・向付・盤・小壺・擂鉢・壺・瓶類・蓋・火鉢・香炉で、磁器が碗・皿・鉢・急須・湯のみ・壺・小壺・猪口・徳利・瓶類・蓋・植木鉢である。陶器は17世紀中葉～後葉のものが10点、18世紀～19世紀中葉までのものが26点、19世紀後葉以降のものは10点出土している。磁器は18世紀～19世紀中葉までのものが92点、19世紀後葉以降のものが74点出土している。出土遺構については、陶器・磁器とともに、六郷堀跡からの出土が多い。磁器の出土が多い理由として、19世紀代に瀬戸美濃での磁器生産が始まることが考えられる。また今回出土した監獄食器のほとんどが瀬戸美濃産であり、軍隊食器の破片も2点出土していることから、近現代でも集治監や監獄時代の監獄食器としての需要があったと考えられる。瀬戸美濃産磁器の開始に並行し、それまでの肥前産から瀬戸美濃産へとうつる様子がうかがえる。

肥前 陶器と磁器が出土しており、陶器は70点、磁器は418点であり、この出土数は磁器総点数の約53%を占めている。器種構成は陶器が碗・皿・鉢・小壺・瓶類・香炉で、磁器が碗・皿・鉢・湯のみ・小壺・小壺・猪口・徳利・瓶類・蓋・香炉・紅錦口・仏飯器・把手である。陶器は17世紀中葉～後葉のものが最も多く、18世紀以降のものは多くみられない。陶器の数量については、大隅相馬産陶器の生産が17世紀末～18世紀頃に開始されたことに影響を受けていると考えられる。磁器は17世紀中葉～後葉のものが28点と少ないが、18世紀～19世紀中葉のものが369点と急激に多くなる。特に18世紀代のものが多いが、その後19世紀後葉以降のものは10点と一気に減少する。磁器の数量については、19世紀代の瀬戸美濃での磁器生産開始が大きく影響していると考えられる。また、六郷堀跡から出土した肥前産磁器のほとんどが18世紀代のものであり、こちらも瀬戸美濃産磁器生産との関係や影響を受けていると考えられる。肥前陶器・磁器は、より近い生産地の影響により減少する傾向がみられる。出土遺構については、陶器がSX12からの出土が最も多く、次いで六郷堀跡が多い。磁器は六郷堀跡から100点以上出土しており、次いでSX12が多い。

唐津 陶器が9点出土している。器種構成は碗・皿・鉢・向付で、16世紀末～17世紀前葉のものが出土している。六郷堀跡の2・3層から2点、SD114の1層から1点、SX12の15・28層から2点出土し、そのほかは搅乱からである。

波佐見 陶器と磁器が出土しているが、陶器は香炉が1点出土しているのみである。磁器は31点出土しており、器種構成は碗・皿・鉢・壺・瓶類・香炉である。陶器・磁器ともに18世紀～19世紀中葉のものが多い。磁器碗の多くは18世紀頃から生産・流通が始まった「くらわんか手」と呼ばれるもので、J010もコンニャク印判の施された「くらわんか手」である。陶器はSX12からの出土のみ、磁器は六郷堀跡、SK441、SX12から数点出土しているが、ほとんどがI層や搅乱からである。

志野・志野織部 陶器が3点出土している。器種構成は、志野が皿か鉢と考えられる破片1点、志野織部が皿である。3点とも16世紀末～17世紀前葉のもののみで、皿層からの出土である。

織部 陶器が3点出土している。器種構成は碗と皿で、時期は16世紀末～17世紀前葉のもののみである。六郷堀跡から2点出土しており、そのほかはⅢ層からの出土である。

丹波 陶器が23点出土している。器種構成は鉢・盤・擂鉢で、時期も16世紀末～17世紀前葉のものが多い。丹波の擂鉢は、口縁部の断面形状による時期判別が可能であるとされており、時代が下るにつれて方形から三角形へと変化する。口縁部が残存しているI087の断面形状は方形のため、形態変化の初期段階のものと考えられる。SK444から4点出土しており、そのほかはⅢ層・Ⅳ層と搅乱からの出土である。

備前 陶器が2点出土しており、器種の判別可能なものはI080の油瓶壺である。しかし、搅乱からの出土で時期も不明である。

岸窯系 陶器が15点出土している。器種構成は皿・鉢・擂鉢・瓶類・香炉である。17世紀中葉～後葉のものが多く、六郷堀跡、SA8、SX12、SX23から出土している。16世紀末～17世紀前葉のものは概ね擂鉢であり、口縁部形状が判別できるものは無い。またI037は9本一単位の擂目をもつ。擂鉢は六郷堀跡、SX12、SX23から出土している。

越前 陶器が98点出土している。器種構成は甕のみである。17世紀中葉～後葉のものが5点多いが、SK444から2点出土した以外は搅乱や表土からである。19世紀後葉以降のものは3点でSK443と六郷堀跡から出土している。

京都系 陶器の碗が1点出土している。I024は釉下に白化粧土が塗られており、漢詩と思われる文字や色絵が施されている。

京・信楽 陶器の碗が3点出土している。18世紀～19世紀中葉のもののみで、六郷堀跡、SX12から出土している。

大堀相馬 陶器が340点出土している。器種構成は碗・皿・鉢・土瓶・土瓶の蓋・急須・急須の蓋・湯のみ・小盃・小杯・猪口・土鍋・土鍋の蓋・鍋・甕・徳利・瓶類・蓋・香炉・植木鉢・仏瓶器・仏花瓶である。18世紀～19世紀中葉のものが303点と多く、このうち121点は碗である。碗には灰釉が多く、I016やI022のように鉄軸が掛け分けされたものやI018など腰折れもみられる。六郷堀跡、SX12からの出土が多く、SX12からの出土はほぼ碗であり、小ぶりなものも1点出土しているが、端反りなどはみられない。六郷堀跡には端反り碗が1点みられ、そのほかにも皿・鉢・小杯・土鍋・瓶類・香炉・仏瓶器などがみられる多様な器種構成である。

小野相馬 陶器が64点出土している。器種構成は碗・皿・鉢・甕・蓋・香炉である。18世紀～19世紀中葉のものが60点と多く、それ以外は近現代が1点、時期不明が3点とほぼ近世で占められている。六郷堀跡、SX12からの出土が多い。

堤 陶器が56点出土している。器種構成は碗・鉢・土瓶・擂鉢・土鍋・鍋・焙烙・甕・壺・油瓶壺・植木鉢・土管である。18世紀～19世紀中葉のものが35点と多く、19世紀後葉以降のものも18点みられる。六郷堀跡からが17点と多く出土し、そのほかにSX12から7点、SK441から4点出土している。擂鉢の口縁部形態は直立気味に立ち上がる形状で丹波産や岸窯系とも異なる。擂目もI055が8本一単位、I048が13本一単位である。

切込 磁器が4点出土している。器種構成は碗のみで、時期も18世紀～19世紀中葉のもののみである。出土遺構は六郷堀跡から1点で、そのほかはⅢ層と搅乱からの出土である。

中国 磁器が21点出土している。器種構成は碗・皿・鉢である。ほぼ16世紀末～17世紀前葉のもので、中世のものが2点、近世のものが1点みられる。青花が多いが、白磁と考えられるものもみられる。

その他 その他の陶器・磁器としては、九谷、相馬、在地産、中世の常滑、白石、古瀬戸、古代の猿投などがある。

第19表 遺物集計表

瓦(1)												
石丸瓦 瓦頭・瓦身 合計	丸瓦 瓦頭・瓦身 合計	軒平瓦 瓦頭・瓦身 合計	平瓦 瓦頭・瓦身 合計	蟹斗瓦 瓦頭・瓦身 合計	丸瓦(輪郭有) 瓦頭・瓦身 合計	丸瓦(輪郭無) 瓦頭・瓦身 合計	面戸瓦 瓦頭・瓦身 合計	鬼瓦 瓦頭・瓦身 合計	不規瓦 瓦頭・瓦身 合計	滴水瓦 瓦頭・瓦身 合計	特殊瓦 瓦頭・瓦身 合計	瓦瓦 瓦頭・瓦身 合計
S060 1 355 51 5,445	57 7,154 10 332 1 240							24 86				145 13,299
S07 1 150	1 150											1 150 0
S0141 1 95	1 95											1 95 0
S020 18 1,099	4 1,129 2 615 2 231						15 202					41 3,276
S024 2 709	10 2,230 2 847											14 3,816
S025 16 3,720 2 614 36 3,434 9 818							1 4	1 861				65 9,141
S027 1 259	2 773	3 264					3 29					6 284
S028 23 16,565 63 25,015 12 111,942 148 43,925 34 14,637 3 750			1 86	4 932	1 240 92 1,620				1 662			8 1,912
S029 6 3,679 21 8,096 9 7,716 136 35,619 31 17,109 2 336				5 1,337	35 81							382 11,631
S030 4 193	4 191											8 384 0
S031 1 92	3 847											4 929
S032 4 236							1 72					1 72
S033 1 32	2 267											4 286
S034 3 255												3 239
S035 7 299	3 294						2 22					5 277
S036 17 1,923 6 1,093 5 1,510							1 16					11 509
S037 2 123 47 6,556 1 386 65 5,391 19 2,026 7 984							40 700					18 14,547
S038 26 4,143 1 210 118 13,534 25 5,647							1 162	24 249				195 22,340
S039 5 229	26 2,279 12 1,427 1 326						1 211	18 161				63 4,653
S040 1 29	1 742 46 5,383 10 1,290 7 1,381						4 971	1 4				72 14,929
S041 5 826	8 696 1 139 2 234						4 99					20 1,724
S042 29 6,125 17 1,923 6 1,093 5 1,510							4 101					61 16,740
S043 4 358	6 569 1 29 1 273						6 96					18 1,265
S044 4 516									1 473 4 3,464			9 4,534
S045 1 211	7 1,032 2 138								1 80			11 1,461
S046 2 96	10 129											12 214
S047 5 198	3 197											12 325
S048 1 194	1 14											2 205
S049 4 335 65,649 321 56,961 115 16,160 4 8,382					7 1,719				1 168 122,393			14 977
S050 6 675							5 15		3 287			5 32
S051 5 37												1 96
S052 1 86												1 96
S053 3 155	9 370											12 325

$\bar{H}(2)$

品種・系年	籽丸瓦		丸瓦		軒平瓦		平瓦		蟹斗瓦		輪郭瓦		瓦瓦小輪郭瓦		菊丸瓦		面丁瓦		鬼瓦		不規瓦		滴水瓦		斜切瓦		斜丸瓦		合計	
	品種	系年	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	台数	重量(g)	
S4306		2	600	3	537																							5	1,157	
S4317	1	110	2	340	1	140																						4	590	
S4318	6	695	14	1,270	1	27																						26	5,362	
S4411		27	5,096	56	6,520	3	905			1	91		3	146														90	13,157	
S4412		30	2,401	27	3,091	1	58	1	270				9	298														78	6,918	
S4413	1	165	11	692	1	174																						13	941	
S4414		30	2,444	44	4,628	2	317						1	56														3	279	
S4416				2	143																							80	6,774	
S4448	2	51	1	25	1	16																						2	143	
S4449				3	43																							4	92	
S4452	1	265																										3	43	
S4604	6	2,305	4	270	4	240																						1	265	
S4608	7	1,271	6	219									1	190														1	120	
S4606	3	632	2	190										2	23													7	755	
S4602	3	101	4	76	2	128																						9	305	
S4609	1	148	51	8,963	91	13,191	13	5,896	17	3,218			2	330	1	351	1	19			1	386	5	762		185	31,154			
S4312	5	1,315	145	24,301	3	540	356	13,903	35	5,546	5	299	2	691	9	878	2	444	36	472								598	78,306	
SX23	5	940	12	2,676	573	16,750	26	5,896	7	1,045	14	5,030	2	102	14	5,030	2	20			3	1,063							36	10,902
六形瓦	9	1,220	149	22,181	12	2,676	573	16,750	26	5,896	7	1,045		1	384	4	635									7	1,971	104	13,246	
小選別合計(1)																														
P4		1	270		3	294	1	8																			2	401		
P5		3	329	2	401																						6	1,368		
P6		4	771	1	70	1	166																				2	401		
P7		7	232																									9	1,346	
P10	1	53	17,523	43	8,680	1,914	18,853	259	24,278	52	18,870	10	555	1	20	34	4,988	1,147	14,634	2	106	1	58	8	426	129	6,215		4,376	364,228
IV	54	2	160	5	261																							7	61	
IV	2	126	17	1,409	53	2,154	18	2,184	7	1,359	5	222																1	40	9,720
VII	1	54																										1	54	
純瓦(1面)	7	1,963	267	36,549	8	2,378	969	88,191	51	6,832	8	5,348		1	276	14	1,351	1	89	101	1,099		63	12,015	734	71,145		1	53	
素土(1面)	2	114	32	6,102	1	45	109	8,819	6	783	1	123		1	89	2	266		20	650								2	104	227,245
不明	1	289	82	5,417	291	9,341	10	545	1	52	9,341	10	545	1	4	177		27	173		3	651	1	1,209	18,354		183	26,093,0		
合計	117	31,427	11,292	104,720	97	26,923	1,631,987	204	111,079	152	36,824	15	777	7	1,868	94	14,776	7	1,092	2,106,256,789	2	106	2	619	90	16,568,1,031,995	1	183	12,210	1,285,960

瓦以外の遺物(1)

番号・系年号	銅鏡	鏡面	鏡裏	瓦類上端	瓦類下端	漆器	鐵製品	土師器	灰陶器	陶製品	鐵製品	金銀製品	石製品	木製品	天然繊物	レンガ片	瓦	ガラス製品	近代機械	近世物	古物	合計
S46				35				1					8							4	48	3
S47					2				1													
S0141	4	4	6					4			3	1	1								24	24
S429	1				1															2	2	
S422	1																			1	1	
S423					1															1	1	
S425					12	1														13	13	
S426					3	1														4	4	
S814					2															3	3	
S0173	1																			1	1	
S0867	1																			1	1	
S0888				31				3	4	1			32				10		10	1	92	
S089	1	1	15					1					12				2		15		47	
S090	1		2		2								7				2		2		7	
S091	4								1								1			6	6	
S093									1											1	1	
S099									1											1	1	
S0101								1					1							2	2	
S0113					5															5	5	
S0114	4				24								4							23	23	
S0117					1				1										2	2		
S0119	1																			1	1	
S0120									1											1	1	
S0121				9																9	9	
S0123		1						1												2	2	
S0128									1											1	1	
S148									2											2	2	
S8375	5	6	2		1					1									15	15		
S8376				4																4	4	
S8377	3	1			2								5	1			19		6	6		
S8380	4	1			240	6	1	2					5			19			13	291		
S8381	2	1			2								1	1		4			10	10		
S8383	1		1										1			1				4	4	
S8384																	2		2	2		
S8385					1												2			1	1	
S8389	1		2		4												2			9	9	
S8393										1										6	6	

瓦以外の遺物(2)

番号・系木名	鉢形	縁形	瓦面	瓦面裏	縁面	縁面裏	瓦面	瓦面裏	縁面	縁面裏	瓦面	瓦面裏	瓦面	瓦面裏	瓦面	瓦面裏	瓦	石	ガラス片	レンガ片	自然破片	瓦類	瓦類	合計	
SK436											1													2	
SK438	3				4						13				1									23	
SK441	18	13	1			1					2				3	1								39	
SK442	2					15																			18
SK443	1					3																			4
SK444	6	1																							9
SK445																									1
SK446																									1
SK448																									4
SK449																									2
SK449																									20
SK450																									1
SK456	3																								1
SK460	5	9	1			2	1																	3	
SK468																									18
SK496																									1
SK499	2																								5
SK502																									1
SK516																									1
SK600	5																								3
SK112	120	89	2			122	1				22	3	1	7	2	3	7								189
SK117																									2
SK23	1																								3
P2	218	246	3		2	8	96	2	1	11	1	21		3	4	6	14		1					2	
P3	1											10	3											14	
P5	1																								4
P6	1																								1
P7	1																								1
六透鏡																									
河川網																									
小漁船2-1																									
小漁船1-2																									
W6層																									
IV層(W層)																									
V層																									
樹木(木柵)																									
糞土(1層)																									
不明	4	1			4						13	2	3	1	4	2	1	2						2	27
合計	9413	872	29	781	12	43	43	911	66	9	53	19	132	5	24	371	23	29	9	6	2	54	62	12	4,964

第11章 総 括

1. 今回の調査は宮城刑務所全体改築に伴う若林城跡の調査であり、北収容棟建設及びその外構工事・第二正門仮設フェンス設置に伴うものである。
2. 確認された基本層は、Ⅲ層（御薬園時代の畠耕作土）、Ⅳ層（若林城造営時の整地土）、V層（旧表土）、VI層（自然堆積層・シルト層）、VII層（自然堆積層・砂礫層）である。若林城造営時の整地土であるⅣ層は、第10・12～15次調査区南西～東側までの広がりが見られ、場所によって異なる層厚・土質を確認することができた。特に東側全体には最も厚いところで60cmもの厚さがあり、これらは自然地形の低地部に敷かれたものと考えられる。遺構はⅣ層・VI層面で確認している。
3. 基本層についての新たな発見として、若林城造営時の整地土であるⅣb層（従来のⅣ層）のほか、その上面に瓦片を含む整地土であるⅣa層を確認した。第13次調査1区で確認でき、瓦片を含むことから御薬園時代のものの可能性がある。
4. 調査区南側の表御殿範囲北端にあたる地区においてSB5を確認した。
SB5は、Ⅳ層整地土上に柱間を六尺五寸の基準で建てられており、東西14間（27.5m）以上、南北3間（5.9m）の東西棟建物である。礎石跡の埋土内には若林城期の瓦が全く含まれないことから、若林城期の建物と考えられる。南側は第7次調査区と接しており、SB5は第7次調査で確認した建物の一部であることが明らかとなった。建物の規模や形状から仙台城二の丸に描かれた『肴部屋』の可能性が考えられる。
5. 調査区北西側の大手門から北にあたる地区において東西約15.7m、南北約3.0mの規模を持つSB14を確認した。方向は六尺五寸の方間に北へ φ 偏した建物である。SB14はⅣa層で検出したことから、御薬園期のものの可能性がある。
6. 若林城内の御殿建物範囲北東において、堀跡や溝跡が複雑に配置された広範囲のa、bの区画が存在するのを確認した。
aは北辺がSA18、南辺がSA20に囲まれた区画、bは北辺にSA20とSA24、西辺にSA23、南辺にSA22により囲まれた区画である。これらの区画はこれまで確認した御殿建物の北東にあり、表御殿に対しての裏向きのエリアと考えられる。
a,bの区画内の南東側にSD114、北東側にSD123の石組み水路跡が存在しており、これらは西側で接続する可能性があり、排水路として利用されていたと考えられる。またSD114はSA 19-20-21より新しいことから、若林城が存続する短い期間内で改修が行われていたと考えられる。
7. 第10次・第13次・第14次調査では、城内に引込まれたかつての六郷堀の一部を確認した。
六郷堀跡は、「御修復帳」などにその存在が記されていたが、調査によって位置・規模などを確認できたのは今回が初めてである。第13次調査1区で南北方向、第13次調査2区と第14次調査区で東西方向の2方向を確認した。擾乱で削平され、堀内には多量の廃材が廃棄されている。また新たな掘削により底面や壁面に組まれた石組みの残存は極めて悪い。壁に残る側石と裏込めから、少なくとも2時期あることを確認した。堀の配置は絵図と同様の配置をみせる。
8. 若林城造営以前の河川跡を確認した。河川跡は若林城造営の際に人為的に埋められたと考えられる。

六郷堀の位置が河川跡に近接していることから、六郷堀開削時にこの河川跡を利用したと考えられる。

[出土遺物について]

1. 第10・12～15次で出土した若林城期の遺物は瓦（軒丸瓦、丸瓦、軒平瓦、平瓦、熨斗瓦、輪違い、菊丸瓦、面戸瓦、鬼瓦）、陶器（肥前、唐津、瀬戸美濃、織部、志野織部、志野、丹波、備前、岸）、磁器（肥前、波佐見、瀬戸美濃、中国）、土師質土器（皿、焼塩壺）、金属製品（鉄釘）である。
2. 第10・12～15次で出土した若林城期以降の遺物は陶器（肥前、瀬戸美濃、丹波、大堀相馬、小野相馬、堤、京焼、京・信楽、岸、越前）、磁器（肥前、波佐見、瀬戸美濃、九谷、切込、中国）、瓦質土器（火鉢、火消壺、植木鉢、十能）、土製品（坩埚、土人形）、金属製品（煙管、銅錢、鉛玉）である。
3. 若林城期に相当する遺物が少ないが、この理由として城の存続期間が短いことが考えられる。
4. 瓦については、建物の改修時の破損などで再利用できなかつたものが廃棄されたものと考えられる。特に丸瓦と平瓦が多く、当時間いていた溝や土坑を廃棄場所としたため、まとまって出土する傾向にあると考えられる。
5. 瓦当部の文様は、過去の若林城調査で出土したものと概ね同じものであるが、11次調査で出土した滴水瓦と同じ文様の2C類が出土している。
6. 瓦にみられる刻印については、これまでの調査で分類された種類のほかにA9類、B5類を新たに確認した。
7. 陶磁器については、破片が多いが完形に近いものも出土している。陶磁器の傾向として、時期別では特に18世紀～19世紀代のものが多く、産地別では陶器が大堀相馬、磁器が肥前と瀬戸美濃のものが多い。

参考・引用文献

- 飯村均 室野秀文『東北の名城を歩く 南東北編』吉川弘文館 2017
- 江戸遺跡研究会『図説 江戸考古学研究事典』柏書房 2001
- 江戸遺跡研究会『江戸の食文化』吉川弘文館
- 江戸遺跡研究会『江戸の町人地1—遺跡から見る近世都市江戸』 2015
- 江戸遺跡研究会『江戸の町人地2—遺跡から見る近世都市江戸』 2016
- 江戸遺跡研究会『遺物にみる幕末・明治』 2018
- 追川吉生『江戸のミクロコスモス 加賀藩江戸屋敷』シリーズ歴史を学ぶ011 新泉社 2004
- 追川吉生『江戸城・大名屋敷』江戸のなりたち1 新泉社 2007
- 小井川百合子『木村宇右衛門覚書 伊達政宗言行録』新人物往来社 1997
- 大橋康二『文様別 そば猪口図鑑』青玄舎 2011
- 小川望『焼塙董と近世の考古学』同成社 2008
- 小沢朝江・水沼淑子『日本住居史』吉川弘文館 2006
- 小倉強『明治の洋風建築』 1976
- 学習研究社『仙台城』歴史群像 名城シリーズ13 1996
- 学習研究社『図説 城造りのすべて』歴史群像シリーズ 2006
- 学習研究社『名古屋城』歴史群像 名城シリーズ 2000
- 株式会社宇瓦工業所『葺上の跡』 2006
- 神崎勝『治金考古学概論』 2006
- 北日本近世城郭検討会『城を守るもの 堀と土塁—城絵図の考古学—』 2005
- 木全敬蔵『測量技術』『講座・日本技術の社会史 第六巻』 土木 1984
- 木村浩二『江戸時代の仙台を歩く—仙台地図さんぽ』風の時編集部 2016
- 木村礎・藤野保・村上直編集『藩史大辞典 第1巻 北海道・東北編』 1988
- 九州近世陶磁学会『九州陶磁の編年』 2000
- 九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁—東日本の流通をさぐる—』 2001
- 京都国立博物館『京焼—みやこの意匠と技—』 2006
- 小林章男・山田脩二『瓦—歴史とデザイン』 2001
- 小林清治『仙台城と仙台領の城・要害』日本城郭史研究叢書第二巻 名著出版 1982
- 近藤真佐夫『東北地方における城郭瓦の受容と展開』『森宏之君追悼城郭論集』織豊期城郭研究会 2005
- 篠山町教育委員会『史跡篠山城跡一二の丸発掘調査報告書—』篠山町文化財資料 第28集 1995
- (財)大阪府文化財センター『大阪城址Ⅲ』(財)大阪府文化財センター調査報告書第144集 2006
- (財)新宿区生涯学習財團 新宿歴史博物館『新宿歴史博物館平成18年度特別展 「徳川御三家 江戸屋敷発掘物語」—尾張家の説明— 展示図録』 2006
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の美濃窯』 2003
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代の瀬戸・美濃窯』 2004
- 財団法人瀬戸市埋蔵文化財センター『江戸時代のやきもの—生産と流通—』 2006
- 佐賀県立名護屋城博物館『特別史跡「名護屋城跡並びに陣跡」前田利家陣跡』 2008
- 佐藤淳『仙台市若林城跡の実像』『日本歴史 第706号』日本歴史学会 2007
- 佐藤洋『仙台城跡出土の陶磁器と在地の焼物流通』『季刊考古学第110号』 2010

- 佐藤洋「仙台城出跡出土の陶磁器」『淡交』淡交社 2005
- 佐藤洋・森田義史・大久保弥生「宮城県内近世遺跡出土の土人形」『関西近世考古学研究16土人形から見た近世社会』
関西近世考古学研究会 2008
- 佐藤巧「近世武士住宅」叢文社 1976
- 織豊期城郭研究会「織豊城郭創刊号」 1994
- 織豊期城郭研究会「織豊期城郭の瓦」織豊期城郭資料集成Ⅰ 1994
- 白幡洋三郎「江戸の大名庭園 INAX ALBUM25」 1994
- 新宿区立新宿歴史博物館 「柏木・角筈一日屏風」の世界 1990
- 新人物往来社「日本城郭体系3」 1981
- 瑞巌寺「瑞巌寺の歴史」 1997
- 瑞巌寺「瑞巌寺」 2001
- 鈴木功・堀江格「福島市飯坂町岸窯跡について」『福島考古第37号』 1996
- 関根達人「相馬焼の生産と流通」『江戸の物流—陶磁器・漆器・瓦から—』江戸遺跡研究会 1999
- 瀬戸市史編纂委員会「瀬戸市史陶磁史篇六」 1998
- 仙台市「仙臺市史 第1巻」 1955
- 仙台市教育委員会「郡山遺跡—第112次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第222集 1997
- 仙台市教育委員会「郡山遺跡—第124次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第251集 2001
- 仙台市教育委員会「郡山遺跡—統括編(1)」仙台市文化財調査報告書第283集 2005
- 仙台市教育委員会「仙台の遺跡(改訂版)」仙台市文化財パンフレット第55集 2005
- 仙台市教育委員会「仙台城跡1—平成13年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第259集 2002
- 仙台市教育委員会「仙台城跡2—平成14年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第264集 2003
- 仙台市教育委員会「仙台城跡3—平成15年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第270集 2004
- 仙台市教育委員会「仙台城跡4—平成15年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第271集 2004
- 仙台市教育委員会「仙台城跡5—平成16年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第285集 2005
- 仙台市教育委員会「仙台城跡6—平成17年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第297集 2006
- 仙台市教育委員会「仙台城跡7—平成18年度調査報告書」仙台市文化財調査報告書第309集 2007
- 仙台市教育委員会「仙台城跡—仙台市高速鉄道東西線関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ」仙台市文化財調査報告書第342集 2009
- 仙台市教育委員会「仙台城三ノ丸跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第76集 1985
- 仙台市教育委員会「仙台城本丸跡1次調査 出土遺物編」仙台市文化財調査報告書第282集 2005
- 仙台市教育委員会「仙台城本丸跡1次調査 本文編」仙台市文化財調査報告書第349集 2009
- 仙台市教育委員会「仙台市宮城野区・若林区文化財分布図」 1996
- 仙台市教育委員会「年報6」「若林城跡」仙台市文化財調査報告書第83集 1985
- 仙台市教育委員会「保春院前遺跡他 発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第274集 2004
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡第16~18次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第140集 1990
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡第19次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第141集 1990
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡第22次・23次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第192集 1994
- 仙台市教育委員会「南小泉遺跡第28次発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第325集 2008
- 仙台市教育委員会「養種園遺跡発掘調査報告書」仙台市文化財調査報告書第214集 1997

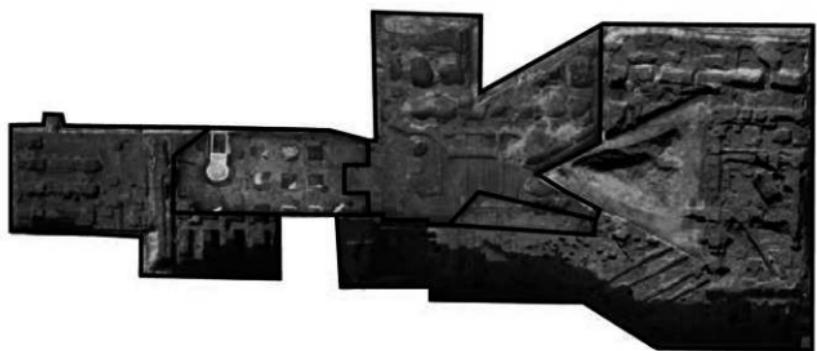
- 仙台市教育委員会『若林城跡』仙台市文化財調査報告書第90集 1986
- 仙台市教育委員会『若林城跡第3次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第256集 2002
- 仙台市教育委員会『若林城跡第4次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第292集 2005
- 仙台市教育委員会『若林城跡第5次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第323集 2008
- 仙台市教育委員会『若林城跡第6次・第7次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第306集 2007
- 仙台市教育委員会『若林城跡第8次・第9次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第377集 2010
- 仙台市教育委員会『若林城跡第11次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第383集 2011
- 仙台市教育委員会『若林城跡と養種園遺跡』仙台市文化財パンフレット第48集 2001
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編2 近世1 藩政』 1996
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 資料編13 伊達政宗文書4』 2007
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編1 原始』 1999
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編2 古代中世』 2000
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編3 近世1』 2001
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編4 近世2』 2003
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編5 近世3』 2004
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 通史編6 近代1』 2008
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編1 自然』 1994
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編2 考古資料』 1995
- 仙台市史編さん委員会『仙台市史 特別編7 城館』 2006
- 仙台市博物館『図説 伊達政宗』河出書房新社 1986
- 仙台市博物館『仙台市博物館調査研究報告 第6号・昭和60年度』 1986
- 仙台市養種園編集 仙台市発行『養種園90年のあゆみ』 1989
- 高橋昭子・馬場昌子・山田幸一監修『台所のはなし』物語ものの建築史 鹿島出版会1992
- 高橋康夫『建具の話』物語ものの建築史 鹿島出版会 1985
- 竹内靖長『江戸時代の上水道施設』『季刊考古学第108号』雄山閣 2009
- 畠大介『発掘された東日本の河川堤防』『季刊考古学108号』雄山閣 2009
- 田中昭三『大名庭園』小学校 1997
- 田中哲雄『日本の美術 No403 城の石垣と堀』至文堂 1999
- 田中哲雄『日本の美術 No429 発掘された庭園』至文堂 2002
- 谷川章雄『巨大都市江戸の土木工事』『季刊考古学108号』雄山閣 2009
- 谷口徹『御殿の構造』『季刊考古学第103号』 2008
- 中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995
- 坪井利弘『古建築の瓦屋根』理工学社 1981
- 坪井利弘『これだけは知っておきたい建築家のための瓦の知識』鹿島出版会 1988
- 坪井利弘『国鑑瓦屋根(改訂版)』理工学社 1986
- 坪井利弘『日本の屋根瓦』理工学社 1976
- 出川直樹『古陶磁真層鑑定と鑑賞』講談社 2005
- 東海大学校地内遺跡調査団『回せ!一回転運動から考古資料を考えるー』 2009
- 東京都埋蔵文化財センター『汐留遺跡Ⅰ 旧汐留貨物駅跡地内遺跡の発掘調査』東京都埋蔵文化財センター調査報

告第37集 1997

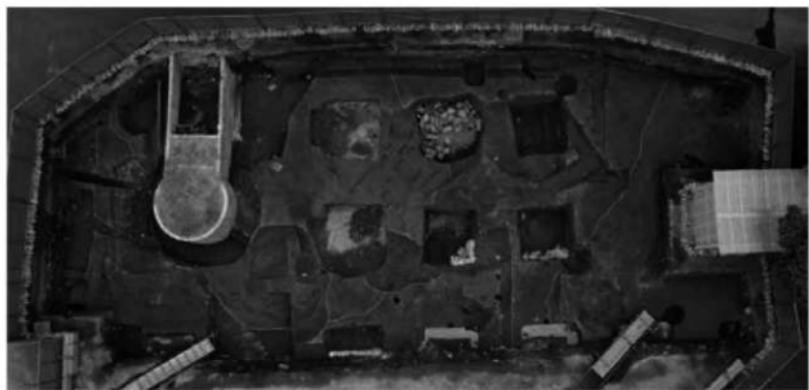
- 東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報1』 1985
 東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報6』 1993
 東北大学埋蔵文化財調査委員会「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報7』 1994
 東北大学埋蔵文化財調査室「東北大学埋蔵文化財調査年報19」第2分冊 2009
 東北大学埋蔵文化財調査室「東北大学埋蔵文化財調査年報19」第4分冊 2008
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報8』 1997
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報9』 1998
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸跡」『東北大学埋蔵文化財調査年報13』 2000
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城跡二の丸第17地点の調査」『東北大学埋蔵文化財調査年報18』 2005
 東北大学埋蔵文化財調査研究センター「仙台城二の丸北方武家屋敷地区第7地点(BK7)の調査」『東北大学埋蔵文化財調査年報19』第1分冊 2006
 東北歴史資料館「宮城県の瓦職」東北歴史資料館資料集34 1993
 土岐津町誌編纂委員会「土岐津町誌史料編」 1999
 中井均「滴水瓦に関する一考察—なぜ城郭建築に多く葺かれたのか—」『織豊城郭第2号』織豊期城郭研究会 1995
 中井均「城館調査の手引き」山川出版社 2016
 中井均「近世城郭の石切り場」『季刊考古学第103号』雄山閣 2008
 名古屋市「名古屋城管理事務所編集『旧国宝名古屋城本丸御殿資料調査報告書』」1979
 名古屋市「特別史跡名古屋城跡 本丸御殿跡発掘調査報告書 第1~4次調査」2009
 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館「飛鳥の工房」 1992
 植崎彰一「三彩縁軸・瀬戸・常滑 日本のやきもの⑥」講談社 1992
 西大立目祥子「100年前の仙台を歩く—仙台地図さんぽ」風の時編集部 2009
 西和夫「図解 古建築入門」彰国社 1990
 西桂「日本の庭園文化」学芸出版社 2005
 日本鬼師の会「鬼瓦・瓦屋根再考」 2005
 橋本文雄「日本の美術 №75 書院造」至文堂 1972
 波多野純「水道(用水)」「講座・日本技術の社会史 第六卷」土木 1984
 彦根城博物館「特別史跡彦根城跡 表御殿発掘調査報告書」 1988
 平井 勝「城と書院」日本の美術13 平凡社 1965
 福島市教育委員会「岸窓跡—近世窓跡の調査—」福島市埋蔵文化財報告書第111集 1998
 藤岡通夫「城と書院」ブックオブブックス日本の美術16 小学館 1971
 藤岡通夫「書院I」創元社 1969
 福井県立朝倉氏遺跡資料館「特別史跡—乗谷朝倉氏遺跡」 1989
 福島県考古学会中近世部会「かわらけ編年」の再検討—11世紀から19世紀—(その1)「福島考古第37号」 1996
 福島県考古学会中近世部会「かわらけ編年」の再検討—11世紀から19世紀—(その2)「福島考古第38号」 1997
 平凡社「宮城県の地名」日本歴史地名大系4 1987
 毎日新聞社「国宝15 建造物Ⅲ」
 前久夫「床の間の話」物語ものの建築史 鹿島出版会 1988
 三浦圭一「中世の土木と職人集団」『講座・日本技術の社会史 第六卷』土木 1984

- 三原良吉『宮城刑務所と若林城跡』 1948
- 宮城県教育委員会『国宝・重要文化財 瑞巖寺 修理工事報告書』 1958
- 宮城県教育委員会『上野館跡・近世茂庭氏居館跡発掘調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第156集 1993
- 宮城県教育委員会『礎沢・大沢窯跡ほか』 宮城県文化財調査報告書第116集 1987
- 宮城県考古学会『宮城考古学 第10号』 2008
- 宮城刑務所『宮城刑務所沿革誌』
- 宮元健次『国説 日本庭園のみかた』 学芸出版社 1998
- 村井益男「近世初期の城館建設」『講座・日本技術の社会史 第六巻』土木 1984
- 村田晃一「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古第36号』 1995
- 村田修三「中世の城館」『講座・日本技術の社会史 第六巻』土木 1984
- 森郁夫『瓦』ニュー・サイエンス社 1986
- 八代市教育委員会『麦島城跡』 八代市文化財調査報告書第30集 2006
- 山崎信二『近世瓦の研究』同成社 2008
- 山田幸一『日本惟のはなし』物語ものの建築史 鹿島出版会 1985
- 大和智『日本の美術 No405 城と御殿』至文堂 2000
- 山本忠尚『鬼瓦 日本の美術391号』 至文堂 1998
- 若林地域考文化歴史編『シンポジウム もうひとつの城 若林城 講演記録集』 2004
- 渡辺信夫編集『国説 宮城県の歴史』 1988

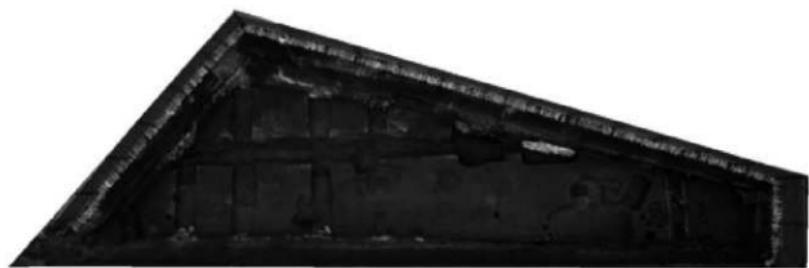
写 真 図 版



第10・13・14次調査 全景(南から)



第10次調査 1区全景(南から)



第10次調査 2区全景(南から)

写真図版1 第10・13・14次調査 全景 第10次調査 全景(1・2区)



第13次調査 1区全景(南から)



第13次調査 2区全景(南から)

写真図版2 第13次調査 全景(1・2区)

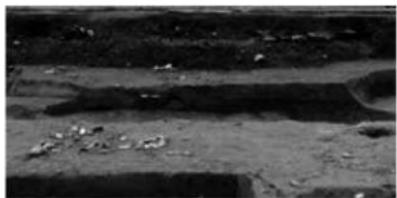


第13次調査 1区南部(旧3区) 全景(南から)



第14次調査 全景(南から)

写真図版3 第13・14次調査 全景



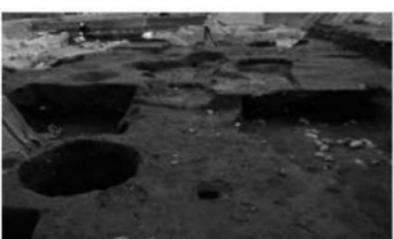
第13次調査 基本層序1(北から)



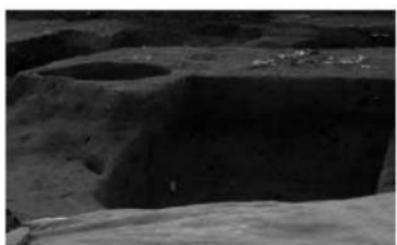
第13次調査 基本層序2(北から)



第13次調査 基本層序3(北西から)



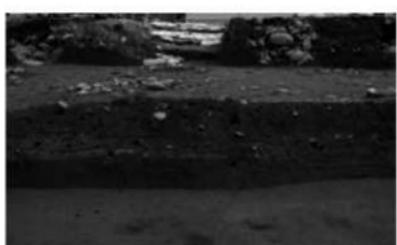
第13次調査 基本層序4(西から)



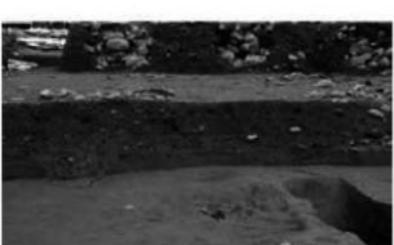
第13次調査 基本層序5(北から)



第13次調査 基本層序6(南から)

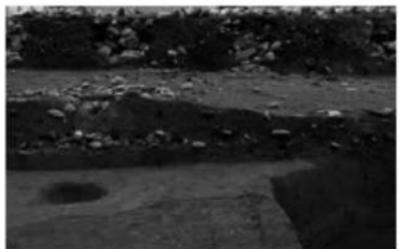


第13次調査 基本層序7(南から)

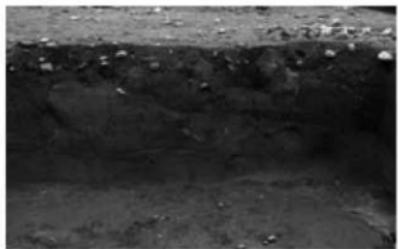


第13次調査 基本層序8(南から)

写真図版4 第13次調査 基本層序(1)



第13次調査 基本層序9(南から)



第13次調査 基本層序10(南から)



第14次調査 III層上面検出状況(南から)



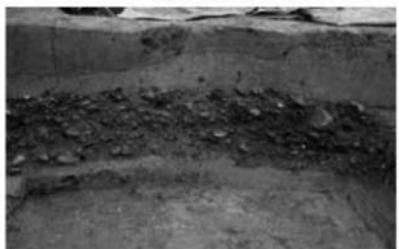
第14次調査 基本層序1(北から)



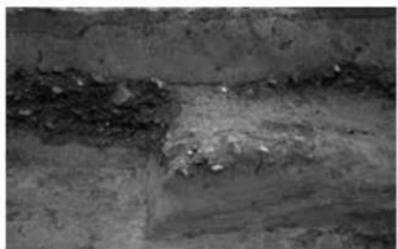
第14次調査 基本層序2(北から)



第14次調査 基本層序3(北から)

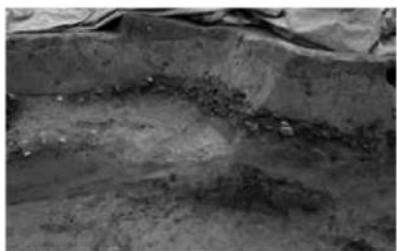


第14次調査 基本層序4(北から)

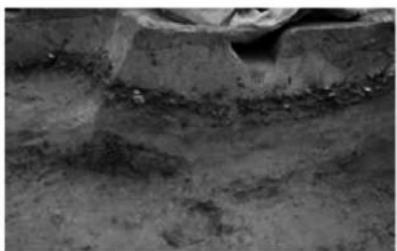


第14次調査 基本層序5(北から)

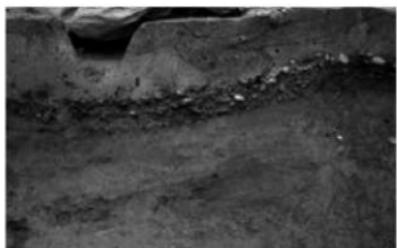
写真図版5 第13次調査 基本層序(2) 第14次調査 基本層序(1)



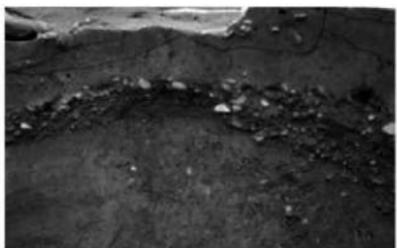
第14次調査 基本層序6(北から)



第14次調査 基本層序7(北東から)



第14次調査 基本層序8(北東から)



第14次調査 基本層序9(北東から)



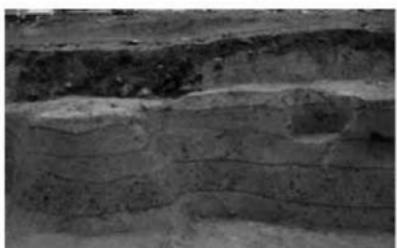
第14次調査 基本層序10(西から)



第14次調査 基本層序11(北西から)

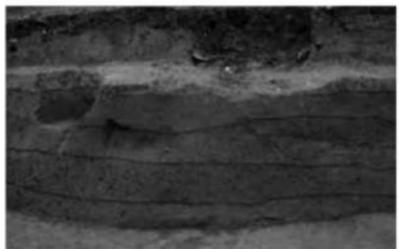


第14次調査 基本層序12(北から)

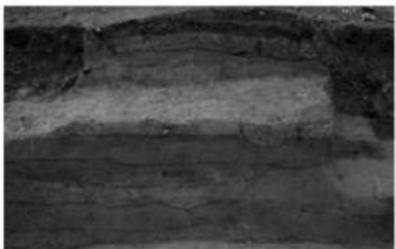


第14次調査 基本層序13(北から)

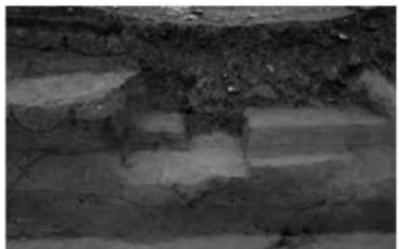
写真図版6 第14次調査 基本層序(2)



第14次調査 基本層序14(西から)



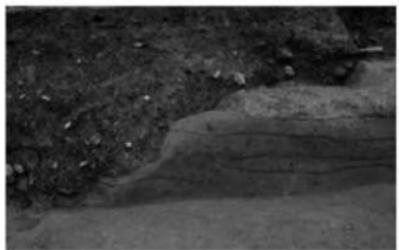
第14次調査 基本層序15(西から)



第14次調査 基本層序16(西から)



第14次調査 基本層序17(西から)



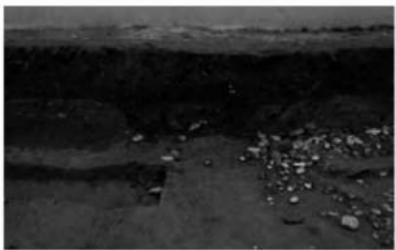
第14次調査 基本層序18(西から)



第14次調査 基本層序19(西から)



第14次調査 基本層序20(西から)

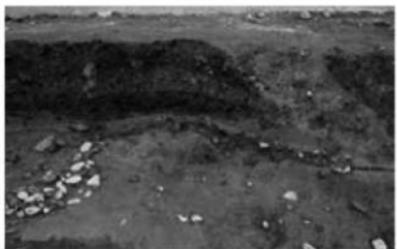


第14次調査 基本層序21(西から)

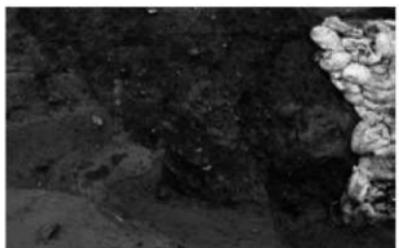
写真図版7 第14次調査 基本層序(3)



第14次調査 基本層序22(西から)



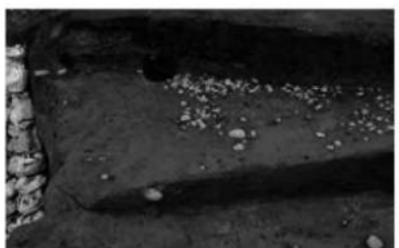
第14次調査 基本層序23(西から)



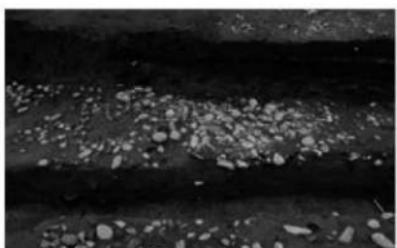
第14次調査 基本層序24(西から)



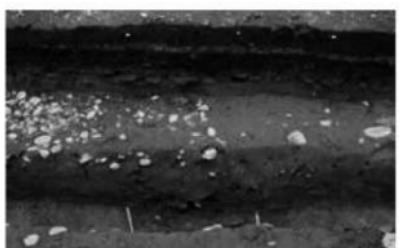
第14次調査 基本層序25(西から)



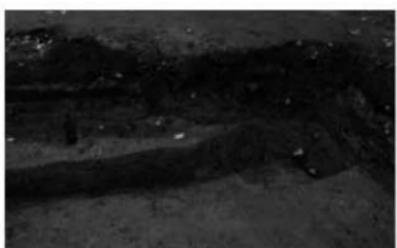
第14次調査 基本層序26(西から)



第14次調査 基本層序27(西から)



第14次調査 基本層序28(西から)



第14次調査 基本層序29(西から)

写真図版8 第14次調査 基本層序(4)



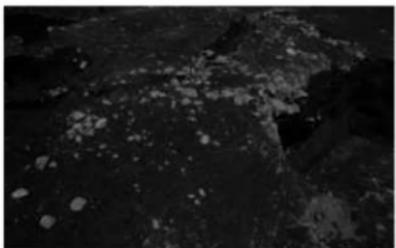
SX12 全景(南から)



SX12 全景(北から)



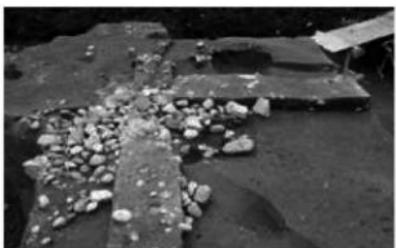
SX12 検出状況（南から）



SX12 検出状況（南東から）



SX12 検出状況（南から）



SX12 土層断面（北から）



SX12 検出状況（北から）



SX12 確出土状況（南から）

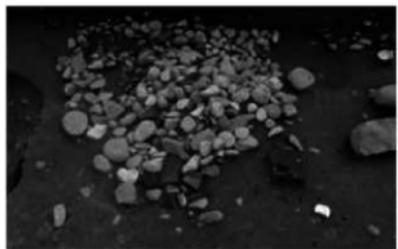


SX12 確出土状況（北から）

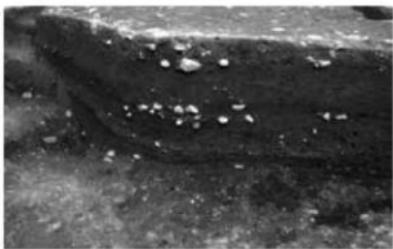


SX12 確出土状況（北から）

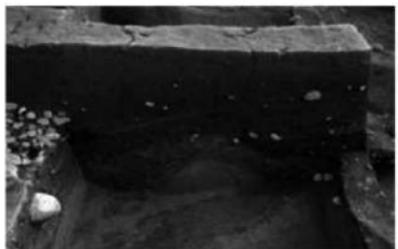
写真図版10 SX12(2)



SX12 碓出土状況（北から）



SX12 土層断面（西から）



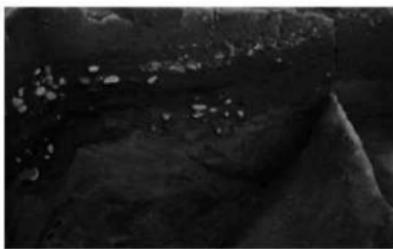
SX12 土層断面（北から）



SX12 土層断面（南から）



SX12 土層断面（北から）



SX12 土層断面（南から）



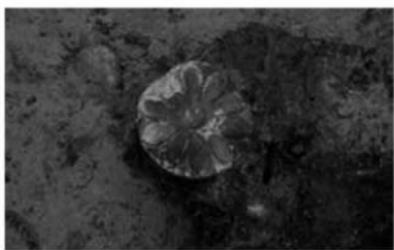
SX12 土層断面（北から）



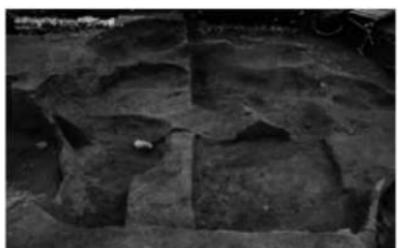
SX12 土層断面（北から）



SX12 煙管・下駄出土状況（南から）



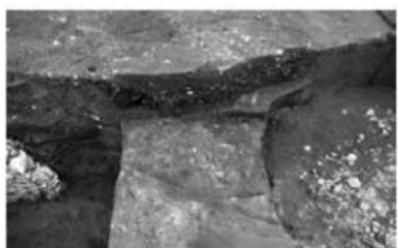
SX12 菊丸瓦出土状況（南東から）



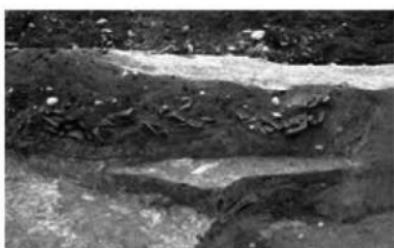
SX12 完掘状況（北から）



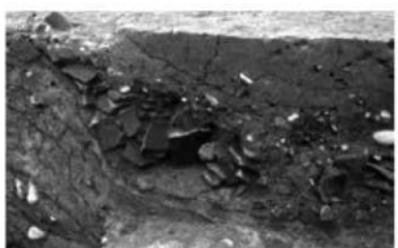
SK380 土層断面（北西から）



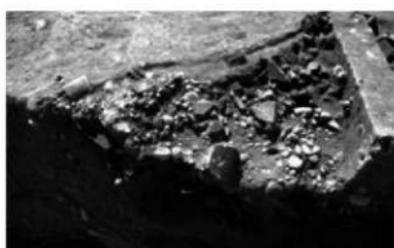
SK380 土層断面（北から）



SK380 土層断面（北から）

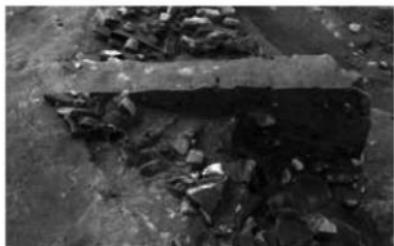


SK380 土層断面（北から）



SK380 瓦出土状況（北から）

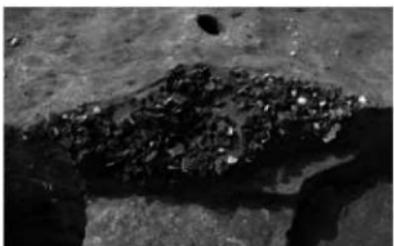
写真図版12 SX12(4) SK380(1)



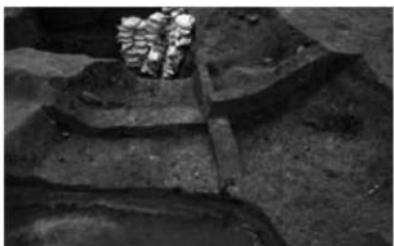
SK380 瓦出土状況（東から）



SK380 瓦出土状況（北から）



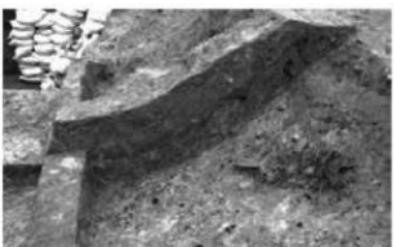
SK380 瓦出土状況（北から）



SK380 粘土土層断面（西から）



SK380 粘土土層断面（西から）



SK380 粘土土層断面（西から）



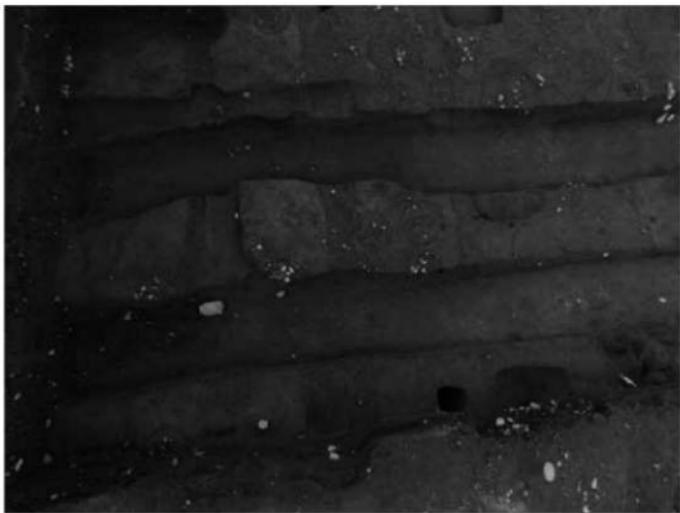
SK380 粘土土層断面（北から）



SK380 粘土検出状況（北から）



SB5 全景(北から)



SB5 検出状況(東から)

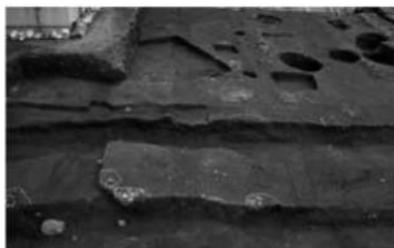
写真図版14 SB5 (1)



SB5 検出状況（西から）



SB5 検出状況（北西から）



SB5 検出状況（東から）



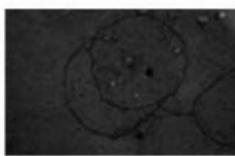
SB5 検出状況（東から）



SB5 検出状況（東から）



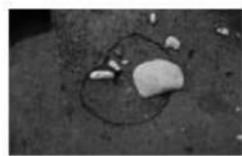
SB5 検出状況（西から）



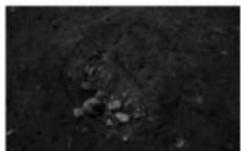
SB5 確石跡1(北から)



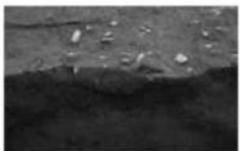
SB5 確石跡2(西から)



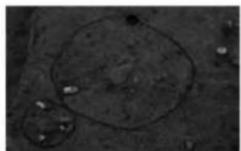
SB5 確石跡3(西から)



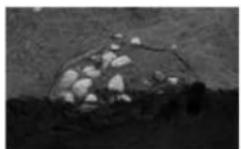
SB5 基石跡4(北から)



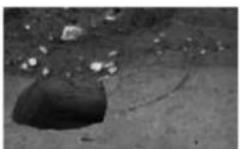
SB5 基石跡5(東から)



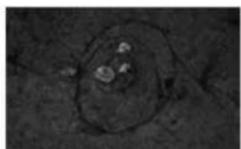
SB5 基石跡6(南西から)



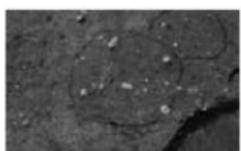
SB5 基石跡7(東から)



SB5 基石跡8(西から)



SB5 基石跡9(北から)



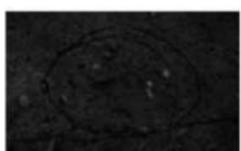
SB5 基石跡10(北から)



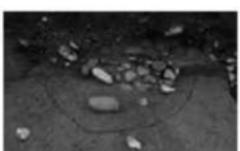
SB5 基石跡11(南東から)



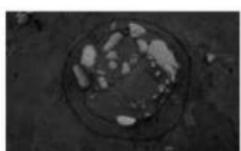
SB5 基石跡12(南から)



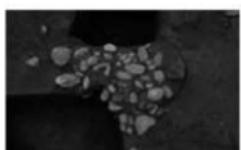
SB5 基石跡13(南から)



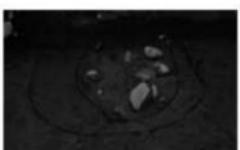
SB5 基石跡14(北東から)



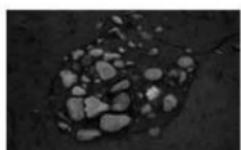
SB5 基石跡15(北東から)



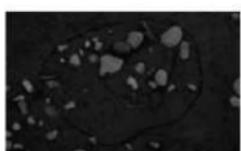
SB5 基石跡16(北から)



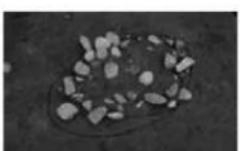
SB5 基石跡17(北東から)



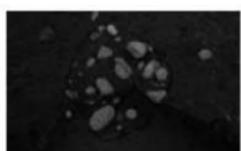
SB5 基石跡18(北東から)



SB5 基石跡19(北東から)



SB5 基石跡20(北東から)



SB5 基石跡21(北東から)

写真図版16 SB5(3)



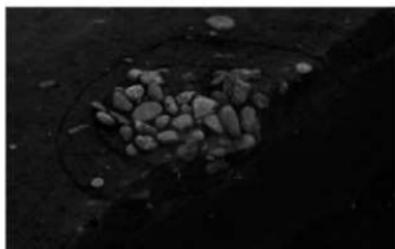
SB14・15北半 全景(南から)



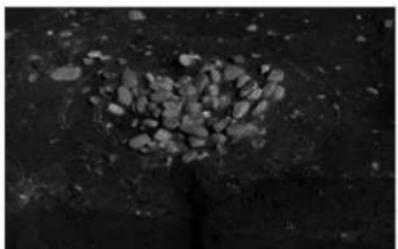
SB14 全景(西から)



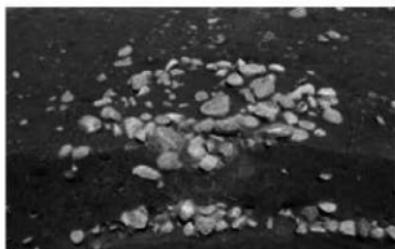
SB14 全景（西から）



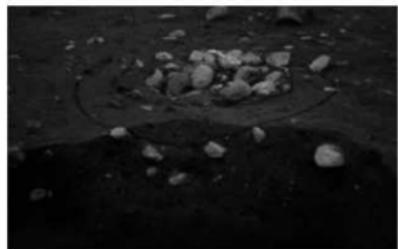
SB14 硏石跡 1 土層断面（南西から）



SB14 硏石跡 9 土層断面（南から）

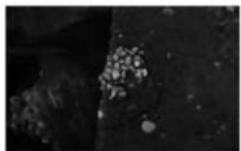


SB14 硏石跡 12 土層断面（南から）



SB14 硏石跡 13 土層断面（南から）

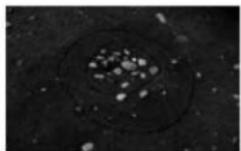
写真図版18 SB14(2)



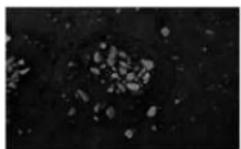
SB14 確石跡1(南から)



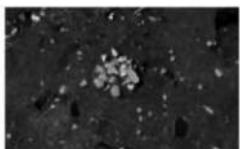
SB14 確石跡2(南西から)



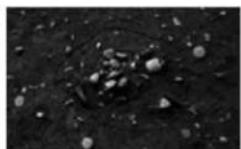
SB14 確石跡3(南西から)



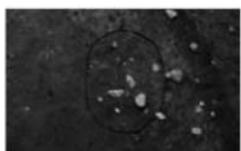
SB14 確石跡4(北東から)



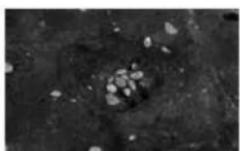
SB14 確石跡5(東から)



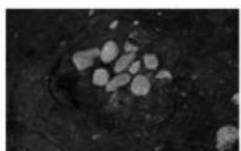
SB14 確石跡6(東から)



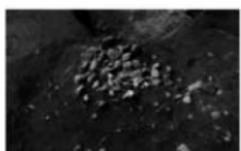
SB14 確石跡7(北から)



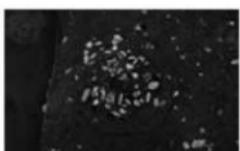
SB14 確石跡8(南から)



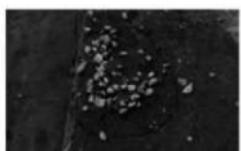
SB14 確石跡8(東から)



SB14 確石跡9(北東から)



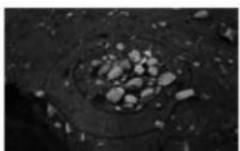
SB14 確石跡10(東から)



SB14 確石跡11(東から)



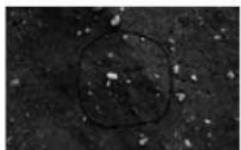
SB14 確石跡12(東から)



SB14 確石跡13(南東から)



SB14 確石跡13(南東から)



SB14 確石跡14(北東から)



SB14 確石跡15(北から)



SB14 確石跡15(東から)

写真図版19 SB14(3)

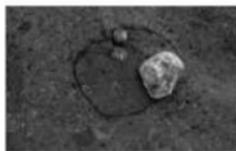


SB15 全景(西から)

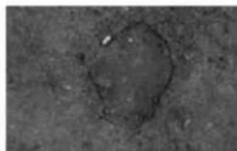


SB15 全景(東から)

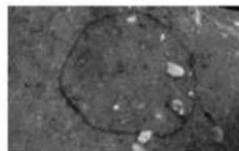
写真図版20 SB15 (1)



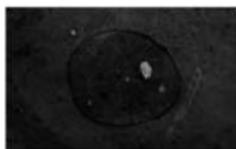
SB15P1 検出状況(西から)



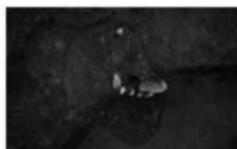
SB15P2 検出状況(西から)



SB15P3 検出状況(西から)



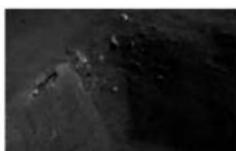
SB15P5 検出状況(東から)



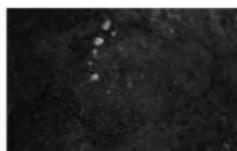
SB15P6 検出状況(西から)



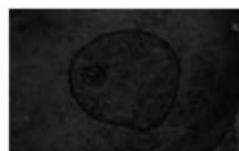
SB15P7 検出状況(南から)



SB15P8 検出状況(南西から)



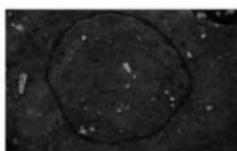
SB15P10 検出状況(西から)



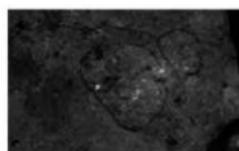
SB15P11 検出状況(南西から)



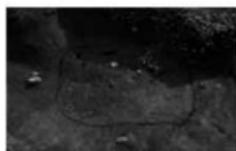
SB15P12 検出状況(南西から)



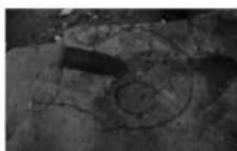
SB15P13 検出状況(北東から)



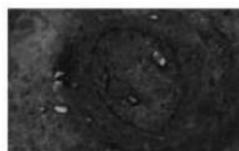
SB15P14 検出状況(北から)



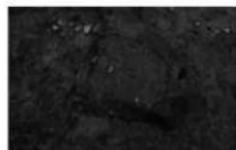
SB15P15 検出状況(北西から)



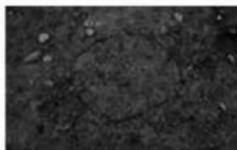
SB15P16 検出状況(西から)



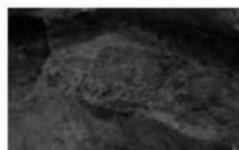
SB15P17 検出状況(西から)



SB15P18 検出状況(西から)

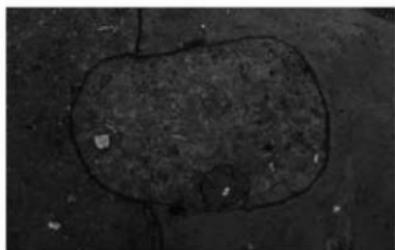


SB15P19 検出状況(西から)

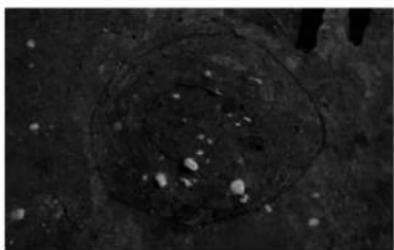


SB15P20 検出状況(西から)

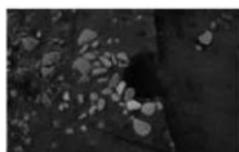
写真図版21 SB15 (2)



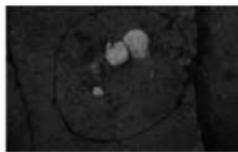
SB15P4 検出状況(南から)



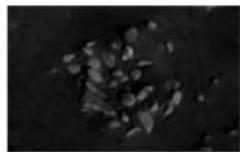
SB15P9 検出状況(南西から)



SB16 碓石跡1(南から)



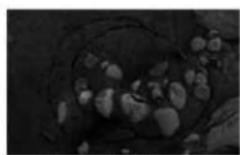
SB16 碓石跡2(南から)



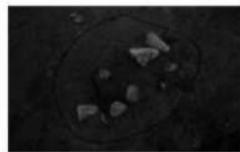
SB16 碓石跡3(南から)



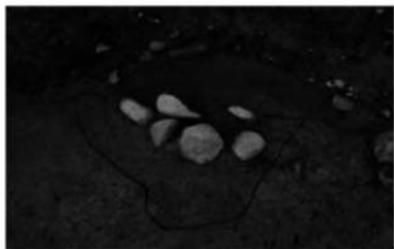
SB16 検出状況(南から)



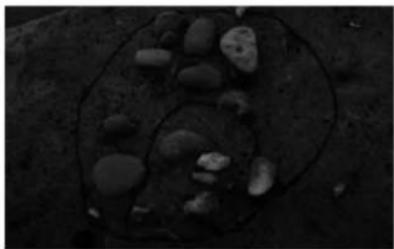
SB16 碓石跡4(南から)



SB16 碓石跡5(南から)



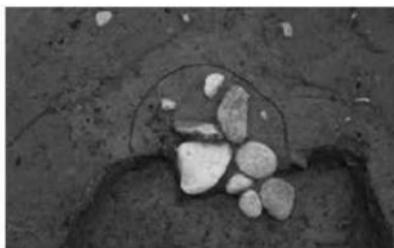
礎石跡 1(北から)



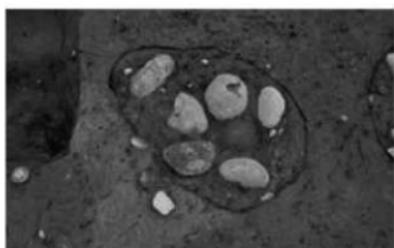
礎石跡 2(南から)



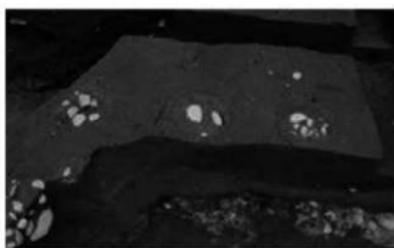
礎石跡 3(北から)



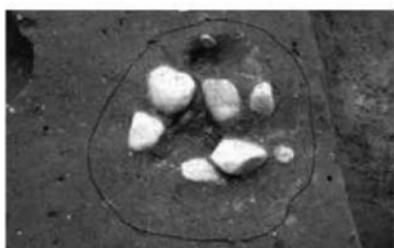
礎石跡 4(東から)



礎石跡 5(北東から)



第 10 次調査 P1-P2-P3 全体 (南から)



第 10 次調査 P1 検出 (北西から)

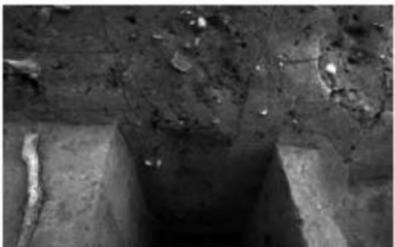


第 10 次調査 P1 堀り下げ状況 (南から)

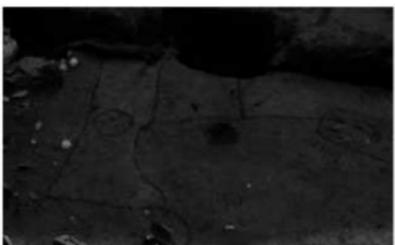
写真図版23 級石跡



SA9 検出状況（南から）



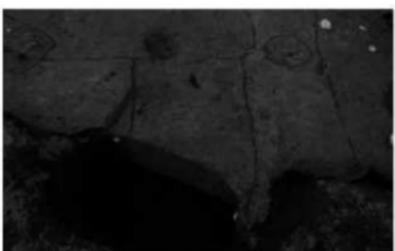
SA9 土層断面（南から）



SA9 検出状況（北から）



SA9 検出状況（北から）



SA9 調査状況（南から）



SA9 土層断面（北から）



SA9 土層断面（南から）

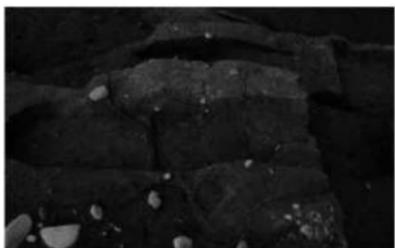
写真図版24 SA9



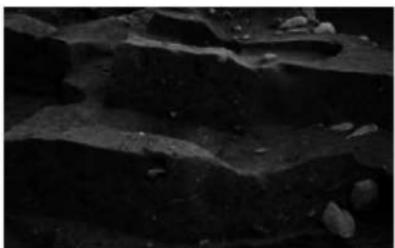
SA15 検出状況（東から）



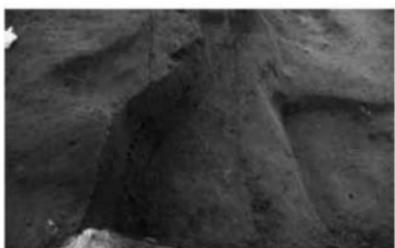
SA15 土層断面（西から）



SA16 検出状況（南から）



SA16 土層断面（南から）



SA17 検出状況（西から）



SA17-22 検出状況（南東から）



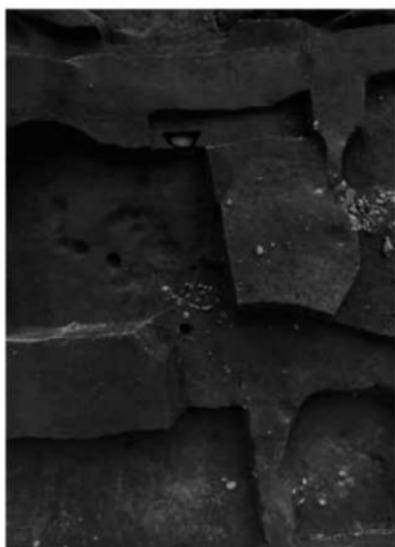
SA17 土層断面（北から）



SA17 土層断面（北から）



SA18 検出状況（西から）



SA18 検出状況（西から）

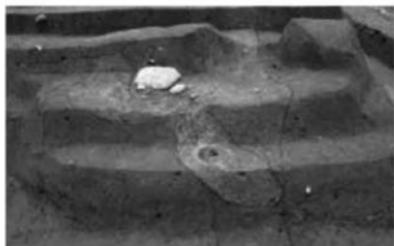


SA18 検出状況（西から）

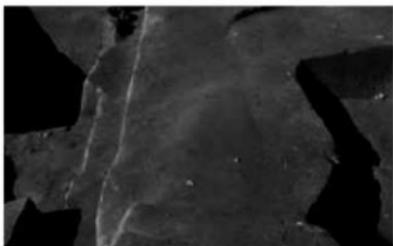


SA18 検出状況（東から）

写真図版26 SA18(1)



SA18 検出状況（西から）



SA18 検出状況（東から）



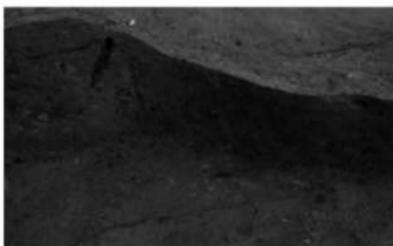
SA18 検出状況（北から）



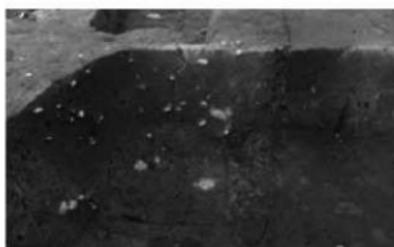
SA18 検出状況（東から）



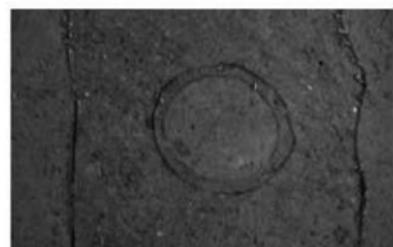
SA18 屈曲部検出状況（北から）



SA18 検出状況（北から）



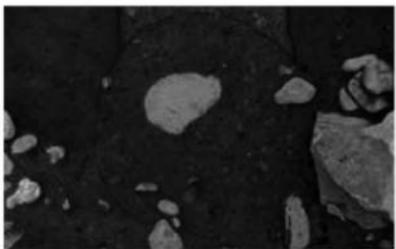
SA18 土層断面（南から）



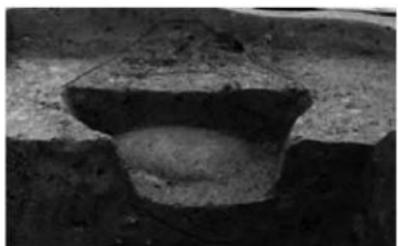
SA18P9 検出状況（北から）



SA18P2 調査状況（西から）



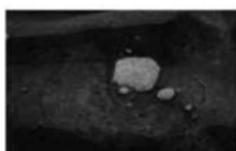
SA18P4 検出状況（東から）



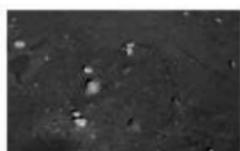
SA18P6 調査状況（北から）



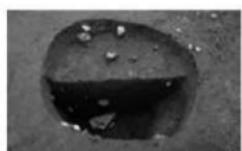
SA18 調査状況（北東から）



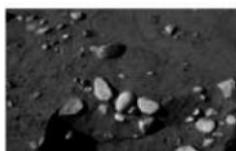
SA18P1 検出状況（西から）



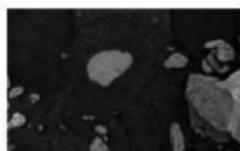
SA18P2-1 検出状況（北東から）



SA18P2-2 調査状況（西から）



SA18P3 検出状況（東から）



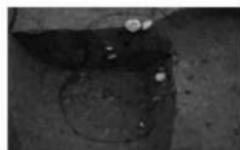
SA18P4 検出状況（西から）



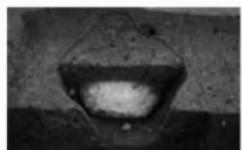
SA18P4-1 検出状況（南から）



SA18P4-2 調査状況（東から）

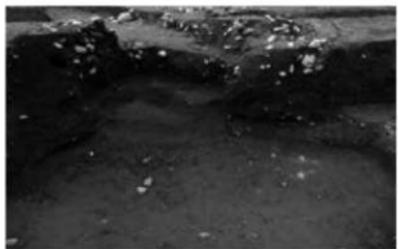


SA18P5 検出状況（西から）



SA18P6 調査状況（北から）

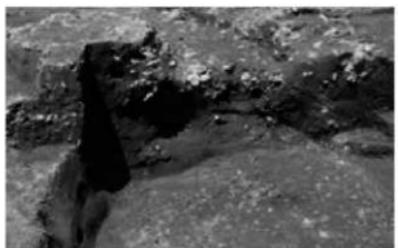
写真図版28 SA18 (3)



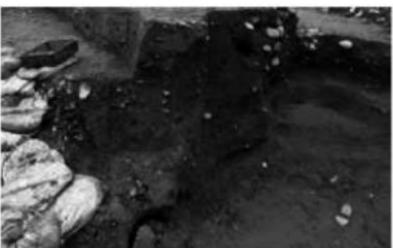
SA19 土層断面（東から）



SA19 検出状況（北東から）



SA19 土層断面（東から）



SA19 土層断面（北東から）



SA20 検出状況（西から）



SA20 検出状況(東から)



SA20-21 検出状況(南から)

写真図版30 SA20(2) SA21(1)



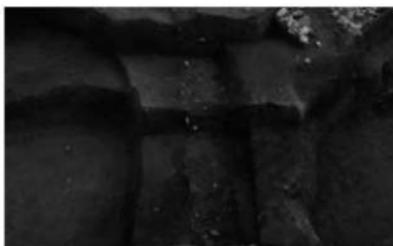
SA20-21 検出状況（北から）



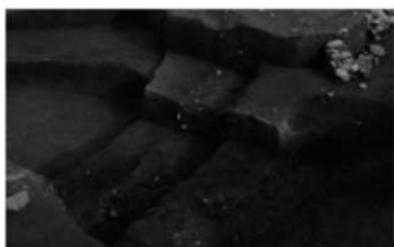
SA20 土層断面（北東から）



SA20 土層断面（西から）



SA20 検出状況（西から）



SA20 検出状況（南西から）



SA22 検出状況（南から）



SA22 検出状況（東から）



SA23-SD89 検出状況（北から）



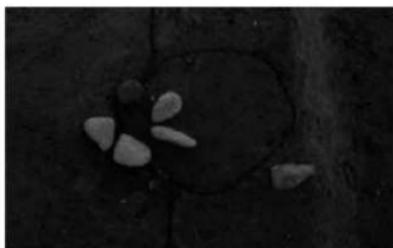
SA23-SD89 調査状況（南から）



SA23 土層断面（北から）



SA23 土層断面（南から）



SA23P1 検出状況（南から）



SA24 検出状況（南から）



SA24 土層断面（西から）

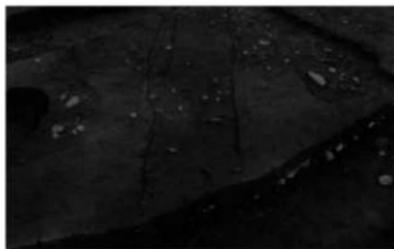


SA24 土層断面（東から）

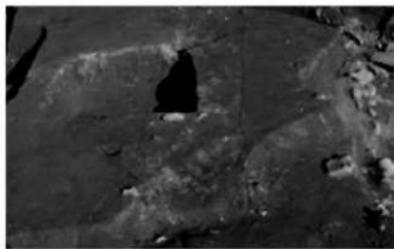


SA24P1 検出状況（南から）

写真図版32 SA23(2) SA24



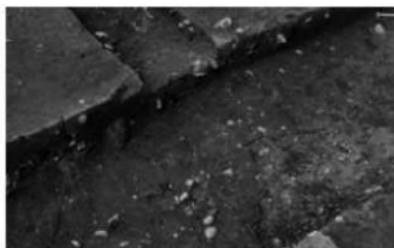
SA25 検出状況（西から）



SA25 検出状況（南から）



SA25 検出状況（南から）



SA25 検出状況（北から）



SA25 検出状況（南から）



SA25 土層断面（南から）

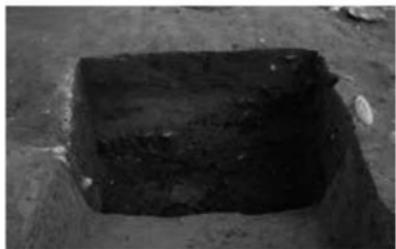


SA25 土層断面（北から）

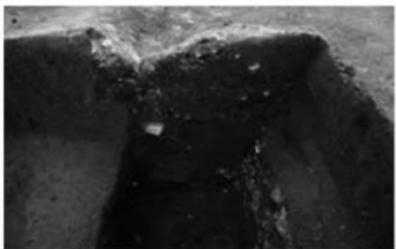


SA25 土層断面（南から）

写真図版33 SA25(1)



SA25 土層断面（西から）



SA25 土層断面（南から）



SA25 土層断面（北から）



SA25P1 検出状況（東から）



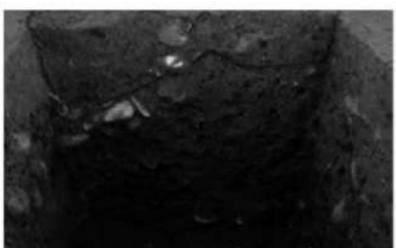
SA25P45-112 検出状況（西から）



SA25P45-112 検出状況（北から）



SA25 土層断面（南から）



SA25 土層断面（北から）

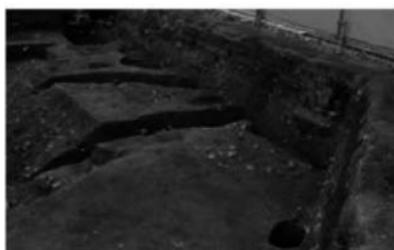
写真図版34 SA25(2)



SD141 検出状況（北から）



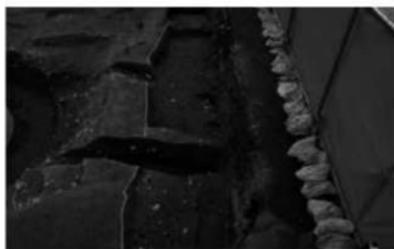
SD141 検出状況（南から）



SD141 検出状況（西から）



SD141 土層断面（南西から）



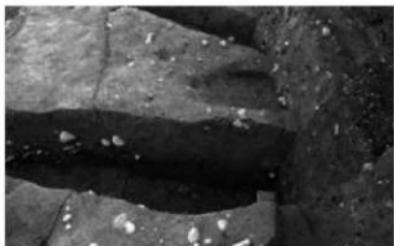
SD141 調査状況（北から）



SD141 調査状況（南西から）



SD141 調査状況（南から）



SD141 土層断面（北から）



SD141 土層断面（北から）



SD141 中央土層断面（北から）



SD141 土層断面（北東から）



SD141 検出状況（南から）



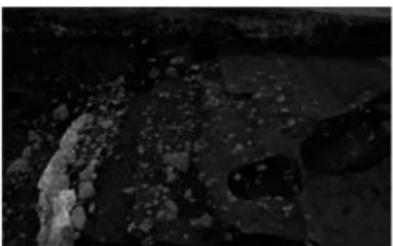
SD141 検出状況（北から）



SD141 南北土層断面（東から）



SD141 土層断面（南から）



SD141 調査状況（南から）



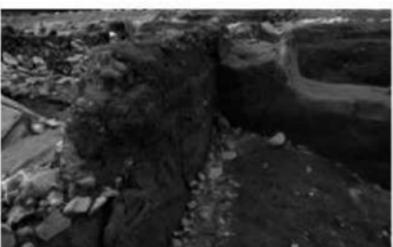
SD141 土層断面（南から）



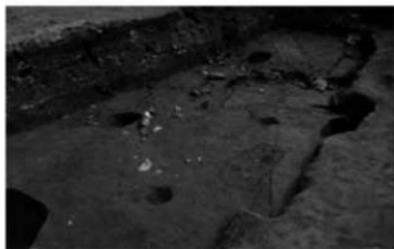
SD141 土層断面（南から）



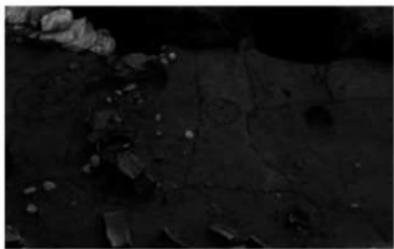
SD141 南北土層断面（東から）



SD141 土層断面（南から）



SD88 検出状況（南西から）



SD88・SA9 検出状況（北から）



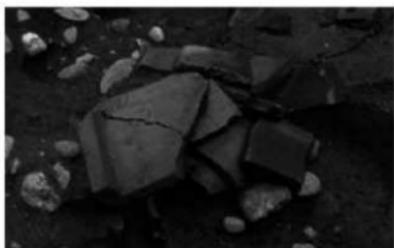
SD88 瓦出土状況（北東から）



SD88 瓦出土状況（北から）



SD88 瓦出土状況（北東から）



SD88 瓦出土状況（南西から）



SD88 検出状況（東から）

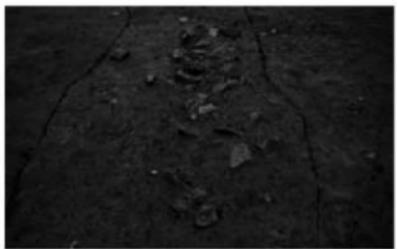


SD88 検出状況（西から）

写真図版38 SD88(1)



SD88 瓦出土状況（東から）



SD88 瓦出土状況（西から）



SD88 挖り下げ状況（西から）



SD88 土層断面（西から）



SD88 土層断面（西から）



SD88 検出状況（西から）



SD88 検出状況（東から）

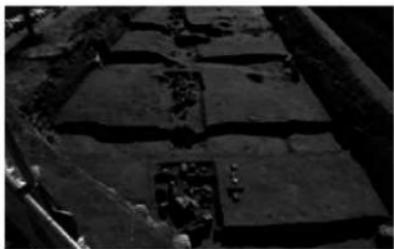


SD88 検出状況（西から）

写真図版39 SD88(2)



SD88 瓦出土状況（東から）



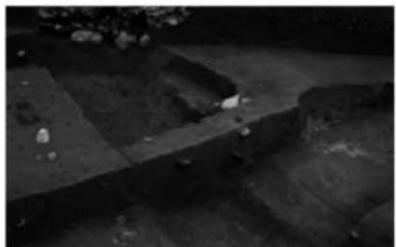
SD88 瓦出土状況（西から）



SD88 瓦出土状況（南から）



SD88 瓦出土状況（南から）



SD88 土層断面（東から）



SD88 土層断面（西から）

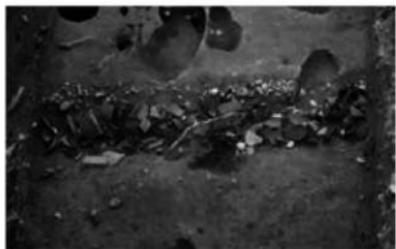


SD88 完掘状況（西から）



SD88 完掘状況（東から）

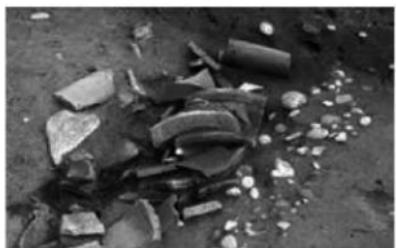
写真図版40 SD88(3)



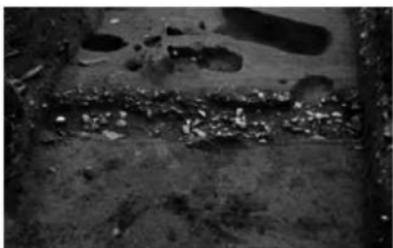
SD89 瓦出土状況（東から）



SD89 瓦出土状況（南から）



SD89 瓦出土状況（北西から）



SD89 検出状況（東から）



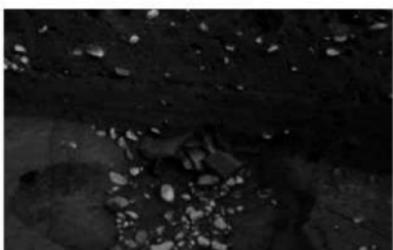
SD89 底面礫検出状況（北東から）



SD89 底面礫検出状況（東から）

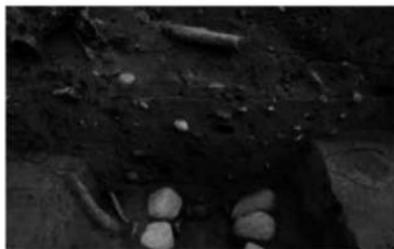


SD89 円礫検出状況（南から）

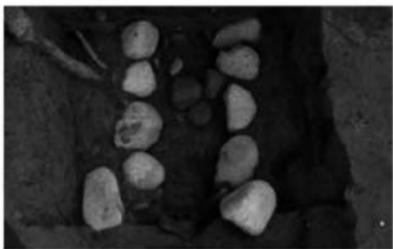


SD89 土層断面（南から）

写真図版41 SD89(1)



SD89 土層断面（北から）



SD89 底面検出状況（南から）



SD89 検出状況（南から）



SD89 検出状況（北から）



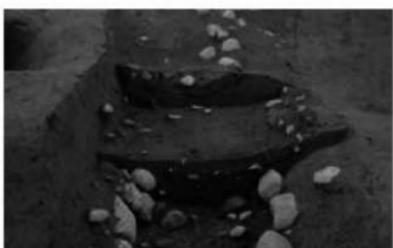
SD89 土層断面（南から）



SD89 調査状況（北から）



SD89 調査状況（南から）



SD89 土層断面（北から）

写真図版42 SD89(2)

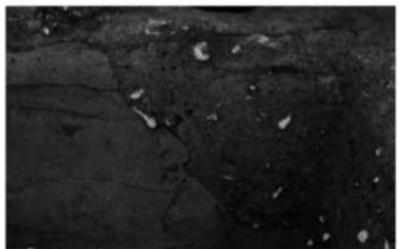


SD100 検出状況(北から)

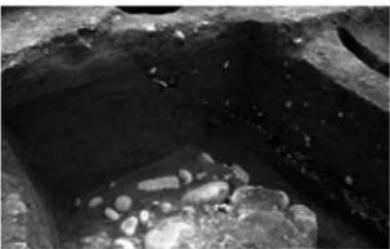


SD100 検出状況(南から)

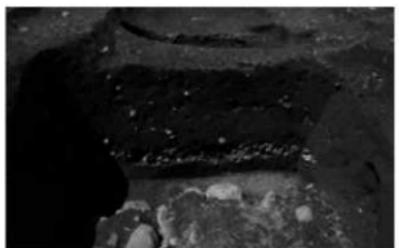
写真図版43 SD100(1)



SD100 土層断面（北から）



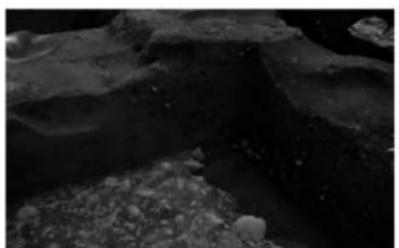
SD100 土層断面（北東から）



SD100 土層断面（東から）



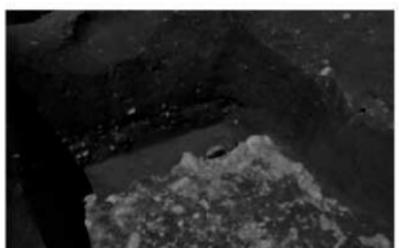
SD100 土層断面（北から）



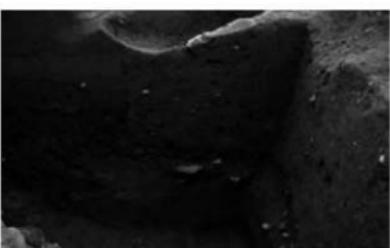
SD100 土層断面（北東から）



SD100 土層断面（東から）

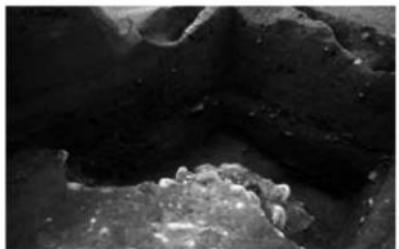


SD100 土層断面（南東から）

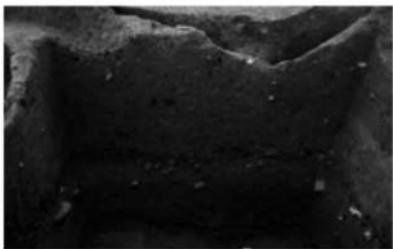


SD100 土層断面（北から）

写真図版44 SD100(2)



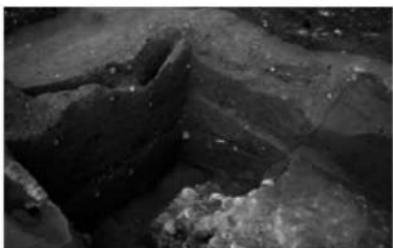
SD100 土層断面（北東から）



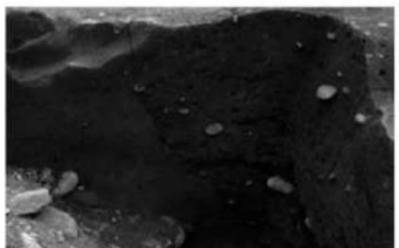
SD100 土層断面（東から）



SD100 土層断面（南から）



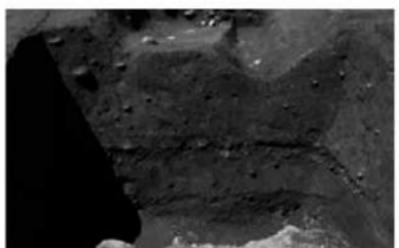
SD100 土層断面（南東から）



SD100 土層断面（北から）



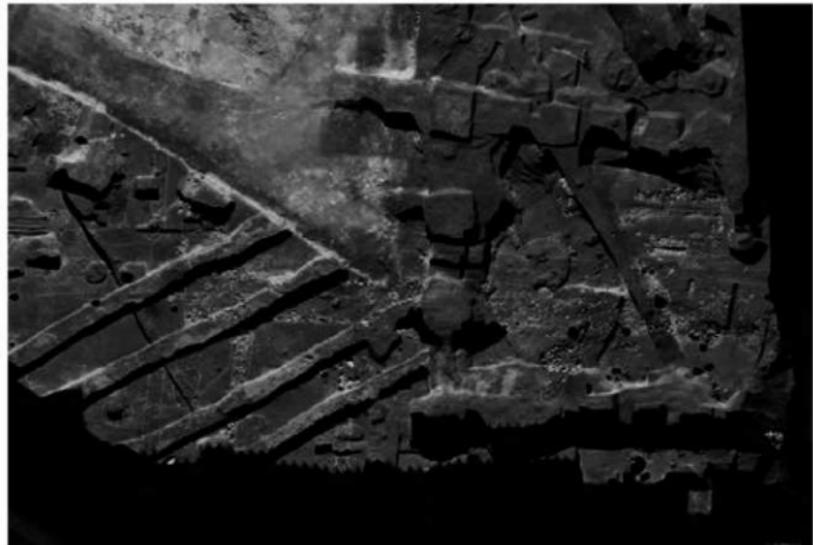
SD100 土層断面（北東から）



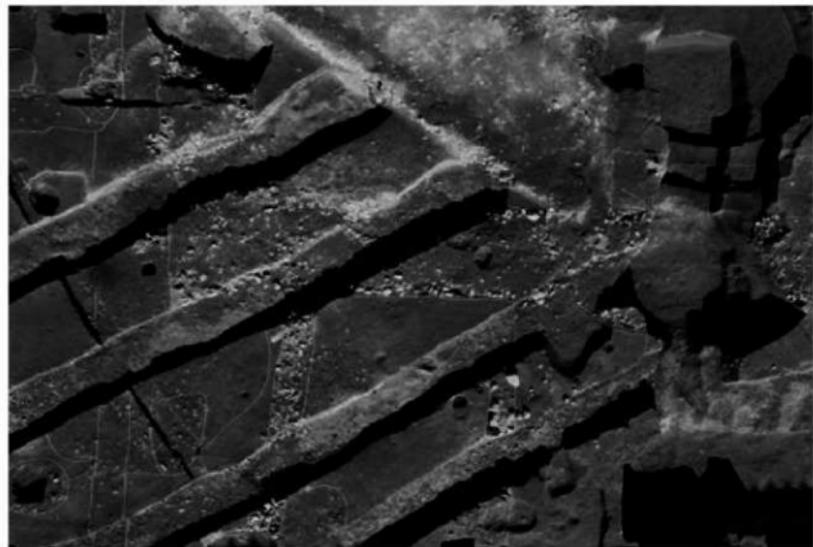
SD100 土層断面（東から）



SD100 土層断面（南東から）

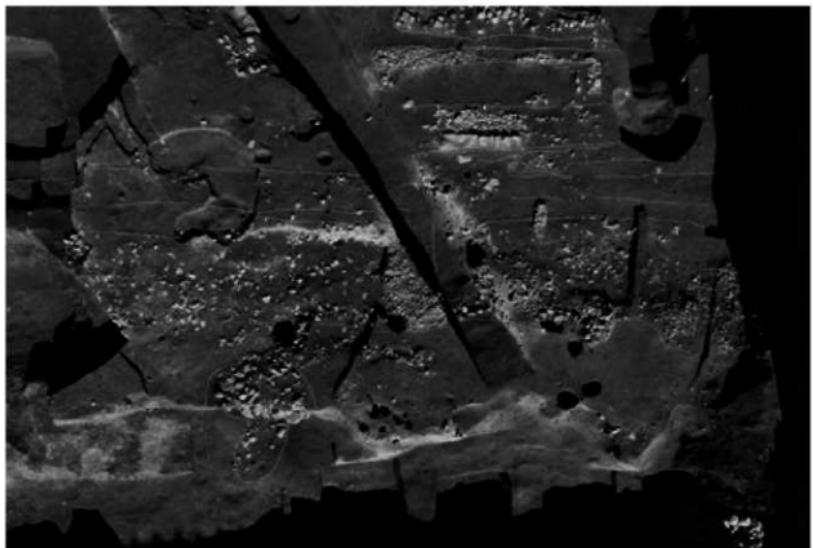


SD114 全景(南から)

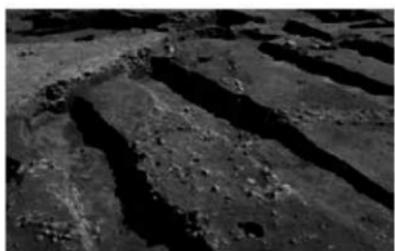


SD114 全景(南から)

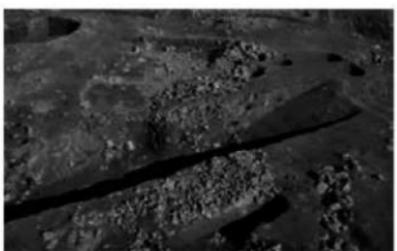
写真図版46 SD114(1)



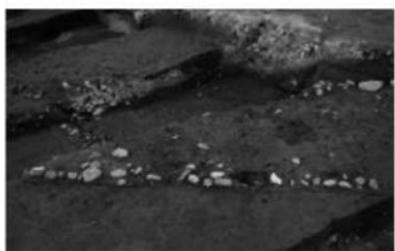
SD114 東西方向 全景（南から）



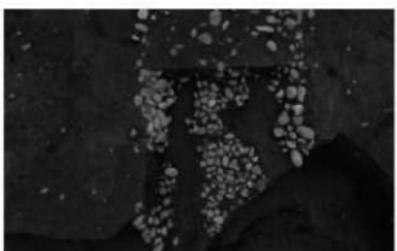
SD114 検出状況（西から）



SD114 検出状況（西から）



SD114 検出状況（東から）



SD114 調査状況（東から）



SD114 裏込め・底面検出状況（西から）



SD114 裏込め・底面検出状況（東から）



SD114 裏込め・底面検出状況（西から）

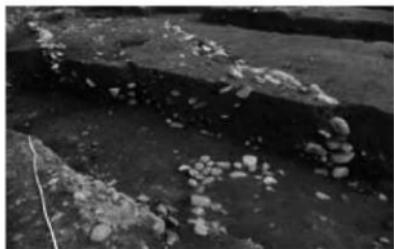


SD114 土層断面（西から）



SD114-SA20 土層断面（西から）

写真図版48 SD114(3)



SD114 底面検出状況（西から）



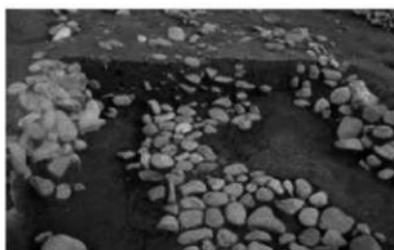
SD114 底面検出状況（北から）



SD114 底面検出状況（北から）



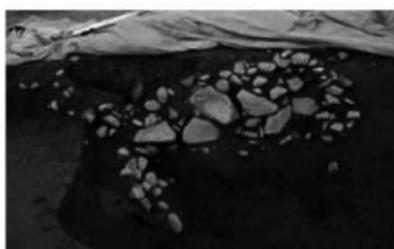
SD114 底面検出状況（西から）



SD114 土層断面（西から）



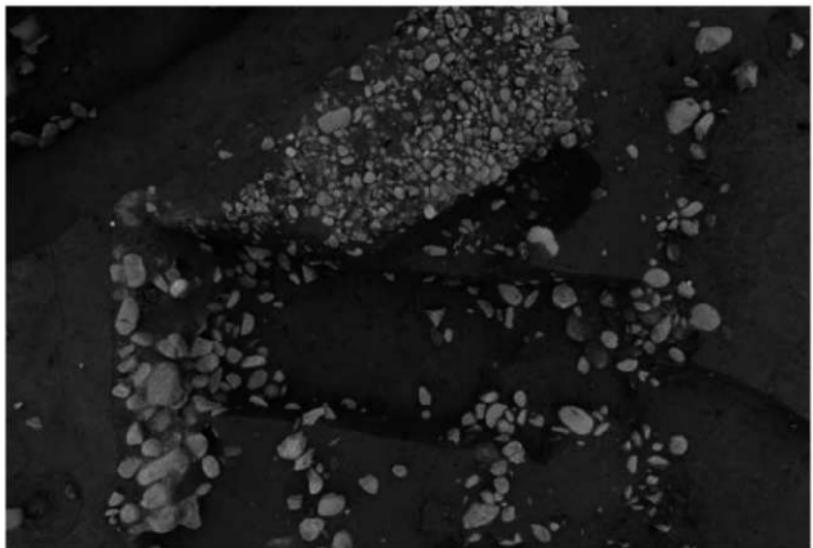
SD114 底面敷石検出状況（東から）



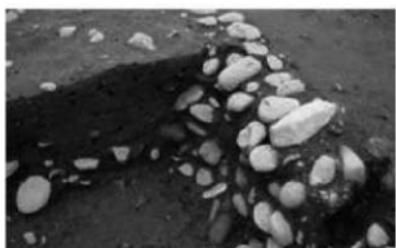
SD114 土層断面（西から）



SD114 土層断面（西から）



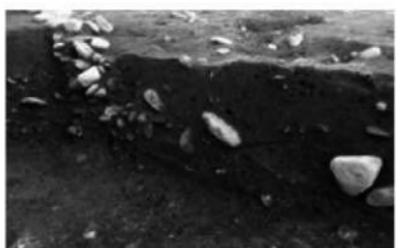
SD114 調査状況（西から）



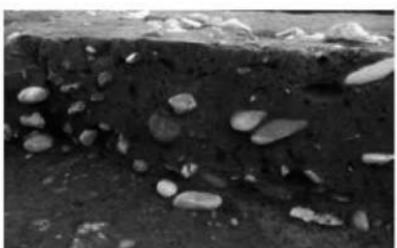
SD114 土層断面（西から）



SD114 土層断面（西から）



SD114 土層断面（西から）

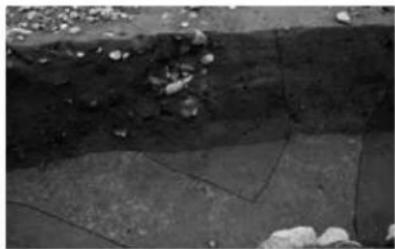


SD114 土層断面（西から）

写真図版50 SD114(5)



SD114-SA21 土層断面（西から）



SD114-SA20 土層断面（西から）



SD117 検出状況（南から）



SD117 土層断面（南から）



SD117 土層断面（北から）



SD117 瓦出土状況（北から）



SD119 検出状況（南から）



SD119 検出状況（南から）



SD119 瓦出土状況（南から）



SD119 磁出土状況（南から）



SD119 底面磁出土状況（南から）



SD119 底面磁出土状況（南東から）



SD119 調査状況（北西から）



SD119 土層断面（東から）



SD120 瓦出土状況（東から）



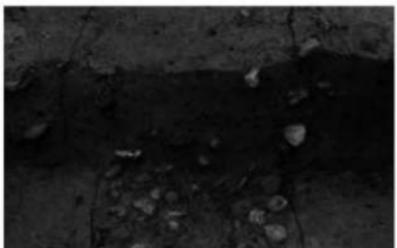
SD120 土層断面（東から）



SD120 底面礫出土状況（南から）



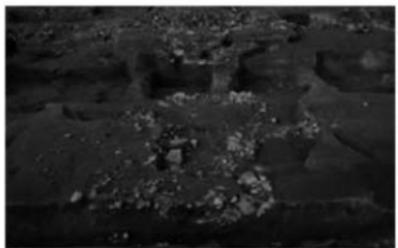
SD120 検出状況（南から）



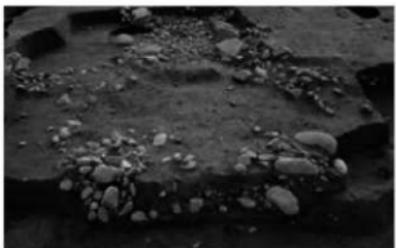
SD120 土層断面（西から）



SD120 底面礫出土状況（東から）



SD123 検出状況（南から）



SD123 検出状況（北から）



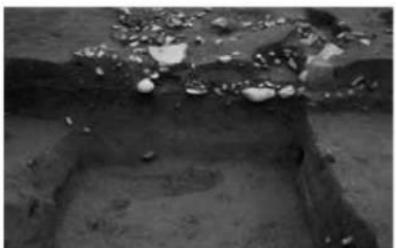
SD123 検出状況（東から）



SD123 検出状況（西から）



SD123 底面碟検出状況（北から）



SD123 土層断面（南から）



SD123 土層断面（西から）



SD122・124・127・137 検出状況（西から）



SX20 検出状況（北から）



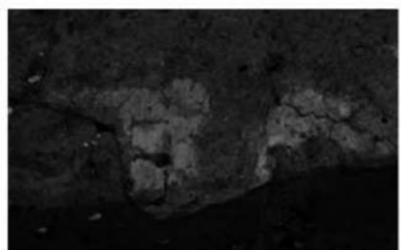
SX20 貼土検出状況（南東から）



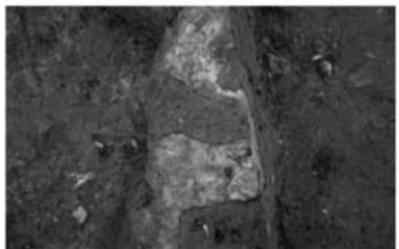
SX20 貼土検出状況（南から）



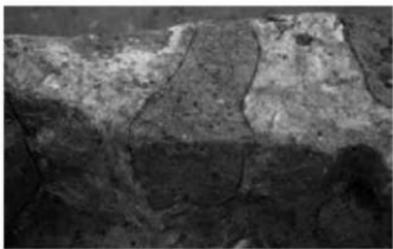
SX20 土層断面（南東から）



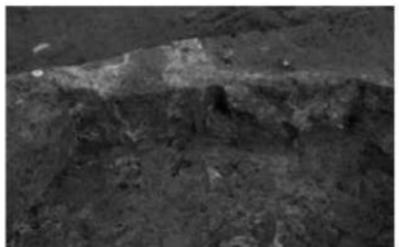
SX20 水口検出状況（南から）



SX20 水口検出状況（東から）



SX20 水口検出状況（南から）



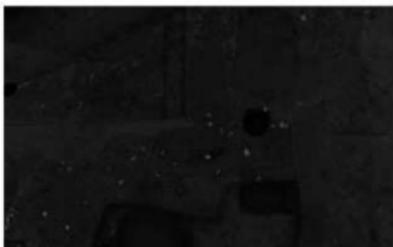
SX20 水口検出状況（南から）



SX20 水口検出状況（北から）



SX21 検出状況（西から）



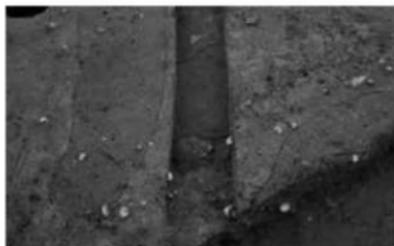
SX21 検出状況（北から）



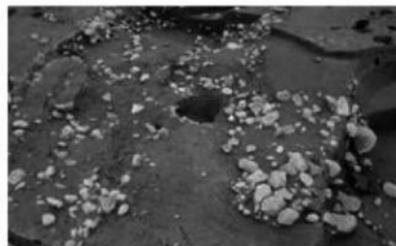
SX21 貼土検出状況（南西から）



SX21 貼土検出状況（南西から）



SX21 貼土検出状況（南から）



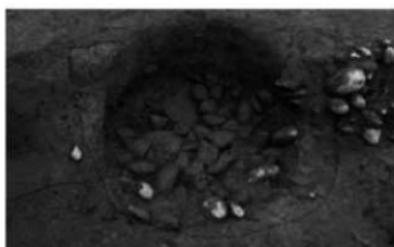
SX22 検出状況（南西から）



SX23 検出状況（北西から）



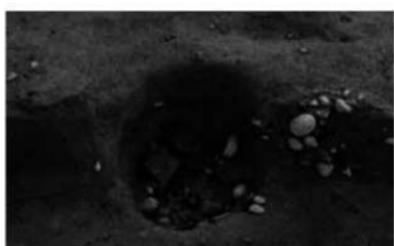
SX23 検出状況（北東から）



SX23 検出状況（北から）



SX23 碓出土状況（北から）

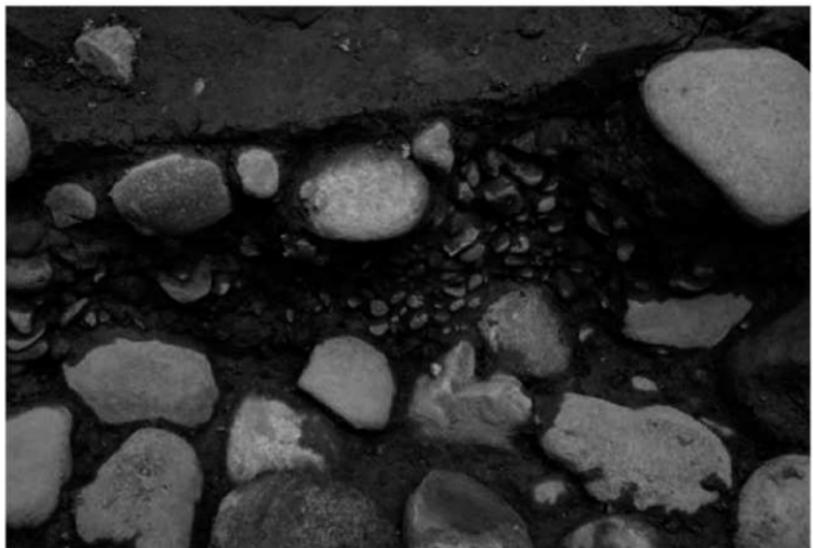


SX23 碓出土状況（北から）

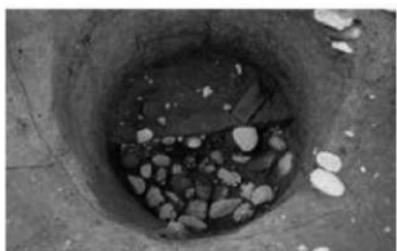


SX23 碓掘削状況（北から）

写真図版57 SX21(2) SX22 SX23(1)



SX23 土層断面（北から）



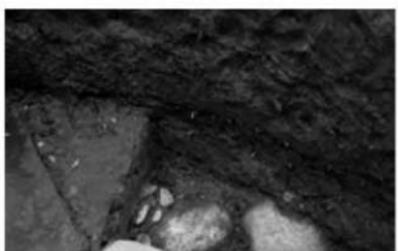
SX23 調査状況（北から）



SX23 土層断面（北から）

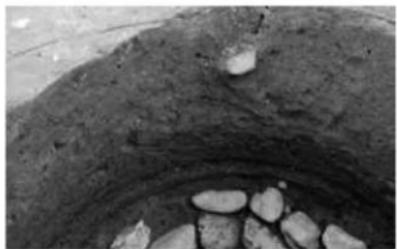


SX23 タガ跡確認状況（南から）

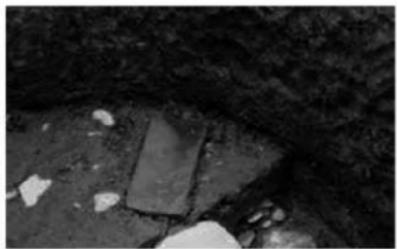


SX23 タガ跡確認状況（東から）

写真図版58 SX23(2)



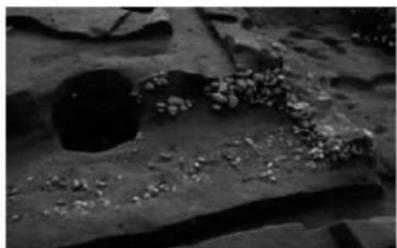
SX23 タガ跡確認状況（南から）



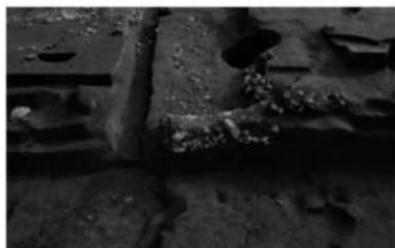
SX23 瓦出土状況（北から）



SX23 調査完了状況（北から）



SX23 調査完了状況（北西から）



SX23 調査完了状況（西から）



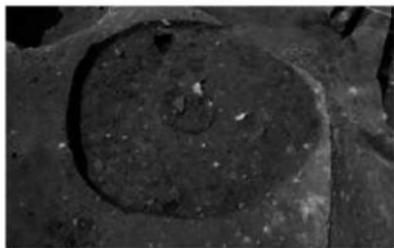
SX23 調査完了状況（東から）



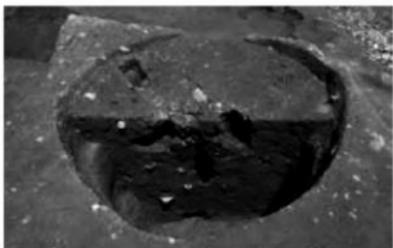
SK437 検出状況（南から）



SK437 土層断面（南から）



SK438 検出状況（南から）



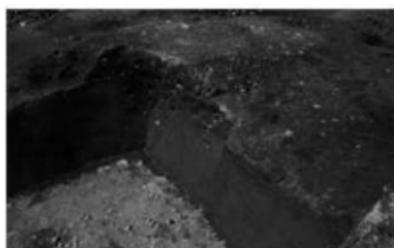
SK438 土層断面（南から）



SK441 検出状況（西から）



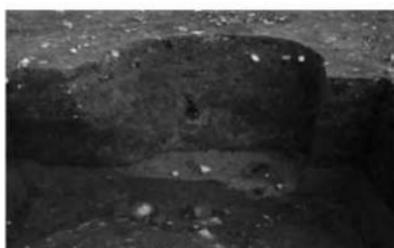
SK441 検出状況（西から）



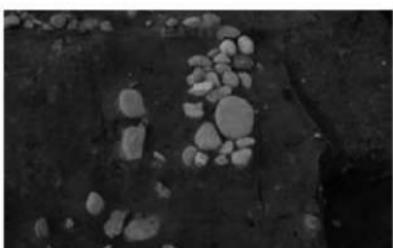
SK443 土層断面（南西から）



SK446 土層断面（西から）



SK446 完掘状況（西から）



SK595 検出状況（南から）

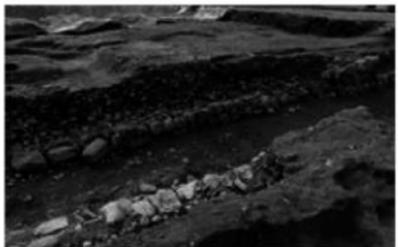


六郷堀跡南北方向 全景(東から)



六郷堀跡南北方向 全景(北から)

写真図版61 六郷堀跡南北方向(1)



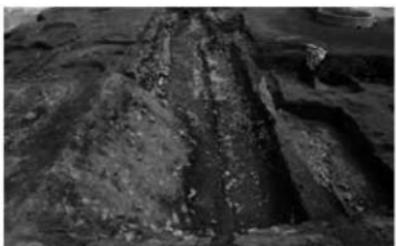
六郷堀跡南北方向 全景（南東から）



六郷堀跡南北方向 全景（北西から）



六郷堀跡南北方向 全景（南東から）



六郷堀跡南北方向 全景（南から）



六郷堀跡南北方向 全景（南から）



六郷堀跡南北方向 全景（南西から）



六郷堀跡南北方向 全景（南東から）

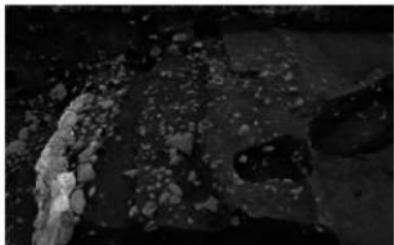


六郷堀跡南北方向 東壁検出状況（北西から）

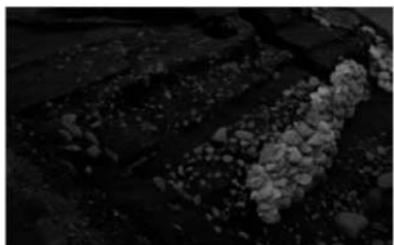
写真図版62 六郷堀跡南北方向(2)



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（南西から）



六郷堀跡南北方向 東壁裏込め検出状況（南から）



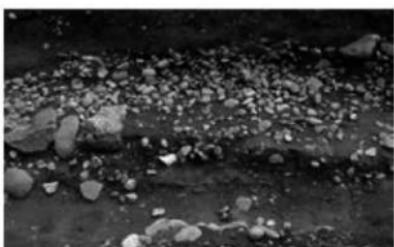
六郷堀跡南北方向 東壁裏込め検出状況（北西から）



六郷堀跡南北方向 東壁抜取穴検出状況（北から）



六郷堀跡南北方向 東壁裏込め検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁裏込め検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（南から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（南西から）

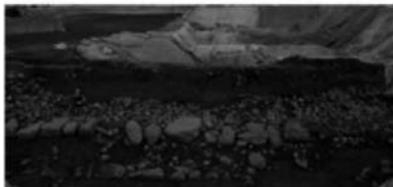
写真図版63 六郷堀跡南北方向(3)



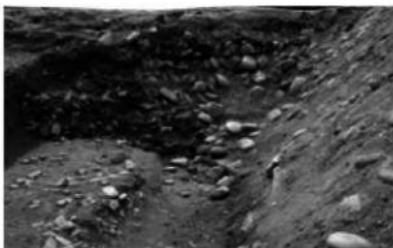
六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 南壁検出状況（北から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）

写真図版64 六郷堀跡南北方向(4)



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（西から）



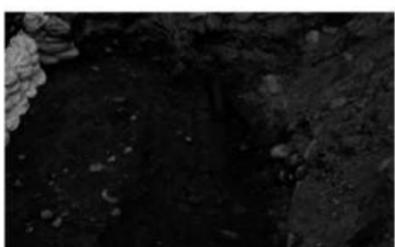
六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（北西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（北西から）



六郷堀跡南北方向 東壁側石検出状況（北西から）



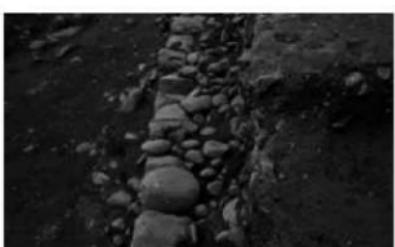
六郷堀跡南北方向 底面レンガ検出状況（北から）



六郷堀跡南北方向 底面レンガ検出状況（南から）

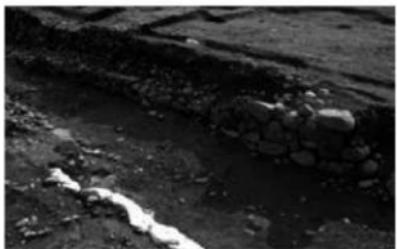


六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（北東から）

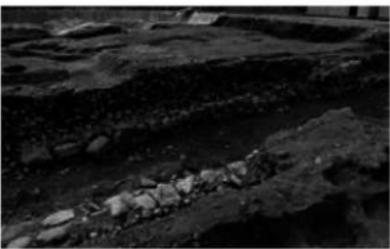


六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（東から）

写真図版65 六郷堀跡南北方向(5)



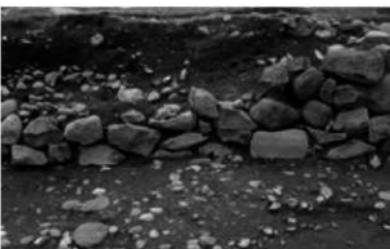
六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（南東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（北から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（南東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（南東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（南東から）



六郷堀跡南北方向 西壁側石検出状況（北東から）

写真図版66 六郷堀跡南北方向(6)



六郷堀跡南北方向 北壁検出状況（南から）



六郷堀跡南北方向 北壁検出状況（南から）



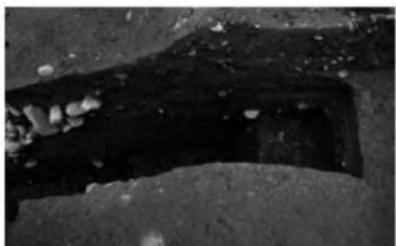
六郷堀跡南北方向 Tr3 挖り下げ状況（北から）



六郷堀跡南北方向 Tr3 底面掘り下げ状況（南から）



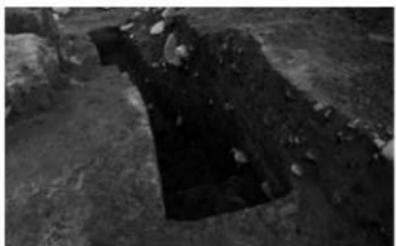
六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（北から）



六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（北から）



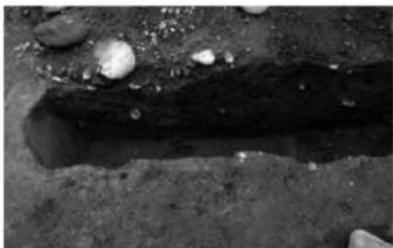
六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（北から）



六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（北西から）



六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 調査状況（東から）



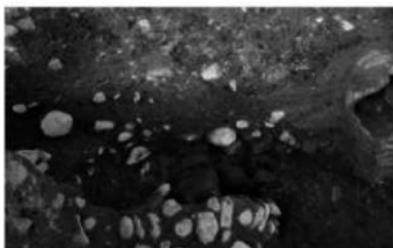
六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（北から）



六郷堀跡南北方向 Tr3 SX19 土層断面（南西から）



六郷堀跡南北方向 Tr4 北壁土管検出状況（南東から）



六郷堀跡南北方向 Tr4 土管検出状況（南から）



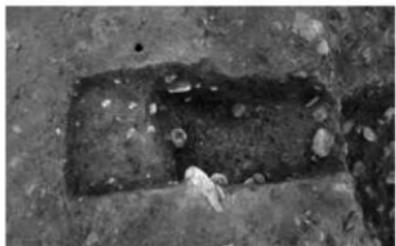
六郷堀跡南北方向 Tr4 北壁掘り下げ状況（南から）



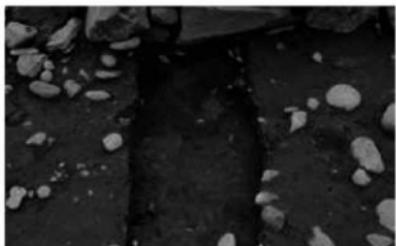
六郷堀跡南北方向 Tr4 北壁掘り下げ状況（南西から）六郷堀跡南北方向 Tr4 北壁掘り下げ状況（北東から）



写真図版68 六郷堀跡南北方向(8)



六郷堀跡南北方向 Tr4 北壁掘り下げ状況（東から）



六郷堀跡南北方向 Tr5 掘り下げ状況（東から）



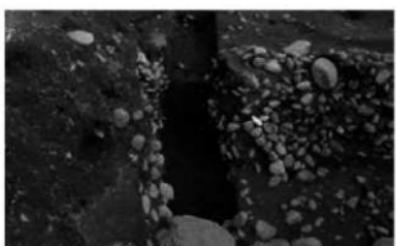
六郷堀跡南北方向 Tr5 遺物出土状況（南から）



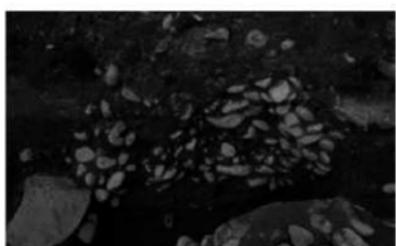
六郷堀跡南北方向 Tr5 遺物出土状況（北から）



六郷堀跡南北方向 Tr6 掘り下げ状況（南東から）



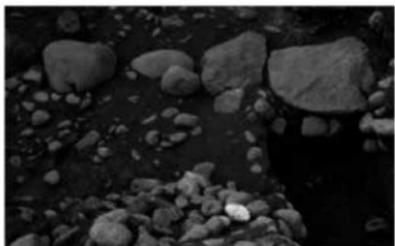
六郷堀跡南北方向 Tr6 掘り下げ状況（西から）



六郷堀跡南北方向 Tr6 土層断面（南から）



六郷堀跡南北方向 Tr6 掘り下げ状況（西から）



六郷堀跡南北方向 東壁 Tr6 堀り下げ状況（東から）



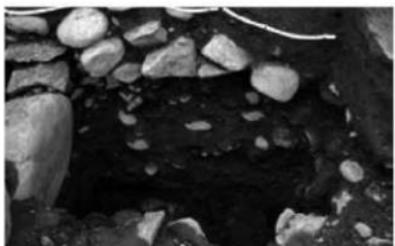
六郷堀跡南北方向 東壁 Tr6 堀り下げ状況（南西から）



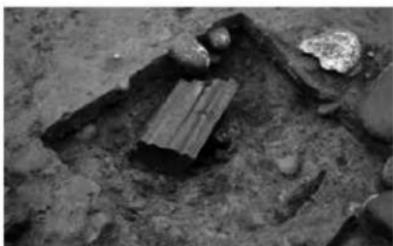
六郷堀跡南北方向 東壁 Tr6 堀り下げ状況（東から）



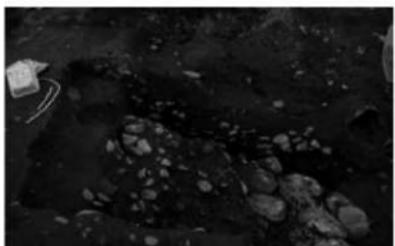
六郷堀跡南北方向 東壁 Tr6 土層断面（北から）



六郷堀跡南北方向 東壁 Tr6 土層断面（南から）



六郷堀跡南北方向 東壁 Tr7 遺物出土状況（北から）



六郷堀跡南北方向 東壁 Tr8 堀り下げ状況（Tr4 の西上）



六郷堀跡南北方向 東壁 Tr7 遺物出土状況（北西から）

写真図版70 六郷堀跡南北方向(10)



六郷堀跡東西方向 全景(東から)



六郷堀跡東西方向 全景(北から)

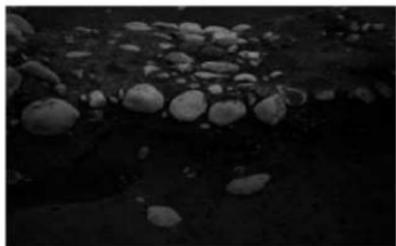


六郷堀跡東西方向 全景(北から)



六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況(西から)

写真図版72 六郷堀跡東西方向(2)



六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 底面裏込め検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 裏込め検出状況（西から）



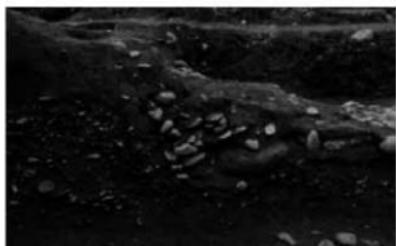
六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（東から）



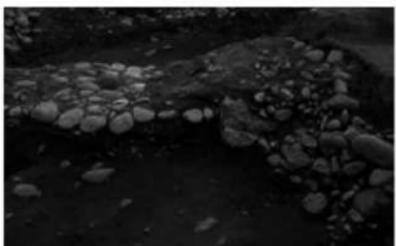
六郷堀跡東西方向 土層断面検出状況（東から）



六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 裏込め検出状況（東から）



六郷堀跡東西方向 裏込め検出状況（西から）

写真図版73 六郷堀跡東西方向(3)



六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（西から）



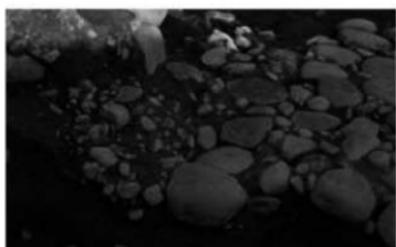
六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 底面敷石検出状況（東から）



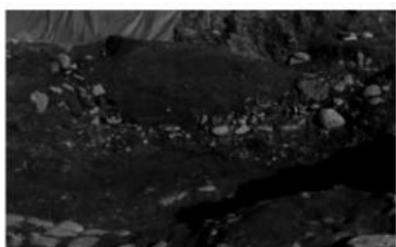
六郷堀跡東西方向 裏込め検出状況（北西から）



六郷堀跡東西方向 底面裏込め検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）

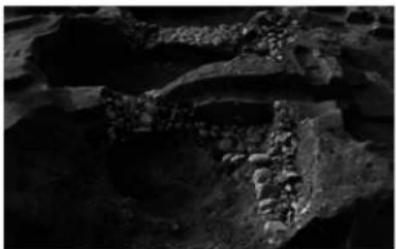


六郷堀跡東西方向 検出状況（東から）

写真図版74 六郷堀跡東西方向(4)



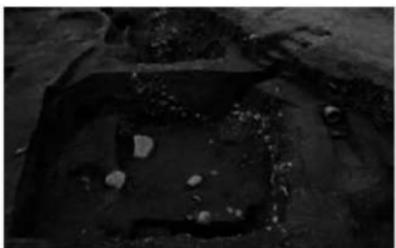
六郷堀跡東西方向 土層断面（東から）



六郷堀跡東西方向 調査状況（東から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（東から）



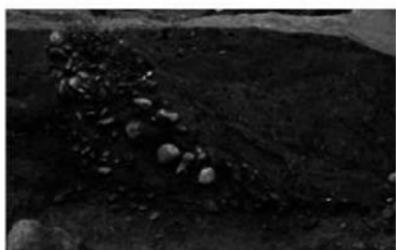
六郷堀跡東西方向 検出状況（東から）



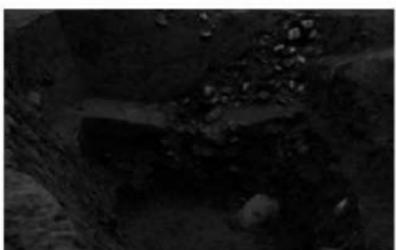
六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 北壁検出状況（南から）



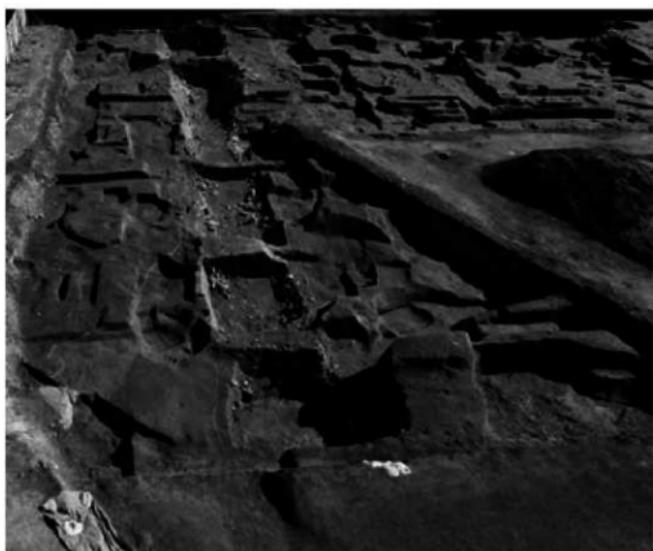
六郷堀跡東西方向 土層断面（東から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）



六郷堀跡東西方向 全景(北から)



六郷堀跡東西方向 全景(西から)

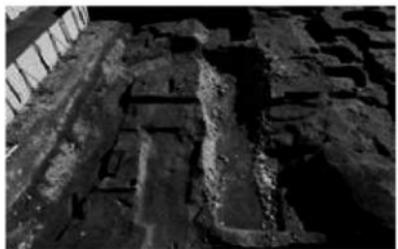
写真図版76 六郷堀跡東西方向(6)



六郷堀跡東西方向 全景(西から)



六郷堀跡東西方向 土層断面(西から)



六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



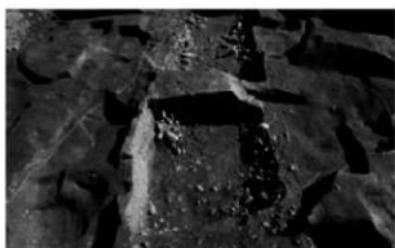
六郷堀跡東西方向 検出状況（東から）



六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



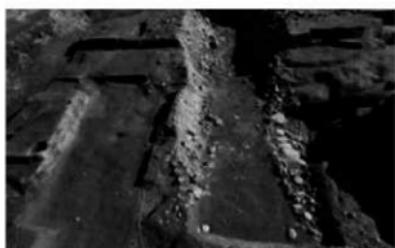
六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



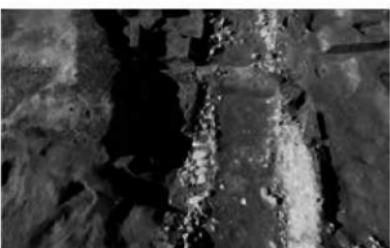
六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）

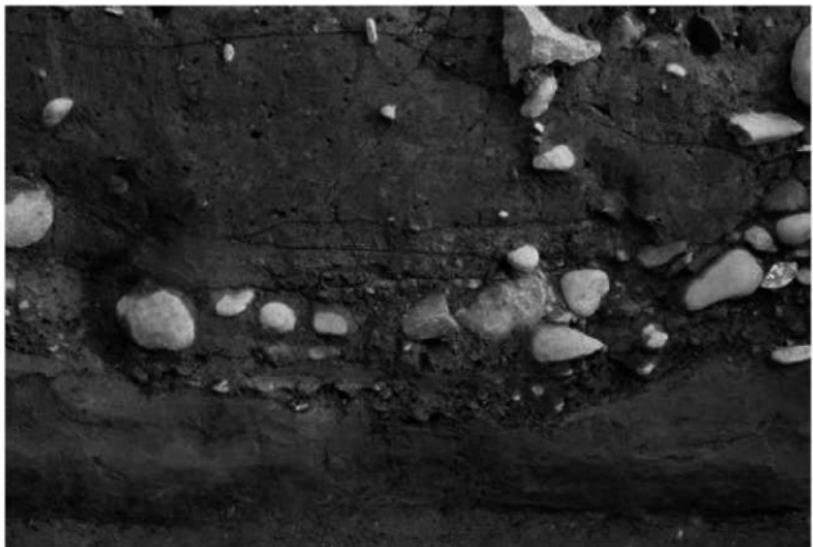


六郷堀跡東西方向 検出状況（西から）



六郷堀跡東西方向 検出状況（東から）

写真図版78 六郷堀跡東西方向(8)



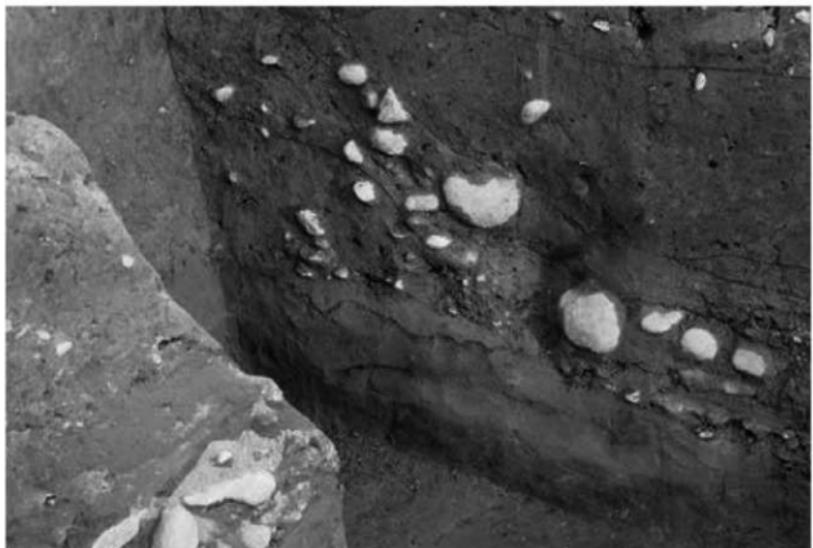
六郷堀跡東西方向 底面土層断面(西から)



六郷堀跡東西方向 裏込め土層断面(西から)



六郷堀跡東西方向 土層断面(南西から)

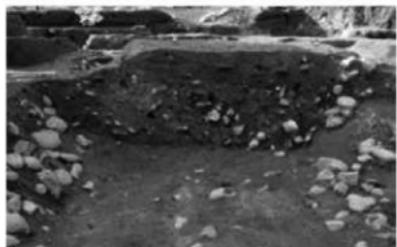


六郷堀跡東西方向 土層断面(南西から)

写真図版80 六郷堀跡東西方向(10)



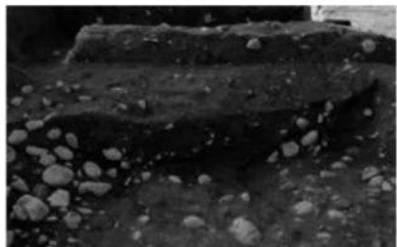
六郷堀跡東西方向 土層断面(北西から)



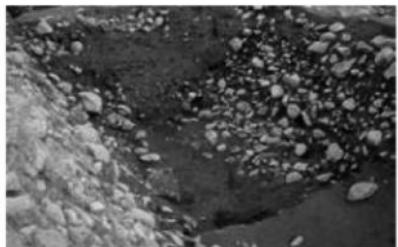
六郷堀跡東西方向 土層断面(東から)



六郷堀跡東西方向 土層断面(西から)

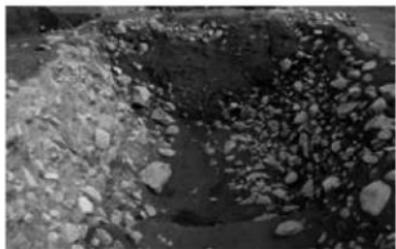


六郷堀跡東西方向 土層断面(東から)

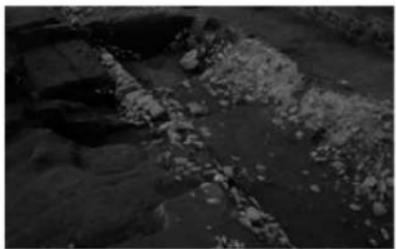


六郷堀跡東西方向 土層断面(北西から)

写真図版81 六郷堀跡東西方向(11)



六郷堀跡東西方向 調査状況（西から）



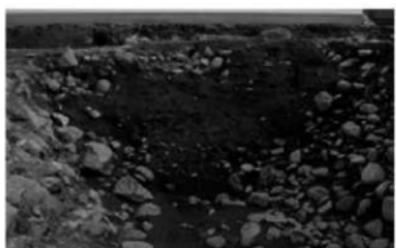
六郷堀跡東西方向 調査状況（南東から）



六郷堀跡東西方向 調査状況（北東から）



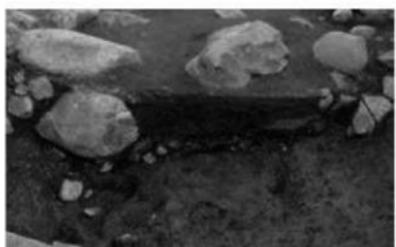
六郷堀跡東西方向 南壁調査状況（北東から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）



六郷堀跡東西方向 調査状況（西から）



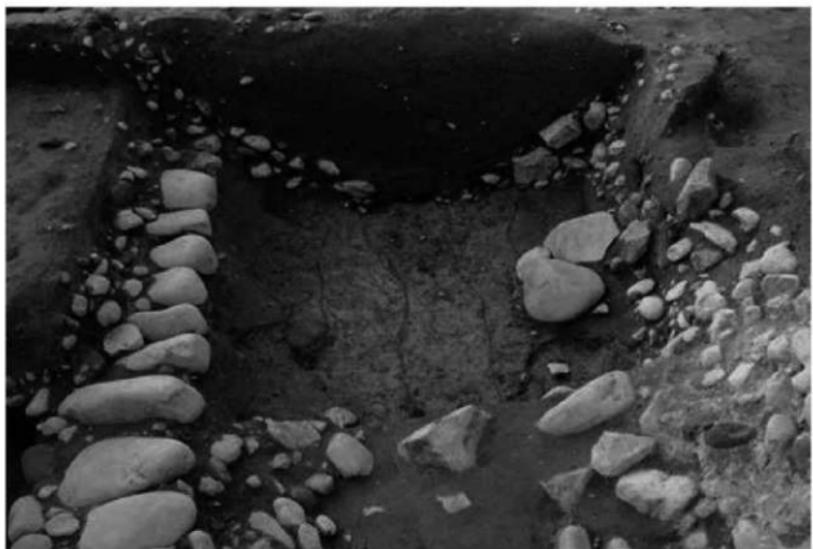
六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）



六郷堀跡東西方向 土層断面（西から）



六郷堀跡東西方向 南壁崩落状況(北から)

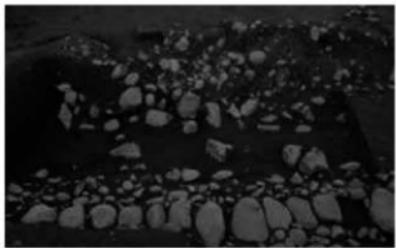


六郷堀跡東西方向 側石検出状況(東から)

写真図版83 六郷堀跡東西方向(13)



六郷堀跡東西方向 南壁側石棟出状況（北から）



六郷堀跡東西方向 北壁側石棟出状況（南から）



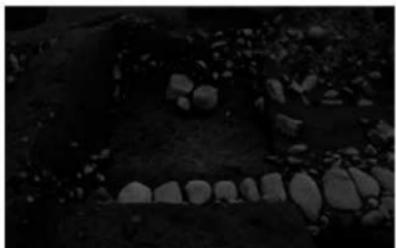
六郷堀跡東西方向 南壁崩落状況（北東から）



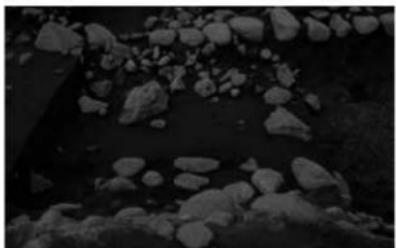
六郷堀跡東西方向 土層断面（東から）



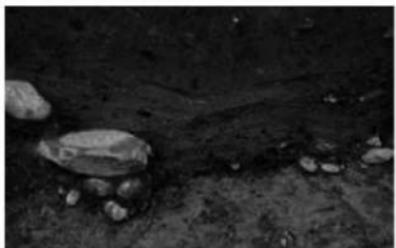
六郷堀跡東西方向 掘り下げ状況（北東から）



六郷堀跡東西方向 掘り下げ状況（南から）



六郷堀跡東西方向 掘り下げ状況（北から）



六郷堀跡東西方向 底面土層断面（東から）

写真図版84 六郷堀跡東西方向(14)



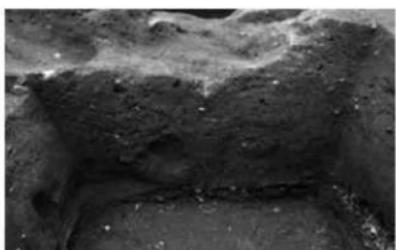
河川跡 土層断面（東から）



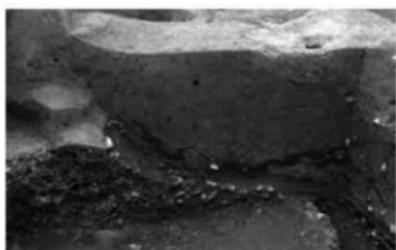
河川跡 土層断面（北東から）



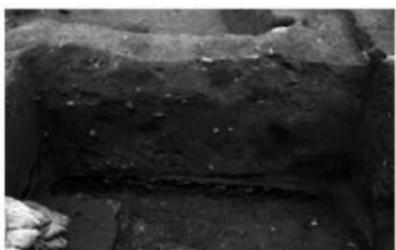
河川跡 土層断面（南東から）



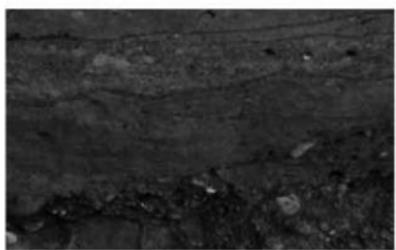
河川跡 土層断面（南から）



河川跡 土層断面（南から）



河川跡 土層断面（東から）

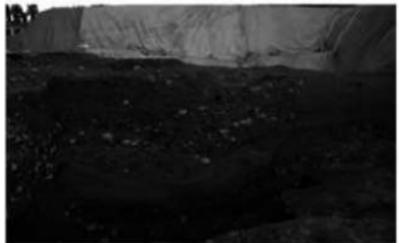


河川跡 土層断面（西から）

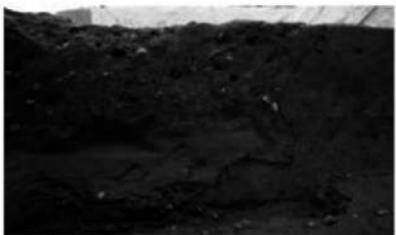


河川跡 土層断面（南東から）

写真図版85 河川跡(1)



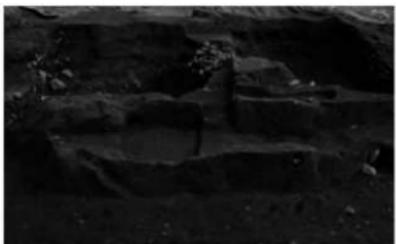
河川跡 土層断面（西から）



河川跡 土層断面（西から）



河川跡 土層断面（東から）



河川跡 土層断面（北から）



河川跡 土層断面（東から）



河川跡 土層断面（西から）



河川跡 土層断面（西から）



河川跡 土層断面（西から）

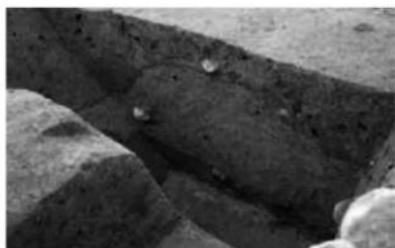
写真図版86 河川跡(2)



河川跡 土層断面(南東から)



河川跡 土層断面(南西から)



河川跡 土層断面(北東から)



河川跡 土層断面(北西から)



河川跡 土層断面(南西から)



河川跡 土層断面(北西から)



河川跡(南西から)



1区 調査状況（西から）



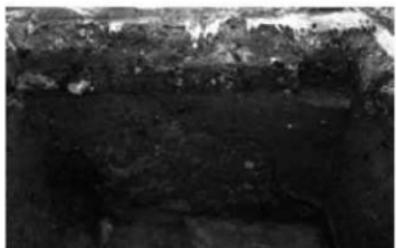
1区 SX16 検出状況（東から）



1区 SD99-SX16 完掘状況（南から）



1区 SD99-SX16 完掘状況（東から）



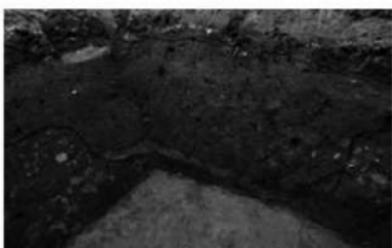
1区 SD99-SX16 南壁土層断面（北から）



1区 SD99-SX16 西壁土層断面（東から）



1区 SX16 土層断面（東から）

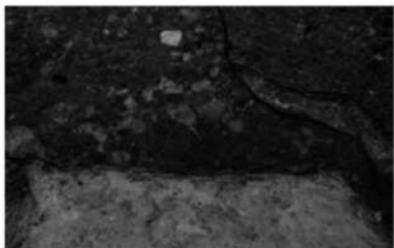


1区 SX16 土層断面（東から）

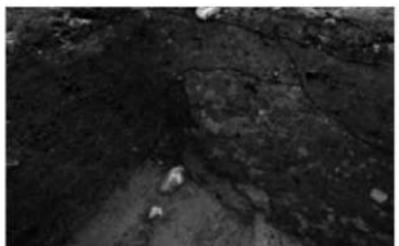
写真図版88 第12次調査(1)



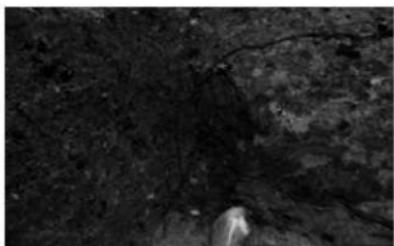
1区 SX16 土層断面（北から）



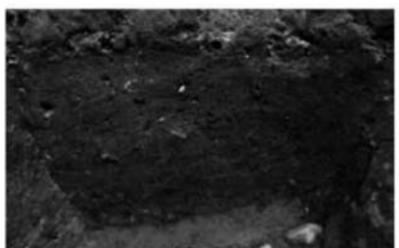
1区 SX17 底面状況（北から）



1区 SD99 土層断面（北西から）



1区 SD99 土層断面（北西から）



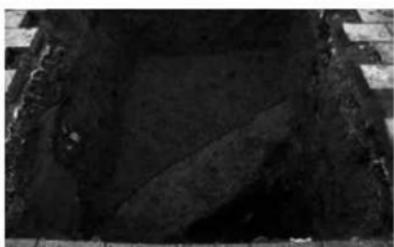
1区 SD99 土層断面（西から）



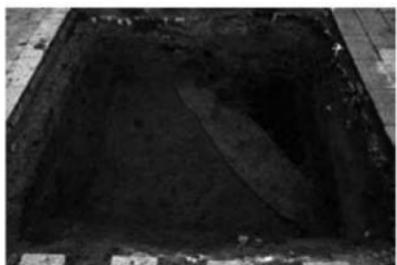
1区東壁 土層断面（西から）



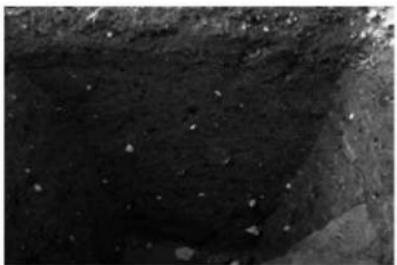
2区 調査状況（北から）



2区 SD99 検出状況（東から）



2区 SD99 棱出状況（南から）



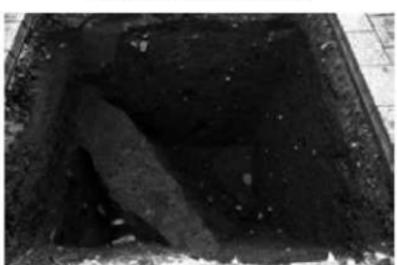
2区 SD99 土層断面（東から）



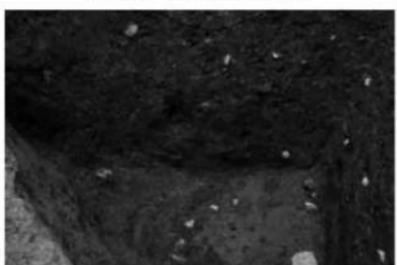
2区 SD99 土層断面（西から）



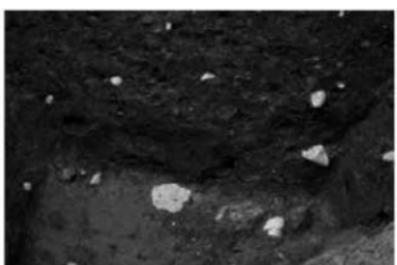
2区 SD99 完掘状況（西から）



2区 SD99 完掘状況（北から）



2区 SD99 底面状況（北から）

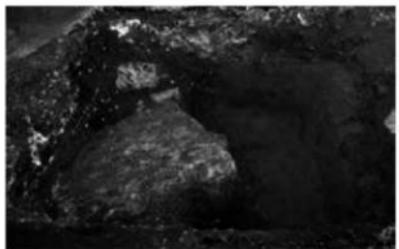


2区 SD99 底面状況（東から）



3区 調査状況（北から）

写真図版90 第12次調査(3)



3区 調査状況（南から）



4区 調査状況（南西から）



4区 北壁土層断面（南から）



4区 IV層検出状況（南から）



5区 III層検出状況（北から）



5区 南壁土層断面（北から）



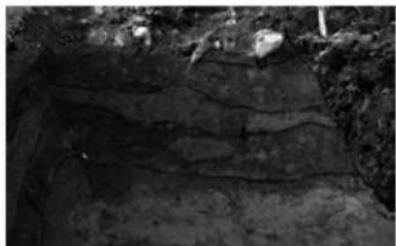
5区 IV層検出状況（東から）



5区 VI層検出状況（北から）



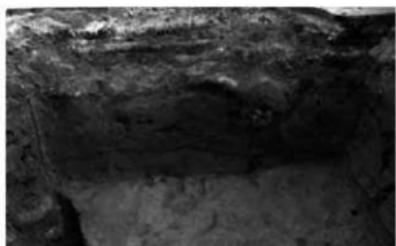
5区 VI層検出状況（西から）



5区 整地層土層断面（東から）



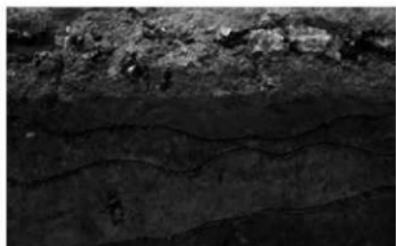
5区 整地層土層断面（北から）



5区 整地層土層断面（西から）



5区 整地層土層断面（東から）



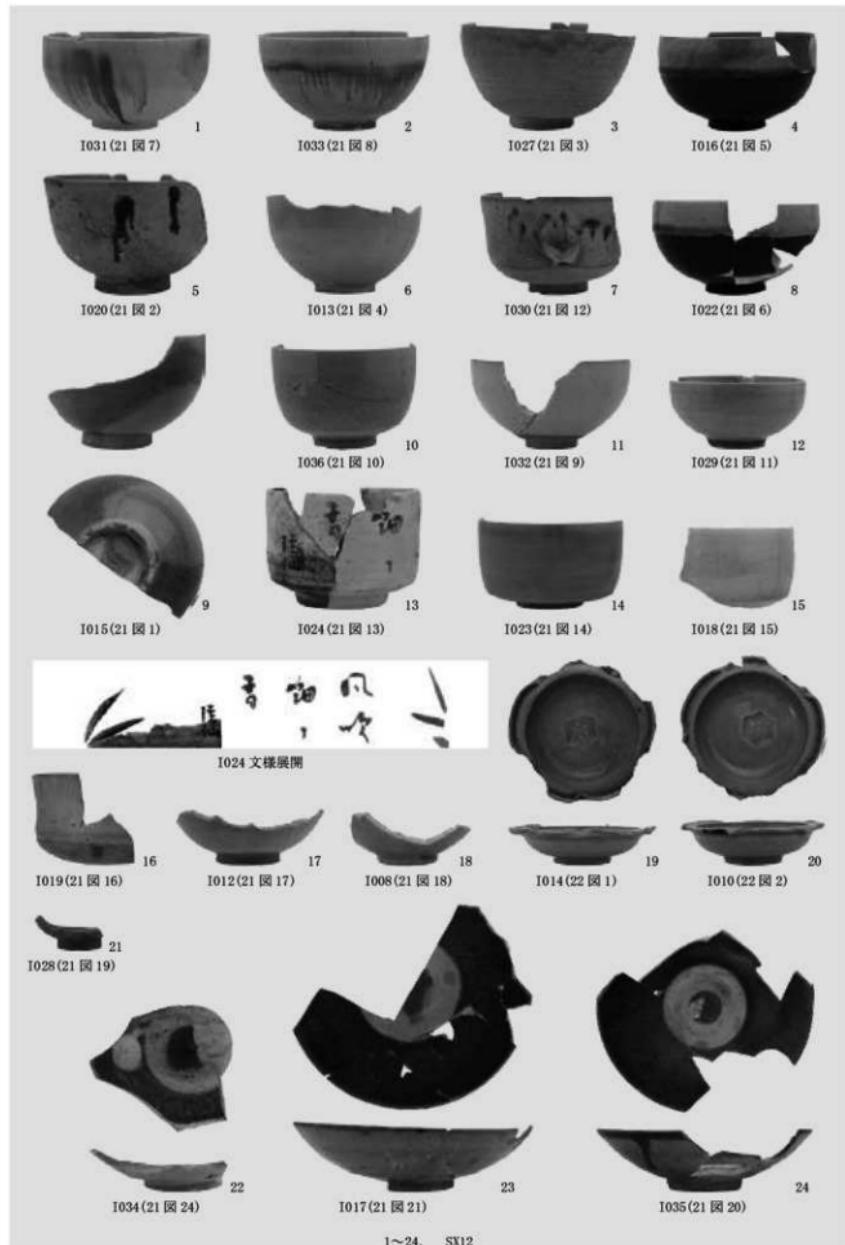
5区 III層土層断面（北から）



1区（奥）・2区（手前）調査状況（北東から）



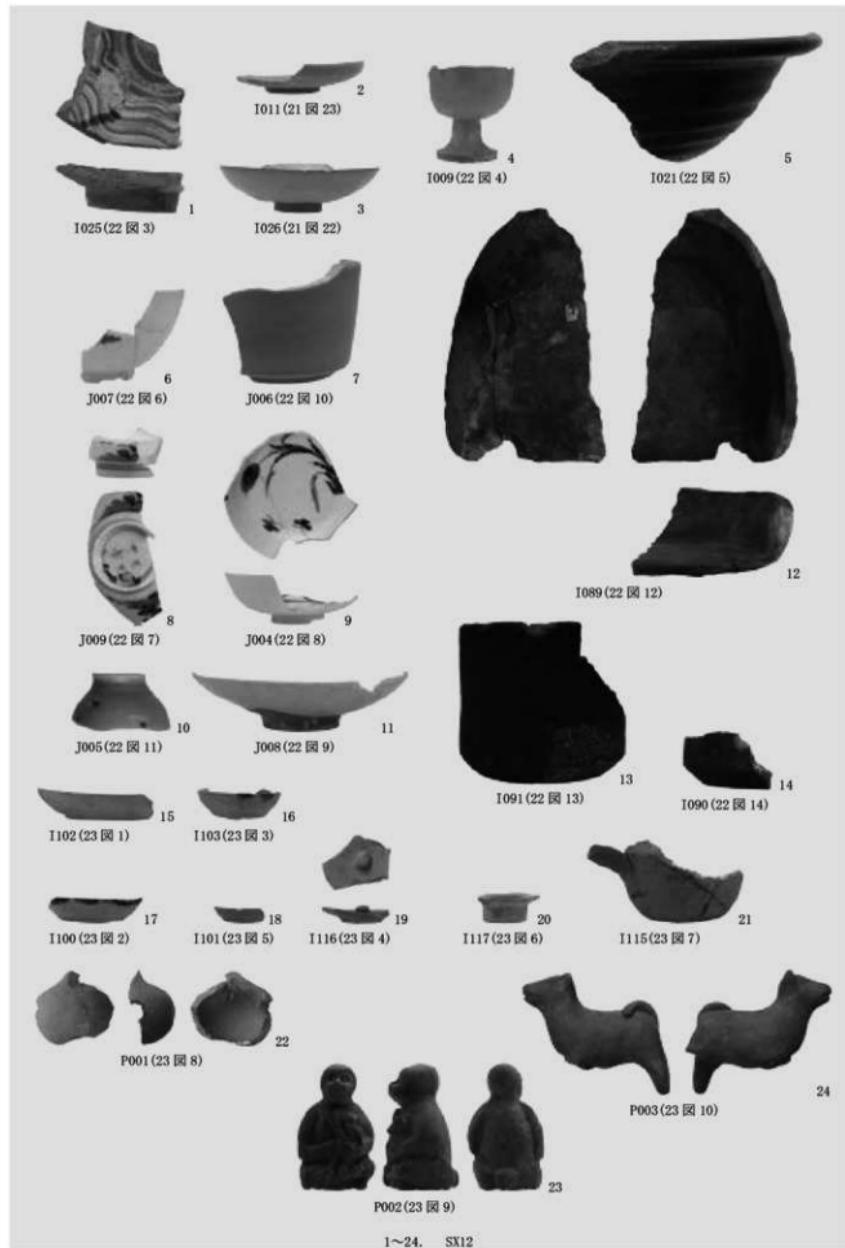
1区 調査状況（北東から）



1~24. SX12

写真図版 93 出土遺物 (1)

陶器 : S= 約 1/3

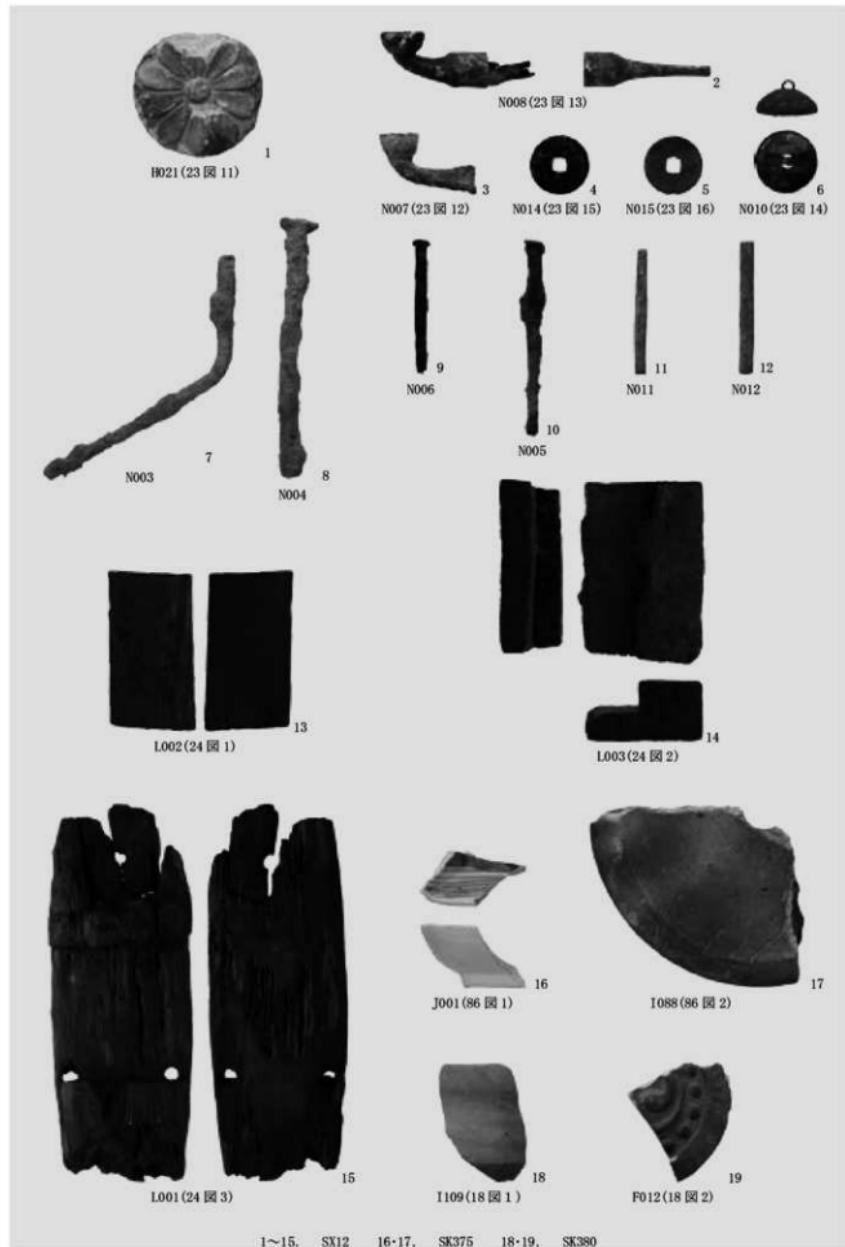


1~24. SX12

陶器・磁器・瓦質土器・土師質土器 : S= 約 1/3

写真図版 94 出土遺物 (2)

土製品 : S= 約 1/2



1~15. SX12 16·17. SK375 18·19. SK380

陶器・瓦質土器・土師質土器・木製品 : S= 約 1/3、瓦 : S= 約 1/5

写真図版 95 出土遺物 (3)

鉄製品・銅製品・金屬製品 : S= 約 1/2



G017(18図3)



2



3

H007(18図5)



H008(18図6)

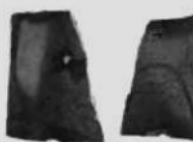


4



7

I055(86図6)



H030(18図7)



N001(18図8)



6

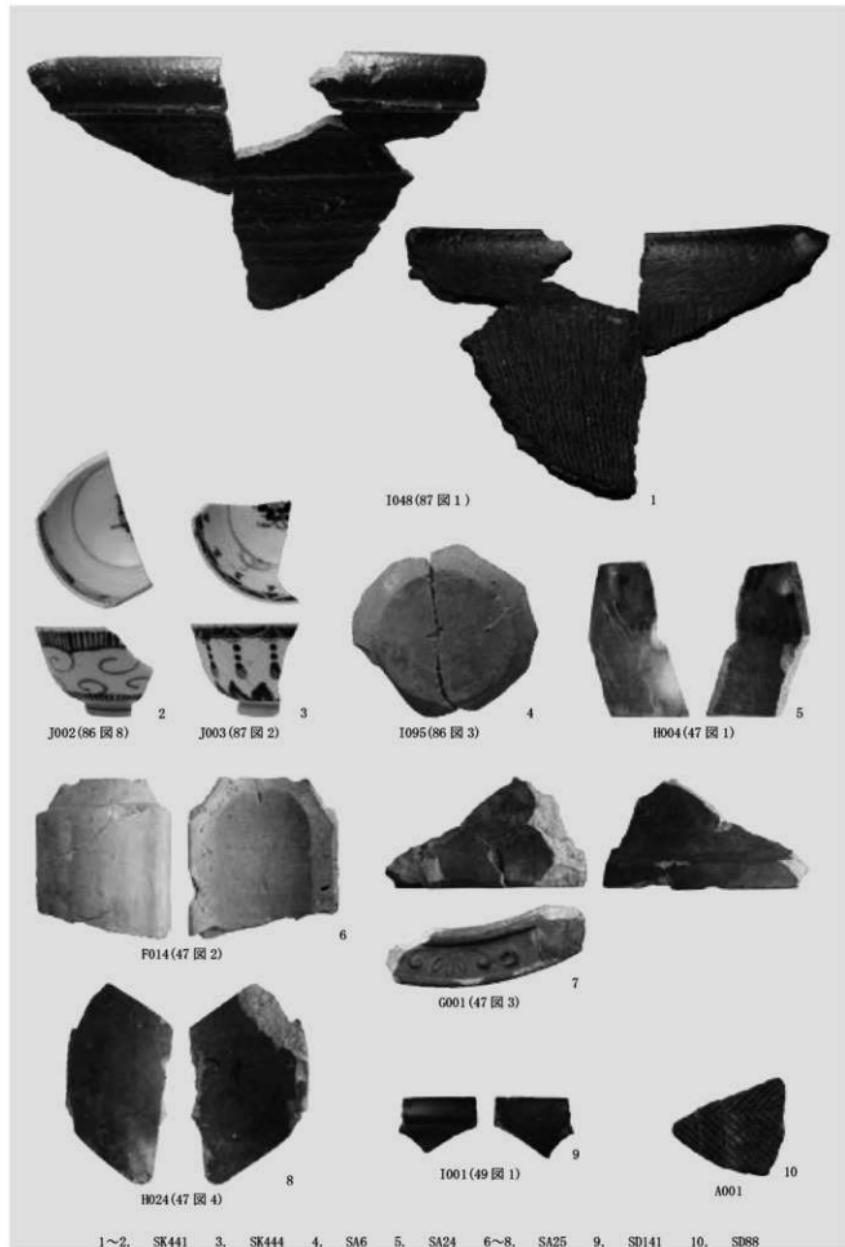
I003(86図7)

1~6. SK380 7~8. SK441

陶器 : S=約1/3、瓦 : S=約1/5

鉄製品 : S=約1/2

写真図版 96 出土遺物 (4)



1~2. SK441 3. SK444 4. SA6 5. SA24 6~8. SA25 9. SD141 10. SD88

陶器・磁器・土師質土器・繩文土器: S= 約 1/3
瓦: S= 約 1/5

写真図版 97 出土遺物 (5)



F007(51 図 1)



F008(51 図 2)



F006(52 図 2)

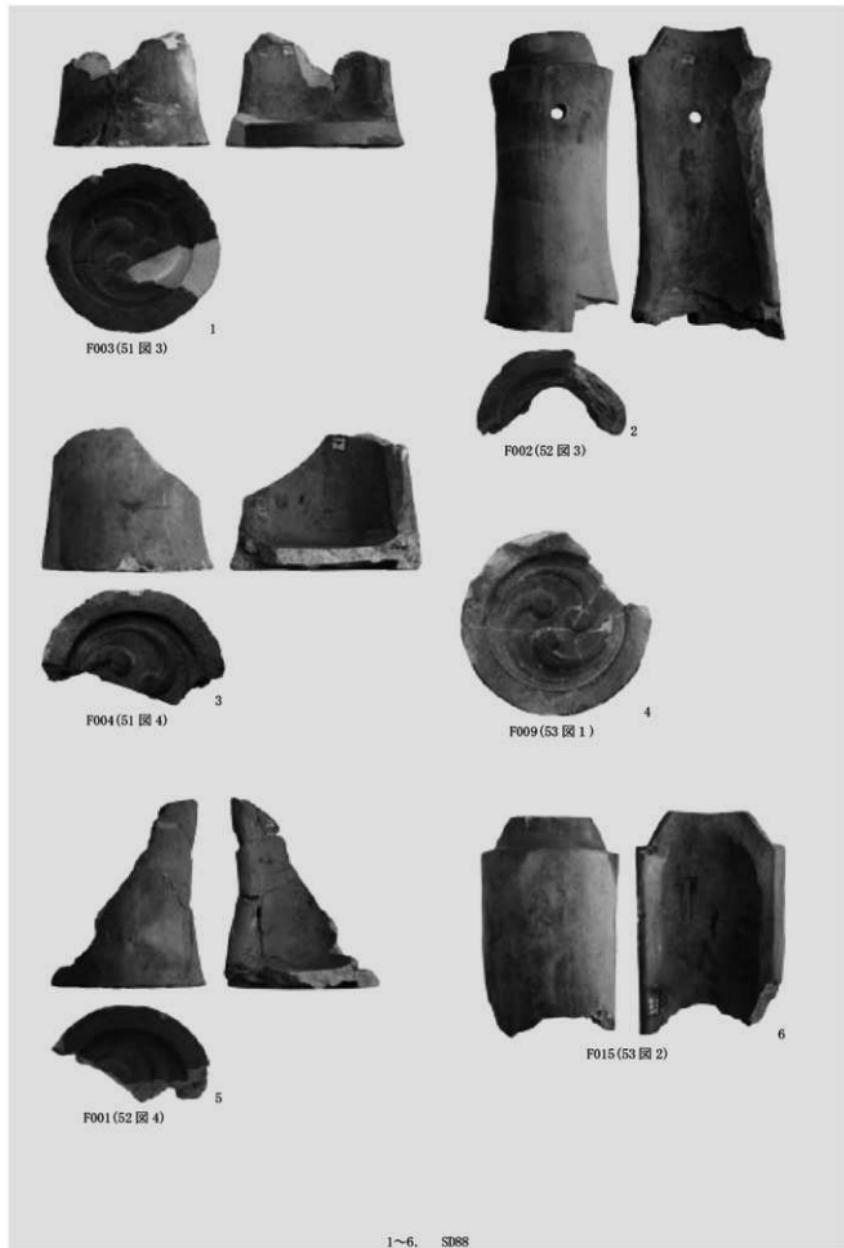


F005(52 図 1)

1~4. SD88

瓦 : S= 約 1/5

写真図版 98 出土遺物 (6)



1~6. SD88

瓦 : S= 約 1/5

写真図版 99 出土遺物 (7)



1

G002(53図3)



2

G003(54図1)



3

G004(54図2)



4

G005(53図5)



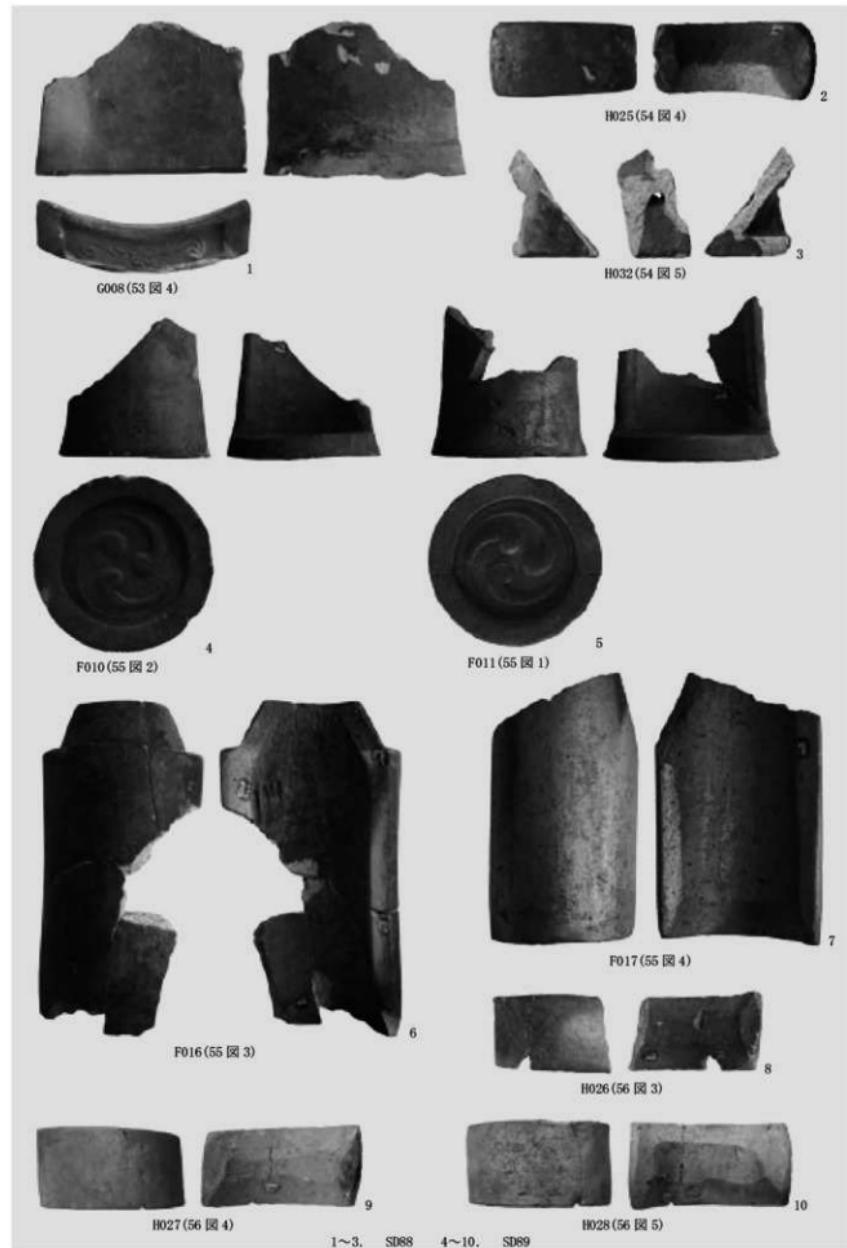
5

G006(54図3)

1~5. SD88

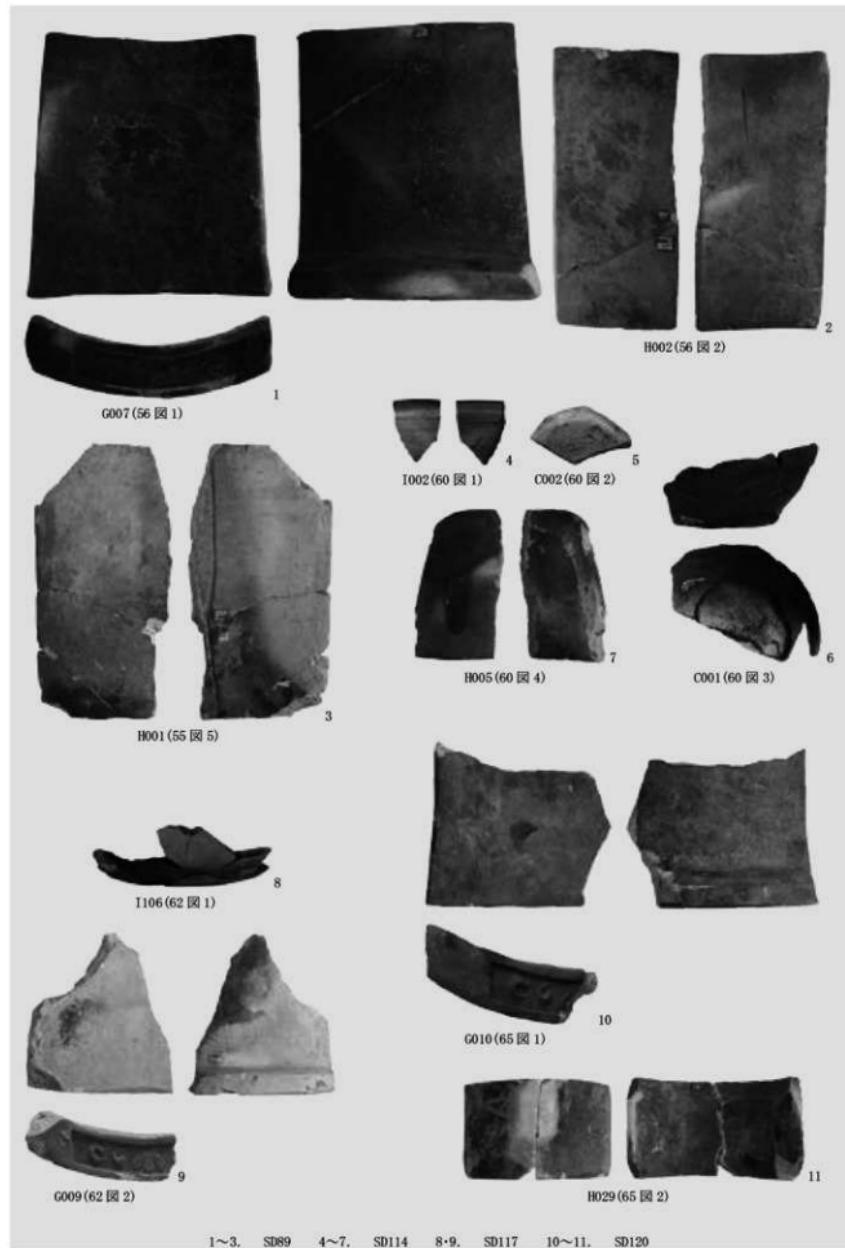
瓦:S=約1/5

写真図版 100 出土遺物 (8)



写真図版 101 出土遺物 (9)

瓦 : S= 約 1/5



陶器・土師質土器・土師器 : S=約 1/3

写真図版 102 出土遺物 (10)

瓦 : S=約 1/5

I096(68図1)

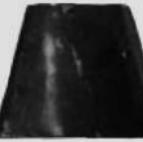
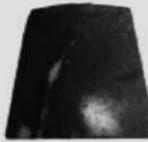
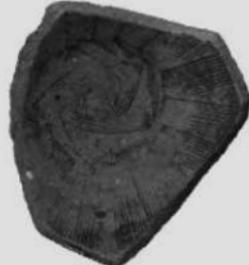
1

H006(68図2)

2

1096(68図1)

H006(68図2)

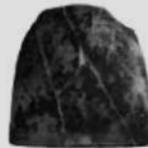


H009(73図2)

4



I037(73図1)



H010(73図4)

5



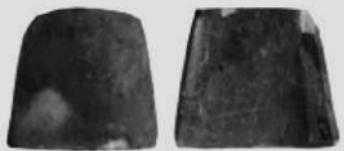
H011(73図5)

6



H012(73図6)

7



H013(73図7)

8



H014(73図3)

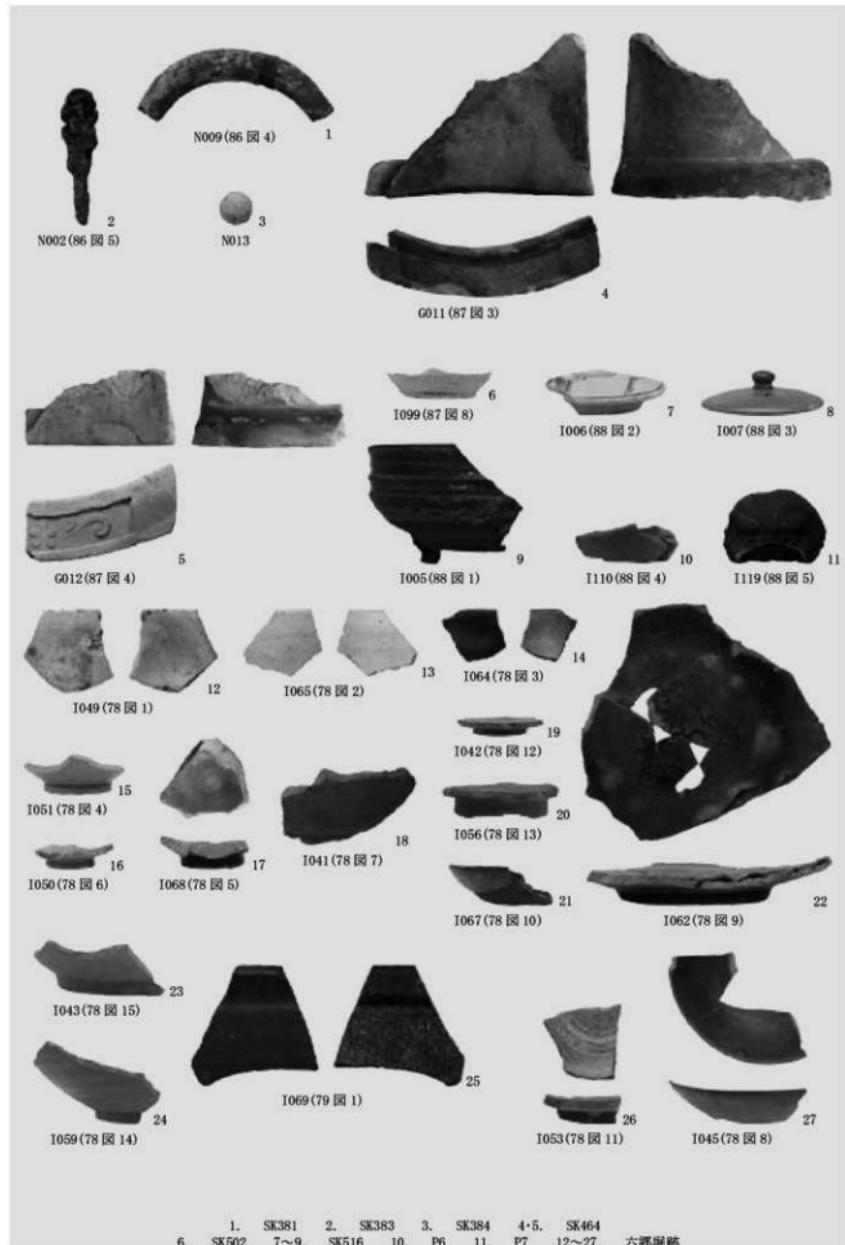
9

1・2. SD123 3～9. SX23

陶器・土師質土器:S=約1/3

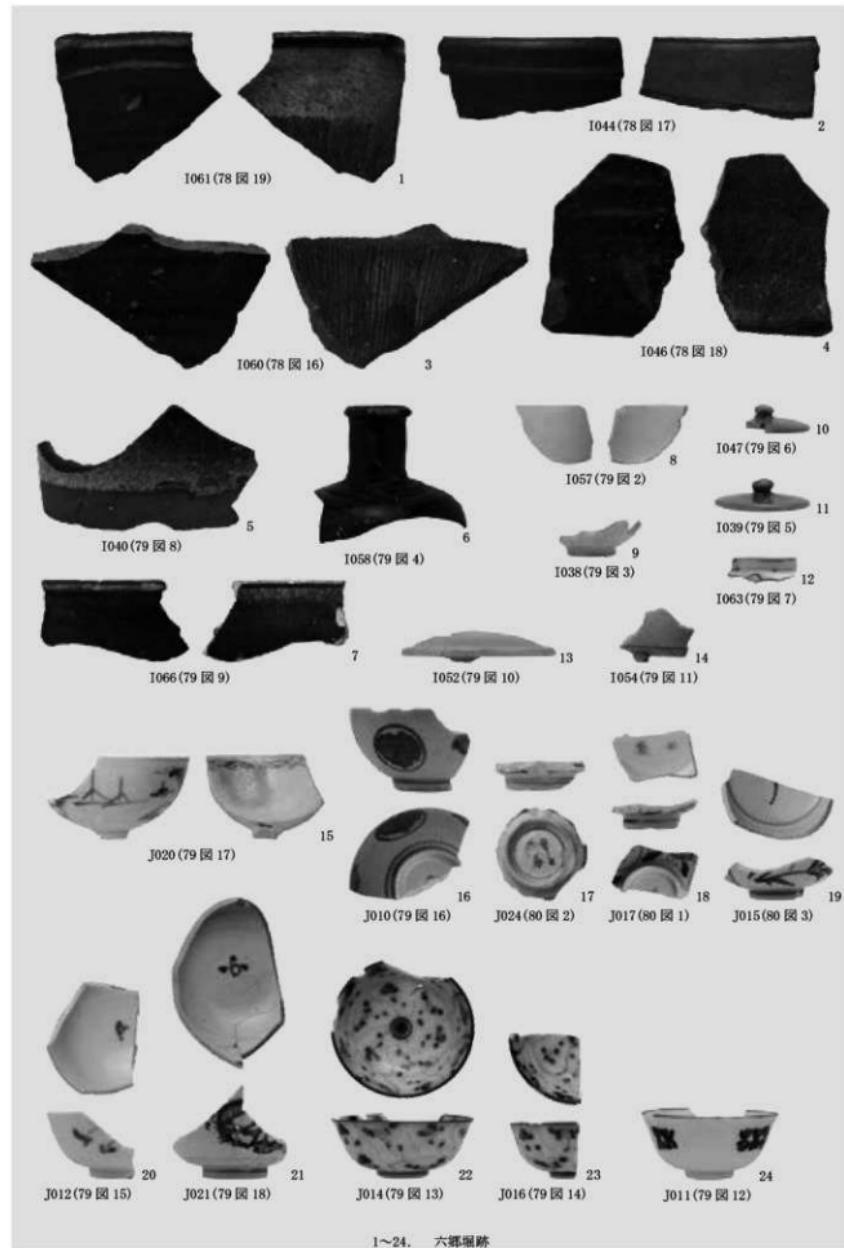
写真図版 103 出土遺物 (11)

瓦:S=約1/5



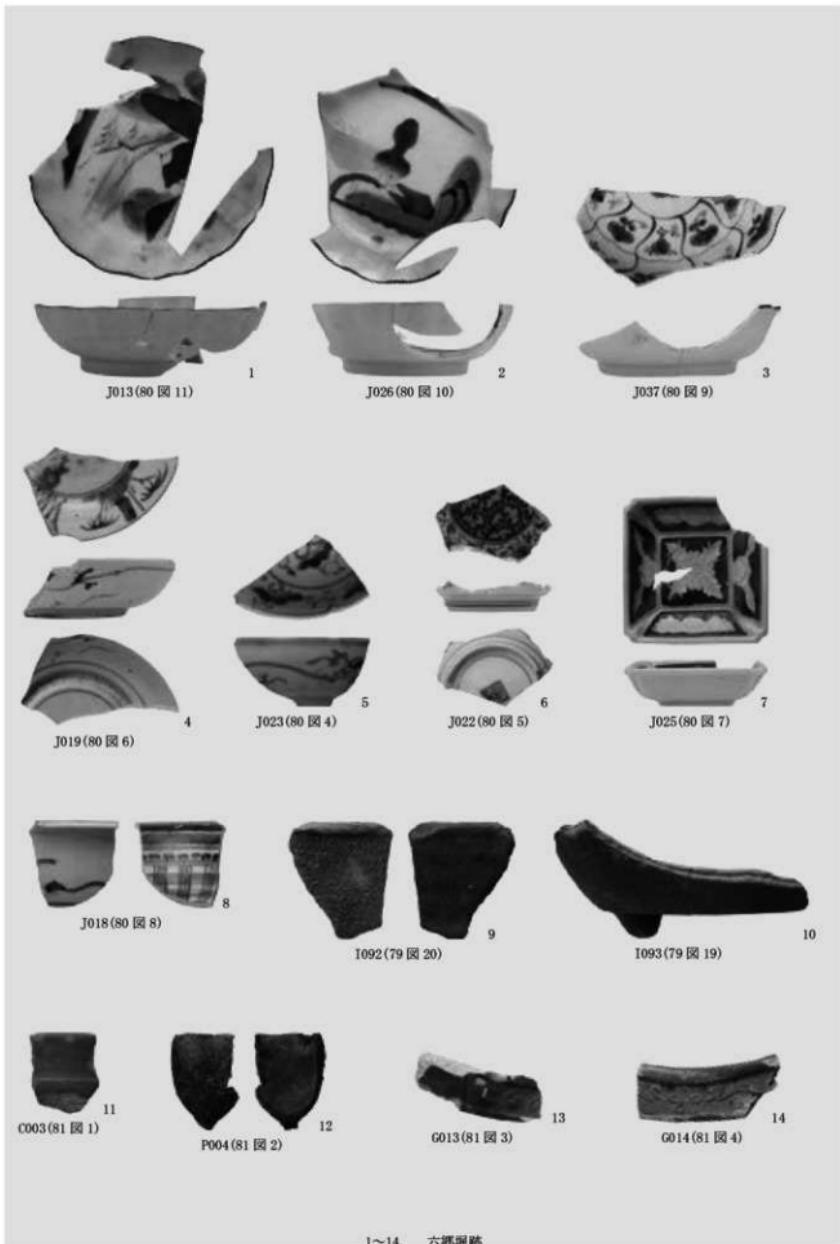
写真図版 104 出土遺物 (12)

陶器・土師質土器 : S= 約 1/3、瓦・瓦質製品 : S= 約 1/5
鉄製品・銅製品・金屬製品 : S= 約 1/2



1~24. 六郷痕跡

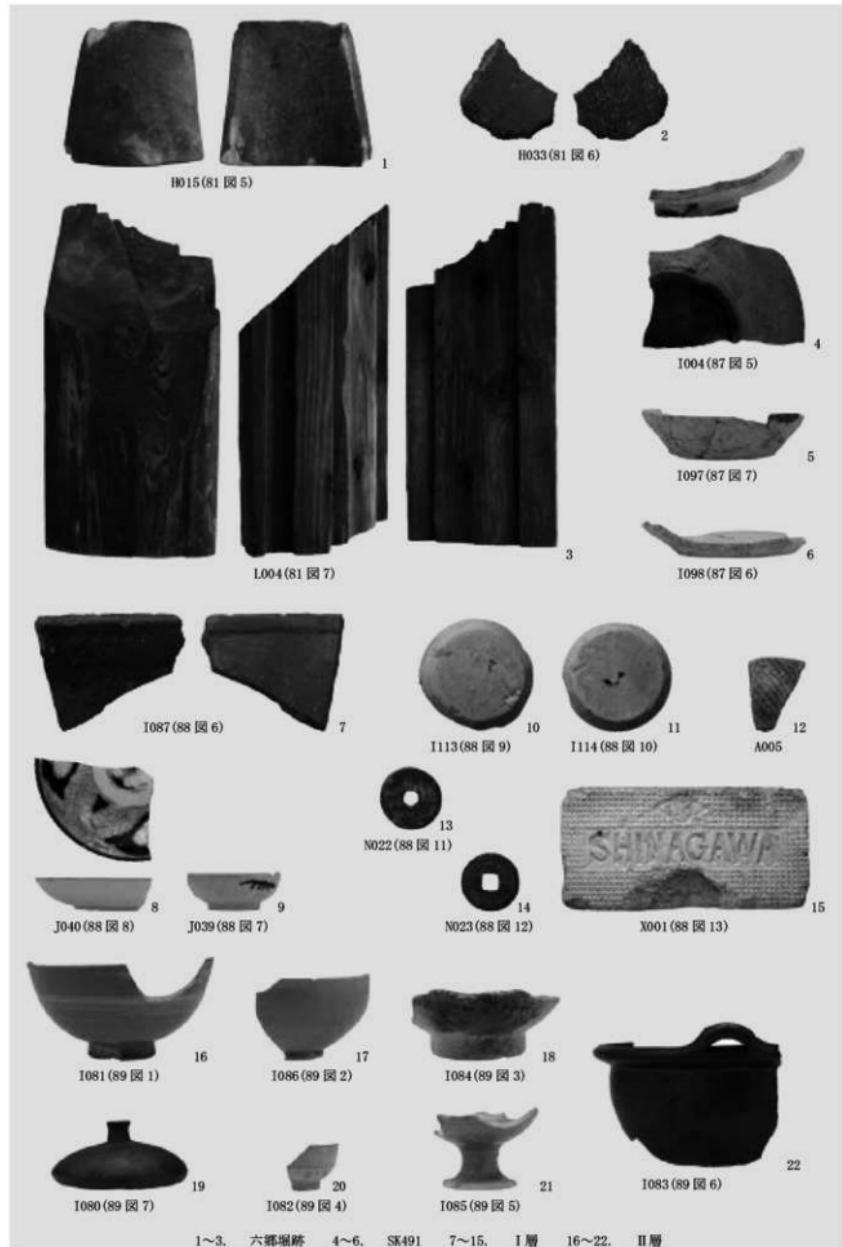
陶器・磁器 : S= 約 1/3



1~14. 六郷遺跡

写真図版 106 出土遺物 (14)

磁器・瓦質土器・土師器 : S=約 1/3
土製品 : S=約 1/2、瓦 : S=約 1/5

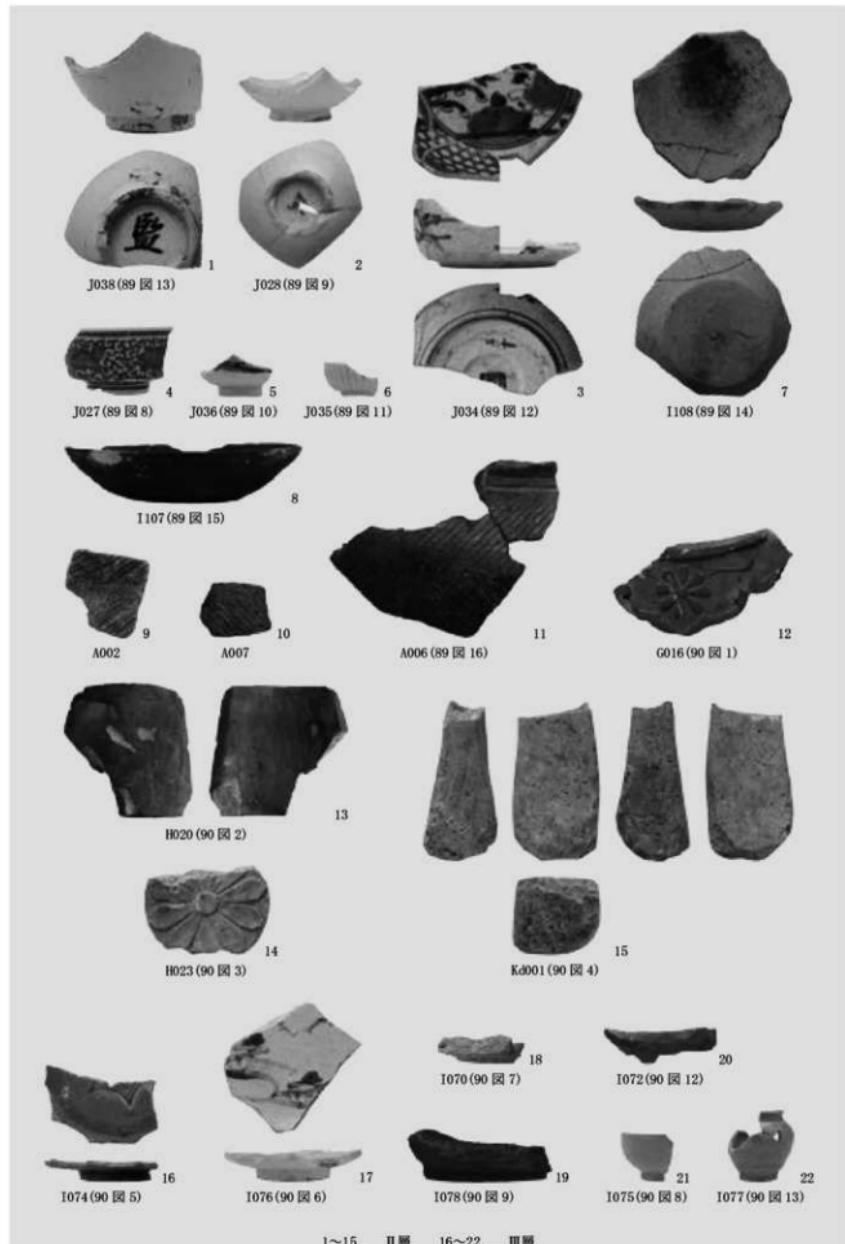


1~3. 六瓣壺跡 4~6. SK491 7~15. I層 16~22. II層

写真図版 107 出土遺物 (15)

陶器・磁器・土師質土器・調文土器 : S=約 1/3、銅製品 : S=約 1/2

瓦・木製品・煉瓦 : S=約 1/5

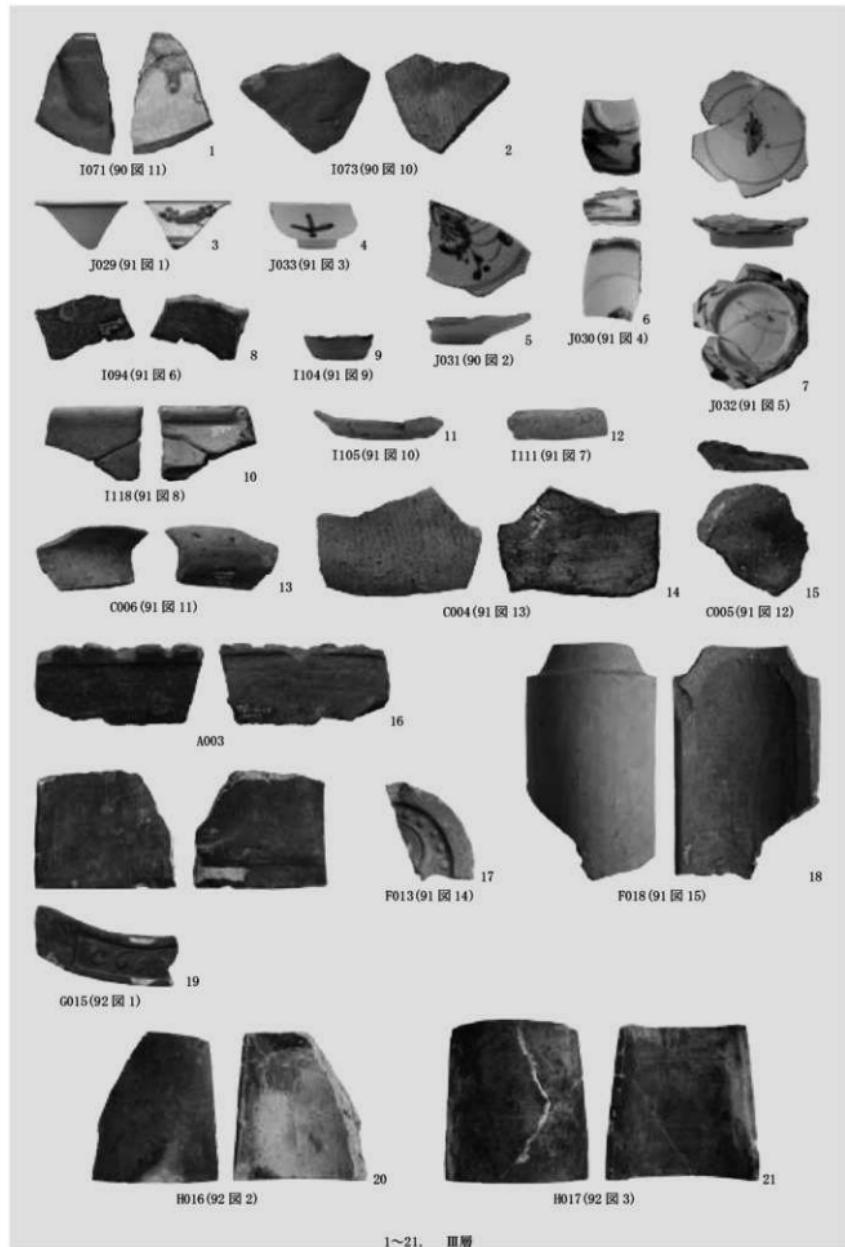


1~15. II層 16~22. III層

陶器・磁器・土師質土器・織文土器・石製品 : S= 約 1/3

写真図版 108 出土遺物 (16)

瓦 : S= 約 1/5

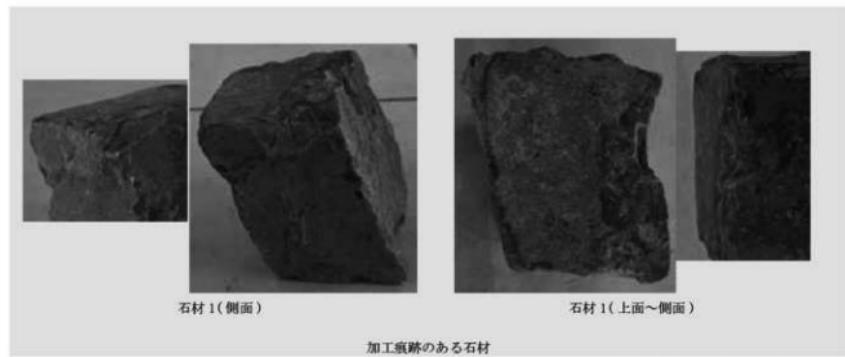
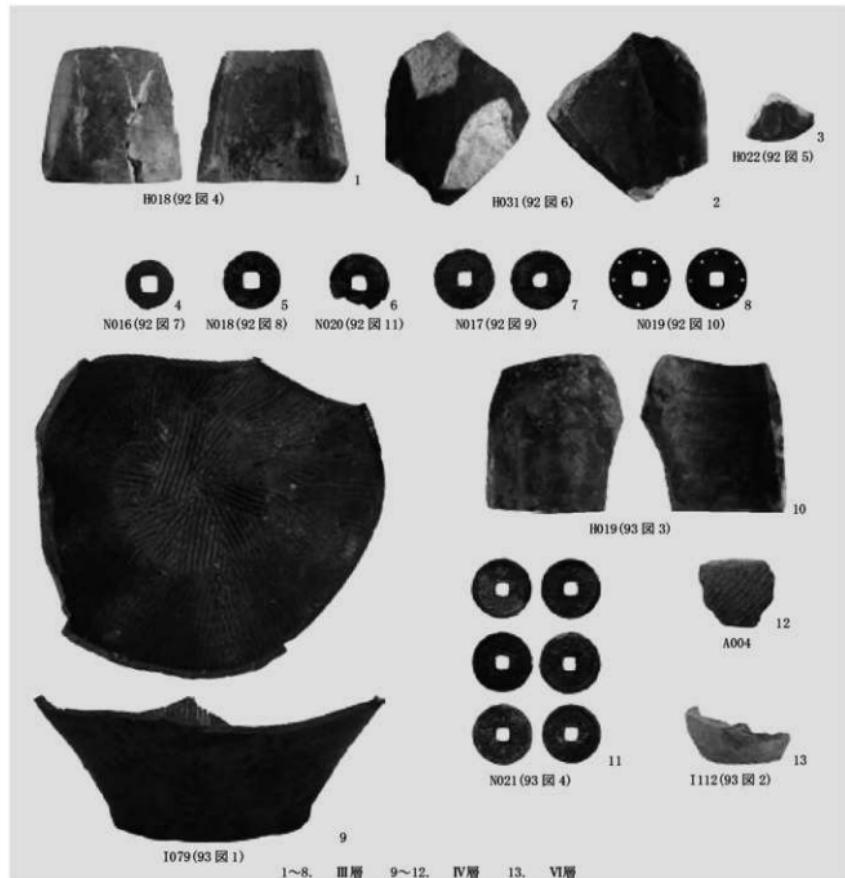


1~21. III層

陶器・磁器・瓦質土器・土師質土器・土師器 : S= 約 1/3

写真図版 109 出土遺物 (17)

瓦 : S= 約 1/5



写真図版 110 出土遺物 (18)

陶器・土師質土器・繩文土器 : S=約 1/3

銅製品 : S=約 1/2, 瓦 : S=約 1/5



Tr1-1 調査終了状況(西から)



Tr1-2 調査終了状況(北東から)



Tr1-2 IVb層 検出状況(南から)



Tr1-2 西壁 土層断面(東から)



Tr2 河川跡 検出状況(北東から)



Tr2 河川跡 掘削状況(南東から)



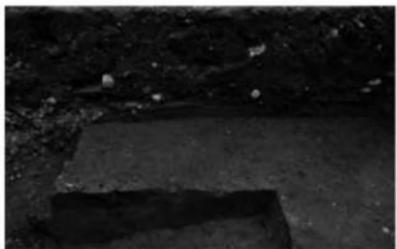
Tr2 河川跡 西壁 土層断面①(東から)



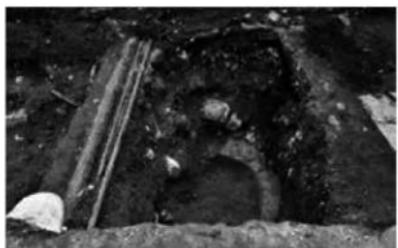
Tr2 河川跡 西壁 土層断面②(南東から)



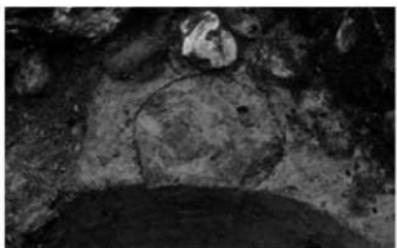
Tr3 調査終了状況(東から)



Tr3 IVb層検出状況(北から)



Tr3 VI層・P1 検出状況(南から)

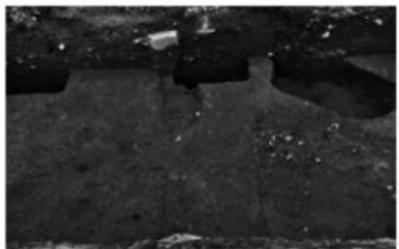


Tr3 P1 検出状況(南西から)



Tr4 調査終了状況(東から)

写真図版112 第15次調査(2)



Tr4 SA7 検出状況(南から)



Tr4 SA7 堀方確認状況(南から)



Tr4 SA7-26 検出状況(南西から)



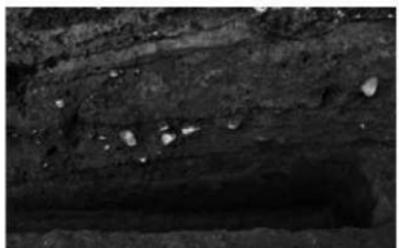
Tr4 SA26 検出状況(西から)



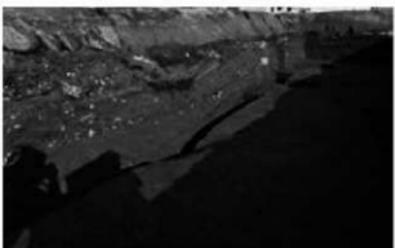
Tr4 SA26 堀方確認状況①(北西から)



Tr4 SA26 堀方確認状況②(西から)



Tr4 河川跡堆積土確認状況(南から)



Tr4 北壁土層遠景(南西から)



Tr5 調査終了状況(南東から)



Tr5 深掘部掘削状況(南から)



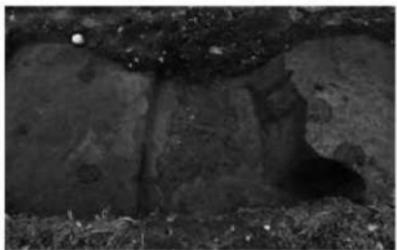
Tr6 調査終了状況(東から)



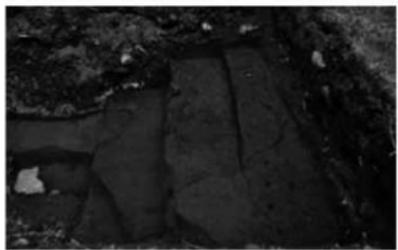
Tr6 深掘部掘削状況(南から)



Tr7 調査終了状況(南東から)



Tr7 柱穴検出状況(東から)

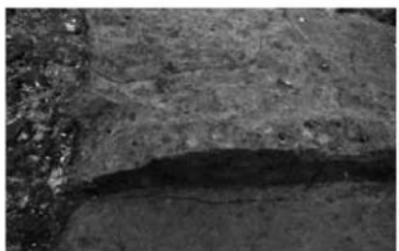


Tr7 SI47 検出状況(西から)



Tr7 SI47 土層断面(北から)

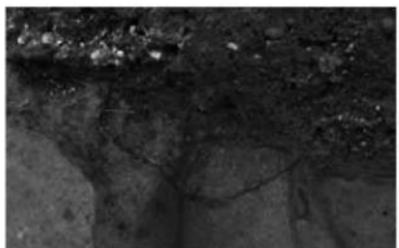
写真図版114 第15次調査(4)



Tr7 SK594 検出状況(北から)



Tr7 SK595 検出状況(南から)



Tr7 SK598 検出状況(東から)



Tr7 遺構保護作業状況(南から)



Tr8 調査終了状況(北から)



Tr8 調査終了状況(南から)



Tr8 調査区近景①(南東から)



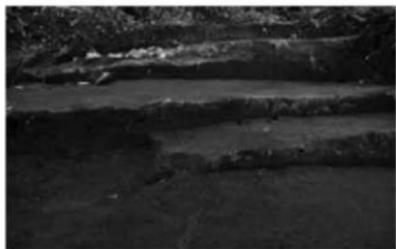
Tr8 調査区近景②(南東から)



Tr8 調査区近景③(南東から)



Tr8 調査区近景④(南から)



Tr8 a-a' 土層断面(南から)



Tr8 b-b' 土層断面(北から)



Tr8 c-c' 土層断面(南から)



Tr8 d-d' 土層断面(南から)



Tr8 e-e' 土層断面(北から)



Tr8 f-f' 土層断面(北から)



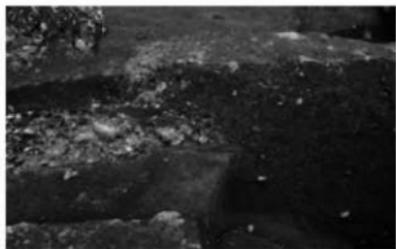
Tr8 g-g' 土層断面(南から)



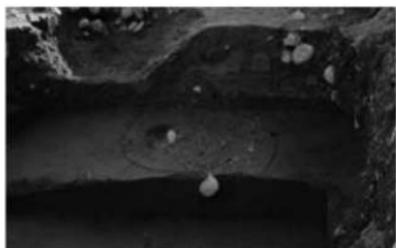
Tr8 h-h' 土層断面(北から)



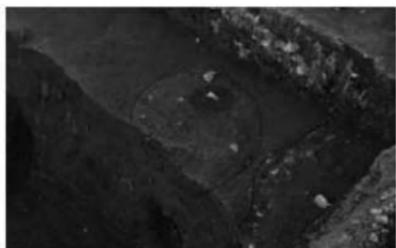
Tr8 SA15 検出状況(東から)



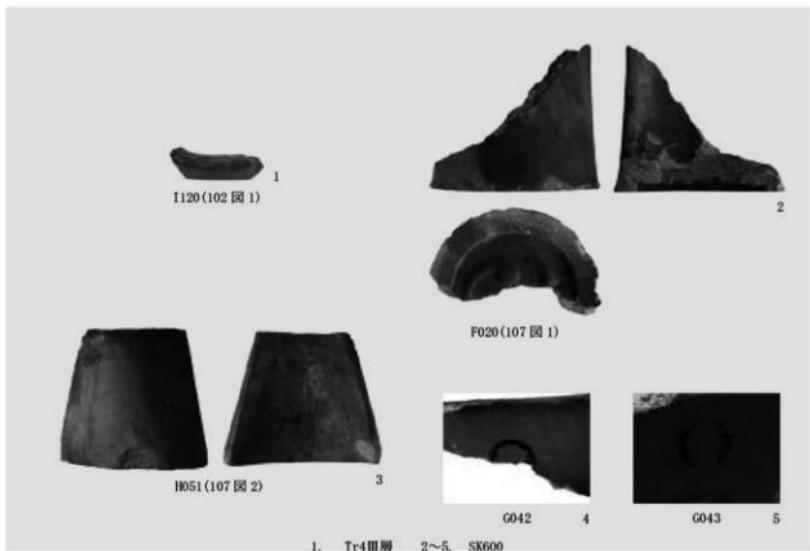
Tr8 SD100 堀方確認状況(南から)



Tr8 P22 検出状況(北から)



Tr8 P23 検出状況(南東から)



1. Tr4 III層 2~5. SK600

土師質土器 : S= 約 1/3 瓦 : S= 約 1/5

G042-G043 は刻印部分のみ拡大

写真図版118 第15次調査(8)・出土遺物

報 告 書 抄 錄

仙台市文化財調査報告書第474集

若林城跡

—第10次・12～15次発掘調査報告書—

2019年3月14日

発行 仙台市教育委員会

宮城県仙台市上杉一丁目5番12号
文化財課022（214）8899

印刷 株式会社東北プリント
宮城県仙台市青葉区立町24-24
022（263）1166
